
仮面ライダー Episode DECADE

ホシボシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー Episode DECADE

【Nコード】

N9823S

【作者名】

ホシボシ

【あらすじ】

ヒーローが好きな高校生、司はある日友人の小野寺ユウスケらと共に特別クラスへと移動させられてしまう。

突如現れる怪人、浮かび上がるライダーの紋章、破壊者、世界の崩壊

意味が分からないまま非日常へと引き込まれる17人の運命は？

彼らは自分達の世界を救う事ができるのだろうか？

第1話（前書き）

注意！

この小説は、原作仮面ライダーディケイドを基準にしています。

しかし、オリジナルキャラクターや、原作と同名のモノでも設定が大きく異なる場合があります。

そう言ったものが苦手な方は申し訳ありませんがお奨めできません。

初小説なのでいろいろおかしな点が多いとは思いますが、少しでも楽しんでいただける様に頑張ります

第1話

声が…聞こえる。

「お前の」

それは…男。

「お前の」

それは…女。

「お前のせいで」

それは…

子供、老人、大人。

男とも女とも分からない不思議な声が聞こえてくる。

世界は真っ暗で、俺はどこからソレが聞こえてくるのかが全く分からない。

何も見えない。

何も感じない。

だけどハッキリと俺の耳に聞こえてくる「声」…

「お前のせいだ！」

世界に色が溢れた。世界は形を創り、暗闇からの解放を果たす。

(！)

そこは荒野だった。

何も無い、

何の面白みもない、

ただの荒野。

よく見るとそこに男が立っている、帽子を被っていて顔を見る事は難しいが…。

男はゆっくりと俺の方へ視線を移す。

いや、もしかしたら俺の後ろかもしれない、それとも前だろうか？

(！?)

振り返ろうとして俺は息を呑んだ。

首が無い！

いや…正確に言えば俺自身が存在してない！

声も出せないし、

あると思ってた耳も、

目も存在していなかった。

まずそもそも俺は今、息すらしてない！何だよコレ？

「お前のせいだ！」

ビクッとしてしまう。

いきなり男が大声で叫んだからだ、ソレ俺に言ってるんだらうか？

「お前のせいで壊れてしまった!」の

なんなんだよ、何でそんなにキレてるんだよ俺が何したって・・・

「世界が!」

「・・・あ

目を覚ますと見慣れた天井。

「夢かよ…くそっ」

変な夢だ、早く目が覚めてくれて助かった。
変なおっさんに怒られる夢なんて誰が見たいものか。

今日は学校だしちよっどいい。もう起きよう

「今…何時だ？」

部屋の時計に目を向ける、時計の針が示すのは午前8時50分。学校が始まるのは9時である

「……」

ああ……夢ならいつそ覚めないでくれ……

「待つてくださいよお。司つかさくーん…」

後ろから気の抜けた声が聞こえてくる、仕方ない。俺はやれやれと思いつながら走るのを止めて立ち止まった。

「遅いぞ夏ミカン！早くしないと遅刻だぞち・こ・く！」

「誰のせいですか、誰の！あと私は夏ミカンじゃなくて夏美です！」

夏美の言葉に思わず目を反らす。

今日俺達二人が遅刻したのは間違いなく俺のせい。

俺が昨日の夜にアイツを半ば強引に引き込んでDVDを最初から見直してたのが悪かったか…。

おかげで寝坊はするし意味不明な夢までみるし…

気が重い。弟の目^{わたる}からまたお叱りを受ける事になるのか俺は…

「わ…悪かったよ。と、とにかく走るぞ夏ミカン！あと五分しかない！」

ふと自分が手に持っている体操着を入れた袋が目につく。

赤い体操着入れ、コレは夏美が俺に買ってくれた物だ。

なんだかんだ言っただ俺はコイツを置いて先に学校にはいかない、いろいろ世話になったからな。

行くなら二人一緒に行く事にする。

「五分！？あ、あと私は夏美です！」

最後の訂正は無視して走り出す。

遅刻をすれば叱られるだけならまだしも反省文を書かされるかもしれない。

そんなのごめんだ、

今日は見たいテレビの再放送があるのに、残しとかありえん。もう絶対嫌だ

「司君っ！」

「え？」

「おっと！」

放課後の事考えてたら前が見えてなかった様で、俺は向こうから走ってきた男の人とぶつかってしまった。そこそこの衝撃で、俺と男の人は持っていた持ち物を地面にぶちまけてしまう。

「あつ、すいません」

「ははっ、気をつけてくれたまえよ」

…偉そうなヤツだな、
まあ絡まれるよか百倍マシか。

あ、この人俺の体操着入れと同じ袋持ってたんだな

「って、そんな事考えてる場合じゃないか・・・」

悪いのは俺なんだし、一応もう一度謝っておく。

男はさらりと俺の謝罪を受け流すと、袋を持って走り去って行った。

「司君・・・」

「え？」

「・・・あと・・・二分です」

「・・・」

「・・・」

「全力で」

「走りましょう」

「はあはあ・・・オエッ」

「な…：…なんどが・・・ばにあっだ・・・」

「お前等…：…どうしたんだよ？」

朝のパンがハイパーキャストオフしそうになるのを堪えて席についた。

なにかクラスメイトの小野寺ユウスケが話し掛けてきたけど…とてもじゃないが喋れる状態じゃない。

「昨日遅くまで二人で仮面ライダーでも見てて、寝坊、そんで遅刻

…違つ？」「

「おお、薫」

ユウスケの後ろから空野薫そらのが顔を出す。

薫のヨミが的確すぎて俺は言葉を失った。実際喋れんのだが…

「ちよ、お前またライダーで遅刻かよww司、自重しろ」

俺の後ろの席で笑い声がする。

同じくクラスメイトの守輪椿すわんだ。

いつもノートパソコンで何かしていて、

いわゆるオタクと言う奴だ。

「しょうがないだろ、男の子のロマンなんだからッッ！」

「それは認める。俺もいちお龍騎と電王は見たし、

でも俺はどっちかってと起動戦士ガンパム派なんで」

「ぐっ…、ユウスケはどうだ？分かるだろ？」

「え、おれは平成ライダー見たことないしなあ」

「くそが・・・ならしょうがないな」

「え？何か言っただか司？」

「扱いの悪さに定評があるユウスケ乙」

「え？ええ？」

暫くした後、担任がやってきて朝のあいせつを済ませる。
ここからいつもと似た様な学校が始まるのかと思っただが…
いきなり担任が俺達五人に校長室に行けと言ってきた。

だから今はこうして皆と校長室に向かう途中だ。

「なあ俺ら何かしたっけ？」

「さあ？でも校長に呼び出しくらうって普通じゃないわ、

あ！さてはユウスケ…アンタ…まさか…何かやったんじゃない？」

「ええ？何でおれなんだよ」

「あーアレか、前に全裸で×××とか×××に×××した事ばれたんじゃない？」

「…ゆ、ユウスケが例え変態でも私はとっ…友達ですよ！」

「してない してない してないよー！」

下らない事言ってる間に俺達は校長室の前に着てくる。

「き、緊張するな…誰が開ける？」

「ユウスケお願い！」

「た、たまには薫がやれよ！」

そう言つてユウスケは薫のポニーテールを掴む。

「きゃ！つ、掴まないでよ！」

若干赤くなつた薫がユウスケを軽く小突いた。

いや、

本人は多分軽くだつたんだろう、
だがユウスケは回転しながら大きくよろけて、そのまま校長室のド
アをドミノ倒しの様にぶち破る

「すいませんすいませんっすいませんッッ！」

俺達の華麗な土下座と、

夏ミカンが必死に謝つたのが良かったのか特に怒られることもなく

事を終えた。

いや、本当に良かった良かった。

「あ、待っていたよ」

中にいたのは当然校長。俺達は一列に並んで暫く沈黙する。

「あー、今日君達に来てもらったのは…」

校長は若干言いにくそうな感じで俺達を見る。

「な、なんででしょうか？」

沈黙に耐え切れないのか、夏ミカンは校長の言葉を待たずにそう言った。

校長はため息をつき、もう一度俺達を真っ直ぐ見て口を開く。

「君達にはクラスを変わってもらいたい、今いる二年一組から、特別クラスにだ」

一瞬の沈黙…

「はあああああああ！？」

結局俺達は再び校長に土下座する事になるのだった…

第1話（後書き）

すいませんッ、展開は遅いです

更新は頻繁にしていきたいのですが、都合により時間が空く事もあ
るかもしれません

次もよろしくお願いします

第2話（前書き）

結構登場人物多い＋一気に出てくるんで人物表でも後でつくろおうかなと思ってます

第2話

クラス替え

正直この場にいる誰もが校長の言った事を冗談だと思っていただろう。

だがソレから数分も経たない内に俺達はクラスから荷物を全部持っていく。

さっきまでいたクラスの名簿から名前を消された。

ソレだけじゃない、その特別クラスで俺達が最初に出会ったのは・

「お前っ、なんでここに!？」

「に、兄さんっ?」

「あ…皆さんこんにちは」

そこには弟の亘と亘の友達、あいはりがむ相原我夢もいる。

この学校は一貫教育制の為、小中高が一緒になっている訳だ。

尤もだからといって自由に校舎を移動できるわけでは無いが…

「何でこんな所にいるんだ？今は授業中だろ？」

「兄さんもだろ、ボクは校長の指示でココにいるんだ」

「は？」

「いきなり呼び出されてクラス変わって言われたんだよ。
意味分からないね正直、特別クラスって言われても実感わかない
し…」

「ちょ、まじ？俺らもなんだけどww」

「え？」

「く、クラス表は？」

薫は教卓の上にあるクラス表に目を通す。

「ちょ、私達同じクラスなんだけど…」

「はあ！？巨くん達ってまだ中学生だろ？」

「おいおい、いくらなんでも超展開ってレベルじゃねーぞ！

今時ワンクールのアニメでも見ねえよこんなスピード展開」

「私達の知能レベルが中学生程度だったって事？」

「ええ？いくらなんでもそれはないんじゃないですか？

私達ってそんなにアホだったんですかあ！」

夏ミカンが涙目になってクラス表を見る。中学生と同レベル？

「ありえないだろ普通に考えて、俺達より頭が悪いヤツなんて山ほどいる。」

我夢、中等部でここに来たのはお前等二人だけなのか？」

「いえ、僕達の他に二人です。里奈ちゃんと、アキラさんもです」

「あ…うん、あったわ。野村里奈ちゃんと天美アキラちゃん」

「ああ、たしか…里奈って」

「うん、足が…だから、その…車椅子なんだ。だからアキラさんが手伝ってくれてる。もうすぐ来るよ」

そう言えばいつも亘が早起きしているのって里奈を迎えにくって理由だったな。

この学校は一応バリアフリーの面でも特化はしてるが着替えやらは手伝ってもらわないとキツイと聞く。

「とにかく中等部からは四人だけなんだな薫」

「そうみたいね、あとは高等部：男子八人、女子八人のクラスみたい」

「少なくてね？他に誰いんの？みしてみして」

椿はクラス名簿を薫から受け取ると、それに目を通した。

「お！新聞部結構いるじゃんキタコレ！」

椿は新聞部に入っている。

俺達は違うが、椿のおかげでメンバーとある程度交流があった。まあ知り合いが多いのはいい事だな。

「っ！」

だが椿の顔が一瞬で真っ青になる。

どうしたのかと聞いてみても椿は全く答えない、

いつもの様子ではなく、何かに怯えているようだ。

「嘘…嘘だろコレ…マジありえんから…いやいや嘘だつて…」

なにやらブツブツと椿は言っているがイマイチ分からない。

顔はますます青くなり、

まるで陸に打ち上げられた魚の様に口をパクパクさせている。

本当に大丈夫か!?

「嘘じゃない」

「え!?!」

後ろから声がして振り向く。

そこには俺達と同じ二年、けっこう美人の生徒がいた。

鋭い目つきと綺麗な黒い髪が凛々しさを引き出している。

少女はつかつかと椿の前に迫っていき思い切り顔を近づけた。

しかし笑みを浮かべていると思いきや目は笑っておらず、

椿は今にも失神しそうだ。

「現実だ」

「ひっ…広瀬え…咲夜アア…なんでおまつ…」

こんなに体調の悪い椿は初めてかもしれない。
今のコイツの怯え方は異常と言ってもいい、

そんなにこの咲夜と言う少女が怖いのだろうか？

「ワ・タ・シもっ！このクラスなんだよお、
椿いい嬉しいよ同じクラスになれてえ。」

ワタシはお前と同じクラスになりたかったんだからな」

普通の椿なら泣いて喜びそうな場面だが、とうの本人は白目をむいている。

「ふっ、二人はどんな関係なのかなあ…なんて、ハハハ…」

この空気に耐えられなくなったのか、ユウスケが遠慮がちに聞いた。
グッジョブだぞユウスケ！

「ああ、すまない。ワタシとコイツは幼馴染なんだ。

ワタシの実家は道場をやっているな、コイツも通っているんだが

…」

「え？そうなの？聞いた事ないけど」

「さぼっているからなああ！」

「ひいひいひい！」

咲夜はその手を教卓に打ち付ける。椿は思い切り仰け反り床に倒れこむ。

「貴様からやりたいと言い出したのに三日も続かんとはなあッ！」

「いやだって　っ？」

椿が後ずさりしていると背中になにかが当たった。

「っあ？」

足だった、ゆつくりと椿が顔を上げる。

そこにいたのはまたも二年の女子と男子だった。

俺は見覚えがあるがいまいち思い出せない。

「ぎゃああああああ！」

いきなり現れた二人に椿は叫び声を上げて逃げるように後ずさる。

だが逆に咲夜に近づく事になった訳だが・・・

「お帰り椿イイイ！」

「ぎゃあああああ！」

「はぁ・・・」

もういい、ほっとこう。俺はいつのまにか現れた二人に話し掛ける。

「フツ…俺は天王路、てんのうじ天王路双護そごだ」

「ボク…天王路真由…よろしくね…」

いつもの椿なら間違いなくボクっ娘キターとか厨二キターとか言う
だろうが…

「椿貴様アア今あの子のスカートの中を覗いただろうっうっう！」

「もうやだー！この女どうにかしてくれー！」

「……………」

まだやっているのかと呆れつつもう一度二人に視線を移す。

「……………」

さっきまで話してたのに真由は座ったまま寝ていた。

「え？あ…寝ちゃったみたいだな…？」

兄だろう双護の方をしてみる。

「・・・いつ等」

双護は目を開けて寝ていた。なんてアクの強い奴等なんだ…

「ここ…みたいだね友里ちゃん」

「うん、あ！もう誰かいるみたいよ拓真」

そんな声と共にまた男女二人が入ってきた。

良く言えばしつかりしてそうな、悪く言えば気の弱そうな男子と
薫と同じくらい気の強そうなツインテールの女子。新聞部でよく話
したことがあるから分かる。

「真志おっそい！」

「待て待て！お前の荷物も持つてるからだろ！」

二人に続くように更に二人、また男女のペアが入ってきた。また新

聞部だ

「おお、椿じゃんか！あと司やユウスケもいるんだな！」

条戸真志。

髪は茶色に染めて校則的には危ないかもしれないがソレに反してかなりの常識人だった気がする。

そうそう、もう一人の男子は犬養拓真。

下校中に迷子の子供の面倒を見ていたのを考えると優しいんだろうな。

その時も横には園田友里がいた気がする。

真志の隣りにいるのは・・・白鳥美歩だ。

コイツはよくわからん。

とり合えず真志の横にいる。

コイツも茶髪で服装もだらしないけど悪い奴じゃないからまあいいか

「にぎやかかねえ・・・」

「おれ置いてかれそう・・・」

「はいばわーです・・・」

ユウスケと薫、夏ミカンの意見は尤もだ。
椿と咲夜はまだなにやら言い争いをしているし、まずそもそも事態すら呑み込めてない。

そしてまた扉が開き、皆は一斉にその方向に視線を移す。

「あ……」

「あ……あの……ごめんなさい」

そこには車椅子とソレをおす少女二人。

巨の友達の野村^{のむら}里奈^{しりな}と我夢の親友、天美アキラ。

里奈は自分のせいで場が静まり返ったのだと思い謝罪する。

「気にすることは無い」

里奈の頭に手が置かれる、咲夜だった。一瞬別人かと思うくらいその目は優しい。

「誰が来たのかと皆、注目しただけだ。」

「あ…咲夜先輩！」

「知ってるの？」

「うん、スロープの無い階段で困ってる時に助けてくれたの」

以外に優しいのだろうか？

まあ椿との争いも椿が悪いような気がするし…

「いらしていたんですね。師匠」

「ああ、君達もこのクラスなんだな。うれしいよ」

なにやら我夢とアキラまで咲夜に駆け寄っていく。こいつ以外に人望が厚いな

「椿先輩も同じクラスですね」

「うう…まあな。よろしく頼む、つかこの女から俺を守ってくれ」

椿はそう言つと軽いため息をついて苦笑したのだった

正直俺からしてみれば椿と咲夜は仲がいいようにも見えるんだが…

第2話（後書き）

次もよろしくおねがいます！

第3話（前書き）

はい、三話です。

暇つぶしにでも楽しんでってください

第3話

しばらく顔合わせ程度に会話を交わしていたが、なぜか2時間経っても先生一人現れない。

トイレは真横にあるし、向いには良質な自販機もある。

つまり特別クラスがある範囲内から出なくてもなに不自由なくさせるのだ。

最初は先生を呼びに行こうと言った者もいるが、どの先生に言っても軽くスルーされるだけだったのでトランプで時間を潰す事にした。

「おっ、遅れました！」

ガラスとせわしなく扉が開いて、スーツを着た青年が入ってきた。

「あれ？兄貴？」

「ゆ、ユウスケか！」

知っている。むしろ何度も会っている、

小野寺翼。ユウスケの兄貴で一週間後にこの学校へと教育実習にやってくる予定

・・・そう聞いた。だが…？

「兄貴、教育実習は来週からじゃ？」

「そつ、それがいきなり電話で今すぐこのクラスに来てくれ、じゃないと実習は無しの方向で・・・」

なんて電話がかかってきたんだ。まいったよ。

ハハ…ハア」

翼は先輩教師がいないのを確認すると、たまらず椅子に腰掛ける。汗がすごく、急いで来たことが分かった。

「さつき校長室にいつてきてね、ここの臨時担任になってくれって言われたよ。」

なんでもまだ担任の人が決まっていならしいんだ。それで私が選ばれたっていう事かな…

とにかく皆、短い間だろうけどよろしくお願いするよハハッ…」

いくらなんでも無茶苦茶じゃないか？まあいいのかな？

それぞれが翼に軽く挨拶をしていく。

まさに、その時だった

まさに、刹那。

「
っ
あああー！」

激しい光、それが教室を包み込んだ。

「熱っ！」

それに何人かは熱を手に感じたらしい、それぞれが苦痛に顔を歪め、床に伏していた。

「くっ……、大丈夫かい皆！」

翼はすぐに立ち上がり皆の様子をうかがう。
さすがは教育者を目指すだけあって対応が早く頼もしいな……くそっ
クラクラする

「っ、真由、平気か？」

「……？ 何が？」

「何がっってお前……今のだ」

「何も……おきなかったよ？」

「え？」

天王路兄妹の会話に引っかかるものを感じたがソレが何かは分からなかつた。

とにかく今起こったことが非現実すぎて頭が混乱している。

「げっ！何だコレ！」

ユウスケの声が響く。

何事かと思っ行って行ってみると、ユウスケは慌てながら俺に右手を突き出してきた。

「は？」

「てっ、手の甲手の甲！」

「手の甲？・・・」

その言葉で数名のヤツが次々に騒ぎ出す。

「げっ！オレもある！」

「な、なんですかこれ？」

「あ、私にもある・・・」

ユウスケ、翼、真志、拓真、椿、我夢、双護、巨。

まあ早い話俺以外の男だ。

その手の甲に紋章らしき物がくつきりと現れていた。
意味不明な物やスピード、龍の頭部を模した物など分かりやすい物
も多い。

「ちょ、どんだけ厨二なんだよww紋章ってオイオイ」

「むう、これは…スピードか？大丈夫なのか椿、痛みは？」

「熱かつたくらいで今はなんともない。

彫られたって訳でもないし…そうだ、咲夜、すこし舐めてみてく
れ」

「フンッ！」

裏拳が椿を抉るようにしてめり込む。こいつ等は一体何をしている
んだ？

「あれえ？コレどこかで見たとような気がします」

「……って！あああああああ！」

「っ、司？」

「どどどどどうしたんですかあ司君！」

どうして俺はこんな簡単な事を忘れていたんだろうかあああ！

「ライダーアアアア！」

「は、はいいい！？」

「ライダーだよ！仮面ライダー！、今ユウスケ達についた紋章はそれぞれの平成ライダーのマークなんだよ！

くおおおなぜ分からなかったんだ 俺はああ！」

「仮面ライダーって…まじ？」

「まじまじ大マジだ！ちなみにユウスケがクウガ、先生がアギト、真志が龍騎、

拓真がファイズ、椿がブレイド、我夢が響鬼、双護がカブト、

電王は…いないが、巨はキバだな！というか何で俺にはないんだ！くそがっ！」

暴れる司をほっという椿は真志の紋章を見る。

「た、たしかに…デッキにこんな紋章あったような…なかったような」

「あつたんだよ！俺が何回龍騎見てると思ってるんだ！

スペシャル版の結末投票で工作に走ったほどだぞ！結果負けたがな！」

「つ、司は本当に仮面ライダーが好きなんだな、オレも今度見てみようかな？」

「と言うか、兄さんはヒーローが好きなんだ。その見すぎで寝坊するんだよ、小学生でもやらないだろそんな事」

「ふふつ、すごいですね司先輩」

興奮しきっている司にそれぞれはいつもの調子を徐々に取り戻していく。

それを見計らって翼が教壇に立つ。

「…：…：…：どうかな？ここは皆、私の為に自己紹介なんてしてくれないかい？」

「お、いいんじゃない。せっかくだから…・ホラ、結構私たちって男女ペアになってるから」

「…・…・そう、ライダーの作品順にそれぞれのペアから 自己紹介していきましよう？」

「いい提案だな白鳥、だったら最初はユウスケと薫からになる！」

翼の意見を誰も否定しなかった。

もちろん翼の為もあるが一番は皆自分の為なのかもしれない。
彼らは皆一刻も早く日常生活に戻りたかったのだ。

いきなり現れた紋章が現実味を帯びていない事もあるかもしれないが
普通の生活に基盤を戻す為に、この自己紹介を選んだのかも…知れ
ない

第3話（後書き）

更新はまあバラバラになっちゃうかもしれませんが
でも一日一回はしたいですね

第4話 自己紹介（前書き）

とまあキャラが多いんで自己紹介編をつくってみました
ではどうぞ

第4話 自己紹介

「えと…小野寺ユウスケです！紋章はクウガ…はい」

「終わるな、空野薫です。」

ユウスケとは小学校からの友達で、家も割りと近いから付き合いは長いわ」

薫のポニーテールが揺れる。

「ん？ああ、そうか私か。」

えっと小野寺翼、

見ての通り教師を目指してる。

ユウスケの兄で…趣味は家庭菜園って所かな？紋章はアギト」

翼さんはメガネを掛けているが椿と違って伊達らしい。
なんでかは知らんが…

「条戸真志、新聞部の部長をやってる。」

親の都合上一人暮らしなんで、

もしよかったらいつでも遊びにきて欲しい。

紋章は龍騎、よろしく！」

「おなじく、新聞部の白鳥美歩。」

ま、私にできる事が会ったら言ってみてよ
力になるからさ。

今は訳あって真志の家でくらしてる」

茶髪にワックスで髪をセットしてる真志と
同じく茶髪で服装が乱れてる美歩、

どう考えても校則的に問題児だが、中身はいい奴だ。

「なん・・・だと・・・？」

ここで椿の表情が変わる。

「におう、臭うぜ！コイツァ、リア充のかほりだ！

真ちゃんよお前さつき一人暮らしとかなんとかほざいてたよな
あ！」

「う・・・あ、ああ」

「だが今！白鳥は確かに言ったぜ！おまえの家で暮ら」

椿は口を閉じた。おもっくそ咲夜に睨まれている、というか目が語っている。

『人には』 『事情がある』 『詮索良くない』 『ぶち殺すぞ』

「え、えーと…暮らし…」

『ぶち殺すぞ』

「暮ら…」

『ぶち殺すぞ』

「…」

『ぶち殺すぞ』

「いや…あの、本当になんか…すみませんでした。はい、あのどつぞ続けてください」

若干最後の言葉は考えすぎだろうなと思いつつも、確かに事情を詮索するのはあまり褒められたものではない。ここは素直に咲夜の意見に従い、席についた。

「え……えつと」

「がんばって！拓真！」

「い、いぬきやいつ、たきゅまです！」

咳払いを一つ。

「フ、ファイズの犬養拓真いぬかい たくまです。

よ、よろしくおねがいします！」

「うん！拓真ナイス！」

あ、あたしは園田友里そのだ ゆり

新聞部の副部長です！よろしくね！」

優しそうだが気の弱い拓真とツインテールの友里

「漆黒の夜には煌きの紋章を。

ブレイド、守輪ツツ椿！」

「こいつは・・・まあいい。

ワタシは広瀬咲夜

実家は日本文学、武術の道場をやっている。私は一応それらを
通りはかじっている。

椿とは幼馴染みで、私は友達だとおもっているよ」

「そりゃあどうも」

椿はすこし照れながら苦笑した。

「響鬼の紋章が出ました、相原我夢です。

広瀬先輩の道場で合気道と和音楽を勉強してます」

「天美アキラです。

我夢君と同じく先輩の道場で勉強しています、よろしく願
います」

礼儀正しい二人は眩しくみえた。ボーイッシュなアキラと、真面目
そうな我夢

「天王路双護、カブトだ」

「天王路真由……」

クセのある髪の二人。兄妹らしいな

「ん？天王路？」

翼さんは眼の色を変える。

「天王路グループの息子さんかい？」

「ああ！、天王路ってどこかで聞いた事あると思ってたけど！」

天王路グループ、大企業というのは言いすぎだがそれでもそれなりの勢力があるメーカーだった。

つまり、双護はその社長の息子ということになるのか。

「フツ、だが所詮俺は学生、肩書きだけのお子様なのさ」

双護はため息をつく。きつと俺達には理解できない苦労があるのだろつ。

「ボクは聖巨。」

キバの紋章に選ばれたみたいだ」

「野村里奈です！」

あの…皆さんに迷惑を掛けてしまつかもしれないけど…

よろしくお願いします」

「里奈、君は何も心配しなくていい。

私たちは君の足の事は何も気にしていないさ」

「そうですよ里奈、あなたはすこし考えすぎです」

「そ、そうかな？」

「そつだよ里奈ちゃん、おれたちは全然気にしないからさ」

「あ、ありがとう」

皆の言葉に里奈は笑顔で答えた。

「そして巨の兄、聖司だ。」

好きなものはヒーロー、

趣味はヒーロー…」

今は夏ミカンの家に居候している!」

「夏美です!」

あ、あははは。私は光^{ひかり}、夏美^{なつみ}です。

司君、巨君とは従兄妹なんです」

「そついえばさ、司、ライダー好きなのに紋章ないんだなプププW
」

「吹き飛ばすぞ、きっと主人公補正かかるんだよ!その内かかるんだよ!」

司はそつぽ向いて教室の隅にうづくまった。
その様子に皆緊張感がうすれ、笑い合う。

「アハハハありがとう皆。
でもそれにしても遅いな…もう大分時間が経ってるのに誰もこやし
ない。」

一回校長先生の所に行つて来るよ、皆はココにいてね」

そつ言つて翼は教室を出て行くのだった。

第4話 自己紹介（後書き）

次回か、次々回で変身する…かも！

ここまでお付き合いありがとうございました
次回もよろしく！

第5話（前書き）

更新を

一日一回はしたいですね（キリッ

とか言っておきながら土曜に用事ができて更新できないかもなんで、

今日の内に2話更新しておこうと思います

適当ですいませんww

第5話

「げっ！何だコレ！」

「？ どうしたんですか司君」

「夏ミカン！コレ…」

司がそういつて差し出したのは体操袋。だが、その中に入っていたのは体操着ではなかった。

「夏美ですよー。…え！？なんで？どうして？」

「朝ぶつかった男の人の荷物と入れ替わっちゃまったって事だろうな…」

司は申し訳なさそうに夏美を見る。

あの体操袋は夏美が買ってくれた物だから…

「でもコレなんなんでしょうねえ？」

「え？」

夏美の問いかけに答えるために再び袋の中にある物を取り出した。
なかから出てきたのは四角い箱のような機械に、
なにやらカードかなにかを入れるホルダーだった。

「なんだ？玩具か？」

適当に機械を触ってみるが何も起こらないし動きもしない。

「ホルダーの中には何が入ってるんでしょうか？」

「ああ、えっと・・・ん！」

「え？」

「きたあああああああああああああ！」

「きゃあー！」

いっきに上がった司のテンションに夏美は圧倒される。

「どうしたんですか？またライダーとか？」

「ああ、そつだ！見てみる夏ミカン！」

そう言っつて司はホルダーからカードを抜き出す。

「夏……おお！すごいですね！」

「だろ！」

司の手にあるのは十枚のカード。

それはクウガからキバまでの仮面ライダーと、見たことの無いライダーが写っている。

成る程、司のテンションが上がる訳だ。

「すっげーよ夏ミカン！これ次のライダーなのかな？」

まずこのカードはなんなんだろうな？

どつやって遊べばいいんだ？」

「司君、ちゃんと返さないとダメですよ！」

「わ、わかってるよハハ……」

司が渋々カードを元に戻す。と同時に血相を変えた翼が飛び込んできたのだった。

翼は口をぱくぱくさせて確かに言った。

「学校が……消えてる」

「は？」

あまりに唐突すぎて、司は体操着の中の機械が光った事に気がつかなかった。

学校が消えた。

教師を目指すものとしてはあまりにも酷い文章だったが、一同はすぐにソレが間違いではない事を知る。

つまり、消えていたのだ、校舎が、校庭が、校門が。

特別クラスの校舎周りは残っているものの、それ以外が消えている

いや、消えていると言う表現は少し違う、移動しているといったほうがいいか？

校舎の周りは司達が全く知らない場所にあった。

窓を見れば田んぼではなくコンビニが見え、まるで校舎がどこかにワープしたかの様だ。

とうぜん職員室も校長室もなく、特別クラスにいる生徒以外は消えていた。

「なんだよ・・・コレ！」

真志が窓を開けて辺りを見回す。

見知らぬ街、

見知らぬ場所。

そしてさらに、ビルやらなにやらが不自然に壊れていた。

「い、意味わかんね！俺らってどうなった…？」

「こ、怖いです…」

混乱、恐怖、一同のなかでそれらが膨れ上がっていく。
翼はぐつと唇をかんだ、この状況はまずい、と

「とにかく皆はここにいてほしい。私が外に行って様子を見てくるから」

「まっってくれ兄貴！おれもいく！」

「…っ、わかった。じゃあ何かあるといけないから一応、
双護くん、司くん、夏美ちゃんも来てくれないか？」

それぞれ頷くと、翼に続いていった。

そして…

「・・・どこまでいったんだらうな？」

「分からん、ただこの状況はただ事ではない」

椿と咲夜は窓を背に話し合っている。

この状況のこと、世界の事、答えなど出ない事はわかっているのだが

「ん？」

「ど、どうした？」

「悲鳴が聞こえた…」

「ま、マジ？」

咲夜は窓から身を突き出し、辺りを見回わした。

すると、すこし離れた所で女の子がうずくまって泣いているではないか、

「お、おい！危ないぞ！」

咲夜は叫ぶが全く届いていないようだ。

「くそっ！」

かるく舌打ちをして咲夜は窓から飛び降りる。

「つて！おいおい！なにしてんだよ！」

「あの子を助ける！さっきから爆撃の様な音が続いている。あんなところに置いとけるか！」

「師匠！」

「ま、待て待て！俺が行く！」

咲夜の行動にアキラ達が続こうとする。
が、ソレを椿は静止させた。

「まじ、勘弁してくれよ……」

そう言って泣きそうになりながらも、椿は咲夜の後を追うのだった。

「君、大丈夫か？」

咲夜は女の子の所に駆け寄ると、屈んで声をかけた。

しかし女の子は泣き続けるばかりで、会話すら成立しない。

少しして、後を追って来た椿と合流する。

「お、おおい！咲夜ああ！」

「椿か、すまない。すこし手伝ってくれないか？この子を学校まで運ぶ」

「え？ あ、ああ。分かった」

椿が女の子に触れようとした瞬間、女の子はその顔をあげる。女の子はもう泣いていない。

「え？」

女の子は笑っていた。

その顔は、この世のものとは思えない程歪んでいたのだが。当然だ、もう泣く事なんてない、悲しい事なんてない。

彼女は餌にありつけるのだから

「あなた達！まだこんな所にいたんですか！」

翼たちが街を探索していると、いきなり警官に話し掛けられた
警官の表情は焦りと恐れで強張っている

「は、はい。えっと、すみません。今コレはと言う状況なんでし
ようか？」

「どうしたもこうしたも . . .」

「？」

警官の言葉が止まる。

「あ、あの . . . 大丈夫ですか？」

翼は不思議に思い警官の肩を軽くたたいた。すると、警官は糸の切
れた人形のようにばたりと倒れる。

「っ!？」

「うわあああああああ!」

翼が疑問に思うと同時にユウスケの悲鳴が耳に響く。
つづいて夏美、双護と司は一点を見詰め青ざめていた。

不思議に思い、翼もその方向に目を向ける。

「　　ツツツ！！！！！」

絶句した。見なければ良かった、いやそんな事できるわけなかったが…

「　　う　　う　　う　　う　　う　　」

目を疑う。

上空に触手の様なものが浮かんでいて、その先端には真っ赤な血を滴らせている心臓があったからだ。

ありえない。普通心臓はこんな事にはならない

「　　ッ！」

訳が分からぬまま警官にまた視線を戻す、背中には穴があいているではないか。

ああ、間違いない、あの心臓はこの警官のものだ！

急いで触手が何に繋がっているのかを確かめる。

すると、すこし先に人の形をした。だが人ではない何かと繋がっていた。白黒の化け物。

殺された、彼は…

化け物にッッ！

「に・・・」

かろうじて翼は声をだす。

張り裂けそうなほど心臓は鼓動を早めている。

触手は心臓を飽きた玩具を捨てるかのように放り投げると、暫く旋回を続ける。

それはまるで子供が次に食べる料理を見定めるかの様にッ！

「逃げるオオオオオおおおおッ！」

司達三人は踵をかえして走り出す。

その顔は恐怖と絶望で染まる、彼らはいまだかつて無い恐怖の中足を動かしていた。

すこし走ったら触手が翼達を追ってきた、それでも彼らは走る事を止めない。

立ち止まったらあの警官の様に・・・死ぬ！

司は走っている間にも一つだけ確信を持つ、あの触手に繋がってい

る怪人には見覚えがあった。

オルフェノク

仮面ライダーファイズに登場するいわゆる怪人。

だから司は必死に祈り続ける、きっとファイズが颯爽と現れてアイツを倒してくれると。

もはや、なぜテレビの中の偶像が出てくるのかなどどうでもいい、警官は確かに死んだのだ。

もはやテレビでも何でもないリアルの話。

これがドッキリなら仕掛けたテレビ局の人間全員ぶん殴ってやる！

「ハアハア・・・くそ！」

そう思っても、いつまで経ってもファイズは現れてくれない。

所詮俺達は引き立ての為に殺されるモブキャラなのだろうか？司は思う。

しかし、双護は違った。

とても人間とは思えないスピードで走り、ある程度距離をとると石

を投げ、触手の軌道を邪魔する。
その繰り返しだった。
実際双護がいなければ皆既に死んでいただろう。

だが、そんな悪あがきはいつまでも続かない。ついにその時がやって来る。

「ブラウウウウウん！」

「ぐうああっ！」

双護に何かが突進してきた。
しかし早すぎて見えない！

が、しかし少しその何かが止まったとき、一瞬だけ見えた
姿は恐らくワーム

また、化け物。

現れて欲しいと思ったファイズは現れず、代わりに最悪な敵がやってくる。

そう、最悪だった。双護は体勢を崩し倒れる。すぐに起き上がろうとしたが、体が思うように動かない。

「きゃー！」

「夏美ッッ！」

ついに夏美の体力が切れたのだろう、夏美はつまずき、転ぶ。そこへ触手が襲い掛かる。最悪だ…

「くっそおおおおおッッ！」

ライダーの世界に行きたいと思った事がある。

そして今その夢が叶ったのか？
その結果がコレなんだぞ！

もっと活躍できると思った。
もっとカッコよくできると思っていた。

なのに……きつとこのままいけば皆死ぬだろう、
訳も分からないまま無残に、残酷に…

「っざけんなああああああああああああああああああああ
ッッッッ！」

夏美との思い出が蘇る、
いつもなんだかんだ言っ
て俺についてきてくれた従兄
妹。優しかった…

でも死ぬ。

いつも笑ってた…

でも死ぬ。殺される。

一緒によくライダーを見た…

でも死ぬ、殺される、もう会えなくなる。

嫌だ。嫌だ。認めない。信じない。許さない。
そんな結末は絶対に認めないっ！ありえないっ！

…てやる。…してやる。

壊してやる

第5話（後書き）

他の方のライダー小説も見ていってるんですが
皆さん本当に愛がありますね。すごいです
自分も頑張りたい

第6話 十番目の仮面ライダー（前書き）

注意！

この作品でのクロックアップは原作ディケイド基準です

第6話 十番目の仮面ライダー

手に、感覚があった。持っていた、あの機械を。あのホルダーを。

俺は 確信する…電王がそうだった、イクサがそうだった！
持って居なくても望みさえすれば手元にくる！

俺はその機械を迷うことなく腰の前に持っていく
…そして、手を離れた。

機械は落ちない、だろうな。分かってる、だってもう付いてるんだ
から！

俺はそのホルダーから迷うことなく一枚のカードを引き抜いた、

これが来る事は分かってたのかも知れないし、
単なる偶然だったのかも知れない。

カードの入れ方は直接頭の中に入ってきた、もう分かっている。理解
した。

『カメンライド』

電子音が耳に入ってくる。

どこかで聞いた事があるような、ないような…そんな声だった。

いや、そんな事どうでもいい、俺はそのカードをツ
機械に放
り投げた。

あとは閉めるだけ、後悔は無い。夏美が死ぬ事実なんて…

壊れてしまえ

「変ッ身ンンンッ！」

『ディケイド!』

エンブレム達が俺に集まり、そして弾けた。

変わる、駆ける、分かる。全てが頭に入ってきた！

『カメンライド』

「変身！」 『555！』

来てくれないならッ

「なればいい！」

姿がファイズへと変わる！瞬間、素早くカードを滑らせた。

『アタックライド』 『オートバジン！』

「ッ！ グオオオオ！」

猛スピードでバイクが現れ、オルフェノクを弾き飛ばした。
まだ終わらない、バジンは素早く変形し、ガトリングで辺りを撃ちまくる。

「ッブウウバババ！」

すると、その内の何発かがワームに当たり、動きを止めた。バジンはガトリングによって動きが鈍ったワームを掴み倒し拘束する。

「うおおおッッ！」

「グガア！」

起き上がるオルフェノクを力任せに殴り倒す。うつ伏せになったオルフェノクを足で押さえつけ、最後のカードを差し込んだ。

『ファイナル・アタックライド　　ファファファ555！』

足から紅い閃光が発射され、オルフェノクは地面に貼り付けになる。

終わりだ、もう一度閃光の中に足を入れるようにして踏みつけた！

「ギヤアアアアアア！」

オルフェノクは爆発し、そこにはのマークしか残っていない。

「変身」

『カメンライド カブト！』

あとはアイツだけだ。

ファイズの変身が解けた事でバジンも消滅した、するとワームは再び高速移動で辺りを駆ける！

『アタックライド クロックアップ！』

時が変わり、ワームと同速になる。

だが俺はあえてヤツに背を向けた、

「ぶウウウウウウルルッ！」

ワームはここがチャンスと悟ったのか、真っ直ぐに突進を仕掛ける。

おいおい、ソレがどういう結果を生むのか、どうやらその身をもつて分かってもらうしかないみたいだな！

『ファイナル・アタックライド　カカカカブト!』

「うおおおおお!」

「バヤアアアアああああアアッ!」

回し蹴り、あっけなくワームは爆発して死んだ。
もういいだろう、俺は変身を解く。

だが勝利の余韻に浸る暇は無い

「夏美!」

いそいで夏美の所に急ぐ。

「づがぎくうん!」

夏美が涙で顔をぐしゃぐしゃにして抱きついてきた。
でもよかった…怪我はしてないみたいだ。

「じわがっただですっつっつっつっつ」

「ハハハ…大丈夫か?」

「司君!」

先生が双護を抱えて走ってきた。
よかった、双護もそこまで酷い怪我じゃなさそうだな

「…いろいろ聞きたい事はあるけど、とにかく今は学校に戻ろう！
皆が気になる」

俺は小さく頷いた。

司が変身するすこし前

椿と咲夜もまた、街の中を走っていた。二人の後ろには無数のワームの幼体サナキが二人を追っている。

「何なんだよ！マジで何なんだよ！ちくしょうっ！
俺達女の子を助けにいっただけじゃないのかよ！

なんでその女の子が化けモンになるんだよ！ 訳わかんねえよ！」

「いいから走れ！死にたいのか！」

「何でお前はそんなに冷静なんだよ！」

意味わかんねえよッ！くそくそくそッ！」

「私だって怖いに決まってるだろ！」

どうして…こんな目にあわなきゃいけないんだ…私達が何を
した
って…」

「お、おい…」

咲夜はぼろぼろと涙をこぼす。

椿は罪悪感に包まれたが、咲夜を励ましてやれるほどの余裕はな
か
った。

そして同時に無性に悔しくなる、ぶつけ様の無い理不尽さに

「ヒッ！」

ふと前を見ると、そこには追ってくるのと同じ、幼体ワームがやっ
て
きていた。

「う、うわあああああ！」

腰が抜けてしまう。人生で初めて感じる死への恐怖、それは咲夜も
同
じようで、

腰は抜かさなかったが、足はぶるぶると震えていた。

「つ、椿……」

「はあ！？ なななんだよ！」

「空手って……アイツ等に効くと思うか？」

「ばっ、馬鹿じゃねーのお前！ ししし死ぬぞッ！」

咲夜はその答えを聞く気はなかった。

彼女は思う。ここで何もしないより、足掻いて散った方が自分でも納得がいくだろう。

椿は……守りたかったが、今の私にそんな力はないだろう。

私はゆっくり目を閉じて集中する。

「おい、おい！ が、 るって！」

椿が何かいっているが分からない。

なにか巨大な音がするからだ、咲夜はたまらず目を開けた。するとそこには

「う、うそだろ・・・で、電車？」

文字通り電車が走って来る！

しかも、その電車は空中を走っており、線路は空間法則を無視して空中に留まっている。

「って、こっち来るぞ！」

電車は空中を旋回しコツチに向かってきた。

一瞬焦る二人だが、電車は二人を囲むワームを蹴散らし、また空に帰って行く。

ふと、電車を通った所に人がいるのが見えた。

巨と同じくらいの年齢だが、目つきがかなり悪い。

赤いメツシュがさらに凶悪さを目立たせている。

「おいおい、主役がいねえのに盛り上がってくれちまってるじゃねーか」

少年はどこから取り出したのか？

いつの間にかベルトを持っていた。

それを腰に素早く巻きつけると、少年はニヤリと笑って赤いボタンを押す

「変身ッ！」 『SWORD・FORM』

少年が一瞬で別の姿に変わる。さらに周りには赤い鎧の様な物が現れ、少年に装填された。

「俺、参上ッ！」

そう言つてポーズをとるが、椿と咲夜は口を開けたまま黙り込むだけだった。

いきなり現れてこんな事言われたら誰だつてこつなるだろう

「今日の俺は徹底的にクライマックスなんぞな。悪く思つなよ」

そう言つて少年はパスのような物をベルトの中央に掲げる。

『FULL CHARGE』

ジジジと赤い電気が、持っていた剣に宿つた。

少年は軽く鼻を鳴らしてワームの群れに突っ込んでいく。

「おうりゃあああああ！」

力任せに、かつ豪快にバツバツとワームを切り裂いていく、ワーム達は逃げ様とするが、互いにぶつかり合いうまく逃げられない。

そうこうしている間に少年はワームを全て切り裂く！

「俺の必殺技・・・パート・ワン！」

その声を合図にワーム達は爆発する。

「すげえ…凄すぎだろ…」

「ああ・・・っ！」

だが咲夜はギョツとする。

「おい！まだいるぞ！」

「あん？」

少年は咲夜が指差した方向を見る。そこには一体だけがまだワームの幼体がのこっていた。

おそらく運良く先程の攻撃をかわしたのだろう。

「けっ、まあまだ残っていやがったか……ん？」

少年は足を止める。

すこしワームの様子がおかしい、立ち止まったままブルブルと震えている。

と、つぎの瞬間ワームの背中から新しいワームが出てきた。

「うお！な、なんだ！」

『成虫になったんじゃないかな？』

少年から別の声がある。その声どおりワームは成長したのだ、そして・・・

「ブウウウウウん！」

「のわっ！」

猛スピードで少年を弾き飛ばす。

「はええええ！」

少年は素早く身を立て直す、ワームは既に走り去り、いなくなっていた。

「あああああ！逃げられたああああ！」

少年は地団駄を踏んでベルトを乱暴に剥ぎ取った。

なんか…少年から赤い物が一緒に飛んでいった気がする…

「あのお・・・」

「え？」

少年の雰囲気がどつと変わって、おとなしそうな感じにかわる。
先程とは別人つつか声も違う気が…

「ここは危険です、だから離れた方がいいです。いい所はありませんか？」

「あ…あ、ああ、だったら学校がいい」

「分かりました。じゃあ…」

少年が上をみると、再び空間から電車が現れて二人の前に停車する。
ドアが開き、

「さあ、乗って！」

中から気の強そうな女の子と…

「さあさあ、早く早くー！」

よく分からない紫色の生物が見えた…

第6話 十番目の仮面ライダー（後書き）

ちよつと迷ったんですけどディケイドライバーの音声はカタカナに
しました。

でも途中で何の前触れもなく変わるかもしれないので
その時は暖かい目で見てやってください

お付き合いありがとうございます。

次回もよろしく！

第7話 ゼノンとフルーラ（前書き）

明日はやっぱりきついので

できたら一話くらい更新はしたいですね（キリッ

第7話　ゼノンとフルーラ

「つまり…あなた達は何も知らずにココにきたのね？」

「ああ、辺りが光に包まれて…気がついたらこの世界にいた。あと、サインもらっていいですか？」

「ぼく達もよく分からない状況なんだ。ごめん、この世界の事については何も分からないよ…」

「成る程…」

あと、サイン貰っていいですか？大ファンなんですよ俺」

「うぜえからwwつか多分その人は純粹に野上良太郎だと思う。信じられないけど」

椿の言った事は確信に近いかも知れない。

もはや俺達の常識は常識ではなくなった、今日を境にして

目の前にいる良太郎というキャラクターは
フィクションでできた偶像ではなく、おそらく独立した生命なのだ
ろう。

良太郎達電王組みは、いつもと変わらず時空間を移動していた時、
異常なオーラを放つ線路を見つけた…らしい。

そしてそこに吸い寄せられてココに来たと言っている

「オーナーはココもれっきとした世界だって言ってたわ。ただこの世界がどれだけの完成度なのかは分からない。

数時間前にできた世界だとか、何億年も前にあったのかもしれない。

多世界解釈、無限時空理論、なんとも言えないわね」

「パラレルワールドか・・・」

そんなものが本当にあったとはな、ふと目の前で死んだ警官の顔が脳裏によぎる。

「・・・っ」

胸が痛い。軽く吐きそうにもなる。

彼は、彼の世界は確かにココだった、そしてこの世界で死んだんだ

「考えていても…仕方ないか」

ふと時計を見る。もう夜の十一時を回っていた。

既に女性陣の何人かは下の保健室で眠っていると聞く

まあ仕方ない。いろいろとショックが強かったからな

「…あ！そういえば」

真志がふと口を開く。

「椿達が行った後さ、ここにもワームが来たんだ。でもさ、この学校には入れないみたいで…」

「入れない？」

「ああ、アタシも見た。なんか入れないってか、見えてもないし入ってもこない・・・みたいなの？」

「…成る程な、もしかしたらこの学校が絶対的安全地帯なのかもしれない」

そう言って司は教室を出て行くこととする。

「どこ行くんだ？」

「すこし空気を吸ってくる、屋上なら襲われる事もないだろ」

そう言って司は屋上へと向かうのだった。

「どうして司君は変身できたんだろうか…」

「わからない、自分でもよく分かってないみたいだからな。

ただ変身した瞬間にカードの使い方とか、ある程度の戦い方は頭に入ってきたらしい」

「あの箱…じゃなくてベルトの力か」

しばらくいろいろ考えてみる。しかし何も分からない、そんなやりとりに翼はため息をついたのだった。

「・・・」

自販機で買ったコーヒーを飲みながら空を見上げる。

「じいさんの方が美味しいな…やっぱり」

「そつでしよっ?」

声がして振り返る。そこには夏ミカンが立っていた、夏ミカンは俺の隣りにやって来ると同じように空を見上げる。

「司君は命の恩人ですね、感謝です」

「ああ、いや…別にお前が感謝することないぜ」

「そうですか?でも感謝します。ありがとうございます」

「ああ…ど、どういたしまして」

「おじいちゃん…今ごろなにしてるんでしよっねえ?」

「さあな、新しいコーヒーでも作ってるんじゃないか?」

夏ミカンは両親がいない。ま、俺と巨もだから特に驚かなかっただけ
ど…

…夏美のお祖父ちゃんが面倒を見てくれるのだが、
これまた独創的な性格で

何故か写真館を営んでいるのに、実態は喫茶店になっている。

「会えますかね？もう一度・・・」

「当たり前だ、絶対にな」

「ムリじゃないかな？」

「！」

突然聞こえる第三者の声、っ、どこから？

「ここだよ、司」
「ここだわ、司」

もう一人違う声がする、

どこかと探してみればなにやら学校の入り口付近に小さな人影が二つ見えたではないか。

あんな所から喋ったのにハッキリ聞こえた…

少し危険かもしれないと思ったが、奴等は何かを知っている。

これは逃すわけにはいかないだろう。

「夏ミカン！隠れてろよ！いいな！」

「え？あ、はっ、はい！」

俺はベルトを取り出し腰に巻く。そして屋上から飛び降りた。

『カメンライド』 『変身！』 『ディケイド』

地面に着地した時には既に変身を完了していた。
もし、戦闘になったらクウガに変わろう。

クウガならどんな敵にもある程度対応できるはずだ

「おい！どこだ？」

入り口まで行ってみたが誰もいない。さっきは人影が見えたんだが・

「……」

「破壊者デイケイド」

「ッ！子供？」

右と左から同時に声が…そこを見てみれば俺よりずっと幼い男女がいた。

男の方はご丁寧にスーツとシルクハットで身を包み、
女の方はフリルのついた服、綺麗な髪、まるで人形の様。

二人はこちらに優雅にお辞儀をする

というか男の方は髪が青く、女の方は髪が真っ赤だ。

攻撃しちまおうか！

しかもチヨイチヨイで俺を見てくるのが…っとな！もうッ！

「だあああ！さっき、お前等、俺達がじいさんに会うのはムリとか言ってたな！

あれどういう意味なんだよ？」

いつのまにか抱き合っている二人に軽い殺意を抱きながら、あくまで冷静に問う。

俺は大人だ。うん、子供相手にそんな取り乱しちゃいけない

「そのままの意味だよデイケイド？」

君達が元の世界に戻るには君達自身の頑張りが結果を左右するという事さ」

「ガンバ・・・何をだ？」

「見ていただいた方が早いわ、デイケイド・・・コレを」

フルーラが指を鳴らすと、灰色の砂で出来たオーロラのような壁が現れる。

「っ…」

「あとあの女性も来てもらおうかな。観測者は二人以上いないと意味がないからね」

すこし経って夏ミカンがコッチにやってきた。

一度止めようと思ったが、フルーラとか言うガキに止められる。

「安心していただけないかしら破壊者デイケイド？」

「ワタシ達はあなた達を傷つけようとは思っていないから…」

正直、その言葉を信じたんじゃない。

このガキ、見た目とは裏腹に殺気が尋常ではなかった。

もし、俺が無理やりにも夏ミカンを呼ぶのを止めていたなら…

105

「司君・・・この子達は」

「ははっ、ボクはゼノン！そしてこちらは「いいから早く！」…あ
あそうかい」

ゼノンはすこし不満げに砂の壁を移動させた。

こいつらの芝居がかった口調にはうんざりだぜ…

「さあ、ご覧になって。あなた方の世界をッ！」

「「・・・」」

砂の壁が俺達を通り抜ける。そこは

「なっ！」

「え!？」

何もなかった・・・文字通り、街も、

人も、

草も。

生命の反応はなく、ただただ荒地が広がるだけ

「こ、ここがまさか俺達のいた世界なのか!？」

「お、お祖父ちゃんとか・・・学校の皆とか・・・」

夏ミカンは顔を真っ青にして震えている。

「違うよ、でも正確に言えば、いずれこうなる」

「!?!」

ゼノンはコッチの気など知らずにへらへらと笑って答えた。

第7話 ゼノンとフルーラ（後書き）

とまあこんな感じの7話でした
次もよろしく！

第8話 崩壊への序曲（前書き）

「アーハツハ！見てごらんフルーラ、前書きを乗っ取ってみたよ！」
「素敵よ！かっこいいわゼノン！」

第8話 崩壊への序曲

「ウフフ、驚いているわねディケイド。そう、あなた達が何もしなかつたら…」

フルーラはゼノンの肩に手を添えた。

「あなた達の世界は滅びるのよ」

なっ・・・何を言っているんだこいつ等は！

「なっ、なんで？」

「教える事はできないな、ディケイド。これはボク達が答えていい問題ではない」

「まあ・・・でも、そんなに気になるなら自分の目で確かめてみてはいかがかしら？」

「？」

ゼノンとフルーラはくすくすと笑い合う。

「君達はこれから様々な世界を巡るだろう。」

その中で君達は答えにたどり着く、多分ね?」

「世界を・・・巡る?」

「ああそうさディケイド。」

君だけじゃない、これからもっと多くの戦士が生まれるだろう。

いや、もう既に兆候は出ているはず。君は分かっているんじゃないか?」

ふと、今日の双護が脳裏に浮かぶ。アイツはカブトに選ばれていた
そう言えばアイツの走るスピードは凄まじいものがあった様な・・・

「まさか・・・」

「あ、貴方達はどこまで知っているんですか?」

ゼノン達は同時に首を振る。

「君達より少し知っているくらいさ。」

とにかく、君達は間もなく別の世界へ転送されるだろう。

放送室にある電子黒板をみてごらん、きっと世界のヒントがある
筈だよ?」

「そうそう、言い忘れていたわ。貴方達は全員クウガのグロージングフォーム程度のステータスを与えられているから。

分かるかしら？夏美。

あの時の触手が刺さっていても多分死にはしなかったわよ？」

「グロージングフォームだと？」

「君に分かりやすい例えを選んだだけさ。

尤も各々の特殊能力も開花してるだろうけどね」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！私にはもう訳が…」

「理解しようとしなくてもやがて君達は自然に理解できるようになるだろうね、

もう歯車は回りだしたのさ！誰にも止められない！いや、君達が止めるのさ…！」

ゼノンとフルーラは腕を組んでクルクル回りだした。う、うぜえ

「と、とにかくだ！まず、

何で仮面ライダーが関係しているのか？

次に俺達はどうすればいいのか！

最後にコレを仕組んだ、もしくは空間転移を行なっている奴はだれだ？

なぜ俺達を選ばれた？」

ゼノンとフルーラは動きを止めて耳打ちをし始めた。暫くしてゼノンは仕方ないなあと言って笑う。

「まずは最初の質問、仮面ライダーが関係している理由、これと君達の世界が危険にさらされている理由は限りなく近い。

その詳細はボクらもまだ分からないけれどね」

「そして二つめの…あなた達は何をすればいいのか？これは明日にでもなればきつとわかるわ。

でもねディケイド、貴方が何をすればいいのかは教えてあげる」

そう言ってフルーラは俺の前に寄ってくる。

身長が腰くらいしかないから見上げられる形になるが、なぜか俺が見下されているかのような気分だ

「貴方は破壊すればいい」

「・・・は？」

それだけか？そう言ってもフルーラはくすくすと笑うだけ。
ゼノンの方へと戻り、その腕に自らの腕を絡み合わせる。

「最後に」

再び、二人の声が重なる。

「なぜ君たちが選ばれたのか？だね。はっきりいって意味はないよ」

「はあ!？」

「君たちが選ばれたんじゃない。これから選ばれるんだ」

そう言ってゼノン達は笑う。

しかしすぐにため息をついて頭を抱えた。

「やれやれ、こんな素敵な夜なのに……」
「風情が分かっていないわ。残念」

「っ、ワーム！」

ゼノン達の後ろにワームの幼体が今にも襲い掛かっているといるではないか！

「お前等逃げ」

スツと、二人は何かを取り出した。

ゼノンは青い棒の様な物。

フルーラは赤い棒の様な物。

二人は互いに微笑むと…

「あ！司君、見てください。ゼノン君達の腰！」

そこで初めて気付いた。ゼノン達の腰にはいつの間にかベルトがある。あんなベルト見たことないぞ！？

「お、お前等、何者なんだ？」

「ワタシ達かしら？」 「ボク達かい？」

『ヒートー！』 『トリガー！』

二人は棒：USBメモリのボタンを押す。

「「ただの『眼』さ」」

二人はメモリをベルトに刺し込み、シンクロするように横に倒す。
その動きはまさにWの文字

「「変身！」」

『ヒート・トリガー！』

電子音が流れ、二人の体が光に変わる。二つの光は互いに交じり合
って、そして人の形を形成した後、弾けた。
そこに立っていたのは、

「仮面・・・ライダー？」

好きだからとか無しにしてもライダーにしか見えないデザインだった。

ただはつきり言って異端過ぎる！体の半分が赤色で、半分が青色・

「ださ……い？」

「黙っていたほうがいいよピンキーライダー。」

形や呼称大した意味は無い、覚えておくんだねピンキーライダー
ピンク、このピンク！アホピンク！」

「おい止めるッ！俺はピンクじゃない！マゼンダだ！
いいか？マゼンダだぞ！しっかり覚えてねッ！」

『ちなみにワタシ達はこの姿を『ダブル』と呼んでいるわ。覚えて
おいてね』

そう言いながらゼノン銃でワームたちを撃ちまくる。

赤い弾丸は次々にワームを燃やしていき、ワームはどんどん減って
いく。

「じゃあもうボク達は行くよ、あまり鑑賞しすぎるとあの方に怒ら
れちゃうんでね」

『それじゃあごきげんよう破壊者ディケイド！』

夏美、また会えるのを楽しみにしているわ！

せいぜいそれまで死なないでね?』

ドンっ、と言う音がして振り向くと、巨大な車がダブルの前に現れる。

「ああ、そつだ。最後にコレを」

「ああ?」

ダブルが何かを投げたので慌てて受け取る。

見てみれば、特に普通の指輪だった。一応宝石らしき物はあるが……

「な、なんですかコレ?」

「イメージ・リング。

それをつけて『物』を思い浮かべればそれになれる。ただしなれるのは三個まで。

それに変身できたものは消せないし上書きできない。

つまり三種類の物にしかなれないって事。後にも先にもね?」

「どこで手に入れたんだよこんなの!」

『トレジャーハンターとか言うのから頂いたのよ』

「そしてそれを空野薫に渡して欲しい」

薫に？何でなんだ、と聞こうとしたが…もつやつ等はいなかった。

「っ、どこまでも勝手なガキ共だったな」

「あはは…そう言えば結構司君のこと破壊者とか言っていましたけど…」

「ちっ、本当に何も語らずに消えて行ったな。

破壊者？壊せ？意味が分からん」

とにかく考えていても仕方ない。とり合えず今はなるように成れって事だろ。

にしてもダブルか

「フィギュア…でるかな」

「買うんですか…」

二人の声はむなしく夜に溶けていった

第8話 崩壊への序曲（後書き）

ダブルもディケイドも最初見たときは

正直あんまりカッコよくないな

とか思ってたんですけど、放送終了時にはシルエットだけで鳥肌モ
ンのカッコよさになってましたw w

ここまでお付き合いありがとうございました！次回もよろしく！

第9話 新しい世界へ（前書き）

どうも！9話です。この話で最初の世界はさよなら
では、さようなら！

第9話 新しい世界へ

「何コレ？」

「実は」

翌朝、俺達は皆に昨日の事を詳しく話した。
特にゼノンとフルーラが変わってる事は念入りに・・・

「で、なんで私なの？ってか何で私の事知ってたの？」

「知らん、俺はただ渡せって言われたんだ。とり合えずつけとけばいいだろ」

「しかし信じられないな。私たちの世界が滅びてしまうなんて・・・」

「だけど・・・多分本当だ」

俺達は黙り込んでしまう。

その沈黙が耐えられなかったのか、友里が申し訳なさそうに手を上げた。

「あの、何だっけ？グロージングフォーム？それってさ、どれくらい強いのか？」

「そういえば...オレ達それくらいの身体能力になってるんだっけ？
どうなんだ司」

「ああ、そうだったな。」

でもいくらクウガ最弱のグローイングフォームって言ったってキック力は5tくらいあったはずだぞ!」

「え!?マジで!?すっげえじゃねえか!」

そう言っつて椿は窓から中庭に飛び移る。

そしてそこにある石でできたブロックの前に立った。

「5tもあればこんな石、豆腐みたいに崩せるって事だろ!?!」

「そりゃまあ…」

「うっひょー!名探偵ごっこできんじゃねえかよ!おいおいテンションあがって来たお!」

「またアイツは下らん事を…」

咲夜はため息をついて呆れるが本人は気にしていない。足を思い切り振り上げて

「ウエーイッ!」

雄たけびを上げてブロックを思い切り蹴るっ!

ゴッ!

「お！・・・おあ？」

「・・・・・・・・・・」

ブロックは少し移動しただけで砕けてもないし吹き飛んでもいない。これではまるで普通の人間が蹴ったときと同じだ。

「なあ・・・あいつなんか涙目になってないか？」

「あ、ホントだ・・・」

椿は先ほどとは一転し、涙目になりながら小刻みにふるふる震えている。

あれ？顔も青い、これ・・・まさか

プルルルルルッ！

頭の中で答えがでた瞬間、ポケットの中に入れておいた電話が鳴る。

「も、もしもし・・・」

『やあ！久しぶりだねディケイド！ボクだよ！』

「お前！な、何の用だ！？」

『聞いてくれよ！フルーラの寝顔がとってもかわいかったんだ、この素晴らしさを是非君に伝えたくてねッ！
え？写真を見せる？駄目だよディケイドそれはボクの』

プチン・・・

「だ、だからでした？」

「いや、いたずら電話だったよ。それより」

ブルルルルル！！

「・・・はい」

『アハハハハ、おかしいね電波が悪いのかな！切れてしまったよ！
それでねディケイド』

昨日言い忘れていた事があるんだ。』

「な…何だよ」

『君達はグロージングフォーム程度の身体能力を与えられたと言っ

たけれどアレはあくまでも防御面だけの話さ、間違ってもキツク力とかパンチ力とかが上がってると思ってる石とか砕こうとしないようにね！痛い目を見るよ？まあでもそんな馬鹿、いや大馬鹿野郎なんて居るわけないよね、ゴメンよデイケイド。うん、居るわけないよねそんなアホ！アホ野郎！じゃあね、デイケイド。また会える日を楽しみにしているよ！』

プツリ…

「・・・」

なぜかゼノンに申し訳なく感じる。

「いってええええええええええッッ！！」

大馬鹿野郎の悲鳴が空へと吸い込まれていった

「そう言えば双護、お前ってあんなに足が速かったっけ？」

アイツ等が言っていた事が気になる。選ばれた奴は力が目覚めるとか言ってたな…

「ああ、そう言えばそうだな。俺自身あの時は気にしていなかったが…」

「つまり、いつもはあんなに早くないんだな？」

双護はこくりと頷く。時計を見ればまだ朝の八時半だ。

「よし、少し実験を試してみよう」

俺達の学校は特別クラスの周りごと転送されたようなので校庭も完全ではないがちゃんと存在していた。

と、言うわけで双護には手っ取り早く百メートルを走ってもらおう事にしたんだが…

「な、七秒六三…」

「なん…だと…？」

結果は明白、双護はカブトのクロックアップを髣髴させるかのように走るスピードが速くなっていった。

あれから教室に戻ってさらに色々調べると、いろいろな事が分かった。どうやら小野寺兄弟は力が強くなったらしく、真志達は…

「のわああああ！」

「ちょ！真志！つて、ええええええ！」

真志と美歩は鏡に触れて意識を集中すると、なんと鏡の中に入ることができるようになっていた。

まあ原作でも長くいると危ないので二人は早々に逃げ出したが…

拓真達はなにが変わったのか分からなかったが、椿は凄かった。

「うおおおおおお！」

椿は次々に飛んで来る石を木の棒で叩き落す。

「はあ、はあ！」

さすがブレイド、剣術が格段に上がっている。

「今は・・・嘘ですね」

「おお、正解だ！」

「心音が少しおかしい動きを見せなので・・・」

アキラには音についての力が上がっていた。

一方我夢には相手の怪我を治療できる光をだす、不思議な力が備わっている。

巨たちも今は分からなかったが...

「どうやら・・・いろいろとマジで凄くなってるみたいだな」

「つか、なんかそのロリカップルさ、

放送室の電子黒板見てみるとか言ってたんだろ？見なくていいの？」

「ああ、そうだな。でも、いまあそこには」

「すごい！ねえねえぼくが写ってるよー！ねえねえ！あははは！」

「どうなってんだコリヤ！オイどう言うことなんだよ！」

「驚いたなあ、本当に僕達がテレビになってたんだ」

「ZZZ…」

赤青黄紫・・・カラフルな、
一見すれば敵と間違えなくも無い『イメージ』達がテレビを見ている。

番組は仮面ライダー電王、俺の携帯に数話入っているので、一瞬見せるかどうか迷ったが
今は緊急事態だ。俺達の世界における事情を知っておいてもらいたかった

「こうして見て見るとカメ！お前って出番すくねえよなあ、ハハハ！」

「僕はア…最初こそ、そこそこ頑張ってたけど後々はかませ犬的扱いになったどこぞの誰かとは違うんでねえ！」

「なに…誰の事だ誰の！」

「さあ？誰だろっねえ！」

桃太郎の鬼をモデルにしたモモタロス、
浦島太郎のカメをモデルにしたウラタロス。二人はケンカが絶えな
い。

「へっへー、その点ぼくは強いよね？答えは聞いてない！」

「坊主！その割にはお前結構負けてんじゃねえか？」

「ううううううー！」

「zzzzzz」

「………」

龍の小太郎をモデルにしたリュウタロス、
寝てばかりのキンタロス。モデルは金太郎の熊…らしい。

良太郎はまだこいつ等とは正式に契約していない。
だからデンライナーの外なら砂になる筈なんだが…まあ、こいつ等
は環境が変わってもこのままなんだな。

…サイン欲しいな

「おっ、どっしたんだよ？」

「え？ああ、電子黒板を下ろしてくれないか？そこに世界のヒントがあるらしい」

「え？別にいいけど」

そう言っつてウラは電子黒板を下ろす。

「！」

そこには映写機で映してもいないのに、はつきりと絵が映されていた。
なにか崩れたビルの絵が描かれている。

「えへへー、誰が書いたのー？ぼくもお絵かきは好きなんだー！」

「いや、これは・・・」

「司！」

呆気にとられていると、ユウスケが慌てた様子で入ってきた。

「また光が…っつて」

ユウスケの視線を追う。電子黒板？

「え、絵柄が・・・変わった？」

さっきは壊れたビルだったのに、今は違う。パトカーが至る所に止めてあつて街が混乱している。そ

んな感じの絵だ。つまりは…

「世界が変わったのか!？」

「それだけじゃないんだ！」

「え？」

「おれの紋章が消えちゃったんだよお！」

ユウスケが手を差し出してくる。本当だ、紋章が消えている……
つて

「おまえ…影、影見てみる！」

「え？おわあッ！」

ユウスケの影はまさにクウガの姿そのものではないか

「ぞぞぞぞぞうごう…」

っ、ゼノン達の声が再生される。

『歯車は回り出したのさ!』

『もっと多くの戦士が生まれる』

「ユウスケ気合、入れるよ」

「あ、ああ…！」

ベルトを出してみる。

ずっと憧れてたライダーに、
しかも全員になれるのに…手の震えが止まらない。

「デイケイド…か」

カードに映るその姿を見て、俺は笑みを浮かべる。

喜びじゃなく恐怖でもない、そんな曖昧な感情を俺は笑みで隠した

第9話 新しい世界へ（後書き）

と、言う感じでした。はい

皆さんはタロスでは誰が一番好きですか？
僕はウラですww

第10話 「開幕」(前書き)

当時まだ仮面ライダーはあくまでも子供向けでしたが
そこからのクウガのギャップに驚いた人も多いんじゃないでしょう
かね

子供時代僕はクウガを見て、指パッチンが聞こえたら真っ先に逃げる事にしました

第10話 「開幕」

世界が変わり、重大な問題が発生した。

良太郎達がデンライナーに帰れなくなってしまったのだ。勿論モモタロス達も

「と・・・言う訳でよろしく」

「いや、こっちがありがたいくらいだよ。

戦力的に安心できるのは司君と良太郎君だけだからね」

窓の外には昨日とは全く違う景色が広がっていた。

絵の様に殺伐とした雰囲気ではなく、普通の景色。

「平和そうな・・・所だね」

「一見はね。で？どうするの？」

「ああ、そうだな。とり合えず外に出ない限り何も変わらないだろ」

そう言って司は何気なくテレビをつけてみる。この世界でも繋がるんだらうか？

『先日、死体で発見された』

どうやらニュースがやっているようだ。

内容はどこの世界でもある事件の報道、殺人事件と言つのは嫌なものだが

「死体で発見された

さんは頭部を切り取られており、

警察はここ最近頻繁におこっている同一の事件。

それと一連の犯人は同一人物と考えており、捜査を

「うえ・・・グロ」

首を切り取って殺す。想像しただけで寒気がしてくる、

「と、とり合えず・・・誰が行く？」

「俺と良太郎、ユウスケは確定だろ。

あとはついて来たい奴がくれればいい。

守ってやれる自信は悪いけど無い・・・ごめん」

「僕らも行きます」

我夢とあきらが前にでる。つづいて双護が無言で前にでた

「私もいくよ、もしもの時があれば私を盾にして逃げるんだよ？」

「兄貴・・・」

「わ、私も行くわ、一応私もクウガのカテゴリの・・・筈」

その後も咲夜が加わった。

まあこの雰囲気からして早々戦闘にはならんだろっが・・・

「じゃあ、行こうか」

さて、鬼が出るか？蛇がでるか！

「・・・」

何にもでませんでした。

「へ、平和と言っか、いつもどおりと言っか・・・」

いつ敵が出てもいいように神経を集中していたが、いつまで経っても怪しい奴一人できやしない。

「ははっ、とりあえず解散しようか？何かあったら携帯で連絡を…
ね？」

そう言っつて皆はそれぞれ解散していく。

「はあ……」

ユウスケは自分の足元に目を向ける。

太陽が生み出した影、それは自分の姿ではなく、
古代の戦士、仮面ライダークウガを映している。

しかしそれも何故かほかの人には確認されなかった。まあそっちの
方が都合いいんだが

「気になる……わよね。ごめん……」

薫はさつきからユウスケに話し掛けては自重する連続だった。話し
掛けては自ら話を終わらせる、そのの連続。

「あはは、いいよ薫、気を使わなくても」

「そう？ だったらいいわ。何か食べに行かない？」

ユウスケは苦笑しながらも頷く、

「ん？」

ふと気付く、公園の方をたまたま見た時に、女の子がうずくまっているのが見えたのだ。

気になったので、ユウスケは薫と一緒に女の子の所まで行く事にする。

一応ワームが擬態しているかも知れないという考えを捨てずに

「ねえ？どうしたの？」

薫が女の子の目線になって優しく問い掛ける。女の子は薫を見ると、小さな声で呟いた。

「風船……」

「え？」

女の子が上を向く、薫も上を見ると赤い風船が木の枝に引っかかっていた。

それほど高い距離ではないが、女の子にとっては手の届かない場所だろう。ワームじゃない安心感、二人は苦笑し合う

「ユウスケ、お願い」

「ああ！わかった」

ユウスケは木に飛びついてグイグイ登っていく……はずだったが

「落ちちゃった…えへへ」

「・・・はあ」

結局薫が木に登って風船を取る。

「はい、どうぞ」

「わあ！ありがとうございます！お姉ちゃん！」

女の子は笑顔で薫にお礼を言って、抱きついた。

「あれ？おれは？」

「ユウスケは何にもやってないでしょ・・・」

「ううん、お兄ちゃんもありがとうございます！私、桜！お姉ちゃん達お名前は？」

女の子はユウスケにも抱きついてきた。

「おれは小野寺ユウスケ」

「私は空野薫。よろしくね」

女の子は風船が戻ってきた事が嬉しいらしく、御礼をする為に二人

を家に招待したいと言う。

「どうする？」

「いいんじゃない？集合って六時でしょ、まだまだあるしね」

二人は一応翼にメールだけして桜の家に行く事にしたのだった。

「ちょ、マジでやばいって真志い！」

「だから、帰ってるって言っただろ！」

警視庁。正確に言えばこの世界のだが、そこに真志と美歩はやってきていた。

しかも二人がいるのは一般市民が入ることの許されていないフロアだ。だが真志は携帯を確認しながらズンズン前に進んでいく。

「拓真、警備のほうはどうなってる？」

『そっちには誰もいないよ、今は捜査会議が開かれてる。』

でもあと二時間で終わるみたいだからそれまでに！』

「わかった。資料室はどうだ？」

『誰もいないけど鍵がかかっているみたいだ。幸い電子ロックみたいだしパスワードを教えるよ。』

『いい？パスは』

真志は頷き、なおも進んでいく。

「真志っ、まさかアレ使ったの!？」

美歩の言葉に真志は動きを止める。

「早く行こうぜ、もうあんまり時間がないから…」

「え？あ、う…うん…」

「大丈夫、この世界はオレ達の世界じゃないから」

「そうじゃなくて…もう使わないって言ったじゃん…」

真志は美歩の言葉を待たずに歩き出す。

美歩も不満を顔にだしていたが、

これ以上いう事はないと悟ったのか、黙って真志の後をついていく事にした。

しばらくして二人は資料室と書かれた部屋についた。

部屋には電子ロックがかかっていたが、
真志は迷うことなく数字を打ち込みドアを開ける。

真志は暫く中をうろついた後、そこら辺にあったパソコンにUSB
を差し込み、データをコピーし始める。

「ハハハ、コレって犯罪だよね？やばくね？」

「さつきも言っただろ？オレ達の世界じゃないんだから大丈夫さ。確
かに気持ちのいい事じゃない、でも俺達の世界を救うのに必要な事
なんだよ」

「だけどさ、犯罪は犯罪っしょ！？」

そうだな、そう言っただけで真志は苦い顔をする。

「やばくなったら学校に隠れてればいい。

あそこは多分他の人には見えない…

っていつか干渉を受けないみたいだから」

「？」

「だって考えてもみろよ、この世界にいきなり学校が現れたっての
に誰一人としてこの学校を不思議がろうとしない。それってつまり
この学校がこの世界にとってイレギュラーもしくは観測できない
って事だと思う。」

「な…なるほど。あ、コピー終わったみたい」

「ああ、じゃあ帰ろう」

『大変だ！そつちに一人来る！』

「うえ！マジかよ！」

「えええ！や、やばいんじゃない！」

「　　っ！」

ドアが開く。婦人警官が緊張した様子で入ってきた、当然だ。ドアが開いているのだから

「・・・？」

警官は暫く辺りを見て回ったが怪しい奴どころか人間の気配が感じられない。警官は安心した様子で部屋から出て行く。

「・・・危なかったな」

「はぁ・・・緊張した」

鏡が光り、二人が出てくる。

「結構便利なんだなこの能力。あははは！」

「笑い事じゃないっての！」

美歩はため息をつくと真志について来た事を軽く後悔するのだった。

第10話 「開幕」(後書き)

すいません、先に言っておきますが

「振り向くな！」

…とは関係ありません

はい、すみません。トラウマです

ココまでお付き合いありがとうございました。次もよろしく！

第11話 「威勢」(前書き)

「そう言えば知ってるかいフルーラ」

「何?どうしたのゼノン!」

「この作品に出てくるグロンギ語は、適当らしいよ」
「だと思ったわ!適当な男だものね!」

「でも皆!寛大な心で許してあげてねッ!」

第11話 「威勢」

二人が無事に脱出したのを監視カメラで確認すると、拓真はホッと息をついた。

「た、拓真・・・コレって一体」

椿が匠のノートパソコンを指指す。

そこには警視庁の監視カメラ、凶面表が全て乗っていた。

だからこそ真志達は警官の目を盗んで忍び込めたのだ。

「僕も...その、よく分からないんだけど...でつかい罪だって...言ってたよ」

「？」

そう言っつて拓真はパソコンの電源を落とす。

「椿君、お昼にしない？お腹すいちゃったよ」

「?????ああ、いいけど?????」

椿は不思議に思いながらも、これ以上の詮索は止めておいた。

一方ユウスケ達は、桜に連れられて彼女の自宅にいた。

幸い公園からそう遠くは無く、歩いて十五分程度の距離だったので二人は安心する。

「へえ、いい家だね」

「ありがとう、えへへ！」

桜の家は、大きくこそはないが可愛らしい外見の家、二人は桜に連れられて中に入る。

「ママー！ただいまー！」

「あら、おかえり桜」

リビングで桜の母親が桜の帰りを迎える。

桜はさっきあった事を話すと、母親は二人にお礼という事で晩御飯を勧めてきた。

あまり遅くなっではいけないと二人は思ったが、翼に電話してみると・・・

『いいよ、せっかくだからご馳走してもらいな。一応司君を迎えに行かせるから』

そう言ったのでお邪魔する事を決める。ただ電話の向こうで

『おい！何で俺が迎えにいかなくちゃ』

『幼女の家に行ってるだと！おいふざけんな！俺も呼
ぎゃあ
あああ…』

「……」

「じゃあ桜ちゃん。ご飯まで私たちとあそぼっか？」

「うん！」

そう言っつて二人は笑いあう。その姿はまるで姉妹のように

それから三人でいろんな事をして遊んだ。

まずはトランプだ

「ババ抜きにしましょ。さあユウスケ、引いて」
「ああ」

そう言っつてユウスケは薫の手札から一枚カードを抜く。

（あ、ババ……）

その後、ユウスケのババは彼から離れる事はなかった。

「あはは、ユウスケお兄ちゃんの負けだね」
「くう……」
「もう一回やりましょうか」
「あ、ああ！次は負けないぞ！」

そう言ってユウスケは薫の手札から一枚カードを抜く。

(ババ……)

その後、ユウスケのババは彼から離れる事はなかった

「やったー！勝ったー！」
「まあたユウスケの負けね！」
「く、くそ！もう一回！」

そう言ってユウスケは薫の手札から一枚カードを抜く。

(ババ・・・)

その後、ユウスケのババは彼から(以下略)

「つ、次は席替えしようか！桜ちゃんから引きなさいユウスケは」

「そ、そうだねッ！お兄ちゃん頑張れ！」

「おう！次こそ勝つッ！」

そう言ってユウスケは桜の手札から一枚カードを抜く。

(ババ・・・)

その後、ユウスケの(略)

「ユウスケッ！んっ、ンンッ！右ッ！んんっ！右にババ！ンンッ！」

(喉の調子でも悪いのかな？)

くっ、しかし、右のカードだけ目立たせている！？

薫、おれに精神的な揺さぶりをかけるつもりなのかッ？

でもな、甘いッ！)

そう言ってユウ（略）

（ババ・・・）

そ（略）

「・・・」

「とっ、トランプはやめて他のゲームにしようか!」

「そうね!ほ、他に何かあるの?」

そう言って桜は黒ひげ危機一髪を持ってくる。

「お、おもしろそーっ!さあ、遊ぼうか!」

「ユウスケお兄ちゃん!頑張ってるね!」

「よっ、よし!」

ユウスケは剣を樽にむけて一つ刺す。

その瞬間、黒ひげは空中に飛び出した!

ツポオオーンッ!

『ぎゃはは、ばーか!』

「……………」

「……最近の黒ひげは当てちゃったら音声がなるんだあ！も、もう一回！」

「……………」

ユウスケは剣を（略

ツポオオーンッ！

『ぎゃはは、ばーか！』

「……………」

「そ、そうだあ！順番を変えましょ！桜ちゃん、私、ユウスケの順

「！」

「わ、わかったよ！じゃ、じゃあいくね！」

（黒ひげさん！お願い飛んでッッ！）

さくっ

「わあい…大丈夫だあ…」

「次は私ね」

（飛べ飛べ飛べ飛べ飛べ飛べ飛べ飛べッッ！）

さくっ

「はは…セーフだ…うれしいなあ…」

「次、おれ…」

さくっ

ツポオオーンッ！

『ぎゃははーばーか!』

「ゆ、ユウスケ…あの…なんていうか…帰りにジュースでも買ってあげようか?」

「薫、今優しくされたら…おれ、駄目かも…」

その後も三人は楽しく遊んで、笑いあう。
ユウスケの眼に涙が浮かんでいたのは
きつと楽しかったからだよ!

「あーあ、薫お姉ちゃんが本当のお姉ちゃんなら良かったのにい…」

「っ……」

「あれ……お姉ちゃん、泣いてるの?」

ふいに薫の目から涙が溢れた。

桜は自分が何かしてしまったのかと黙り込んでしまつ。
そうじゃない、ユウスケはそう言おうとしたが…言えなかった。

「あ、ううん。別に桜ちゃんが何かをしたとかっていうんじゃない

の。

ただ…思い出しただけ」

「え？」

「私、お姉ちゃんがいたの。でもね、死んじゃったんだ…」

「あう…ごめんなさい」

「あはは、いいよ別に。すこし思い出したただけだから」

「・・・」

ユウスケは思い出す。

薫の姉とは交流が深かったので事故で亡くなった事を聞いた時の悲しみは深かった。

薫も自分も泣いていた、もちろん

「ユウスケ！」

「え？あつ、何？」

「ご飯、できたって。さあ行こう桜ちゃん！」

「あ、うん！」

薫には…ずっと笑っていて…ほしい

「おいしかったわね」

「ああ。でも結構遅くなっちゃったぞ。はやく帰らないと・・・」

もう既に辺りは暗くなっている。

テレビでやっている様に嫌な事件も多い、二人は自然に走り出した。何、学校までそう遠くはない。なにも起きないさ

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ

男の悲鳴。二人は思わず足を止める。

「な、なに？」

逃げる

「さあ・・・？」

早く！

「悲鳴、だよな」

「う、うん」

今なら間に合う

「大丈夫・・・かな？」

何をしている！逃げろ！

「助けないと・・・」

「ああ・・・そう、だな」

やめろ！逃げろ！本能が叫ぶ。

だが、心のどこかでは大した事はないと・・・そう、決め付けていた。

「向こうから・・・聞こえた、薫はココにいて・・・」

「え・・・わ、私もいくわよ・・・」

夜の道、静けさが漂う中にたしかな緊張が感じられる。

茂みの向こうに行きたくないと言う感情と、

悲鳴をあげた男を早く助けなければならぬと言う感情。

混ざり合う二つの感情が、より緊張を高める。

「大丈夫、何も無い、何も無い、何も・・・」

そして、知る。やはり…ここは、この世界は…違うんだな。

「うわあああああああああああああああああああ！」

「ひっっ！」

倒れているのは男の体、しかし首は無い。その男の首を持っているのは…

『リント?...シヨデギビザバギバ』

「つつ！」

男の首をボールのように扱っているのはクモの顔した人間…のよう
な者だった。

何を喋っているのかは分からなかったが、男を殺し、一連の殺人事
件を起こしているのはコイツなのだろうと二人は確信する。

『リラシデバギバダバギ、ボソギデジャス！』

一歩、クモ男が近づいてくる。

ユウスケは恐怖に駆られながらも、足元に目をやる。自分の影、超
戦士の影…。

ユウスケは素早く薫の前に立ち、適当に構えた。

既に逃げ出したい感情と、恐怖でおかしくなりそうだったが、
後ろにいる薫だけは守らなければならない。

それがユウスケの理性を保つ要因になってくれた。

大丈夫…いける。勝てる、

そう信じて念じる。

いつもは聞き流していた司のライダー話を思い出して、腰に手をか
ざした。

「っでた！」

光と共にベルトが現れる。あとは…

「変身…」

弱弱しい声で放つ言葉。だがベルトはそれに応じるように光り、ユウスケの姿を変える。

『バビ？ビガラ！バビロボザ！』

「ユウスケ・・・本当に、変わった」

仮面ライダークウガ。古代の超戦士…

「・・・？」

だがユウスケの記憶にあったクウガとは姿と色が違う、色は真っ白、なんだか角も小さく、装飾も少ない。

「うっ、あ・・・うおおおおお！」

走り出す。姿なんて気にしてる場合じゃない、とにかくコイツを倒さなければ！

大丈夫、なぜなら

おれは、仮面ライダークウガなんだから

第11話 「威勢」(後書き)

すみません。はい、グロンギ語ほぼ適当です

更新もそろそろ不定期になりそうですね、なるべく毎日したいんですけどできなかつた時はごめんなさい！

次もよろしく！

第12話 「弱者」

「おらッ！」

殴る、蹴る！クウガは力任せにクモ男を殴り続けた。いけるか！？

「ズブ、ボブバロンバ！」

だがクモ男は何のリアクションも起こさず、クウガを投げ飛ばす。全く効いていない、涼しげな表情がその言葉を語る。

「うぐっ・・・がつ！」

起き上がるうとしたクウガにクモ男は蹴りをあびせる。しかし本気ではない、クモ男はクウガを踏み付け、馬鹿にしたように笑う。

「っおおツツオ！」

クウガはクモ男の足を掴み無理やりに倒す。なかばやけくそでそこへ馬乗りになり、更に殴る！

「グッ！オオオ！」

流石にコレは効いているのか、クモ男は苦痛に喘ぐ。

このままいけば勝てる！

そうユウスケが確信した時、

「ぐっ！あああああああ！」

背中に走る一瞬の激痛。

「ユウスケ！」

背中を見てみるとそこにはとても大きな針が刺さっていた。
普通の人間ならば一撃で死んでいただろう。

「うあっうあああっ！」

クウガはその針を力に任せて引き抜く。

しかし襲ってきたのは痛みではなく異常な程の恐怖、
戦うとはこう言う事なのか？

「ゾビ！ジジャラザ！」

「ヒッ！」

クモ男が口から糸を吐く。それはクウガの首に巻きつき、動きを封じた。

苦しい、

怖い、

苦しい、

怖い苦しい怖い怖い

こわい
こわい
こわい
こわい
こわい
こわい。

パニックになるクウガの頭、すくむ足

「バビゾギデギスンザ、ズ・グムン・バ。」

また訳の分からない言葉が後ろから聞こえる。

声が出ている方向を見るとそこにはまた化け物、ハチのような外見の男だった。

手にはボウガンの様な武器、先程の針を撃ったのはコイツだろう。

「ギラバゲゲルンガギヂジグザスグ、ギギボバ？ククク」

「フン！ババデデギス！」

会話の意味が分からない。それがまた恐怖を加速させていく、クモ男はクウガを蹴り飛ばし立ち上がった。そこへ、さらに二人の怪人がやってくる。

「フハハハ！ゲゲルゾズビスンザバ！」

飛翔してくるコウモリ男。

「バセサンロブデビゾバギセスバ！」

今度はイカ…だろうか？

とにかく計四体の怪人がクウガを取り囲む。ユウスケはもはや喪失感とらわれていた。

今の自分では勝つ事はおるか、薫を助ける事も不可能、薫を見れば真っ青になって震えている。

ユウスケの脳裏に浮かぶ、最初の世界での警官。

目の前で人が死んだりアル、

怖い。

逃げたい。

勝てない・・・

クウガになれたのに・・・誰も、守れないのか？

「ちょっとまてええええええええええええええええッ！」

「ぐう！ガアアア！」

突如、バイクが走ってきてそのままコウモリ男にぶつか

「っ！司！」

「すまん、遅くなった！大丈夫か！ユウスケ、薰！」

「ダセザ！？」

「グロンギか、まあ見せてやる！」

司は素早くカードバインダー、通称ライドブッカーから一枚のカードを抜き取る。

既にベルトは装着されており、司はカードをベルトに放り込む。

『カメンライド』

「変身！」『ディケイド！』

集い、弾けるエンブレム。司の姿が変わり、ディケイドへと変身する。

「ムウツ……」

怪人たちは一斉に戦闘姿勢にはいる。

「試してやるよ……」

そう言ってディケイドはブッカーからカードを一枚抜き取る。

だが

「!?!」

司が取り出したのはアギトのカード、
しかし肝心のアギトが写っていない。

司はブッカーから他のライダーのカードを抜き取る。しかしそれら
もアギト同様、無地のカード。

「なんで……っておわぁ!」

八千男が針を発射し、ディケイドは寸前の所で避ける。

「ちくっ…あああもう!仕方ない!」

ディケイドは適当にカードを一枚放り込む。

『アタックライド プラスト!』

ブッカーを銃にして撃ちまくる。

「お、意外にディケイドだけでも戦えるな」

ディケイドは四人のグロンギ達を相手に肉弾戦を繰り広げる。いき

なり現れたディケイドに困惑しているのか、グロンギ達の動きが鈍る。

「うらあっ！」

コウモリ男を蹴り飛ばすと、ブッカーから金色のカードを抜き取った。

「じゃあな！」

『ファイナル・アタックライド』

「っ！ビゲソ！」

八千男は素早く飛翔し、
クモ男は糸を吐きイカ男を連れて、逃げていった。

『ディディディディケイド！』

ディケイドの前方に無数のホログラムカードが現れる。

「バンザ？ボセザア！」

「うおおおおッ！」

ホログラムカードと共にディケイドは飛び上がり、その中へとび蹴

りで飛び込む。

デイケイドはホログラムカードを通過していき、エネルギーを足に集中させ、そのままコウモリ男を蹴り飛ばした。

「ヤアアアアアアッ！」

「ズウウアアアアアアアアアア！」

爆発するコウモリ男。少しの間沈黙が辺りを包む。

「さて・・・と、大丈夫か？ユウスケ！、薫！」

デイケイドは変身を解き司に戻る。

「ユウスケお前、変身できたんだな！」

「あ、ああ・・・」

「大丈夫か？ま、でも今は帰るか。おい！出てきていいぞ夏ミカン！」

司が合図をすると、茂みの向こうから夏美がでてくる。

「私は夏美です！大丈夫ですか、薫ちゃん、ユウスケ君！」

夏美の隣りにはもう一台のバイクが停めてあった。

薫は恐怖で腰を抜かしていた為、夏美が担ぎ上げて乗せる。

「あ…れ？夏美、あなたバイクの免許なんて持って…た？」

「あはは…それが、あつたんです、ポツケの中に、私免許持ってないのに…」

「ついでに言つとバイクも乗れるようになってました」

「お前等もあるはずだ。ポケット見てみる
乗り方は頭の中に入っている筈だぜ」

薫とユウスケはポケットの中を調べる。

「！」

司の言つ通り二人のポケットの中には見覚えの無い免許、

「ついでに言えばバイクも校庭に停めてあった。

全く…用意がいいというか…、とんだご都合主義だぜ。

「ああ、ちなみにお前のバイクはトライチェイサー2000。コレはクウガの」

「司君、帰りましょう！」

「ちっ、ああ…そうだな」

そう言って司達は学校へと戻るのであった。

「変身！」

夜の校庭、ユウスケは白いクウガに変わる。

「っ！」

変身を解く。

「変身っ！」

また白に。

「っああああ！」

変身を解いてまた変身する。だが色は白のまま

「つくしよおおおおッ！」

地面を殴りつける。何度も、何度も。

思い出すのは無力感、

恐怖心、

底知れぬ悔しさ。

そして虚しさ。

「何も・・・何もできないのかよ！」

あの時と同じなのか？薫の姉が…死んだ時と同じ…

「おれは…ッ、無力なのか…ッ!？」

ユウスケは呟く様に言った。

しかしその問いに答えてくれるものはいない

第12話 「弱者」(後書き)

ってな訳で終わった12話でした！

どうなんですかね、グロンギの名前を出すタイミングがつかめませ
んww

すいませんッ！もしかしたらずっとクモ男になるかも知れません

ここまでお付き合いありがとう！次もよろしく！

第13話 「理由」(前書き)

注意！

クウガのグローイングフォームはディケイド版を基準にしています
特定の場合を除いて変身制限は特にありません

あと、空野薫の容姿は八代の姐さんを高校生くらいにしたモノと考
えておいてください。

最初はそのまま出そうと思ってたんですが、ちょっとキャラが違う
ので止めておきました。

第13話 「理由」

翌日、ユウスケは昨日、何度も司から聞いたクウガの話を思い出していた。

「・・・」

主人公の五代雄介は自分とは大きく違う。

人々の笑顔を守る為に戦い、傷ついても立ち上がる。

ユウスケはそれを素直にカッコいいと思う事が出来た、だがそれと同時により自分の滑稽さが焼きついてくる。

その後も暫くはクウガの話を頭の中で繰り返す

「おれは…こんなカッコよくは、なれない…」

もう一度変身を試してみる。だが相変わらず色は白、

「何が…足りないって言うんだよ…クソっ！」

ギリリと齒軋りする。

だが何をしても、何を祈っても色は変わらなかった。

「少し・・・外にでようかな」

ユウスケは気分転換に近くの川まで歩く。

あれから何度変身を繰り返しただろうか？だが変わるのはいつも白色のグロウイングフォーム。これではグロンギ達とはまともに戦えない

「はあ、五代さんになるにはどうすれば・・・」

川原に座ってため息をつく。

「うっ！」

ぐいっと目の前に飴玉が迫ってきた。思わず仰け反って倒れてしま
う。

「えへへへ！ごめんねえ！」

「あ・・・桜ちゃん！もがっ！」

目の前で笑っているのは桜だった。桜は驚くユウスケの口に飴玉を突っ込む。

「元気ないよおお兄ちゃん、コレ食べて元気出してねー」

「はは・・・ありがとう。桜ちゃんは どうしてココに？」

「えへへへ、これからお父さんとお母さんと一緒にお買い物に行くの！」

でもお兄ちゃんを見かけて」

「そうだったんだ。気をつけてね？」

「うん！お兄ちゃんにも何か買ってきてあげるね！」

そう言って桜はパタパタと駆け出して行った。

「まあ切羽つまってもしかたないか…ははは。おれも笑顔を守る為に戦おうかな」

そう言ってユウスケは学校に帰って行く、少しだけだが気分は楽になった

会議室では真志が取ってきたデータを元に会議が開かれている。警察は既にグロンギの存在を認識していたが、警察の面子を保つ為に公表はしていなかったのだ。

「グロンギが首を切り取る殺人を繰り返しているのは何故だ？」

「多分そういうゲームなんだろうな、

アイツ等は人間を使った殺人ゲームをする種族だから。

ただ今回のゲームは複数のグロンギが関わっている、まるでこのゲームを成功させなければならぬと言わんばかりに」

「一刻も早く成功させなければいけないゲーム？それはどちらかと言つと儀式だろう？」

「そう…か、グロンギだからってクウガ本編と同じとは限らないな」

「じゃあ・・・もしゲームが終わったらどうなる・・・の？」

真由の言葉に全員が沈黙する。

「それは、わからないけど、とにかく殺人を止める事が優先されるんじゃないかな？」

「そうは言っても次に、どこで、いつ殺人が行なわれるのが全く把握できない。」

「これでは止めようがないぞ」

双護はチャンネルをこまめに変えていく。すると

「コレは―！」

テレビの中でリポーターが必死に何かを伝えている。その遠くにはどす黒い霧をだしている山が見えた。

『ご覧下さい皆様！松葉山から黒い霧がものすごい勢いで発生しています！』

近隣住民の皆様は今すぐに避難を　　きゃあああああー！』

リポーターは物凄い勢いで迫ってきた黒い霧に吞まれる。カメラはブラックアウトし、砂嵐の音しか聞こえなくなった。

「な、なんだ！？」

「まさかッ、すでに！ゲームは既に終了したのか！」

夏美が急いで外の様子を確認する。すると、

「き、霧が！霧が来ます！」

まるで激流のように山から霧が押し寄せてくる。あっという間に学

校を飲み込み、校庭のそとは真っ黒に染まる。

「やはり……この学校は安全のようだな」

「まだ霧は街を襲っているんですかね……？」

「司！何だよコレ！」

間一髪、校庭にいたユウスケはいきなりの光景に目を疑った。

「おいおい！どうなってんだよコリヤ！」

モモタロス達も異常に気がついたのか、特別クラスに集まってくる。

「今はなんとも言えない……ね。とにかく霧が晴れるのを待とう。」

翼は窓の外を見る。

そしてじょじょに霧が晴れていく。

しかしそこにあつた景色は想像を絶するものだった。

ビルは崩れ、まるで竜巻があつたかのよう、しかし本当に恐ろしいのは何十人ものグロンギが徘徊している事だった。

逃げ惑う人々、そして上空には異常なまでのオーラを纏つたグロンギがいる。

『聞け！人間共よ！我は大いなる闇！貴様等に裁きを下す絶対の存在！』

「なんだよアイツは！」

「ゲームが成功した結果じゃないかな、早く皆をたすけにいかないよ！キンタロス！行くよ！」

「おっしや、まかせとき！」

「変身！」 『AX・FORM』

電王は窓から身を投げると、校庭に着地する。

「くっ、とにかくあの闇とか言う奴がボスだろ？」 『カメンライド』

「おそろくな…だが、アレを倒したからと言ってグロンギが消えるとはかぎらんぞ」

「それでもやらなきゃヤバイだろ！変身！」 『ディケイド！』

ディケイドも電王に続いて学校を飛び出していく。

「我夢君、私たちも行きませんか？」

「そうですね。僕達の力があれば少しは救援の助けになるかも知れませんが」

「…わかった。だけど絶対無理はしないでくれ」

「お、おいおい！皆、まじかよ……」

椿は力なく座り込む。

「ライダーなんて……子供向けの作り話の筈なのに……なんで……
こんな」

「椿お前、まだそんな事を言っているのか!？」

「っ……わかってるよ！現実だろ！クソッ！」

「……?ね、ねえ！」

「？」

「ユウスケと薫がないんだけど……」

沈黙。

「く、クウガになれたんだから、戦いにいったんじゃ？」

「そう言えば…この世界で…お友達がいるって…言ってた…よ？」

「じゃあまさか！」

「桜ちゃん！桜ちゃん！」

「お願い！返事をして！桜ちゃん！」

トライチエイサーを走らせるユウスケと薫、途中何度グロンギをあ

しらったかわからない。

二人は必死に桜の名前を叫び続ける。最悪のイメージだけは浮かべない様にしながら・・・

「桜ちゃん、両親と一緒に買い物に行くって言ってたんだ。

たぶん家族でいくんだからスーパーとかじゃなくてデパートだと思っ
思う。」

そう言っつてユウスケは一番近いデパートにやってくる。

そこは既にデパートと呼ぶには余りにも酷く崩壊していた。だがおかげでグロンギ達は全くいない。

ユウスケはトライチェイサーを走らせデパート内を探索していく。外装は剥がされており、青い空が見えていた。

「っ！今・・・泣き声が聞こえた！」

トライチェイサーを乗り捨てて声がした方向へ二人は走る。

「うええええええん!!」

「桜ちゃん!」

「桜あああ!」

薫が桜に飛びつく。薫に気付くと桜はさらに大声で泣きじゃくる。

「!」

ユウスケは気付く。

桜の両親が瓦礫に埋もれていたのだ、優しそうな母親、初めて見るが寛大そうな父親。

二人は崩れた瓦礫に埋もれている、顔色は悪いが死んではないようだ。

しかし、このままにしておけば確実に死ぬだろう

「へ、変身!」

白いクウガになるユウスケ、必死に瓦礫を退かそうとするが・・・
うまくはいかない。

「ダメなのか・・・ダメなのか！くそおおおおおおお！」

変身を解きユウスケはうずくまる。

すでに虚しさや悔しさで頭がおかしくなりそうだった。
瓦礫さえ退かせない自分がとてもちっぽけに思える。

「おとうさん！おがあざん！」

顔をぐしゃぐしゃにして桜は泣きつづける。数時間前まではあんなに笑顔だったのに...

「ユウスケ...」

「え？」

薫の声が震えている。ユウスケからは背中しか見えないが、きっと...

「これが...世界が私たちに架した運命なのか...な？」

「.....」

なにも答えられない。なにか言おうとしてもそれが正しいのか分か

らなくて口を閉じる。

「だとしたら・・・」

薫はゆっくりと振り向く。見たくないと言顔を背けようとするが、視線が外れなかった。

「悲しいね・・・」

薫もまた涙をながす。最初は静かに泣いていたが、ついに桜と一緒に大きな声で泣き始めた。

「くうっ…っ あああああ！」

もう二度と、薫には泣いて欲しくなかった。

笑っていてほしかった。

薫を泣かせない、薫の姉が事故で亡くなった時、泣き続ける薫になんにもしてやれなかった。

だからもう今度こそ泣かせない。

そう誓ったのに、今自分の目の前で二人が泣いている。

「うくう！」

急に桜が静かになる。薫が不思議に思っただけだと見ると……

「え……？」

桜の首には糸が巻きついていていた。

いや、腕、足、胴体。

それら全てに糸があった。

食い込んでいない為、そこまできつくはないだろうが

「なんで……」

「お…ねえ　きゃあああああああっ！」

「「桜ちゃんッ！」」

糸は桜を持ち上げ引き離す。

ユウスケは糸の出所を探った、すると、この間のクモ男がいるではないか。

「ククククク、悪いな。人間は全て殺す事になっている、この少女も例外ではない」

いつの間にかグロンギは人の言葉を覚えていた。クモ男は桜を抱えるとその首に爪を突きたてる。

「やめろおおおッッ！！」

こんな時五代さんならどうしてた？

五代さんならどう返していた？

決まってる、変身して戦う！
でもダメだ！おれは・・・

「くくっ、いいだろう。」

「え？」

「今から10分後にこの娘を殺す。場所はこの近くの教会、助けに来なければいけない。ククク」

そう言っつてクモ男は桜を抱えたまま消えて行った。

「そん…な。は、早く助けにつ！司とか・・・」

「10分じゃ合わない…あいつ等はソレが分かってるんだ。おれじや勝てない事を知ってる。」

あいつ等希望だけ与えておいてそれを潰すのが目的なんだろうさ
…」

「そ、そんなあ……」

薫はボロボロと涙をこぼす。

また…なのか、ユウスケは拳を握り締める。

五代さんッ、おれどうすれば　！

『誰かの涙は見たくない』

ふと、五代の言葉が脳裏に浮かぶ。

「……」

昔、薫に向けて言った言葉、いや、正確には言葉にしてはいないが
心の中でずっと思っていた言葉

「薫が泣いてるのは見たくない」

「……え？」

今日、桜にもらった飴の味を思い出す。

「そうか、そうなんだな……」

ずっと、五代雄介にならなければいけないと思っていた。

だが、それじゃ意味はない。だっておれは五代さんじゃないんだから

『誰かの』

もつと根本的な・・・事を思い出す。

今のおれじゃ五代さんのハードルは越えられない。

だったらもつとハードルを下げるんだ…大切な事をおもいだせ！

おれは確かにクウガに変身はできる。

だけど本当におれはクウガ…いや、仮面ライダーになれたんだろうか？

「薰・・・」

「え？」

いや、違う。

ずっと五代さんの真似をすればいいと思っていたただけだ。

五代さんの『誰か』と、おれの『誰か』は全然違う。

おれの『誰か』は誰も思い浮べてなかった。

ただの言い訳だ。

同じ理由ですらない。

なら考えろっ、おれはそもそも『誰の』笑顔を守りたいんだよッッ！

ドクンツと胸が鳴る。

その一瞬だけ目の前に視えた

赤い…

戦士

第13話 「理由」(後書き)

明日、明後日は…まあ、分かりませんが
更新が厳しいので今日中に二話あげておきたいですね

次もよろしく！

第14話 「二人」

「おれが行ったらずくに助けを呼んでくれ」

「行くつて…教会!？」

そう言つてユウスケはトライチエイサーにまたがる。

「し、死んじゃうわ!」

「それでも・・・」

ユウスケは薫に笑いかける。

「泣いて欲しくない人がいるから…」

「待つ」

トライチエイサーで走り去るユウスケ。

「そんな…ユウスケ…! ツ!」

薫は助けを呼ぶ為に携帯を取り出す。しかしその時、二つの声が薫

の耳を貫いた。

「「その必要はないよ」「

「?」

刹那、桜の両親の動きを封じていた瓦礫の山が消し飛んだ。

だが両親に怪我は無い。

瓦礫だけが文字通り消し飛んだのだ。

「さあ、こちらのお二人を運んで差し上げるんだ」
『ゲストは丁重に扱ってね』

突如現れたのはクワガタの形をした小さなマシン、しかしその小さなマシンは桜の両親を担ぎ上げ、空へと飛んでいく。

「君達の学校に連れて行つたよ、知っているかな？あそこの保健室には治療マシンがあるんだよ？」

『私達からのささやかなプレゼントよ！受け取ってね？』

薫が振り向くと、そこには体はシンメトリーだが色がアシンメトリーの人物が立っていた。

「だ、ダブル！」

司から聞いていたダブル。ゼノンとフルーラの二人組みだ

「あ……ありがとう」

『お礼は後でいいわ。それより今は教会に行くほうがいいのではないかしらっ？』

「そ、そうだ！ユウスケ！」

ダブルは小さく笑うと指を鳴らす。すると、どこからともなく巨大な車が現れ薫の目の前に止まる。

乗れって事？薫はダブルに視線を送る。

ダブルは頷くと、また小さく笑うのであった。

「決意無き者に覚醒は訪れない」

「え？」

「言葉ではどうとでも言えるわ、思いの強さが力になるの。彼は…悟ったのかしら？」

ドン、と言う音と共に教会の扉が勢いよく開いた。

「来たか、リント」

「ほう…成る程、先日のリントか」

「……………」

教会の中には四人のグロンギがいた。

先日逃げたクモ、イカ、ハチ。

それに加えバツタもいる。

そしてその奥には桜が気を失って倒れていた

「おれさあ」

ユウスケは白のクウガ、グロージングへと変身する。

「ずっと…迷ってたんだ」

それぞれのグロンギは戦闘態勢に入る。それでも尚、クウガは言葉を続けた。

「世界を守るとか、人を救うとか…分からないんだよね」

肩に鋭い痛みが走る。

見ると針が刺さっていた、だが恐怖は無い。

「だ…からさっ…今はまず「誰」とかじゃなくて大切な友達とかグッ！」

イカが炎を纏った墨を発射してくる。

それはクウガの腹部に着弾し、猛烈な痛みと衝撃を走らせる。

「ぐう…友達とかさあっ！好きな…人の為にッ！」

クウガは走り出す。もはやこれは戦いですらない、殺し合いなのだろう。

「うらあ ああああああッ！…！」

決して綺麗とはいえない戦い方。

無茶苦茶に殴ったり、相手の足を掴んだり、

とにかく無茶苦茶だった。当然すぐに形成は逆転される。

「ぐわあッッ！」

グロンギに弾かれ変身が解かれてしまう。

「あぐうア…は、ははは！何度だって…変身して…やるよっ！」

「泣き叫んで命乞いでもすると思えば…

もついい、死ね」

八千男がユウスケに照準を合わせる。と、その時、また扉の開く音がした。

「ユウスケっ！」

「薫!？」

八千男は標的を薫に変え針を発射する。

しかし薫はそれを紙一重でよけ、もう一度ユウスケの名前を呼んだ。

その言葉がユウスケの目に再び光を灯らせる!

「さて!まずはコイツから血祭りにしてやる!」

クモ男はユウスケの首を掴むと、締め上げる。

ユウスケは苦痛に顔を歪めたが、

すぐに、

しっかりと

笑った。

「薰！おれは…さ、ずっと五代さんみたいに、ヒーローにならなくちゃいけないって思ってた！」

人を助ける仮面ライダークウガ！でも…違うんだよ、違ったんだよ！」

「そのシチュエーションは揃ったよ！」

「今こそ覚醒の時よきたのよ！」

突如、教会の上層部から声が聞こえる。

グロンギ達、ユウスケがそこを見るとゼノンとフルーラがこちらを見ていた。

「小野寺ユウスケ！場面はクウガ、五代と同じだ！」

「教会での覚醒！すばらしいわ！」

二人はユウスケに微笑みかける。

しかしユウスケはゆっくりと首をふった。

「違うんだよ…五代さんと一緒じゃ意味無いんだっ！五代さんになるうとしちゃ駄目なんだ！」

ユウスケは力強く声を上げる。

「おれは！こんな奴等の為に！これ以上誰かの涙は見たくない……とかッ！」

ユウスケの心音がこちらにまで聞こえてきそうだった。

クモ男はユウスケを殺そうとするが、なぜか出来ない。
殺気とはちがう、何かにさえぎられている様で

「皆に笑顔でいて欲しい……とかあッ！」

そんなカツコいい事は言えない！おれは何もかも弱いから！

だけどっ！だけどおおおおー！」

「くッ!?!」

この瞬間、クモ男、ズ・グムン・バは確かな恐怖を感じた。

殺そうとするが殺せないっ!

そのジレンマがより恐怖をリアルなものへ変える!

このままでは危険だとッッ!

「せめておれが!せめておれの知っている人達にはこんな事で泣いてほしくない!」

ユウスケはクモ男の腕を掴む。

「おれは弱いかも知れない!

五代さんみたいにはなれないかもしれないッ!

だけどなアああッ!おれの好きな人たちを泣かせるっていうなら
・・・」

ユウスケはベルトを出現させる。

誰かの為に戦う英雄でなく、まずはそこに居る人の為に。

五代ではなく自分としての決意。

その自分なりの解釈が精神にアクセルをかけ、グロージングからの脱却を果たす！

祝福を！邪悪なる者あらば、希望の霊石を身に付け、炎の如く邪悪を打ち倒す戦士あり！

「なれた！マイティフォーム！」

「ウツ！」

ズ・グムン・バの手を引き離す。

あの時はできなかつたが今は楽にできる！

それだけじゃない、体が軽くなり、反撃してきたズ・グムン・バの軌道が手にとるように分かった。

「おらアッ！！」

「ぐおおお！！」

一発殴る。あの時は効いていなかったのに、ズ・ Gum・バは今物凄く勢いで吹き飛んだ。

「うおおおおおッ！」

驚くグロンギ達を尻目にズ・ Gum・バ一点に狙いを絞る。

「これでッ！」

「ヒッ！」

クモ男の肩を掴む。そしてそのまま至近距離でのとび蹴りを叩き込むッ！

「終わりだッ！」

「ぐっ！ワアアアアアアッ！」

炎を纏ってさらにズ・ Gum・バは後ずさる。

そして蹴った所にクウガの紋章が浮かび上がる。それをズ・ Gum・バは信じられないといった表情で見る！

何故ッ？先程までその男はサンドバッグだった筈！？

それなのに負ける！？

「馬鹿な・・・こんな、こんな事がアアアアアアアアアア！」

爆発。その衝撃で他のグロンギ達も我に帰る。
油断すれば・・・殺されるッ！

「お、おのれえッ！」

「早く殺せ！奴は危険だッ！」

バツタ、イカ、ハチがクウガを取り囲む。

バツタは動きが素早く、クウガに攻撃しては離れ、
また攻撃をする連続。

クウガも応戦しようとするが、スピードが速い上にイカの墨が動き
を封じる。

しかもこの墨は中々に威力があり、当たれば仰け反らずにはいられ
ない程の衝撃だった。

そして一定時間おきに飛んでくる針、攻撃しているハチは飛翔して
攻撃があたらない。

クウガは未だ圧倒的不利な状況だった。

「くそッ!」

薫はそれをただ見ている事しかできない、そんな状況に理不尽さを感じる。

「どうしてユウスケだけが苦しまなくっちゃいけないのよ!」

「本当にそう思うのかい?」

「!」

後ろを振り向くといつのまにかゼノン達がいる。

「空野薫、あなたは既に舞台にあがるチケットをお持ちのはずだわ。覚えていないかしら?」

「え・・・？」

「くくく、ボク等は君を傍観者とは思っていない。

君はいつでも舞台上に上がれるのさ、なんのためにチケットを渡したと思っっているんだい？」

薫の体に衝撃がはしる。

「邪悪なる者あらば、その技を無に帰し、流水の如く邪悪を薙ぎ払う戦士あり…クスクス」

「そう…か！そうだ！なんで気がつかなかったんだろう！」

薫は自らの指に輝く指輪を撫でた。それを見て二人はニヤリと笑う。イメージリング。それは彼らが薫に渡したモノ

「ゼノン君！コレの使い方って分かる？」

「念じればいいだけさ。そうすれば念じたものに姿を変えられる」

「でもね気をつけて、命ある者には姿は変えられないわ、

それにビルとかそう言う巨大な物も無理、あくまで貴女が精神力が保つ範囲のものでないとダメ」

「上等っ！ありがとうね！」

そして走り出した。クウガの所へ！

「ユウスケっ！」

「かつ、薫！？あ、危ない！きちやダメ・・・」

薫はグロンギの攻撃を掻き分けて薫がクウガに抱きつく。

「女も殺せっ！」

「クッ！」

クウガは薫をかばう様に立つ。だが薫は逃げるどころか逆にクウガに詰め寄った。

「薫！お前何やって！」

「ユウスケ！私をッ、つかいなさい！」

「は？」

「へっ、変身！」

薫の体が光り輝く。そしてみるみる姿を変えていき、綺麗な装飾のロッドに変わった。

「へ？へ？うええええええ！？」

『いいから！早く！アンタ、司から話聞いたんでしょ！クウガの！』

「・・・あ！」

針が飛んでくる。が、クウガはロッドで素早く弾いた。

「…痛い？」

『全然！早く！』

「ああ！超変身！」

ベルトが青く光ったと思うと、クウガの色もまた青に変わる。変身したときにクウガの情報がある程度頭に入ってきた。だからこ

そ変わる。ドラゴンへ！

スピードに特化したドラゴンフォーム。

クウガは周りの物で武器を精製しなければならなかった。だが薫の力があればそれはとても楽になる。

薫の姿はクウガの力でドラゴンロッドへと変わった。

「くっ！」

バッタの所まで一気にジャンプ、先程は早いと思っていたバッタもドラゴンになると遅く感じる。

墨も、針も避けるのが楽に感じた。

「止めだッ！」

「又アアああッ！」

ロッドで渾身の一突きを決める。キックと同じく打ち込んだ所に紋章が現れ、バッタは爆散する。

「くそっ！貴様は何なんだ！」

イカ男が無茶苦茶に墨を連射してくる。その様子を滑稽だとゼノン

達は笑った。

「邪悪なる者あらば、鋼の鎧を身に付け、地割れの如く邪悪を斬り裂く戦士あり」

「薰！」

『分かってる！』

『「超変身！」』

紫のクウガ、タイタンフォームに変わる。

防御が格段にあがり、墨を喰らってもなにも感じない、

クウガは剣に姿を変えた薰を構え、

ゆっくりとイカ男の方に歩いていく。

その姿は

まさに、

処刑人

「来るな！来るなアアア！」

イカは墨を撃ちまくるがクウガの足取りが止まる事はない。

「グツ！又ウウアアアアア！」

爆煙が巻き起こりクウガの姿を隠す。

イカ、メ・ギイガ・ギはクウガを倒したと油断する。

しかし

「ゴオオオツッ！」

腹部から剣が生える。いや、クウガの持っていた剣がメ・ギイガ・ギを貫いたのだ。

「コツチはな…遊びじゃないんだよ」

『あんたらがゲームの道具としてしか見てない私達にもねえ、人生つてもんがあんのよ！』

「人間を…」

『「なめるな」』

「ゴツッ！！ガアアアアアアアアアア！！」

クウガが剣を引き抜くとイカは爆発する。

「ヒッ！」

八ちは自分に勝ち目は無いと悟ったのか上空に飛翔し逃走をはかった。

「さあ、クライマックスを！
邪悪なる者あらば、その姿を彼方より知りて、疾風の如く邪悪を
射抜く戦士あり！」

「薫、ペガサスだ」
「はい！」

『「超変身！」』

薫は自らを銃に変身させる。緑のクウガ、ペガサスフォーム。
視覚、聴力が上がり、集中していてもユウスケの実力では三十秒を
超えると能力がコントロールできなくなってしまう

「見える……」

ハチは既に豆粒程のサイズまで小さくなっていたが、クウガには関
係無い。
ペガサスボウガンへ精錬させた薫を引き絞る。

「ブラスト・・・ペガサスッ！」

風の弓矢が八手を捉える。断末魔さえ上げることなく八手は木っ端微塵に砕けた。

「やった・・・！」

『勝ったのね！』

「ああ！やったんだよおれ達！！」

変身を解く二人。

ゼノンとフルーラは惜しめない拍手を彼らに浴びせるのだった

第14話 「二人」(後書き)

ええ、もちろんユウスケはやる時はやる男ですよ

次の始めに多分ちょっとした説明入れると思います。

ここまでお付き合いどうもです！次回もよろしく！

第15話 「破壊」(前書き)

この小野寺クウガをかるくまとめますと

ドラゴン

空中で一度だけ好きな方向にジャンプできます

ペガサス

三十秒を超えると能力が制御できなくなり、
強制変身解除+3時間変身不能となります

今現在ユウスケが変われるフォームはグローイングを除いて
マイティ、ドラゴン、ペガサス、タイタンです

では本編どうぞ！

第15話 「破壊」

「おめでとう、素晴らしかったよ」

「おめでとう！素晴らしかったわ！」

ゼノンとフルーラが賞賛の拍手を送っていた。

ゼノンは桜を抱えていて、二人はすぐに駆け寄る。

桜は気絶しているものの外傷は見られず、健康そうだった。ユウスケと薫はホッと胸をなでおろす

「見事クウガに覚醒したようだね、見てごらん。影が戻っている」

その言葉通りユウスケの影はユウスケ本人の物へと戻っていた。

「ははは、まだまだ醜い戦い方だけどね。これから頑張るよ」

ユウスケは自嘲ぎみに笑う。しかし意外な事にゼノン達は真剣な表情でそれを否定した。

思わずユウスケは目を丸くする。

「あら！何を言っているのかしら！

あなたの信念は立派だったわ。

それを笑う者の方がよほど滑稽よ。先程の貴方はとてもカッコよかったわ！」

「その通りさユウスケ、君は強い。もちろん薫、君もね」

「蛍や蝶、カブト虫の幼虫をご存知かしら？」

最初は不細工でも成長すれば誰もが認め求めるようになるわ。あなた達も同じよ、これから成長すればいいの」

「あ、ありがとう！」

なんだ。司はウザイとか言ってたけどむしろ全然いい奴じゃないか！そう二人は思う。

「さあ、ユウスケ、薫！君達にはまだやらなければならない事がある。そうだろう！」

二人は頷き合う。

「桜ちゃんは私たちが責任をもって学校へお送りするわ。

さあ貴方達は舞台の幕に本当のフィナーレをお送りしなければ！」

「ゼノン君、フルーラちゃん！ありが
」

「あ！ゼノン！」

いきなりフルーラが何かを思い出したかのような顔をする。
ユウスケ達は大事な話かと身を強張らせた。

「さっきユウスケにカッコいいと言ったけど、アレはゼノンの
億分の一程度だからね？」

「「「……は？」」」

「そつだったのかい！あははは！いやー実は少しへこんでいたんだ
」

「私はゼノン以外の男になんか興味はないわ！
ユウスケはゼノンに比べればカスの様なものなの！ゼノンはどう
？」

「わかっているよフルーラ。
ボクも君以外の女性なんかアウトオブ眼中さ。薫？正直、耳クソ
と見分けがつかないね」

「ゼノン……」

「フルーラ……」

「ねえユウスケ……」

「ん……？」

走るトライチェイサー。二人の表情はどこか曇ってる。

「やっぱりさ、少し……うん、けっこうウザかったね……」

「ああ、いや、かなり……うん。」

「ユウスケは……私と耳クソの見分け……つく？」

「……………」

「おい、黙るな」

「ぐわあ！」

『ククク！そんなものなのか貴様の力は』

「うるせえ・・・な」 『アタックライド　　ブラスト！』

大いなる闇は小さく笑い指を鳴らす。

すると黒い風が巻き起こり、デイケイドの銃弾を吹き飛ばした。

「くっ、グロンギ達の儀式で現れただけの事はあるか…クウガは三回見たけどお前みたいなの見た事ないぜ」

『デイケイド・・・と言ったか？』

「っ！」

大いなる闇が一瞬でデイケイドの眼前に移動する。

そして一、二発拳を叩き込むとさらに言葉を続けた

『貴様も私ももしかしたら世界にとって、有害な物なのかもしれんな…ククク』

「はあ？ 訳わかんねえ！」 『アタックライド スラッシュ！』

ブツカーを剣に変えて切りかかる、
しかしそれも軽くないなされ逆にカウンターを決められてしまう。

「ぐお・・・」

司は内心焦っていた。ン・ガミオ・ゼダ。自らを大いなる闇と名乗ったそいつは、まだ生まれたばかりなのだ。すなわち人間で言うならば赤ん坊、倒すなら今しかない。
しかしその実力はもやは明確、ディケイドは時間がたつにつれて不利になっていくばかり。

二人が戦っているのは崩れかけたビルへのリポート。そしてその下では電王が無数のグロンギ達と戦っていた。

「むんツ！はっ！」

アックスフォームは自慢の斧でグロンギ達を次々に葬っていく。
しかし空中にいるグロンギ達には対抗できず、キンタロスは渋々紫のボタンを押した。

「やったー！ぼくの出番だあ！」 『GUN・FORM』

ガンフォームに変わる電王。

ステップを踏みながら銃で次々にグロンギを撃ち落していく、しかし地上にもまだまだグロンギ達は残っている。銃と言つ性質上あまり乱戦は向かない様で・・・

「あーあ、もつと遊びたかったのに！んもー！」

『ROD・FORM』

リュウタロスは渋々ウラタロスに交代する。

ロッドフォームはクスリと笑い、ロッドを振り回した。

「さあて…そろそろ決めるかな」 『FULL CHARGE』

ライダーパスをベルトにかざし、エネルギーを集中させる。

「ハッ！」

電王は地面にロッドを突き刺す。

するとロッドは地面に吸い込まれるように消え、代わりに巨大な六角形の魔方陣を展開させた。

魔方陣の中にいるグロンギ達は皆動きが止まり、苦しそうにもがく。

どうやら魔方陣に拘束されているようだ。

電王はまた軽く笑うとその場で踵落としを繰り返した。
その結果、魔方陣はガラスの様に割れ、グロンギ達は衝撃で一気に爆発して消滅する。

「ふう、やっぱり僕ってつよ　　ってうわあああ！」

いきなり空から黒い巨大な弾丸が降ってきて、地面にあたり爆発。
その爆風で電王は吹き飛び、同時に変身も解けてしまう。

『だっ、大丈夫良太郎？』
「う、うん・・・あ！」

弾丸だと思っていたのは闇の炎に覆われたディケイドだった。

さすがにあの高さから落ちたのだから苦しそうにうめいている。

「いっつ……くそっ！」

『ククク！破壊者よ、その程度ではこの大いなる闇は崩せぬぞ』

大いなる闇は両手にエネルギーを集中させる。

「逃げてディケイド！」

良太郎が立ち上がるうとしたが、足に痛みを感じ立ち上がれない。どうやら先程の爆発で足を怪我してしまったようだ。

「うっ……あ、ああ」

『死ね！』

立ち上がるうとするディケイドに闇のエネルギーが襲い掛かる。ヘリポートから地面まではすこし距離がある為、避けようとするれば避けたが体が麻痺して動けなかった。

あと二十秒程で着弾するだろう、ディケイドは避けるのを止め防御の姿勢をとった。

そして、そこにバイクの音が響き渡る。

「ちょっと待ったああああ！」

「ユウスケ（さん）薫（さん）！」

「『超変身！』」

ドラゴンフォームになり猛スピードでデイケイドの前に走っていく。

そして着弾、物凄い爆発がおこり良太郎は思わず目を瞑った。

『ほう……耐えるのか』

ディケイドを庇うようにしてタイタンフォームが立つ。

「ユウスケ！お前変身できたんだな！」

「ああ、おれには決意が足りなかったんだ。
五代さんの真似をすればいいと思ってた。

でも今は違う。今はおれはおれの決意で、大切な人の為に戦う！」

『又ウツ！貴様等……何故戦うのだ？

リント共を守る為か？だとしたら実におろかな選択だな！

リント……人間など守る価値など皆無！

自らの利欲の為、他の者をおとしめ、争いを絶やさないと低俗な生き物よ！

いらんだ！この世界を支配するのは我々グロンギだけでいい！』

「それでも…それでも笑っていて欲しい人がいる！」

『何いい！』

「泣いて欲しくない人がいる！」

確かに人間はお前等から見たら馬鹿な生き物かもしれないさ！

でもおれ達は生きてるんだ！

その人生のなかで出会った大切な人が…笑っていられる為に、おれは戦う！

その人たちの笑顔を守る為にっ！」

「人間が皆腐つてると思ったら大間違いよ！」

たしかにアンタの言ってる事は正しいかも知れないわ。

でもね、

十人中九人が腐つてても一人が輝いていたらその時点でアンタの考えを否定しなきゃならない！

その一人が幸せに死ぬるまで、世界は、人間は滅びちゃいけない！

私たちはこの世界でその一人に出会った！だからアンタのやる事を全力で邪魔させてもらうわ！」

『又ウウツ!』

「ははっ、お前ら…」

「じゃあそうだな、俺は、こいつ等が俺達の笑顔を守ってくれるって言うんなら…」

俺はこいつ等の笑顔を守る!」

『何!?!』

「知ってるか?こいつ等の笑顔、悪くないぜ」

「ははっ、何だよそれ、ははは」

「ま、悪い気はしないけどね」

ライドブッカーが光り、中からカードが飛び出してくる。

それは無地になっていたクウガのカード、だが今は確かにクウガが描かれている。

『き、貴様等！一体何者だ！？』

「仮面ライダーダークウガ！」

「……の武器！」

ディケイドは開放されたカードをベルトに装填させる。

「俺は破壊者なんだろう？ だったら俺は
ライド 』 『ファイナルフォーム

』！』

「この世界の涙を破壊する！」 『クククウガ！』

クウガの体が光り輝くと、同時に姿が変化していく。それは巨大なクワガタの様な姿だった。

第15話 「破壊」(後書き)

最近、喉の調子が悪いですわ

皆さんも健康には気をつけて

では次もよろしく!

第16話 「強者」(前書き)

いづれクロスオーバーとかもやりたいですね

ではどうござい…

第16話 「強者」

『おわっ！何だこれ！』

「クウガゴウラムだ、俺もお前も能力は頭の中に入ってきただろ？
後は好きな様に動け！」

『分かった！薫！』

「うっしや！」

薫は銃に変身し、ゴウラムの背中に乗る（？）

それは乗ると言うよりセットと言ったほうが近いが……

『良太郎、僕等はどうする？』

「まかせよう……多分コレは彼等の戦いだから」
そう言って良太郎達はゆっくりと下がっていった。

『フン！茶番はもういい！消えろおおおお！』

大いなる闇はヘリポートを引き剥がし、クウガたちの方へと投げつける。

巨大なヘリポートは圧倒的だが、ゴウラムは恐れることなく突っ込んでいった。

『うおおおおおおおおおおおお！』

ゴウラムの角がヘリポートを真つ二つに引き裂く。

大いなる闇はそれを見ても表情を変えることなく、尚も闇のエネルギーを発射していく

しかしそれもゴウラムは弾くか受け止めて、大いなる闇の所へと着実に突き進む！

『変身！』

屋上へ着くとゴウラムからクウガに変身する。

薫は銃のままベルトにセットされて、とりあえずは安心だろう。

『ふん・・・』

「・・・」

ヘリポートが剥がされた屋上はボロボロだが、なんとかその形を保っていた。

そこにクウガと大いなる闇は互いに対峙する。

時間が止まったかと錯覚するほどの沈黙がながれ、

やがてクウガが走り出した。

「はああッ!!」

『ゼアッ!』

クウガの拳を、大いなる闇は楽々と受け止める。直感的に悟る実力の差、しかしクウガは攻撃を止めない。

「超変身!」

ドラゴンフォームに変わり素早いロッド攻撃を仕掛ける。しかしコレも先程と同様すぐに見切られ、反撃を受けてしまう。

「ぐあつう……」

『無駄だ……あきらめる！』

「あきらめるのは…死んでからでいい！超変身！」

タイタンフォームに変わるクウガ

『馬鹿な奴だ！ ムツ？』

大いなる闇は素早く黒い障壁を展開させる。するとそこに無数の銃弾が浴びせられた。

「ちっ！」

屋上の入り口からデイケイドが姿を見せた。

「おっと、卑怯なんて言うなよ！お前等だってグロンギの大群で襲ってきただろっが！」

『ふん、貴様等程度、何人増えようが同じ事よ!』

「言ってくれるな!」

ブッカーをソードにかえて切りかかり、クウガもまたタイタンソードで応戦する。

『無駄だアツ!』

闇のエネルギーを爆発させ、二人に発射する。

クウガは剣を投げ、

ディケイドを守るように前に立ち、攻撃を真っ向から受けた。

「ユウスケ!」

「タイタンの硬さをなめてもらっちゃ困るなあ!・・・グウっ!」

『ハハハハ! 終わりだ!』

と、その時、

大いなる闇の視界が真つ暗に変わる。

何が起こったのか？

余りにも唐突で大いなる闇は攻撃を止めてしまった。
だが、すぐに理解する、

誰かに目をふさがれたという事にっ！

「だーれだっ！」

暗黒の視界で確かに聞こえる声と足に走る衝撃、

『あの時！剣を投げたのはこの為かアアアアっ！』

薫は全身の力を込めてで大いなる闇のバランスを崩す。
一瞬でしかなかったが、それと同時にディケイドの剣が深く腹部に突き刺さった。

『ぐっつ・・・があああ！』

薫はジャンプで二人を飛び越えると同時に剣に変身し、
そしてクウガの手に納まる。

「うおおおおおおおおおおおお！」

叫び、クウガは走り出す！

『グオオオオオオツツ！』

カラミティタイタン！
タイタンソードが大いなる闇を貫く！

『あ・・・グッ・・・ガフツ！』

黒い血を流しながらも、大いなる闇は二人の剣をしっかりと掴んだ。

『終わらん・・・ぞおおおッ！』

突如黒い嵐が巻き起こり、クウガやディケイドをビルごと吹き飛ばす！

巨大なビルだったが、黒い嵐によってその形はバラバラに変わってしまった。

「うっおおお！？」

崩れ落ちる瓦礫の山、大いなる闇はその中でクウガの姿を発見する。

『死ぬがいいッ！』

大いなる闇はクウガの所まで一気に飛翔し、その首を掴んだ。

『死　　ッ　　ッ　　・・・』

ふと、腰の方に目をやる。

そして気付く

ベルトが…変わっていると言っ事にッッ！

『貴様！っ破壊者ッッ！』

「正解だ！」

光と共にクウガはディケイドに戻る。

カメンライド、

ベルトでしか本物と偽者を判断できない。

大いなる闇もまたクウガとディケイドを勘違いしてしまったのだ。

では、本物は!?

「本物は・・・どこだと思っ?」

『何っ!　ぐわッ!』

背後からの衝撃、振り返ればクウガゴウラムが大いなる闇をしつかりと掴んでいた。

ディケイドはそれを確認すると、カードをベルトに放り込む。

『ファイナル・アタックライド　ククククウガ!』

ゴウラムの角が光る。

大いなる闇は危険を感じ、必死の抵抗に入るがどんなにもがいてもゴウラムは大いなる闇を離さない!

『くッ!　何故離れんっ!』

『離さない様にしてるからだっ!お前はココで終わりなんだよ!』

「ああ!」『ファイナル・アタックライド　』

先に地面へ着地したディケイド。自らもまた必殺技を発動させた。

『ディディディディケイド!』

ディケイドとゴウラムの間にホログラムカードが出現していく。重力を無視するが、ホログラムカードに吸い寄せられて行く為、斜め上に飛び蹴りができる様になっている。

「うオオオオオオオツツ!!!!」

『はあああああああッッ!』

『ぐっおおおおお!』

「『やあああああああああああああッッ!!!!!』」

ゴウラムとディケイドのダブルアタック。

ディケイドアサルトが直撃する。

「リントオオオ……見事だ……闇が……破壊されるぞ……ッ、ガアアアアアアッ……」

大いなる闇は両手を空に伸ばし、そして爆発するのだった。

第16話 「強者」(後書き)

F F R時はF A Rのカード1枚で個別必殺
2枚で協力必殺が発動されます

では！次もよろしく！

第17話 「世界」(前書き)

ヒーローと言う事で虎兎を見てるんですが面白いですね

折り紙とキッドちゃん、リンリンコンビの活躍を期待してますww

第17話 「世界」

あれから二日後、町はボロボロだったが、今は少しずつ前の姿を取り戻していた。

グロンギ達も全て消え去り、平和な時が再びやってこようとしている。

「兄貴！ただいまー」

「翼さん！」

「あ、ユウスケ、薫ちゃん！」

校庭でジュースを飲んでいた所、二人の姿を確認する。

「お別れはしてきたかい？」

「ああ、できればもう少しいたかったけどね」

ユウスケと薫ちゃんはこの二日間桜ちゃんと一緒に過ごしていた。

桜ちゃんの両親はすこし入院すればいいだけで、命に別状は無いようだ。

でも桜ちゃんが寂しがるといけないから二人には家に行ってもらっていた。

二人も乗り気だったし、桜ちゃんとはいい時間を過ごしてきたみたいだ。

「絵が・・・変わったんだって？」

私は頷く。

じつは今日の朝、放送室の電子黒板の絵柄が変わった、

おそらくそんなにしない内に別の世界へ移動する・・・と言う考察から二人には午前中の内に帰ってきてもらった。

「そう言えばさ、薫ちゃんはクウガを見ていたのかい？」

聞けばその指輪の使い方がクウガの為にと言えるらしかったから」

薫ちゃんは顔を赤くして下を向いてしまった。そしてゴニョゴニョとなにか呟く。

「いやあ…私も、
その…」

ユウスケの力になりたかったから…司にクウガの話何回も…聞いて」

成る程、でも結果的には薫ちゃんはユウスケにとって大切なパートナーになったんだから、それは凄い事だと思う。

「ははっ、薫…」

ユウスケが右手を薫ちゃんに差し出した。

「これからも一緒にたたかってくれる？」

「え！あ！あははは、もちろんオーケーオーケー、ハハハ！」

薫ちゃんは恥ずかしそうにその手を握る。

そう言えば昔に比べて薫ちゃんは大分笑うようになったようだ。

その原因の一つにユウスケがいるなら、兄として素直に喜べる

「おにいちゃん！おねえちゃん！」

「え？」

ふと声かして私たちは振り向く。

なんと校庭の向こうには桜ちゃんが立っていた！

「え？おれたちが見えてる？」

「いや・・・多分それは無いと思うけど・・・」

「また会おうねえー！」

桜ちゃんはニツコリと笑って手を振った。

ユウスケと薫ちゃんは、親指を立ててにっこりと笑う。

「あ・・・」

学校の周りが光りで満たされる。空間移動が始まったんだ・・・

「そう言えばさ、次はだれが選ばれたんだ？」

「ああ・・・それは」

「無理はするなよ」

「分かってるよ兄さん」

巨が自分の影を見ながら苦笑する。

先程までの自分の影でなく、今は仮面ライダーキバとしての姿があった。

電子黒板には闇夜に浮かぶ月と、交差する二つの旗が写っている。巨は深呼吸して椅子に座った。

「巨君…」

「大丈夫さ里奈ちゃん。ボクは…大丈夫」

光が晴れていく。巨は震える手を隠して、静かに笑った。

第17話 「世界」(後書き)

ちよつと次の世界の話を整理する為に

2〜3日くらい更新をお休みするかもしれない
すみません！

第18話 番外編 皆でクツキング！（前書き）

はい、と言うわけで番外編です

正直、ライダー全く関係ないですww

第18話 番外編 皆でクッキング！

「え？お祝い？」

「うん、ユウスケや薫ちゃんが無事に变身できたお祝いみたいなモノさ」

「へー、だから皆いないのね」

そう言つて薫は辺りを見回す。いつもは賑やかなクラスだが、今は静かですこし寂しげだ。

「皆ユウスケ達の為にグループで手作りの料理を作るみたいだよ。だから薫ちゃん達はどの料理が一番おいしかったか決めて欲しいんだ。」

「まあ、別にいいけど」

「普通にやるのはつまらないって言ってね、一番のグループには景品があるんだよ」

「成る程、ははん！おもしろそうね」

今頃、調理室でどんな事が起こっているのやら、薫はそんな想像してニヤつくのだった。

「はい、と言うわけで司会の聖 巨と」

「野村里奈です！」

「さてと、今回はユウスケさんと薫さんの為に料理を、くじ引きで決めたグループで作っていく訳ですが…」

そう言いながら巨は後ろの冷蔵庫を指差した。

「見事二人の舌を満足させたチームには、この世界でしか買えない！
有名スイーツショップのケーキをプレゼントします！」

ウオオオオオオオオツツ！！

「凄い迫力だね皆さん……」

「糖分に飢えてるからね、皆」

と、言うわけで。二人は開始を告げるホイッスルを勢い良く吹いた！

「「ではっ、始めっ！」」

司、椿、咲夜、アキラ、双護チーム

「で、皆料理の腕前はどの程度なんだ？俺は正直あんまりやっ
た事
ないんだ」

「はあ……」

その言葉に椿は深くため息をつく。

「な、何だよ……」

「司ちゃんよ、今は男も料理ができて何ぼの時代なんだぜよ？
いわゆる嗜み？

それはライフ？」

「は…はあ」

「つまり何がいいたいんだ貴様は」

咲夜がイライラしながら問いかける。椿はやれやれと前髪をかき上
げて笑った。

「俺の中学時代のあだ名は『現代に蘇ってしまった鉄人』って言う

んだぜ？」

そう言つて椿は何かを取り出す。

「ほう、マイ包丁という訳か」

「ご名答、双護まさかお前も？」

「ふッ、料理は良くやるんでね」

成る程ね、と二人はニヤニヤ笑い合う。

「ふふっ、本格的ですね」

「鉄人ねえ……」

「まあ得意なのに越した事は無い。アキラ、咲夜はどうだ？」

「す、すみません。私もあまり」

「私の祖父は料亭をやっていたんだ。ワタシも多少嗜んでいる」

おお、勝ったんじゃないかコレは。
司の頭には最速勝利の二文字が浮かびあがる。

他のチームがどうかは知らないがこのチームのステータスは中々に高い様だ。

司は自分のくじ運の良さに笑いが出るのであった。

「よし、じゃあ何を作る？」

「オムライスとスープだな。ま、プロの腕前を…」

椿はそう言って卵にひびを入れる。

そしてニヤリと笑い。片手でボウルの上へと持って行く。

「おお！出来るのか！」

「当たり前だろうが！見せてやるよッ！」

パキンと気持ちのいい音がして卵はボウルへと落下する。

ぐちゃぐちゃに崩れた黄身と殻を混ぜながら…

「え？」

「……………」

椿は何も言わずに卵の殻を取り除く作業へと移るのであった。

同じく料理を嗜むと言う双護も、人参の皮剥きができてない。なんか身までどンドン削っていつてる。

「だああああッ！咲夜さんよお！

お前何回調味料間違えてんだよッ！

何ですか？アレですか？

今さら属性付けですかぁー？

無理無理！無理なんだよ！

今さらドジっ娘なんて狙ってもお前の『人間凶器』のタグは消せないんですう！」

「黙れ、鉄人（失笑）が！

偉そうに語っておいてそれか？マイ包丁が泣いてるぞーお！」

「は、はぁ！？こここれはアレだよ、ちょ、ちょっと調子が悪いだけですよww」

「元からそんな腕ないのだろうが！」「旨いんば」「全巻よんだからって調子に乗ってるのではないのかー？」

「う、うるせえよっ！料亭とか言ってたくせにお前も似たようなもんじゃねえか！」

「くっ、今日は…その…たまたま調子が…」

「はいはいッ！皆さんー！」

ここに馬鹿にした男と同じこと言ってる人がいますよー！」

「ちょっとそこー、リアルファイトしないでくださーい！」

巨が半ば予想通りと言った顔で笛を吹く。

椿と咲夜は少し納得いかないようだったが渋々元の作業に戻った。

「くっ、俺は駄目みたいだスマンっ。双護、お前に任せるぜッッ」

椿はふらふらと双護の肩に手を置く。双護は分かったと静かに笑い、冷蔵庫へと向かった。

「見てみるよ司、あの双護の後ろ姿を・・・」

「はあ」

「あれは間違いなく料理人、そう本物の後姿だ。

オーラが違うね、うん。アイツはもしかすると将来その道で生きていくかもな。」

「ふ、ふうん・・・」

そうなのか？いや全然分からん。あ、双護が戻ってきた…

「あれ？」

俺はてつきり材料を持ってくるもんだと思ってたんだが双護はなにか赤い袋？みたいなモノを持って帰ってきた。

椿は気づいてないようだが…

何か嫌な予感が…

「ふっ、待たせたな。七分だけ待っていてくれ、直ぐに決着をつける」

「何て頼もしい言葉なんだオイっ！双護、マジ双護！」

「……」

双護はその赤い袋、『本格派チャーハンZ』を皿へと移し、慣れた手つきでレンジのメモリをセットする。

「……え？」

「・・・やっぱな」

真っ白になった椿が我に返ったのは七分後、チンツと言うおなじみの音がした時だった。

双護は出来上がりを満足そうに確認すると、出来たぞと、これまたドヤ顔でスプーンを添えた。

「ふむ、なかなかいい出来だ」

「え...やだ、え？ちよつとやだッ。

何？え？いや、こわいこわいこわい！

え？

嘘！？

何、何なの？これ、料理なの？

これできるからって料理できちゃっつって言っっちゃっの？嘘！怖い怖い！怖いッ！

「ああ、やはり旨いぞ！最高だ！」

「え？やだ、しかも何で食べてんの？

あれ？これユウスケと薫に食わせるモノ作ってるんじゃないの？
っけ？

なのに何で当たり前の様に食ってんの？

え？あれ？

コレ俺が間違ってるの？

嫌だ、怖い怖い怖い！

分からない、分からない！

いやあああああああああ！」

・ 完食した双護とパニックになる椿。また塩と砂糖を間違えた咲夜・

「まともな奴はいねえええええのかあああッ！」

終わった、最悪だ。他のチームはなんかもう後半に入ろうとしてるのに俺達はスタートすらしてない！

終わった！俺は自らのくじ運のなさを恨む！

「皆さん！落ち着きましよう！」

そこに一筋の光ッ！

「あ、アキラ！」

「まだカレーくらいなら作れるのではないでしょうか？
皆さん、ここは力を合わせて頑張りましよう！」

ま、眩しい！光輝いて見えるぞアキラが！

「ああ！そつだ・・・な」

ふと、鼻に香るカレーの香り

「あ・・・」

真志達のチームが作っているのは

「カレー……」

アキラを見る。あ、目を逸らされた…

「おいつ、司！」

「ん！？どうした」

椿が真剣な表情でこちらを見てくる。瞬間、俺は悟る。

「成る程な」

俺達はニヤリと笑った。

「奥の手…だな」

真志、友里、拓真、我夢、良太郎チーム

「うん！とってもおいしいっ！」

「よしよし、もうちょっとで完成だ」

元から料理がうまい真志と友里。

そこに拓真達のサポートが加わり、完璧とも言えるカレーが完成しようとしていた。

だが、そこに…

「ん？椿？」

「コレクツテモイイカナ？」

「は？」

椿はズボつ、と鍋の中に顔を突っ込み、カレーを物凄い勢いですす
る。

数分後には鍋の中は空へと変わった。

「な、なにすんのよーッ！せっかく作ったのにー！！」

「・・・そうだな、お前ら頑張ってたな」

「だが私は謝らない」

「椿コノヤロオオツツ!!」

「おおお落ち着いて友里ちゃん!また作ればいいじゃないか!ね?」

野良犬の様に吼える友里を鼻で笑うと椿は司の元へと戻る。

「お前もなかなかの悪だな椿よ」

「いえいえ、破壊者様には敗北いたしますよ。」

まさかこんな作戦を思いつくとは…この椿、恐ろしさで未だに心が震えております。

まさか敵のカレーを漫画の様なノリで平らげるなど…」

「そしてソレを簡単にやってのける主の実力、この破壊者たる私も感服せざるをえんわ！」

「伊達に二次元愛していませんから！」

アハハハハッ！ 二人は笑い合う。

「して、双護達は？」

「ああ、問題ない。今は材料を取りに行っている。ばれると面倒だからな」

「流石です破壊者様。

真志チームを潰せば我らがチームの勝利は固い。見て御覧なさいあのチームを」

ハナ、美歩、夏美、真由チーム

「ねえ、塩ってどのくらい入れればいいの？」

「そんなん適当でいいしょ！料理は直感だつてハナっち！」

「お塩に…お砂糖に…マヨネーズ！」

楽しそうに真由はそこらへんの調味料をぶち込んでいく。

「料理は隠し味が大切なんですよ！なんか入れましょ隠し味！」

「んー、隠し味かあ。ま、酢でいいんじゃない？」

「お酢ね、分かったわ」

どぼどぼとハナは酢を鍋にぶち込んだ。

「あ、全部入れちゃった。」

「いいっていいって気にしないー！甘さで消せばいいじゃん。砂糖入れればオツケ！」

ドサーツつと砂糖が大量に投下される。

「ところで…何…作ってるん…だっけ…？」

「おいしいものですよー、あ、わさび入れましょ、わさびー！」

「今頃絶対真似しないでね的なテロップが下に出てるであろうあの暴挙！」

もはやあのチームは居ないも同然。つつかユウスケ死ぬんじゃない？」

「となるとやはり問題は真志達と言う訳か、よかろうもう一回潰しておくか」

そう言うと司は戻ってきたアキラに詰め寄る

「え？お願いですか？…はあ、いやでも何でそんな事 わ、分
かりました。そこまで言うのなら…」

相原我夢は悩んでいた。料理をそんなにやらない自分が、味付けを任された事に…

「……よっ」

覚悟を決める。任された以上、責任がある。

同じチームメイト、先輩の役に立たなければと我夢は気合を入れた。

「・・・」

我夢はコインを取り出しソレを弾いた。

彼の癖だ、物事を決める時や軽く占いをする時によく使う。

「表ができれば成功する、裏が出れば50%で成功する！」

コインが手に戻ってきたとき、それは表を示す。

「よしっ！」

いい事がある。自分に自身を持って彼は味付けに取り掛かるため醤油を構えた。

「我夢君」

「あ、アキラさん!？」

いきなり呼びかけられて驚く我夢、いそいで醤油を入れるのを止めようとしたが…

「我夢…くん、その…ちょっといいですか？」

上目遣い、

さらに何かちょっとモジモジしているアキラを見て我夢の時間が止まる。

「ちょっと…伝えたいことがあって…」

「えっ!？」

な、なんだ…何なんだアキラさん!？

僕に伝えたい事がある？

し、しかも何かちょっと恥ずかしそうだぞっ…!!

こ、これは、これは…

まっ、まさかッ…

「駄目……ですか？」

いやいやいや駄目なんてモノじゃないですよアキラさん！

何だ！

何なんだこの可愛さは！

駄目だ！駄目です！いけませんアキラさんッ！

どうしてちょっと瞳が潤んでるんですかあ……！！

もっ、萌ええ……死ぬうっ！

「……あの！やっぱりなんでもないですッ！」

アキラはそう言って走り出す。

「あ！アキラさんっ！」

やっぱり今のはそう言う事なんだろうか！？

我夢の頭の中がお花畑になろうとした時、彼は大切な事に気づく。

手に持つてる醤油が全部空になっている。と言う事は…

「しまったあああああ！！」

鍋が真っ黒に変わっていたのを見て、我夢はその場に崩れ落ちたのだった。

「一応やっただんですが…なんの意味があっただんですか？」

「いやあ、アキラ。充分だ！」

不思議そうに首を傾げるアキラと汚い笑みを浮かべる司と椿

「でも流石にちょっと可哀想な事しちゃったな…」

「なあに、俺はアイツの恋を全力でサポートするつもりだお」

「本当かよ？」

「あつたりまえだろ、男なら約束は守るもんだぜWWWJK！」

「お前が言つと薄っぺらいんだが…」

「ところで他チーム潰したはいいけど肝心の俺らはどつすんのよ、のこり時間もうないけど…」

「……………」

「あれ？破壊者様？」

「考えてなかった…」

「許さない 絶対にだ」

「はい、とうとうわけでー！終了ー！ー！」

「さあ、いちぢらにはさっそく薫さんとユウスケさんに来てもらって
いますー！」

「ど、ど、ど。ま、ま。」

「ふふん、楽しみにしてるわよ」

「ではちっそくいつてみましょう！まず一品目、真志チームの料理は…」

「卵スープです！」

「…」

「…」

「…」

「あの…いや、嬉しいよ。嬉しいんだけど…ちょっと少ない？」

「いや、ホントいろんな事があって…すいませんでした！」

「いや、おいしいわよ。でもねちっぽちよつと少な」

「は、はい！では次は司ペアです！」

「司ペアの料理は…チャーハン！」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「いや、おいしいよ。だけどさ、何かどっかで同じもの食ったことがある気が…」

「ねえ、何でゴミ箱に冷凍商品の袋捨ててあるの？
しかも何でチャーハンなの？しかも」

「さ、最後は美歩チーム！」

「料理はから揚げだそうです！」

「・・・」

「・・・」

「さびいっしゅー！さびいっしゅー！さびいっしゅー！さびいっしゅー！」

「何コレ…グロンギ？」

「なんでから揚げなのに液体なのよ！うわっ！臭ッ！」

「いいからいつちやてよグイっとき。ホラホラ」

「ゆっ、ユウスケ！」

「えっ！おれ！？」

恐る恐るユウスケはソレを口にする。

パタリ・・・

いじりてまた一日が過ぎていくのであった。

第18話 番外編 皆でクツキング！（後書き）

美歩達の中から揚げはスタッフたちが後でおいしく頂きました

ここまでお付き合いありがとうございます！

次のキバ編もよろしく！

第19話 ベン マルカート・誰もいない街(前書き)

というわけで今回からキバ編です
ではどじろー！

第19話 ベン マルカート・誰もいない街

とり合えず俺達は、まずこの学校について調べる事にした。

亘と里奈にはキバの話を思い出す限り伝えておいたし、次は学校が気になる。

すでに真由と友里がある程度調べておいてくれたので、細かいところは探さずにすんだが。

まず、この学校は特別クラスを中心に構成されていた。

中心に中庭があり、保健室、放送室、食堂の一角、和室、シャワー室、トイレ。

そして理科室、図書室。

ある程度の教室・・・

つまり大体の教室はある。

四階建てで、校庭はすこし狭いがちゃんと備わっている。

しかもプールまであり、若干意図的なものを感じた。

それだけではない。どう言う原理か電気はちゃんと通っているし（そもそも俺達の携帯だってそうだ）、

食堂の巨大冷蔵庫、キッチンも使えるようになっていた。

驚く事に何故か掃除用具入れには札束が数え切れない程おいてある。

はつきり言って生活には困らないレベルの設備が備わっていると
訳だ。

しかし一番驚いたのはなんと言っても保健室の治療器具だった。
あきらかに俺達の世界じゃない道具。

まるでマンガにでも出てきそうな装置で、その効果も凄まじいもの
だった。

桜の両親もまたこの器具によって救われたと言ってもいい。

「あきらかに他の意思がはたらいっている感じだお…正直ガクブルで
す」

「まあ組んだ奴がいるのは事実だろうな。
尤もだれかは検討すらつかんが…」

「ゼノン達は何か知ってそうだな。」

「ああ。しかもあいつ等は治療器具を『プレゼント』したって言っ
てたらしい」

「つまり、彼らは……」

「真由ちゃん、プールあるんだって！今度泳ごうね！」

「うん…！楽しみ…」

「あ、じゃあ今度水着買いにいかない？」

「あ、いいね。そうしょ！そうしょ！」

「凄いお金！こ、これだけあればちょっと使っても・・・」

「駄目だ美穂！お金は大切に使わなければならないんだぞ
ちゃんと小遣い制でいくべきだ」

「わ、わかってるって咲夜！へへへ…ゴクリっ」

「ならよだれを吹け！よだれ！
き、汚い！汚い！」

「ちょ、馬鹿者！ワタシで拭くなッ！」

「あのーっ！ちょっとシリアスな雰囲気だしてもらっていいっすかねーっ！」

ある程度調べた所でいよいよ本題、街探索に入る。

だがまあ心配も多い。
クウガはまあ良かったが、キバはキバットがいないと変身できない筈だ、

この世界にキバットがいればいいが、いなかったらどうなるのだろう？

もしかしたらキバット無しでも変身できるのだろうか？

「気をつけてね・・・」

里奈が心配そうに巨を見詰める。

流石に連れて行く事は厳しかったので校庭で待機、という事になった。

幸い里奈は手当てがうまいので、救急箱を持って待ってもらった。

「うん・・・いつてくるよ」

そういつて俺とユウスケ&薫、良太郎に巨は学校をでる。

今回は前回の事もあるので戦える少人数で行く事にした。困った時は電話で助けを呼ぶ、そう言う事にする。

「じゃあ、行くか!」

しかし不気味な街だ…さつきから歩いてるが人一人いない。

商店街もそう、

公園も、

公民館にすら人はいなかった。

それどころか生活の気配すらしない。まるでこの街の人間が滅んでしまったのかと錯覚する。

「一体どうなってるの・・・
結構歩いてみたけど誰もいないわね」

「怪人に…襲われたとか？」

「怪人すらいないぞ…」

そんな事を言いつつ歩いていくと、道が二つに分かれていた。

片方は赤く、

片方は青い旗が刺さっている。

「ど、どうする?」

「別れるか、とり合えず・・・」

まあそうだな。この中で一番強いのは良太郎だから…

悪いが弟を頼めるか?」

「兄さん!? ちょ、恥ずかしいから! 止めてくれよ!」

「うん、わかったよ! 行こう巨君」

「う、うん!」

良太郎はぼんつと胸を叩き、巨を引っ張っていく。
まったく、どっちが年上なのやら…。

良太郎達は青い旗の道を選んだって事は・・・

「さて・・・と、じゃあ俺達は赤いほうだな」

ユウスケ達は頷く。

とまあ道を変えてみたものの相変わらず人の気配はなく、不気味な時間が続いていた。

「そういえばさ」

それに耐えられなくなったのだろうか、ユウスケは苦笑いを浮かべて話し出す。

「司のライダー・・・ディケイドだっけ？」

あれって全てのライダーになれるんだろ？

よくよく考えたらさ、かなり凄くないか？」

たしかに、すこし前の俺なら泣いて喜んだかも知れない。と言うか
実際嬉しい。

「まあな。でもなんかあの警官が殺されたのをみてさ・・・
やっぱり遊びじゃないんだなって思ってたな。」

それに変身したら知識が頭に流れ込んできてさ、
なんか変身できるのが当たり前みたいに感じちまうんだよなあ・・・」

「ふうん・・・」

「でもまあ、やっぱりカッコいいよなあ・・・」

俺はデイケイドのカードをくるくる回す。ま、ちょっとデザインは
奇抜だがなかなかカッコいいじゃないかデイケイド。

マゼンダが特に良いよな、マゼンダがな。いやマゼンダ的な配色の
中に光るマゼンダの輝きと言うかマゼンダな感じがマゼンダをより
マゼンダにマゼンダがマゼンダで・・・

「ピンクだけどね」

「・・・」

「止まれ！」

うっ！な、なんだ！？いきなり！

「民間人だな？なぜこんな所にいる！ここは立ち入り禁止だぞ！」

銃を持った男が俺達の前に現れる。

なんなんだ？人がいたと思ったらコレかよ！

「い、いやぁ・・・私らここが立ち入り禁止だなんて知らなくて！
あははは！」

「そそそそんなですよ、おれ達偶然この町を通りかかって・・・」

ナイスだコウスケ、薰！

これならなんの不自然も無い！ほらみる男も銃をしまって

・・・しまった

・・・ない。

「ふざけるな！立ち入り禁止区域は外部からの侵入は不可能だ・・・
はっ！さては貴様等アアア！人間だなッ？」

「え？ま、まあそうだけど・・・」

「人間！貴様等あああッ！」

男は銃を捨てて怪人、ファンガイアに変身する。

「おいおい、マジかよ！」

「わわわわ！お、落ち着いて！」

「ふざけるなアアア！」

ファンガイアは俺達に殴りかかってくる！
待て待て！

マジで何なんだよ！

きれすぎだろ！

「どどどどどする司！」

「くっ、仕方ない！」

変身しようとカードに手を伸ばした時、どこからか悲鳴のような声
がきこえ……

「待て！怪しい奴めえええ！」

「うわああああ」

「げっ！」

向こうから俺達とまったく同じ状況であろう巨達が走ってきた。
むこうも変な銃をもった女に追われている。

「！」

「！」

だが女とファンガイアは互いの姿を見た途端、
標的を俺達から双方の追っ手に変える。

もう訳が分からん！

「人間め！こんな姑息な手を使ってまで我等を滅ぼしたいか！」

「黙れファンガイア！コレは貴様等の作戦だろ！」

女はためらうことなく銃でファンガイアを撃ちまくる。

ファンガイアもまた、女を本気で殺そうとしているようにも見えた。

「な・・・なんか凄い事に・・・」

「どっちが悪かは分らんが…ケンカ両成敗だろ！」 『カメンライ
ド・デイケイド！』

「ケンカってレベルじゃない気がするよお」 『ROD・FORM』

俺と良太郎はそれぞれに変身する。

「俺はファンガイアを」

「ふふっ、オーケー」

俺はもみ合っている二人の中に飛び込んでいく。

とり合えずファンガイアを投げ飛ばし、女との距離を離す事にした。

「くっ！貴様、どっちの味方だ！」

「知るかよっ！ま・・・コレ、試してみるかな」
『カメンライド　クウガ！』

光が走りクウガの姿に変わった、
おお！やっぱりちよっとテンション上がる！

「はっ！てやっ！」

クウガの体は中々軽く、
やはりオールラウンダーとしては屈指の力があるな…多分、
まあ武器がないとフォームの力が活かせないってのは考え物だが。

「よっどー！」

「ああッ・・・！」

電王は相手の銃を釣り上げる。

女は悔しそうにしながらも勝ち目なしと踏んだのか踵を返して走り去って行った。

「はい司、プレゼントだよ」

「ああ、悪いな」『フォームライド・ペガサス!』

電王から銃を受け取ってフォームチェンジ。

なるほど、やはりクウガにとって薫の力は最高に相性がいいって事だな・・・

俺は武器がなけりゃ大変だ

「ライドブッカーたんが泣いとるぞ」

「あ……」

しかしこれは後に椿との会話で解消されるのだった。

第19話 ベン マルカート・誰もいない街(後書き)

キバはライダーのデザインが好きですね

あとやはり753は315ですねww

次もよろしく!

第20話 ラピダメンテ・いない君(前書き)

キバのOP映像が好きですね
雰囲気と言っかなんというか

第20話 ラビダメンテ・いない君

「くっ……ぬおおっ！」

とり合えず倒しちゃマズイだろうから足元に一発決めてやる。

威嚇射撃ってやつだ。

まあペガサスは精神力がみるみる削られていくから一発撃つだけが精一杯なんだが……
充分だろう。ファンガイアは小さく舌打ちをして俺達の前から姿を消す。

「全く……どうなってるんだよこの世界は」

「争ってみたいだったね、あの二人」

そう言いながら電王はベルトを外し、変身を解く。

争う？

そう言えば原作でも大体似た感じの構図だったな。

「お」

ポケットから音が鳴る、電話だ。
相手は……

夏ミカンか

「どづした夏ミカン？」

『夏美です！えっとですね、真志君が調べてくれたんですけど……』

『

夏ミカンの話によれば、この世界は現在ファンガイアと人間の種族間抗争が続いているらしい。

詳しくは分からなかったが、どうやら俺達の学校はファンガイアと人間の町の間。

つまり国境付近に転送されてしまった、

現在ここは戦場と化しているらしく、

さっきのやつ等は偵察の為に徘徊していた・・・ということか

『おまけにですね、人間側のリーダーはイクサで
ファンガイア側のリーダーはサガなんですよ、

この二人は今にも全面戦争をしかけようとしているとか!』

イクサとサガか・・・厄介だな。

「分かった、ありがとうな夏ミカン」

『だから!私は夏』

全部聞き終わる前に電話をきる。さて、どうするか

「とり合えず学校に帰ろうか、これからの事を考えよう」

「そうね、ここって結構ヤバイ位置だし・・・」

「兄さん・・・」

「大丈夫だ、きっと上手くいく」

俺達は歩き出した。だが・・・

クソッ！甘かった！ここまで情報網が早いとは！

「いたぞ！レジスタンスだ！」

「やっかいな芽は早めにつませてもらいますよ」

ファンガイア共はもう俺達を第三の敵勢勢力とみなしたのか、

ファンガイアでも上級のソーンとライオンを送り込んできやがった。

しかもあちらこちらで爆発がおきてる辺りを考えると人間とファンガイアの戦いも起こってるんだろっ。

とにかく良太郎に巨をまかせ、俺達は別ルートで学校に向かう。しかし向こうも上級ファンガイア、すぐに追いつかれてしまった。

「仕方ないなクソっ！変身！」 『カメンライド・ディケイド』

「変身っ！」

しばらく肉弾戦が続き、互角かと油断してたが、俺達には圧倒的に戦闘経験が足りない。
つまり戦闘センスが勝てないのだ。

「ぐわあっ！」

「うおっ！」

なんとか互角に戦っていたが、ついに押され始める。

「そつだ！つおおおお！」

クウガが二体に掴みかかる。あまり意味がない行為にも見えるが…

「司あッ！！」

そつか、そつ言う事か！

「ナイスだユウスケ！」 『ファイナル・フォームライド』
クウガ！』
ククク

「何！？」

「なんですか！」

「一気に決める！」 『ファイナル・アタックライド』
ガ』
ククククウ

ユウスケはクウガゴウラムに変身し、二体を猛スピードで上空に運んでいく。

『実力じゃ勝てなくてもなあ！根性じゃ負けない！』

「くっ！離れませんっ！」

「なんとというパワー！」

そのままゴウラムは二体を投げ飛ばした。
どこに行ったかは知らんが、これではらくは時間が稼げるだろう。

「あいつらが原作通りじゃなくて助かったぜ……」

『そんなにやばいのか？』

「ああ、三日缶酢漬けにしたボブをメアリーがマンモスで頂くよりヤバイ」

「……は？」

俺はゴウラムに掴まり、学校へと急いだ。

亘は走っていた。先程ファンガイアの集団に出くわし、良太郎は変身。
そして亘を逃がしたのだ。

幸い学校までは一本道、ここを真っ直ぐ走ればすぐに着く。

「・・・！」

何かが見えた。小さい・・・鳥？

虫？

それはヒョロヒョロと川原の方へと飛んでいく。

「・・・」

少し気になるが今はそれどころじゃない。

とにかく今は学校へ着く事だけを考え、走る。

「!?!?」

学校へは無事着いたが校庭に里奈の姿が無い。

教室にいるのかと我夢に連絡をとったが、教室にはいなかった。

「里奈ちゃん・・・？」

一応携帯にかけてみる。すると、

「なっ！」

里奈の着信音。可愛いメロディが聞こえた。

しかしそれは学校の外、亘は急いで音がする方向へ向かう。

「携帯が・・・」

携帯は道の隅に落ちていた。つまり里奈は学校の外に出たということだ！

「里奈ちゃん！」

亘は我夢にメールだけして学校の外へと飛び出した。自分は無力だが何もしないで待っているなんて無理だ！

亘はとり合えず川原に行く事を決める。

ここから川原までの道は、他のみちに比べて段差がすくない。

それにさっきの事もあってか亘の頭には真っ先に川原へ行くという結論がでたのだ。

「……っ！里奈ちゃん！里奈ちゃん！」

とり合えず名前を呼んではみたものの返事はない。
川原を降りていき橋の下へ向かったとき、

それはいた。

「き、キバット？」

草むらの影でキバットらしき生き物がぐったりとしていた。
原作のキバットとは色が違つが……

姿はキバットそのものに見える。

「だ、大丈夫か・・・？」

里奈の事は気になるが、キバットを放って置くこともできない。
なにせキバットは自分が変身できるかもしれない重要なキーキャラ
クターなのだから

・・・それに亘には弱っているキバットを見捨てて里奈を探す気
はなれなかった。

『・・・た』

「え？な・・・なんて？」

キバットは何かを呟く。

『腹減ったっす…』

「あ！ああ、お腹ね。

すこし待ってくれよ・・・たしか」

巨は今日の朝、美歩にもらったチョコバーを取り出してキバットに差し出す。

キバットはスンスンと臭いを嗅いだかと思うと、

勢い良くなぶりついた。

巨の手「じゅ」...

「ぎゃあああああああああ

第20話 ラピダメンテ・いない君（後書き）

お気に入りや評価してくださった方、ありがとうございます！
こんな感じですがこれからも頑張りたいです

では次もよろしく！

第21話 ラメンタビレ・亀裂と差別（前書き）

クラヒオーズでキバの技が変わってたのはショックでしたWW

第21話 ラメンタビレ・亀裂と差別

『巨さんってイイ人っスねー！オイラの恩人っすよー』

「そう・・・良かったよ・・・」

まだ手がヒリヒリする。巨は苦笑いを浮かべてそう答えた。

『オイラ、キバツトバツト四十五世って言うんです！よろしくっす
』！』

キバツトは巨の事をすっかり気に入ったらしく、さっきから周りをパタパタと飛びまわっている。

「四十五世？そんなに続いているんだな、三世ってどんな方だったの？」

『三世さんすか？たしか女性で賢かったらしいっす』

「・・・となるとココはキバ原作の世界じゃないのか…」

『でもね巨さん、オイラの悩みきいてもらえないっすか？』

「え？ああ、ごめんボクこれから人を・・・」

『実はつすね、』

「・・・（真由さんと同じにおいがするな）」

「オイラ達キバット族は代々この国の王に仕えるのが使命つした。」

「王？」

『そうつす、この国は王のおかげでそれはもう平和に保たれてきたんすよ。』

ファンガイアと人間は種族こそ違えども互いを尊重しあい、

今まで均衡をたもつてたんす』

「だけど今は・・・」

キバットは力なく着地する。その目には涙が浮かんでいた。

『そうなんす。実は・・・王が殺されたんす』

「！」

『しかも大臣は…犯人は人間である可能性が高いつて発表したんすよあ…』

「大臣？」

亘は若干怪しさを覚える。

だいたいこう言つのでそのへんのポジションが犯人つてのがお約束なんだけど・・・

『大臣は王の昔からのお友達です。だから皆その言葉を信じたんす』

ふうん・・・友達ね、まあじゃあ大丈夫か。

『勿論可能性つてだけっすから』

大臣も気にすることなく毎日を送れつていつてたんすけど…』

「一度先入観が入ってしまったえばなかなかソレを拭う事は難しいってヤツか」

キバットは頷く。

亘は昔ソレと似たような事を里奈に相談された事がある。
だからこそキバットの言っている事が素直に理解できたのだ。

『その日から少しずつ互いの仲が悪くなってきたんす・・・』

種族間抗争は前々からもちよつとはあつたんすけど、あくまでソレは少数派でした。

だけど今回は違いましたんす。差別が強くなりました』

差別・・・

亘は、脳裏に強く里奈の姿が浮かんでしまった事を強く後悔する。

違う

ボクは彼女を普通の女の子として接すると決めただろうが！

違う

違う違うっ！

『巨さん？どうしたんすか？』

「あーいや何でもないよ、続けて」

『例えばっすね、子供同士のケンカの際にファンガイアの子がやっぱり勝つんすよ。』

そしたら今までだったらどっちが悪いかーとか、

ケンカするほど仲がいい

とか、大人達も対処してたんすけど・・・あの日から』

『うちの子に触らないでよ化け物！』

『人間は本当に悪知恵がよく働くな！』

「たがいに不信感が爆発してしまった・・・」

「特に大人っすね・・・子供たちはまた遊ぼうとしても大人がソレを許さない。」

そういう険悪なムードが続いて

ついに事件がおこったんす』

「事件？」

「結婚を約束した一組のカップルがいたんす。でも男の方がファンガイア、女の方が人間だったんす。」

結婚を認めてくれていた互いの両親も急に反対して二人を引き裂こうとしてました…』

まさか…亘は息を呑む。キバットは察したのかこくりと頷いた。

『心中したんすよカップルは…』

普通はソレで目が覚めてくれると思ってたんすけど…

二人の両親の怒りは互いの種族に向けられて…
ついに全面的対立が始まりました。

秩序を守るはずの二本のベルトまで戦いの道具にされて…』

345

イクサとサガか…

『もう昔の様な平和は消え去ったんすよ！

大臣は必死に互いの種族間抗争を止め様としているみたいっすけどダメダメっす！

大臣は人間だからファンガイアに敵視されてますし、

大臣が王を殺したって噂まであるんすよ！

もうオイラどうしていいかわかんなくて！

うええええええん！』

キバットは泣き出してしまつ。

『昔はもっと楽しかったのに……うええええん！』

「他に……味方はないの？」

『え？あ……一応妹とアームドウエポンス達なら』

「いるんだね、じゃあそいつ等と早く合流して策を練るんだ。

ボクも微力だけど協力するからさ、
頑張つて元の平和を取り戻そう！」

「わ……巨さん！」

「だけどもまずボクは人を探さなくちゃいけない。
里奈って名前の女の子を。」

車椅子で…
見なかった？」

キバットは少し考えたが体を横に振った。

「そう…どこにいるんだ……」

『心配つスね…今ココは戦場と化してます。
アームド達も両方の種族から狙われてますから…早く見つけない
と！』

巨は頷きキバットをポケットの中にねじ込む。

里奈を探す、

争いを止める。

巨の心に不安と重圧が一気に押し寄せた。

果たしてそんな事ができるのだろうか、

争いを止めるなんてそんな事が・・・

「とにかく今は里奈ちゃんとアームドさん達を探そう」
『はいつす!』

大丈夫、巨はキバットと自分に向かってそう呟いた。

第21話 ラメンタビレ・亀裂と差別（後書き）

キバットってどのくらい種類いるんでしょうね？

では次もよろしく！

第22話 プレスティシモ・仕える者達(前書き)

部屋

暑すぎ

ワロタ・・・

第22話 プレスティシモ・仕える者達

巨がキバットと出会う少し前。

里奈は校庭で巨たちの帰りを待っていた。

夏美も一緒にいてくれたのでリラックスしていったが、

「わっ！」

「きゃ！」

いきなり目の前を傷だらけの怪人達が通りかかった。
向こうからはこちらを確認する事はできないが、コッチとしてはいきなりだったので思わず声をあげてしまう。

三体の怪人達は青、緑、紫と鮮やかな色彩だったが、
その色は赤黒い血でよごれている。

三体は苦しそうにうめきながら学校を離れていった。

「なんだか・・・苦しそうでしたね・・・」

里奈は救急箱を握り締め夏美を見詰める。

夏美は少し苦い顔をしたが、すぐに笑って胸を叩いた。

「助けに行きましょう！」

護衛は・・・自信ないですけど！誰かについてきてもらえば大丈夫です！」

「あ、あのっ！ありがとうございます！」

「ごめんなさい先輩達、私の我がままにつきあってもらっちゃって…」

「いいんですよ、この世界って完全な怪人はいないみたいですから、あのまま見過ごすのは私としてもどうかと思いますし」

「そつだぞ気にするな、
しかしよくついて来たな椿、感心だぞ」

「空気キャラってポジションも悪くないんだけど
流石になんかやっとかないとなあ…的なの。

つかまあそつ簡単に敵さんと遭遇なんて…」

「おい！貴様等！人間だな、こんな所で何をしている！」

「……ま、お約束っちゃお約束だわなww」

「逃げましょ！！」

夏美は里奈の車椅子を掴むとおもいつき走り出す。

「あっ！携帯が！」

その衝撃で里奈の携帯はポーチから落ちてしまった。

夏美は後で拾えば大丈夫ですと投げやりなコメントでごまかす。

「待てっ　　ごわっ！」

兵士の顔に咲夜の足がめり込んだ。兵士はそのまま崩れ落ち、気を失う。

「ふっ」

「ふっ、じゃねえよ！」

なにドヤ顔決めてんだお前！どうすんだコレ！」

真っ青になる椿だが、咲夜はあくまで冷静のようだ。

「ユウスケ達から電話があっただろう、

この世界で何が起こってるのかは知らんがおそらくは戦争に近いものだろう、

私達はどちらの味方にもなるつもりはない、つまりコレが手っ取り早いのだ」

「つまりの意味はよくわかんねえが・・・まあ今は早く光達を追う

のが先決だな」

里奈と夏美がしばらく進んでいると、先程の三体が路地裏で倒れているのが見えた。

356

「大丈夫ですか？」

里奈は恐る恐る声をかける。

「ぐっ……人間か」

三体の内、青い狼が素早く戦闘態勢に入った。他の二体は既に気を失っているようで、狼も足元がふらついている。

「大丈夫です、私達は敵じゃありません！信じてください！」

「信じ……られるわけ……が……」

狼はその場に倒れ、気を失う。

「そうとう傷が深いみたいですね。はやく治療しましょう」

「そうですね」

そう言って里奈は救急箱の蓋を開けた。

応急手当程度だがしないよりはかはマシだろう。
椿達もやってきて、四人で手当てを始める。

「治療中はおかしな事になっても対処できねえからな。気をつけな
いと」

「ピカチュウはおやつに入る訳ないだろ、真面目にやれ」

「言ってねえから！んな事ッ！お前こそ真面目にやれよ！」

「はいはい、しっかりやってください！」

「「すみません……」」

しばらくして三体が目を覚ました。

自分たちの体に巻かれた包帯と、
目の前にいる少女達の姿をみて、
本当に彼女達が敵では無いと確信する。

敵なら気絶している時に殺せばいいだけだろう。

『私も見てたけど本当に敵じゃないみたいよ』

狼の影から小さなコウモリが現れた。

『はい、キバーラよ、よろしくね』

「すまない、疑って・・・オレはガルル」

「いいんですよ、いろいろ大変な事になっているみたいですし」

『この国の事をしらないの？』

緑の魚人バツシャーも、紫のフランケン（？）ドツガも元気とは言えないが喋れるくらいには回復したようだ。

「私達は別の世界から来たんです。信じてもらえないかもしれませんが……」

「いや・・・信じるさ。お前達の目を見ればわかる」

そして四人はこの国で起こっている事を聞いた。

種族間抗争、

王の暗殺、

互いの差別・・・

「・・・」

里奈達は暫く何も言わずにソレを聞いていた。

人間とファンガイアの戦いは激化していく一方で、このままでは本格的な戦争になるだろうと

「それを止める方法はないんですか？」

「残念だが何も思い浮かばない。

我々の言葉では状況を変えることはおろか悪化させてしまう可能性が高い・・・」

再び皆沈黙する。

なんとかはしたいがガルルの言うとおり状況を悪化させる可能性が

高い、

いやほぼ確定だろう。

「……」

里奈は唇をぐつと噛んだ。

自分も体験したことがある差別の眼差し、
どんなに普通にしても自分に向けられるのは好奇や同情の目。

もちろんそれが不快で仕方ないと言う訳ではない。
私を気遣っての好意である為に仕方ないといつも心で割り切っていた。

だけどやはり普通に、
何の気負いもしないで生活できたらどんなに良かっただろうか？

自分の不器用さのせいで通行の妨げになったとき、
後ろ指をさされて馬鹿にされる時もあった。

車椅子にいたずらをされた時も多い、

そしてなによりも…自分の周りにいる人間が自分の事をどう思っているのか、

それが重圧になるときもあった…

『遊園地行くつよ！え？里奈ちゃん？ああ、あの子はいいよ。だつて』

過去の記憶が蘇る。

同時に心が張り裂けそうだった…

たまたま聞いてしまったクラスメイトの声。

どうしようもなく悲しくて苦しくて、…
だからその誘いをキツパリと断った旦、アキラ、我夢の三人にはとても嬉しくて、

申し訳なかった…

『里奈ちゃんだってボク達と何も変わらないだろ!』

「巨君・・・」

巨に言われた言葉、

それと同時に巨が学校にもどっているのではないかと思う。
自分がいなくなって焦っていたら…

「夏美先輩、携帯を貸してくれませんか？巨君に一回連絡を取りたいんです」

「あ、うん！そうですね、それがいいです」

そういつて夏美が携帯を取り出そうとしたときだった。

『あらあ…あねって、ヤバいんじゃないのお…』

キバーラの視線の先、こちらに向かって歩いてくる女性の姿が見えた。

第22話 プレスティシモ・仕える者達（後書き）

どうでもいいんですけど

かき氷のブルーハワイってなんなんですかねww

今だによくわかりません

好きですけどね

ここまでお付き合いありがとうございます
次もよろしく！

第23話 フォルティッシモ・せめてその定めだけでも（前書き）

オーズのコンボソングとかが集まったCDがでるみたいですね

皆さんの曲が好きですか？僕はラトラータですかね
つかシャウタの歌はまだですかねww

第23話 フォルティッシモ・せめてその定めだけでも

「おやおや、これはこれは王の側近の」

スーツを着た長身の女性は薄ら笑いを浮かべながらこちらにやってくる。

「・・・」

「ふふっ、傷だらけですねえ。王を殺した報いと知りなさい」

「なっ！違う！ぼく達は王様を殺してなんかない！」

バツシャーは女の言葉を全力で否定する。
しかし女は冷めた目でバツシャーを睨むと、視線を里奈達に移した。

「ふふふっ、人質とは汚い真似を…」

「ち、違いますよ！私たちはガルルさんたちに何にもされてません
！」

里奈はガルルを庇うように移動する。

しかし女には届いていないようで、それすらも強要されたのではないかと言われた。

「そうじゃないと言ってるだろう！」

ガール達は無実だ、どうしてそんなに疑うんだ!？」

咲夜はイライラしているのか、声を荒げて女に詰め寄る。

「こいつらが化け物だからに決まっていますでしょう? 危険分子は…」

女は手を後ろに回す。そして瞬間響く電子音。

『R・E・A・D・Y』

「なっ！」

「うふう、変身」

『F・i・s・t
o・o・c』

咲夜は危険を察知して後ろへ回避した、
女の前方には鎧が現れ、女と重なる。

そして女はイクサへと変身を遂げた。

「くっ、イクサ・・・」

「！、こいつが人間側のリーダーかよ！」

皆一斉に走り出す。

里奈達ならまだしもイクサはガルル達を殺す気だ。
止まるわけにはいかない。

「どうして？皆少し前までは幸せに暮らしてたんでしょ？」

里奈は必死にイクサに問いかける。しかし…

「時代は変わったのです。御嬢さん、今その化け物達から救ってあげますよ」

「そんな・・・どうして・・・」

ボロボロと里奈の目から涙がこぼれる。その涙でさえイクサには強
要されたものに映るのだろう。

「逃がしません、・・・?」

路地を曲がった時にイクサはガール達を見失う。

「・・・」

向こうは大人数だけが人もいる。
路地を曲がってから自分が彼らに追いつくまでに逃げるのは不可能
のはずだが…

「まあ・・・いいでしょう」

イクサは変身を解除すると、再び戦場へと歩き出した。

「・・・助かりましたクイーン」

「いえ、いいですよ。」

今まで大変でしたねガルル、ドツガ、バツシャー」

路地に逃げ込んだ一行を助けたのは王の妃、クイーンだった。

クイーンはいくつもの隠し小屋を作っており、その一つにかくまってもらったのだ。

「どうやら状況は悪化しているようですね…」

ビシヨップやポーンもファンガイア派として人間に敵対している状況にあります」

クイーンはどうやら里奈達の考えを分かってくれる人物らしく、安心できる人だった。

優しそうな女性だ、里奈は思わず見ほれてしまう。

「クイーン…その…無礼な質問かもしれませんが…
王を殺した犯人に検討は？」

「…残念ですが、全く…」

「そう…ですか」

「王様はどんな状態だったんですか？」

ガルルによれば王の死体を確認できたのはクイーンと大臣ぐらいらしい。

一般の民には情報だけだったそうだ。

「王は心臓を一突き。それで絶命していました…」

私は犯人が憎いです。

ですがソレが人間でもファンガイアでもその種族全体を怨もうなどとは思っていません。

たしかに種族間抗争は前々からありました。

それを収集できなかったのは私も王も嘆いていた事です…

しかしそれでも二つの種族は互いに支えあい笑いあえていたはず。今、この世界は間違っています…

互いが互いに疑いあう世界などに幸福などありえましようか…？」

クイーンは苦悩の表情を浮かべ外を見る。

クイーンは人間とファンガイア同士で争う事は間違っているとはっきり言った。

一方、亘は里奈とアームドモンスターを探すため街中を駆け回っていた。

しかし状況が状況だけになかなかうまくいかない。

「なかなか見つからないね」

『無事だといいんすけどねえ…』

そうやって探索していくと空地にやってきた。

そこにはなんと子供たちが遊んでいるではないか。

しかもキバットが言うには

四人いる子供たちの中で二人はファンガイアらしい。巨は急いで子供たちに駆け寄る。

「ここは危ない！はやくお家に帰るんだ！」

巨は子供達に帰宅を促すが子供たちはソレを聞かなかった。

「だって…ここじゃないと皆と遊べないんだもん」

『・・・！』

深く突き刺さる一言だった。

「おい、何をしている・・・！」

それと同時に後ろからファンガイア側のリーダー、サガが現れた。サガは遊んでいる二つの種族を確認すると人間側の子供たちに剣を向ける。

「おい！待ってよ！」

「む？貴様は人間か！おのれ、よくも子供たちを危険な目に！」

「違うだろ！子供達はそんな事望んでないんだよ！」

皆は一緒に遊びたいんだよ！なんでそんなに種族でいがみ合うんだよ、

人間が何した？

ファンガイアが何した？

いつも勝手に決めつけて、互いの話を聞こうともしない。

それでよく一方を蔑めるよな！呆れるよ！」

「人間は王を殺したに違いない！そんな種族など滅んでしまえばいいのだ！」

「だったらもしファンガイアが犯人だったらどうなるんだよ！」

全員、お前を含めて滅ぶのが正解なのか？

違うだろ！

人間だってそうじゃないのか！」

否定的な返事と共にサガは亘に切りかかる。

亘はソレをギリギリでかわすと、サガと距離をとった。

はやり戦う運命なのか・・・？

「いや…」

違う。そうだ、あきらめるな。

「キバット！」

『わ、巨さん！』

巨はキバットを構え呼吸を落ち着かせる。

「ボクにこの争いをすぐに止めるだけの力は無い。だけど」

このふざけた定めくらいは変える。

人間とファンガイアが殺し合う未来を築かせるな。

ボクには今、その力がある。

子供達の言葉を強引にはかき消させはしない、その言葉を主張させる力がある！

巨が想うのは…彼女の後ろ姿。

兄の後ろ姿、

従妹の後ろ姿。

そして皆の後ろ姿。

「ボクが、誰かの背中を押してあげる事はできる筈や」

『わ、巨さん…』

オイラに嘯ませるって事がどんなことか分かってます？

巨さんは戦わなくちゃいけないんすよ！』

巨は無言で頷く。

守る為でも傷つける為でもない。終わらせる為に。

そしてソレに呼応するかのよう闇の鎖が腰に巻かれ、弾けた。

「むっ！貴様それは！」

鎖はベルトへと姿を変える。巨は目を閉じてゆっくりと呟いた。

「キバット……」

『？』

「ボクに…力を貸してくれるかい？」

『はっ！ハイ！』

巨は笑顔で再び頷く。
そしてキバットに自らの手を差し出す、ソレにキバットは勢いよく
噛みついた。

『ガブーツ！』

「……変身！」

電子音に似た音と共に亘の姿は仮面ライダーへと姿を変えた。

「貴様あ…混血か！」

「…ボクは種族がどうかは関係ない！

外見は大きく違うかもしれないさ。

「だけどっ！ボクはっ…それでも魂は同じだと思ってる」

「戯言をおおおおおおおおおおおおお！」

サガの剣が鞭の様にしなり、キバに襲い掛かる。

だが、切りかかる剣を避け、得意の蹴りで応戦していく。

戦闘センスは圧倒的に低い、切り掛かるルートを予測してキバツトが亘に声をかけてくれる。

『亘さんっ！右っす！』

「ああ、ありがとう！」

「くっ！」

しっかりとガードを決めて蹴りを浴びせ続ける。

サガの変則的な剣筋には手こずったが、
キバットがしっかり巨を支えた事でサガを押し始める事ができた。

「ぐわっ！」

サガを吹き飛ばし、キバはベルトからホイッスルを取り出す。

『ウエエエイク・アアアアップ！』

キバットの掛け声とともにキバの足にあるカテナの封印が解かれる。
その力は強大。

ヘルズゲートが開放され、闇の力が辺りを夜へと変化させた。

「くっ、この力！やはり只者ではないかっ！」

サガもエネルギーを剣へと装填しキバに狙いを定める。

「はぁぁぁぁぁ…」

「終わりだっ！」

「はあっ！」

サガの剣をキバはサマーソルトキックで上空へと弾き飛ばす、それと同時にキバは空へ飛翔した。

巨大なエネルギーで形成された月とキバは重なり合い、幻想的な光景を作り上げる。

事実、サガはソレに見惚れていたのだ、剣の修正を加える事すら忘れるほど美しい月に！

『ダークネス・ムーンブレイク！』

「うおおおおおおおおおおお！」

「くっ、おおおおおおおお！」

直撃だった、サガはキバに蹴り押され後退していく。

そして壁に叩きつけられると同時にキバのエンブレムが出現し、衝撃を与える。

「っ……ぐあ……」

変身が解かれサガは気絶する。

巨は離れていた子供達を家に帰すと、サガを担いでファンガイア側の陣地へと向かった

「これは、キバ……」

「え？」

クイーンはキバの力を感じとり、それを説明する。
人間側でもなく、ファンガイア側でもない。調和のベルト

第三の仮面ライダー！

「という事は巨が変身したって事だな！やるじゃんかよ！」

「巨君……」

安堵とも不安ともつかないため息を里奈は流す。

「これで、巨君は戦いから逃げられなくなっただけですね……」

「ああ……だが巨も譲れぬ思いで変身したんだろう」

里奈は静かに頷いた。

「あ……うん！分かったよ……うん、またね」

『うれしそうっすね巨さん』

「ああ、里奈ちゃん達が無事だったんだ。キバットの妹達も無事み

「ただよ」

『ええ！本当ですかあー！』

巨とキバットは互いにはしゃぎ合う。

しかしその場所はファンガイアの町そのもの。

巨たちは無数のファンガイアに囲まれている。しかし攻撃はしてこない、

一応サガを運んできた手前、下手に攻撃はできないからだ

「う・・・つく」

サガは目を覚ます。

目の前の状況を瞬時に理解すると、サガはゆっくりとため息をついた。

「なにが目的だ？」

「人間側と和解してほしいんです」

「・・・嫌だと言ったら？」

「人間側にも交渉しに行くだけさ」

サガは暫く沈黙する。

「……少し、考えさせてくれ」

巨は頷く。巨自身すぐに答えてもらえるなどとは思っていないから

第23話 フォルティッシモ・せめてその定めだけでも（後書き）

クラヒのウエイクアップが好きです
なんかガシャーンっていうのがねww

では次もよろしく！

第24話 ブラヴラ コン・説得(前書き)

イクサは結構いろんな人が変身してるんですよ

一人強烈な人がいるせいで忘れそうだww

第24話　　ブラヴラ　　コン・説得

巨がサガと交渉している一方

「なんとか考え直してはくれんか？」

「嫌だよおじいちゃん、アイツらは野蛮な連中なんだ。

私たちがキングを殺したとか言ってきた…常識知らずもいいとこさ」

人間側の街、

そこに大臣とイクサが話し合っている。

大臣は孫でもあり人間側のリーダー、イクサを説得しようとしているのだ。

イクサとサガは王直属の護衛隊長であつた為に忠誠心も高い。

だからこそ勝手なことを言っている双方が許せなかった。

まして混血であるアームドモンスター達を犯人ではないかと疑っているため、説得も無駄の様だった。

「お前もサガ君とは仲良くやっていたらろっに…」

「昔は昔、サガもそれは分かっている筈だよ」

「今はまだ死人こそ出ていないが負傷者は出ている。このままでは引けに引けなくなるぞ」

イクサは少し苦い顔を浮かべる。

まだ心の片隅に後悔が残っているのだろう。

彼女はソレを否定するように首を振った。

大臣もまた一つため息をつく、

「・・・む？」

その時、何かの音が近づいてきた。音はどんどん二人がいる広場へ迫ってくる。

「うおおおッ！」

「！」

トライチェイサーがエンジン音と共に広場に現れる。
そこに乗っているのは小野寺ユウスケ。

「アンタがイクサだな！」

「……つまり、

貴方は私にあの汚らわしいファンガイアと和解しろと言っのです
ね」

「ああ、お願いだ。アンタも昔はファンガイアの事を毛嫌いしてな

「かつたはずだろ？」

イクサは目を閉じて沈黙した。

先程自分も同じことを考えていたから・・・

目の前の少年、ユウスケと言ったか。

この少年は人間とファンガイアの和解会議を開いてくれないかと言ってきた。

「・・・少年、私は君のことを知らない。」

ユウスケは目を丸くする。

そしてイクサは笑う。

心が迷っているのならいつそ体で決めてしまおうのも一興だろう

「つまりは私はお前をファンガイア側のスパイ。

餌として見ることができ、私にはお前を信用することなどできない！」

「・・・っ、ダメって事か？」

イクサは再びにやりと笑い、手を後ろに回す。同時に電子音。

『R・E・A・D・Y』

「そうしたい所だが私もそろそろこの状況に終止符を打ちたい」

『F・i・s・t　o・n』

イクサの目の前に鎧が現れる。

ユウスケもイクサが何を言っているのか、ようやく理解した！

「要は力ずくで連れて行けって事か・・・変身っ！」

「ふふっ、正解だ少年。…変身！」

同時に走り出すイクサとクウガ。

イクサは素早くクウガの足を払い地面へ叩きつける。

しかし、

クウガもソレをしっかりとガードしてすぐに反撃の蹴りをイクサへと叩き込む。

「ふ、ふははは！ファンガイアではないようだが、なかなか面白いな！」

「くっ！どつも！・・・ぐあっ！」

だがやはり、まだ戦闘経験が浅いためにクウガはイクサの攻撃をまともに受けてしまう。

しかしクウガの力、それがユウスケに圧倒的な力を与えるのだ。

戦いの中でクウガは確実に成長していく！

「うらアッ！」

「ちっ！」

クウガはイクサの攻撃を受け流し、拳を叩き込む。

さらに、よろけるイクサをしっかりと掴み、そのままとび蹴りをくらわせた。

「ぐうッ・・・！」

吹き飛ばイクサと、一気に距離を詰めるため走り出すクウガ。

このままもう少しダメージを与えてマイティキックを叩き込めば勝てる。

そう確信しクウガはスピードを上げた。

・・・が

「ふっ、ふははっ！」

「！」

笑うイクサ。瞬時に身の危険を感じつつも、もう止まることはできない！

「覚えておけ少年」

「くっ！」

止まろうとするがやはりスピードがありすぎる。クウガはもう逃げられない！

「切り札はっ
」

「・・・！」

「最後まで取っておくものだと言う事をっ！」

イクサの面部分が解放される。

それと同時に激しいエネルギーが溢れ、クウガを吹き飛ばした！

「ッ！あああああ！」

近くの柱に叩きつけられるクウガ。

そしてそれだけでは終わらなかった、イクサはどこから取り出した銃でクウガを打ちまくる。

その威力は高く、クウガを地面へと返さない！
柱に銃撃ではり付けにしているのだ

「くくく、イクサ・バーストモード。」

そしてイクサカリバーの威力はどうかなっ！」

イクサは銃撃をやめて接近戦に切り替える。

むろんクウガに抵抗する隙すら与えずにひたすらに切りつけた。

「ぐああああっ！」

クウガの体から火花が散る！

このまま攻撃を受け続ければクウガの負けは確実だろう。

「少年、理想を現実にかえるにはそれ相応の力、実力が必要なんだよ？」

イクサは攻撃を止め、クウガを持ち上げる。

「う・・・くっ」

「威勢だけじゃ現実はいえられない。残念だがこれが世界なんだよ」

そういつてイクサはクウガを思い切り投げ飛ばした。

「うわっ!」

「空中じゃ自由にぶっけなйдらろっ? 残念だがもうお終いだ」

イクサは最後の攻撃を決めるためにホイッスルを手にする。

そしてイクサは見た。

クウガの仮面の下

ユウスケの表情を…

「な…に?」

ユウスケは笑っていた！

その笑みは先程より、勝利を確信した表情に見える。

何故！？

混乱するイクサ、

そしてその声が…答えになる。

『そうね、私もそう思うわ。あと、さっきの言葉、そのまま貴女に返すから』

「悪いね、おれ…」

「いや！おれ達だって負けられないんだ！」

聞こえてくるはずはないのだが、女の声が聞こえた。

『「超変身！」』

「しまっ
」

ホイッスルが手から弾き飛ばされる。

なぜ？決まっている。

クウガが放った矢がホイッスルを打ち貫いたから！

「『超変身！』うおおおおおおおおお！』」

刹那、光るクウガ、現れし紫の戦士がこちらに向かってくる。

「うっ、うおおおおお！」

ヤツを近づけまいとイクサカリバーを乱射する。

しかし紫の戦士は全く止まらない、効いていないようだった。

それがイクサの焦りを加速させる事になる！

「うおりゃあああッ！！」

「ぐウウッ！」

タックルでイクサは逆に吹き飛ばされる。

そしてタイタンからマイティフォームに変わるクウガ、
もはや形成は完全に逆転していた。

「はあああああああッ！！！！」

足に紅蓮の炎を纏わせ走り出す。

一歩、

また一歩

地面を踏む度溢れる力！

そしてそれをイクサへと叩き込むっ！

「ぐわっあああっ！」

イクサの変身は解かれ、そのまま地面へと倒れた。

結果はクウガ、ユウスケと薫の勝利だ！

二人は変身を解くと、イクサに駆け寄る。

「ぐう…まさか、君も武器を持っていたとはね…
しかも、女の子かい…っ」

「ごめんなさいね、今まで黙ってた」

「でも、悪いけど約束は守ってもらおうよ、イクサさん！」

ユウスケはその手をイクサに差し出す。

「っ…あ、ああ。わかったよ、全く…とんだマジシャンだ君達は」

イクサは苦笑しながらもユウスケの手をしっかりと握ったのだった。

第24話 フラヴラ コン・説得(後書き)

戦闘の時とかに薫ちゃんは、銃に変身してユウスケの腰にぶら下がっています

そんなこんなで次もよろしく!

第25話 コン トウツタ ラ フォルツァ・里奈の想い(前書き)

すみません！

ちょっと明日は更新できないかもしれません

では25話とじつぞー！

第25話　コン トウツタ ラ フォルツァ・里奈の想い

ちなみに、そのころ司、ディケイドは・・・

「「「待てーッッ!」「」」

「ひいひい!」

クイーンを除くチエックメイトフォーがディケイドを追いかけている。
上級ファンガイアだけあってディケイドは戦うのをあきらめて必死に逃げていた。

405

「あはは!ねえねえ見てゼノン。ディケイドが必死になって逃げているわ!」

「おかしいわね!」

「ははっ、滑稽だねディケイド!」

「お、お前ら!頼む!助けてくれー!」

民家の屋根に二人が座っていた。ディケイドは駄目もとで助けを求めてみる

「嫌だよ逃げピンク。ボク達は君達にあまり関わってはいけないからね」

「おい、今なんつった？ピンクって言ったか？」

おい、

おい！

おいってッ！」

「うふふ、まあ頑張ってね逃げピンク。運が良かったらまた会いましょ」

そう言って二人は姿を消す。

「何しに来たんだ…あいつら…」

「」「逃げるなあああッ！」「」

「ひいひいっ！」

「で、どうなんだ話し合いはよ？」

「なーんかいまいちみたいだねえ…」

「ふうん・・・結局ダメなのかしら・・・」

モモタロス達が見守る中、ファンガイア陣と人間陣の話し合いが行われていた。

だがやはり両者の仲は最悪と言ってもよく、ついに険悪な雰囲気は爆発する。

「やはり低能なファンガイアでは話にならないようだな！」

「力なき人間が！ぶち殺してやる！」

一気に場を包む殺気の嵐。

良太郎はため息交じりにベルトを装着する、だがそのときだった。

「やめてくださいー！」

広場に響く少女の声。

あまりにも唐突だった為に皆一斉に沈黙する。

「……どうしてなんですか？」

悲しそうな表情で里奈は車椅子を押す。

ざわつき始める広場、

あまりの自然さに道を開けるファンガイアと人間。

「あなた達は…外見が違うから、

能力が違うから…異端とみなすんですか？」

「……」

「人間の皆さん。私は…」

そういつて里奈は手に力を込める。
立ち上がるうとしていいるのだ、

しかし当然ながらソレはかなわない。
里奈は力なく倒れ、地面に伏せる。

「あ…っ、…っっ！」

良太郎は走り出しそうになる心をぐっところえる。

今、自分が助けに行けば、里奈の覚悟さえ踏みにじることになるか
もしれないから。

「良太郎…」

ハナは良太郎の袖を軽くつまむ。

彼女もまた耐えているのだろう、良太郎はハナの手をそっと握った。

「大丈夫だよハナさん、今は里奈ちゃんの声を聞こう」
「…っん。そうね」

「……里奈ちゃん」

「私は…このとおり歩くことができません…、

ねえイクサさん。

歩くことのできない私は人間ですか？

体が皆と違う私は人外ですか!!」

「い…いや、違う。君は確かに人間だよ」

地面に伏せながらも里奈の目は確かにイクサをとらえていた。そのあまりの気迫にイクサも思わず息をのむ。

「どっしりですか?」

「えっ?」

里奈は腕にありったけの力を入れる。

しかし、どんなに頑張っても踏ん張っても足に力は無く、立ち上がることはなかった。

「どうしてって…君は人間だからに決まってるじゃないか
見た目も、中身だって…」

「私は…一人じゃ階段すら楽に上げません」

「・・・え？」

「着替えだって、

電車だって…

遊ぶことすら普通の人と同じにできません。

イクサさん、

貴女はファンガイアの人を人間よりも出来の悪い生き物と言った
そうですね…

でも、ファンガイアの皆さんはちゃんとできますよね、だったら

「

里奈はうつむきながらもはつきりと…

「だったら私は人間以下ですね」

「ちっ、ちがう！」

イクサは里奈を抱きかかえるようにして駆け寄る。

「君は体が…その、すこし皆と違うだけだろ？
それをそんな風に解釈するのは間違ってる。

君がそんなに考える必要はないんだよ。

私は君をそんな風に見たりはしていないよ、私は君を人間として

「

「じゃあ、私がファンガイアでも同じことが言えますか？」

「っっ！」

イクサは里奈から目をそらす…

事ができなかった。

逸らそうとするが目が、瞳が彼女を捉えて離さない。

「イクサさん…あなたは優しい人…」。

だからお願いします、どうか争いを止めてください」

「う…ああ…」

「人間の皆さん、ファンガイアの皆さん…昔を思い出して下さい。

あなた達は互いに助け合って生きてきた筈です。

考え方が違い争いが起きたかもしれません、

でもそれは同じ種族でもあり得る事でしょう？」

ファンガイア達、人間達はそれぞれ同族の顔を見合う。

「私たちは人間である前に生きてるんです、命があつて感情がある。」

思い出して…どんな過去でもいいです。

楽しいと感じた時に、隣にいたのは誰でしたか？

一緒に笑う時、ファンガイアも人間も関係なかったんじゃないですか？

大切なのは心でしょう？」

里奈は腕にありつた力の力を込めて身体を引きずる。腕はすでにボロボロで、見ている方が痛々しい程だった。

「私は…この足を枷と感じたことはないです。」

うつん、そう思った事もあります。いっぱい…でも否定してきました。

だって悲しい事もたくさんあつたけど嬉しいことも同じくらい、それ以上ありました！

その時私の隣で一緒に笑ってくれた人、

その人と私の心、気持ちは同じだとおもってます！

だからどうか種族で争うなんて悲しい事は止めてください！

私たちはヒトなんです、

ファンガイアだって人間だって同じ「心」を持ってるはずなんです！
す！」

「……………」

イクサは何も答えない。

しかしイクサは里奈を抱く手を放すことはなかった、

むしろ先程より強くしっかりと握っている。

「…………イクサよ、ファンガイアは楽しい時笑う、そして悲しい時

に泣く」

「ああ…そうだなサガ。人間は楽しい時に笑い、悲しい時に泣く」

二人は頷き合う。

「里奈、スマナイ。

ずっと目を背けていた、
心にかすかにあった種族の壁が私たちを遮断していたんだ」

「しかしソレは種族ではない、同族とて同じ…」

イクサは里奈を抱きかかえ車椅子へ連れて行く。

「今すぐにはできないかもしれない…だが約束しよう。
私たちは再びお互いに手を取り合える関係へと時を戻す事を」

「我々は愚かだったのだ、里奈…無知だった我らを許してくれ…」

イクサとサガは互いに頷きあう。

「戦いを止めよう。二つの種族の争いをまずは…」
「そうだな。まずはそこからだ」

里奈は涙を浮かべて優しく微笑む。

『つまらん、実につまらん』

「え？」

ふいに、そんな声が聞こえた。

再びざわつき始める群衆達、そしてそいつは人間側から現れる。
漆黒の鎧、禍々しくも気高さすら感じさせる一本角…

「ファンガイア・・・」

『女…余計なことを…』

濁って男か女かすら分からない声。

ファンガイアは手を掲げる、すると巨大な剣がソコに出現した。

「あ、危ない！」

『死ぬがいい』

ファンガイアは剣を里奈に向かって投げる。

イクサは里奈を抱えると、全速力で剣と距離をとった！

「やめる貴様！何をする！我々はこれ以上争う必要などないのだ！」
サガはファンガイアに詰め寄る。

しかしファンガイアはサガを突き飛ばし、エネルギー弾を乱射した。

「ぐっ、ああああああッッ！！」

『サガ、お前には失望したぞ。
もつすこし利口かと思っただが…』

「なんだと！？くあアアっ！」

『貴様がもっと人間を敵視すれば……』

ファンガイアはサガを蹴り飛ばすと淡々と言い放つ。

『王を殺したのはこの私、エルザドルだ』

第25話 コン トウツタ ラ フォルツァ・里奈の想い（後書き）

「ねえゼノン」

「どうしたんだいフルーラ？」

「ちょっと今回TORに似てないかしら」

「・・・思っても言っちゃ駄目だよ愛しのフルーラ」

「まあごめんなさい！」

「意味が分からなければそれでよし。

では、次もよろしく！・・・だそうだ」

第26話 テンペストーゾ・wake up(前書き)

ちよつとした事なんですけど

このサガはサガークで変身しません。

ただのベルトだと思ってください

別にサガークが嫌いな訳じゃないですよww
ではどうぞ！

第26話 テンペスト・ソ・wake up

「今・・・なんと聞いた？」

『聞こえなかったのか？王を殺したと言った』

あまりにも普通、

あまりにも希薄、

あまりにも虚無に語るエルザドル。

イクサ達もそのあまりの冷淡さに思考を麻痺させてしまう。

『私の計画ではもつと凄惨な状況になる筈だった。

人とファンガイアは憎しみ合い殺し合う、

そう、まさに地獄絵図と言ったところか？

しかしそれはかなわなんだ…

人に化け、ファンガイアとして舞台を滅茶苦茶にしてやるつもり
だったが…』

興が覚めた。

そういつてエルザドルはイクサの目の前に一瞬で移動する。

「なっ……」

『死ね』

エルザドルは小型ナイフを瞬時に出現させ、イクサの喉元を狙う！

「うオオオオオオオオオオツツツ！！」

だが、そこでガルルが飛び込んできた。

怒りからか目が血走っている！

「貴様が王を！王をおおおおおおおお！」

『つまりらん王だった。人とファンガイアは互いに助け合える？』

馬鹿が、ファンガイアなど所詮力だけの存在、
まして人間など生きる価値もなし」

「貴様さえいなければ！！くそっ おおおおおおお！！」

ガルルの攻撃をエルザドルは簡単に受け流す。
もやはエルザドルの瞳にガルルは映っていない。

瞳さえ虚無を見通していた

『つくづくつまらん奴らだ。呆れる』

濁った声でエルザドルは辺りを見回す。

エルザドルを攻撃しているのはもやはガルルだけではない、
バッシャーやドッグも駆けつけエルザドルを攻撃しているのだ。

にも関わらずエルザドルにはかすり傷さえついていない。

「くっ、なんでこんなに」

『……』

エルザドルはずっと手に持っていたナイフを投げた。里奈に向かって！

「！」

目をつぶる里奈。避けられない！彼女は襲い掛かるであろう痛みを備えて歯を食いしばった。

「……っ？」

しかし、痛みはない。
ガキンッと音がして目を開ける。

「大丈夫か！」

「あ……」

そこには見たこともないファンガイアがいた。それだけでない。人間の何人かも同じように里奈を庇っている。里奈は一瞬何が起こったのか分からずに、だらしなく口を開けたまま沈黙していた。

しかし気づく、皆が自分を守ってくれたのだ

「あのっ、ありがとう あ、ごめんなさい！」

「おじょうちゃん……」

すまねえな、

君みたいな子供にまでこの問題を抱えさせて……
俺たち大人よかガキどもの方がよっぽど賢かったぜ……ははっ
「

次々に里奈を庇おうと立ち上がる大人たち。
ソレを見てエルザドルは深いため息をつく。

『うん？何だ？』

昨日まで憎しみ合ったモノ共が少女一人守る為に団結する？

笑わせるなよファンガイアツ！

どうした？

昨日までお前らはその少女を憎しみの対象とでしか見ていなかったろう！

だったら、さあ！殺せ！殺すのだ！』

「なんでだろうなあ

お前を見てたらどれだけ自分たちが馬鹿だったのか思い知らされたよ、

おれ達はただのバカだった。

エゴだけで動いてた…大馬鹿野郎だ！」

「み、皆さん……」

次々と里奈を守るように立つ国民達。

『貴様は・・・ファンガイア...いや、人間でもない？何者だ』

「ああん？俺は俺よ！」

「皆！彼に続け！」

この一撃をきっかけにガルル達の攻撃もヒットするようになり、善戦をくりひろげる。

『ふん、無力な少女の声で随分良くやれたものだ』

何気に放った一言、しかしそれは里奈の心に深く突き刺さった

「...私、また何もできない・・・」

守られて・・・「じめんなさい！」

涙があふれる。

大人達もこれには何も言っただけなかつた。
安易な言葉では傷つけてしまっただけだ・・・

「私は…もっと…強くなりたい」

「ちがうよ里奈ちゃん・・・」

「！」

そっと肩に触れる手。里奈はソレが誰かを確認せずに呟く。

「……………えへへ、どつにもうまくいかないね」

「君は自分で歩けてるじゃないか」

「そう・・・かな。私まだ皆に迷惑かけて」

「人間ってさ・・・絶対誰かに毎日迷惑かけてるんだよ。」

里奈ちゃんはさ、兄さんよりはるかに迷惑の数、少ないよ」

「あはは…ありがとう、でも」

「でもは無しって言ったろ？」

君は特別扱いされたくないって言ってたっけ？

じゃあ自分だってそう振る舞わなきゃ。

あの時、君は自分の足を枷にしないっていっただろ？」

「で ごめん。ねえ？私自分で歩けてるかな？」

「里奈ちゃんは、自分の「足」で歩いてるよ。」

知ってるよボク、里奈ちゃんって結構決めたこと曲げるの嫌いだよね」

「う、うん・・・」

「だったら大丈夫、君はもう立派に歩いてるよ」

高速で何かガエルザドルに向かっていく。

それは素早い動きで相手を翻弄し、隙あらば魂心の一撃を決める！

『くっ、なんだ！』

『おおおおおおおおおっす！』

「キバット！」

ソレはその声に反応すると声の主に舞い戻っていく。

「里奈ちゃん、君は皆と同じなんだ」

「うん！ありがとう。回君！」

振り返る里奈、

そこには亘が変わらない笑顔で立っている。

亘はキバットに自らの腕を噛ませ、

もう一度里奈に微笑むと、キバットをベルトへと装着させた。

「イクサさん、サガさん。一緒に戦ってください!」

「ああ、もちろんだ。我々の償いの為にも」

「私達は立ち上がっていなかった。里奈のように自らの「足」で歩かなければ!」

「」「」変身!」「」

キバ、サガ、イクサはエルザドルに向かって駆け出す。

里奈は彼らの勝利を強く願うのだった

第26話 テンペストーゾ・wake up(後書き)

花粉がやばいです

まあそれほど酷いって訳じゃないですが…
皆さんも気をつけて。

では次もよろしく！

第27話　フィーネ・より良い未来を（前書き）

巨キバの変更点は

バツシャー

通常弾も相手を追尾します

ウェイクアップ

ゲームのように一定時間攻撃力が上昇します。
空間がガラスの様に割れ、辺りが夜に変わります

特に今はこれくらいですかね
ではどうぞ！

第27話　フィーネ・より良い未来を

「うおおおおおおおッ!!!」

『雑魚がアアアアッ!』

周りにいるガルル達を吹き飛ばし、エルザドルもキバ達を直視する！
エルザドルは瞬間的に無数の剣を出現させ、それを三人に向かって
発射した。

「まかせろ!」

サガは剣を鞭のように変化させ、次々にそれらを破壊していく。
赤い剣閃は剣をただ弾くだけでなく、エルザドルに向けて反射させ
る!

『ちっ!』

「はっ!」

『・・・ッ』

怯んだ所へイクサとキバの拳が命中する。

エルザドルは舌打ちをするとバックステップで三人との距離をはなした。

「キバ！俺達を使ってくれ！」

俺達はお前を支えるためにいるのだ！」

「皆さん…うん、ありがとう！」

ガルル達はホイッスルに変身してキバのベルトへ装填する。
キバは素早く緑の笛をキバットに噛ませた。

『バツシャーマグナム！』

闇の鎖がキバを包み、弾ける！

そこには色が緑に変わったキバが立っていた。

「エルザドル！なんでお前は人種を隔てるんだ！」

皆が楽しく生きる事をなんで拒絶するんだよっ！」

バツシャーマグナムの弾はある程度相手を追尾するため、

エルザドルは避けるのではなく防御する。

だがそこにイクサとサガが猛攻撃をしかけ確実にダメージを与えていく。

『人間とファンガイアは互いに殺し合うのが定めよッ！』

「誰が決めたんだよそんな事っ！」

紫に変わるキバ、
ドツガハンマーの一撃は強靱なエルザドルの鎧を打ち砕き、破壊する！

ソードフォームも応戦し、徐々にエルザドルが押され始める。

『血塗られた歴史が語る。一度争った二つの種族には確固たつ壁が存在するのだ』

「エルザドル、ちがったんだよ…
壁を固める事じゃなく

壊すことに我々は徹するべきだった」

「一人の少女に面と向かって言われるまで気がつかなかった愚かな私達、

だがその愚かさを嘆くのではなく前に進む為に活かそうではないか！」

キバは青に変わる。ガルルセイバーだ、エルザドルと三人の攻防はどンドン激化していく。

『か弱い少女にたった一言指摘されただけで心動く貴様らに何を語る資格があるのか！』

貴様らは感情論に諭されたただの馬鹿共よ！』

『里奈は傷ついた我々に手を差し伸べてくれた。危険だと分かっているから！』

「我らは互いを罵り合いながらも心の奥で関係の修復を望んでいた、しかしソレを認めよとせすしまいこんでいた！」

里奈だけではない、

我々は全員それを言う資格を持っていた。

だができなかった何故か？

弱いからだ！」

「里奈のように否定しない心を持った大人が一人でも居ればよかったのに…」

「気づくのが遅かった!」

サガの蹴りがエルザドルを吹き飛ばす。

『ならばッ!その弱さと共に消える!』

エルザドルから強大なオーラが溢れる。

「くっ、まだこんな力を!」

オーラはエルザドルを巨大な鎧を与える。

その大きさはビルほどもあり、周囲を圧倒させた。

『この一撃は貴様らではかわせんぞ!消し炭になるがいい!』

エルザドルは強大なエネルギーをチャージし始める。

「くっ！」

「あんなエネルギーを・・・」

『わっ、巨さん！あれは危険っす！ヤバいつす！』

「っ！」

「良太郎！」 『うん！』 『FULL CHARGE』

ソードフォームの必殺技がエルザドルのエネルギーを散らしていく。しかしチャージは止まることはなく、せいぜい時間を遅らせる程度のようなのだ。

「くそっ！」

『はっ、人とファンガイアの共存など不可能な夢物語。』

そんな幻想を語る連中など、すべて消してやる！』

「それでも！夢でも信じなきゃ！信じあわなきゃ叶わない！」

里奈は叫ぶ。自分を守ってくれる人の為にも叫ばなければいけなか

った。

「人間とファンガイアは共に生きていける！」

ファンガイアでも人間でも、信じる人の為に戦える！」

それが心持つものの証だから！」

里奈は思いつきり叫んだ、

自分の

弱さを

醜さを

全部言葉に託して。

そしてその言葉に皆は頷き、エルザドルを睨む。

『種族の壁は絶対なのだよ！』

エルザドルのチャージが終わった様だ

キバ達はせめてもの抵抗に必殺技を当てる準備を始める。

その時だった！

『ファイナル・アタックライド　　デイデイデイケイド!』

ホログラムカードを越えデイケイドがエルザドルにディメンション
キックを決める!

だがこれも大きなダメージにはならない

「兄さん!」

「悪いな、遅くなった!」

『……っ! 貴様は特に異質な気を感じる、何者だ!?!』

ディケイドは振り向きながら指をさす。

「俺は破壊者さ！
だからこの世界の「壁」を……」

ディケイドはカードを手にしてキバに見せる。

それはキバのカード、
つまりキバの封印が解かれたと言う事だ！

「破壊する！」 『ファイナル・フォームライド キキキキバ！』

「うわぁー！」

キバの体の変形して巨大な弓になる、キバアローの完成だ。

「狙い撃つぜえ……」

『クツ！消えろ！』

エルザドルはエネルギーを一気に放出する！

『兄さん！来る！外さないでくれよ』

「おいおい、俺がお前に嘘ついたことなんてあるか？」

『ファイナル・アタッククライド』

『今ついた！』

「ははっ、勘弁してくれよ」『キキキキバ！』

カテナが解放される。

「勝った……のか？」

「ああ……だな……」

「やつ……やったあああああああ！」

一気に観衆達は歓喜に踊る。

抱き合う者や胴上げを始める者、

中には踊りだす者もいた

「終わった……というか兄さん！」

今までどこ行ってたんだよ！」

「クイーン以外のチエックメイトフォーに追われてたんだよ！
あいつ等全然手加減しないんだよ、参ったぜ・・・」

そういつて歩いていく司、それとすれ違いにイクサ達がやってきた

「巨君！」

「里奈ちゃん！」

二人は駆け寄ると互いの無事を確かめる。

「イクサさん！サガさん！」

「約束するよ里奈、巨。」

私達は必ずまた仲良くなれると！」

「ああ、必ず！」

「・・・はい・・・」

その日は祭りが行われた。

ファンガイアも人間も関係なく笑い、夜は更けていった。

エルザドルは傷口を抑えながら歩いていた。

場所は城、

そしてエルザドルを迎えるのは大臣とクイーン。

「…お疲れ様でした」

「ああ、すまなかつたないろいろ迷惑をかけて」

濁っていたエルザドルの声が鮮明になっていく。
クイーンは優しく微笑むと、
エルザドルを強く抱き締めた。

「これで・・・よかったですよね？」

キング…」

「ああ、

いや…もはや私はキングではないな。

大臣よ、次の王はイクサとサガの両名に継がせてくれ、

私は…ははっ、
もう死んでる事になっているからな」

そういつてエルザドルは王座に腰掛ける。
クイーンの力で射抜かれた所はすっかり元どおりになっていた。

「…本当にガルル達には申し訳ないと思っている、
まして国民達にも…」

「非常に危険な賭けだったとは思いますが、
ですが結果論としては成功だったかと」

エルザドルは自虐的な笑みを浮かべた。

もはや限界だったのだ、
種族間抗争は日に日に激化していき、いずれは取り返しがつかなくなる
ところまでいってしまう。

だからこそエルザドルは苦悩の選択をしたのだった。

自作自演の死と言う嘘

自分がやった事で多くの民が犠牲になるかもしれない、

しかしそれを乗り越える事ができれば……

エルザドルは王を捨て、危険すぎるとも言える賭けにでたのだった。

「すまない、

あの里奈と言う少女にコレを渡しておいてくれ……」

そういつてエルザドルは立ち上がる。

「はい……

どこへ？」

「私は死んだ身だ。人目のつかぬ所で存在しなければならん」

歩き出すエルザドル。

大臣は何も言わずにただ深く頭を下げるのだった。

大臣として、一人の友として

「私もお供させてください……」

キング、いえエルザドル様」

クイーンはエルザドルの隣を歩く。

エルザドルはすまないと小さく呟いて彼女の手を握る。

大臣は二人が見えなくなった後も頭を下げ続けた。

「……綺麗……だね」

「うん、すごいね」

里奈はキラキラと光る竜のブローチを貰った。

真由も気に入ったらしく、二人はさつきからソレをじっとみている。

「あれから里奈ちゃんも結構成長したみたいだよ、少し明るくなっ
たっていうか」

「ま、今回は里奈がいなきゃヤバかったからな」

ソレを聞くと里奈はブイサインを送る。

「行ってしまっただね」

「ああ、俺たちはいろんな世界を巡らなきゃいけないから…」

イクサとサガは別れの挨拶を言う。

「ガルル達ともお別れか・・・」

私は正直君たちが王を殺めたのではないかと疑っていた。

許してもらえとは思っていないが

どうか謝らせてくれっ！

すまなかった！

「気にするな、それより国を頼んだぞ」

「ああ…ありがとう」

ガルル達は笑いながら学校へと消えていく。

『はあい、アタシも来ちゃった』

『わあ！キバーラ！だめじゃないっすか！』

「ははっ、いいんじゃないかい？大勢の方が助かるよ」

こうして私たちはキバの世界を後にするのだった。

第27話　　ファイネ・より良い未来を（後書き）

はい。と言う訳でキバ編は終わりです

ココまでお付き合いありがとうございました
次もよろしく！

第28話 番外編 皆でゲーム(前書き)

はい、と言うわけで番外編です

申し訳ないですがまたライダー関係ないです(爆

第28話 番外編 皆でゲーム

それは巨も無事に変身する事ができ、次の世界へ向かう途中の事だった。

「本当にいいのか？このスマブラの帝王とまで言われた椿様に勝るとしても？」

「ああら、あたくしはスマブラの神と言われておりましたのよ、おほほほ！」

友里は挑発する様に笑う。

しかし椿は小さく鼻を鳴らすと、

自らのコントローラーをゲーム機に突き刺した。

この発端は、巨が変身できた事をお祝いするパーティの時だった。ふとスマブラの話題になり、誰が一番強いかと言う話になったのだ。特に友里と椿の二人が最強の称号を譲らず、決着をつけようと言う事になった訳で・・・

「あははは、じゃあ司会は私、小野寺翼と」

「良太郎です」「ハナです！」

スマブラが自分たちの世界に無かった電王組みが勤めることになった

「ところで何でワタシ達まで…やった事ないんだが…」

咲夜はコントローラを不満そうに見つめながら呟く。

前回の料理対決同じく、チーム対抗戦になっているのだ。

「はっ、それはコントローラーって言う機械なんだからお猿さん。」

「知っとるわそれくらい！」

ワタシ達までやる必要があるのかと言ってるんだ！」

「一応優勝チームには景品があるよ。

前回ケーキが誰も食べれなかったからね、

今回はファンガイア牧場特性、とろとろプルりんプリンを用意させてもらったよ」

咲夜は何も言わずにコントローラを握り締めた。

「いいだろう…やってやる」

「極端だね……」

「糖分に飢えてるからね、相変わらず」

司 椿 拓真 真志 亘 我夢チーム

「前回みたいな事にならないように嘘偽りなく答えるよ！
お前らの実力はどれくらいなんだ？」

俺はまあまあだと思っ」

「帝王だぜ？弱いわけないだろうが！」

「お前！前回、鉄人（笑）だったろうが！」

「今度はマジですう！絶対勝ちますう！」

「ホントだろうな・・・？ 皆は大丈夫か？」

「ああ」

「うん」

『ドドーンッ！』

「大丈夫だよ」

「おいなんか今一人全く違う感じの奴がいたぞ。
なんかどーんって聞こえたぞ。」

「タタコン使ってるヤツいたぞッッ！」

「えっ？」

我夢は周りを見回す。

「（あれ？なんか僕…皆とコントローラーが違うような…？）」

「120パーセント違うから！」

「コレそう言うゲームじゃねえから！太鼓もバチも使わねえから！」

片付けてきなさいっ、司は我夢にタタコンを片付ける様に命じる。

我夢は申し訳なさそうに走っていった。

「我夢君」

ふと、呼び止められる

「え？ああ、アキラさん。どうしたんです？」

「実はあのゲームやった事なくて、ちょっとルールを教えて欲しいんですけど」

「ああ。いいですよ」

「すみません。ありがとう」

アキラが我夢に近づいた瞬間、薫が走ってきてアキラにぶつかる。アキラはバランスを崩して我夢にもたれかかってしまった。

「きゃっ！」

「ツッ！！！」

「あ、ごめん！」

薫はアキラと我夢に謝罪すると、急いでるからと行ってしまった。

「あ、もうすぐ始まる様ですね！急ぎましょー！」

「……アキラさん……」

「え？」

「アキラ…さん、先に行ってください」

「え？でも…」

「お願いですから」

「わ…わかりました」

「……………」

胸が…当たった。

「ブハッ！」

「我夢くんおそいね」

「そうだな。片付けにいっただけなのに」

少し待っても我夢が帰ってこない。

司達は不思議に思い我夢を探しに行く

「おーい…我夢ー…？…ツツツ！」

そして…見つける。血まみれになって倒れている我夢を！

「が、我夢っ！」

司は倒れていた我夢を抱きかかえる。

「だっ、大丈夫か！？」

我夢は答えない。

どうやら気を失っているようだった、

我夢の血はどつやら鼻から出血したモノだろう、

つまり、我夢は鼻血を出して気絶したと言う事だ

「な、なんで…。と言つか何て幸せそうな顔してるんだ…」

「・・・」

椿は真剣な表情で何かを考えている。

「(まさか…いや、そうなのか?)」

どつやらこの戦い。簡単にはいかない様だな…

椿は一人冷や汗を浮かべながら、ニヤリと笑うのだった。

「うりゃあああああ！」

「うえええええいつつ！」

「だあああああ！」

「ヴェエエエエエエエエ！」

「くっ！そんな！」

「はっ、どうした園田あ！こんなもんかよ！」

「これじゃあ椿様のウオッチは崩せねえなあおい！」

「そんなっ、あたしのディディーが…！」

「まあコレが実力の壁ってやつだわ。じゃあな、

これで終わりだアアアアア！」

「くっ、くそおおおおおおおおおおおおお！…！」

勝者 友里

「……負けちった。てへっ」

「なんでだよッ！どう考えても勝ってただろ！
さっきまでの台詞なんだったんだよ！

なんで負けてるお前が終わりだアアとか言っちゃうんだよ！！

おい舌出してんじゃねえぞ
全然かわいくねーからな！

ぶつとばすぞー！

「も、もう一回やらせてくれ！次は咲夜だったな、勝てる！あの女
になら勝てる！」

「……まあいけど」

『ビガーツ!!』
『ビビーツ!!』

勝者 咲夜

「ふっ、ワタシの勝ちだな椿い！」

「はいはいはい、強い強い！凄いなえーピカ厨は！
下スマと雷だけしてればいいもんねー！」

「黙れ帝王（笑）やった事ないのだからこれくらい許せよあー！
と言うか帝王（爆笑）なら対策くらいできるんじゃないんですか
あ？

どうなのかな帝王（）！

「ぐぬぬっ！ あーうるせえ、うるせえ！

だいたい何でお前、ピカチュウなんてかわいいキャラ使ってたんだ
よ？

お前はせいぜいドンキーかクツパ、ガノン辺りだろーっ」

「好きだからに決まってるだろうが！悪いか！」

「はいはいー！誰得ですかあー？」

男に胸くつついてるだけの咲夜さんが実は可愛いもの好きって設定誰得ですかあー？」

「はっ、ピカチュウが嫌いな人間などこの世にいません！」

「はいー！椿くんライチュウ派です！太ってるとか言うヤツ焼き土下座なー！」

「だからお前は帝王（失笑）なのだよ！」

本物のチュウリストなら皆愛してるのだよ！」

「はっ！原作ゲームやった事ねえヤツがよく言えるな！
どうするう？お前の知らない設定あるかもしれんぞあー！」

「な、何？」

「お前あん時もそうだったな。

ぼのぼのでシマリス君きやわいいとか言ってたけど女の子だと思
ってたんだろお！」

高校までえ！」

「くっ！」

「そっからお前きゃわいいとか言わなくなっただな！」

シマリス君に対する態度が余所余所しくなっただよなあ！

無類のシマリス君ファンを語ってたお前が！

知ってるうぜええ咲夜さんよお！

お前シマリス君のぬいぐるみに女の子の服着せて、
抱いて寝てたらしいなあおい！

どうすんだ！シマリス君の気持ち考えた事あんのかオイ！」

「くっ、あんなにかわいい子が男の子のはずが…！」

「逆ですう！逆なんですう！お前どうする？」

もしピカチュウのチュウが虫って意味だったらよお！

今も変わらず愛し続けられるのかあああ？本当の愛貫けるのかあ」

「ぐぐぐっ！！・・・はっ、

本当の愛？

新しいアニメが始まるたびに嫁がコロコロ変わるお前の口から愛？
笑わせるなよ！帝WWWWW様WWWが！」

「ググググッ！！お、お前…それっ」

「はいはいー。またリアルファイトかなー。やめようねー」

翼が嗜めると椿と咲夜は渋々自分たちの場所へと戻る。

「安心しろよ椿、オレが勝って流れを取り戻すから」

真志は対戦表をみる、自分の相手は真由。

真志は勝利を確信する、

真由には悪いが勝たせて貰おう。

何か美歩が真由にゴニョゴニョと呟いているが特に気にする事ない

真由のプリンと真志のファルコンが対峙しあう。

ファルコンが先制攻撃をしかけようとした瞬間、真由はぼそりと呟

いた。

「プリンちゃん…殴られるなんて…可哀想…」

潤んだ瞳で真志を直視する真由。画面ではなく真志を直視する真由

「……いや、真由ちゃんコレッゲーム…」

「こんなに…かわいいのに…殴られるなんて…可哀想…」

「………いや、だから」

「「こんなに愛しいのに」」

勝者、真由

「真志・・・お前」

「いいんだ・・・オレには・・・
ぷりんちゃんは殴れない」

「ブワッ・・・」

「やったあ・・・！」

「うしっ！ナイス真由！」

駆け寄る真由を美歩は抱きしめる。

「美歩ちゃんの・・・言った事・・・守った・・・よお」

「うん！偉いぞ真由！」

ニヤリと、黒い笑顔を美歩は浮かべる。

「作戦・・・成功ね」

同じく、黒い笑みを浮かべた薫。

「そっちはうまくいったの？」

「ええ、我夢くんがアキラちゃんにルールを教えってる時にはっちり決めてやったわ」

「……くくく、計画通り！」

「どうでもいいが、人の妹を悪女にするのは止めてくれないか……」

呆れるように双護はため息をついた。

「まじで後がねえぞ！もういい、俺がいく！」

相手は双護か……どうでもいい！

俺のカービィで全員破壊してやる！

世界の破壊者、カビケイド。その瞳は何を見る？

ガキンッ

『させるものか！』

バキンッ

『見切った！』

ドケシッ

『させるものか！』

デュクシ！

『見切
』

「だあああああ！人間じゃねえツツ！
何で全部カウンターできるんだよ！化けモンかよ！」

「フツ、俺のマルスはひと味違うだろう？
さよならだ、ミスティックスラッシュ！」

「ぐあああああああ！
そんな…技…ねえ…から…な…ガクツ！」

「いや、なんで気絶した」

勝者 双護

「やべー、やべーぞ！どうすんだオイ！」

今のところ全員負けてるぞ！残りは拓真と亘！お前らしかいねえ
！」

「大丈夫です！次は夏美姉さん！

ボクや兄さんと何回か戦ったけど一度も勝った事はありません。

いつも使うヨッシーでくるならボクのメタナイトで倒せます」

「よ、よし！期待してるぜ亘！」

亘には自信があつた。現に夏美に負けた回数はい少ない。

夏美の選択したキャラがヨッシーでその自信は確信に変わる。

勝てる！

そう、普通に戦えば夏美には勝てるだろう

そう、普通に戦えば…

「じゃあ！はじめ！」

ハナが開戦を告げる。

そして、巨は見た。

夏美が目を光らせて自らの指を巨の首に突き刺す瞬間を！

「.....」

「.....」

真志達はいきなりの行動に目を丸くする。

そして巨が笑い出す

そこからの拓真は凄かった。
ユウスケ、薫、里奈、アキラなどを次々と撃破していき成績をどん
どん上げていく

「一行でやられる私達って…がくっ」

「やっつけすぎる…ばたっ」

「あ、あははは………」

あ、忘れてた。

えと…ぐてっ」

「最後のはやらなきゃいけないんですか……
ぱ、ぱたり」

次々に勝利をあげていく拓真に美歩達は焦りを感じる！

「くっ！やばいわよ美歩！このままじゃ」

「そ、そうね。何か手を打たないと」

美穂が動こうとした瞬間、目の前に真志と椿が立ちふさがる！

「くっ！真志！」

「させねえぜ美歩お！」

お前らのチームが何か良からぬことをしようとしているのは分かってるんだからな！」

「ちっ！」

「他チームの妨害なんて男らしくないぞ！白鳥！」

「私は女だつての！」

つか、前回のゲームでもモックソ妨害してた奴が何言ってるんだ！」

「ととととにかく！拓真の邪魔はさせねえ！」

あの…

「はっ！拓真っち一人で他の全員を倒せるとでも！？」

「いけるさ、拓真はオレ達の希望なんだ！」

あの一・・・

「ふっ、私を倒してもまだ強敵が控えているというのに！」

「美歩！見せてやるぜ！オレ達の」

「あの一！」

「ん？」

真志が振り返ると拓真が申し訳なさそうに笑っている

「どっした！？拓真！」

「友里ちゃんに負けちゃった…えへへ」

「…」

「…」

「…」

「まあ…ね。現実なんてこんなモンですよねww」

「プリン！プリン！プッリン」

結局友里チームが勝利し、景品のプリンは彼女達のモノになった。
友里は鼻歌交じりに冷蔵庫の扉をあける

「ぷ……あれーっ？」

景品のプリンが消えている！

友里は慌てて周りを見る、どこに？景品のプリンはどこへ！？

「……ん？」

食堂の隅で赤い何かがモゾモゾしている、

すごい嫌な予感がしながらも、友里達はその赤いヤツに声をかけた。

「うーん…デリシャス…」

「ねえ……」

「ん？ おお！お前らか、どうしたんだよ」

「モモタロス…どうして口の周りが汚れてるの…？」

「口い？ ああ、プリンを食ってたんだよ。」

「うめえなコレ。いや全部くっちゃまったよ」

「……か……」

「あん？どうした？」

「馬鹿アあああああああああああああああ！」

こうして、学校に友里の大声が響きわたるのだった。

第28話 番外編 皆でゲーム(後書き)

かなり…やっつけでしたねw

次回のアギト編もよろしくおねがいます
では、お付き合いありがとうございました！

第29話 嘴矢濫觴（前書き）

はい、という訳でアギト編です。

最初に言っておきたいんですが
オリジナルフォームが登場します

そう言うのが苦手な方はごめんなさい！

第29話 嘴矢濫觴

ぼ、僕とっ、結婚…してくれませんか？

「
」

ほ、本当に!？

「
」

はっ、はは!ははは!

「
」

う、うん!絶対幸せにするよ!

「
」

ああ!そうだね・・・

「…………あ」

フラッシュバックする記憶と思い出の奔流。
暗闇の中でゆっくりと身を起こす。

だが、体が重い…

夢か…

「……………」

思い出したくはなかった夢。

追いかけても追いつけない…そんな夢だった。

「くそっ・・・」

心では割り切ったつもりだった。

決別したつもりだった

・・・が

些細な記憶一つで心が張り裂けそうになる。

自分はこのなにもメンタルが弱かったのだろうか？
自分自身に苛立ちを覚え、再び目を閉じる。

焼きつく彼女の笑顔が僕には眩しかった。

悲しかった。

だから逃げたくなる。

僕はせめてもの抵抗に心臓がある胸を握り締める。

痛みは少し僕から現実を遠ざけてくれたが、
すぐに見てしまった、

月に映る自らの影を…

「・・・そうだった、次は僕なのか」

僕は急いで教室に向かう、
昨日いろいろ考えていたせいで寝坊してしまったのだ。

こんなことじゃ皆に申し訳が立たない。

教室に入ると真志君と司君が何やら話し合っていた。

「ごめん。すこし寝坊しちゃたよ・・・申し訳ない」

「先生何いつてるんだよ、オレ達が早く起きたただけだって。それよ
り・・・」

「犯罪件数ゼロ？どういことなんだい？」

「異常だぜ先生。この町で起きた犯罪の件数はゼロなんだってよ」

「つまりなにかい？」

「この世界では殺人はおろか万引きまで起こっていないとでも言うのかい？」

そんな馬鹿な・・・
だが僕たちの常識はもう通用しないどんな世界があっても不思議ではないんだね

「司君、この世界では私が選ばれた様なんだ」

「あ…成る程、アギトの試練ってことか」

「うん、だからこの世界での敵はアンノウンであるという可能性が高いと思う」

司君は少し考えてからうなずく、
原作どおりとは限らないからこの理論の信憑性はあまり高くない。

「ってどうか先生は変身できるの？」

「一度やってみただけどダメだったよ。
ユウスケみたいに極限状況に陥らなければならぬのかもしれないね・・・」

テレビで見る変身ポーズだけを真似しても何も変わらなかった。
心情まではテレビじゃ分からない。それがもどかしい

「うーん・・・じゃあまた適当に町をぶらつくしかないか」

「その前にどうかな、今日と明日くらいはこの町で休暇をとらないかい？」

「え？休暇？」

翼の提案に二人は目を丸くする。

「ああ、最近ずっと戦いが続いたからね、息抜きも必要だと思うんだ。

幸いこの世界は平和そうだし」

「でも先生。急がないと俺達の世界がやばいんだぜ？」

「じゃあ一日にしよう。根気つめて体でも壊したりしたら結局同じ

「ことだろうか？」

「まあ・・・そうかな」

「じゃあ決まりだね、皆を起こしてきてくれないか。
なにせ、今日一日だけなんだからね。あはは」

「ねえ咲夜あ、咲夜も一緒に買い物行かない？」

「行きましょうよ先輩！」

「ああ、そうだな。」一緒にさせてもらおうよ

初めての休暇ともあってか、女性陣は皆で買い物に行く予定を立てていた。

「あー！そのアイテム！おれが取ろうと思ってたのに！」

「かかか、ユウスケは甘いな、所詮取ったもの勝ちなんだよ！」

「くそっ！このまま真志の一人勝ちなんてさせるか！ユウスケ！」

「分かってる！」

「「変身！」」

「・・・変身する必要ないと思うけどなあ」

ゲームで遊んでる者や、

「えいつ！」

「おりゃああ！」

モモタロスが打ち返したシャトルが空を舞う。

「そっち行きました！双護先輩！」

「ああ、わかった」

双護はラケットを構え、撃つ！

「うおー！」

ビュンツと音をたててシャトルがモモタロスに直撃する。

「ばたっ！」

「も、モモタロスーっ！」

「どうかな、俺の

デステイニー・オブ・ザ・エンドレスグラビティ・ファイアース
トラックファイリングフューチャーアタッチメントライトオブワン・
ザブレードの威力は？」

「……あの、これバドミントンなんですけど」

スポーツで遊ぶ者もいる。

「いいのかなあー我夢君」

「え？」

「このままアキラを行かせてもお？」

「……………なななな何のことですか？」

「せせせ先輩」

「椿先輩知ってるんだぞお、今日ぐらいしか誘えないと思うなあ俺は」

「ちちちちち誘っ…アキラちゃんを…びびびびびび」

「えーどうしたのー？僕も気になるなあ」

「うっうっウラタロスさんも椿先輩も、ぼぼぼぼくは別に」

「じゃあ、僕が誘っちゃおうかなあ〜？」

「・・・そ、そうだなー。」

「いや別に変な気はないんですけどせっかくだから誘ってみようかな？」

わざとらしく態度を変える我夢にウラタロスは苦笑する。

「あ、あのツアキラさん……」

「はい？なんですか？」

「も、もし…よよよよかったらッッ…ほほほほほ僕と…」

「はあ」

「かかか、買い物に…」

僕と一緒に買い物に行きませんかッ！」

「あ、すみません。先に美歩さん達に誘われて、また行きましょ
うね」

「は、は…」

「・・・いや、なんていうか…ね、ホラ。
別に断られたとかじゃないじゃんね？」

「…そうですね」

「そ、それにまた誘えば大丈夫だよ！」

「…そーですね」

「げ、元気だせって…な？」

「・・・た」

「え？」

「アキラさんとしゃべれたあ……僕ッ、もう満足です！」

「……え？」

「え？」

「あれ？」

「はい？」

「なごそね」わい

第29話 嘴矢濫觴（後書き）

休暇って、番外編でとりまくってるじゃねえか
っていう突っ込みはNGでww

あと明日は更新できないかもしれません。

では次もよろしく！

第30話 一喜一憂(前書き)

今日は大雨で学校がなくなっ たんで更新できました
だから代わりに明日と…

もしかしたら明後日はできないと思います

ではごっごー！

第30話 一喜一憂

デパートのおもちや売り場では、先ほどから夏美と真由がなにやらぬいぐるみの前で話している

「見ててくださいね…」

「…うん」

夏美は熊の様な犬の様なおかしなぬいぐるみのお腹を押した。すると、

おんぎゅらあああ

「わあ！音が…なったあ…」

「へへん、これすごくないですか!?!」

「すごい…すごい!…もう一回!もう一回」

真由の反応に気を良くした夏美は、
ドヤ顔でもう一回ぬいぐるみのお腹を押した。

おんぎゅらあああ

「わあああ！」

「楽しーッ！」

「夏美達は何をやってるんだ…？」

「さあ？でも本人達が楽しそうだからいいんじゃない？」

あ、友里ちゃんチョコミントにしたんだ」

「うん！あ、ハナちゃんも食べる？」

アイスクリームを舐めながら咲夜は二人を暖かい目で見守るのだった。

「で？どうなんだよユウスケとはあ？我夢とはあ？巨とはあッ！」

「はあ！？」

そう言って美歩はジュースを薫達へ放り投げた。

「おでん缶……」

で、どうなのって、何がよ

「みいちゃんってば、センスいいっしょ？」

つか、何がって、決まってんじゃん！関係よ、
かんけい！

美歩はにやけながらサイダーの缶を開ける。

「ちょっと、そっち寄りしなさいよ！

関係って……ただの友達よ」

「もう口付けちゃったしい。

え〜…あ、じゃあ。どう思ってる訳？」

「ど、どうって…別に…なんとも…」

「あー！赤くなってるー！」

「ッッ！」

ニヤニヤしながら美歩は薫に詰め寄る。

彼女はこういう話が大好きだった、

もう彼女にとってここはパラダイス。文字通り楽園という訳！

「こっ、これは…おでん缶食べて熱くなっただけなんだから！」

「流石に無理があるっしょ！全然食べてないじゃ

」

「ガツガツガツガツ！バウツ！」

（この女、あれ程のおでん缶を一瞬で……できるっ！）

すでに空となったおでん缶を薫は投げ捨てる（ちゃんとゴミ箱に入りました）

その顔に笑みを浮かべて

「何か…偉そうにしてらっさるみたいだけどさ。アンタはどうなのよっ…！」

「えっ!?!」

「真志と一緒に住んでるんでしょ?どうなんですかー?
教えてくださーい!」

「えっ!あ…いや、だからその…」

「あれ？あれ？顔が赤くなってない？」

「こっ、これは……！」

「け、けほん！けほん！サイダーが気管に入っ
てむせちゃったから」

「……」

全然信じてない。言葉にしたかのような冷たい視線で美歩を刺し貫く。

「……ブアハワアッ！」

ゲホッ！ゲホオオオ！オエエエエ！

がはっ！ゴエエホオエ！

む、むぜちゃっだあ！」

（ちっ、美歩め何て演技をしかけてくるのッ！おそろしい子……）

絶妙な雰囲気になってしまっ
て薫も美歩もこれ以上聞く事
が出来なくなってしまうた。

美歩はしぶしぶ妥協してアキラ
と里奈に同じ質問をぶつけて
みる。

しかしアキラは表情一つ変えず

「我夢君ですか？」

そうですね、私の方が早く生まれたので弟みたいな存在…
でしょうかね。

・・・あれ？どうして泣いてるんですか？」

「いや、ちょっと我夢君が不憫すぎて…」

「????」

対照的に里奈は顔を真っ赤にして

「そ！そんなあ関係だなんて…」

巨君は優しくして…頼もしくて…

それから、それから」

「私達にもあんな純粹さが欲しかったわあ…」

「…達ってやめてくんないかしら」

「「ぶわあッくしょんっ！」」

「うわ 汚ねッ 顔にかかった汚ねッ！」

ユウスケと真志の口から吹き出た紅茶が司にヒットする。

「いや、ごめん。むせちゃって…」

「噂されてんのかなあ。あはははは」

「いや、ゆるさねえけど？」 『フォーム・ライド』 『バツシヤ
ー！』

「あれ？なんで変身して…司君？いや司さん？司様？」

「つ、司？それ人に向けちゃ駄目なんだよ？」

「いや、知ってるけど？」

躊躇い無く引いた引き金、

銃口から発射される水流。

逃げるユウスケ、

真志。

代わりにぶち当たる椿。

「アッー!!」

よく分からない叫び声を上げて、椿は倒れるのだった…

「てかてか、薫！」

「はぁ…まだ何かあるの？」

「翼先生って中タイケメンじゃん？彼女とかいんの？」

「ッ！」

薫の表情が先ほどと一転し、苦々しく曇る。

「え？あ…なんか、まずかった感じ？ご、ごめん…」

「いや…いいの。ごめん、そっか…知らないのよね」

薫は少し迷ったが、口を開く。

「翼さん、婚約してた相手がいるのよ…」

「うえ！そうなんだ」

「だけど…亡くなったわ」

「あ…」

「・・・」

意識がゆっくりと戻ってくる。ああそうか、すこし眠ってしまったらしい。

まだ、だるい身体を起こして深く息を吸った

（今、何時だ・・・？）

時計が見当たらない事に若干もどかしさを感じる。

皆は戻って来ているだろうか？

それより今日は楽しんで過ごしただろうか？

こんな状況だからこそ彼らには笑っていてもらいたい。

「アギトか…」

今、自分の影は自分であつて自分じゃない。
果たして自分はユウスケや亘君の様にこの影と同等の存在になれる
のだろうか？

成る程、なかなかプレッシャーが強いもんだ。
よく彼らは耐えられたな…

(ずいぶんと弱気なんだな)

自嘲気味に笑いながらカーテンを開ける。外の空気でも吸えば少し
は気が紛れるだろう

「…あれ？」

何か、おかしい。

「海？」

景色がさっきのソレと違っている。
街の中に僕等は転送された筈だ。

なのになぜか今、海がすぐ近くに見える。

「海が…見える、丘」

に、住みたいね

「あ…」

丘の端に、レンガの家が建っていた。まるで、おとぎ話に出てくる
様な

「レン…ガ…」

で、家を建ててさ

「っ…いや、そんなまさか」

ドクンツと心臓が跳ね上がるのを感じる。
強くなる鼓動はその答えを知るまで止む事はないだろう。

「……………」

気がつけば窓から飛び出していた。

靴を履く時間さえ惜しい、走り方すらもどつどつでもいいッ、

早く、

速く、

早く速く早く速くッ！

「まさか、そんな！そんなッ！どうしてッ！」

レンガの家、

その玄関に置いてあるネームプレートを見て愕然とする。

ありえない、

でもありえている。

馬鹿なッ、そんな、嘘だ。

「小野寺…翼…だとっ？」

自分の名前、ここは異世界だ。

なのに…この家のネームプレートにはその名前がしっかりと刻まれていた。

「ツツ！何だよお」

それだけじゃない。

発狂しそうになる心を抑えて僕はインターホンを押す。

この家に誰が住んでいるのか？

それを早く確かめたくて何度もインターホンを押してしまう。

「はい！はいはい！」

返事が聞こえる。

ああ、当たり前だその為の機能なんだから…

だけど、

鼓動が、強すぎて、おかしくなる。

あ、扉が…開い…

「あ、おかえり。翼くん」

当たり前のように、そう言われた。だから僕は…

「ねえ…先生の婚約相手って…まさか」

美歩の問いに薫は頷く

「先生が婚約してたのは…」

だから僕は…当たり前のように答える

「ただいま…葵^{あおい}」

「空野葵。私の…死んじゃったお姉ちゃん」

第30話 一喜一憂（後書き）

基本フォームだけなら僕はアギトが一番好きですね。

クロスホーン展開時が特にカッコいいです

ここまでお付き合いありがとうございます

次回もよろしく！

第31話 一期一会

「どうして…なんで…」

「ん？」

彼女が、一歩近づく

「…める」

「どうしたの？翼君」

「やめる…」

「え？」

彼女、いやそいつが肩に手を置こうとするが、
僕は思い切り振り払う

「やめるッ！」

「！」

「お前は誰だ！？

私に触れるなッ！

何故彼女の姿に化けている！？

何が目的だ！」

許さない、許してたまるかッ！

彼女は死んだ。

目の前にいるのは彼女の筈がない！

誰だ！

誰なんだコイツは！？

楽しいのか、楽しんでいるのか！？

わざわざ彼女と僕の願いを叶え、こんな家に住んで！

僕を、彼女を！嘲け笑うのかッ！

「とうッ！」

「ぐわっ！」

ただど返事の変わりに飛んできたのは彼女のチョップだった。

「なになに？漫画のマネ事？帰ってくるなりずいぶんじゃない？」

「えっ…ああ…」

「ホラ！速く着替えてよ。」ご飯が冷めちゃう！あと…」

そう言っつて彼女は笑う。

「二人の時は、『私』は禁止！」

それは僕が最期にみたのと同じ…笑顔

「君…なのか…？」

「んん？」

「本当にッ！葵…なのか？」

「珍しいね、どうしたの？
いつもはさん付けなのに。」

まあ、わたしはそっちでいいんだけどね。ふふっ
「

視界が濁っていく。

やめろっ、止めてくれッ…これ以上僕を苦しめないでくれ…ッ

「葵…さん」

「ちょっと、もう止めるのッ!？」

たしかにわたしの方が年上だけどさ、たった一歳じゃない!もう
っ
「っ」

止めるっ、違う。惑わされるなッッ

彼女の筈がないだろっ、彼女である筈がないだろッ、

止める、

逃げ出せ!まだ間に合う!

彼女に背を向けるんだ!!速くッ!

「どう…したの?翼君。何か、辛い事でも…あった?」

また一歩、彼女が近づいてくる。

死んだ筈の、

事故でこの世を去った筈の婚約者

動かない。

動けない…今すぐ逃げなきゃいけないのは分かっているのに…

僕の足は、動かなかった。

僕はどうして…こんなに泣いてるんだ…

「わたしはいつだって貴方の味方だから。それを忘れないで」

彼女が僕を抱きしめる。

ああ、彼女の匂いがする。

「葵…さん。」

君は、本当に…本当にッ、

…空野葵なのか？」

「ううん、違うわよっ！」

「え？」

左手を…押し付けられた。

薬指には、
指輪。

僕が、送った

「小野寺、小野寺葵でしょ！」

そうか…そうだったんだ…

「は…はは」

何も疑う事はなかったんだ、
最初から信じていればよかったんだよ。

ははっ、僕は何をしていたんだらうか、馬鹿馬鹿しい！

「葵…なんだね。」

そっと抱きしめる。

だからそうだっていつてるじゃない！
彼女はそういいながら暴れる。

懐かしい、何もかもが愛おしい。

「ただいま…葵さん」

「はあ…なんなのよ。お帰り！翼君」

やっと僕は彼女に会えたんだ。今はソレを喜ぼう

日が暮れ始め、レンガの家には明るい光が灯る。
そしてソレを見つめるのは二つの小さな影

「愛は人を成長させ」

「愛は人を変える」

「愛は人を夢へと向かわせ」

「愛は人を希望へと走らせる」

「愛は人をいつも見守り」

「愛は人を勇気付ける」

一二つの影は時に抱きしめあい、離れあう

「そして」「いつか」

「「愛は人を狂わせる」」

ゼノンとフルーラは、翼の姿を見て静かに微笑んだ。

「兄貴が帰ってない!？」

「う、うん。先生は図書室にいたんだけど…
いつの間にかいなくなってたんだっ」

「危険じゃないか!速く探しに行こう!」

既に良太郎達は翼を捜しに行っているらしい、
司達も急いで翼の後を追おうと、暗くなった外へと飛び出した。

「ん?」

そして感じる違和感。

何がおかしいのか具体的には説明できないが、
確実におかしい、

なんだか気持ちが悪い。

「へ、へへっ、ついに正体を現したって所か…」

それぞれは一抹の不安を抱え街へと向かった。

第31話 一期一会（後書き）

いやね、もしかしたら何も言わずに更新しない日とか出てくるかもしれないませんが

どうかお許しください

そう言えばプトティラの歌が出てきましたね。やっぱりライダーの歌はテンションが上がりますww

では次もよろしく！

第32話 疑心暗鬼(前書き)

明日は更新できないかもしれませんが

ではどうぞ！

第32話 疑心暗鬼

司達が行動を起こす前に

既に良太郎とハナの二人は翼を捜す為に街を歩いていた。

しかし誰に聞いても、どこを探しても翼は見つからない。

「見つからないね、良太郎」

「うん…それにぼく達は今

元の身体より縮んでるから…」

「そっか、じゃああんまり遅くなると補導されちゃうのか」

二人はすこし焦りながら翼を捜す。

あまりもたもたしていると暗くなってしまう。二人は足を速めた

「あれ？」

ふと、良太郎はその足を止める。

「どろしたの良太郎？」

「あ…うん。あの人…」

良太郎の視線の先には、一組の夫婦が立っていた。
二人はこちらを向いて微笑んでいる様に思える。

問題はその二人の事を良太郎はどこかで見たと言う事。
ここは異世界なのに…何故？

良太郎は考える。

「え？どこ？だれ？」

「ほら、あそこの人…どこかで見たことが…」

尚も微笑み続ける夫婦、変わらぬ笑顔でこちらを手招きしている。
何故かひどく懐かしい。

あそこへ行きたい、

あの人たちに近づきたい…

「良太郎？ちよつと待って！良太郎！」

ふらふらと微笑む夫婦の所へ足が動く。あの笑顔にもっと…ちかく…

「良太郎ツツ！」

ハナは良太郎の目の前に立つ。しかし良太郎は特に動じる事もなく尚もふらふらと前に進んでいった。

「どうしちゃったのよ！？誰がいるって言うの！？」

「そこだよハナさん…」

同じ微笑、

変わらぬ笑顔。

ハナは良太郎が指差した方向へと目を向ける。しかし直ぐに良太郎へと向きなおした。

「なに言ってるの！誰も居ないじゃない！」

「え…？」

何を言っているの？

良太郎は不思議そうにハナを見つめる。

当たり前のように言われたその言葉。

そして良太郎は思い出す…

その、顔を

「父…さん？母さん！？」

「えッ！？」

何故？忘れていたんだろう…
良太郎は罪悪感を覚える。

せつかく思い出したのに…

「良……郎！……郎」

ハナの声がだんだん小さくなってくる。

行きたい、あそこへ
…優しい、

やさしい両親の所へ…

「良太郎ッッ！」

ハツ、と良太郎は我に帰る。

目の前には涙を浮かべながら自分の肩を揺するハナ。

そのすぐ先には写真と同じ微笑を浮かべた両親。

「ハナさん……」

「良太郎う……ぐすつ、ひつく……」

「ごめん……」

ハナの頭を良太郎は優しく撫でた、
そして同時に両親を見直す。

先ほどとは変わらず微笑み続ける両親。

どうして…どうして彼女が泣いているのに顔色一つ変えないの？

「・・・」

二人は何も喋らない。

そして顔色、いや違う表情を変えていない。

そうか、

良太郎は理解する。

何も喋らないのは、ぼくが声を覚えていないから、

表情を変えないのは

「・・・クッ」

涙がこぼれる。

そうだ、写真でしか知らない両親、

怒った顔、

普段の表情が…

分からない。

そして気づく、周りの人間が全員同じ顔
両親の顔に変わっている。

なんて、なんて悪趣味な世界なんだッ！

良太郎は悔しくて、

寂しくて、

悲しくて…

涙をこぼす

「な・・・何っ!？」

「!? ハナさん？」

ハナの様子がおかしい。何かに怯えているのか？
震えだし、その場につづくまる。

「どうしたの!? ハナさんッ？」

良太郎がハナに触れるが、ハナは相変わらず震えているだけ。
逆に今度はハナの見える世界が変化を始めたのだ。

「消えないでッ！ いやああああッ！」

「ハナさん！ ハナさんッ！」

「皆、消えるッ！ 何も残らないッ！」

助けて！ 助けてっ！

お母さん！ お父さん！

良太郎！ 良太郎ッ！」

何度もハナは助けを呼ぶ。

良太郎は彼女を手を握り、彼女の眼をまっすぐ見つめる。

「ハナさん！ぼくはここにいますよッ！消えてなんか無い！」

「あ…ああ、良…太郎？」

ハナはさすがの様に良太郎の手を弱々しく握り返す。
周りにはソレを見て微笑む両親達。

…遂に、良太郎の怒りが爆発する。

「酷い…酷いよッ！どうしてこんな事ッ！！」

その言葉に反応して両親達は手招きを止める。

「ぼくの…ぼくの親はっ！」

目の前で女の子が泣いているのにッ、笑う人達じゃない！
これ以上ぼくの両親を語るなッ！消えろっ！」

声を荒げる良太郎、その言葉を合図に両親達は崩れ去る。

「・・・君がッ」

崩れ落ちた両親の残骸は、一つにまとまり一体の怪物へと姿を変えた。

例えるなら龍の皮を剥いだ化け物。

骨とむき出しの肉で形成された肉体。

黒く濁った瞳が良太郎を見ていた。

「グオオオオオオオオオ！」

竜骨は良太郎に向かって走り出した。

イマジンは違うグロテスクな外見に良太郎は恐怖を感じる。

しかしこの世界に対する悔しさが、その恐怖を打ち砕くッ！！

「モモタロス！行くよ！」

モモタロスとのコンタクトを試みる。が、しかし

『良太郎か！それがよお！ソツチに行けねえんだよ！』

「っ！どう言う事ッ！」

『この世界じゃ…なんつーかこう！
変な壁みたいなのになぶちあつたつてよ！』

なんとなくそんな気がしていたが的中してしまつとは…
良太郎は自分の不運さに呆れながら、竜骨の攻撃をぎりぎりです。
す。

「良太郎！？何かと戦っているのっ！？」

ハナには見えていないのか、

その疑問を証明するかのようになり、竜骨はハナに目もくれず良太郎へとまた攻撃をしかける。

「ハナさん！ちょっと離れてて！」

竜骨はその拳を良太郎の頭に向けて放つ。

良太郎は避けない。

避けられない！

直後、バンツと音が響き渡った。

ハナはその音に異変を感じ、良太郎を見る。

既に彼女の見える世界には良太郎しかいない、周りのものや人々は消滅していた。

「グゴツ？」

竜骨は良太郎の頭を砕くつもりで殴った、が、しかしその手に感じるのは硬い何か。

『良太郎！こつちはいけるでえッ！』

『やつちやえー！』

良太郎は巨大な剣を盾にして竜骨の拳を防いでいたのだ。
その剣にはモモヤリユウ達の仮面が張り付いている。

デンカメンソード！

さらに良太郎の腰にはベルトとケータロスがすでに装備されていた。

「ガアアアアッ！！」

竜骨はソレを打ち砕く為に両手を天へ振り上げる。

そのわずかな瞬間を待っていたと言わんばかりに、良太郎はソード
へパスを素早く差し込んだ！

「変身っっ！！」 『LINER・FORM』

良太郎の背後から
デンライナーの形をした衝撃波が巻き起こり、竜骨の体を吹き飛ばす。

そして、その衝撃波が良太郎に電王の力を与える！
ライナーフォーム。

変身を完了させた電王はソードを構えて竜骨へと走り出した。

「何…コレ…すごい！」

どこから出たのか？

教室には回転式の椅子が設置されて、モモタロスたちが座っている。

真由はソレが気に入ったみたいで、チヨロチヨロと周りを動き回った

「ねえねえ…ボクも…座っていい…?」

目を輝かせて真由はモモタロスにお願いする。だが

「ああん?だめだめ!あっち行ってな、怪我するぜ!」

「むう…」

真由は不満そうにしてしばらく何かを考える。

そして…

「じゃ…これで…我慢」

モモタロスの膝の上に腰掛けた。

第32話 疑心暗鬼（後書き）

一応電王組は主軸の本人って事なんですけど
ちよつと設定が違います

いずれちよつとした説明なんか入れようかな

では、次もよろしく！

第33話 疾風怒濤（前書き）

ライダー関係ないんですけど

なんかこの前テレビでやってたんですが、最近アニメを見て泣く人が多いみたいですね

どうですか皆さん？なんか泣いたアニメとかありますか？

僕はあんまり泣かないんですけど…それでもやっぱり

帰ってきたドラえもんとしんちゃんの大帝国はやばかったですね

…いや、まあいいですわwwすみません。ではどうぞ！

第33話 疾風怒濤

(気のせいかな…なんか、いつもより重い…)

竜骨の攻撃に特殊能力があるのか？

電王は焦る。もしかしたら攻撃したモノに重力を付加させる力でもあるのだろうか？

だとしたらマズイ。

あまり体力には自信が無い、このまま長期戦を続ければ不利なのはこつちだ。

電王は竜骨から一旦離れ、ソードのレバーを引いた。

ソードに付いている仮面が回転し、ウラの仮面がメインとなる。

『URA・ROD』

「おわっ！ちよー！」

「うわぁ…おもしろーい！」

電子音と共に回転する椅子。

真由を膝に乗せたままモモは退場していく。

「ボクの出番かなあ！」

（あれ？いつもの重さと一緒にだ。じゃあ…）

『K I N ・ A X』

「ちよつと！良太」

亀、退場

「泣けるでえッ！」

キン・アックスを構え電王は竜骨に蹴りをお見舞いする。

「ゴオオッ！」

怯んだところにもう一発、さらにもう一発。

「ゴッ！ガッ！ガガッ！」

重々しい一撃一撃は竜骨に大きなダメージを与え、怯ませる。竜骨の反撃も、避ける事などはしない！

強靱な体で受け止め、さらに豪快な一撃を浴びせた。

「ぐっ！ガアアア！」

タツクルで竜骨は大きく後方へ吹き飛ばす。
その際に良太郎はデンカメンソードの仮面部分をチェンジさせた！

『RYU・GUN』

「いえーい！行くよ良太郎！」

「ゴガアアアア！」

竜骨は無茶苦茶に拳を振り回し、攻撃を仕掛けた。

だが電王は軽快なステップで竜骨の攻撃をかわし、反撃にでる。
単調な動きしか出来ない竜骨に彼の動きは捉えられないだろう

キン程ではないが、確かなダメージが竜骨にどんどん蓄積されてい

く。

「グギヤアアッ！」

ダメージを受け続けた竜骨は、よろよろと後ずさる。
もうそろそろだろう、電王は止めをさす為、仮面を回転させた。

「おもしろーい！おもしろおい！」

「おい！危な　　オエッ！」

きゅんきゅんとはしゃぐ真由と吐きそうになっているモモタロス。

「モモさん・・・あんた男やで！」

真由が振り落とされない様に必死に掴んでるモモに椿は涙を見せるのであった。

「真由はコーヒークップが好きなんだ。よかったな真由！」

「そう言いつつもりで出したんじゃないと思うんだけど・・・」

「電車切り！」

「ガアアアアアアアアアアア！」

ほとばしる一閃、爆発する竜骨と晴れ行く世界。

変身を解いてため息をつく良太郎に、ハナは駆け寄っていく

「大丈夫？良太郎！」

「うん、ハナさんも大丈夫？」

「う、うん。けどちょっと気になることがあって」

「ん？」

ハナが言うには良太郎が戦っているとき、自分の前に黒いコートを着た男が現れたと言う。

何も無い世界、

しかし男は存在している。

男はハナの世界を見回すと、淡々と話し始めるのだった。

「いいか、何があっても自我を忘れるな。
己を保て、近くにいる人間を忘れるな」

「え？どういう事...？」

「そのままの意味だ。幻想に心を食われたとき、貴様は人間ではなくなる」

話し続ける男の後ろで竜の骨の様な化け物が見えた。

「あ！危ない！」

竜骨は男を殴ろうと手を振り上げた。

ハナは男を助けようと走るが間に合わない！

（ダメッ！）

男が死ぬ。

ハナは最悪の結末を思い浮かべてしまった。
しかし

「ゴワアッ！」

「ふん・・・」

「え!？」

男は片手で竜骨の拳を受け止めると鼻をならした。
驚くハナと竜骨、男は素早く裏拳を竜骨に叩き込む！

すさまじい威力なのか、竜骨は大きくのけぞり、もがき苦しんだ。

「こいつ等は食われた奴らの成れの果てだ。

幻想に溺れ、永遠と言う夢の中をさ迷う存在……」

そう言って男は蹴りで竜骨をばらばらに砕く。

男はサングラスをしている為、
表情がよく読み取れない。

しかし、ハナは彼が悲しそうにしているように思えた。
何の根拠も無いのだが、そう確かに感じた・・・

「奴らは死ぬ瞬間も夢の中にいただろうな」

愚かな、そう言って男はハナに背を向ける。

「何者かは知らないが、早々に立ち去れ。ここは危険だ……」

「貴方は……」

ハナの言葉に振り返る事なく男は消えていった。

「　　って事があった」

「・・・そうなんだ。」

確かに気になるけど・・・今は、翼先生を捜そう」

「うん・・・そうだね、多分きつと先生も・・・」

幻想に、飲まれているんだろうか？

第33話 疾風怒濤（後書き）

そう言えば今日で一ヶ月ですかね。

…まあ、どうなんですかねww

これからもこんな感じでやっていこうと思います。

よろしければこれからもお願いします！

第34話 力戦奮闘

「おい、なんなんだよ・・・なんなんだよコレッ!」

「・・・っ」

ユウスケと薫は、翼を捜している途中、死んだ筈の葵を見つける。何も変わっていない姉の姿。

無邪気に話しかけてくる葵に、二人は戸惑いを隠せない。

「お姉ちゃんなのっ?」

葵は頷いて薫の手を優しく握った。

「葵さん...」

ユウスケもふらふらと葵の方へ歩いていく。
ああ、良かった、生きていたんだ...

また皆で一緒に...いれ...る

「兄さん…」

「司君！」

「ああ、分かってる」

司、夏美、巨の前には顔が見えない人達が立っていた。
きつとそれは彼らの両親だろう。

顔はもつと近づけば見えるのかもしれない。だが彼らはそれを拒み、
否定した。

「あの約束、覚えてますか？」

「ああ、もちろん」

幼い時に両親をなくした彼ら三人は、寂しくて悲しくていつも泣い

ていた。

だが、そんな時に夏美の祖父が一つの約束、誓いを交わしたのだ。

「家族の誓い…だったよね」

「ええ、私達はお祖父ちゃんの子供になる。私達の親はお祖父ちゃんなんです!」

よく分からない理論だが、昔の司達はそれに満足して寂しさで泣く事は無くなった。

我ながら単純で馬鹿だったなと苦笑する。

「ま、そう言うわけだ」

『カメンライド』

司は装着したベルトにカードをセットする。

「お父さん達の事が嫌いなわけじゃない。

だけど今のボクらにとっての両親はお祖父ちゃんなんだ。

キバット!」

『了解了解了解っすーっ!』

キバットは素早く巨の元へ駆けつけ、
差し出された手に噛み付く。

『ガブーツ!!』

ビキビキと契約の印が巨の顔に刻まれていく。

巨と司は、顔すら見えない虚構の両親を睨みつけた。

「だからぞ……」

「悪いけど」

「消えてくれ」

司の周りに九つの紋章が現れ司に収束し、そして弾けた！
その衝撃はユウスケと薫の世界をも巻き込み、偽りの世界を破壊する！

「え？」

薫の手を握っていたのが優しい姉から竜の骨組みの様な化け物に変わる。

顔も知らぬ両親達が化け物に変わる。

三体の竜骨と三人の仮面ライダー

『アタックライド』 『ブラスト!』

「ガガガガアッ!」

無数の銃弾が薫と竜骨を引き剥がす。

その間に我を取り戻したユウスケが竜骨に向かって走り出した。

その腰には既にベルトが装着されており、赤い旋風を巻き起こし加速させる

「お前らアア！」

ユウスケは怒りと悲しみの感情を全て右手へと集中させて、竜骨を殴る！

そして変わる。右手がクウガへと！

「人の思いを！」

次は左腕で、殴った部分がまたクウガへと変わる。

「利用するなアアっ！」

「ゴガアアア！」

両足で竜骨を蹴り飛ばす。

それを合図に両足もクウガに

そして間を置かず胴、頭が、全身をクウガへ変身を完了させた。

「変身！」

『カメソライド』 『キバ』

デイケイドの姿がキバに変わり、蹴りを主体とした戦法に変わる。

足払い

そしてサマーソルト。

打ち上げた竜骨へ浴びせる無数の回し蹴り！

「ハッ！」

キバもまた自慢の蹴りで竜骨を追い詰めていく。
もちろん竜骨も反撃を試みるが…

『巨さん！右っす！』

「了解！」

キバットのアドバイスを受け、キバは竜骨の攻撃をかわす。
いや、それだけでは終わらない。

『巨さん！わき腹がから空きっす！いくっすよ！』

うん、とキバは上段蹴りで竜骨のわきを挟るように蹴り飛ばす。
この二人（？）のコンビの相性は抜群だ。

しばらく三人は肉弾戦で竜骨にダメージを確実に与えていく。

「決めるぞ！ユウスケ！巨！」

『ファイナル・アタッククライド　　キキキキバ！』

「うん！」『ウェイクアープ！』

「わかった！薫！」

薫は無言で頷くと、ひとつ飛びでクウガの手に銃として収まる。

つまり、ペガサス！

超変身を行うクウガに恐れを成し、竜骨は背を向けて走り出した。

もちろんそんな事は無駄だ。

クウガはペガサスボウガンを引き絞り狙いを定める。

しかし、まだ発射はしない、狙いをさだめるだけなのだ。

「ハアアアアツッ！」

デイケイドとキバの力によって辺りが夜の扉を開く。

巨大な満月が鏡合わせのように出現し、互いのヘルズゲートを開放した。

「グオオオオオ！」

「ガアアアア！」

キバとデイケイドに対峙していた竜骨は逆に二人に向かって走り出す。

たしかに気を溜めている二人は隙があるように思えたかもしれない。

しかし竜骨の放ったパンチは二人には届かない。

一瞬で上空に舞い上がった二人はシンクロするように月に重なる。

美しく、幻想的な光景に竜骨達でさえ一瞬動きを止めてしまった。

しかしそれが運のつき、気がついたときにはそれぞれの足が腹部に直撃していた。

『ダークネス・ムーンブレイク！』

「うおおおおおおおおおおおッッ！」「」

二人はそのまま竜骨ごと蹴り進んでいく！
デイケイドとキバは微妙にずれながらも、向かい合う形で近づいて
いる。

そしてその横には逃走を図った竜骨…

つまり三角形の様に竜骨はならんでいるのだ。それが収束していく。

「今だ！決めるユウスケツ！」

一瞬、三体の竜骨が一直線に重なる。

そこを見計らってデイケイドとキバは竜骨から分岐した。

そして同時にクウガはボウガンを発射する！

「ブラストツツ！ペガサス！」

風の弓矢が一直線に重なった竜骨をまとめて貫く！

三体の竜骨は同じ部分に風穴を開け、ばらばらに碎け散った。

「ふざけた世界だ……」

吐き気すら覚える世界だ。

最低なのに最高のモン見せてくれる。

苛立つ心を覚え、デイケイド達は無へと帰った世界を歩き出す。

「むこうの方に明かりが見えます。

何かあるかもしれません、行ってみましょうか？」

「そうだね、ここにいっても仕方ないし」

皆はその明かりの方へと足を向けた。

だがッ

「クッ！」

弾ける様な音がして、デイケイドはバックステップで後ろへ飛ぶ。

見ると、デイケイドがいた所には煙が上がっていた。

もし後ろへ回避しなかったら…

「何だッ!？」

ディケイドは音のした方向を睨む!

「客席と舞台を分けるラインは必要だろうか?フッフ」

「お前ッ!」

そこにはゼノンが立っていた。

ゼノンは自らの髪と同色の銃を回しながら、ディケイド達を一瞥すると

もう一度小さく笑うのだった

第34話 力戦奮闘（後書き）

一ヶ月をこえて一日目ですかね

お気に入りしてくる方や読んでくれた皆さん
どうもありがとうございます

では、また！

第35話 適者生存（前書き）

すいません明日と明後日は更新できないかもしれないですね

ではどうぞー！

第35話 適者生存

「お前、どう言うつもりだ・・・？」

ディケイドは周りを見回す。ゼノンが居るといふ事は…

「文字通りよディケイド！貴方たちは今、所詮観客なのだから！」

やはり、後ろにはいつの間にかフルーラが立っている。

「・・・どうしてめんどくさそうな顔をするのかしら」

「めんどくさいからだだよッ！お前ら何の用だ！」

「・・・ひどい」

「ボクの天使をいじめないでくれるかなアホピンク。
蜂の巣にされたいのかい？」

「はいはい、悪かったよ。だから何の用だ？」

「ああ、そうだね。」

ゼノンは銃をディケイドに向ける。

「君達はあるところには行かない」

「……」

「貴方たちはあるところには行けないのよ」

ゼノンとフルーラは、くすくすと笑いながらディケイド達を見つめる。

「……あそこに先生がいるんだな」

「誰もそんな事は言っていないよディケイド、」

嘘つけよ、目がそう言っている。

しかし二人は相変わらず笑うだけ。それ以上は何も答えない

それに と、ゼノンは再び同じ言葉を繰り返す。

「君達は、あそこには行かない。行けない」

その言葉が何を意味しているのか、ディケイド達は理解する。

598

「あなた達も分かっているでしょう？」

あなた達が何をしようが、結局は翼本人が成長しなければならぬ
いのよ」

「……兄貴は、今…どういう状況なんだ？」

ユウスケの言葉にゼノン達の笑い声が止まる。

「危険かもしれないね、下手をすれば…」

「死んでしまうかもしれないわ」

「!?!」

それなら早く助けに行かなければ、クウガは一步前進する。

そして銃声。

クウガの足元に火花が散る

「ゼノン君！頼むツ、行かせてくれ！兄貴が危ないんだろっ!?!」

「悪いがそれは出来ない相談だねクウガ」

「ゼノン君、確かに君がとろうとしている選択はベストなのかもしれない。

でもボクらは人間なんだ。

ベストよりもベターを選びたいんだよ」

「そうだね、キバ。君の言う通りなのかもしれない」

「ワタシ達も貴方達が大人しく言う事を聞いてくれるなんて思っていないわ」

だから、そう言って二人はニヤリと笑う。
そして素早く赤と青のメモリを取り出した！

『ビート…！』 『トリガー！』

「「変身！」」

『ビート・トリガー！』

二人の身体が一瞬で光に変わり、一気にデイケイド達の所まで飛んでいく。

そして光は互いに交わると、ダブルの形を成した後、弾けた。

「うっ！」

「力ずくで通ってみるのもいいかもね」

一瞬で移動された為、三人の反応は遅れる。
そこに打ち込まれる紅き弾丸。三人は大きく吹き飛ばす！

『疾走するは裁きを下す紅の猛火』

「罪を穿つは蒼き銃弾」

ダブルは三人の中心でポーズを決める。

「さあ、デイケイド、クウガ、キバ。ボクらにその力を見せてくれ

！」

ダブルはミュージカルの役者のごとく両手を開きその存在を見せ付ける。

そこにある確かなオーラに三人は少し気圧される。

だがそんな事は言ってもらえない、翼の身が危ないのだから！

「言われなくてもっ！変身！」 『カメンライド』 『クウガ！』

「お願いしますドツガさん！」 『いくつすよ！ドツガハンマー！』

「薰！タイタンだ！」 『うん！』 「『超変身！』」

キバとクウガ、紫の鎧が真紅の弾丸を防ぎながら前進していく。だが特にダブルに動揺は無い。

尚も弾丸を撃ち続けていく。

「ハッ！」 『フォームライド』 『ドラゴン！』

ドラゴンフォームへ姿を変えたデイケイド。

クウガたちの影からひとつ飛びでダブルの眼前へと迫る。

「おや?」

「うっっ!」

いきなり現れたディケイドにダブルは一瞬隙を見せた。
そこにディケイドの蹴り上げが決まる!

ダブルの銃、トリガーマグナムは弾かれ、宙を旋回した後ディケイドの手に収まった。

『フォーム・ライド』 『ペガサス』

ペガサスの力でトリガーマグナムはペガサスボウガンへと姿を変える。

そしてそのままディケイドはペガサスボウガンをダブルへ向けた。

ダブルはやれやれと言ったジェスチャーをとり、両手を上げる。

「おや、武器がなくなってしまったよ」

『大変ねゼノン！』

「俺達の勝ちだな。悪いがそこを通らせて・・・」

『トリガー！』

「は？」

ダブルは素早くメモリを外し、もう一度ボタンを押す。
そして再びベルトへと差し込んだ。

『ヒート・トリガー！』

「げっ！」

ダブルの体が光り、再びその手にトリガーマグナムが握られる。

「くそっ！」

素早くボウガンを発射するが、ダブルもまた赤き弾丸でソレを応戦する。

矢は炎の弾丸を貫くが、そこにもうダブルはいない。

それだけでなく逆に連射で、カウンターまでされてしまった

「更新できんのかよ…」

「便利だろっ？ふふふ」

ダブルは先程と同じくクウガヤキバに向けて発砲する。

二人は防御の構えをとるが…

「うわぁっ」
「…！」

「くっ…！」

頑丈なタイタンとドツガが赤き弾丸の前に押され始めている。

「ふうん、60でも耐えるのかな。」

フルーラ、70に出力を上げてみようか」

『了解よゼノン！』

そう言ってダブルの赤い部分が光る。

ソレと同時に弾丸の威力が上がり、クウガとキバは遂に防御の限界を迎えた。

「ぐわあ！」

クウガとキバは大きく後ろへと吹き飛ばす。

しかしディケイドはその弾丸の中を潜り抜け、ダブルの方へと全速力で向かった！

「うらっ！」

「ふん…！」

マイティにフォームライドしたディケイド。
接近戦に持ち込もうとするが、ダブルはヒラリと攻撃を避け反撃の
弾丸を撃ち込んでいく。

『ゼノン、長引かせていいのかしら？』

『電王が加わればワタシ達も楽には勝てないわ』

「ああ、そうだね。」

「ならさっさと決めてしまおうか？ふふっ」

「くそっ！馬鹿にしゃがって！」

ディケイド、クウガ、キバの三人を相手にしながらも余裕を崩さないダブル。

ただ者ではないのだろう。だが、しかし・・・

「……ふっ、ふっ！」

「『ふ』」

「ふはははー！」

「……何がおかしいんだい？デイケイド」

「なにか、気がつかないか？」

「……」

いきなり笑い出すデイケイド、そしてキバ達に合図を送る。

するとデイケイドクウガ、キバ、クウガ。

三人の仮面ライダーが一行に並んだ

第35話 適者生存（後書き）

はい、と言う訳での35話でした！
次もよろしく！

第36話 心頭滅却(前書き)

今日は更新できました

でも明日はきついですね。すみません

ではごいざー！

第36話 心頭滅却

『ああ・・・なんて事なのかしら』

「え？」

とんだピエロだわ。

そう言ってフルーラは変身を解く、

まだ意味が分かっているじゃないゼノンに耳打ちすると、ふてくされた様に頬を膨らませた。

「はあ...なかなかやるじゃないか。

君のカードは把握していたけど...」

ゼノンは軽く舌打ちをすると、トリガーマグナムでクウガの眉間をぶち抜いた。

クウガはそのままバタリと倒れるが、すぐにデータの残骸となって消える。

「アタックライド、イリユージョン。」

クウガのベルトが君と同じだと気づいた時のボクの気持ちが分かるかい？

まったく、とんだ茶番だよ」

ディケイドは質量がある分身を作るイリュージョンを発動させていた。

本物のクウガ、ユウスケと薫はディケイドとダブルが戦っている一瞬の隙を見抜いて、ドラゴンフォームへと変わる。

そしてそのまま二人のはるか頭上を飛び越えて、翼の所へと走って行くのであった。

「もともとお前らに正攻法で勝てるとは思ってないからな。

悪いけど一芝居させたせてもらったぜ」

「ちっ、やられたよ。ベルトには特に注意していなかったからね……」

でも、いいのかい？

ゼノンは苦笑する。

「ここで翼を助けてしまえばアギトに覚醒するチャンス逃してしまふ。」

そうすれば君達は最悪一生この世界で暮らす事になるんだよ」

「いや…それは違うぜ」

「？」

「人は一人じゃ強くなれないんだよ…」

「……………」

ゼノンとフルーラは、少し複雑な表情を浮かべると

「まあいいや。それもおもしろいかもね」

「ええ、そうねゼノン」

また…いつもの様に笑うのだった

翼は幸せだった。

もう二度と会話すらできなくなってしまった彼女とまたこうして再び笑い合えているのだから。

もう彼は疑わない。

いや、心のどこかで怪しく思うところはあったのかもしれない。
が、彼はソレを否定する。

もう永遠にこの世界にいたいと思う、
目の前の彼女は今もこうして笑っているのだから、それでいい。

それがいい。

この甘いシロップみたいな世界に魂を浸し続けたい。

それを…望む

「どづしたの？」

「いや、なんでもないよ」

あれから何日が過ぎたのだろうか？

いや

もしかすると一時間も経っていないのかもしれない。

だげどどつでもいい、

彼女がいれば…それでいい。

「本当にそうなのか？」

「！」

否定される世界。

その得体の知れぬ声が僕の精神に突き刺さる。

「……葵さん」

「ん？」

「そつだ、僕が彼女を呼べば彼女は返事をしてくれる。それは偽りなんかじゃない、なによりの証拠じゃないか。」

「そついえば翼くんってメガネ掛けてたっけ？」

「え……」

「……少し、外の空気を吸ってくるよ」

「え？ああ、うん、わかった。気をつけてね」

「お前はそれでいいのか？」

「……」

砂浜には名も知らぬ男、いきなり現れて何なんだ……

「なんの……事ですか？」

「とぼけるな。お前も分かっているんだろっ？
この世界は偽りで塗り固められた虚構の存在。

幻で人をあざ笑う偽りの救済。つまり、あの女は
」

「違っッッ!」

違っ!

違っっ!

違っっっッッ!

彼女はそこにいるじゃないか、
なのになんでこの人はそれを認めない!否定する!?

「誰なんですか…貴方は!」

「……お前と同じ、幻にとらわれた愚かな一人だ」

男は語り始める。

彼の子供は既に亡くなっているらしい、

しかしその子供にこの世界で出会えたと…

「だがな、気づいてしまったんだよ。所詮は幻、儚く、脆い幻想だと」

「貴方が何者かは知りません

ですが、葵さんは本物です…」

「本当に、本当に貴様はそう思うのかッッ！」

「くっ…！…！」

男は声を荒げ僕に詰め寄った。

知らない、僕はその手を振り払い背を向ける。

「俺も、俺の仲間も皆幻想に囚われた。
そして残ったのは俺だけだ！」

なぜ、なぜお前達はこの幻を否定しない！
なぜ認めてしまっつ！？」

「辛い事からは逃げていればいい！
嫌な事からは目を背ければいい！」

人間はそういう生き物なんですよッ！
彼女は本物だ！
それでいいじゃないですか！

どうして否定するんですかッッ！」

光と共にベルトが現れ僕に装着された。

「私は彼女を守れなかった。
でも、でも今度は違っ！」

私は彼女を守る！守るんです！」

「やめろっ、目を背けるな！お前はまだ間に合うっ！」

変身 っ

「くっ」

翼は変身する。

アギト

ではなく

静座へ入...

第36話 心頭滅却（後書き）

イリユージョンはカメンライドしていても使えます
ただし、その場合司の精神にかかる負担も大きくなります

と言った感じですかね。

しかし最近暑いっすわ

コレも機関の陰謀なんですかね…

では次もよろしく！

第37話 愛別離苦（前書き）

台詞の一部なんかは原作から引用したりしてる部分があります
士の説教とかね

名言が多いですよ、本当に

第37話 愛別離苦

「やめる！」

竜骨に変わった翼を見て、男は叫ぶ。

「今ならまだ間に合う、

だが、そいつに変身し続ければやがて心も身体も食われる事になるぞ…！」

『守る…彼女を…守る…彼女を…』

僕はどうなってもいいから…』

男の声を聞いても尚、竜骨はふらふらと男の方へ歩いていく。虚ろな瞳で一体何を見ているのだろうか？

男は歯を食いしばる。また駄目なのか？

一体何度この繰り返しが続くのだろうか？

結局誰も幻想からは抜け出せないのか？

「ふざけるなッ！お前の命はお前だけのモノかッ！？」

男は弱気になった自分と、なにより竜骨に向けて言い放った。
そして…ピタリと、竜骨は足を止める。

「お前がここで永遠に夢の中を彷徨うのは勝手だ。
だがそれを悲しむ奴がいないのかと聞いたんだ！」

「……………」

「答えるオオオオオオオオオ！」

鈍る思考の中、ユウスケ達が脳裏を過ぎる。

そしてあの日、葵が死んだ日を思い出す

綺麗な顔を涙でぐしゃぐしゃにしながら薫は翼にメガネを差し出した。

それは事故で亡くなった姉のモノ。

薫はせめてもの形見にと翼にそのメガネを送ったのだった。

正直、彼女の後を追う事も考えた。

だが、そのメガネを受け取った瞬間、その考えは綺麗に消え去る。

今、目の前にいる彼女に、そこにいる弟の為に

「あ……」

そして今、視線の先に見つけたのは……

「兄貴！」

「翼さんっ！」

ドクンッ！

「兄貴！何やってるんだよ！
そんな姿になって何やってるんだよ！！」

竜骨と化した兄に向かって、ユウスケは力いっぱい叫ぶ。
何故翼があのような姿になっているのか、理由は分かりきっていた事。

しかし、ユウスケは叫ぶ

「帰ってきてくれよ！兄貴いッ！

おれ兄貴に期待して裏切られたこと一回もないんだ！
兄貴はおれの憧れなんだよ！

だからこんな所で終わらないでくれよっ！！」

「帰ってきてよ翼さん！
ここで諦めたら絶交だから！
人間としても見ないから！

幻想を打ち破るなんてサルでもできるんだからッッ！！」

泣きそつになりながらも薫は叫ぶ。

「ねえ、どうしたの？帰ろうよ」

後ろから声がして振り向くと、葵さんが僕を迎えに来てくれていた。僕は彼女に微笑みかけると、一歩……

後ろに下がる

「ねえ、葵さん」

「ん？」

「君は…僕の光りだった」

「え……ちょっとどうしたのいきなり」

「どんな暗闇でも君がいれば僕は道に迷うことはなかった」

「……」

「僕も…きみの様になれると思うかい？」

葵さんは何も答えない。

しかし構うことなく僕は続けた

「僕は…今、本当に形だけだけど彼らの引率者なんだ。
もし彼らが迷った時に…」

僕が少しでも力になれば、それはとても素敵な事だとは思わな
いかい？」

「……」

「それが僕の夢なんだ。
でもさ、それじゃあまず僕自身がしっかりしないとね」

軽く笑ってみせる。彼女もすこし微笑んだ

「僕は…君に甘えてたのかもしれないよ。
でも、さっきの言葉で分かったんだ。

僕はもう充分君に甘えた。

だから次は僕がユウスケや薫ちゃん、司君達に甘えられる存在に
ならないとね」

また一步、彼女から離れる。
彼女は何も言わずに微笑むだけ……

「僕は君の死を受け入れられない。
君にまだすがりたい、一緒にいたい。

でも駄目だ。
嫌なことや辛い事から逃げていたい。

でも、それでも人間は進まなきゃいけないんだ」

ベルトから暖かい光りがあふれて来る。
僕は彼女に背を向けて歩き出した。

「……ありがとう、葵。
君とまた話せて嬉しかったよ」

「・・・」

はじめて会った時は引越しの挨拶だったかな。

隣って事もあってユウスケと薫ちゃんはすぐに仲良くなったけど、
僕らは少し恥ずかしくてあんまり話せなかったっけ？

立ち止まりそうになる足と心、しかしそれでも歩かなければなら
ない。

振り返ってはいけない

それから、何度も会ううちに、仲良くなって…そして

「・・・ありがとう」

内ポケットには指輪が入っていた。

彼女に送るはずだった…その指輪が

「がんばってね…」

ふと、後ろからそんな言葉が聞こえた。

僕にもできるかな、皆を照らす道しるべに

「さよなら、葵」

『すみませんでした…』

「お前！まさか」

竜骨は「その」構えをとり、ゆっくりと手を前にかざした。

『…変身！』

天が割れ、一筋の光が竜骨を照らす。

直後、その体が光り輝き、仮面ライダーアギトへと姿を変えた！

「兄貴！」

「翼さん！」

「ユウスケ、薫ちゃん。心配をかけたね。でも、もう大丈夫だよ……」

それに

アギトは薫を見る。

「サル以下は嫌だからね」

「……！」

「うん！最高よ義兄さん！」

薫は涙を浮かべて微笑んだ。

そしてアギトは黒いコートの男を見る。

男は、嬉しそうとも悲しそうとも取れぬ笑みを浮かべる

「幻想を打ち破ったのか・・・」

「はい。いろいろすみませんでした。
ただ気づくだけなのに・・・」

貴方に言われるまで僕は・・・

貴方も
「

「・・・それは、この世界に決着をつけてから聞こうか」

男は小さく笑って姿を消した。

「……そうですね」

アギトは天に手をかざす。

すると、太陽は眩いオレンジ色の光を放ち、彼に新しい姿を与える！

アギト・トワイライト。

それは司ですら知らないアギトの姿だろう。

この幻想の中を切り裂く、橙の輝き。

すべての幻、偽りを破壊する天の力！

「……」

アギトの目には真実が映し出されていた。
この世界の幻影を全て取り除いた世界が
そして、見つける。

この世界の心臓を！

「ふッ！」

アギトはベルトの中心から弓を出現させる。
トワイライトアロー、それをアギトは構え、発射した。

『ガアッ！！』

矢はアンノウン、

ピーコックロード・バーボス・ミラージュに突き刺さる。

それをきっ
かけに幻の世界は崩れ、
真実の世界がさらけ出されたの
だった。

第37話 愛別離苦（後書き）

と、言う訳でオリジナルフォームの登場でございます。

アギト・トワイライト

基本カラーは黒とシルバー。

眼は黄色でクロスホーンは常時展開し、オレンジ色に染まっております

能力は簡単に言うと

まずこのフォームになると自分が受けた状態異常を無効化します
毒とか、拘束とかが解かれる訳です

さらにこのフォームの変身を妨げる事はできません

そして相手の幻術や高速移動なども理解でき、相手と同じフィールドで戦う事ができるようになります

クロックアップの攻撃が通常速度に見えたり、ミラーワールドにも入れちゃいます

ただし弱点としてはとにかくステータスが低いです。グロウイングフォームと同等といった所ですかね

とまあこんな感じのオリジナルフォームでした。これからもオリジナルフォームが登場するんで暖かい眼で見てやってください（爆

では次もよろしく！

第38話 一日千秋（前書き）

平成ライダーにハマるきっかけを与えてくれたのがアギトの映画でした

ではどうぞー！

第38話 一日千秋

「・・・っ、こんなに狭かったのか」

ガラスの様に世界が砕け散った後、そこに残ったのは何も無い砂漠。そこにバーボスミラージュとデイケイド達がいる。

あれ程離れていた筈なのに…

「結局はこの世界は幻影だけの世界だったと言う事か。街さえも幻だったとは…」

「先生！アギトになれたんですね！」

「お、俺の知らないフォームだ…」

デイケイド達はアギトに掛けよる。

「・・・」

「うふふ、どつやら司の言つ事も一理あるわね」

「ああ、そうだねフルーラ」

ゼノンとフルーラは翼がアギトになった事を確認すると、砂のオーロラに消えていった

『何故だ・・・ッ！何故この世界を否定するッ！』

バーボスミラージュは矢を引き抜き、アギトに問いかけた。

『お前達人間はいつも間違っただけだ！
だが、この世界にいればいつまでも幸せに暮らせる。』

そしてすぐに永遠の安らぎである死を迎えられるのだ！
なのに！何故それを拒むッ！』

「確かに、君の幻に浸れば幸せに最期の時を迎えられただろう。
だけど覚えておいて欲しい、人間の幸せは個人の問題じゃないと」

そう言っただけはユウスケと薫、デイケイド達を見る。

「僕・・・私達には守るモノがある。

君には悪いけれど、ここを去らせてもらっよ」

『やめろ！人間は間違える！間違え続ける愚かな生き物だ！』

バーボスミラージュは自らの羽を刃に変えて、発射した。
いきなりの攻撃にアギトは防御が遅れる！

「くっ！・・・ッ！？」

「司君！」

羽はアギトに刺さる事はなかった。
全てデイケイドが受け止めているから！

「間違える事の何が悪い…っ！」

『何っ？』

「人間は痛みを知らなければ成長する事はないッ！
痛みを知らなきゃ痛みを理解する事もできない！

確かにお前の世界にずっと入れたら幸せかもしれないさ、
でもそれは結局自分だけの幸せでしかない！

人は他人と関わる事で良くも悪くも成長するんだ。
他人を幸せにする事も人間には必要なんだよ。

お前はそれを愚かと言うのか！？」

『当然だ！お前達はいつまでも幻想の中にいればいい、
夢の中で暮らせば良い！
永遠に幸せでいられるのだから！』

「それが違うって言ってんだよッ！」

人間は誰だって幸せになりたいさ、幸せに暮らしたいさ！

だけど現実はそのじゃないんだよ、でも皆生きてる！

何かの為に必死で生きてるんだよ！

俺達も、俺達の世界のために！

ここで止まる訳にはいかないんだッ！

守りたい人がいるんだよッッ！！」

『守るために傷つく？』

人を幸せにする？

愚かなッ！

お前達人間はいつまでも夢の中で生きていれば良い！

成長などしなければいい！』

「そうだね…愚かだよ。いつまでも亡くなった人間にすがって…」

だけど、と。アギトはグランドフォームへチェンジする。

「大切なモノの為に戦い」

ユウスケはクウガに変身する。

「友達の為に戦い」

キバ、ディケイドもまたバーボスミラージュに向かって構える

「時に間違え、時に迷う。それが・・・」

『ファイナル・フォームライド』

「人間と言う、愚かな生き物なのさ」

『アアアアギト!』

アギトの体が光り、アギトトルネイダーへと変化する。
ディケイドはそれに飛び乗ると、さらにカードをライドさせた。

『ファイナルフォームライド　キキキキバ』

キバアローを構え、ディケイドはアギトトルネイダーを発進させる。
風を切り裂くそのスピード！

『理解できぬかッ！ならば永遠の安息を！』

次々に襲い掛かる羽を楽にかわす小回り

アギトトルネイダーは猛スピードでバーボスミラーージュに迫る！

『全ての人間に永久の楽園をオオオオオオオオッ！』

『ファイナル・アタックライド　キキキキバ！』

「やあアアアアアアアアアアアアッ」

迫り来る無数の羽を貫き、キバアローがバーボスミラージユを捕らえる。
しかしそれでもバーボスミラージユは人の永遠たる安息を説き続けた。

「お前の幸せは……」 『ファイナルアタックライド』

辛すぎる

『アアアアギト』

アギトの紋章が目の間に現れる。
その紋章を通過すると、アギトトルネイダーは金色の光に包まれた！

『「うおおおおおおおおお！」「』

『ギャアアアアアアアアッ！！』

そしてそのままバーボスミラージュを吹き飛ばす。
美しい羽根を撒き散らせ、バーボスミラージュは地に伏した。

『何故…何故幸福を…否定す…る？』

「俺は破壊者だ。だからこそ、この幻を破壊する」

『ならば…ば…答え…ろ！お…前の幸…せ…とは…なんだ？』

「そんなもん…分かるかよ。だから探すんだよ、俺達の世界でな…」

「君は……」

アギトはバーボスミラージュに手を差し伸べる。
保健室の治療器具を使えばまだ助かるかもしれない。

「君は何故、人に幸福を与えるんだい？」

『理由か、それは……儚き夢……叶えたい……願っても、
成就……したい望……み……も……あつた……だろうに』

……少女は……幸せに……な……れ……』

バーボスミラージュは訳の分からない事を言う。
そしてその手を振り払い消滅した。

アギトはその手を強く握り締める。

勝利の余韻も、喜びすらない、ただ存在するのは虚しさ。

「こんなに…虚しい勝利は初めてだ」

変身を解いた司は、静かにそう呟いた。
そんな司の肩を翼は優しく叩く。

「帰ろうか、もうこの世界には…」

翼は何もない世界を見回す。そう

『翼くん！』

何も無い世界なのだ。

「この世界には、何も・・・」

誰もいないんだから……」

翼の頬に一筋の雫が流れたのだった。

「貴方は、これからどうするんですか？」

「そうだな、もうこの世界で迷う人間もいないだろう、俺の役目は終わった」

「役目……ですか……」

「ああ。少しでも我を取り戻してくれる奴らがいればとな……
だがまあ結果としては……散々だったんだが」

何もない世界で二人の男が立っている。
翼と黒いコートの男

「想う心が強ければ強いほど幻影はソイツを捕らえて離さない。皮肉な話だ」

「……………」

貴方はどうやって幻想を

翼はその言葉を口にするのを止めた。

彼もまた自分なりの決着をつけたんだろう。

それを自分が知ってどうとなる事でもない。

「何、どこかまた新しい世界へ…旅立つさ。

俺達の旅はここで終わったが、俺の旅はまだ終わってないからな

…」

「やはり・・・貴方は」

お前も薄々気がついていたんだろう？

そう言っつて男は笑う。

翼は申し訳なさそうに微笑み返すと、深く頭を下げた。

「お願いがあります」

「ん？なんだ？」

翼はベルトを出現させた。

「一度、手合わせを・・・お願いします。先輩」

「ははっ…」

男は困った顔をしながらも、翼の前に立った。

「いいだろう、見せてみるッ！」

光りと共に男の腰にもベルトが出現した。
二人はそれぞれの構えをとり、対峙する。

「貴方の名前を教えてはくれませんか？」

「ふっ、名前などもう忘れたさ」

男は一体どれくらいの間、この世界で人を見守り続けたのだろうか？
名前も忘れるくらいの時間。もはやそれは途方もない世界

「だが・・・」

「「変身！」」

二人は変身する。アギトへと！

「俺も不完全だが、一応はアギトだ。

そうだな、お前とは違うアギト・・・」

男は笑う。

名前を決めた事にか、それとも…

この世界から解放された事へ…なのだろうか？

「俺の名はアギト！」

仮面ライダーアナザー・アギトだッ！

行くぞ！アギトオオオオッッッ！！！！」

「うおおおおおおおおおッ！！！！」

悲しき世界で、二人のキックがぶつかり合った。

「やはり・・・彼は強いね。負けてしまったよ」

「兄貴・・・」

校庭で待っていたユウスケに微笑みかける。

「次は拓真君が選ばれたんだって？
僕も協力するよ。きっと彼も大丈夫さ、ちゃんとファイズになれるよ」

「・・・ああ。そうだな！」

翼はメガネに触れる。度が入っていないそのメガネ。

「割り切れるわけ…ないじゃないか…」

翼は優しく、悲しく微笑むと、皆の所へ歩き出すのだった。

第38話 一日千秋（後書き）

アギト編は次の番外編でラストです。

そう言えば総PVが10000を超えました

見てくださっている方、どうもありがとうございます

では次もよろしく！

第39話 番外編 相思相愛（前書き）

今回は補完シナリオみたいなモノです
あとすいません。次の試練の整理の為、すこし更新をお休みする…
かも

ではごっごぞー！

第39話 番外編 相思相愛

ユウスケが八歳になる頃、僕達は親の都合でこの町に引っ越す事になった。

「・・・はあ」

「どうしたんだよ兄貴い、元気ねーぞ」

そりゃそうだよ。

嫌に決まってるじゃないか引越しなんて・・・

いやユウスケはまだいいさ。小学校ならすぐに馴染めるだろうよ。でも僕はもう中学二年なんだ、

666

友達できるかな・・・

いじめられないかな・・・

気が重い・・・

まあ今にして思えば思春期独特の悩みとかもあった訳で・・・
とにかく不安しかなかった。

ユウスケはそんな事もないのか、

新居を駆け回り怒られる。ちょっと反省してまた駆け回る。その連続

(うらやましいよ、ユウスケが…)

憂鬱だよ…本当に。

そう思いながら僕は部屋へ向かった。

しばらくして隣の家に挨拶に行つて来いと言われた。

本当はそんな事したく無かったけどどうせ反抗しても無駄なんだろう。大人しくユウスケを連れて外に出て行く。

右隣の家には老夫婦が住んでいた。

なんでも孫が6人もいるらしい、しばらく無駄話をして適当な所で切り上げる。

まあ変な人じゃなくて良かったよ。

トラブルは避けたいしね

「兄貴おれ退屈う」

「そう言つなよ、もうすぐ終わるから」

左隣の家のインターホンを鳴らす。

どうにも自分はメンタルが弱いらしい、誰が出てくるかドキドキしながら待つ。

怖い人だったら嫌だなとか、誰だつてあるだろ？

そんな事を考えていると、扉が開く。

大丈夫、ティッシュ渡してさっさと消えよう。

そしてもう関わらなければいい。うん

「はぁーい!」

「あ…」

扉からユウスケくらいの子が出てきて、こちらに走ってくる。

「どちらさまですかあ？」

「ああ、あの…えっと、隣に引越してきたんですけど。お父さんかお母さんはいるかな？」

「うっん。今はお仕事、お姉ちゃんならいるよ。呼んでくるね！」

「あーちょっとー！」

女の子は僕が何も言っていないのに姉を呼びに行ってしまった。

「はは…なかなか元気な子だね…」

「ふああああ」

ユウスケは興味が無いと言わんばかりにあくびで返す。

「呼んできたよー！」

少しして女の子が戻ってくる。

別にこっちはまだ挨拶とティッシュ渡せばそれでいいんだけど…

「あの…」

家の中から僕と同年くらいの女の子が出てきた。
妹と同じポニーテールの女の子だった

・・・参ったな。あんまり女の子と話した事ないんだけど

思春期と言う事もあってか、中一の時からどうも女の子とうまく話せなくなってしまった。

目が合わせられないというか…

(情けない…)

突発的に目を反らしてしまう。

小さい女の子は胸を張って、僕達の前に立った。

「私、空野薫っていろいろの！よろしくね！」

「あ・・・う、うん。よ、よろしく」

手を掴んでぶんぶん握手する。

なんだか恥ずかしくなって目を反らすと、今度は姉の方と視線がぶつかってしまった。

「あ…」

「…あつ、あの！私、空野葵です！」

「あ！えとつ、小野寺翼です！」

直立する。僕達…

「あつ、あの…コレ！」

なんだか緊張してしまつて声が震える。

情けなくて死にたくなるが、なんとかティッシュを彼女に渡す。

彼女もまたぶるぶると震える手でそれを受け取りお礼を言った。

「…」

「…」

何も…しゃべる事がない。

いよいよ気まぎれになったので帰ろうとユウスケを見るが…

「げっ！」

「あっ！！！」

ユウスケ…お前…

「おー。白だ…」

あれだけ…しんちゃんの真似はするなど…

「きっ、きまきまき…」

ユウスケは薫ちゃんのスカートをめくり、じっくりと観察していた。

終わった、何かいろんなモノが終わった。

「きゃあああああああ！」

「ドゲブツ！」

薫ちゃんは回し蹴りでユウスケを吹き飛ばすと、赤面しながら走り去っていく。

ああああ最悪だ！
いやもう最低だ！

いきなり隣人との関係が終わる！
さよなら、新しい土地での生活・・・

「ユウスケ！謝ってこい！今すぐに！」

「ええ？お、おう！」

薫ちゃんを追いかけてユウスケも走っていく。
うまく許してくれればいいが…

「あ、あの…本当にごめんなさい！家の弟が最低な事を」

「えー？あ！あははは、まあ小学生なんだからしょうがないよね」

そう言っつて葵さんは笑う。

(かわいい…)

「……………」

はあ…何を考えてるんだ僕は。どうせ彼氏とかいるんだろうな
でも、なるべくなら彼女に嫌われたくはない。
変な事してしまう前に僕も消えようかな…

「じゃあ…僕はこれで。あのっ、本当にごめんなさい」

「あ、ううん。」

その…また、いつでも来て下さい！お茶、ご馳走しましゅから！」

赤面していく彼女、僕は彼女が噛んだ事に気づかないふりをしてユウスケの後を追う。

大丈夫だろうか？なんか、心配になってきた…

「……………」

思っていたより余程早く二人を見つける事ができた…のだが…

「……………」

公園。二人は夕日をバックにガツチリと握手を交わしていた、ちよつと…あ、いや、かなりポロポロになっているユウスケが気になるが、二人は笑顔で友情の誓いを交わしている。

どう言う状況なんだよ…

まあでも、険悪な雰囲気じゃないだけよっぽどマシか

「薫ちゃんゴメンね。ユウスケが変な事して」

「ううん、大丈夫！私達もう友達だから！ね？ユウスケ！」

「……………うん」

「そ、そうなんだ。それは良かった」

「うん！あ、もちろん翼さんも友達よ！ね？ユウスケ！」

「……………ああ」

何があつたかは聞かない方がいいだろう。

もはや明確になった薫ちゃんとユウスケの上下関係を感じつつ、僕らは家路へと向かうのだった

まあ、どんなに嫌がっていてもその日はやってくる訳で…

「小野寺翼です・・・その、よろしくお願いします・・・」

不安と緊張でどうしても、うつむいてしまう。
クラスメイトの視線がキツイ…

空気が重い・・・

「ははっ、そんなに緊張しなくても大丈夫。
皆、よろしく頼むぞ！ははっ！」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

「え？」

初老の教師の一言で教室の空気が一気に明るくなる。
不思議に思いながらも席に着くと、隣の男の子が話し掛けてきた。

「よお転校生！俺、火川 涼。よろしくな」

「あ、うん。よろしく」

「お前運がいいよ。」

この学校で一番人気、倉本先生のクラスになれたんだからよ」

そう言っつて火川くんは笑う。

「ここ…人気なんだ？」

「ああ。倉本先生つてなんか不思議な雰囲気があっつてさ、
クラスの空気も明るくなるんだよ」

「へえー…そうなんだ…」

火川くんの言うとおりだった、それからまさには順調そのもの。
三日経ったがクラスにも大分馴染める事ができたし、

僕が想像してたよりずっとうまくいっている。

「なっ、言ったる。あの倉本先生のクラスはマジでスゲーんだ」

ライメンに大量のコシヨウを振りかけながら火川くんはそう言う。

「うん…すごいね」

すごい。普通にそう思う。というか憧れる…

僕も、あんな教師になりたいな

「あ、そう言えばさ。翼部活は決めたのか？」

「あ。忘れてた。どうしようかな…」

「俺サッカーやってんだけどさ。

ウチの学校体力に自信なかったら運動部は止めといた方がいいぜ。

顧問の奴ら全員がそりゃもう鬼で鬼で！」

「そ、そうなのか…」

うーん。別に運動が苦手ってわけじゃないけど…

「文化部はどんなのがあるの？」

「あー…まあそうだな。人気なのはやっぱり美術とか…吹奏楽とかだな」

うーん…別に嫌いじゃないけど…

「反面、家庭部はやべえな」

「家庭部？」

「おう、部員が一人だけなんだよ。三年のな、このままじゃあと一ヶ月くらいで廃部だ」

「へー。どんな事やる部活なんだい？」

「ん？ああ、何かいろいろやってるみたいだけどな。野菜作ったり、服つくったり。」

「どうだ？お前が入れれば廃部にはならないぜ。やってみるか？」

「ええ！？う、うーん…」

正直あんまり興味ないなあ…

「まあ、…うん。」

そうだな。今日じっくり考えてみるよ」

「そうだな、そうした方がいいぜ」

そう言っつて僕らは別れた

「あ……」

家の前までくると、隣の家の庭に葵さんの姿が見えた。
そう言えば葵さんはどのクラスなんだろうか？

一緒じゃないのは少しだけ残念だった…かな

「……」

何やら葵さんは深刻な表情で花に水をやっていた。
悩み事でもあるのかな…

「・・・ッ」

声をかけてどうにかなる訳でもない、まだそんなに親しくないんだ。僕は大人しく家へと戻った。

次の日、僕は家庭科室の前に突っ立っていた。どうも昨日火川君に言われた事が引っかかる…

お前が入れば廃部にはならないぜ

「あんな事言われちゃなあ……」

正直、あんまり興味は無いから少し見学して帰ろうかな……
でも入るのもなんだかな……

そんな感じで迷っていると、向こうからドアが開いた！

「あっ……！」

「わあっ！」

「え？」

そこから出てきたのは……

「あ、あの！葵さんっ?」

「あ…ああ！っ、翼くん！」

僕らは互いに見つめあったまま固まってしまっ。

「あ…えと…どうしてここにっ?」

しばらくして葵さんが口を開いた。僕も慌てて理由を説明する。

「え！そうなの！嬉しい！」

「え…?」

「私なの、この部長！」

先輩…って事は年上だったのか！

「あ！すつ、すいませんでした！僕、先輩だとは知らずに！」

「あ、いやいや！いいよつ、大丈夫」

葵さんの表情が明るく輝く。

・・・ちよつと、待て。

何かやばくないか？これはまさか…

「入部希望って事でいいんだよね！？」

ほらキタ！

やばい！

適当に見学して帰るつもりだったのに！

こんな嬉しそうな顔してる彼女になんて言えばいいんだ！？

「助かるよ！もう私一人じゃ限界だったの。」

でも翼くんが入ってくれるなら」

「あ、あの先輩！」

「うん？」

断るなら今しかない！今ならまだ間に合

「……どうしたの？」

「入部……します」

断れる訳ねえよ……

「ッ！ うん！ 本当にありがとう！翼くん！」

「は、ははっ！ ははは……はあ……はあ……」

まあ、いいか。葵さんが喜んでくれるなら…

その日から僕と葵さん。二人だけの家庭部が始まった。
顧問の先生すら始めと終わりにしか顔をださない過疎っぷり。

若干これからの事に不安を抱きつつも、
もう入ってしまったんだからしょうがない…

「いてっ！」

「あ！大丈夫？」

余計な事なんて考えるモンじゃないな…

針で指を刺してしまった。

別にたいした事ないけど、葵さんは心配そうにオロオロとしている。

「別に大丈夫ですよ。続けましょう」

「う、うん」

今日はティッシュの箱に被せるカバーを作っていた。
まあつまらなくは無いからいかな。

むしろこう言う事は嫌いじゃない。人と競わなくていいし

「イデッ！」

…だけど、どうにもこうにも不器用なのか？
さっきから何回も指に針を刺してしまう

「翼くん血が出てる！」

「ああ、いいんですよ。

それよりゴメンなさい、僕センス無いみたいですね。あはは…」

「ううん、誰だって始めからはうまくできないよ。大丈夫だから」

そう言っつて葵さんは可愛いキャラクターが印刷されている絆創膏を
取り出す。

そして遠慮する僕を無視してそれを指に巻いてくれた。

「すみません…」

「ううん、大丈夫だよ」

そう言っつて笑う彼女。

絆創膏まで貰ったんだからこれ以上失態は晒せないな…

「いっつ…」

ほらこれだよ…現実って厳しいな…

「ああ！兄貴ー！なんだよそれ！」

「ん？ああ、作ったんだよ」

「へえー」

あれから二日かけて僕はその歪な作品を完成させた。

正直、葵さんが作ったものより百倍くらい酷い出来だったが、彼女はうまいねと誉めてくれたので…まあ良しとしよう

まあお世辞でも嬉しかったな

「・・・薫ちゃんとは仲良くなってるか？」

「おお！今度遊びに行くんだー！」

「へえ。失礼のないようにな」

「おおー！」

まあそう言うのは子供の特権だよな。

「先輩はどうしてこの部活に？」

「あーうん。そうだなあ…」

家庭部に用意された小さな畑、そこに実ったトマトを収穫しながら彼女は腕を組む。

「…「うう言つのが好き」だから？」

「へえ。そうなんですか」

「…「翼くんは？」「うう言つのが好き？」」

「ええまあ、最近楽しくなってきました」

「…「ふふっ、よかった」

ちらりと彼女を見る。トマトを見る彼女の顔はとても優しかった

「先輩は…優しいんですね」

「えっ？」

あれ…？

やばい、何を言ってるんだ！

「あ！いえ…その…ッ」

「あっ、あははは！やだなあお世辞がうまいんだから！」

恥ずかしくなって赤くなる僕たち。しばらく沈黙が続く…

「あの…」

「あ、はい！」

しばらく黙々と野菜を採っていたが、葵さんが口を開く

「翼くん…」

本当は・・・その、他に入りたい部活とか、あったんじゃない？」

「え？」

「ほら、この部活って…正直あんまり男の子に人気ないし…
翼くん無理してるんじゃないかって…」

もし他に入りたい部活とかあったら 「

「楽しいですよ」

「え？」

「すごく…楽しいです。だから、やめません…」

「え…あ…う、うん！あ、ありがとう…」

彼女は嬉しそうにまた野菜を採る。

楽しい…？

そうだな。ああ、楽しかった。

「あにきーっ！」

「わ！」

いきなりユウスケが僕の部屋に飛び込んできた。

おかしい…

コイツは確か薫ちゃんの家遊びに行くとか言ってたのになんで…

「お前っ、遊びに行くんじゃ…！」

「兄貴もいごう！さあ！早く！」

「おいっ！っつて、ちょー！」

ユウスケは僕の手を掴んで強引に家をでる、そして彼女の家に向かった。
ちよっと待ってくれよ！心の準備が！

「あ……」

「あ……」

そのままズルズルと引きずられ、遂に彼女の家に入りこんでしま
う。

当然彼女もいる訳で……

私服の彼女を見るのは久しぶりで、なんだか新鮮だった。

「あのっ……その、お！お邪魔しましゅー！」

「えー！あー！どっ、どっいたしまちゅてー！ー！」

「……………」

互いに真っ赤になってうつむく。

なんて恥ずかしいんだ…

「ほら！どうしたの！お姉ちゃん！翼さんが来たのよ！」

薫ちゃんがジュースを持って出てくる。

「お姉ちゃんってばユウスケが来たときにキョロキョロしてて、
どうしたのかと思ったたら翼さん探してたんじゃない！」

「だから連れてきた！へへっ！」

「ああ！いや…その！それは！」

「んもう！」

「そんな事だから今まで一度も男の人と付き合った事ないんですよ
！」

「ひゃああああ！？」

さらに赤くなる葵さん。

ユウスケ達はもう僕らを放っておいてゲームで遊んでる…

「あ…あの…先輩？」

「……はい」

「皆で…人生ゲームでも…しましょっか？」

「……はい」

その後もしばらく彼女は真っ赤なままだった…

先輩、彼氏いない…のか…

「兄貴、何にやけてんだ？」

「つつっ！」

いや、気をつけないとな…ハハハ

「最近さ、兄貴家の庭で野菜つくってるんだよ」

「お姉ちゃんも最近翼さんの話ばかり！」

二人がうんざりする中も、

僕と葵先輩はずっと菜園だの裁縫だのと盛り上がっていた。

あの日から頻繁・・・とまではいかないが、

僕も先輩に会いに家に行くようになっていて、部活も素直に楽しい
と思えるようになっていた。

もちろんそれは葵先輩がいるから…というのもあったが…

二人だけだったけど、僕達はいろんな事をした。

日によっては何もせず、ただ喋るだけの日もあったが、それはそれ

でとても楽しかった。

月日が経つに連れて、僕らの交流も深くなった。

ユウスケと薫ちゃんに付き合っているんな所にも行ったっけ。

プールとか映画とか…

クリスマスとか、バレンタインで

葵さんからプレゼント貰った時は嬉しくておかしくなりそうだったよ

「もう、翼くん。こんなクリスマスの日に彼女といないなんて駄目だよっ！」

「葵先輩だって！」

「…ふふっ、そうだね」

「あはは…」

寒くてどうしようもない日だって、二人で寄り添えば不思議と暖かった。

「あああああ！急がしーっ！」

「どうしたの？最近いつもそんな感じじゃないか」

火川君は一味唐辛子を大量にうどんに投入する。

「いやほらよ、もうすぐ三年いなくなるじゃん？」

まあ一貫性だから別にお別れって訳じゃねえけどよ。

ウチの学校って高等部と中等部で部活完全に別れてるっしょ？」

そう言って火川君はうどんをすすり、入れすぎたのか直ぐにむせて

しまつ訳だが

「くくっ！入れすぎ」

「だな…。んでよ、なんかお別れパーティーでもやるうかつて話になつてるんだよ。

んなもん個人でやれっつの！」

そう言つてまたうどんをすする。そしてむせる

「あははは！まあお世話になつたんだからいいんじゃないか？」

「ま、そうだがよ。ああ、そう言えば翼も先輩いるんだろ？隣に住んでる…。あー、なんつつたっけ？

文化祭の時お前と一緒に会つたんだけど…」

「ああ、葵先輩？」

「あ！そうそう葵先輩ね。

その人ももう高校なんだからよあ、お前お別れ会でもしてやれば？」

うーん、お別れ会か…

「どんな事をするんだい？」

「げほっ！げほっ！ ああっ、普通になんか食ったりよ。
あと女子とかは告白するヤツもいるらしいぜ？」

「・・・げほっ！」

「へー……」

告白・・・か。

もし、僕が先輩に告白したら……どうなるのかな。

いや、駄目だ。もし……拒絶されたら……

「翼」

「え？」

火川君は急に真面目な顔になる。

「ずっとそのままの関係なんてありえねえんだぜ？」

「えっ…?」

まるで心を見透かされたのかと思うほど、火川君の言葉は僕の心情に響いた

「やる」

「は？」

火川くんはうどんを僕のほうへ差し出した。

「グッドラック！」

「ええ!?!」

そう言って笑うと火川くんは帰っていく。

「……」

僕はそれを一気にすった。

「げほっ！ゲホッ！」

本当、入れすぎだよ……

「え！何コレ！」

「いや……ほら、先輩もつすぐ高等部だから……」

「お別れ会？」

「う……うん」

「いいの！？嬉しい！」

葵さんはテーブルに並べてあるお菓子を手にとって口に入れる。

「このクッキーおいしい！」

「凄いね、どこで買ったの？」

「あー…それ、僕が作ったんだ…」

「え！」

「うまくできたみたいだね、良かった」

「そう…なんだ。」

「もしかして…私の為だったりするの…かな？」

「…なんて、あはは」

「も…もちろん」

「そう…なんだ。…嬉しい」

少し恥ずかしくなって僕達は目をそらす。

「「あのっ!」」

「あ……ど、どつぞ!」

「え!あ!う、うん!つ、翼くん!

もし良かったらさ、私と一緒にバイトしない?」

「バイトですか?」

「うん、あと一年後にさ。

知り合いのお花屋さんがやってみないかって?

翼くんも好きでしょ?お花とか!」

「……はい!」

その返事を聞くと、葵さんは嬉しそうに微笑む。

「……葵先輩」

「うんっどどしたの？」

「その・・・」

呼吸を整える。

やばい…くじけそうだ！

「……ッッ！話があるんです！」

「う、うん…！」

「僕っ…先輩に嘘つきました」

「え！？」

「僕っ、花が好きなんじゃありませんッ！」

「・・・あ。

う、うん、そうだよね！

「ごめんね無理に誘って」

「違います！そういう意味じゃない！」

「うえ？」

「僕は…っ！花が好きなんじゃなくて！先輩が好きなんです！」

「……………」

「…………ツ」

「……………えっ！？」

真っ赤に赤面する先輩。僕は気にする事無く続ける！

「家庭部はとても楽しかったです。

でも一番楽しかったのは先輩といた時間なんだ！

葵先輩！どうか僕と付き合ってください！」

もう、なるようになれっ！僕は彼女に向けて手を差し伸べた。

「た」

「・・・？」

「私も…翼くんといった時間が何よりも好きだった…」

彼女は両手で僕の手を包み込んだ。

「私で・・・よければ」

「！」

僕達は笑顔で見つめあう。

「あ…！そのっ…！ありがとうっ！！じゃいましゅー！」

「どどどどっ！たちまちゅて…！」

「……………」

大事なところでどうしても締まらない！！

僕達は恥ずかしさと何故か無性におかしくなって笑い出す

「あはは…葵先輩」

「ふふっ、翼くん」

僕たちは強く抱きしめ合つと、もう一度笑い合つた。

そして月日は流れて…

「おい！今攻撃当たってなかったろ！」

「はいはいワロスワロス、こんなの絶対おかしいよってか？
訳が分からないや、君達はいつもそうだね　　って！え？はっ
！？」

おい！なんだよそれ！今攻撃当たってなかったろっが！判定おか
しいだろ！」

「同じ事いってんじゃないわよ！ほら！ユウスケ、決めちゃって！」

「おおー！」

ゲームで盛り上がっている司達を翼は二階から確認する。

「あはは、元気がいいね皆」

「どうなの翼くん？」

葵さんはコーヒーを僕に渡すと、隣に腰掛けた。

「うん、まあまあかな。」

順調にいけば来年か再来年には実習くらいはいけそうだよ

「困ったことがあるならいつでもお姉さんに相談してね！」

そう言っただけ葵さんは胸を張る、

「私と葵さんは一歳しか変わらないじゃないか」

「あー！また私って言った！しかも葵さん！」

「常に使っていないと大事なときに素にもどっちゃうんだよ。それでこの前怒られちゃって」

「じゃあ、せめて二人のときは無しにしない？」

「・・・分かったよ、葵」

「ふふっ、よくできました」

そう言つて葵さんは僕の膝に座る。

恥ずかしくなつて退かそうとしても、彼女は離れない。

呆れる僕を気にする事もなく、

彼女はそこら辺にあつた雑誌をパラパラとめくつていく。
そこには新婚のカップルの話がたくさん掲載されていた。

葵さんはそれらを目を輝かせながら見る。

「あーあ。なんかさ、海の見える丘に住みたいね」

「ええ？」

「うん。レンガで家を建ててさ」

夢見すぎだよ。

そう言つと葵さんは残念そうに笑うのだった…

「っ！だけど…」

「え？・・・あ」

葵さんを後ろから抱きしめる。

「今は僕自身まだまだただけど・・・いつか・・・その・・・」

「・・・」

「ぼ、僕とっ、けっ！結婚・・・してくれませんか？」

「・・・いいよ」

「ほ、本当に!？」

「嘘ついてどうするのよ」

「はっ、はは！ははははー」

「もー・・・簡単にいったからって！
ちゃんと幸せにしてよー！」

「う、うん！絶対幸せにするよ！」

二人は、恥ずかしそうに、でも嬉しそうに笑う。

「ねえ翼くん。」

「ん？」

「指輪は？」

「え！？」

「つぶつぶ、ないのお？」

「……はい」

「え！？」

翼はポケットからそれを取り出した。
眩い輝きを放つソレを、葵に見せる

「え！ええ！？本当に!？」

「あはは、安物だけどね。それは葵さんにプレゼント
本当のヤツは」

「・・・」

葵は指輪を受け取ると、迷うこと無く左手の薬指にはめた。

「葵さん・・・」

葵はニツコリと笑う。

そして何も言わずに目を閉じ顔を近づけた。

翼は少し躊躇ったが、恥ずかしそうに笑うと、触れるだけのキスを
交わす。

ずっと、この幸せが続くんだろう

そう、思っていた。

でも、世界は残酷だ

ずっと一緒に居ようって言ったじゃないか

いろんな所へ行こうって約束したじゃないか

互いに助け合って生きていこうって誓ったじゃないか

なのに…なんで…

「どっしてなんだよ……」

目の前は彼女がいる。
こんなに近いのに、手が届くのに…

届かない。

彼女が見えない…

なんで？

どうして？

何で何だよ…

彼女が何をしたんだ。

彼女が誰かを傷つけたか？彼女が誰かを不幸にしたか？

何で、何で彼女なんだよッ！

ふざけるな。ふざけるなっ、ふざけんなッッ！！

「お…ねえちゃん…大学から…帰る途中…車っ…に」
泣きながらも薫ちゃんは僕に事情を説明してくれた。
だけど、ゴメンね…

もう何も聞こえないんだ。

彼女の声も…何もかも…

「…ツ！…っ」

ユウスケは僕たちに声をかけようとするが何もできずにいた。
今にして思えばユウスケも泣きそうだったな…

「葵い…」

人の命は簡単に無くなってしまふ。

事故、彼女は運転をミスした車に当たって死んだ。

どうだ？こんな簡単な理由で人が死ぬんだぞ！

僕はだれを憎めばいい！？

どうすればいい！？

ああ、駄目だ。

いつそ運転してたヤツがクズなら僕はそいつを憎んで生きていける。
でも…彼だって…わざとじゃない…

正直運転手が憎いさ、だけど彼を殺したいとは思えない。完全に恨
めない…

葵さん、答えてよ。僕はどうすればいいんだよ…

もう、何をやってもどうでも良かった。
食事だって、なんの味もしない。

夜だって、眠っているのか、いないのか。
自分でも分からない。

いっそ、彼女の所にいこうか。
そうすれば…僕も…楽に…

「翼さん…っ！」

そんな時だった、薫ちゃんが僕にそれをくれたのは。

「・・・これは？」

「お姉ちゃんの…こんなモノしか無くて…ごめんなさい」

僕は見たことがなかったけど、彼女が最近買ったらしいメガネ。

「ねえ、翼さん…酷いお願い…してもいい？」

「え…」

薫ちゃんは消え入りそうな声だった。
目には涙が浮かんでいる

「お願いだから…笑ってよお…」

「…」

笑って…か

「このままじゃ…」

翼さんもいなくなっちゃうんじゃないかって…

そしたら…もうっ、

私もユウスケも耐えられないよお…」

「薫ちゃん…」

「……え？」

手を出す、

「大丈夫かい？」

笑って。

「あ…」

命は自分だけのモノじゃないのがややこしいね。
コウスケも薫ちゃんも…両親達さえいなければ君の後を追えたのに。

「翼さん…」

「ほらほら、泣いてちゃ綺麗な顔が台無しだよ？」

いつまでもしまらないと、君に嫌われてしまつからね。
それだけは避けないと…

「ちゃんと……」

皆辛いんだ。

君は薫ちゃん達が悲しむのは見たくないだろ？

だったら、せめて彼らの支えにならなきゃね…

「笑わ…ないと…ね」

君のところに行くのは…

その後でもいいかな…

「翼ちゃん……」

彼女の手をしっかりと握って、僕は笑った…

「……」

今、僕が仮面ライダーになったなんて言ったら君はどんな顔をするんだろうね。

「……」

いや、そんな事より…

まだ未練がましい僕を軽蔑するかい？

「どっち…なんだろうね」

時計を見る。もうすぐ誰かが起きてくる頃かな…

今日もいい日になるといいね

「・・・やあ、おはよう」

だから僕は、今日も笑顔で朝の挨拶を交わす。

第39話 番外編 相思相愛（後書き）

「愛とは…実に不思議なモノだ」

そう思わないか？そう言って女は笑う

「ええ、そうですね。時に悲劇になり」

「時に喜劇に変わる」

その問いかけに答えたのはゼノンとフルーラだった。
相変わらずクスクスと笑う二人につられ、女も笑い出す

「さて…悲劇で終わるか…」

女は椅子にもたれかけ、ゆっくりと目を閉じる。

「それとも…」

ゼノンとフルーラはニヤリと笑って背を向ける。
どうやら次の世界が見えてきたようだ

「フフフ…」

楽しんでいるぞ、

そう言って女もまた怪しげな笑みを浮かべるのだった

第40話 211232 (前書き)

はい、と言つ訳でファイズ編でございます
ではございぞー！

檻、それがこの世界最初の感想だった。

その文字の通り、この街は巨大な檻で囲まれていた。

空さえ鉄の網目にさえぎられ、その広い青空でさえ覆い隠している。

「なんか・・・気味が悪いな」

「檻で閉じ込められているのか、

それとも何かからこの街を守るために檻で囲んだのか...

気になるところではあるね」

「つか、そもそも檻...ていうか柵...ていうか分かんないけどさ。

それに出口がちゃんとしてっかもよ?」

いろいろ話し合っつて、

結局外に出ているいろいろ調査してみようと...言っついつも...の答えになった。

ただ、こんな鉄の網に囲まれてる街、あまりいい気はしない訳で...

「あー...ほれ、匡。ちょっくらピューっと頼むわ」

「えっ…あ、いや兄さんこそライドでちょちょいと…」

「……」

正直、行きたくないですオーラをそれぞれは発する。

檻と言う単語でいい気がする訳がない、それぞれは沈黙の抵抗をつづける

「金髪ツインテール幼女にならペットにされてもいいですけどね。
ハアハア……」

「少し黙ってろ、ぶち抜くぞ」

「あああッもう!」

だがまあいつまでも黙っていても始まらない。

司は元気良く立ち上がり、その手を高く振り上げた。

「じゃんけんだ！じゃんけんで決めるぞッ！」

良太郎、巨、翼はこくりと頷くと、手を出す

「そう・・・だな。」

よし、じゃんけんでいこう！」

ユウスケはうんうんとその手を構える、
しかしそれを他ならぬ司が制したのだった。

「ん！？ん？」

「ユウスケ、今回のじゃんけんは少し特殊なモノでいく」

「あ…ああ、あっち向いてホイとかみたいなのヤツだな」

「ああ。そうだ」

その名も…司はそう言ってユウスケを指差す！

「ユウスケ敗北じゃんけんポンッ！」

「……………」

「……………」

「いや、あの…ごめん。」

「ちょっと嫌な予感しかしないんだけど……」

「一応ルール聞いていいかな？」

「なんとッ！」

ユウスケは古代マンマルチーダ王国に代々伝わるこのじゃんけんを知らないとっ！？」

椿は信じられないと言った目でユウスケを見る。
完全に悪ノリである

「ああ、このじゃんけんはな、

「見普通のルールに見えるかもしれない。」

「うん」

「まあ実際普通にじゃんけんをやるんだ。」

「だが、このじゃんけんには一つ特殊なルールがあるんだ」

「うん、何？」

「それはな、小野寺ユウスケが既に敗北していると言う事なんだ」

「うん・・・」

「..」

「ユウスケ敗北じゃんけんぽん…

まさか世界にはそんなじゃんけんがあつたなんて、意外だなあ。

「もっと世界の事勉強しないと」

「ユウスケさん、あんたは泣いていい。泣いていいんだっ！」

結局じゃんけんに負けた亘とユウスケ、薫。拓真が街を歩く。

「何か・・・それにしても」

亘はキョロキョロと辺りを見回す。

街の至る所に風船やピエロのお面が飾っており、花の飾り物やきらきら光るネオンが目立つ。

まるでお祭りでもしているかのような風景。

しかしおかしい、その割には人がいないのだ。

楽しそうな音楽や飾りつけがかえって不気味になる。

「・・・どうしたんだろうね？」

「ううん……？」

ユウスケがふと空をみると気球が見えた。

そこには電光掲示板が備えられており、そこには数字の2000

「なんだろうか、あの数字……」

「さあ？・・・ん？」

突如電光掲示板の文字が変わる。

『GAME・START』

「え？」

その文字が表示されると共に、なんだろうか…

気球から何かが落ちてくる。

「なんだ？」

「うおおおっ！」

「え？」

それが何か確認する前に物陰から小さな影が飛び出した。

「こ、子供？」

ぼろぼろの服を着た子供が、地に降りたその何かに向かって走り出す。

その手におもちゃのピストルが握りしめて。

「っ?」

気球から降りてきたのはピエロだった。

体は白黒、顔はお面をかぶっていて表情は分からないが、そのジェスチャーでおどけてみせる。

しかし子供はそのピエロに憎悪の言葉を投げつけ、玩具のピストルを向けた。

「お前はぼくがやっつけてやるッ!

バンッバンッ!

男の子はひたすらに撃ちまくるが所詮は玩具。効果があるわけがないし、弾すらでない。

しかし男の子は必死に撃ち続ける。

「な、なにかのゲームかな?」

「・・・どうだろうね」

おどけるピエロ達と怒り狂う子供。

あまりの強烈な違和感にユウスケ達はうすら寒いモノを感じる。

そしてユウスケ達は自分の目を疑った。
ピエロの足が、男の子にめり込む。

いや、性格には少し違う。

さも、当たり前といった雰囲気。ピエロは男の子を蹴り飛ばしたのだ！

そのあまりの光景に、ユウスケ達は何が起こったのか、思考が麻痺してしまった。

「……は？」

第40話 211232 (後書き)

すいません、さっそく明日が更新できないかもしれませ

では、次もよろしく！

第41話 23911303 (前書き)

今日は更新できました

でも明日はキツイっすね。すみません

ではござい！

思考の整理が追いつかない。

今起こった事を理解できない！

この男の子はどうなった！？

「が・・・ハッ！げほッ！ゲホッッ！」

「だ！大丈夫っ！？」

我に返った拓真が男の子の元へと駆け寄る。

同時にユウスケ達もやっと今起こった事を理解して、ピエロに詰め寄った。

「おい！何するんだよお前ッッ！」

ユウスケはピエロに掴みかかるが、ピエロは何も動じない。

むしろキャハハハと笑っておどけて見せるのだった。

「お前ッ！」

ユウスケに怒りの感情が芽生える。この状況でまだふざけているのか！？

しかしピエロは狂ったように笑うと、姿を化け物へと豹変させた。

それは色彩無き道化

「なっ！」

「オルフェノク！」

『キャハハハハハハ！』

笑いながらも、その手にはナイフが握られている。
クラウンオルフェノクは確実にユウスケを殺すつもりなのだ

『ヒヤハアツ！！』

「くっ！」

ユウスケはクラウンの攻撃をぎりぎりでかわすと、ベルトを出現させる。

そして巻き起こる赤い旋風！

「変身！」

『ヒヤハハアハハアハアハハ！』

クウガの拳がクラウンを捉える。

一発、二発と叩き込まれる一撃！

しかしクラウンは笑い続けるだけ、三体のクラウンが奏でる狂気
の笑顔がクウガの心に不安を焚きつける。

「くそっ、効いてるのか…？」

『キョワハハハハアアアアッハハハ！』

殴られる度にクラウンは笑う。

他の二体も仲間が殴られているのを楽しそうに見ていた。

『ヒヤハハハハハッ！』

「うわっ！」

殴られ続けていたクラウンがいきなり身体を反らし、クウガの攻撃を流す。

そのままクウガの手を掴み、膝打ちを入れ投げ飛ばした。

クウガは受身をとると、クラウンと向き合う。

表情すらない無機質なピエロ、その目には狂気の光だけ灯しているのだらう

「ユウスケさん！」

「大丈夫！・・・ッ！」

クウガは借りるよ、と優しく男の子に眩き、男の子が持っていた玩具のピストルを手にする。

「超変身・・・」

クウガの姿が緑に、ペガサスフォームへと変身する！

そして素早く矢を引き絞り狙いを定めた。

「ブラストペガサス！」

『ぎえはハッハハアハアアヒハハウアハハハっ！』

烈風の弓矢がクラウンの胸を打ち抜く。

そこへクウガの紋章が現れると、
クラウンは楽しそうに両手を広げ爆発した。

「はあ…はあ…ツツ！」

自分の攻撃が通用すると安心したが…

それでも尚、謎の緊張感がクウガを包む。

得体の知れない相手がここまで心を追い詰めるとは…

ペガサスの精神的負担も倍加したように感じた。

現に大きな疲労感がクウガを襲う、緊張感がペガサスの制御を邪魔
していたのだ。

だがまだクラウンは二体残っている。戦いをやめる事などできはし
ない

『フヤアハハハ！』

『ピロピロピロオオハハハハハハ！』

クラウン達はクウガに背を向けるとスキップで走り出す。

一体の先には男の子と亘達が、

もう一体の先には何も無いがこのままでは逃げられてしまう。

「くっ！・・・うっっ！」

クウガは二体を追う為に一步踏み出すが、そのまま膝をついてしまった。

想像以上にペガサスで体力を持っていかれたのだろう。
立つことすら疲れる。そんな感じだった

750

『困った時のキバットバットおおお！』

『ピヤハハハハハラハラアアアアあ！』

亘達に近づいてきたクラウンを颯爽と現れたキバットがなぎ払う！
そしてそのまま亘の手へ噛みついた

『がぶーっ!』『変身!』

刻印が現れ、巨もキバへ変身する。
蹴り上げでクラウンを叩き上げると、そのまま回し蹴りの連続でクラウンを押し出していく。

『バハハハツハハハハハハハ!』

向こうに逃げたクラウンもうまくはいかない。
校庭の方角から拓真の危険を察知したオートバジンが掛けつけ、クラウンをガトリングとパンチでクウガの方へと押し戻していく。

『「超変身っ」』

ドラゴンフォームへとクウガは姿を変える。

『ユウスケ、大丈夫？』

「あ、ああ！」

クウガはその場でドラゴンロッドを構え、力を込める。
ロッドの両端が淡く輝くのを確認すると
クウガは肩膝をつけてその場に止まった。

「はあッ！」

キバは回し蹴りから渾身の力を込めクラウンを蹴り飛ばす！

オートバジンも同様に掌底でクラウンを吹き飛ばす！

そしてクラウンの吹き飛ばされた先にはドラゴンロッドの先端。
二体のクラウンはその先端に触れてしまう！

『ひゃハハハアハハハッハアッ』

『キャパアアアアハハハハアア！』

スプラッツシュドラゴンによってクラウンオルフェノクは爆散して消え去る。

クウガたちは男の子を抱えると、一度学校へと戻るのだった。

「・・・」

拓真の心に恐怖とプレッシャーが押し寄せる。

それは皆感じてきた事、ユウスケも翼も亘だってそうだ。

それにこれから選ばれるであろう真志達もこのプレッシャーと戦わなければならない

「・・・」

そう…分かっている、だけどどうしても怖かった。

この街を囲う狂気を感じつつ、拓真は唇をギュッと噛むのだった

第41話 23911303 (後書き)

どうも私は鼻が悪いみたいで…

今日本当は病院に行こうと思ってたんですが
どうにも時間がなくて。

まあ皆さんにとってはどうでもいい事なんですけどww

じゃあ、次もよろしく！

第42話 21130345 (前書き)

月、火の更新が危ういため

今日は多分もう一回更新する…かも

ではござい！

「はぁあッ！」

『ヒヤハハハッハハハア！』

アギトの拳をクラウンは笑いながら受ける、
翼と司もまた、クラウンオルフェノクと戦闘中だった。

学校で待機していたところ、窓からクラウンオルフェノクの姿を見つけたのだ。

人々を襲うクラウンを放っておくわけが無い。

二人は変身し、クラウンに戦いを挑んだのだった。

「なんて、不気味な奴らなんだ・・・」

『アタックライド』『スラッシュ！』

ライドブッカーを剣に変えクラウンに切りかかる。

クラウンは避けようとせず、剣をその身体に受けても楽しそうに笑うだけ。

「たぁぁぁぁぁあッ！」

『ヒヤハアアアアアアアア！』

斬撃が強化され、クラウンを断ち切る。

絶命の瞬間までクラウンは笑い続けていた。

死に対する恐怖がないのか？狂気の笑みがよりその不気味さを増していく

「司君！後ろだ！」

「え？ グッ！」

アギトの声を聞き、司は身体を反らす。

おかげで直撃は免れたが、クラウンの攻撃がディケイドにヒットする。

「くそっ、無駄に数が多い！」

「気をつけて、一体破壊することに反撃してくるみたいだ」

ナイフを構えて走ってくるクラウンを見て、アギトは腰の中心から刀を取り出す。

「集え、炎よ……」

左腕が炎に包まれ、赤に染まっていく。

炎が弾けると、胸部と左腕が赤くなったアギトへと変わった。

「おお！フレイム！」

剣のデザインが違うが紛れも無くフレイムフォームだ。

剣と言うよりは刀と言った方がいいが、トライホーンのようなモノが無い。

つまるところ本物よりシンプルになっていた。

アギトは鞘からフレイムセイバーを引き抜くと、鞘と一緒に構えて立つ。

『ひやははははーははは！バツ！』

クラウンのナイフをセイバーでいなし、鞘で殴りつける。

体勢を崩したクラウンに回し蹴りを決め、そのまま地面へと叩きつ

けた！

『ヒヤハ！ヒヤハハハ！ハハハ！』

尚も狂ったように笑いながらクラウンはじたばたともがく。周りにいた数体のクラウンもそれを気にする事無くナイフを構えアギトへと向かう！

「やれやれ、仕方ないか…」

アギトは踏みつけていたクラウンを蹴り飛ばすと、後ろに下がる。そしてセイバーを鞘にしまい居合いの構えをとった。

「はあああああ…」

アギトの紋章が地面に現れ、エネルギーを集中させる。クロスホーンが展開し、炎のオーラがアギトを中心に発生していく

「か、かっけええええ！」

先生凄いじゃないですか！

いつの間に斬ったんですか？いや全然見えなかった！」

「ハハハ、ちよつとしたアレンジみたいなモノさ。

私なりのアギトでいこうかなってね」

「成る程成る程・・・ん？」

『ヒヤハハハハハハッ！』

「うおっ！」

油断したディケイド達に再びクラウンの群れが襲い掛かる。

「またかよっ！ぞろぞろとっ！」

「・・・！」

司君、あの数字が変わってる」

その言葉を確認するためにデイケイドは空を見上げる。

先程気球の電子掲示板に書かれていた数字は2000だ。

しかし今、数字は1983になっている。

「（もしかすると…）」

司君、時間は掛けられない。一掃しよう！」

「ああ、分かりました！」

『ファイナルフォームライド

』 『アアアアギト！』

アギトはアギトトルネイダーへと姿を変え、猛スピードでクラウン達を吹き飛ばしていく。

デイケイドはトルネイダーに飛び乗ると

ライドブツカーを構え、二枚のカードを差し込んだ。

『ファイナルアタックライド』

『アアアアギト!』

アギトの紋章を潜り抜けると、

アギトトルネイダーは金色の光に包まれ、一気に加速する!

アギトトルネイダーはクラウン達を吹き飛ばしながら
辺りを飛び回り、空中を旋廻する

『ファイナルアタックライド』

『デイデイデイデイケイド!』

目の前にホログラムカードが出現していく。

デイケイドはそれをサッカーボールの様に蹴り飛ばした!

カードはある程度飛んだ後にその場に静止して留まる。

デイケイドはそれを繰り返し、五枚のホログラムカードを空中に展開させた。

「『たあああああッ！！』」

アギトトルネイダーがその一枚をくぐり抜けた瞬間ッ！
まさに一瞬で次のホログラムカードまで移動する。

あまりのスピードに金色の残像がその場に現れる程だ。

残像には攻撃判定があり、
直接アギトトルネイダーに弾かれたクラウンはもちろん。
それに触れたクラウンまでもに大ダメージを与える。

ディケイドは一秒か二秒で全てのホログラムカードを通過し、
残像を爆発させた。

ディケイドトルネード。

ホログラムカードで連鎖のラインを整えた後、超高速誘導でエネルギーを残像に乗せる。

デイケイドもまたライドブッカーで相手を切りつけるダブルアタックが決まる。

クラウンは一掃され、二人は変身を解く。

「司君。やはり数字が変わっているね」

翼は電子掲示板を指差した。数字が1970に変わっている。

「あ、本当だ。何の数字なんだろうか…」

「おそらく今倒した。ピエロの様な怪人の数じゃないかな。今倒したのも十三体だったからね。」

「ああ、成る程。全然数えてなかった…」

でも・・・司の表情が険しくなる。

「…そうだね。」

あれがオルフェノクの残り数だと考えると…

かなり厳しい戦いになるかもしれない・・・」

翼は冷や汗を浮かべながら小さく笑うのだった

第42話 21130345 (後書き)

翼アギトの説明を少し

フレイム

刀と鞘の二刀流になります。
炎の力が付与されます

ストーム

風を操る点に特化しており、空を飛ぶことも可能です

まあこんなところですかね
では次もよろしく！

第43話 4504132432 (前書き)

はい、と言う訳でね 平日分を今更新しました

ファイズはキックが本当にカッコいいですよね
あんまりディケイドじゃ出てきませんでしたW W

「う・・・うっ」

「あ！気がつきました？」

男の子はゆっくりと目を開けて辺りを見回す。
夏美は優しく微笑むと、男の子を抱き上げた。

「お名前は？」

「ウノ・・・」

「ウノ君ですね。」

私は夏美ついていきます。大丈夫ですか？」

ウノはこくりと首をふる。

「ここはどこなの？」

「私達の学校です。」

ウノ君、もしよかったらこの世界で何が起こってるのか教えてくださいませんか？」

「え？」

「あの数字、ピエロみたいな化け物。何でもいいんです」

「あ……うん……」

ウノは力強い返事をする、この世界の事を話し始めるのだった。

「お、おいつ！あんた等！」

「ん？」

司達が学校へ戻ろうとした時、襲われていた男の一人が声をあげる。男の顔は未だ恐怖に満ちており、司達は足を止めた。

「たっ、頼む！助けてくれっ！

もう時間がないんだ！！」

「え．．．？」

男は語り始める。この世界の事を．．．

「それは．．．本当ですか!？」

「ああ．．．っ、この街は一ヶ月前までは普通の街だったんだ。だけど．．．アイツが現れた」

「アイツ？」

「ああ。ピエロみたいな格好だった。

そいつは自分の事を道化師とっていたな。そいつは俺達にこう言ったんだ。」

『皆さん刺激は足りていますか？

ひやははは！足りないでしょう！

ならばカーニバルを！この廃った世界に潤いを！』

「その言葉と共に、この街は巨大な柵に囲まれてしまったんだ。それだけじゃない、

あのピエロみたいな化け物が現れていきなり暴れ始めた…」

そして道化師は語る。

『ゲームをしましょう！』

制限時間内にクラウン達を全員倒せたら貴方達の勝ち！

もしできなかったら………』

「できなかったら………？」

「爆発！？」

「うん……この街」と全部無くなっちゃうんだって………」

ウノの話によるとこの街の地下に巨大な爆弾が仕掛けられており、制限時間内にクラウンオルフェノクを全て倒さないと爆発するらしい。

「そんな・・・めちゃくちゃな・・・」

「そのめちゃくちゃな理由で俺達はもうすぐ死ぬんだっ！」

「す、すいません・・・」

男はその場で声を殺して泣き始める。

「あ……残り時間ってあとのくらいなんですか？」

「……あと二日だ」

「！」

「あと二日で1970体を倒さないと……
駄目なのか……」

無理だ。普通に考えて……

クラウン達がどこに隠れているのか？
それすらも分からない状態でそれだけの数を倒さなければいけない
なんて

「先生、学校に街の人間を避難させるってのは？」

「そうだね、多少無理やりにも押し込めば」

「無理だよ」

「！」

砂のオーロラと共に、ゼノンとフルーラがくすくすと笑いながら現れる。

「無理？」

「ええ。爆弾が爆発すればこの世界は消し飛ぶわ、だから貴方たちもゲームオーバーと言う訳。

たしかにあの学校は安全だけれど…
世界そのものが無くなっちゃったら意味ないもの」

「つまり・・・」

「ええ、がんばってね。あと1970体…うふふ」

「ククッ期待しているよ破壊者ディケイド！」

ボク達も百体くらいなら手伝ってあげるよフッフ」

それだけ言って二人は砂のオーロラに消えていく。

「・・・」

「やろっ、司君」

「…ああ、はい。」

二人は静かに覚悟を決めた。
もはや迷っている時間は無い、

この世界を救うためには一刻を争うのだから

第43話

4504132432 (後書き)

「ねえ、知っているかいフルーラ？」

「あらゼノン、どうしたの？」

「今回は新キャラがたくさん出てくるらしいよ」

「まあ！ただでさえキャラが多いのに！？」

「そうだね、フルーラ。」

「気をつけないとボク達空気になっちゃうかも……」

「その前に作者が書き分けできるのかしら！」

「そうだね、だって彼は……」

「「適当な男なのだから！」」

第44話 21124513 (前書き)

すみません、ちょっと今週は不定期になるかも…
まあ次は多分水曜日か木曜日かな

ではござい！

第44話

2 1 1 2 4 5 1 3

司たちが覚悟を決めている頃・・・

「へっ、コレがその爆弾様ってか？」

燃えるような赤い髪と黄色のメツシユ。

派手で露出の多い服、

そして何より鋭い目の少女はそれを見上げた。

「朱雀、^{オウ}あまり近づくな。この世界を滅ぼすだけの代物だぞ」

メガネを掛けた緑髪の少年が答えた。

どこかやる気のなさそうな目をしている

朱雀と呼ばれた少女は、へいへいと投げやりに答えて後ろへ下がった。

「デイス君。こ、こわいよ・・・もう帰ろうよ・・・」

まだ少し幼さが残る銀髪の少年がブルブルと震えながら、

メガネの少年。ディスプレイに問いかける。

「かぁー！安心しろよりラ。」

爆発するのはまだ先なんだからよぉ！」

「で、でも……」

リラと呼ばれた少年はそれを…

巨大な爆弾を見上げる。

彼らがいるのはこの街の地下、つまり道化師が爆弾を仕掛けた所だった。

荒れた鉱山の様な所に、ビルほどの大きさがある爆弾が置いてある。

爆弾にはたくさんのピエロのお面とお菓子がくっついていて、それが不気味さと狂気さを引き立たせる

「リラの言う事はもつともですわ。」

こんな所、一分一秒だっていたくありません。

あの悪趣味なモノを見ているだけで吐き気がしますわ」

三人から少し離れた所に深い青色の髪の少女が座っていた。少女がいる場所には地下だというのに日傘が刺さっており、

豪華なティーセットが置いてある。

少女の服、座っている椅子から見て、相当のお嬢様なのだろう。

「マリンお嬢様、あまり悪く言うものではありませんよ。」

リーダーはアレを欲しがっているのですから」

「分かっていますタイガ、

全く…彼のセンスには理解しがたいモノがありますわ」

スーツに身を包んだ金髪の少年タイガは、主人であろうマリンを落ち着かせる。

「ところで…その肝心のリーダー様はどこに行ったんだ!？」

「おう、そうだぜ!アイツから呼び出しといて遅刻たあよお!」

五人の少年少女は辺りを見回す。

しかしどこにもそれらしい人はいない

「あのトレジャーハンターならお宝を探しにいったよ」

「！」

崖壁の上からゼノンとフルーラが現れ、彼らを見下す様に笑う。
少年達はいきなり現れた二人に驚いたようだが
それも一瞬だった

「お前らか……」

「お久しぶり……なのかしら？ええと……なんだっけゼノン？」

「お……お宝っ……パイレーツ……ププッ！」

プクククっ……

お宝パイレーツ……

ぶふーっ……

「ああ！思い出したわ！」

お宝パイレーツストロングツイスタースターズね！」

二人は完全に馬鹿にした目で彼らを見る。

「長い名前、略すと・・・おぱんつ？」

「ちょっと、違うよフルーラ。

でも愛しい君が言うならそれにしよう！

君達は今日からおぱんつだ！」

「おぱんつーおぱんつー」

「おぱんつーおぱんつー！」

「うるせえええ！馬鹿ヤローツツ！！」

つかその名前で呼ぶんじゃねえよおお！！！」

「言っておくがこのクツソダサイ名前をつけたのはアイツだからな！

僕達じゃないからな！」

朱雀とデイスが真つ赤になって否定するが、ゼノンとフルーラはケラケラと笑う。

「ぶぶつ、まあそう言う事にしておいてあげる。

あら！マリン、今日も素敵なお洋服ね！」

フルーラの目がきらきらと輝く。マリンも嬉しそうに胸を張った。

「ふぶつ、ありがとうフルーラ。貴方もとってもかわいいですよ。

「へっ、オレにはわっかんねーな。こんなフリフリのどこがいいんだ？」

朱雀はマリンのフリルを強引に掴むと不思議そうに二人を見る。

マリンはムツと頬を膨らませ、その手を弾いた。

フルーラもやれやれと苦笑する

「お黙りなさい露出狂！貴女の担当は『色欲』じゃないでしょう！」

「貴女みたいな半裸に言われるとはお終いなのかしら…」

「はっ！半裸ああ！？ろ、ろしゅ！！」

顔を真っ赤にして朱雀は、冷たい目をしている二人を睨む。

「だ、大丈夫！この前ちよつと見えちゃったけど…
まだ普通だよ朱雀ちゃん！」

「見えたって何がだよおお！」

「くっ、ぐるじい…！」

リラに掴みかかる朱雀。

そんな二人をデイスは無視して、ゼノン達に問いかけた

「はぁ…ところでフルーラ、ゼノン。僕達に何か？」

ゼノンとフルーラはそうだったと顔を見合わせる。

「君達、この爆弾は放って置いてくれよ」

「いかにもあのトレジャーハンターが好きそうなものじゃない。
忠告してきたの」

五人は爆弾をみる。そして確かにと頷く。

「あほリーダーは使えそうなモノ程簡単に手放すからなあ
あのリングは結局渡したのか？」

「ええ、イメージ・リングの件については感謝するわ。
とつても助かったの」

「で、どうなんだ？まだ顔もみてねーけどよ。そいつ等は？」

ゼノンとフルーラはニヤリと笑って五人を見る。

「なかなか…いや、かなり面白いよ。
彼らはね、もしかすると君達と同じく」

ゼノンはそこから何も言わなかったが、五人は頷く。

「成る程…まあ、いずれ会っ事になるかもな」

そうやって五人はゼノンとフルーラに背を向けて歩き出す。

「おや、もういいのかい？」

「ああ。リーダーもこないんじゃないかここに意味もないからな」

「デイケイド達に会ってみないの？」

「そいつらが有能ならいずれ会うことになるだろ？」

別に今じゃなくても構わないさ」

五人はそのまま歩き、言ってしまった。

残されたゼノンとフルーラは尚もニヤつく

「あら、でもゼノン。

別に爆弾くらい撤去してしまえばいいのではないかしら？」

「駄目だよフルーラ。

教えていなくてもリハーサルじゃ意味はない、失敗できない本番じゃないとね」

ゼノンは爆弾を見ながら、静かに笑うのだった。

「君達、酷いじゃないか。リーダーを置いていくなんて」

「アンタが勝手にどっか行ったんだろ！」

デイスの言い分をさらりと流しリーダと呼ばれた男はヘラヘラと笑う。

「んで、どーすんだよ。お宝つつか爆弾つつか」

「うーん。」

トレジャーハンターとしてはアレを見逃す手はないんだけど……」

「あんなモノがアジトにあったら落ち着きませんわ。スルーです！スルー！」

マリンの激しい拒絶に彼はやれやれと首を振った。

「しょうがないなあ、見逃そうか。」

感謝したまえよ、この偉大なトレジャーハンターがあきらめるんだから」

「よし、じゃあもうこの世界には用はねえな！

何か食いにいこうぜ！」

朱雀は目を輝かせながらそう言う。

だが、他のメンバーのノリは悪いようだ

「君から話す時はだいたい食べ物話題だねえ。

さすが『暴食』だ、太るよ？」

「う、うるせーな！」

「大食いでも食べても、うまい…ですからね」

「へっ、オレは動くからいいんだよ。

でもよ、マリリン。」

お前は甘いモンばっか食ってる割には動いてねえよな？

『怠惰』ってのは結構だけだよ？太るのはお前の方じゃねえのかあ！」

「う、う、うるさいですわー！」

そう言って笑う彼らの前に・・・

『ヒヤハハハハハハ！』

『アーハハハハ！キハハハハハハ！』

狂ったように笑うクラウン達。
だが、彼らは嘲笑する。

「おいおい、誰にケンカうってんだ？」

朱雀は何かを取り出すと、それを勢いよく弾いた。

ピンッ！

朱雀は回転しながら落ちてくるそれを掴む為に、手を伸ばす。
しかしそれより早くリーダーと呼ばれていた男がそれを奪った。

「あ！おい、なにすんだ？」

不満気に朱雀はリーダーからそれをまた奪い返す

「ここはぼくに任せたまえ。

せっかく司・・・だったっけ？

彼らとお宝を探しに来たのにどっちも見つけられなかったんだ。」

「ああ、はいはいそうかよ！

じゃあ二人でやるぞ！

つか大輝、お前司ってヤツに会った事あるんだろ！？」

「ああ。でもあの時はぼくも急いでいたからね、覚えていないんだ

「よ」

「ハッ、海東らしいですわね。さて、わたくし達は戻りましょう?」

そう言ってマリリン達は歩いていく。残されたのは…

「さて、ひと暴れすつかな!」

「ふっ、ほどほどにしたまえよ

というか君達はリーダーに対しての尊敬の念が…」

まあいいか。と、海東と呼ばれた男はニヤリと笑った。
そしておかしな形をした銃をとりだすと、クラウン達に向けて発砲する!

『ギヤギヤギヤ!』

「ふっ…」

クラウンが怯んだ隙に、海東はどこからか一枚のカードを取り出すとそれを銃に装填した。
直後、鳴り響く電子音

『カメンライド』

「へっ！」

朱雀もまたその赤いモノを手にする。

それはメダルだった、朱雀はマジシャンの様にメダルを素早く三枚に増やすと…

それをいつの間にか腰に巻かれたベルトに装填した

「…ふふっ、まあせいぜい頑張りたまえよ」

司達に向けたであろうその言葉。届くわけではないが、海東は笑う。そして、引き金をひく！

「「変身！」」

「ん…」

「どうしたの真志い？」

「今なんか聞こえなかったか？」

「何が？」

「なんか…ディッエーンツ…みたいな」

「……はあ!?!?」

「いや、だから、ディッエーンツだって!」

「ねえ…お兄ちゃん」

「ん？どうしたんだ真由？」

「何か…今ね、お歌が…聞こえたの…」

「歌？」

「うん…なんかね…たあじゃあどおおりゅうう！って！」

「…」

「…」

「うまい！さすがは俺の妹だ！将来はアイドルかな？」

「本…当！お兄ちゃん！」

「ああ！もう一回歌ってみてくれ！」

第44話 21124513 (後書き)

「輝」はわざとです

まあ司と同じく、半分オリジナルが入った感じですかね

いつかね、挿絵とかやってみたいと思うんですけど

多分思っただけなんだろうなww

では次もよろしく！

第45話

2245551575124404 (前書き)

どうも最近忙しくて…

それにしてもプロテイルのテーマソングはクセになりますねw
ついつい口ずさんでしまいます

ダークサイドの辺りが特に気に入ってます
まあいいか

ではどうも！

第45話

2 2 4 5 5 5 1 5 7 5 1 2 4 4 0 4

二日目

「ねえ…友里ちゃん…」

「ん？どうしたの？」

「僕…ココに居ていいのかな？」

「え？」

教室の隅で拓真が小さく呟いた。

「皆、この世界の為に頑張ってるのに…」

一番頑張らなきゃいけない僕が何もしてないなんて…」

「……」

友里は優しく微笑みながら拓真の隣に座る。

「無理しなくていいよ拓真。きっと大丈夫だから」

「でも・・・」

「でもじゃない！」

ホラホラ、拓真がそんな顔してるとあたしも悲しいな。」

「う・・・うん」

拓真はまだ納得していない様だがなんとか笑顔を浮かべる。
ぎこちない笑みだったが、友里は納得したらしい。
拓真に向かって優しい笑みを向けた

「そうそう！」

拓真はけっこうイケメンなんだからそうしてた方がいって！」

「え・・・！」

拓真の顔が赤くなる。

冗談なんだろうか？

それでも嬉しい、拓真は恥ずかしそうに微笑んだ。
それにつられて友里も笑う。

「おう、拓真。いるか？」

「あ、真志君どうしたの？」

真志は拓真を見つけると、先程ウノから聞いた情報を教えた。

「ウノの両親がいる地下シェルターがあるんだが、そこに村野博士って人がいるらしいんだ。」

「その人がどうかしたの？」

「本人曰く天才らしい…」

その人が対クラウン用の武器を作っているらしいんだ。

周りの人間は気味悪がって近づかないらしいんだけど…

ウノが見たとき、その人の作ってる武器がベルトに見えたらしい」

「ベルト…」

「この世界でベルトって言ったたらもうそれしかないだろ。
どうだ？行ってみないか？」

「うんうん」

ふと遠い記憶が蘇る。

「じらめー！あんた達っ！」

「うえ！友里だ！逃げる、お前ら！」

「くそつ、本当にうるせえ女だぜ！」

また先生に告げ口されたらたまったモンじゃねえ！」

「あーあ。白けた白けた！帰ろうぜえ

じゃーな、弱虫！ブス！」

友里が睨む中、男の子達はそそくさと走っていく。

「・・・拓真！大丈夫っ？」

地面に落ちていた拓真のランドセルを友里は拾う。

友里はにっこり笑ってそれを拓真へ差し出した。

「はいっ」

「あ…りがとう」

拓真は曖昧な笑みを浮かべてそれを受け取った。

「大丈夫？それにしても酷い！どうしてあんな事されてたの？」

拓真がいじめられる事は少なくない。

その度に友里は彼を助けていた。

しかし何分クラスが違うため、いつもいじめられる前に助けられないのが彼女の悩みだった。

「今度のテスト。皆でカンニングしようって話になって…」

嫌だつて言ったら…」

拓真は笑う、しかし目は全く笑っていないかった。

友里はそれに気づくものの、彼の気持ちを悟り同じく笑みで返すことにした

「うん、偉いぞ拓真！拓真は優しいもんね。あたし、そんな拓真が好きだよ」

「え・・・！」

友里の笑顔を見て拓真の顔が赤くなる。

「これからも拓真は私が守ってあげるからね！」

「あ・・・」

拓真の表情が曇るのを友里は理解できなかった。
友里にとってはそれが当たり前なのだから、何も不思議な事など無いのに

「友里ちゃんは…どうして僕の事を守ってくれるの？
同じマンションに住んでるから？」

今はまだ大丈夫かもしれないけど…
いつか標的が友里ちゃんになるかもしれないんだ」

その言葉に友里は少し沈黙する。そして、笑った。

「拓真が…私に似てるから…かな」

拓真にはその顔が笑顔に見えただろう。

しかし、友里は決して笑ってはいなかった、拓真と同じ、口だけ吊り上げる。

偽りの笑顔

「拓真だつてたまには言い返してもいいんじゃない？

ガツンとやっちなよ」

「いいんだ。僕、そういうの嫌いだから」

「もうっ、拓真は優しすぎ！」

そう言って二人はまた笑い合っただった…

第45話 2245551575124404 (後書き)

拓真のイメージはディケイドに出てきたタクミですね。

まあ、あんまり名前同じヤツがいっぱいいてもアレなんで少し変えてます

決してムカデとは何の関係もありません

気にしないでくださいね

では次もよろしく！

第46話 220411(前書き)

熱くてとろけてしまいそうだよ

そんな一日

ではどうござー！

「大丈夫？拓真…」

「うん…大丈夫」

真志、亘、拓真と友里の4人はその天才がいるというシエルターに向かっていた。

本当にバイクが乗れる事に驚きながらも彼らは進んでいく。

「安心しろよ、緊張するなって方が無理さ。」

「そうだよ拓真さん。ボクだって本当に怖かったんだから」

「拓真！いくら拓真が優しいからってクラウンは殴らなきゃだめだからね！」

「う、うん…あはは」

優しい？

違うよ友里ちゃん。

僕は弱いんだ、弱いから何もできなかった。

君に迷惑を掛けてばかりで何もできない弱虫野郎だ

だけど、今はもう違うっ！

僕はもうすぐファイズになれるんだ！

ファイズの力があれば友里ちゃんを守ってあげられる。

僕の夢が叶うんだ！

悔しくない訳がなかった。

情けなく思わない訳がない！

好きな女の子に守られて、いつも励まされて！

でも僕にそんな状況を変えるだけの力なんてない。

頭が特別いい訳じゃないし、運動ができるわけでもない。

そんな駄目な僕をいつも支えてくれた彼女。

毎日が不安だった。

いつ彼女に愛想をつかされるんじゃないかって怯えてた。
だけどそれを口にしたり今を変える為の努力もできない…

（僕は・・・クズだ・・・）

優しい？

そうじゃない。

弱いんだよ僕は…

昔からそうだ。

クラスの皆が団結して答えを教えあう協力カンニング。

それを僕が拒否していじめられたとき

あの時だって僕を優しいって言うてくれたっけ？

違う、僕は別にカンニングが嫌だった訳じゃない。

先生に怒られたり君に嫌われないかが気になって参加できなかった

だけだ。

正義感とかじゃない。怯えてただけ

情けない。ああ、本当に！

…だけど、それももうすぐ終わる。

生まれ変わるんだ、ファイズになって僕は生まれ変わる！

友里ちゃんや皆を守って、頼りにされる。

もう昔の僕じゃないんだ！

拓真の心に激しい焦りと期待が交差する。

ずっと自分の夢だった、友里を守る事。

それがもうすぐ現実へ変わるのだ

シエルターが見えてくる。拓真の心臓が鼓動を強くならした

「わしの作った対クラウンオルフェノク用の兵器が欲しいとな！」

「はいっ！どうか、譲っていただけませんか！」

「ごちゃごちゃとよく分からない機械が散乱しているラボ。そこに村野博士はいた。」

拓真達が兵器の存在を口にすると、博士は上機嫌に笑う。

「ほう！ほう！わしの言葉を信じる者がついに現れたか！
よーよー！」

博士は足の踏み場も無いところをズンズン歩いていき、大きなトラ
ンクを抱えて戻る。

「わしはな、この世界に代々伝わる救世主のベルトを元に改良をく
わえ、

3つのベルトを開発した」

博士はベルトをずらりと並べる。

「カイザ、デルタ、サイガ…」

そして・・・博士はすこし溜めて、そのベルトを持ち上げる。

「これがオリジナル。救世主のベルト、ファイズギア！」

「救世主!?!」

「ああそうじゃ。この世界に伝えられる伝説のアイテム！」

これを元にわしはカイザ、デルタ、サイガのベルトをつくったん

じゃ。

闇を切り裂き光をもたらす、それがこのファイズギアなんじゃよ
「！」

それなのに他のやつ等は信じようとしなない！
あろう事が玩具だのガラクタだのと！

博士は不満を爆発させる。

どうやらこの世界には強大な危機に陥った時、それに対処できる道具があるらしい。

それこそがファイズギアだった。

この世界のファイズギアの役割…といった所だろうか

「今までもこの街が危険に晒された事はある。

しかしそれを知っているのはわしだけになってしまった。

…わしの言葉を誰も信じない！」

「そうなんですか…」

「だが君がコレを必要としているなら渡そう。

そしてどうかクラウン達を倒してくれないか？

道化師が言うには残り三十分になるとクラウン達は一箇所に集ま

るらしい。

道化師はラストチャンスといていたが・・・

そこで君達にはこのファイズギアや他のギアで変身してもらいやつ等を根絶やしにするのじゃ！」

博士は自分の作ったベルトやファイズギアの能力を嬉しそうに話始める。

対オルフェノクを強く意識しているらしく、何でも一撃で粉碎できるとかなんとか

「変身のデメリットは？特にカイザギアとデルタギアです」

真志は司から聞いていた話を思い出す。

いくら世界が違うといえど設定が同じかもしれないからだ。

「ふむ…特にはないぞ。ほね、少年よ…！」

「譲って・・・頂けるんですね！」

「もちろんじゃー！」

拓真は両手を上げて叫びたい程の衝動に駆られる。

これで、夢が叶う！

友里を、皆を守る事ができる！

もう馬鹿にされる事も自分に負い目を感じる事もなくなる！

「じゃ、じゃあ今すぐにでも・・・」

拓真は受け取ったファイズギアを装着する。

しかし対照的に博士の顔が青くなっていく

「あー・・・その、なんじゃ・・・」

博士は何かを思い出したかの様に言葉を濁した。

「え？」

「その……すまない。忘れとった…」

博士は申し訳なさそうに何かを取り出す。

「今のままじゃ君はファイズにはなれない……」

しかし、コレを飲めば……と、
博士は手に持っていた小ビンを差し出す。

「『変身一発』じゃ……コレを飲めば……」

「わ、わかりました」

特に疑問にも思わず拓真はそれを手にする。
どうせ少しもまずい程度だろう、それくらいにしか拓真は考えてなかった。

しかし、真志は違う。

司から話を聞いていた彼は、ふと浮かんだ疑問を博士にぶつける

「なんでそれを飲まなくちゃいけないんです？」

「うむ……それは……」

拓真はその答えを待つことも無くビンのフタを開けようとする。
しかし他ならぬ博士がそれを止めた。

「な、何ですか？」

「博士…やっぱり…」

「ああ、そうじゃ。それを飲めば君は…」

あの、化け物と同じ体になる

「・・・？」

第46話 220411（後書き）

まあちょっとファイズの設定は特殊すぎるので大幅に変更させてもらいました

フォトンブラッドとかは考えないでください

ファイズは映画がかなりおもしろかったです

当時まだまだお子様だった私にはいろいろ衝撃的すぎたw

では次もよろしく！

第47話 718512(前書き)

なんかいろんなアニメが終わっていきますね
少し寂しいような…でも終わりを見れて嬉しいような

ではござい！

拓真の体から一気に嫌な汗が染み出る。

今、何て言った？

「そのファイズギアは…その…」

変身者が相手と同じ体になることによって内部から細胞、性質を解析し、

もっとも有効な攻撃を判断する訳なんじゃ…」

博士は拓真の持っている変身一発を指差す。

「すでにギア達には対オルフェノクと設定をしてしまった。わしが開発したその薬で肉体をオルフェノクに変えてからファイズギアやその他のギアに認識させる。」

でなければ、エラーと見なされ変身はできないのじゃよ」

そんな…事って、

「え・・・あ・・・っ」

変身一発を持つ手がブルブルと震える。

何なんだ？変身一発ってそう言う意味だったのか！？

拓真の心に嫌な重圧感が押し寄せる。

いや、別にいいじゃないか、オルフェノクになるくらい！

それで皆を守れるんだ！

どろして迷うんだよ！

ほら！

さっさと飲めよ！

呼吸が荒くなる、なんだか気分が悪い。
別にオルフェノクになるくらいいいじゃないか、
むしろ普通の人間より強く慣れるんだ。

結局同じことじゃないか！

「……ッッ！」

変身一発を口元に持って行く。

「っっっ！！！」

しかし、飲めない。

数分前の自分の気持ちすら思い出せない！

無性に吐き気がして目の前の液体に猛烈な嫌悪感を覚えてしまう。

笑えてくる、

自分はさっきまで救世主になれるかもしれない。

皆を救うヒーローになれるかもしれないと妄想を重ねた。

しかし、今、

自分がオルフェノク…

つまりは化け物になる事を拒絶している。

ファイズになる事とオルフェノクになることに何の違いがあるのだろうか？

所詮はイメージ、敵のオルフェノクと主人公のファイズ。

ただの印象だ、なのに…今、自分はこの薬を飲めなくなっている。

「はあ…はあっ！」

何で！？どうして！？

ただこの薬を飲めばいいだけ！

それだけなのに身体が動かない！

どんなに力を入れても腕が動かない！

『化け物！化け物！』

もし、全ての事が終わって、日常に戻れたとして…

僕の正体が世間にはれたらどうなるのか…？

『化け物！化け物！』

猛烈にこみ上げ吐き気についに耐えられなくなったのか、拓真は変身一発を置いて走り出す。

真司達は止めない。

止められるわけがない。

「なあ…、世界救う為に化け物になる。すぐに決められるか？」

「そんな事…無理です」

「…ツツ！拓真…！」

友里はベルトと薬を持ち、ラボを飛び出す。
博士は仕方ないため息をついて椅子へ座った。

「大切なことを言うのを忘れたのはわしじゃ。
無理強いなどできる訳も無い」

真志と亘は何とも言いがたい虚無感に陥る。

「・・・」

亘は空に浮かぶ掲示板を見る。
絶望の数字はいまだに千を切る気配をみせない

『目さん！たいへんっす！』

数字を見ていたら目の前にキバットが現れる。

「っ！どうしたの？」

『実は……』

「うああああああっ！」

「ヒイイイイイイイ！」

『キヤハハハハハ！アハハハハっ！』

恐怖で顔を引きつらせて逃げ惑う人々。

対照的に笑い続けるクラウン。

悲鳴と爆笑、狂気のハーモニーはシエルターを包み込む。

ぞろぞろと現れるクラウン達に人々は絶望する。

クラウン達は一瞬の隙をついてシエルターの中に入り込み、続々と仲間を呼び寄せたのだ。

シエルターの中にクラウン達の笑い声が反響する。それを聞いてまた人々はパニックに陥り泣き叫ぶ。

「ママッー！」

『ヒヤハアハアハアハ！』

泣き叫ぶ母親を弾き飛ばし、クラウンは男の子を掴みあげる。
そしてまるで雑巾を絞るかのように締め上げた。

助けを求める母親をあざ笑い、クラウンは男の子を殺そうと力を込める。

「ぐっ…があ！」

『ヒヤハハハアーツハハハア！』

絶望。そんな空間だった。

だが、しかし

第47話 718512 (後書き)

すみません、ちょっと忙しくなりました

次回はおそらく木曜までにどこか一回更新…となりそうです

それにしても結構ライダー小説に限らず皆さんキャラ紹介は別で作
つてある方が多いですね
僕も作るのかな

では次もよろしく！

第48話 番外編 キャラ紹介 メイン編(前書き)

はい、とまあ日曜日の更新が危ないんで今日やっちゃいましょと

番外編は話関係ないんですけどキャラ紹介ですね

まあ一応自己紹介の話はあるんですけど

こつ言つ感じのヤツもあったほうがいいのかあって

第48話 番外編 キャラ紹介 メイン編

「特別クラスメンバー」

学校の一部が拠点となり様々な世界を移動する事になる
この物語の中心人物たち

聖司 ひじりかみ

仮面ライダーディケイド

ヒーローが好きな高校生。

両親はまだ幼い時に蒸発し、従妹である夏美の家に弟と共に預けられた

ヒーロー好きゆえ正義には熱いが、少し冷めた所もある

仮面ライダーの知識がある為、自分の記憶にある範囲だけが
皆に情報やきつかけを与える事ができ、他のメンバーを支える

ひかりなつみ
光夏美

司、亘の従妹、常に敬語まじりで話す。
優しく、真面目な性格で友人も多い

司と亘、祖父とで写真館を営んでいる。

(しかし何故か喫茶店の様な位置づけになっている訳だが…)

その明るい性格からか皆からの信頼も厚く、時に体を張ってサポーターにまわる

笑いのツボは習得済みであり、対象者を笑い地獄へと沈める

小野寺ユウスケ おののてら 仮面ライダークウガ

司達の友人で、同じクラスだった。

コレといった特徴もない、普通の人生を送っていたが
特別クラスに移動させられた事で激しい運命に巻き込まれることになる

よく皆からいじられるが本人は気にしていない様子

つまりドMである

そらのかおる
空野薫

司達の友人で、同じクラスだった。ポニーテールが自慢
司達との交流は深いが、特にユウスケとは小学校からの知り合いで
ある。

サバサバした性格で、男らしい部分もある

ゼノンとフルーラからイメージリングを受け取り
ロッド、銃、剣の三種類に姿を変化させる事ができる

おのついでしほ
小野寺翼

仮面ライダーアギト

ユウスケの兄で、教育実習生。
理不尽とも言える流れで、半強制的に特別クラスの担任にさせられ
てしまった

趣味は家庭菜園と家庭的。

優しく容姿も良く、メンバーからも慕われている
メガネをかけているが、いわゆる伊達メガネであり、本人の目は悪
くない

じゅんご
じんご
条戸真志

新聞部の部長で、司達とは別クラスだった。
髪を茶色に染めている。

真面目で正義感も強く、
常に善を全うするその姿勢は評価されており人気も高い。
ある事情で一人暮らしをしていた

しらとり みほ
白鳥美歩

常に真志の周りにいる。

髪は茶色で服装も乱れており、あまり教師からの印象は良くない。

しかし誰とでも隔てなく接する明るい性格から、
交友関係は広く生徒間の評判は高い

ある事情で真志の家で暮らしている。

それもあってか真志の事が気になる様だ

いぬかいたくま
犬養拓真

新聞部、司達とは別クラスだった
優しいが、気が弱いのが欠点。

だが曲がった事が嫌いで、それゆえに小さい時はよくいじめられて
いた

大人しいが、内に秘めている想いは大きい

友里に密かな好意を抱いている

園田友里そのだ ゆり

新聞部の副部長。司とは別クラスだった。ツインテールの少女
拓真とは小学校からの付き合いで、マンションも一緒だった為、
いつも一緒にいる。

気の強い性格で、よくいじめられていた拓真を守っていた

ゲームが強く、ゲームセンターにはよく行っている

守輪椿すわしほき

司と一緒にクラスでよく、遊んでいた
アニメやゲームなどに詳しく、よくネット用語なんかを口にする。
めんどくさがりで、自分にとって不利な状況をなかなか受け入れら
れない面がある

しかし、なんだかんだ言って協力や行動は惜しまない

本人曰く右腕には暗黒の化身が宿っており、たまに疼くらしい。

本人曰く左目には精霊の力を得た魔眼が眠っているらしい

本人曰く赤い満月の夜には血に飢えたもう一人の自分が目覚めるらしい

本人曰く（ry

つまり厨二病である

広瀬咲夜
ひろせ さくや

美しい黒髪、整った顔立ち、凛々しく鋭い瞳

中学時代にはファンクラブまであった程の美少女

椿とは幼馴染であり、それゆえかケンカが絶えない

親が道場を営んでおり、彼女自身もある程度の経験者
堅い性格だが、理解力と包容力があり、実は可愛いもの好きだった

りする

相原我夢
あいはらがむ

咲夜の道場に通っている。中学生で司達より歳下。

真面目で礼儀正しく、正しいと思った人に全力で味方する。

中性的な容姿で、女に間違えられる事もあるらしい

迷った時、コイントスで決めるクセがある

アキラの事が好きだが、本人には全く気づいてもらえない

天美アキラ
あまみ

咲夜の道場に通っている。我夢とは同じクラス
シヨートヘアでボーイッシュな印象。
咲夜を尊敬しており、慕っている。

椿と仲良くして欲しいと願っているが
なかなかうまくいかない事に頭を悩ませているとのこと

我夢の気持ちには全く気づいておらず、弟の様な存在としか思っ
ていない

てんのうじ そせい
天王路双護

資産家、天王路グループの跡取り
イケメン、どこか気品のあるオーラ。

スペックは高いが、意味不明な行動で台無しになる残念なイケメン
常に冷静で、あまり感情を爆発させる事はない。

妹の真由を可愛がっており、軽度のシスコンではないかと思われる

てんのうじ まゆ
天王路真由

双護の妹。一人称はボク。

年齢の割に幼い印象を受けるが、純粹で無垢なその性格から皆から可愛がられている

双護を慕っており、よくなついている。

顔が似ているかどうかは微妙なところだが、クセのある髪質は兄譲りなのだろう

のがみりゅうたろう
野上良太郎

仮面ライダー電王

仮面ライダー電王の主人公。

司達の世界ではなく、別の世界からやってきた。
世界移動の際、デンライナーに帰れなくなってしまう
それから司達に協力する事になる

時間軸は本編終了すこし前であり、さらに主軸の人間という事もあってか、ライダーの中では最強である

ハナ

同じく電王の世界の住人。
容姿は良太郎と共に子供、つまりコハナである

鉄拳制裁や、殺人的な料理、気の強い性格からきついイメージを持つが、
良太郎達を気遣う優しさや、お化けが苦手など、女の子らしい一面も持つ。

良太郎との関係は知っているが、何故か複雑そうである

モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス

おなじみのメンバー。学校内では実体化できる様になっていた
放送室や食堂、空き教室などで過ごしている

真由には大変なつかれている模様

ひじむたる
聖巨

仮面ライダーキバ

司の弟で、我夢達とは同じクラスで仲がいい。

しっかりした性格で、よく司を注意したり、呆れたりする
しかし決して仲が悪い訳ではなく、むしろ良好な関係であるだろう

里奈の事を気にかけており、毎日迎え行っている

芯は強く、ライダーとしてのレベルも高い

のむむしりな
野村里奈

巨と同じクラス

足が悪く、車椅子で過ごしている。

それゆえ悩んだり、迷ったりするものの

巨や我夢、アキラ達に支えられて成長していく

一度決めたら曲げたくない。

負けず嫌いな性格で自分にできる事を精一杯やる努力家でもある。

その想いが伝わり、司達も彼女には対等の扱いで接している

キバットバット45世、キバーラ、ガルル、バツシャー、ドツガ

巨に協力してくれる頼もしい味方

イマジン達と同じく、学校内で過ごしている

第48話 番外編 キャラ紹介 メイン編（後書き）

まあちよいちよい更新すると思います

しかし、間が悪いとか言う突っ込みはなしでw

第49話 番外編 キャラ紹介 サブ編(前書き)

ライダーはオリジナルじゃないんで紹介は無しでいきます

第49話 番外編 キャラ紹介 サブ編

「お宝パイレーツストロングツイスターズ」

トレジャーハンター集団：らしい

司達とは一線引いた位置づけらしく、まだ詳しくは分からない
ゼノン達から、オパンツと言う大変不名誉な略をいただいた

かいとう だいき
海東大輝

自称リーダー

お宝に目が無いらしく、いろいろなお宝を探しまわっている
といっても、お宝の定義はあやふやで結局彼の欲しいモノがお宝ら
しい

薫の持つイメージリングは彼がハントしたモノである
常に偉そうな口調で話す

デイス

緑色の髪にメガネをかけた少年
どこかやる気のない雰囲気がある。
他のメンバーのまとめ役といった役回り

リラ

銀髪の少年。少年だが、女顔。
怖がりで、気弱な性格だが、発言がだいたいまともなので、
他メンバーからは信頼されている

朱雀すざく

派手で露出の多い服、燃える様な赤い髪が特徴の少女
一人称はオレ、口調も男っぽいが女である

食欲が旺盛で『暴食』の肩書きを持つ

マリリン

深い青色の髪。身なり、振る舞いから見て相当なお嬢様。
身の回りの世話を全て執事であるタイガに任せている為
『怠惰』を象徴する

タイガ

マリリンに使える執事、しかしマリリンとはあまり歳は離れていない
リラと並ぶ常識人であり、家事などもこなせる万能人

「????」

司達の前に現れて、時に助言、時に対立する不思議な存在
多くを知っている口ぶりだが、多くは語ろうとしない

ゼノン 仮面ライダーダブル（ボディ）

スーツに身を包んだ青髪の少年。見た目は幼いが、雰囲気は異質で
あり

芝居がかった振る舞いや口調もそれを際立たせている
ナビゲーターの様な存在だが、多くは分からない
フルーラを世界一愛している

フルーラ 仮面ライダーダブル（ソウル）

まるで人形の様なゴスロリファッションの赤い髪の少女。
ゼノンと同じく演劇の様な喋り方や振る舞いを見せる

多くを知り、司たちが危機的状况に陥ろうとも笑う二人は狂気をま
とっている様にも見える。

しかしたまに見せる人間らしさも確かに存在している

ゼノンの事を世界一愛している。

二人は自分達の事を眼だと言う、その真相は…

？

謎の女性。ゼノンとフルーラより上層に立つ彼女は一体何者なのだ
ろうか

第49話 番外編 キャラ紹介 サブ編(後書き)

まあレギュラーは…これくらい…かなw?

では次もよろしく!

第50話 1 1 5 1 4 1 5 5 4 1 7 4 5 2 (前書き)

今日更新となりました。ハイ

次は金曜日かな？

ではござい！

第50話

1 1 5 1 4 1 5 5 4 1 7 4 5 2

そしてほとばしる青い閃光！

男の子を締め上げていたクラウンを瞬時に切り裂き、息の根を止める。

それだけでは終わらない！

そのまま辺りのクラウンを次々に切り裂く！

決る！

刈り取る！

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

ガルルセイバーを構えた、青いキバが怒りの咆哮を上げる。

その衝撃にまわりのクラウンは苦しそうに耳を押さえ、うずくまっていた。

「ラアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

流れるように切り裂き、野獣のような動きでクラウン達を攻撃して

いく！

時に馬乗りになり

時に喉元に噛み付き

時に爪を強化させて切り刻む。

美しい月がその野獣を照らし、同時に絶大な力を与える。

『ヒヤハハハハハハ！』

『ヒャーハハハハハハッ！』

クラウンはナイフを構えて一斉にキバへと向かう。

2、3体ならばキバも受け流す事はできただろう。

だが相手は20体くらいを超えている、キバは抵抗むなくクラウンの群れの中に消えていった。

それはまるで餌に群がる鳥たちの様

キバは無数のクラウンに囲まれ、ナイフで滅多刺しにされる

・・・筈だったが、そうはいかない。
紫の光が周りのクラウンを吹き飛ばす！

「うらあ ああああああ あッッッ！！！！」

ドッグハンマーにチェンジしたキバは
その厚い装甲とパワーでクラウンを弾くと、渾身の力を込めて地面
を叩く。

その力がエネルギーの衝撃を発生させ、キバの紋章を形作った。
そこに触れたクラウンは皆まるでステンドガラスの様に変質し、動
きを止める。

そしてキバはもう一度同じ様に地面を叩く！
すると、ガラス化したクラウンはばらばらに砕け散った。

「はあ…はあッ！」

長時間のウェイクアップはキバの体力をみるみる削っていく。
しかしここで止まる訳にはいかない。

クラウンの群れはまだまだいるのだから

「うおおおおおっ！」

バツシャーに変わり水流弾を撃ちまくる。

キバは襲い掛かる疲労を無視するかのように力強く引き金を引くのであった。

「うっ…」

川辺で拓真はうづくまる。

先程よりはマシになったが、まだ強い吐き気が彼を襲う。

もう何でもいいから開放されたい、そんな事を思いながらも彼は答えを出し切れずにいた。

わかっている。

オルフェノクになればいいだけの話しなのだ、そうすれば自分も戦える。

何度も思った。

でも無理だった！

どんなに分かったつもりでいて、決断した気になっても結局自分には怯えるだけ。

何もできない、していない！

「拓真！」

そんな時、彼の心に光が灯る。

「友里ちゃん！」

拓真は安心する。

そつだ、友里ちゃんなら分かってくれる。

彼女なら僕を攻めたりなんかしない！

「あ……」

しかし友里の手にはファイズギアと変身一発。

拓真の心にどす黒い感情が湧き上がってきた、どうして？

なんで……

「友里……ちゃん？」

「拓真……お願いがあるの……」

友里は少し申し訳なさそうに目をそらす、すぐに拓真を直視してベルトを差し出す。

「っ！ お願い拓真、戦って！」

「・・・ツツ！」

「ゴメンね、でもこのままじゃこの世界も！皆も危険なの！
ううん。皆死んじゃう！」

でも拓真が変身すれば少しでもその可能性は少なくなる！

もしかしたら 「

限界だった。

拓真の意思とは関係なく、彼の心は爆発した。

「じゃあ！友里ちゃんは僕に化け物になれって言うのか!？」

「ッッ！」

「友里ちゃんはいいよ、別に变身しなくていいんだからさ！」

やめる！

拓真の理性がそれを止めようとする。

しかしうまくはいかなかった、強い口調で叫んでしまう。

彼は初めて友里の怯える姿をみたかもしれない。

「拓真……」

「くっ…！」

拓真は友里から目をそらす。

申し訳ない気持ちと、どうしようもない怒りが拓真に降りかかる。

「そっ…だよね。ごめんね拓真…」

後ろから震えるような声が聞こえる。

拓真は耐えられなくなって振り返った。

謝ろっ。そっ思って…

「え…」

その光景は拓真は信じられないモノだった。

友里が…飲んでいる。

変身一発を

「友里…ちゃん…？」

何で…？

どうして彼女はその薬を飲んでるんだ？

意味が分かってるのか！？

拓真の思考がついていけない。
友里は変身一発を全て飲み干すと…

苦いね

…と笑った。

その笑顔はいつもの彼女と一緒に。
拓真もつられて笑みを浮かべる。

「うぐっ…ツ！ああ！」

友里は胸を押さえて苦しそうにうめく。
拓真はまだ回復しない意識のなか、彼女に手を伸ばした。

しかし友里は大丈夫！と、拓真から離れる。

「拓真あ…聞いて、お願い…」

「え……え？」

友里は彼の眼をまっすぐ見つめて、そして口を開いたのだった

第50話 11514155417452 (後書き)

次のライダーの画像を見ました

やっぱり4がイメージされてるんですね

デザインは…まあいいんじゃないかなw

では次もよろしく!

第51話 01413255244312 (前書き)

本当は金曜日に更新しようと思ってたんですが
すこし金曜日に用事ができてしまい
今日更新となりました ではどうぞ！

第51話

0 1 4 1 3 2 5 5 2 4 4 3 1 2

拓真は言ってくれたよね、どうして僕の事を守ってくれるのかって…

違うんだよ。

ゴメン拓真、守ってもらっていたのはあたしの方

あたしなんだよ。

昔から正義感は強い方だった。

悪い事が許せなかった、それがどんな小さな事でも

あたしは正義の味方、

ううん。正義でいたかった。

だってそうでしょ？
正しいことばかりしていたらきつと神様はご褒美をくれるって、信じてたから！

だけど…できなかった。

無理だった。怖かったの、誰かに注意したり駄目って言ったりする
のが

せいぜいそう振舞えたのは幼稚園まで。

小学校からは…

結局あたしは心で反発するだけ。

カンニングの手伝いを強要されたり、

ちよつと強い子が誰かをいじめようと提案した時、

あたしは嫌だっていえなかった。

だって嫌だなんて言ったらあたしがいじめられちゃう…

なにもしない。

見てるだけ、だけどいじめられてる子が助けを求めても知らないふり…

最低だ。

自分が嫌いだった。

苦しかった辛かった嫌だった！

自分が思っていた自分と違う！でもそれはあたしが弱いから！

そんな時、あなたを見つけた。
クラス替えて一緒になった君、
その時は同じマンションに住んでるなんて知らなかったっけ。

最初は気の弱そうな子としか思わなかった。

だけど、同じクラスの子がやんちゃな子にいじめられてる時…

やめなよ…

そう言いたかった。

だけど…駄目！

いえない！

あたしがいじめられる！

そんなの嫌ッ！

「やめなよ…嫌がってるじゃないか…」

「ッッ！！」

だけど…

あなたは凄く嫌そうな顔だったけど…

確かにそう言ったね、

「あ？」

胸倉を掴まれてもあなたは怯まなかった。
強い目で、また拒絶の言葉を口にした

「…やめろよ。殴りたきゃ僕を殴れよ」

…かつこよかった。

あなたは結局その後ボロボロにされちゃったけど…

あたしの心に光が灯った。

あなたがとても眩しく見えた！

「大丈夫…？」

「え…？」

手を差し伸べる、あなたはすこし戸惑ったけど小さく言ったね

「僕に近づかない方がいいよ。君まで変な目でみられる」

そう言って一人で立ち上がろうとするあなたを、あたしは抱きかかえた。

「…どろして」

「だって…」

それが…ただしい事だから。

「あたし、友里。園田友里」

「犬養…拓真」

「うん！拓真、よろしくね！」

それが私とあなたの出会い

「…拓真、一つ聞いてもいい？」

「何…？」

「どうしてあんな事言ったの？」

「…見過ごすなんてできないよ。
気持ち悪くなるんだ、だから止める。」

もしそれで僕が殴られたとしても…僕はそれで納得できるから…」

「っ！」

あなたを守りたい、あなたと一緒にいたい。
本当にそう思った・・・

あたしにはできない事、

できなかった事。

でもあなたは…拓真は違う。

「拓真…大丈夫だよ」

「え？」

拓真は私が・・・

「守ってあげるからね……」

そう言って友里はファイズギアを置く、だってこれは彼のモノ。

そしてそのまま拓真に背を向けると走り出した。ラボへ！

「……」

拓真はぼんやりとファイズギアを拾い上げる。

「・・・ッ」

ポタリと、ファイズギアに一粒の雫が落ちた。

「・・・クソおおおッ！」

ファイズギアについているアイテムを乱暴に引き剥がし、川へ投げ捨てる。

「くそっ！クソッ！ちくしょう！」

一つ、また一つ、川へとツールを投げ捨てていく。

悔しくて、悲しくて

死にたくなかった。

いや、違う、殺した。

僕が

友里ちゃんを。

大好きだった、女の子を

『きゃはははははは！』

『アヒヤハハハッハハハハハ！』

「ぐわあ！」

クウガはクラウン達の攻撃を受けて地面に倒れる。
数が多すぎるのだ。クウガの疲労は蓄積されつづけ、クラウン達は
続々増えていく。

そんな長期戦でいつまでも優位にたてる訳が無い。

『ユウスケ！！』

「ははっ、ちょっとキツイかも……」

そろそろと現れるクラウン達にクウガは敗北寸前だった。
しかし負けられない。

ここで倒れればこの世界は終わるのだから

「この世界の皆だつて笑つていたんだ！
ゲーム？刺激？ふざけんな！」

クウガはクラウンの肩を掴みとび蹴りを食らわせる。
しかし、威力が弱い！
連戦に次ぐ連戦でクウガの精神はもやは限界に近かった。

『ハヤハツハアハハアツツ！』

「ぐあああつ！」

クラウンのとび蹴りをまともに受け、
クウガはついに立ち上がる事すら難しい程のダメージを受けてしま
う。

『きゃはははははーあはー！』

「くそつ！動け！動けええ！」

全身に力を入れるが：力が入らない。

絶体絶命

クラウン達はクウガに止めを刺す為にナイフを構えた。

だが、その時…

その音声が場に響くのだった

『 S t a n d i n g
b y
』

第51話 01413255244312 (後書き)

まあ次は土曜かな？

一番最初に買ったライダーのゲームはファイズでした
友達とやってたんですが…

謎の筋肉痛になりましたよww

では次もよろしく！

第52話 44049341 (前書き)

今日はコレ更新して寝ます

明日っていつか…今日はのんびりできるんで
他の皆さんの小説を読もうかな

では、どうぞ！

「！」

『ヒヤハ……』

クラウンですら沈黙し、音がした方向をみる。

「ゆ、友里ちゃん!？」

『友里! あんたまさか!』

友里の腰にはベルトが巻かれていた。
そしてその手には銃の様なモノが握られている!

「・・・」

友里はその銃をベルトに装填した。
そして、眩い光が彼女を包み込む、青い光…

『Complete』

「なっ！」

黒と銀、そしてオレンジの瞳、友里はデルタを選んだのだった。

デルタは銃。デルタムーバーを引き抜くと口元に持って行く。

「ファイア」

『Burst Mode』

音声がなり、それと共に引き金を引く。

すると、青白い光弾がクラウンに向けて発射された！

『ギョエエエ』

『ビヤハハッ』

まさに、一撃だった。

光弾に触れた瞬間クラウン達は燃えるように消滅していく。
対オルフェノクの名に恥じぬ威力と言ったところか

あれだけのオルフェノクはものの数十秒で全て消滅した。

「友里…ちゃん…っ」

「大丈夫？ユウスケ、薫！」

デルタはクウガの手を握り、引き起こす。

「あ…うん。だけど友里ちゃん…」

「大丈夫！大丈夫だよ！」

デルタは強引に話を打ち切る。
空はすでにオレンジに染まるうとしていた。

「もうすぐタイムリミット。

だけののこり三十分に開始されるラストチャンスで一気に決めちやうんだから！」

そう言っでデルタは変身を解除し友里へと戻る。

だが、ユウスケ達は一瞬だけだが確かに見えた
見えてしまった。

友里の姿が白黒の化け物になっていたのを

「・・・どうしたの？」

拓真の心はぐちゃぐちゃになっていた。

だがそれでも目の前で泣いているウノを見過ごす事はできない。

うつろな瞳でウノを見つめる

「もうすぐ…爆弾が…爆発しちゃうって…グスッ」

だから泣いているのか、当然だ。

いつもならば…大丈夫だよ。拓真はそう言っていただろう、
だが今の彼にそんな言葉をかける勇気も資格もなかった。

何も言わずに黙り込んでしまう

「死ぬのは…怖いよお！」

声をあげて泣き始めるウノ。

拓真も泣いてしまいたい気分だった…

何も声を掛けれずにただ呆然と立ち尽くすだけ

「もつと…やりたい事だった！」

したい事だったってあったのに！」

「っ！」

したい事、やりたい事…

友里を守りたい、それが拓真のやりたい事だった。
だが…

彼女は

人間の彼女はもう死んだのだ

「……夢」

「え……？」

「ウノくんは…夢、ある？」

「……」

拓真の弱々しい一言に、ウノはすこし動揺する。
どうしてそんな事を聞くのだろうという思いと、自分の夢…

しかし、彼はハッキリと答えた

「ぼく……ッ！」

ウノは言う。

生きたいと

生きて檻に囲まれていない空が見たいと！

「・・・・・・・・」

普通の人間、普段の日々を生きているなら絶対に抱かない夢。

拓真は思う、

もし自分が今からでも覚悟を決めたなら…

いや、無理だ。

どうせ自分にはできない。

いつもそうなんだから、今回もそうなんだろう。
結局…友里ちゃんを守れなかった。

「大丈夫だよ」

「え？」

「！」

自分が言えなかった言葉を、前から歩いてきた翼は平然と言っていた。

「先生……」

「もうすぐラストチャンスが始まる。そこで全てが決まる」

でも大丈夫、そう言って翼はウノを優しく撫でた。

拓真は疑問に思う。

なぜ！

どうして！？

根拠もない事が言えるんですか！

その疑問さえ、翼はにこやかに笑って答えた。

「僕達が諦めたら終わりだと思わないかい？せめて最期の時まで戦い続けようよ」

だって、僕達は…

翼は

「達」

と言つ事を強めて言った。

「正義の味方。仮面ライダーなんだから」

「……………!!」

過去、自分だつて見たことがある。

正義のヒーロー。どんな時でも諦めない、そして奇跡が起きる

「だけど…僕は駄目なんです。

結局迷つてばかりで…友里ちゃんを守りたかった。

こんな僕にヒーローを語る資格なんて…」

だつたら、と翼は笑う。

「死んでみるのも悪くないかもしれないよ」

「・・・えっ!?!」

翼は時計を確認すると緊張したようにため息をつく。

「もうすぐ三十分前だね。僕はもう行くよ」

翼は拓真に待ってるよと笑い、走り出す。

拓真は今言われたことを何度も繰り返し、理解しようとした

死んでみるのもいいかもね

第52話 44049341（後書き）

「知っているかいフルーラ…」

「どうしたのゼノン？」

「まあコレはあくまで噂なんだけど…」

デルタは最初女性ライダーでいく案だったそうだよ」

「まあ！そうだったの？」

「あくまでそう言う噂なだけだけれどね

そう言われてみればどことなく

女性的なフォルムだとは思わないかい？」

「う、うーん…」

そう言われれば…そうなのかしら…？」

「まあ所詮噂だから

あまり考えすぎないほうがいいんだけどね」

どうなんでしょうね、実際。

まあ私は三原が一番好きなんで変わってくれて良かったよ…？

次の更新は日曜日

では次もよろしく！

第53話 8374 (前書き)

明日からの更新は申し訳ないんですが不定期になりそうですね
月、水、木くらいは更新できるといいんだけど

ではごっごー！

『ラストチャンスの場合はこの街にあるスーパーアリーナとなっております。』

人間の皆様が無事に生還できる事を心から願っております
道化師』

電子掲示板にその文字が何度もリピートされる。

「どこまでもふざけやがって・・・」

ユウスケは怒りに満ちた表情で壁を殴る

「でも、道化師って奴がラストチャンスを設定できなかったらボク達今頃絶望してますよ…

くやしいけど、このラストチャンスはありがたいです」

巨の言葉に皆無言で頷く

ユウスケ達はアリーナの入り口に立っていた。

翼も合流し、いよいよこの世界の命運を決めるであろう戦いに挑む。

「・・・」

司は携帯でなにやらメールを打ち、送信する。
そして皆にむかって作戦を伝えるのだった。

「は！？本気が司！」

「大丈夫なの、兄さん？」

「ああ、というかコレしかない」

司の作戦はかなり衝撃的なものだった。
圧倒的に勝つ確立が低い、だがしかし司はこれしかないと言う。

「どうせ、道化師の野郎は全うに勝負を挑む気なんて無いさ。
この作戦以外だと時間切れで確実に終わりだ」

「そうだね、僕もそう思うよ。ここはかなり危険だけど司君の作戦
でいいさ」

翼がそう言うと言つと皆はこくりと頷く。
流石に緊張してしまう、数字は今だに千を切つてはいない。

つまり千を超えるクラウンを三十分で倒さなければいけないのだ

「大丈夫、大丈夫だって！あたしがバンバンってやっちゃうから
さー」

友里は明るく笑う。

不安は強いが司達も頷き、それぞれの配置につくのだった。

「・・・」

拓真の心は揺れていた。

ウノの夢、

自分の夢。

叶えられなかった夢と望む夢、

拓真の心に今からでも間に合うのではないかと言う期待と、
今さら自分に何ができるのかという迷い。

そしてなによりファイズギアはツールを含めバラバラになって、川
に沈んでいるのだ。
それを今から探しに行って間に合うわけがない

だが、迷う。

どうしてこんなに苦しいのが自分でも分からなかった。
いつそ全てを放棄して死ねば楽になれるのだろうか…？

「拓真！」

真志がこちらに走ってくる。

拓真は目を合わせる事なく、身体だけ真志の方へ向いた。

「……どうしたの？」

「お前に一つだけ聞きたいことがあるんだ」

「……なに？」

「拓真、お前の夢ってなんだ？」

「えっ？」

真志はなんの遠慮もなくそんな事を聞いてくる。
瞬間、拓真の心に笑顔の友里が浮かぶ、

「ッ！僕は」

「あー、答えなくてもいい！でも、一つだけ覚えておいてくれ」

「え・・・？」

「いいか、拓真。夢ってヤツはさ、たとえ叶わなくとも持つてるだけの意味あるよな。

なんか、生きる気力とか活力とか湧いてくるつうか。

オレ、世界中の人が幸せになればいいと思ったたりして」

八八八と真志は苦笑する、

「ま、叶わないよな。けどな、よく考えてみる。
お前の夢はまだ叶うんじゃないのかよ！

終わってないんだよな！」

友里を守りたい。

それは真志はとっくに分かっていた。

だからこそ、拓真に気づいてもらいたかった。

拓真はオルフェノクになる事を恐れていたのではないと

「友里はどんな姿になっても友里だろ！

お前も！友里も！

そう思ってるんじゃないのかよ！」

「……………」

ああ……そうだったんだ。簡単な事だった

拓真は自分の本当の気持ちに気づく。

あの時、変身一発を飲めなかったのは

オルフェノクになるのが怖いからだとはかり思っていた。

だが、違うのだ。ただ単に、

友里ちゃんに嫌われたくなかったんだ・・・

化け物になる事で友里が自分を恐れてしまつのではないかと、怖かつたのだ

「そんな事あるかよ！」

「！」

まるで心が分かつてるかの様に真志はそれを否定した。

「友里はそんなヤツじゃない！」

お前がどんな姿になろうと、お前の事を変わずに想っていてくれるだろ！

そう言うヤツだ。
それは、お前が一番知ってるんじゃないのかよ！
そうだろう？」

今まで友里と一緒に過ごしてきた日々、思い出が蘇る。
ああ、そうだ。

友里ちゃんは…優しくて

強いから・・・

「僕つ……友里ちゃんを信じられなかった…ずっと好
」

好きだったのに、その言葉を真志は止める、

「だからさ、まだ終わってないんだよ」

「終わってない・・・？」

「そうさ、拓真。」

つか、お前いくら親しい人だったりしても傷つけないとか疑わないなんてありえないぜ。

だってオレ達人間なんだからな。

大切なのはそれからだろ？そう思わないか？」

拓真の瞳に少しだけ光が灯る。

「拓真、お前は友里を守れる力が手に入るって分かったとき、嬉しかったる？」

「だってお前の夢だもんな。嬉しいよな！」

それが夢を持つものの特権だろ？

真志は笑う。

もうすぐ世界も自分も死ぬかもしれないのに

「まだ、お前の夢は終わってない。友里を、皆をまだお前は守れるんだ！」

「っ、僕は…まだ…」

どんどん大きくなるその光、拓真の中にいるマイナス思考が消え去っていく。

「どうだ？嬉しいか？嬉しいよな！夢はまだ終わってないんだ」

そして真志は両手を広げる。

「皆、夢をもってるんだよ」

「あ・・・」

ウノの夢を思い出す。

生きたい。

当たり前のような事、だけど彼にとってはそれが希望なのだ

「皆にも、夢が、希望がある！」

だから頼む拓真。どうか皆の夢を、希望を…」

そう言っつて真志は拓真にそれを投げつける。

拓真はそれを受け取った、

そしてその眼にもる光

「守ってくれないか？」

「……」

拓真はそれを受け取る。『変身一発』

「辛い役目を押し付けるな…すまん」

真志の言葉に拓真は首を振る。

と、同時に携帯がなった

「司くんからだ…」

司からのメールはとても短いものだった。
しかし拓真はそのメールを何ども読み返す。

そして笑った。

「ううん。そうだね、僕の夢は終わっていないんだ。諦めるのはお
かしいよね」

翼の言葉を思い出す

僕はもう吹っ切れた。

いつそ死んで、楽になるよ

第53話 8374 (後書き)

まあ、ライダー関係ないんですが

タイバニ二期

OPの折り紙カッコよすぎだろ…w

では、次もよろしく！

第54話 15019264 (前書き)

予約投稿を初めてやってみました。
いけたか？

ではどうぞ！

「友里、いいか？」

「おっけー！変身！」

『Standing by』 『カメンライト』
『Complete』 『ディケイド！』

二人は変身を完了させ、ホールの扉の前に立つ。
覚悟を決めたはずだが、襲い掛かるのは

恐怖、

緊張、

そして重圧。

もしも、自分たちがクラウンを全て死滅させる事ができなければ…

「中がやけに静かだな…気をつけるよ」

「そだね。じゃあ…行くよっ！」

二人はドアを開けて素早く中に転がり込む。
アリーナホールは真っ暗で、とても静かだった。

「・・・」

「・・・」

だが、ゲストが登場した事をきっかけに、ホールに明かりが灯る。

ラストチャンスが始まりだ。

「くっ!!」

「ッ!!」

分かっていた、理解していたつもりだったが…

その光景に目を疑う。

アリーナホールの客席にクラウン達が座っている！
1000を超えるクラウン達が皆同じように腰掛けています！

「・・・」

これを…全て、あと三十分で…

「うううう…」

アリーナホールはあまり大きくない、そのせいで客席全てが満席になっ
ていた。

それがむしろ逆に恐怖と緊張を倍増させていく。

満席になっているスタジアム、異常な光景。

そして、電子掲示板に表示される残りクラウン数と時間。
始まりを告げるブザーが鳴り響いた。

『・・・八八』

『・・・ヒヤ八八』

ヒヤ八ああああああアア八はは八八はヒヤ八八八はヒヤ八ツ
はやはあハツはハツ八八八ハツはハハツはーッ八八ハツツ八八八
ははきや八八はくひやはああアアアアアアアアアアアアアア八八八
八八八八ー八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八
八八八八八は八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八
八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八

アリーナホールに狂気の大爆笑が巻き起こる。

それだけではない、クラウン達は一斉に立ち上がると、

デイケイドとデルタを無視して、自分の席から一番近い出口に走っ

ていく。

ホールの出口は全部で四つ、東西南北に設置されている。

それら出口へとクラウン達は向かう。

結局、道化師は人間に勝たせると言う事など考えていない。

残りのクラウンを全てを一箇所に集めると言う事で人間に希望を持たせる。

そしてすぐにクラウン達を散り散りにさせ、タイムアップを狙う。

希望を持った人間が絶望に落ちるだけのイベント。

それが道化師の仕掛けたラストチャンスだった。

『ヒヤハハ！…アヒヤ？』

クラウン達は扉を開けようとする。

しかし開かない！

クラウン達は外に出られずただ混乱するだけ

「うおおおおおおお！」

足止めされたクラウンに打ち込まれる青い弾丸。

そう、司は分かっていたのだ。

クラウン達が逃げることを！

だからこそ対策をとる！

「やっぱり逃げるつもりだったのか！ふざけやがって！」

南扉をタイタンフォームが、
東扉をアックスフォームが、
西扉をストームフォームが、
そして北扉をドッグハンマーを構えたキバがそれぞれ押さえつけて

『フォームライド ストーム!』

だが、諦めない。

諦めるわけにはいかない。

心が死ねば、その時点でこの世界も…

自分達も死ぬ。

「はアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

巻き起こる嵐、次々と巻き上がるクラウン。

そして…笑う声。

バヤハハハハハハヒヤハハハハ!

「ぐあああああ！」

背中に鋭い痛みを感じて振り返る。

客席に座っているクラウン達がナイフを投げてきたのだ！

一つ一つは小さいものだが、数が多すぎる。

ナイフはまるで鳥の群れの如くホールに飛びかっていた。

他のクラウンに刺さるうがお構いなしに！

「くっ！友里！」

『カメンライド・クウガ！』 『フォームライド・タイタン！』

タイタンフォームに変わりデルタをかばう。

「司！大丈夫っ！？」

「ああ、お前が頼りだからな！しっかり頼むぜ…ッ」

「う、うん…！」

無数のナイフもタイタンに変われば何の事はない。
しかしクラウン達はそれを瞬時に理解すると、群れを成してディケイドにのしかかってきた。

「ぐぐうううっ！」

重い！重すぎる！

すぐに地面に倒れてしまふディケイド。

そこにクラウン達は馬乗りになってナイフで刺しまくる。
助けようとしたデルタも、嵐の様なナイフに巻き込まれ、引き離されてしまった！

「ウツ！あああああっ！」

「ぐああああ！」

「兄さんッ！」

「友里ちゃん！」

ゲート越しにキバ達はその絶望的な状況を確認する。
助けに行きたい！

その衝動に駆られるが、動けない！
ここを動いてしまえばクラウン達が外に逃げ出してしまう！

詰み、まさに最悪の状況だった。

しかしそんな彼らの心情をあざ笑うように、狂気の爆笑は尚も続くのだった…

第54話 15019264 (後書き)

友里デルタの変更点はとりあえず

ツール、デルタショットが追加されています

くらいかな…要はグランインパクトが使えるって感じですよわ

次の更新は…木曜辺りですね

では、次もよろしく!

第55話 71437555 (前書き)

クロスオーバーをやりたいと思いつつ…
やったらぐだりそうな気もする

うーん難しいww

ナイフでズタズタになりながらも、
デルタはディケイドを抑えているクラウン目掛け発砲する。

次々にクラウンは灰に変わるが、尚もナイフの雨はデルタに振りか
かっている。

激しく火花を散らす装甲。

そして切りかかってくるクラウン。
一撃で倒せるデルタも、限界が近づく。

ヒヤーツハハハハハハ！

「ぐっ！がああああ！」

殴る、蹴るの嵐がディケイドを、
無数のナイフが、デルタを襲う！

ヒヤハハハツツ！

「しまっ！」

クラウンの一体がデルタムーバーを弾く、
デルタはすぐに拾おうと手を伸ばすが…

その時だった

「アッ！」

ぐうつつ…ガフツ！」

クラウンの拳がわき腹を抉る。

あまりの苦痛にその場に倒れるデルタ…

「大丈夫　　がはアツツ！！！！」

デイケイドの首を締め上げ、クラウンは楽しそうに振り回す。

そして二、三回地面に叩きつけると、デルタの所へ蹴り飛ばした。

「ぐあああああああ！！！！」

吹き飛ばされる二人、

数百体のクラウンオルフェノク。

迫り来る制限時間、

減らないメーター…

「良太郎！ヤバイで！」

『良太郎。アレで行こうぜ！』

『そうだね。限界だ！二人助けに行こう！』

電王は何かを決心して扉を開けようとする。

しかし

「言った筈だよ電王。邪魔しないでくれってね」

「ゼノン君……！」

電王の後ろでダブルが銃を構えて、ベンチに座っていた。

「君がいきなりアレを使わず、

さらにディケイドを壁役にしなかった事はボクらも不思議に思っ
ていたんだ。

何故だい？

君は彼らのなかでも一番強いはずだ」

『……司君に頼まれたんだ。

でも、もう限界だよ、助けに行かなくちゃ！』

『残念だけれど、させないわ』

『え！？』

「ボクらは救世主の登場を大人しく待とうじゃないか。
ねえ？電王」

ダブルは扉に照準を合わせている。
ここで抵抗すれば扉を破壊されるだろう。

電王は大人しく従うしかなかった

「しかし、電王。君は分かっているのかい？
このまま君が彼らに味方するという行為が、

どのような結果をもたらすのか…」

「ッ…」

『もう既に貴方たちはその領域に足を踏み入れてしまったのよ？
そこまでして彼らに味方する理由が貴方達にはあるのかしら？』

フルーラの問いかけに電王は少しだけ動揺を見せる。
しかし、直ぐにその迷いを否定するかのようになんて答えた

『ぼく達は人間だ。そして彼らは友達なんだ…
友達は助ける。それだけだよ』

「ふうん。まあ…君がソレでいいならボク達は何も言わないけれど
ね。」

電王、君はこの世界…滅ぶと思うかい？」

ダブルの問いに迷わず電王、良太郎は答えた

『絶対にこの世界は滅ばない』

ダブルはニヤリと笑う。

やはり・・・面白いね

その時だった、バイクのエンジン音が外から聞こえてきたのは。

第55話 71437555 (後書き)

次は土曜日です…ね

まあ土日でファイズ編はほぼ終わるかな…たぶんw

では次もよろしく！

第56話

227255417452 (前書き)

すみません！

土日じゃファイズの世界は終わらないと思います(爆)

あと今回、人によってはモヤモヤする所で終わるかもなんで
明日に溜めてみるってのもいいかもしれません

ではございぞー！

第56話

227255417452

ヒヤハハハハハハハハハハ！！

「ぐっ！！…ハア…ハア…ツッ！」

デルタとデイケイドは立ち上がる。

彼らは自らの命が無くなるまで戦うのをやめないだろう。

圧倒的絶望、しかし彼らは歩き出す。

歩かなければならないのだ。

たとえナイフで切り裂かれようと、

殴られ蹴られようとも。

ヒヤハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！

ナイフを構えてクラウン達が走り出す！

次は、耐えられる？

それとも……

「っおおおおおおおおおおおおお！」

銃を構える！向かってくるクラウン！

守る、その為に……戦つ。私は……

ヒヤハハハハハハハ
アハハハハアハハハハアアアアッ
ハハハハハアハハハハハ！

「・・・・・・・・」

デルタは膝をついていた。

雨のようなナイフは彼女の体力と精神を確実に奪っていたのだ。
目の前には大きくナイフを振り上げているクラウン。

ディケイドが何か叫んでいるがうまく聞き取れない。
徐々に意識ももろろつとしてくる。

「大……丈夫……だよ……拓……真」

薄れる意識の中、彼女はそっと呟く。

「私……が……守っ……てあげ……る……か……ら」

大好きな

「あ……な……た……を……」

ごめん。もう駄目かも

さよなら。ごめんね拓真

彼女はそつと口にする、届くだろうか？

バイバイ

『バヒヤツババババババババ！』

「！」

突如、無数の弾丸がデルタの前にいたクラウンをぶち抜いていく。

「え……?」

『ビヤハハハハハハッ!!』

さらに鉄拳がクラウンを吹き飛ばす!

『ジュジュジュ』

デルタの前に立っていたのは…

オートバジン!

「え……?あ……」

鮮明になっていく意識

「へへっ！遅すぎなんだよーッ！！」

マジで焦った、

そう言ってデイケイドはその方向を指差す。

「あ・・・」

デルタはその方向を見る。

そして、見つけた！

「あ…あ…！！」

どうしてだろうか、デルタ。

友里の目から涙があふれてくる。

でも、震える声であろうとも、彼女は笑う。

「遅い…ぞっ！拓真あー！！」

その視線の先には…

犬養拓真！

「遅くなってゴメン。司君、友里ちゃん」

クラウン達も何事かと黙り、拓真の方に視線を移す。
拓真はクラウン達を睨みつけると、

自らの正義。ファイズギアを取り出した。

それを腰に装着し、ファイズフォンを手にする！

『5』

そして拓真は思い出す。
あの時

「辛い役目を押し付けるな…すまん」

真志の言葉に拓真は首を振る。
と、同時に携帯がなった

「司くんからだ…」

司からのメールはとても短いものだった。

闇を切り裂き、光をもたらす 夢の守り人 ファイズ

拓真は何故かおかしくなつてプツと吹きだしてしまった。
でも、なにか熱いものが込み上げてくる

「ううん。そうだね、僕の夢は終わっていないんだ。
諦めるのはおかしいよね」

拓真は変身一発を一気に飲み干すと、

苦いと笑う。

真志は少し複雑な顔をしながらも、しっかりと笑い返した。

だが、拓真の顔が真っ青になる。
そうだ、ファイズに変身するための道具を川に投げ捨ててしまった。

しかもツールを全部バラバラにして！

「くっ！」

今から拾いに行けばぎりぎり間に合うかもしれない！
せめてベルトとフェイスフォンだけでも

「行くのか、拓真？間に合わないかもしれないぜ？」

「それでも…僕はもうっ迷わない！
迷いたくないんだ！」

迷っているうちに誰かが傷つくのはもうたくさんだ！」

それを聞いて、真志はうつむく

「たぜ」

「え？」

「待ってたぜ、その言葉！」

『5』

「待ってたって…?」

顔を上げた真志はニヤリと笑っている。
そして、ポケットからソレを取り出した。

「あ！それ！」

それは泥だらけになったファイズフォンだった。
怒りに任せて川へ投げ捨てたツールの一つ。

「あ……」

そこで初めて気づいた。

真志のスボンが泥だらけだと言っ事を！

「ま、ポケットに入れるのはちょっとアレだけど
今さら汚れてもな。

里奈ちゃん！

「はーいつー！」

真志が手を上げると物陰から里奈が現れ、
猛スピードでこっちに来る。

「え？え！？」

訳が分からない拓真をおいて、里奈は真志からファイズフォンを受け取る。

そして自らのポケットからタオルを取り出してゴシゴシとファイズフォンを拭いていった。

「んしょ！んしょ！」

一生懸命に泥を拭い取っていく里奈。

ファイズフォンはみるみる綺麗になっていき…

「よし！できました！」

「よし、ありがとうございます！里奈ちゃん！」

「皆！出てきていいぞ！」

「え！」

真志の合図と共に、学校に待機している筈のメンバー全員が現れる。それだけじゃない。

皆泥だらけで、手には・・・

「ツツー!!」

「はい!どつぞー!」

夏美はファイズドライバーを拓真へ渡す。

「えへへ、大変でしたよお。

我夢さんとアキラちゃんの三人で見つけたんです」

「今の私達にはこれくらいしかできません。

拓真先輩、応援しています」

「僕達に出来ることがあればいつでもいつまでいってください。力になりますから!」

「あ、ありがとう！夏美さん！アキラちゃん、我夢くん」

何故か顔まで泥だらけの夏美達はえへへと笑う。

「はい…どうぞー！」

「ありがとう真由ちゃんっ！」

真由はファイズポインターを拓真に差し出す。

「お兄ちゃんと…」

ハナちゃんと一緒に見つけたのお…」

「お願いね拓真！」

「フツ、期待してるぞ救世主」

泥だらけなのだが、
無駄にイケメンの双護に拓真は笑ってしまふ。

「あはは、まあやってみるよ。」

ありがとう、ハナちゃん。双護くん」

「たくまあー」

「ひっ！」

藻だらけの美歩が背後から現れる。

一瞬化け物かと思っけて拓真は腰を抜かしそうになってしまった。

「受け取ってくれ拓真。これは君のものだ」

「途中でこけて散々だったおww」

同じく藻だらけの椿と咲夜は、ファイズショットを拓真に差し出す。

「あ、ありがとう！咲夜さん、椿くん、美歩さん！」

「お前が川にファイズギア投げ捨てるの見ちまって、皆で拾う事にしたんだ…」

余計なお世話にならなくて良かったぜ」

「だったらアンタも汚れるおおおお！」

後ろから美歩が真志に抱きつく！

「ぎゃあああああ！藻がああああああ！」

泥と藻で汚れた顔をすり寄せる美歩、
真志は振り落とそうとするが美歩は離そうとしない！

「薄い本もでねえなこの格好じゃ、あとコレ！」

椿は拓真に腕時計の様なツールを渡す。

「これは？」

「あのロリバカップルが見つけたやつだ」

「え？ゼノンさんとフルーラちゃん！？」

まだ会った事はないけど、

話を聞く限りとても手伝いそうにないのだが…と拓真は思う。

それを感じたのか、椿はニヤリと笑った。

「引きずりこんでやったんだよww」

「ええ！？」

拓真は皆から受け取ったモノを組み合わせ、ファイズギアを完成させる。

「それから…君も」

拓真は自分の下へ走ってきたオートバジンを優しく撫で、
そしてそれに乗り込む！

「…じゃあ、行って来るよ」

「おう、行ってらっしゃい」

真志達はいつもの調子で拓真に手を振るのだった。

『5』

拓真は迷うことなくエンターのボタンを押した。

『Standing by』

「僕はもう迷わない。弱虫の犬養拓真は……」

翼に言われた言葉。

それを思い出してバックルにフォンをセットする！

「死んだんだ！」『Complete』

赤い光がアリーナホールを包み込む。

闇を切り裂き、光をもたらす

仮面ライダー・ファイズ！

「司君も、皆も、友里ちゃんもっ、僕が守るッッ！」

第56話 227255417452 (後書き)

一応今は一人だけ…仮面ライダーと全く関係ない
作品のキャラクターをだすつもりではありません。
あまりにもハマリ役というところだったので

まあでも出てくるのはまだ先ですがねww

では次もよろしく！

第57話 65042355244312 (前書き)

駄目だと信じてた未来が崩れ去ろうとしている

正直ずっとこうだと思ってましたww

ではどうぞ！

もしかしたら投稿ミスで同じヤツが投稿されてるかも

だけど

「ちっぽけだから守らなくちゃいけないんだよ！」

ディケイドは三枚のカードをドライバーに放り込む。

ファイズもまた、自らの腕に装備されているウォッチからメモリーを抜き取り、

装着した！

「俺は破壊者ディケイド！この世界のふざけた結末を……」

『アタックライド・イリユージョン！』

『カメンライド・ファイズ！』

ディケイドの両隣に分身が現れ、そのままファイズに変身する。

「破壊するッッ！」

『フォームライド』

『Complete』
『アクセル!』

四人のファイズの胸部が同時に展開する。
そして色も黒を中心にした姿に変わった、

ファイズアクセル。超高速の戦士!

『READY』

メモリをポインターにセットし足へ装備する。

「いくぜ、拓真」

「うん!」

『Start Up』

刹那、四人のファイズ達の姿が消えた。

そして、それはまさに

紅き光のシャワー

「「「うおおおおおおおおおおおおおッッッ！」」」

赤い雨。

いや違うッ！雨ではない！

円錐状の赤い光はクラウンに命中すると動きを止めるポインター！

四人のアクセルが放つポインターの大雨！

逃げようとするクラウン達だが、数が多いことが仇となり逃げられない。

次々と拘束されていくクラウン達。

赤く染まる客席！

もやは彼らは笑っていない！

全滅の危機の前にただ逃げ惑うだけ

そしてこの間、現実時間にしてわずか五秒。

五秒で客席を含む大半のクラウンにロックが施されていた！

「すいすい…」

赤い光のなかデルタはポツリと咳く。

だが、本番はこれからなのだ。

愚かな道化達への…

元に戻るディケイドとファイズ。
アリーナは無数の　が存在するだけで、静まり返っていた。
辺りを包む静寂、もう笑い声はかけらとて聞こえてこない

「終わったな…」

流石にエネルギーを使いすぎたのか、
ディケイドはその場に倒れこむ。

「うん！」

ファイズはディケイドに手を差し伸べる。
これで世界は守られたのだ。

安心する二人。

しかしデルタはそうではなかった。

「待つて！止まってない！時間も！メーターも！」

「何ッ！？」

残り時間が止まってない！？

当然だ、残りクラウン数が1を示しているからッ！

「まだあと一体残ってるっ！！」

「馬鹿なッ！」

三人はあたりを見回すがクラウンの気配は無い。
いや、もしかしたらどこかに居るのかもしれないが…

皮肉にも の弾幕がそれを隠していた。

「やばい！のこり三十秒しかないッッ！」

「だめだ！アクセルが使えない今、見つけても倒す手段が！」

28

「どっだっ！どっだっ！いるッッ！」

27

叫んでみても何もおこらない！

26

無常にも残り時間は過ぎていく。

25

駄目なのか？

24

この世界は滅びる運命にあるのか？

2
3

「・・・」

2
2

「違うッッ！」

2
1

諦めるなっ！たどえ最期の瞬間だろうとも！

2
0

「諦めてたまるかあああああああ！！！」

1
9

そして、その思いがこの状況を

18

破壊する!!

『ウエイクアアアアップツ!!』

17

亘、そうキバはドツガハンマーを構え辺りを見回す。
そしてそのドツガハンマーに備えられている

トウルー・アイが真実を映し出した!!

16

「にYYYYYYYYYさああああああん!!」

15

亘はありったけの力を込めて叫ぶ!

「北ゲートのすぐ近くの男子トイレ！その個室の中に一人隠れてる
！！」

14

ディケイドは頷くと、素早く二枚のカードをセットした！

13

『ファイナルフォームライド』 『ファファファ555！』

12

ファイズの体が変形し、巨大なバズーカーに変わる！

11

ファイズプラスター！ディケイドはそれを構えた！

10

北ゲートの方向へファイズブラスターを向ける！

9

『ファイナル・アタック・ライド』

8

『ファイファイファイ555！』

7

「はあああああああああ！」

6

赤い光が砲口へと集中していく！

5

「やあああああああッッ!」

4

発射!

3

強大な赤い閃光は、北ゲートだけでなくその周りも粉碎していく!

2

「.....」

沈黙。そして

1

「.....ッッ!」

そして、のこりクラウン数

1

「止まっ……たあ……」

1

「残り時間が……」

「あ……」

1

0

「やあつたあ……」

三人は力なくへたり込む。そして少しずつ笑い出した。

「うはは……！ やつばかったなあ！
本気で焦ったぞ！ あハハッ！」

「あたしもおお！ もう寿命縮みまくり！」

それぞれの扉を押さえていたユウスケ達も
集まって喜びを分かち合っているのが見えた。

一番活躍した亘が胴上げされている。

「あー。本当に亘がいなかったら終わってたなー」

「今度何かお礼しないとね！」

すっと、へたり込む二人に差し出される手

「……帰ろっか」

「……」

「……」

「うん!」「ああ!」

二人は笑うと、拓真の手を握った。

「ねえ、拓真」

「・・・何？」

もし、世界が私達の敵になったとしても

ずっと、一緒にいようね

「さっし・・・」

いつまでも、一緒に

二人はその手をしっかりと握る。

しっかりと…握るのだった

第57話 65042355244312 (後書き)

イリユージョンの分身は最大で二体呼び出せます

体力は低く、ほぼ一撃で消滅してしまいます

ですが、力を込める事で防御力を高める事もできます

イリユージョンのカードは各世界、一度しか使用できません

まあこんなところかな。

では次もよろしく！

第58話 15019151128374 (前書き)

はい、という訳で今回で話しは一応ラストですね

まあ正確には次の番外編でファイズ編はラストなんです

が……

クラウン達が全て消滅した事をきっかけに、この街を囲っていた檻も消え去る。

喜びに歓喜する人々、安心から泣き崩れる人もいる。

ウノは帰ってきた拓真達に駆け寄ると、笑顔でお礼の言葉を述べた。

彼の夢は叶ったのだ。

檻に囲まれぬ空を、

生命の希望を、

また得ることができたのだ！

博士やウノの紹介もあつてか、街の人達はそろって拓真達にお礼がしたいと言ってきた。

だが、彼らはソレを断る。

「抑える技術も身につけないとね…」

「・・・」

拓真と友里は、ふとした時にオルフェノクの刻印が浮かんでしまうのだ。

もし、それが街中ででてしまったら…

「人は怯え、同時に不信感を抱くだろうな」

「そんなモンなのかねえ…」

少し離れた所で椿と双護が話していた。

「その場はいいかもしれん。

だが、時間が少し経てば徐々にそう言った感情が芽生えるだろう

な。

「それがある意味普通なのだ」

「街中を救ったヒーローなのにな…」

「フツ、人は心にどす黒い感情を常に潜ませているものさ」

「・・・お前にもあるん？」

「ああ、この前もこの心を悪に染めてしまった…」

「な、何ぞ…？」

「つかイケメンで暗い過去とか…ど真ん中すぎるだろ…」

「聞いて驚くな…」

「ごくり、と椿は意気込む」

「ユウスケのおやつを…つまみ食いしてしまったのだ…」

「あっそ……」

椿は拍子抜けして、深くため息をつく。

自らの行動の罪深さに苦悩する双護を冷めた目で見つめると、また深くうな垂れたのだった

「夢が…叶ったら…どうなるの？」

拓真は喜びに踊る人々を、屋上で見ていた。皆本当に嬉しそうで、楽しそうだった。

拓真はそれが嬉しかったが、同時に疑問にも思っ

「また新しい夢をみつけるだけだろ」

司はそう言って笑う。拓真も頷き笑った。

「しっかし…」

イリユージョンでアクセルはキツイもんだな…ははっ」

「あはは、動きがロボットみたいだ」

二人は喜ぶ人達とはちょっと違う笑顔を浮かべ、学校へと戻っていきのだった。

一方…

どことも言えぬ書斎の様な場所、そこに女は座っていた。

その眼には拓真の姿が映っており、女はニヤリと笑って視線を移す。

電王、野上良太郎へと

「どつやら、彼らはこのままディケイド側に付くようですよ」

「それが彼らの選択なのかしら！」

「……………」

女の背後から声が聞こえる、ゼノンとフルーラだった。

二人は相変わらずクスクスとつかみどころの無い笑顔を浮かべて椅子に座る。

ゼノン達は彼女に若干の敬語を使っているあたり、主従関係の様なモノがあるのだろうか。

だが、それでもゼノン達は足を組んで座ったりしているわけだが…

「成る程…ゼノン、警告はしたのか？」

「ええ、もちろん。」

チケットも渡しましたよ。それでこの結果です」

女は小さく笑った。それもまた一つの運命だろう

「ああ、でもゼノン。」

実はワタシまだよく分かってないの。電王は何がマズイのかしら？」

「そうだね、ならすこしヒントをあげようね、愛しのフルーラ…」

ゼノンはフルーラの手にキスをする。

そしてテーブルに置いてあったティーカップと、ポットを手にした。

「見ててくらん…」

ゼノンは二つのカップに紅茶を注いでいく。

「彼らの世界はとてもよく似ている。
同じ紅茶というカテゴリーに分けられ、

銘柄も近い……」

「ただ、やはり同じじゃない。

そう言っただけでゼノンは右の紅茶にスライスレモンを投入した。

あっという間にレモンティーとホットティーの完成だ。

「良太郎……そう、電王をこのレモンに例えようか？」

そしてゼノンはレモンティーに入っていたレモンを取り出すと、
それをそのままホットティーの中へと移した。

「これが、今の状況さ。

レモンティーの中に入っていたレモンが、ホットティーの中へ移動した状態」

「分かったわ！ホットティーの味が変わってしまったのね！」

「いや、干渉された側の世界がどうなるうとも

ソレはただの結果としてでるだけでそこまで危険視する必要はないよ。

ホットティーにレモンが入るのはさして問題じゃない」

「まあ、ワタシもたまに入れるわ」

「フッフ、そうだね。だけど…問題はコッチ」

そう言ってゼノンが指差したのはレモンが無くなったレモンティーだった。

「この世界…いや、この紅茶はレモンがあって始めて完成される世界なんだ。

別にレモンが食べられてなくなったのなら誰も文句は言わないよ。

「だけど突然レモンが消えちゃったら…それはおかしい事だろう？」

「ええ、そうね」

「うん、だから」

そしてゼノンにはニヤリと笑って新しいスライスレモンを取り出すと、それを何も浮かんでいないレモンティーに入れる。

「じつするのよ。いや、じつなるのよ」

「新しいレモンが追加されたわ！これで問題はないわね！」

「あははは！そうだねフルーラ。」

もうこの紅茶は完成されてるんだ、レモンは一つでいい」

ゼノンはそのままレモンティーを女に差し出す。
女は鼻で笑うとそれを受け取り口を付けた。

そしてゼノンは次にホットティーに浮かべられたレモンをスプーン
ですくい上げる。

「もうレモンティーにはちゃんと新しいレモンがあるんだ。
だったらもうこのレモンは……」

レモンティーには 「

要らない

「フッ」
「……」

女はもう一度良太郎と八ナを見る。

「さて…どうする？電王？」

早くしないと…

「ククククッ」

女は楽しそうに紅茶を楽しむのだった。
どの様なルート、そして結末を迎えるのか？

それは彼女にも分からない。
だからこそ…

おもしろいのではないか

第58話 15019151128374 (後書き)

まあ次は多分、火曜か水曜ですかね

その後に少し間を頂きまして次の試練となりそうです

では次もよろしく！

第59話 番外編 2101629512 (前書き)

ここで拓真ファイズの変更点を少し

アクセルフォーム

基本的にはクロックアップと同等のスピードですが
しかし感情の変化によって早くなる場合があります

一度つかうと冷却が完了するまで使えません

とりあえずはコレだけです
ね
ではどうぞ！

あと今回は川拾いの話なんです
が、コメディ色が強いので
一応それだけを警告しておきますw

「・・・クソおおおッ！」

拓真はファイズギアについているアイテムを乱暴に引き剥がし、川へ投げ捨てる。

「くそっ！クソッ！ちくしょう！」

一つ、また一つ、川へとツールを投げ捨てていく。そしてそのまま拓真は走り去ってしまった。

「・・・」

それを見つめていたのは真志だった。

覗き見はよくないと思っけていても、
つい隠れて二人のやり取りを見てしまったのだ…

だが、その結果かどうかはわからないが、こんな事になってしまった

「拓真、お前……っ」

自暴自棄ってヤツだろうか、

友里をオルフェノクにしてしまった事を悔やみ、

そして行き場の無い怒りを…

「ッ」

さて、どうする。オレ？

拓真がこのままファイズにならなかつたら世界は滅びるのかね？

ぶっちゃけソレはソレで構わない、そう思う。

拓真を無理やり変身させた所でそれが正しい選択になるのか？

分からない。

だったらこのまま世界と一緒に死ぬのも…

「・・・」

つっても、司達はそうじゃない。だったら

「うし、やるか……」

拓真、オレ達は辛くてもやらなくちゃならないんだよな。
悪いけど、お前には……

「さてと……あ、もしもし？美歩？」

「と、言う訳で……ここにツールが落ちてる筈なんだけど……」

真志が指差す方向を皆は見る。

「成る程……ってか、

ウラタロスとかバツシャーに頼めば一発じゃないの？」

「あの姿のままじゃここにはこれないよ。

オレ達で探すしかないさ」

その言葉を聞くと同時に双護が川に飛び込んだ。
何のためらいも無い行動に皆は少しだけ驚く。

「割と深いところがあるな。真由、気をつけるんだぞ」

「うん……分かった！」

そして真由も同じように川へと進んでいく。
背の低い真由は深いところでは危ないので双護がしっかりと手を握っていた。

「お前ら……」

次は我夢が飛び込む。

双護は、もう一つの手で我夢をしっかりと支える

「ありがとうございます、双護先輩っ！

本当だ、結構深さがバラバラですね…

気をつけないと……」

一同は頷く。

普段は見るだけの自分達が役に立てるかもしれないのだ。

それぞれは川に向かって飛び込んでいく。

しかし…一人だけ

「っ……」

里奈は申し訳なさそうにうつむいていた。
しかしソレを真司は感じ取り、彼女にタオルを差し出す。

「見つけてもさ、きつと汚れてると思うんだよ。
だから、里奈ちゃんが綺麗にしてくれないか？」

「！！！」

「は…はい！私っ！頑張ります！」

真志は笑ってサムズアップをすると、川へと戻っていくのだった

とまあ意気込んでみたはいいものの、
なかなか小さなツール達を見つけるのは難しく、さっきから探して
いるが全然みつからない。

散り散りになって探してみたり、
ローラー作戦なんかやってみたがどうにも無駄だった。

深い所は腰まで水があり、長時間の搜索は体が冷えてしまっ
て続かない

「くそっ、早くしないと…」

「もうすぐラストチャンス始まっちゃいますよ…」

あまり時間はない。

皆で手分けをして探すことになった。

とりあえず三人で分かれて探す。

「うーん…」

椿は両手を使ってツールを探していた。

ゴoogleでもあるならもっと楽に探せたんだろうが…

今は悔やんでいてもしかたない。

適当に手を振り回して、何か当たったらソレが何かを確かめる。
それを繰り返していた。

「うーん…」

すぐに見つかると思っていたが、案外そんな簡単じゃないって事が…

「おー！」

しかし何か堅い感触を感じて、ソレを引き上げる。

もしかして！

「えー…」

しかしソレはただの泥だった。
期待していた分ガツカリ感がヤバイ。

死ねる

「萎えるわあ…そおい！」

椿は泥の塊を後ろに放り投げた。

ベチャ！

「あん？」

何か変な音がする。

水に落ちた音じゃなくて…何かにぶつかったような…

「……………」

「……………」

振り返ると目の前には泥を顔面で受け止めている咲夜が見えた。
何か冷たいモノが背筋を通り過ぎて行く。

あ、ヤバイ…

「さささ咲夜さんってばどどどど泥パツクっすか？
いやー、やっぱり違うね美少女（笑）は！

ちょ！まてっ！嘘！冗談！俺が悪かった！
だから暴力は止めよう？な？

オイ！聞いてんのか！？

ちょ、まっ

アーツ！

「ねえーなー…」

美歩は辺りを見回すがソレらしい形はない。
腰も限界を迎えようとしていた。

だが、弱音は吐いていられない。
皆がんばっているんだ、自分だけ楽しようなんでもってのほかだ！

「うしー！」

気合を入れる、その時だった！
背中に何かがぶつかる！

「ん？」

振り返ればそこには…

椿の死体があった

「」

美歩は言葉を失う。

まさかクラウンにやられてしまったのか!?

そんな……仲間が減った。

皆で元の世界に帰れると思っていたのに……

「むくじ」

「きゃあああああああ!?!」

椿が起き上がった!

何故?

まさか……ゾンビ!?!?

「ひえー！動いたああああ！」

「死んどらんわああああああ！」

「ぎゃああああああ！」

ドボンッッ！

大きな水しぶきが上がって美歩は倒れる。

「おいおい、大丈夫かあ？」

「ままま紛らわしいんだよっ！」

既に藻だらけになっている二人はため息をつく。
こんな事してないでさっさと探さなければ…

「その…なんというか…」

悪かった、つい」

「ああ…いや、まあ別にもういいけどよお」

咲夜は申し訳なさそうに椿に頭を下げる。
美歩と咲夜、椿の3人は決意を新たにツールを探そうと決意した！

「バアアアアアアアアア！」

「「「ぎゃあああああああ！」「」「」

だが、だがしかし川底から双護が泥まみれで現れる。
顔面が泥まみれでもはや別人！

3人は化け物かと思って思わず腰を抜かしてしまった。

「ブハツ！双護！お前何やって！」

「くっ！藻が頭にいい……」

「うへー……」

3人はもうびしょ濡れだ。それは双護も同じな訳だが……

「泥パツクだ……」

たった一言双護はそう言って三人から離れていくのだった……

「な、何やってんだよアイツは…」

椿は立ち上がるために手で地面を押す。

その時だった。何か堅いモノに触れたのは…

「お？」

椿はソレを拾い上げる。

カメラ…だろうか？

「！」

そして椿はその
のマークを眼にする。
間違いない！

コレは…

「…けた」

「？」

「見つけた…！」

「え！？」

「見つけたあああああああ…！」

ファイズショット。回収成功！

その少し前、双護と真由もまたツールを探すために頑張っていた。

「ブクブクブク……」

「真由、そっちは深いぞ。気をつけるんだ」

双護は真由を引き上げて、タオルで髪を拭く。
よく見ると、顔に泥がついている。

双護はソレもタオルでふき取った。

「フツ…真由はまだ泥パツクはいらないな」

「泥…パツク…？」

「ああ、泥を顔につけるんだよ。肌にいいんだ」

「へー…」

「と、言ってもこんな泥じゃ」

べちゃり……

顔に感じるその感触…

「……………」

べちゃり。もう一発

「……………あ、あははは。どうした真由？兄ちゃん泥で前が見えないぞ
お！」

なんでお兄ちゃんに泥をなすり付けてるんだ？

反抗期かなあ？」

「ボクね、お兄ちゃんに……………
泥パックしてあげるのお……………」

「……………」

なんて……………」

なんて兄思いの妹なんだツツ！
双護は感動で涙が出そうになる。

ああ、そうか真由は俺の為にいいい！

「お兄ちゃんは嬉しいぞ！さあ、もっとやってくれ！」

「うん！」

真由は笑顔で泥をすくい上げたのだった

「真由…そろそろいいんじゃないかな？
お兄ちゃんもう何も見えないんだけど」

「もっとと……もっとと……」

「ハハツ！真由はいい子だな！
でもな、どうして髪にもつけてるんだ？真由？

……真由？

聞いているのか真由？

真由？

真由ウウウウ！！」

一生懸命に泥を双護に付けていく真由。
双護は流石にこのままではヤバイと感じたのか、一瞬の隙をついて
妹から逃げ出すのだった。

「バアアアアアア！」

「「「ぎゃあああああああ！」「」」

息が苦しい。流石にもぐって逃げるのは無謀だったか。
目の前で椿達の悲鳴が聞こえたが気にする事はないだろう

「ブハッ！双護！お前何やって」

「泥パツクだ……」

そのまま歩く。
とり合えず泥を落とそうか……

「苦労するわね……」

「フッ」

ハナが差し出したタオルを双護はお礼を言って受け取る。

「あたしは寝てるときリユウタロスに落書きされたわ。
油性のマジックでね」

「フツ…気遣い感謝する」

「お兄ちゃん…！探したよお！」

真由が向こうから走ってくる。

双護とハナ、二人は謎の握手を交わすと3人でツールを探すのだった。

「みつけたあ！」

真由はファイズポインターを高く掲げる！

ファイズポインター回収成功！

「やあ、頑張っているみたいだね」

「！」

突然、空からそんな声が聞こえて一同は上を見る。

『ヒート・トリガー！』

「うわぁー！」

椿と咲夜の間をそれは振ってくる。驚く二人！

「赤いライダー!?!」

「はっ!?!おいおい咲夜さんよお!

お前とうとうおかしくなったのか?

どう見ても青いライダーだろうが!」

「はあ?青?馬鹿かお前!どう見ても赤だろうが!」

「はいはい、じゃあお前もし青だったら謝れよ?」

「ソレはコッチの台詞だ!」

『もういいかな?』

ダブルは正面を向く。

「「「「めんなさい」」」」

椿と咲夜は互いに深く頭を下げるのだった…

ゼノンとフルーラは変身を解き、彼らを見下す場所に移動する。
一同は何事かと思わず身構えた。

「フフツ、頑張っているね……」

そんな君たちの汚い姿を一度見てみようかと思ってね」

「まあ！何てこと！ブラックゼノンだわ！でも素敵！」

「あははは！ありがとうフルーラ！

見てごらん、彼らもボク達の愛の力に啞然としているよ！

クフフフ 「

「フ」

笑い合う二人に突如はしる衝撃、

美歩がドロップキックで二人を川へと突き飛ばしたのだった。

大きな音をたてて2つの水しぶきが上がる。

「何てことをするのぉ！せっかく新しいお洋服を買ったのに！」

「プハッ！何をするんだ！？」

「コッチの台詞だったの！何しにきたんだ！時間無いつてのに！」

「ああ、もうすぐラストチャンスだったね。

じゃあボク達も行こうかフルーラ」

「うん！そうね！」

二人はそそくさと川から上がろうとする。だが

「どうしたんだい椿、美歩。

名残惜しいのは分かるけどその手を離してくれないかな？

じゃないとアリーナに行けな」

「「わっしょおおーいっ!」「」

ダバーンっ!

美歩と椿はゼノンを引き倒し再び川へと戻す。

「ブハッ!って、蜂の巣にされたいのかい!」

トリガーマグナムを構えてゼノンは起き上がる。
しかしそこにいたのは椿でもなく美歩でもない、

真由だった。

「手伝って……くれないの……?」

眼に涙を浮かべて首を傾げる真由。

「あ……アハハ、悪いけど」

「可哀想！」

「え……？」

フルーラは涙を浮かべている真由を抱きしめる。
尤も真由の方が年上で背も高いのだが…

フルーラはまるで真由をペットの様に撫でると、ゼノンの方を向いた。

「ねえゼノン。一つくらいなら手伝ってあげてもいいんじゃないかしらっ。」

「えっ！？あー…あはは。そうだなー…」

でも彼らに協力しちゃうとあの人に怒られ

「皆頑張っているんだし…ね？」

いつの間にか椿や美歩を含む全員が真面目にツールを探していた。
時折全員でチラ見してくるのだが…

(こいつ等……)

とんだ策士だ。

ゼノンは小さくため息をついてフルーラの髪を撫でたのだった。

「なんでボクがこんな事を…」

「そう言わないでゼノン。とてもカッコいいわよ」

ゼノンとフルーラもまた水につかってツールを探す。

ちよっと馬鹿にして帰るつもりだったのにどうしてこうなったのやら…

「あ！あつたわ！」

「見つけたんだね。流石ボクの天使だよ！
ホラ！これで満足かい！アホ共！」

「ういーっす！サンキュー！！！」

美歩はそう言って二人にジューズを投げる。
フルーラは丁寧にお礼を言い、
ゼノンゼノンは鼻を鳴らし、軽くお礼を言つとアリーナに向つた。

ファイズアクセル。回収完了！

夏美と我夢とアキラ、3人は少し喋りながらツールを探していた。オルフェノクになると言う事。

それがどう言う事なのか？自分達はまだ軽視しているのだろうと言う事

「難しいですねえ……」

「私には…分かりません。正直どう言った行為が正解なのか……」

アキラはため息をつく。

元気付ける？それともあえてキツイ言葉を投げかける？

分からない。それが無性に悔しかった。

「答えなんてないんじゃないですかね……」

我夢は手を泥の中に入れる。
しかし何もソレらしい感触はない、ならば次のところに手を入れるだけだ。

「僕達は今、こうやってツールを探しています。」

それは拓真先輩が戦う意思を示した時、初めてこの行為が報われる。

そうですね？

だけど僕達は報われるとかそう言うの以前に、拓真先輩や皆さんの為に探してるんですよね？」

「ええ…まあ」

「だったら僕達はただその為のだけに動けばいいじゃないですか。今こうやってツールを探す事が僕らにできる事なら、

それを一生懸命やりましょう」

夏美とアキラは頷くとまたそれぞれ川の中を探していく。

「いやぁー我夢君はしっかりしてますね！私とは違います」

「いえっ、僕は…口ではなんとも言えますから」

「またまたぁ！ね？アキラちゃんもそう思いますよね？」

「え？ああ……」

「えっ!?!」

我夢は夏美を見る。

笑ってる、しかも何か嫌な笑い方だ。

アレ?なんか親指を立てて…

「まかせてください…ギャルゲは結構得意なんです…!」

何が?いや、てか何を……焦る我夢に対してニヤリと笑う夏美。

『ここでバツシーっとアキラちゃんの好感度を再確認しておくんですよ。』

きつとアキラちゃんは、

そうですね……とか言っつて頬を染めるに違いありません!
見ててください我夢君!』

「ええ!?!」

夏美は小さな声で我夢にささやく。

だが…

「どうぞでしょうね。我夢君けっこういい加減な所もあるから」

真顔、というかむしろ冷めた様子でアキラは答える。
そしてすぐに違う方向を向いてしまった…

「………」

「あ…あれー？あ、あははははは！
おっかしいですねえ？あ…あは…はははは」

バシャーンッッ

「あれ？我夢君？どうして倒れるんですか？

我夢君？我夢君！？」

がつ、我夢クウウウン!!」

真っ青になった我夢を引き上げる夏美。

「あれ!？」

我夢の首に何かがつ掛かっていた。
それはまさしく…

「ファイズドライバー!」

我夢の心に大きな剣が刺さってしまったが、
大事なものは得ることができたのであった…

「ふう…」

皆なんだかんと言ってもちゃんと見つけれられてるな…
真志はそう思う。

いや、下手に沈んだ気持ちよりコッチの方がらしいちゃ、らしいか。

「……………」

拓真は今何を考えているのだろうか？分からない。
ただそれは真志にとっては問題ではないのだ。

彼は彼で決断して行動するだろう。
それがどの様な結果を生んでも文句は言わないさ。

「おー！」

だけど…このまま終わるのも胸糞悪いつて思わないか？

「なあ？そつだろ。拓真」

真志はソレを川から拾い上げる。

泥まみれだったがちゃんと動いている。防水は完璧ってか？

真志は小さく笑うと、フェイスフォンを掲げて、皆に知らせる

こうしてフェイスギアは完成したのだった。

第59話 番外編 2101629512 (後書き)

と、言う訳でファイズ編完全終了です

ちよつと次の試練の準備の為、2〜3日更新をお休みします。すみません

では次もよろしく！

第60話 話06第(前書き)

今回は時間指定での更新なのでもしかしたらシリーズ管理ができてないかも

今回から新しい試練ですね。

ではごっぞー！

第60話 話06第

「司っ、お前…今、何て言った…？」

「…だから」

司は少し戸惑いながらも、真志に全てを伝える。

「っ……！」

真志は何も言わない。

しかし見開かれた目が全てを語っていた、

司はそれを感じつつもあえて続ける。

途中でやめる事などできるものか

「しかも」

真志は、それから司が喋る言葉を食い入る様に聞き入っていた。

質問をする訳でもない、

反論する訳でもない。

ただ、一心に司の話を聞くだけだった。

「……って言う訳だ」

「……」

司が一通り喋り終わると、真志は何も言わずうつむく。

悲しむのではなく、

余韻に浸る訳でもない。

心に穴が開いた様な感じだろうか、真志はただ何も言わずにうつむいたままだった。

「……」

司は真志の心情を察して教室を後にする。

その後も、真志はしばらくそのまま動く事は無かった

「フツ…素晴らしい朝だな」

「おはようございます双護さん」

「おはおは」

「ああ、おはよう」

「うーす」

朝になり、それぞれが起床してくる。

実はファイズの世界が終わってから、皆は翼と葵の事を知った。驚くメンバー達、それから少しは皆元気が無かったが、翼の既望もあって、もうだいたい元通りの雰囲気に戻っていた。

翼としても隠し事はなるべくしなくなかったし、

皆にもその事で気をつかってほしくなかったのだろう

皆もソレを理解し、いつもの様に過ごす事を決める。

そして、今は朝食。

食事は当番製になっており、毎回くじ引きで決めたペアがそれぞれを担当していた。

「今日は相原と白鳥が当番か。助かったな……」

「そうだな。」

この間のハナと真由ペアは料理じゃなくて毒物生成だったから……

……

司はこの前の夕食を思い出してしまい、テンションが下がってしまった。

とにかくそれほど酷いモノだったのだ。

思い出すだけでも吐きそうになる

「ちゃんと分量を考えれば誰だってそれなりのモノを作れますよ。」

美歩先輩だって最初は無理とか言ってたけどちゃんと作れたじゃないですか」

「あはは、ぎゃむっちの教え方がうまかっただけっすよ！」

美歩は笑顔で我夢を突つつく。

恥ずかしそうだったけど嬉しそうな表情だった。

「はい到着う。俺の方が先に到着う！」

咲夜さんよお、俺の方が早起きって事でおkですよー」

「馬鹿か貴様は、ただ単にお前の方が先に食堂に入ったただけだろうが。」

ワタシの方が先に起きていた！」

「はい違いますう、椿くんの方が先に起きてましたー。」

お前、じゃあ今日何時に起きた？おら、言ってみるよ！」

「はっ、六時だ」

「はい俺の勝ちでしたあ。」

椿くん五時に起きてましたー！俺の勝ちー！」

「嘘をつけ、嘘を。昔から起きるのが苦手だったアホが何を言っ

いるう？

それにアレは嘘だ。ワタシは四時半に起きていた」

「……つ、椿くん……」

よくよく考えたら四時に起きて 「

「うるせえええ！お前らさっさと席に着けよッ！」

相変わらずだな。

双護達はため息混じりに二人を見る。

椿と咲夜は既にどっちが朝食を早く食べられるかで戦いを始めていた。

よく飽きないモノだと皆は笑う、

しかしそんな中、一人だけ浮かない顔をしている者がいた。

そう、真志だ。

「・・・」

先程からずっと黙っている。

見れば食も進んでいない、それだけでなく先程から何度もため息を
ついては遠くを見つめていた

「・・・元気ないですね。真志君」

「まあ今回は真志君が選ばれたんだ。緊張するのも無理はないよ」

「うーん…正直、」

真志はこう言う事で緊張しないタイプだと思ってたんだけどなあ」

美歩は先程から何ども真志の方をジロジロと見ているが、それすら
も気づく様子は無かった。

「あー…多分違うぞ、それ」

「え？」

複雑な表情で司が会話に参加してきた。

美歩は先ほどの言葉の意味を司に問う、

司は言いにくそうにしながらも、渋々と言った感じで口を開いた。

「実はな…」

「はいー完食　！俺の勝ちー！ハイお前の負けー」

「はっ？お前は馬鹿か？トマトが残ってるぞお」

「あー、しょうがないしょうがないー！

トマト食うと俺の中に眠っている墮天使が　」

「あああああ！うるせええええええな！少し黙ってる！」

「「チツ！」」

「実はな」

「え？龍騎の結末？」

「ああ…それを話したら…ずっとあの調子って訳だ」

第60話 話06第(後書き)

思えば今回で60話目ですか…

いやいや、本当に読者の皆様や

お気に入り登録をしてくださっている皆様
どうもありがとうございます！

これからも頑張っていくますんでどうかよろしくお願いします！

では、次もよろしく！

第61話 話16第(前書き)

さて、少し注意をココで

まずですね、今回から龍騎編なわけですが
残りの編含め、割と原作との設定が変わってきます
それはちよつとしたモノであつたり割と大きいモノだつたり…

申し訳ありませんが一種の平行だとお考えください。
今回の龍騎編では

- ・オリジナルカードの登場
- ・カードの効果が原作と違う

がその変更設定だつたりします。
どうかご了承ください

あとごめんなさい！原作龍騎のネタバレを含みます

ではごつぞー！

第61話 話16第

美歩達は首を傾げる。どうしてそんな事であんなに沈んでいるのだからか？

だが、それも予想通りといった様子で司は続けた。

「いいか？龍騎ってのは…」

司はそう言って龍騎の話聞かせる

「ゲッ！それマジ？」

「ああ、死ぬんだよ。城戸真司は」

「主人公：なんだよね？」

翼と美歩もしばらく固まってしまった。

まあ主人公が死ぬ作品は少なくはないが…

(まあ、俺も実際こんな感じだったな…)

司は当時を思い出しながらも、ため息をつく。
まあ分かっていたといえはそうなのだが…

「いや…それで、さっきも言ったけど。」

真志は主人公、城戸真司の事をとても気に入っていてな…

それで…」

いや、俺だって伝えるかどうか迷ったんだぞ！

司はすこし口調を強めるが、意味は無いと悟ったのかすぐにやめた。

「つまり何だ。簡単に言えば、

条戸は好きなキャラクターが死んで落ち込んでいると言っ訳か」

「ま…簡単に言えばな」

双護の言葉に司は頷く。

そう、真志は落ち込んでいたのだ。

司から龍騎の話聞いていた時、

ライダー同士の戦いを止めようと頑張る城戸真司を彼は尊敬していた。

そんな彼に憧れていた。

そう、しかし城戸真司は死ぬのだ。モンスターから女の子を守って…

別にその行動も彼「らしい」と言えば彼らしいが、

真志はそれを予想していなかった分、大きなショックを受けてしまった。

結局ライダーバトルに参加した全員死亡という結果に、真志はやり切れない切なさを感じる。

「……」

結局、真司のした事は正しかったのだろうか？

ライダーバトルに勝ち抜けば願いを叶えてもらえるという。

だったらいつそ勝ち抜いて

「真志ってば！」

「……？」

ふと気がつけば目の間に美歩の顔があった。不機嫌そうにこちらを睨んでいる、

「さっきから呼んでるんだけど？」

「え？ あ…ああ、悪い悪い！ハハっ…なんだっけ？」

「なんか悩みがあるならこの美歩さんが聞いてあげるっつてんの！」

「あはは…別に大丈夫だぜ？」

そう言って真志は笑う。

しかし美歩は相変わらず膨れっ面で真志を見ていた。

「な…なんだよ」

「…べっつに」

美歩は不機嫌そうに答えると食堂を出て行った。

「何だよ…アイツ」

「頼ってほしかったんですよ」

「う、うーん…」

夏美の言葉に真志は頭を抱える。
別に頼りにしてない訳じゃないが…

「難しいな…」

真志は残りのパンを一気に口に入れる。味なんて感じられなかった。

「今回はどんな世界なんでしょうね」

屋上でアキラ達は今回の世界を見渡していた。
特に何の変哲も無い街、都会といった所だ。

「結構風が強いですね」

「大丈夫？里奈ちゃん」

「うん。ありがとう」

四人はその変哲の無い世界をしばらく眺める。

正直、ここが自分たちの世界だと言われても疑わないだろう。

ビルがあつて、広告があつて…

「クウガの時と同じだね」

「ええ。と言うか…」

世界って一体どれくらいあるんだろうか？我夢の疑問に皆沈黙する。

「少なくともボク達が一生かけても回りきれないくらいはあるんだろうよ。」

「なかには人間がない世界とかもあるのかな…」

まさに途方もないのだろう。

しかし不思議なものだ、そんな途方も無い話を彼らは全然知らなかったのだから

「本来は交わるものではないのかもかもしれません…」

「ひょっとすると、別の僕らがいる世界もあるかもしれないって事ですか」

四人は世界という無限の境地に想いを馳せる。

だが、その時だった

「「「「「!!!!!!」」」」」

轟音がして、気がつくと
街中のビル、車の窓やガラスが割れていた。

次に聞こえてきたのは悲鳴、
街中から助けを求める声や、言葉にすらならない叫びが聞こえてきた。

「あれは!」

四人はさらに新しい音を確認する。
耳障りな羽音と何かの鳴き声、

一つ一つの音量は小さくても、それが山のように重なれば大きな音量
となって四人に届く。

巨達すぐにその音の正体が何かを確認した。

「ちっ、やっぱり平和にはいかせてくれないんだよね…」

『巨ネーん…』

「ここだよ！キバット」

キバットは屋上の巨を確認すると、一気に手元まで飛翔する。

『なんか大変な事になってるみたいすよー！』

「そうだね、街の人達を助けにいこう！」

『了解すー！がぶーっ！』

「変身！」

現れた刻印と共に巨の姿はキバへ変身する。

「巨、頑張ってください」

「気をつけて！」

「巨君、無理しないでね」

心配そうに見つめる三人に軽く合図を送ると、キバは屋上から飛び降りた。

『ブロン・ブースター！』

キバットがホイッスルを吹くと、
キバのバイク、マシンキバーに黄金の魔像ブロンが装備される。

ブロンブースター！

爆発的な加速で直ぐにキバは街中に消えていった。

「ヴェ、ヴェヴェツ」

逃げ惑う人々をヤゴ型モンスター、シアゴーストの大群が追いかける。

不気味な鳴き声を上げてシアゴースト達は餌である人間を捕食する
為に街中を破壊していく

「ウワアアアアッ！」

飛び散る鮮血が人々をパニックに落とし、悲鳴の嵐が街を包んだ。
あちこちで火が上がり、事態はより深刻さを増していく。

「ヴェ ヴェヴェ ヴェ」

シアゴースト達は口から糸を吐き、人間を絡めとる。
恐怖で泣き叫ぶ人達を気にする事もなく、シアゴースト達は食事を
開始した

まさにここはゴースト達の餌場だろう。
人間など所詮その程度でしかないと、不気味な鳴き声がそう告げて
いた。

「ヴェヴェ ヴェ？」

「ヴェヴェヴェ ヴェヴェ？」

しかしそれを否定するかの様にバイクのエンジン音が鳴き声をかき

消していく。

瞬間、風を切る音と共にシアゴースト達が宙に舞う。

いや、吹き飛ばされたと言った方が正しいだろう、ゴースト達を一撃で絶命させたのはブロンブスター！

キバはブースターから飛び降りると、人々を絡めていた糸を引き干切る。

しかし周りを見渡すと、何人かは既に息絶えていた。

「ツツ！！」

確かに全ての人を助けられるなどとは思っていない。

しかし、今この現状を目にして見れば、悔しさと怒りが込み上げてきた。

いや、もっと根本を考えればこのシアゴーストも生物。

人間を食料にしているならば食物連鎖の結果論。

だが、

「つくしよおオオオオオオオツツ！」

キバの蹴りがシアゴーストの首を本来なら曲がることのない方向へと持って行く。

大きな視点で見ればシアゴーストのやっている事は生きる為の行動なのかもしれない。

だが人間のエゴを押し通してでもこいつ等を全員倒す！

それが自分のやるべき事なのだろう。

『ウエイクアアアアップー！』

「オオオオオオオオオっっ！」

雲ひとつない青空にヒビが入り、音をたてて割れる。
現れたのは漆黒の世界、美しい月が輝く夜だった。

ウェイクアップによりキバの力が倍増する！

蹴りの威力も跳ね上がり、先ほどは蹴り飛ばすのが精々だったが、蹴りの力で腹に風穴を開け、瞬時に絶命させる程に強化されていた。

しかし、ウェイクアップは強力だが同時に精神力を大きく消費する。あまり長時間の使用はできない。

キバはある程度ゴーストを一掃したところでウェイクアップを解除することにした

「ヴェヴェヴェ！」

「うっ！」

しかしその僅かな隙を狙ったゴーストが、糸でキバの動きを封じる。

「くっ！」

引きちぎろうともがくが、さらにそこを狙って他のシアゴーストが糸を発射する。

一本の強度は低くてもそれが束になれば話は別だ。

キバー一人の力ではどうする事もできない！

だが、それは一人での話なのだ。

『ドツガ！開放オー！』

キバットはベルトから紫のホイッスルを取り外し、一瞬だけそれを鳴らした。

そして素早くホイッスルを放り投げる。

すると、ドツガハンマーが空中から現れ、元の姿に戻った。

「大丈夫か！すぐ 助ける！」

ドツガはキバを捕らえていた糸を簡単に引きちぎると、シアゴースト達に攻撃をしかける。
豪腕がシアゴーストの身体にめり込み、2、3体まとめてぶっ飛ばしていく。

「…ッ！ ありがとうドツガさん！」

「気にするな お前 仲間」

その言葉にキバは力強く頷いた。

「ヴェヴェッ ッッ」

「ヴェヴェヴェ ッ！」

さらに、気がつけばシアゴーストの動きが止まっていた。
見ると赤いポインターが、無数のシアゴースト達を拘束しているの
だ。

『3』

「ヤアアアアアアアアアッ！！」

『2』

赤いポインターに黒き閃光が突入していく、
あれだけいたシアゴーストもなすすべなく次々にその体を爆散させ
ていった。

『1』

『Time Out』

シアゴーストのいたところは既に のマークがあるだけ、

『Reformation』

アクセルフォームを解除するフェイス。
周りにシアゴーストが残っていないのを確認すると、安堵のため息
をついた

第61話 話16第(後書き)

黄門様が…終わる…だと？

おいおいメアリー、そりゃないぜ

んー、結構見てただけに残念ですね

とまあライダー関係ない後書きでした
では次もよろしく！

第62話 話26第(前書き)

小さい時龍騎を見て鏡がトラウマになったのはいい思い出w

ではではー！

第62話 話26第

「大丈夫？巨君」

「はい、拓真さんも大丈夫ですか？」

「うん、ありがとう。とにかく他の場所も見て、一回戻ろうか」

「そうですね 　　って危ない！」

「え！？」

ファイズが上空を見上げると、
シアゴーストの進化形態とさらにその進化形態の
レイドラゲーンとハイドラゲーンがファイズに襲い掛かるうとして
いた。

「うわっ！」

ファイズは素早く防御の姿勢をとる。

「ブバァッ！」

「ヴェエヴェエッ！」

だが突如突風が巻き起こり、ドラグーン達を吹き飛ばす！

「大丈夫かい！」

「先生！」

ファイズ達の視線にはストームフォームになっているアギトが見えた。

アギトはマシントルネイダーをスライダーモードに変化させると、クロスホーンを展開させエネルギーを溜める。

「はああああッ……」

「ブブブブブブブッ！」

「ヴェエヴェエ！」

「たあああああッッ」

アギトはスライダーが与えた猛スピードを得てジャンプ切りを決める。

ハルバードブレイク。

その強力な一撃はドラグーン達を絶命させ、爆発を呼ぶ。

「こっちはだいたい片付いたみたいだね。とりあえず傷ついた人達を手当しようか」

ファイズとキバは頷くと、アギトに続いて歩き出した。

『ファイナルアタックライド』
『クククウガ!』 『デイデイデイケイド!』

「「おりゃあああああああ!」」

デイケイドアサルトがシアゴースト達をまとめて巻き込み爆発させる。

しかしやはり数が多い。

できることなら長期戦は避けたいのだが・・・

「おい!どいてどいてーっ!」

「え?」

ふと遠くを見るとデルタがジェットスライガーに乗ってなにやらモゾモゾと動いている。

「成る程な、ユウスケ！」

『え？ あ、ああ！』

ディケイドはクウガゴウラムに掴まると上空に飛翔する。

ディケイドはデルタに合図をおくり、

デルタも了解と叫ぶと、そのスイッチを押した！

「発射！」

それと同時にけたたましい音をたてて、

ジェットスライガーから何十発ものミサイルが発射される。

ミサイルはシアゴーストの大群を瞬く間に吹き飛ばしていく！

圧倒的武力はシアゴーストやドラグーンを焼き払い、辺りをさら地にまで変えたのだった

「凄いな・・・」

「当然！」

デルタは自慢げに胸をはって見せるのだった

「まだ街にはあいつ等が徘徊してるみたいだね」

司達は一旦学校へ戻り、これからどうするかを決めていた。
シアゴースト達はまだ無数に散乱しており、街のパニックは継続している

「とりあえずもう一度シアゴースト達を倒しにいこうか、
今はそれが一番だと思う」

「ああ、そうだな。じゃあ行こう！」

そう言ってユウスケは駆け出していく。
外には既にシアゴーストの群れが見えており、ユウスケは直ぐに戦えるように変身の構えをとる。

だが、その時だった。

『トランスフォーム』

「！」

「グオオオオオオオオオオツツ!!」

その咆哮と共に真つ赤な龍が現れる。

自分の姿を見て怯むシアゴーストを、龍は容赦なく弾き飛ばした!

「ブブブブブブブブブブ!」

「ヴェヴェヴェ ヴェ ヴェヴェ ヴェ!」

シアゴーストやドラグーン達は龍にやられっぱなしと言つ訳にもい
かない。

しかし反撃を試みるが、圧倒的な龍の力にねじ伏せられていく。

「あれは!」

その様子を見ていた司は思わず声をあげた。

「ど、どうしたんだよ司」

「あのモンスターは…間違いない！

あれは
「

司がその言葉の続きを口にしようとした時、見つける。
その視線の先に…真紅の騎士が立っていることに

「……っ!?!」

「おい、どうしたんだよ司!」

ユウスケは不思議に思い、司の視線の先を追う。
そしてユウスケも見つける、その騎士を

「あ……」

真紅の騎士はシアゴースト達を前にゆっくりと深呼吸をする。

そして、覚悟を決めて気合をいれた！

「っしゅあー!!」

真紅の騎士とその周りを飛び交う龍をみて、司は震えていた。
なんだ!?!? どういう事だ!?!? そう言う世界なのか? ?
洪水のように情報と考察が司の頭を駆け巡る

そうこうしている間にも時は過ぎるのだが…

「っしゅあー!!」

騎士はシアゴーストやドラグーンの攻撃をかわしながら同時にダメージを与えていく…

その様子を司は食い入る様に見つめていた。

「あの…声…」

間違いない。

司は複雑な表情をつかべ、真志を、皆を見やる。

「あれが…城戸真司。」

つまり、仮面ライダー龍騎だ
「

一同はしばらく沈黙する。

だがそうしている間にも龍騎はシアゴースト達を相手に戦っている。

「えっ！？つまり…なんだ…？本人って事…？」

「あ…ああ！ここは多分龍騎そのものの世界なのかもしれない！」

司は校庭から出ようか躊躇う。

できれば加勢したいところだが…

「……」

ココに来て異質な緊張が司を蝕む。
なにか正しいのか全く分からない。

自分がとるべき行動が決められなかった。

戦いに加勢する？そうだ、それが一番いい。
その筈なのに身体が緊張して動かなかった。

良太郎と初めて会ったとき、その時も少しこの感情が湧き上がってきた。

ずっと見てたヒーローに会えた。

だけど自分の心の中では分かっていたのだ。

それは完成されたキャラクター、本当にいる訳じゃないし脚本があつて脚本があつて…

だが、今目の前にいる龍騎、そして電王を見て

本当なら嬉しくて舞い上がってしまう程喜んで、サインだけじゃなくて写真とかいろいろ貰つて…

その筈だつた、でも違う。

何故かうれしいと言う心の中で、若干の恐怖があつた。

もちろん良太郎は今では大切な仲間だ。

でも本来自分は野上良太郎と言うキャラクターには一生会うことなんて出来ない。

でも、現に自分は今こうやって良太郎とも会話しているし、本物の龍騎を目にしている。

それは本来ありえない事。

そう、ありえはしないのだ。

でも、今現実はどうなっている、自分もライダーになっている。

それは…やはり今、

自分が置かれている状況がただ事ではないのだと、司は再確認するのだった

第62話 話26第(後書き)

翼アギトは全ての必殺技時にクロスホーンが展開します

そう言えば、

ディケイドで土って結構龍騎にカメンライドしてたイメージがあります

好きなんですかねww?

それとも大人の事情が……w

では、次もよろしく!

第63話 話36第(前書き)

明日からの更新は不定期になりそうですね
まあ多分木、金…あたりかなと

ではございませぬ！

第63話 話36第

「・・・っ」

司は目の前の龍騎、城戸真司がどうなるのかを知っている。
この世界でどうなるのかは分からないが、恐らく同じ結末だろう
それが余計な圧力となって司にのしかかった。

ユウスケ達とは視点が違う、司は今…ある意味において死者を見て
いるのだから

「・・・」

ふと、真志を見る。

彼は齒を食いしばって龍騎を見つめていた。

憧れの存在が目の前にいる。

だが、もしかしたら…今、この戦いで命を落とすかもしれないのだ。

「司っ！皆！」

「・・・！ ああ！」

真志の眼を見て司は余計な考えを捨てる。

「ヴェヴェヴェヴェ！」

「ヴェヴェヴェヴェ！」

「のわっ！」

シアゴーストの糸が龍騎に絡みつく！
それを見て、司も覚悟を決める！

「助けよう！」 『カメンライド』

司は変身しようとしてデイケイドライバーに手をかけた。
目の前の命を見過ごして何が仮面ライダーだ！

司はどこかまだ燻る心を隠しつつ、変身の構えをとる

『アドベンチャー』

「！」

しかし、また電子音が聞こえた。

今度はシアゴーストとは違うモンスターの大量が押し寄せてくる。

「っ、敵？」

「いや……っ、ちょっと待て！」

友里はデルタフォンを構える。しかし司はそれを静止させた。

確かに新たに現れたモンスターは敵…に見える。

が、しかしそのモンスター。

ギガゼールを筆頭としたレイヨウ型モンスター軍団は龍騎ではなく、その周りのシアゴーストに狙いを定め、攻撃していった。

「キキキキッ！」

「ヴェヴェヴェ！」

ガゼルモンスターはその手に構えた槍で次々にシアゴースト達を貫いていく。
どうやら…敵ではないようだった

「セーンプーイ！大丈夫ですかー？」

ガゼルモンスター達の後方で気の抜けた声が聞こえた。
龍騎は自分に絡まった糸を外しながら、手を上げる

「おお！佐野！」

「いやーセンパイ危なかったなー。オレが来なかったらやられてましたねー」

そう言いながら仮面ライダーインペラー。佐野満は仮面越しにヘラヘラと笑う。

「????」

ソレを見て司の手が止まる。アレ…？確かインペラーって敵ではないのか？
しかし龍騎に焦る素振りはない。むしろ知り合いがきてホッとしているように思えた

「お…おお…。悪かったな、
ありがとう。絶好のタイミングだったぜ」

「でしょお？だって見てましたから」

「……は？」

「センパイがピンチなるの待ってたんですよお！」

ピンチになるセンパイ、そこに颯爽と現れるオレ！

どうです？かっこいいで　　ぐはっ！」

馬鹿野郎！

龍騎はインペラーの頭を軽く叩く。

「もっと早く助けに来てくれよ！」

「じゃあセンパイがオレにツケといた分、
今ここで払ってくれるんならこれからはいつでも助けにいきます
よー！」

インペラーの言葉に龍騎はピタリと止まる

「あれえ〜？オレ、フリーズベントなんて使ったけなあ？
昨日も確かオレセンパイに昼飯おごりましたよねえ」

「いや…あの…ホラ、給料日前でね…」

「いやね、オレはセンパイに命を救ってもらった身なんでね。そりゃセンパイには絶大な感謝をしてる訳ですよ？」

ね？」

「お、おう。まあ…気にすんなっ」

「だけどね、それとこれとは別じゃあないかなあ？ってね。このままだったらセンパイのお給料、

オレに返済する分でなくなっちゃいますよ？」

「しっ…心配すんな！必ず返すから！」

「ホントかなあ？」

必死に手振り身振りで弁解する龍騎、

それを怪しそうにインペラーは見つめる。

しかし二人は完全に忘れていた。今が戦闘中だと言っ事を…

「ブブブブブブブ！」

「「あいたあ！」」

ハイドラグーンの攻撃で龍騎とインペラーは二人まとめて地面に伏せる。

「いたた…、もうセンパイがすっかりしないから！」

「俺のせいだよ！」

また懲りずにわちゃわちゃと二人は言い争いを始める。
そうしてる間にもハイドラグーンはさらに旋廻し、また二人めがけて突進をしかけるが

「ハッ！」

「ブッブブブッ！」

槍を構えた漆黒の騎士が空中から現れ、そのままハイドラグリーンを貫く。

その勇ましい姿はまさに騎士を名乗るにふさわしいだろう

「おお！蓮！」

「蓮さあーん」

仮面ライダーナイト、秋山蓮。

ナイトは地面にへたり込んで二人を見てため息をつく。

「相変わらず緊張感の無い奴らだ…」

「だってコイツが！」「だってセンパイが！」

ギャーギャーと騒ぐ二人にますますナイトは呆れる。

「お前ら・・・」

そつだ、城戸」

「ん？」

そこでナイトは何かを思い出したのか、龍騎に話しかける

「どうしたんだよ？」

「・・・後方注意だ」

「は？」

後方？龍騎は自分の後ろを見る。
そこにあつたのは…

「え？」

足…だった。

「おりゃあああ！」

「おわあああつ！…！」

龍騎めがけてドロップキックが飛んでくる。
当然避ける事も出来ずに龍騎はまた地面に叩きつけられるのだった。

「あーあ…」

「全く…本当に緊張感の無い奴らばかりだな…」

呆れる二人。もうナイトもイライラを通り越してどうでもよくなっ
た感じだろうか、

周りをみるが犠牲者らしい人はいない。
成る程、だからか…

人が犠牲にならなかったのはいい事だが、戦闘の緊張が無くなるの
も考え物だな
ナイトはまたため息をついて龍騎を見るのだった。

「いつてえ！何するんだよ！」

起き上がるつととする龍騎に純白の騎士が馬乗りになる。

「おっそいんだよ！真司！私が何分待ったと思ってるの!？」

「…わ、悪かったって！
だけどうろがないだろ、お前の所にいく前にこいつ等が」

「うるさい！パンチ！」

「ブツ！理不尽…！」

龍騎に馬乗りになっているのは仮面ライダーファム、霧島美穂。
ファムは待ち合わせに龍騎が遅れた事を怒り、バシバシと龍騎を叩く。

「罰として今日全部真司のおごりだからな！」

「はっ！？え！？ちょ、おま」

「はい決まり！じゃ、さっさと片付けるから
『ファイナル・ベント』」

「キュイイイイイ！」

地面が水のように揺らめき、そこから白鳥型のモンスター、ブランウイングが出現する。

「わわっ！」

インペラーは急いでアドベントを解除する。
下手すればギガゼールまで巻き込まれかねない。

もし契約モンスターが死ねば一気に自分は弱体化してしまう、それは避けねば

モンスターの死は自分の死につながる一番の事だからと

現れたブランウイングは一気にモンスター達の後方まで飛ぶと、強力な羽ばたきでドラグーン達を吹き飛ばす！

そしてファムは長刀を構えると、吹き飛んできたモンスター達を一刀両断にしていった！

第63話 話36第(後書き)

インペラーは味方になりえたと思うんですね。
と言っ訳で登場してもらいました

まあいろいろアレなヤツではあった訳ですが、嫌いではないです
では次もよろしく！

第64話 話46第(前書き)

木曜と金曜かなと思っていたんですが、
どうも更新が難しいので今日更新となりました。

では、どうぞ！

第64話 話46第

モンスター達を全て倒し、龍騎達は変身を解除する。

「最近ミラーワールドだけでなく

現実世界にまでこいつ等が大群で現れる様になったな……」

「そーですねえ……。正直、勘弁してほしいですよ。

百合絵さんにもしもの事があつたら……」

佐野は拳を握り締める。

蓮もまた深いため息をついた、たしかにこのままでは……

「ほら！真司！行くっつ？」

「いや、何か……ほら！ちょっとお腹痛くなってきた」

「はいはい。じゃあ行くっつ？真司のおごりだからね！」

「いや、だから・・・佐野お！」

美穂に羽交い絞めされている真司は、佐野に助けを求める。

「金なら貸しませんよ。」

「っていつかデートの金を他人に借りるって最低っすよセンパイ……」

「お前にだけは言われたくない言葉だな……」

蓮は馬鹿にしたように笑うと、バイクにまたがりエンジンを入れる。

「彼女の所に行くんですか？」

「・・・ああ」

「まだ目覚めて間もないですしねえ。そりゃ心配だ」

「ハア…相変わらず腹の立つヤツだ。それに」

ここにいと馬鹿がうつりそうで怖い。
そう言っつて蓮は走り去っていく。

「やれやれ、酷いなあ。ねえ、センパイ？」

「真司イイツ…逃げるなあああ」

「金がないんだよおおおっ」

「……………」

ずるずると美穂を背負い込んだまま歩いていく真司を見て、佐野も蓮に同意するのだった。

「間違いない…本人だ。」

龍騎、ナイト、インペラー、ファム。四人にそれぞれ変身する人間で間違いない」

司は静かな興奮を覚えながら皆に説明をする。

仮面ライダー龍騎の主軸、良太郎と同じく本物の変身者なのだ

しかし、少し疑問に思うところもある。

司の記憶ではこの四人が共闘している所なんて無かった。

特にインペラー、むしろ彼は敵に近い位置だったが…

「君なら理解できるんじゃないかい？」

「！」

頭上から声がして司達はその方向に振り向く。
見ると、フェンスの上にゼノンとフルーラが座っていた。

「ここは龍騎の世界で間違いないのか？」

「ああ、まあそう思ってくれて構わないよ。
だけど君は知っているだろう？」

「ここは龍騎の世界だけど『今回』の城戸真司を君は見たことがな
い」

「・・・ああ、そうだな」

龍騎の世界がループ周期をたどっているならば、ここはその中の一
つだと言う事なのだろう。

「今回の城戸真司の頑張りは凄いものだったわ。

結果としてファミ、ナイト、インペラーという仲間を作る事がで
きたと言う訳。」

「世界転移は時間を超越する。」

「ここは一体どの時間軸なんだろうねえ？フッフ」

「まあ貴方が知らないのも無理は無いわ、

結局貴方が観測した龍騎の世界は四つがいい所なのだから」

四つ、自分が見たのはテレビ放送、映画、テレビスペシャルのエンディング2つ。

成る程、司は納得する。

どうやらここはありえたかも知れない世界の一つというわけか、いや現にありえているのだ。それは変わらない

「まあ今日ボク達がここに来たのは…条戸真志！白鳥美歩！」

ゼノンのいきなりの指名に、二人は肩を震わせる。

「貴方たちにチケットを！」

舞台上上がる資格を！
そう言っつてフルーラとゼノンは四角い何かを二人に向けて投げつける。

「うわっ！」

「おお！」

危うく落としそうになる二人を見てゼノン達はクスクスと笑う。

「なんだ・・・？コレ」

「・・・！ お前っ！これは！」

司の驚く表情が滑稽なのか、ゼノン達はその口を吊り上げる。

「この世界のライダーにはそれが必要不可欠だろう？
あげるよ、ボク達からのほんのささやかなプレゼントさ」

真志と美歩はもう一度渡されたモノを見る。

最初は分からなかったが、今はそれがハッキリと分かる。

これは……

「カードデッキ……」

何も紋章がない無地のデッキ。

二人はそれを恐怖でも歓喜でもない表情で見つめる、自分達が変わる為のキーアイテム。

「ちょ、ちょっと待て！いくつか質問がある」

「……なにかなディケイド？」

「まず一つ目、このデッキには何もかかれてない。
つまり未契約って事だな？」

「そうね。そう言う事になるわ」

「真志は龍騎に選ばれた筈だ、だが既に城戸真司が龍騎になっている。」

「この場合はどうなるんだ？」

ゼノンは少し沈黙するが、すぐにまた笑い出す

「あー…それは君達自身が決めてくれ。」

勿論他のモンスターと契約してくれても構わないよ。フフッ」

「・・・仮にそうした場合俺達の世界はどうなる？」

「さあね？フフフフ」

「・・・」

真志は自分のデッキを見つめる。

そして自分の影に視線を移す、自分は龍騎になれるのだろうか？

「まあ…わかった。じゃあ次の質問だ、俺の聞き間違いじゃなければだが…」

佐野満は秋山蓮に彼女は目覚めて間もないから…と言ったな？」

「そこに気づくとは流石だわ。ピンクバーコード！」

「…いや、だから、お前…な？
いつも言ってるよな？」

な？

な？

マゼンダだよって、な？」

「この世界を軽く説明してあげるよ。まず現段階で残っているライダーは五人」

「……っ、ゾルダと王蛇はどうなんだ？」

「彼らは割と早い段階で互いの因縁に決着をつけたわ。でもゾルダ、北岡はリタイアしたの。」

理由は…貴方なら分かるんじゃない？」

「…そうか」

どんなに強くても…

人は簡単に死んでしまうのかもしれない。

改めて司はそう思う

「他には…そうね、彼らには神埼優衣との関わりがないわ」

「成る…程」

神埼優衣。彼女も悲しい運命に翻弄された身だ、この世界でも……そうなのだろうか？

「そして、君がさっき言った疑問に答えよう」

「ああ…」

「そうよ、確かに貴方の言う通り、秋山蓮の恋人、
小川恵理は既に目覚めているわ」

「・・・」

司はその話題がでた時、二人の笑みがより深くなったのを見逃さな
かった

「お前ら…なのか!？」

司の問いかけに二人は最高の笑顔を見せる。
しかしその笑顔にはどこか影があり、ほんの少しの狂気を帯びてい
るようにも見えた。

「ああ、そっだよデイケイド。

小川恵理はボク達が目覚めさせたのさ」

「あまり干渉するのは怒られちゃうから嫌なのだけれど…あなた達

の為なのよ。

ナイトが戦う理由を失えばそうとう円滑になるもの！」

そう言つて二人は笑う。そんな事を簡単にしてのけるこいつ等は一体……

だが、まあ先程は少し薄ら寒いものを感じたが、今はもういつもの笑顔に戻っていた。

その事に少しだけ安堵しつつ、司は続けた。

「最後に一つ、いいか？」

「ええ、ワタシ達が答えられる範囲であれば……だけれどね」

「ライダーバトルの勝利者には……一体何が与えられるんだ？」

「………願い」

「え？」

「どんな願いでも、一つ叶えてくれるのよ」

「………」

正直、それは嘘の筈だ。

その表情に気がついたのか、ゼノンは一つ付け加える

「ああ、願いが叶えられるのは本当だよ」

「何？」

「そう言う世界もありえたという事さ」

「はっ、都合のいい話だな！」

「だろう？でも、案外世界なんて単純なモノなんだよ」

まるで自分が世界と言うモノを熟知しているかのような口ぶり。

「ゼノン、話しすぎると叱られるわよ？」

「……ああ、そうだね。」

ありがとうフルーラ。愛しているよ」

「まあ、ゼノン！」

またそれか

うんざりする司をみて二人は笑うと、フェンスの奥に飛び降りる。

「お、おい！」

「まあボク達が教えられるのはここまでさ。じゃあ、皆頑張ってくれよ」

「では、ごきげんよう。心から応援しているわ！」

ゼノンはフルーラを抱きかかえて後ろへ飛ぶ。

すると、地面から大きな車。リボルギャリーが出現し、ゼノンの足場となる。

「フフツ、じゃあねディケイド」

そう言って二人はあっという間に走り去ってしまった。

「司…私らどつすりゃいいと思っつ？」

美歩はデッキからカードを取り出してパラパラめくる。

「そう…だな、

その前にちよつとカードを見せてくれないか？」

「ん？ ああ、まあいいけど」

美歩と真志からデッキを受け取りどんなカードがあるか確認する。

「コレっ…すげえぞ！ 強力なカードから見た事ないヤツまである
！」

司は興奮気味にカードの効果を二人に教える。
本来契約して初めて手に入るであろうカードまで出てくるとは…

「やっぱ、あいつ等が用意したって時点で普通じゃないとは思って
たけど…」

「これは助かる。お前らも慎重に契約するんだぞ」

「契約ねえ…」

「つってもあのヴェヴェヴェ言ってるヤツとはゴメンだわ…」

「……」

真志は何も喋らない。

さっきからずっと考えていた事があるのだ。

確かに龍騎になりたくないと言っただらそれは嘘になる。
自らの影に映るその姿、

しかし真志は齒をグツとかみ締めると、司に向かってまっすぐな視線を送った

「……司っ」

「ん？」

「俺…いや、司達の力があれば、」

「真司さんを助けることができるんじゃないか!？」

「っ!？」

そうだ、ここにはデイケイドだけじゃなくクウガたちもいるのだ。

それならば城戸真司を守る事ができる。そう真志はずっと考えていた

どうしても真志は認められなかったのだ。

城戸真司のやっていた事はとてもカッコよかった。

戦いを止める為に戦う、それはなかなか出来るものじゃない

しかし運命は彼を殺す。

真志はそれがどうあっても信じたくなかった。

だけど、今、自分には微々たる事しかできなくても

「真司さん。他の皆も守れるんじゃないのか…?」

それは、司にも大きく響く言葉だった。

「そう…だな…!」

「だろ!」

司は決意する。そうだ！守るんだ！そして、今回こそ…

「止めるんだ！ライダーバトルを！」

真志は頷く。ユウスケ達も司の意見に従うのだった。

第64話 話46第(後書き)

カードの説明は土曜か…日曜の更新で後書きにでも書こうかなと

では、次もよろしく！

第65話 話56第(前書き)

実は蟹刑事って結構強いんですよ
扱いがアレなだけで

ではございませぬ！

第65話 話56第

「ふうーっ……………」

「え？何？まさか久しぶりの二人きりに緊張してる訳え？」

「馬鹿！してねえよ！」

「きゃはは、そっだよねえ」

真志と美歩はふざけ合いながらも笑い合つ。

「美歩……」

「んー？」

「ありがとうな……」

「……」

美歩は嬉しそうに微笑む。真志はもう一度深呼吸をして、その扉を開いた。

「あのー・・・すみません！」

「牛丼並盛りのお持ちしましたー」

「あ、はい！こっちはです！」

やる気のなさそうな店員は牛丼を三つならべると、そそくさと戻っていく。

「どうぞ、食べて食べて」

「あ、はい！い、いただきます！」

「うーす！ゴチでえーす！」

遠慮する事無くガツガツと牛丼をかきこむ美歩に二人は笑う。

「それにしても驚いたよ、

まさかまだ契約してないライダーが二人もいたなんて」

「そうなんですよ。

オレ達戦いとか嫌で…ずっと逃げてたんです」

「いやぁー君達みたいな人間ばかりだったら良かったのに…
それにしても真志と美歩か…変な偶然もあるんだな」

「ははっ、そうですね」

とりあえずまずは繋がりを持つ事、
真志と美歩はOREジャーナルを訪ね、真司とのコンタクトを取ったのだ。

昨日の混乱から、街はまだざわついていた。

真司もどこかで犠牲者が出たのをしり、その表情を曇らせる。

それほど範囲は大きくなかったから、犠牲者はいないと思っていた
が…

どうやら甘いみだった。

今、テーブルの上には真志と美歩のデッキが置かれている。
真司は特にそれを疑う事無く受け入れたのだった。

「とりあえず今は持っておいた方がいいよ。

その中にあるカードがモンスターから守ってくれるから」

「あ、はい…。その、一つ聞いてもいいですか？」

「え？何？」

「真司さんは…その、ライダーバトルをどうするつもりなんですか？」

真司の表情が真面目なものに変わる。

その迫力におもわず二人は息をのんだ

「佐野の願いは戦いから開放される事、これは単にデッキを壊せばいい。

蓮の願いも叶って、あとは美穂だけなんだ」

「美穂さんの…願い？」

司から聞いている。

亡くなった姉を蘇らせる事だ。

だから真司からその言葉が出てきても、特には動じなかった。

「だから、俺達は美穂を勝たせようとすればいいんだ

・・・だけど」

「？」

「ライダーがいなくなったらどうやってモンスターから皆を守ればいいのかって…」

「あ…」

真司はいつもの元気な様子じゃなく、その様子に二人も黙り込んでしまう。

今はもう皆戦いあう意思はない。主催者である神崎士郎は残りのライダーは自分達だけだと言う
だったらライダー同士の戦いはもう終わったようなモノなのだ。

だが、モンスターはそうではない。もしライダーバトルが終わってもモンスターが消えなかつたら？
残りのライダーはファムだけになってしまう

流石に一人だけでは……それが今の真司達の悩みだった。

「あっ、ゴメン、ゴメン！」

真司はそれに気づくとすぐに笑顔を浮かべる、そしてそこに振り下ろされる手

「いてっ!!！」

「ふふん！」

噂をすればか、霧島美穂が現れて真司の頭を軽く叩く。
何すんだよと真司が詰め寄ると、美穂は涼しい顔で受け流した。

そして真司の隣に座ると、何食わぬ顔で二人に話しかける

「貴方たちが契約してないって言う？」

「はい、条戸真司です」

「白鳥美歩っす！」

「へえー。名前が……」

美穂はそういいかけて沈黙する。
視線の先は真司の足元

「あ！ちょっと真司！

また靴の紐ほどけてるじゃない。ったくしょうがないなあ」

「え？」

美穂はそう言って真司の靴紐を結びなおす。

「あ…：ありがとうな」

「真司！靴の紐くらいちゃんと結べよな！」

照れくさそうに笑う真司と、優しく笑う美穂。
それを見て美歩の目が輝き始める。

「でさあ！そんな時真司が」

「あははは！マジですか！？こっちの真志も」

美歩と美穂は席を移動してなにやら盛り上がっていた。
その様子を見て二人は苦笑いを浮かべる

「あの…真司さん」

「え？」

「真司さんはライダーバトルを止める為に戦ってたんですね」

「ああ、それが俺の願いなんだ。俺にデッキを託してくれた人の夢でもあるから」

「え？」

「その人、モンスターに教われた俺を助けてくれたんだ。でも、結局その時にその人は…」

「あ…」

「だけど、その人が言ってたんだ。どうか戦いを止めてくれって…」

ライダー同士が戦うなんて馬鹿な事は止めれくれって」

「オレ…その考え凄いです！
だから…！」

その…！」

真志はうまく自分の考えが言えずに黙ってしまつた。
だが、真司は笑つとその手を差し出した。

「サンキュー、サンキュー！」

君みたいな子がライダー候補の中にいたってだけでも嬉しいよ」

「は！はい！」

二人は握手を交わす。

そうだ、死なせない。

死なせはしない。そう心に誓うのだった…

「あーあ、羨ましいなー…」

化粧室で美歩は小さく呟く。

美穂の話聞く限り真司との仲は良好のようだ、

そう言う話は大好きなのだが、どうにも自分と重ねてしまう

(真志は私の事どう思ってるのかな…)

鏡に映る自分の姿をしてみる。女としてはまあまあだと自負してい

るが…

(・・・)

もしかしたら真面目な娘のほうがいいのだろうか…

(黒にしてみっかな…)

すこしでも綺麗に見えるように髪を整える。

『ライダーバトルの賞品で真志を自分のモノにすればいいじゃん！』

「…………え？」

ふと、目の前の自分がそんな事を言った様な気がした。
もちろんそんな事ある訳ないと、直ぐに目を反らす

「や…ヤベーっ、幻聴とかありえんし…」

少し怖くなって美歩は足早に化粧室を後にした。

「え！モンスターを消し去る方法がある！？」

真司は驚きで目を見開く。

「はい、ミラーワールドのどこかにコア・ミラーというミラーワールドの心臓があります。

それを壊すことができたなら…」

「ミラーワールドは消滅し、モンスターも、ライダーもいなくなる・・・という事です」

後日、古びた教会にライダー達と真志、美歩、司と翼が集まっていた。

ライダーが増えるとややこしい事になるので、ミラーワールドに入る事が分かったデイケイドとアギト。

つまり司と翼が新たに加わった。

昨日の真司から得た情報を司に伝えたと、司の記憶にミラーワールドの心臓が蘇ってきたのだ
尤も、真志は一つ重大な情報を聞き逃していた訳だが…

「その情報は本当なのか？」

疑わしいと、蓮は目で語る。

司と翼は自らをミラーワールドの調査隊と名乗り、芝居をうった。

オルタナティブ同様、人工ライダーだと他のメンバーを偽っているのだ

「そうですね。確かに百パーセントかと言われれば沈黙してしまいます。」

ですがコアミラーは確かに存在するんです。

どうか信じてはもらえないでしょうか？」

「うーん…まあ別に信じないって訳じゃないっすよねえ。でも、もしそれ壊しちゃったらライダーバトルも終了するっすって事ですよね？」

「願いが…叶えられない…」

美穂は唇を噛む。

そんな！せっかくここまできたのに…

「ではどうでしょうか？」

ライダーバトルに決着をつけた後、コアミラーを破壊するのは「

「そうだな、それがいい。だったらまずはコアミラーを見つけなければ……」

それぞれは頷く。

まずコアミラーを見つけ、その後で美穂を勝者にして願いを叶えさせる。

そしてコアミラーを破壊してモンスターを全て消し去る。

「よし……これなら！」

真志はうまくいくと心の中でガッツポーズをとる。
しかし対照的に美歩は複雑な表情でそれを見ていた。

「……どうした？」

「えーあ、いや！なんでもない！」

そう言って美歩は走り去っていく。

少し不思議に思ったが特に気に留めることなく、真志は会議の中に

戻っていったのだった。

「でも…ちょっと、コイツらに申し訳ないですよねえ」

佐野は少し悲しそうな目で契約モンスターギガゼールのカードを見る。

すぐに、まあこいつ等のおかげで大変な目にあつた訳ですが。

と苦笑いを浮かべる

「まあ、なんだかんだ言つてついて来てくれるからな」

蓮も、苦笑しながらダークウィングのカードを取り出す。
美穂を勝たせ、コアミラーを破壊すると言う事は
少しではあるが自分の契約モンスターを裏切る事になる。

「……ごめん」

真司はドラグレッダーに謝る。
どこからか咆哮の様なモノが聞えた気がした

第65話 話56第(後書き)

さて、ゼノンから渡されたカードデッキには以下のカードが入っていました

がついているものは何度でも使えます

真志

ソードベント

ストライクベント

ガードベント

アクセルベント

リターンベント カードのリロード効果を持ちます

アドベント

ユナイトベント 特定の何かを合体させる事ができます

コピーベント 相手の武器をコピーできます

リミッツベント 一定時間身体能力が跳ね上がります

ファイナルベント

無地のカード

契約のカード

美歩

ソードベント

ガードベント

シュートベント

トリックベント

コピーイベント 相手の武器 or 姿をコピーできます

コンファインイベント

ユナイトイベント 特定の何かを合体させます

フリーズイベント

クリアーイベント

アドベント

ファイナルイベント

アクセルイベント

ヒールイベント 対象を回復させます

リカバーイベント 自分の状態異常を回復させます

リターンイベント 一度使ったカードをもう一度発動できます

無地のカード

契約のカード

こんなモンですかね

もしかしたら増えたりする…かも？

では次もよろしく！

第66話 話66第(前書き)

まあ、そうですね。

確かにちょっと悪ふざけだと思っ気持ちはどこかにあったのかもしれない

このタイミングで入れるモノではないのかもしれない

だが私は謝らない

そんな66話

ではごっごぞ！

第66話 話66第

「はあ…はあ…！」

少し皆から離れたところで美歩は地面に膝をついていた、顔色は悪くて冷や汗も酷い。
ふと、横を見ればガラスに映った自分の顔。

辛そうじゃない、笑った顔

『だからさあ！言ってるじゃん。協力するふりしてさ、願い叶えちやおつよー！』

美歩はブンブンと頭を振る。
自分は何を考えているんだ？

ガラスに映る自分は笑ってなんかない。だったら…

(これは…私の…)

身体が寒くなってくる。

何を考えているのか、自分でも分からなくなってくる。

『願い叶えてさあ！真志を私のものにしちゃおうよ！』

また、鏡の中の自分が笑いかけてくる。

「ヒッ！」

だが、それも一瞬。すぐに自分と同じ顔になる。

「なんなんだよお…」

化粧室で最初に聞いた幻聴。

その時は気のせいだと思っていたが、段々頻度が増えてもはや無視

できないモノにまでなっていた。
襲い掛かる不安。自分はおかしくなってしまったのだろうか？

「ううううう…助けて…真志い…」

無性に怖くなってつい口にしてしまった名前。
それを待っていたかと言わんばかりに鏡の中の自分は怪しく笑いだす。

『ほら、困ったらいつも真志がなんとかしてくれると思ってる』

「…あ」

『依存してる。欲しがってる！』

知ってるわよおお、真志が他の女と話すのも嫌なくせにいッ！』

「ちっ！違うー！」

『違うないいいッ！』

アンタはくそ汚ねえ嫉妬をいつも抱いてんだろっがぁー！』

「そんな！私は　！」

『ああ、そうだよ分かってる。』

お前は忘れてるだけだ、夏美達はそれぞれお相手がいるもんなあ？

だけど！どうだ！？

違うだろうが！

いつものお前、いや！私はそうだろうが！

いつも怯えてる！真志に見捨てられないかビクビクしてる！』

「・・・ツツ！　違う！違う！！」

『おいおいおい！大丈夫かよ！もし夏美達の誰かが真志になびいたらどうすんだ！？』

テメエ納得できるのかよ！

ああ、でもそうだよな！私は告白できない！

する勇気がないクズだ！どうしようもねえ馬鹿野郎なんだよ！』

鏡の中の美歩は怯える彼女を刺し殺さんとばかりに睨みつける。
その恐怖の中で美歩は冷静な思考を失っていく。

もう何故鏡の中の自分が自分と違う動きをしているのかすら考えられなかった。

鏡にいるのは自分、ならば自分の言っている事は……

正しいのか？

「美歩！」

「！」

真志が向こうから走ってくる。

「大丈夫か？具合悪いなら学校に…」

差し出される手。

「・・・」

初めて真志と出会った日のことを思い出す。
そうだ、助けてくれる。真志がいれば自分は頑張れる。

「ありがとう」

笑顔で、真志の手を握ろうとして…

見てしまう

「・・・」

「美歩？」

真志の向こうに映った自分の顔。汚い笑みを浮かべている自分の…

「だ、大丈夫・・・」

美歩は真志の手をとらず立ち上がる。
不思議そうにする真志にもう一度大丈夫と呟き、背を向けて歩き出した。

「・・・」

一人残された真志は何も言わずに美歩の背中を見つめていた。

「美歩……」

「ヴェエヴェエ！」

「ヴェエヴェエ！ヴェエヴェエ！」

真司達の前に無数のシアゴーストとドラグーンが出現する。

街中でも定期的に起こる様になっていたモンスターの大量発生。

もはやミラーワールドと現実世界の境界線はなくなるうとしていた。一刻も早くコアミラーを破壊しなければ、その内にこの街はモンスターで埋め尽くされてしまうだろう。

「そんな事…させるかよ！」

真司達はベルトを出現させ、それぞれの構えをとる！

「「「変身！」「「「

鏡合わせの様に鎧が現れ、四人に装着される。

変身を終えた四人のライダーはシアゴースト達目掛けて駆け出す！

「司君。 私たちも戦おうか」

「ああ、そうですね」

二人もそれぞれベルトを出現させる。

『カメンライド』 『ディケイド!』

「変身!」

ディケイドとアギトもまた、シアゴースト達の群に突っ込んでいくのだった。

「あれ?」

龍騎は戦いの最中だと言うのに動きを止める。

「うっん……」

「?」

その視線に気がついたのはアギトだった。

「どうかしたんですか？」

「いやあ、どこかで会った事ありませんでしたっけ？
なんか…こつ、ミラクルーみたいな所で…」

「えっ？」

翼は記憶をたどるが全く覚えていない。

「ゴメンなさい、ちょっと分からないですね…」

「あ…だったらいいんですけ　ドツッ…！」

突っ立っている龍騎に吹き飛ばされたインペラーが激突する。

「いてててっ！またですかぁセンパイ！」

「悪かった ヨッツ！」

話しこむ二人の上にファムが落下してきた。うまく支えられずに二人は地面に倒れこむ。

「み…美穂お、お前重くなつたな…」

「はっ！？何言ってるんだよ馬鹿ッッ！！」

「ウゴッ！」

「まあ今のはセンパイが悪いですよね…」

「だろ！？」

「まあ重いのは本当ですけど　ガフツ！」

相変わらずの三人ほっとしてナイトは次々にシアゴースト達をしとめていく。
何度も戦っている内に、行動パターンや攻撃の癖を見抜いているのだ。

流石はナイトと言ったところが。

『ファイナルアタックライド』 『デイデイデイデイケイド！』

ホログラムカードが出現し、デイケイドはライドブッカー・ソードモードを構え潜り抜けていく。
一枚通過する毎にソードは光をまとって長くなり、五枚全てを通過した時には倍以上の長さに変わっていた。

「ヤアアアアアアアアアアアッ！」

ディケイドはそのソードでシアゴースト達を次々に切り裂いていく。

ディメンションスラッシュ！

決まった…心中でドヤ顔を決める司。

しかしそんなディケイドにナイトは問いかける

「お前・・・契約モンスターはいないのか？」

「・・・えっ!？」

(ヤベー…呼ぶの忘れてた…)

「えーあ・・・い、いますよー出てこいーY U U S U K E

ディケイドがアドベント!と叫びながら手をパンパンと叩くと、物陰から謎のモンスターが現れる。

何なんだこのモンスターは？まるで怪獣の着ぐるみみたいだ…

Y U U S U K E ?

くっ、駄目だ。まるで見当もつかない…一体何者なんだ！？

『アオオオオオオオオオオ！』

「・・・お前コレ」

「お、俺！コイツと契約したんです！いいいい行け！

ユウス…じゃなくてY U U S U K E !」

『アオオオオオオオオオ！』

Y U U S U K E はこくりと頷き、シアゴーストにパンチをし
かける。

しかし当たらない！

まるで視界が悪いとでも言わんばかりだ!?

どうして?」

「一体何者なんだ…まるで見当がつかないっ!

「ヴェヴェヴェ!」

『アオオオ　　うお!危ない!』

「おい!今アイツ喋らなかつたか!?!」

「きつ、気のせいです!ああ言う鳴き声なんですよ!
な!そつだよな!Y U U S U K E!!」

『え?何て?聞こえないぞ司あ!』

「……………」

あの野郎…

「あれも…鳴き声なのか…？」

「そう…じゃ…ないかなあ…」 『ファイナルフォームライド』 『クククウガ！』

『っっておわああああ！』

Y U U S U K Eが変形し、クワガタの様な姿に変わる。
それに耐えられなかったのか外装(?)はビリビリと破れ、中から
クウガゴウラムが出現した。

な、なんだってー!? Y U U S U K Eの正体はユウスケだったのかー!

「茶番乙」

「椿・・・いきなりどうしたのだ？」

「いや、なんか言いたくなっただけ…」

「そう…か？」

満足そうな椿を見て、咲夜は首をかしげたのだった。

「たあああああああッッ！」

『はあああああああッッ！』

ディケイドとクウガの挟み撃ち、ディケイドアサルトがハイドラグーンに叩き込まれる！
その威力にハイドラグーンは爆散し、あたりのモンスターは全て消えた。

「よし！」

「やったな司！」

真志と司はハイタッチを決める。

しかしまだ街中からは悲鳴が聞こえる、シアゴースト達はまだ群をなして街中を徘徊しているのだろう。

「早くコアミラーを見つけないと…」

龍騎達は焦った様子で走り出したのだった。

第66話 話66第(後書き)

はい、えー…w

あれですね、27時間ですか？やってますねえ
いや、いつも見ようとは思ってますが多分今夜も夢の中かなw？

これ予約更新なんで既に夢の中かもしれないな

では次もよろしく！

第67話 話76第(前書き)

うーん、結局寝てしまいましたww
まあいいでしょう

ではどうぞー！

第67話 話76第

「拓真！そつち行つたよ！気をつけて」

「ありがとう、でも大丈夫だよ」

襲い掛かるシアゴースト達を逆に殴り飛ばしていくファイズ。
普段の拓真からは創造もつかないパワープレイに、デルタ達は目を丸くする。

「ハッ！」

「ヴェエヴェー！」

倒れたシアゴーストに追い討ちの蹴りを決める。
空中から襲い掛かるドラグーンも、デルタの銃で次々に撃ち落されていった

『FULL CHARGE』

「いくぜいくぜ！いくぜええええッ！！」

電王が吼える！

赤いエネルギーを纏った剣が複数のモンスターをまとめて切り裂き、爆散させる。

「ブブブブ！」

最後の一体になったハイドラグーンは逃げる訳でもなくファイズに特攻を仕掛ける。

だが、特別複雑な動きといった訳でもなく楽にかわされてしまった。

『READY』

ファイズはメモリをポインターにセットすると、そのままソレをドラグーンに向けて投げつけた！

「ブブッ！」

投げられたポインターはドラグーンに直撃するとそのまま跳ね返り、

ファイズの所へ戻っていく。

それと同時にファイズはとび蹴りをドラグーンにしかけた。

突き出した足にうまくポインターが重なり、ファイズはそれを素早く装着する！

『Exceed Charge』

ポインターをぶつけられ怯んだドラグーンにさらに赤い閃光が襲い掛かる。

赤いポインターに動きを封じられたドラグーンはもはやどうする事もできない。

「たあああああああッッ！！」

赤い閃光がドリルのようにドラグーンを削る。

クリムゾンスマッシュ！

ドラグーンは のマークが現れたかと思つと爆発し、消滅した。

「やったね！かっこいいよ拓真！」

「はは…ありがとう」

「おう、どうすんだ？このまま他のヤゴ野郎もぶっ倒してくか？」

「そうだね…ん？」

ファイズの携帯が音をたてる。

「電話だ…もしもし？」

『俺だ』

「ああ、双護君。どうしたの？」

『そつちに龍騎達がやって来る。逃げた方がいい』

「っ！」

うん、わかった。じゃあね」

『ああ、気をつけてな』

電話を切るとファイズは今の言葉を皆に伝える。
ただ電王は不満そうに首をかしげた

「なあよお。俺達つて逃げる必要あんのか？
事情を話して協力すればいいじゃねえか」

電王の言う事は尤もだ。

別に自分達はライダーバトルの参加者ではない、龍騎達にその事を
伝えればいいだけの話だ

しかし司はそれをあまり良しとしなかった

「うん、だけど信じてもらえらるとは限らない。

本当は司くんと先生の二人だけでもギリギリだよ。

僕達はこうして影ながら支えるのが一番だと思うよ」

「ふうん・・・ま、いいけどよ」

少し不満げに電王達はバイクに乗り込み、学校へと戻るのだった。

「・・・よし、もう大丈夫か」

画面に映った彼らを見て、双護はため息をつく。

「おいおい、何なんだよコレ！マジでさ！」

椿が吼えるのも無理は無い。

今パソコンの画面にはこの街にある監視カメラの映像全てが映りだされている。

明らかに普通じゃない、椿はついにその疑問を爆発させたのだった

「さあな、俺は頼まれただけだ」

「クウガの時からおかしいとは思ってたんだよ。
警察のパスワードが表示されたりさ、このパソコン管理してたの
真志だろ？」

お前アイツに何て言われた？」

「保健室の治療器具と同じでパソコンにこんな機能がついてた……ら
しいが」

椿はそれを聞いて少し考える。
たしかにそう言われれば納得もいくが…

「……」の音

椿は何を思ったかパソコンのある場所に触れる。
すると、一枚のディスクが出てきて、画面はエラーを表示した。

『ディスクを入れてください』

「ディスク…？　と言う事は…」

「ああ、コイツだよ…ッ」

椿が持っている一枚のディスク。

「このパソコンは別に特別でも、何でもねえ！このディスクが問題なんだ！」

「そう言えば拓真のヤツ、これが罪のなんとかだって…」

「罪？」

二人は沈黙する。

そして、しばらくして拓真がやって来る。

拓真は椿の持っているディスクを見ると、何も言わずにつつむいた。

「・・・拓真、コレが何か知っているんだな」

拓真は少し迷った様に目を反らす、すぐに決心を決めて二人の目を見つめた。

「うん、真志くんもバレたら教えろって言ってたし

・・・分かったよ」

「・・・」

「どうして、真志君が一人暮らししてるか・・・知ってる？」

「えっ？あ・・・いや、理由までは・・・」

「お父さんと、お母さんが…その…いないんだ」

「ああ…成る程…」

二人ともって事は事故か何かだろうか…
椿は予想を2、3考えてみる。

だが、拓真の口から出てきたのは意外な言葉だった。

「捕まっただよ…
警察に…」

「…!」
「…」

これには椿はもちろん冷静な双護の表情を一変させた。

拓真は気にせず続ける。

「椿くんが持っているそれ、コンピューターのハッキングソフトな
んだけど…」

「え？これが!？」

「うん…、なんでも電波を介して、
対象のパソコンのデータを全てコピーしたり、
相手が今使用しているのと同じ画面にしたりするモノらしいんだ
…」

椿はそのディスクを見る。

「まさか…」

「うん。真志君の両親はそれを作ったんだ。
コピーをメインにしたハッキング、通称…鏡像ミラーの世界ワールド」

「ミラーワールドって…」

拓真は続ける。

真志の両親はそれを使い大金を得ようとした。
しかし、所詮は人の作りし虚像。うまくいくわけがない。

鏡像の世界は不完全な失敗作であり、なんの意味も成さなかった。
それだけではない、ハッキングの件は警察にばれてしまい結局両親
は真志を残して刑務所に行く羽目になったのだ。

真志は親戚の元に行き、無理をいって一人暮らしをさせてもらって
いる…という事なのだった。

「多分、一人のほうがいろいろと楽なんだと思う。
真志君にとっても…」

親戚の人にとっても…」

犯罪者の息子…正直親戚は真志を預かる事を躊躇しただろう。
いや、恐れていたのかもしれない。
一人暮らしをしたいと言ったとき、親戚の目が輝いたのを真志は忘
れないだろう。

真志はそれから偽善だったとしても出来る限りの善を尽くす人になった。

それは強迫概念からくるモノだったのかもしれない。

自分が少しでも悪い事をすれば飛んでくる言葉は決まって

『犯罪者の息子だから』

そうなれば自分を預かってくれた親戚にまで迷惑がかかる。
それは避けないといけなかった

少しでも善人に…

両親を憎む事はしなかった。

憎んでどうなるわけでもない、もう二度と関わらない奴らだ。

どうなってもいい、どうでもいい。

そう真志は心に刻む、そして少しでも善に生きる。
そうする事で救われる気がした。

そうする事でしか生きられない。彼は理解する

「・・・・・・・・」

二人は絶句していた、確かに真志はいいヤツだ。
人気も高かった。

募金があればクラスの半額以上は彼が払っていたし、
掃除やボランティアをサボった事もない。

髪の色以外は完璧で、先生からの人気もかなり高かった。
でも、それが真志にとって自分を保つ事だったとは…

もちろんそれで真志の印象が下がる訳ではないが…
なんというか…

「真志君…その試作品をずっと持ってたんだ。

警察の人もそれには気づかなかつたみたい。

まあといっても使えないんだけどね」

「ん？でもコレ使えてるぞ…？」

「一番最初の世界から使えるようになってたらしいよ…」

「ほう…ふざけたサプライズと言う訳か…」

「うん…正直複雑だったみたい…」

そう、だからこそ真志は本当の善が分からなくなっていた。

少なくとも真志は自分の行っている事が正しくても善とは思えなかったのだろう

しかしそんな時に真司の話を聞いたのだ。

欲望の為殺しあうライダー達。

そんな中に戦いを止める事を願いとし、

ライダー達を説得しつづけた真司を心の中から尊敬したのだ。だから

からこそ許せなかった。

彼が死ぬという事実が…

「俺！マジで真司さん尊敬してます！」

「ええ、本当に？いやあ、もっと食べて食べて！」

真志の言葉に気を良くしたのか、真司は追加注文をとる。
とりあえず今日は皆で居酒屋に来ていた。

もっとも蓮はまだ病院にいる恋人、恵理のところに行っている為ここにいないが。

「いやぁー！真司さんは　　で！
それから

んでもって　　で！！」

「お姉さん！パフエも追加で！」

次々と誉め殺しの一手が真司を襲う。
だが、真志は本音を言っているだけなのだが

「うへえ…センパイのウイルスがまた感染していつてる…」
少し離れた席で、佐野が呆れたように二人を見つめていた。

「でも、満さんだって真司さんにいろいろ助けられたんですよ？」
そういつて佐野百合絵は微笑む。

「やめてくださいよ百合絵さん！」

恥ずかしそうに佐野はソレを否定する。流石の彼も彼女には甘いよ
うだった。

「あーあ……今頃司くん達はおいしいもの食べてるんでしょうね
…」

「そうですね、だけど普段頑張ってくれてるんですから・・・ね？」

「アキラちゃんは良い子ですねえ…私も見習わなくちゃです」

夏美がそう言つとアキラは少し照れたように笑つ。

「今日は空野が当番か、どんなメニューなんだ？」

「運がいいわよあんた等、今日は薫スペシャルだから」

「マジでか！ヤベー、椿くん楽しみー！」

薫は鼻歌交じりに、井にご飯をよそつ。

そしてかまぼこを数切れのせて醤油をかけると、ホレと言って椿に渡した。

「きゃーおいしそー」

「はい次ー！」

「・・・」

料理なめんなあああああ！

うっさい！めんどくさかったんだから許しなさいよおおお！

吼える彼女達を見て、二人はため息をついた。

「はぁ…食堂のお姉さんとかも欲しかったです…」

「…そうですね。あはは…」

二人は仲良く薫スペシャルをかきこむのだった

第67話 話76第(後書き)

まあ土日は更新すると思うんで
それまでは不定期でいきます

では、次もよろしく！

第68話 話86第(前書き)

はい、次の更新の話を先に

次はどうですかねえ…

まあ多分土日までに一回か二回になりそうですかね
ではどうぞ！

第68話 話86第

「どっしたの？さっきから変だぞ」

「え…？あ…あはは…」

美穂はずっとうつむいてる美歩にジュースを差し出す。
美歩はお礼を言って受け取るが、口を少しだけ付けただけで飲む事はなかった

「なんかさ、悩んでるなら…相談、のるよ？」

「あ、いや…大丈夫！大丈夫…」

美歩は店のガラスに映る自分の姿を見てゾッとする。
笑っているのだ、自分と違う顔をしている自分は口パクで確かに言った。

『そいつを殺してデッキを奪えよ』

「ツツ!」

『殺すのが嫌なら奪ってもいい、じゃねえと勝ち残れないぜ』

「みつ…美穂さんは、

なんか…どうしようもなく怖い時ってありません…か?」

「え? うん…そうだな、あるよ」

でも、と美穂は真司を見る。

その目はとても優しく、美歩は何故か泣きそうになる。

「だけどアイツ…真司がさ…」

馬鹿なヤツだよと、美穂は笑う。

しかし佐野同様、悪気は少しも感じられなかった。

どういう事があったのかはわからない。だがこの世界では美穂も佐野も真司に救われたのだろう。

それがひしひしと伝わってきた。

「・・・」

美歩は真司の隣で熱く語っている真志を見る。

「・・・」

「なあ、どうしたんだよお前」

「どうしたって…何が？」

真司達と食事を楽しんだ帰り、真志は美歩に声をかけた。

「お前、ずっと調子悪そうじゃねえか！

絶対なんかあるんだろ？」

少し強めの口調で真志は美歩に詰め寄る。

しかし美歩は真志の目を見ることなく曖昧に返すだけだった。

「どうしたんだよ！もっとオレを頼ってくれてもいいじゃねえか！」

「いやだからっ！何でもねえって！」

美歩は真志の肩を掴んで引き寄せる。

近づく顔と顔、美歩も真志もつい赤くなってしまう。

「ねえ、真志」

「な…なんだよ」

美歩は目を閉じて顔を近づける。

「えっ！え？」

真志はいきなり行動に戸惑い、パニックになる。

これはそう言う意味なのか！？そしてその視線の先には…

(せつ、先生！どうなってんだコレ！！)

(ぼっ、僕にも全く分からないよ！

え、ちょ！これってやっぱり担任として注意すべきなのかな！？

あ、でもまだ僕臨時だし…！

うん、でも高校生ならもうこう言う事してもいいんじゃないかな？

いやいや！何を言っているんだ僕は！)

(おおおお落ち着いて先生！まずは冷静に状況を把握しよう！

美歩と真志は一緒に暮らしてるんだぜ！？

そりゃそう言う関係になってもおかしくないんじゃないかな！？)

(つつつ司君！一緒にクラウチングスタートってどういう事なんだ
い！？)

(どろどろ事なの・・・)

「わ・・・っわわー！」

流石に恥ずかしい。真志は少し申し訳ないと思いつつも、美歩から離れた。

「・・・あ」

「いっ、いっめん...」

恥ずかしくなって真志は走り去る。残される美歩...

『ぎゃははは！やっぱり私って真志に嫌われてんだよなあ！』

やめてよ…

『でも大丈夫、ライダーバトルに勝ち残れば願いが叶うんだから！』

1199

やめて…

『真志をモノにするには…分かるよなあ？ぎゃははは！』

「やめてよお…」

水面に映る自分が下卑た笑みを浮かべる。

これは私の本心なのか？美歩はどうしようもなく怖くなって、悲しくなっ…

切なくなった

次の日、また街中にシアゴースト達が現れて人々はパニックに陥る。
あきらかに間隔が短くなっている。

このままではいずれミラーワールド関係なくモンスターが街を覆ってしまっだろう。

「とにかく、殲滅が先だよ！変身！」

「自衛隊もちらほら見えるな…変身！」 『カメンライド』 『ディケイド』

アギトとディケイドはシアゴーストに向かって走り出す。しばらくして真司達も集まってきた。

「変　　ッ！」

変身しようとしてデッキを鏡にかざす真司、しかし鏡に映ったモノを見て変身をやめる。

「っえええんッッ…！」

女の子が泣いていたのだ。

母親とはぐれてしまったのだろうか？

とにかくあのままでは危険だ！

既に女の子を捕食しようと、レイドラグーンは空中を旋回している！

「くっ！」

間に合うか？

正直、微妙だった。

しかも変身していない今、攻撃を受ければ致命傷になるだろう。
だが変身している時間もない！

それでも真司は女の子を助けることを迷わない。

彼の正義、信念は動きを止める事はない、女の子の所まで全速力で
かけて行く！

「っ！」

それを見て真志は息をのむ。まさか

『城戸真司は女の子を守って死んだんだ』

真志の頭に蘇るその言葉……

間違いない！

「司あああああ！」

「！」

真志の叫びの意味をディケイドは直ぐに理解する。
そう、真司が今助けようとしている女の子。

間違いない、あの子を守って真司は死ぬのだ。

「つつっ！！させるかよオオオオオ！」

『カメンライド』『ファイズ！』

赤い光と共にディケイドはファイズに変身する。
司は恐れていたのだ、

自分が本軸に関わる事でおおきく歴史が変わってしまいなにかよくない事が起きるのではないかと。

良太郎達は本人であるが、結局は自分達の世界に来ているいわばゲストの様なものだろう。

しかしココは違う、龍騎の主軸の世界であるのだ。
そこに異物の自分達が加わる事に司は若干の恐れをいだいていた。

言いようのない緊張感、

だからこそミラーワールドに入れる自分と、アギト以外は待機させる選択をとっていたのだ。

最初からクウガ達にも協力してもらえばよかったのに…

「うおおおおおおおッ！！」

だが、今…龍騎、真司の死を直前にして司の心から迷いが吹き飛ばす！
果たしてこの選択は正しいのだろうか？いや、どっちでもいい！

目の前の彼をみすみす見殺しにする？そんなのはふざけた選択だと！

『フォームライド』『アクセル！』

『Start Up』

とにかく真司を助けたい。

たとえそれが間違った選択だったとしても後悔はしない。

いや、したくない！

「大丈夫？お母さんは？」

「う・・・うん。 ツ！危ない！」

少女が叫ぶ。真司の後ろには鋭い爪を構えたドラグーンが！

「 つ！」

真司は覚悟を決める。

だが、ドラグーンはすぐに吹き飛び爆散した。

あっけにとられる真司と現れる のマーク。

「え？」

「大丈夫ですか！？」

真司の前にはディケイドが立っていた。

真司は状況を素早く理解すると、助けしてくれたディケイドにお礼を言う

「あ……ああ！ありがとうございます！」

「俺より真志のヤツに言ってやってください」

「っ！ああ！変身！」

デイケイドは真司の無事を確認すると、再びドラグーン達の群に走っていった。

『ファイナルベント』

ガゼル軍団が嵐の様に連続攻撃をしかけていく。
インペラーの必殺技、ドライブディバイダーが炸裂し、モンスター達を一掃する！

「はいはい、終わりですねえー」

そう、終わりなのだろう。いつもなら…

キィィィィィィン

「？」

嫌な音がしてライダー達はその場に立ち尽くす。
すると、空中から金色の羽が舞い降りてきた。

「なんだ？」

意味が分からないといった感じでライダー達はその羽を見つめる。

しかし、二人。

二人だけ皆とは違う表情を浮かべていた者がいる。

「ツツ！！！」

甘かった…ッ！

嫌な汗がにじみ出てくるのがわかる。

なぜ、自分はこの可能性を考えてなかったのか！？

すぐに後悔と自己嫌悪の念が襲い掛かる。

安易な決め付け、ファムがいたから劇場版基準だと考えていた自分を殴りたかった。

そう、司。

ディケイドはその羽がなんなのかを知っている。

今さらになってあの時ゼノンのこりライダー数をあやふやにしたのか。

それをなぜ深く考えなかったのか!?

「・・・ッ!」

そしてもう一人、そう龍騎はその羽を見つめ拳を握りしめたのだ!
そして何も言わずに一枚のカードを取り出し、バイザーにセットした。

『サバイブ』

「!?!」

通常よりもエコーがかかったその音声。
それと共に龍騎の姿は強化体、龍騎サバイブへと進化する。

しかし一同は龍騎のいきなりの行動に驚くだけだった。

「城戸……？」

「……」

覚悟、焦り、緊張、そして恐怖。

それらを感じつつある龍騎とディケイド。

そしてまだ意味が分かっていないナイトたち

「……来る！」

「え？」

黄金の羽が舞い上がり、一つの場所に収縮していく。
龍騎もディケイドも注意を払う。

間違いない、ヤツだ！

『・・・』

羽が一体のシルエットを形作る。
そして黄金の羽が弾け、最後のライダーが現れたのだった…

「！！！！」

「・・・」

「お前は…」

羽が弾け、現れたのは黄金のライダー。
そのオーラは凄まじく、直視するだけで体が焼き尽くされそうな程
熱くなる。

呼吸すら苦しい、心が焼き尽くされそうだった。

『城戸真司…：仮面ライダー 龍騎』

黄金のライダーはポツリと呟く。
そして一歩、龍騎達に向かって前進した。

同時に龍騎達は一歩後ろへ下がる。

『秋山蓮、仮面ライダーナイト』

また一步、そのライダーが歩くたびに龍騎達は後ろへと下がっていき。

『霧島美穂、仮面ライダーファム。』

佐野満、仮面ライダーインペラー…』

黄金のライダーは龍騎達を一人一人見やると、その場に立ち止まった。

しかし何故だろう、嫌な予感がする。

プレッシャーがより強くなってのしかかってくる！

『お前達には…』

黄金の仮面ライダー、オーデインがその手を上げた。瞬間、彼の姿が消え、インペラーの背後に現れるッ！

『失望した』

「ッ!」

第68話 話86第(後書き)

一応アギト以外もオリジナルフォームの登場予定はあります。
でもまだまだ先になるかな

では次もよろしく!

第69話 話96第(前書き)

一回携帯で見てみたんですけど結構見にくいですね。すみません！

ちょっとパソコン向けにしてあります。改行とかがどうしても
いや申し訳ないです

ではございませぬ！

第69話 話96第

黄金の羽が発射され、インペラーを包み込む。
すると羽の一つ一つが爆発を始め、インペラーを衝撃の檻へと閉じ込めた！

「があああああッッ！！」

「佐野！」

ナイトは事態の危険性を察知するやいなや、自らもサバイブのカードを発動させる。

そして、プラスチックを発動して羽を吹き飛ばした。

散り散りになる黄金の羽達。その中にインペラーはいた。

「があああ…ッ！グアアア…」

「大丈夫か！？佐野！」

「は……いッ……つか、コイツやば過ぎだろ……訳わかんねえ……」

インペラーは苦しそうに立ち上がるとアドベントのカードを発動した。

レイヨウ型のモンスター達が駆けつけ、インペラーをかばう様に立つ。

『・・・』

しかし、オーディンはソレを見て一瞥する。まるでゴミを見るかのような雰囲気だった。

そして自らもまたアドベントを発動させる。

現れるのは最強のミラーモンスター、ゴルトフェニックス！

「攻撃を止めて逃げろ！早く！」

龍騎はインペラーに向かって叫ぶ！

しかしインペラーにその言葉が届くよりさきに

ゴルトフェニックスの巻き起こす黄金の疾風がガゼル軍団に襲い掛かった！

「うっ！わああああ！」

「佐野ツッ！」

インペラーを守るようにガゼル達はゴルトフェニックスに向かっていくが、その黄金の羽がガゼル達に着弾していく。

次々に爆散するガゼル達、そして遂にその羽が契約モンスターギガゼールに命中する。

「ギイイイイー！」

「ツッ！」

あれだけいたレイヨウモンスター達もたった数十秒で無に帰ってしまった。

もちろんそれだけではない、契約モンスターがいなくなったと言う事は…

「グッ！！あああああああああ！！」

インペラーの体から色が失われていく。そして装飾も次第に消え去り、貧相な姿に変わってしまった。

「があああ・・・ツッ！」

ブランク体である。全身の力が抜け足がすくむ、だがインペラーは倒れなかった。

別に愛着があったわけでも友情があったわけでもない。主従関係ですらなかったのかもしれない。

だが、しかし・・・むざむざ殺された自分の契約モンスターを思うと、ここで倒れる事はできなかった。

「ハアッ・・・ハア！うっ・・・ウオオオオオオオっ！！」

龍騎達が止めるのを振り切り、インペラーは全ての気力を振り絞りオーデインに向かう。

敵討ち？

いや違う、自らのプライドの奪回？

それでもない。

ただ自分とこれまで共に戦ったギガゼール達の為に一発だけ、

一発だけでもなにか仕返しをしたかったのかもしれない。

インペラーは渾身の蹴りをオーデインに食らわせる！

『・・・』

「う・・・おおおおお！」

だが、オーデインはその蹴りを受けるも、ノーリアクション。
そして直ぐにインペラーを弾き飛ばした。

「ウオオオオオオオッ！」

おまけと言わんばかりに金色の羽をインペラーに発射する。
モンスターを失い防御力も低下したインペラーにもはやなす術はない。

龍騎やナイトが彼を庇うが、それでも受けきれぬ限界を超えてしまったのだ。

「ああああアッッ」

弾けるような音と共に、インペラーのデッキが破壊される。
変身は解除され、佐野はその場に倒れてしまった。

「あぐううああ・・・ッッ」

「佐野！佐野ッ！」

佐野はかなりボロボロだったものの、命までは失ってはいなかった。
だった。

その様子に龍騎はホツと胸をなでおろす。
だが、安心はできない。今まさに最悪にして最強の敵が目の前にいるのだから

『戦いを放棄した貴様らにもはや願いを叶える資格などない。
残された時間もすくないのだ。』

貴様らにはここで消えてもらおう』

「どっして・・・どっしてなんだよっ！」

『ストライクベント』

龍騎の手にドラグランザーの頭部が装着される。
しかしオーデインは何も焦る事なく淡々と言葉を紡ぐだけ

『貴様らは戦えばいい、そうやって世界は巡ってきたのだから』

オーデインが羽に紛れて消えた。
ファムやナイトはオーデインが撤退したのかと油断する。

が、しかし龍騎は大きく深呼吸をすると、急に後ろへと振り返り、思い切り空を殴ったのだった。

『ウッ…！…！』

しかしそこは空ではなかった。

瞬間移動したオーデインが立っているではないか！

これには少し驚いたのか、オーデインですらしばらく固まってしま
う。

『ほう…何故私が現れる場所が分かった？記憶が消えなかったのか
？』

記憶が消えなかったのか？

ナイトとファムはこの言葉に違和感を感じる。

まるで以前にもこのような事があったかのように…

そう言えば龍騎はこのオーディンの存在に気づいているような様子だった。

それもあってか、よりいっそうこの言葉が引っかかるのだ。

「城戸・・・お前、何か知っているのか？」

「…さあねッ！」

「・・・あ」

ファミは思い出す。

以前真司の住んでいる所にいった事がある、（といってもそこは会社の一端だったが…）

特に普通といった所だったが、一つだけ異質なモノがあったのだ。

それが大量のメモ書きだった。

何かを記憶しておくにはあまりにも多いそのメモ書きにはたった一行

『金色の羽のヤツが消えたらとにかく後ろを殴れ！絶対に！』

「お前を一発殴りたかった！それだけだ！」

『フツ、殴ったうちには…』

入らないがなツ！そう言つてオーデインは逆に龍騎を殴り飛ばす。サバイブ体であるにも関わらず、その攻撃は龍騎の装甲に大きな傷を残した。

しかし龍騎は力強く立ち上がり、オーデインに指を刺す。

「どうだ…少しは足掻いたぞ！」

『愚かな、何も変わっていない。いや、何も変わらないのだ』

オーデインは笑う。

しかし龍騎の仮面の中、その瞳は未だに強い光を纏っていた！

「いや・・・絶対に一つだけ変わった・・・」

『……………何？』

「重さが……………消えていったライダー達の重さが倍になった！」

『……………』

「これ以上は増やさない！」

俺は人を守る為にライダーになったけど、ライダーを守ったっていい…」

『悪いが、それはできない話だ。』

もはや貴様らを生かしておく事も不要だろう。

私には時間がない。もっと命を蓄積させたい所ではあったが…』

仕方ない、オーデインはそう言って一枚のカードを装填する。

『シユートベント』

オーデインがゴルトバイザーを天高く掲げると、雲が割れ、そこから一筋の光が現れる。

光は佐野を照らすと、その輝きをどんどん増していく。

「まずい！」

それが何を意味するのか察知したアギトが、佐野を庇うように立つ。他に方法が思いつかなかった。とっさに自分の身を投げ出す

「！」

「グッ！！ウウウウウッ！」

まさに一瞬。
空から光の通りにレーザーが発射され、アギトに降りかかった！
かるうじて耐えるアギトだが、ダメージの量は大きい。

「くっ！」

「うおおおおお！」

龍騎とナイトはオーデインに攻撃をしかけるが、
瞬間移動とその強大な力で翻弄される。

それだけでなく、一瞬でアギトの目の前まで移動するとゴルトバイ
ザーで激しい攻撃をしかけていった

「グッ！！ガアアアア！！」

アギトも限界を向かえ変身が解除されてしまう。
すこし回復した佐野が翼を抱えてオーデインから離れようとするが、
オーデインは一瞬で佐野達の前まで移動する。
その強大なオーラに思わず動きを止める佐野

『命を貰つぞ、ライダー!』

「くっ!!!!」

『ファイナルアタックライド』 『キキキキバ!』

割り込むようにディケイドキバ・バツシャーフォームの必殺技が放たれた!

圧縮された水流弾はオーデイン目掛け、凄まじいスピードで襲い掛かる。

もちろんオーデインは瞬間移動で回避するが、水流弾もその動きをサーチして追尾行動をとる。

決して逃げられはしない、まさに必殺技!

「逃げられるかよッ!」

オーデインは何も言わずに一枚のカードを発動させる。

その様子から全く焦りがない事を思わせるのが気になるが…

『ガードベント』

オーデインは出現したゴルトシールドで水流弾を弾き飛ばした。それに驚くデイケイド
当然だ。まさかあんなに簡単に…

(おいおい、コッチは必殺技なんだ・・・っぞ！)

オーデインはデイケイドの背後に移動する。
デイケイドは素早くドツガにフォームチェンジするが、オーデインの攻撃によって大ダメージを受けてしまう

「グッ！ガッああああ！」

『異端は消えてもらおうか…』

金色の羽がディケイドを包み込む。
インペラー同様、爆発の嵐がディケイドの体力を物凄い勢いで奪っ
ていく

「くうああああ・・・」

ディケイドの変身が解かれ司はその場に倒れた。
ファムは真志と美歩を守っている為動く事ができない。

佐野も翼を抱えてるだけでなく、すでに体中のあちらこちらに出血
がみられる。
もはや立つことすら厳しく、這うようにオーディンから距離をとっ
ている。

「くっ
っ」

ナイトはこの状況に焦りを感じる。

このままでは全滅してしまうのが明らかだった。

だからこそナイトは苦渋の決断を取るのだった

「城戸……」

「ッ？」

「お前はこいつ等を連れて逃げる……」

「はっ!?!?」

らしくないと言えはそうだろう。

しかしナイトとて、こうするしかないと分かったのだ。

このまま全滅するのと、自分が少しでも足掻く事ができれば……
と

第69話 話96第(後書き)

今回はいろいろ原作から引用させていただきました
この真司も前のループの記憶を覚えていたって事ですね。

あとナチュラルにオリジナルカードが出てきましたw
サバイブのストライクイベントとかね

次は土曜かな？

では次もよろしく！

第70話 話07第(前書き)

さて、皆様。後書きにて少し相談(?)があります

ではではー！

第70話 話07第

「蓮！それじゃ　！」

「いいから早くしろッ！お前の願いは守る事だろう！」

「　ッ！」

龍騎は拳を強く握り締める。
もはや考える時間もない！

龍騎は迷いを振り払うかのように大声を上げると、ドラグランザーを召喚した

『させん！』

オーディンは無数の羽を発射するが、それを白い羽が受け止める。
だが、それも一瞬程度。

しかしさらに新しい白い羽が金色の羽にぶつかっていく。

「美穂！」

ファムは頷くと真志と美歩をドラグランザーに乗せた。

龍騎はドラグランザーをバイクモードに変えると、

さらに佐野と翼、司を乗せる。

「行って、真司。私も残るよ」

「・・・分かった。」

蓮、美穂：絶対助けに戻ってくるから」

龍騎がそう言つとナイトとファムは鼻を鳴らして笑う。

「お前には何も期待してないが？」

「靴紐も結べない男に助けられてもねえ」

龍騎はヒデーなど少しだけ笑つと、ドラグランザーを発進させた。

「真司さん…オレ…」

「大丈夫大丈夫！君達は俺がゼツテー守るから」

自らの無力さに齒がゆい思いをしながら、真志は携帯を鳴らすのだ
った

「もしもし？皆！お願いがあるんだ　ッ」

「うおおおおお!!」

『……』

ファムの素早い攻撃をかわす訳でもなく、オーディンは二本の剣で弾き返していく。
ナイトの攻撃も瞬間移動を駆使してオーディンは二人にカウンターを決めていく。

「くっ!!」

『トリックブレンド』

ナイトは分身してオーデインに攻撃をしかける。
ファムのガードベントが見せる幻影も合わさり回避は不可能だ！

『・・・』リターンベント』

オーデインが発動したカードの絵柄が変わり、もう一度認識音声が
鳴り響く

『アドベント』

上空から飛来するのはゴルトフェニックス。
その羽ばたきがナイトの分身も、ファムの羽も全て消滅させる

『ムンツッ！』

「ううううツッ！」

「ゲッ！」

金色の羽が発射され、二人の装甲を乱暴に削りつつ行く。

ナイトはファムを庇い前へ立つが、オーデインは瞬間移動でファムの後ろへワープすると背後からファムを金色の羽に包み込んだ。

「きゃあああッッ!!」

「くっ！霧島！」

ナイトは飛翔し、そのままオーデインに切りかかる。当然瞬間移動でかわされるが、それこそが狙い！

「これで終わりだッ！」

『!』

『ファイナルベント』

出現したばかりのオーデインを青き閃光が捕らえる。バイクモードへ変形したダーククレイダーの捕獲攻撃！

ナイトはそれに飛び乗り、自らのマントで車体を包み込んだ！

「ウオオオオオオオオオオツツツ！！！」

『グウウウ！！』

風を切り裂くその一撃がオーディンに直撃する。
しかしオーディンはその一撃を確かに受け止めていた。

そしてその僅かな一瞬の間に、一枚のカードを発動させる。

『ファイナルベント』

ゴルトフェニックスが雄たけびをあげてオーディンに重なる。

「！」

加勢しようとしたファミは思わず動きを止める。
それほどまでに眩い光がナイト達を包み込んだのだ。

「え……？」

光が晴れたとき、そこに見た光景はまさに絶望と言っていていいかもしれない。
倒れるナイト、そしてそのデッキを握り潰すオーディンが見えたのだ。

まさか あのナイトが……

「グッ!!」

ナイトの変身が解かれる。
無防備な蓮にオーディンは止めを刺そうと手を伸ばした。

だがダークウイングが蓮を庇うように、オーディンに攻撃をしかける！

既に契約は破棄されているのだが、何故かダークウイングはオーディンだけに狙いを定めていた

「キイイイイイツ！」

『・・・愚かな！』

「クツ！やらせるか！」

オーデインが手をかざすのを黙ってみているファムではない。
素早くオーデインを邪魔するために剣を突き出すが・・・

『ふっ・・・』

オーデインはファムの攻撃をそのまま受けると、
なにくわぬ様子でダークウイングに攻撃をしかけた。

無数の羽がダークウイングに着弾していく

「ちつくしょおおー！」

ファムはまるで自分を相手とすら見ていないオーディンに怒りを感じる。
確かにオーディンにとって脅威なのはサバイブ体であるナイトの攻撃だろう。

だが、攻撃を避けすらない事に無性に腹がたった。

『ムンっ！』

「ぐぐっ！…うっああああ！」

金色の羽がファムの身体に着弾していく。
くじけそうになる心を奮い立たせ、ファムはカードを装填する

『ファイナルベント』

「うっおおおおッっ！」

ブランウィングの突風がオーデインを襲う。
しかしオーデインはそれすらも避ける事なく、ミスティースラッシュを手で受け止めた。

多少は苦痛の声をあげるも、その装甲に特に目立ったダメージを与える事はできない。

『これで理解したか？お前達はもう…』

オーデインはゴルトバイザーを二人に向ける。
勝ち目はないのか？二人は死を覚悟する。

しかし、その時だ。紅蓮の炎がオーデインに向かってきたのだ！！

『チツ！意外と早かったか』

ワープでそれを回避する。この炎は…

「蓮！美穂！」

ドラグランザーが咆哮をあげる。その中心には龍騎が立っていた！

「ッ！遅いぞ！馬鹿！」

「城戸・・・ッ！」

ナイトとファムは歓喜の声をあげる。
それを不愉快とオーディンは鼻をならし一瞥した。

『今さら戻ってきた所で…』

そして、オーディンは足を止める。
その直後、オーディンの目の前に一閃が巻き起こった。

目の間に突き刺さったのは槍…だろうか？

オーデインがそのまま歩いていたら間違ひなく直撃していただろう

『…』

「フッフ、惜しいね」

オーデインの後ろから青いメッシュの入った少年、良太郎が歩いてくる。

腰にはベルトが巻かれていて、その手にはパスが見えた。

良太郎は圧倒的なオーラを放つオーデインを前にしても、平然と笑みを浮かべている。

『貴様もライダーか…全く、次から次へと…ッ』

「正解。とりあえず君には」

『ROD FORM』

『・・・・・・』

「消えてもらおうかな。変身」

ベルトの中心が青く輝くと、良太郎の姿が電王に変わる。

「フフッ」

『・・・・・・』

ロッドフォームになった電王は、もう一度笑みを浮かべるのだった

第70話 話07第(後書き)

さて、もうお気づきの方も多いとは思いますが
歌詞の無断転載についての規制が厳しくなるみたいですね

最初、え！？何？俺、やらかした！？

と思ったんですが皆様に連絡が届いているようでw

まあ仕方ないですね。

ですがちよつとまだ基準が分からんもんでして…

これは予約投稿なんで、まだ情報があまりないんですよ

実は私も少し歌詞の一部を転載してしまいましたね
今、ちよつと修正したんですけど…大丈夫かなってw

まあ明日明確な情報が届くようで、それを待ちますが…
なんでも引つ掛かった場合、もう即ユーザーを消滅させられるようで

「ああ！もうじれったいわ！」

「落ち着いてフルーラ。つまりこつ言つ事かな？」

「作者はビビってる!」「

「そもそも台詞も一部原作から引用してるものね」

「歌詞だけなのか？台詞はまだ大丈夫なのか？」

「いろいろと心配は尽きないと言う訳ね!」

「だからもし、読者の皆様が」

え？コレやばくね？アウトじゃね？

という感じの文を見つけたらどうか教えてほしいです。お願いします！

ではこれで

次もよろしく！

第71話 話17第(前書き)

うーん…やっぱり皆さん修正に忙しいみたいですね
ボクも気をつけないと

今日は番外編も投稿します。理由は番外編の前書きにでも…

ではごっごー！

第71話 話17第

変身と共に電王は走り出す。

オーデインはゴルトバイザーを構えカウンターをしかける為にあえて動かなかった。

このまま突っ込んできた電王に俊足の突きを与え、一撃で沈めようとオーデインは神経を集中させる。

『ハッ!!』

そして、電王がその射程に入った瞬間、ゴルトバイザーを素早く突き出す!

が、しかしそれが当たる事はなかった。

『!』

電王が消えたのだ!

いや、違う。電王闇雲に突っ込んだわけではない。

ウラタロスはオーデインがカウンターを仕掛ける様に誘導し、文字通り釣ったのだ。

電王はスライディングで突き出されたバイザーの下を潜り抜け、突

き刺さっているデンガツシャーの下までやってくる。

そしてソレを素早く引き抜くと、オーディンに向かって思い切り振り回した！

「はぁぁぁぁぁッ！」

『フン！』

オーディンは瞬間移動で電王との距離をとる。

そして黄金の羽を電王に向けて発射した。強力な飛び道具に電王は対抗する手段をもたない。

「フフッ！」

だが、電王はあくまでも余裕を浮かべていた。迫り来る羽を見ても迷わず突っ込んでいく！

そしてそのままロッドを地面に突き立てると、棒高跳びの要領で自らを空に放り投げた！

無数の羽のはるか頭上を飛び越えて、電王はオーディンに狙いをさだめる

『むっ！』

『FULL CHARGE』

電王の足が光り輝く。

デンライダーキック！

電王はそのままオーデインに向かってとび蹴りを仕掛けたのだ！
しかしオーデインがそれを受けるとは思えない。

それが逆に裏があるのかと警戒を呼ぶ。

『・・・』

そして、オーデインが出した答えは、真っ向から潰すと言う簡単なモノだった。

無数の羽の狙いを空中にいる電王にかえると、羽の量を増やし、黄金の嵐を巻き起こす

『散れ!』

「ふふっ! 足元注意!」

『何ッ!』

オーデインはその言葉を信じ、足元を見る。

しかし特に何も無く、電王も羽に巻き込まれ、普通にダメージを受けていたようだった。

キックは中断され、電王は地面に落下する。

「・・・フッ!」

だが、しかし電王、ウラタロスはまだ笑っていた。

足元には何も無いのに・・・?

「嘘だよ...足元じゃなくて...」

やられたー！

オーデインは瞬間移動をするために意識を高める。

おそらく下ではなく…ッ！

直後、赤い閃光の雨がオーデインを囲む！

『！』

「やあああああああ！」

直後、その赤い閃光。

ポインターに黒い影が突入する。

アクセルクリムゾンスマツシュ！

『ぐうっつっッ！』

直後現れるのマークを弾き飛ばすと、オーデインはその影に金色

の羽をぶつける。

高速で動いているにもかかわらず、羽を命中させられるその腕前は最強のライダーを名乗るのにふさわしいだろう

「くっ！」

倒れるのはファイズアクセル。
拓真だった。

奇襲の為に遠くでアクセルを発動させた為、タイムリミットがやって来る。

『1・・・』 『Time Out』

「お前は・・・？」

蓮は新たに現れたそのライダーに問いかける。

「僕達はあなたの味方です。安心してください…ッッ！」

そう言ってファイズはオーディンと対峙する。

オーディンはすこしファイズと距離をとるため、後ろへさがっていく。

だが、それはフェイク！オーディンは瞬間移動でファイズの後ろへ移動する！

『死
』

「チェック！」 『Exceed Charge』

『何！？』

今度は青い閃光がオーディンを捕らえる。

既に瞬間移動の事を知らされていた拓真達は、囿の作戦をとったの

だ。

物陰からデルタが現れ、ポインターに向かって飛び蹴りを放つ。

「でりゃあああああッ！」

『ぐおおおおお！』

ルシファーズハンマーがオーディンにヒットする。

流石のオーディンも、度重なる連撃に参っているようだ。

苦しそうにつめきながらも、黄金の羽を散らしながら牽制する。

『・・・クッ！今から十時間後、

ミラーワールドのこの場所においてライダーバトルに決着をつけるぞ。

もし、ここになければこの街を破壊してもおびき出してやるっ！』

「なっ！待て！」

オーデインは金色の羽と共に消える。
完全に気配が消え、戦いは一旦終了したのだった

「蓮！美穂！大丈夫か！？」

「あ…ああ…ッ！」

蓮はフラフラと立ち上がると上空に留まっているダークウイングを見る。

「お前」

ダークウイングは何も答えない。
まるで、蓮の無事を確かめたからといわんばかりに上空へ飛び立つ
と、そのまま見えなくなってしまった。

「・・・」

蓮は言葉にこそしなかったが、今までずっと一緒に戦ってきたパートナーに礼を示すとその場に座り込むのだった。

龍騎達は変身を解くと、同じく変身を解いた拓真達に頭を下げる。

「ありがとう、たすかったよ。君たちは」

「真志君から連絡があつて…詳しい事は後で」

「ああ、分かったよ。それより、真志君！」

拓真の後ろで真志が照れくさそうに笑う。
真司は先程と同じように笑って真志に駆け寄った

「サンキュー！真志君！助かったよ」

「い、いや！あははは！」

憧れの人にお礼を言われて真志も嬉しいようだ。

だが、そんな二人に一つの影が襲い掛かった！
ハイドラグーンだ！

運よく生き残った一体が、その爪を突き立てて真志に狙いを定める！

「え？」

「ブブブブブブッー！」

真志が気づいたときにはもう遅い。いまから逃げようにも確実に射程範囲にはいつている。

「うっ！うわぁ！」

思わず腰を抜かしてしまい両手で顔を覆う。
襲ってくる激痛に耐えようと、歯を食いしばった……

しかし、痛みは襲ってこない。
真志は助かったのかと安心する、

だが目を開けた時彼の視界に広がっている光景は意外なものだった……

「ツツ！！ 真司さんツ！！！！」

「大…丈夫…ツ？」

そう言って真司は笑う。

しかしその口からは鮮血が見え、顔色も悪く、足が震えていた。

「真司ツツ！！」

美穂の叫び、それで彼らは事態を理解する。

庇っていたのだ、真司はその体を盾にして真志を守った。

「真司…さん…なんで…」

「言った…だ…る？君達…は…俺が…守…るっ…て」

「そんなッッ！」

真司は力を失ったかのようにその場に倒れた。
美穂が何か叫んでいるが真志の耳には届かない。パニックになってしまっているのだ

「え…あ…！」

城戸真司は死ぬ。

その結末を変えたかった、自分には力がないがそう思った。
龍騎になれなくてもいい、そう思ったのに！

オレのせいだ…

「くそっ！」

拓真の合図と共にオートバジンをドラグーンを吹き飛ばす。
そのままゼロ距離でドラグーンを蜂の巣にすると、ドラグーンを爆
散させる。

1268

「真司！真司ッ！」

「城戸！城戸ッ！」

美穂と蓮は真司に駆け寄るが、拓真は二人を制した。
今ならまだ学校の治療器具で助けられるかもしれない！

「バジン！お願い！」

オートバジンは頷くと、真司を抱きかかえ学校へと飛んでいく。

「……間に合うといいけど」

拓真は真志に視線を移す。

へたり込んで震える彼に手を差し伸べると真志は弱々しく握り返した

「・・・とりあえず落ち着いた様だね」

ベットに眠る真司を見て美穂達は胸をなでおろす。
しかしあくまでも危機的状况を避けただけで、まだ安心はできない。

「やばい…ですよッ、あのオーデインとか言うヤツ…
指定された時間まであと二時間しかない・・・ッ」

佐野が言う通りだ。

真司は助かったものの、まだオーデインが残っている。

奴を倒さなければ、この街が破壊されてしまうかもしれないのだ。しかも場所はミラーワールド。入れるライダーは限られる…

「私・・・行くよ」

「ッ！ 本気が霧島？」

「強化体だった蓮さんですら勝てなかったのに…」

でも、私が行かなくちゃならないんだ！
美穂は震える手を握り締めて言い放つ。

誰も否定はできない。

残ったライダーは美穂と真司だけなのだ。

真司が戦えない今、美穂がオーデインと戦うしかないのだ。

「ごめんなさい！オレのせいでッ！」

真志は何度目か分からない謝罪をする。

別に誰も真志を攻めなどしない、それはもう彼自身分かっているのに。

だがそれでも真志の心が救われる訳ではないのだ、自分を庇って刺された真司。

真志は自分のデッキを見る。

もし自分が素早く契約していればだとか、もしああしていればということは思わない。

彼はそう言う後悔はしない。

だが、やってしまった事の大きさは真志に重い枷の如くふりかかるのだ

「私たちも…行くよ…ッ！」

「まだ少し顔色が悪い翼と司…
彼らもミラーワールドに入れるため、加勢しようとして歩き出す。

しかし

「大変です！司くん！」

そこへ夏美が走ってくる。真志達とは違って、その表情は少しばかりの希望が混じっていた

「実はですね！」

第71話 話17第（後書き）

次は番外編になってます。

ちよつと本編とするにはタイミング的に違う様な気がするんで…

アギトの時みたく本編の補足シナリオですが、

まあまだ見なくとも大丈夫っちゃ大丈夫ですかね

では次もよろしく！

第72話 番外編 編外番 話27第(前書き)

実は次の土日までたぶん更新できないと思うんで
今日二話更新する事にしました

ではござい！

第72話 番外編 編外番 話27第

『アンタも無茶するわねえ…』

「いいんですよ！」

司君達が頑張ってるんですから、私も頑張らないと！」

キバーラの呆れ顔を夏美はくすぐる。

今、夏美と我夢、アキラは街を駆け回っていた。

少しでもコアミラーの情報を手に入れる為、何か手がかりがないかと探していたのだ。

だが、結果はイマイチ。

やはり一般人では知りえない情報を得るのはとても難しいモノだ。

3人はそれを痛感させられる。

一応モンスターが出たときの為にキバーラに付いてきてもらったが、杞憂であってほしい

「アキラさん、夏美先輩、大丈夫ですか？」

「ええ、私は大丈夫ですよ？夏美先輩はどうですか？」

「うえ！？あ、あははは！」

「もちろん！元気いっぱいです！」

ああ、違う。

疲れてるんだな、我夢は夏美の様子からソレを読み取る。

正直、いつシアゴーストの大量発生が起こるかどうかわからない所だったが…

このまま無理をして探すのもどうかと思う。

それこそ大事な時に力が出せないのは危険だ、我夢は夏美とアキラに休憩を申し出た。

「あははは、二人とも凄いですね。

「僕はもう疲れちゃって…本当にごめんなさい、ちょっと休憩していいですか？」

我夢のその発言にアキラはしょうがないですねと笑う。
夏美もホツとした様子でその案に賛成した。

3人は街にある適当なベンチに腰掛けて一息をつく。

「私、ジュースでも買ってきます。先輩と我夢君はそこにいてくださいね」

『あ、アタシも欲しいー!』

「大丈夫ですよ、分かってます」

そう言って微笑むと、アキラはパタパタとジュースを買いに走っていく。

「我夢君、お願いがあるんですけど…いいですか?」

「え？ああ、はい。何ですか？」

「アキラちゃん、きつとジューズを四本も持つの大変だと思うんですよ。」

「だから、手伝ってあげてくれませんか？」

「あ……ああ！そうか、そうですね。」

「はい、分かりました！」

そう言っつて我夢はアキラを追いかけて走っていく。

『アンタが手伝ってあげればよかったんじゃないの？』

「チツ、チツ、チツ！わーってないっすねーキバーラは、
気遣いには気遣いで返すのが流儀ですよ！」

「いやあ、我夢君には悪い事をしました。」

「きつと、私の為に休憩してくれたに違いありません」

『あ！そうか、アンタっ……成る程ねえ』

キバーラは楽しそうに夏美の周りを飛び回った。

「フッフ、策士夏美。もっと誉めてくれてもいいんです…っよっ。」

夏美の視線の先には一人の男がいた。
買い物袋を持っているところを見るにスーパーから帰るところだろう。

しかし、夏美にはどこかその男に見覚えがあった。

「んー…っ。」

ドラマだったような、それとも雑誌だったような…

「おー！」

男の買い物袋からりんごが一つ落ちてしまった。
コロコロと転がるそれは、夏美の足元で停止する。

「あっ……すみません……」

「あ！いえ！そんな……」

少し無愛想……というか、表情が硬い感じの男が夏美のところへやってくる。

夏美はりんごを男に返そうとその顔を見る。

「あああああああー！」

「!？」

思い出した！そうか、ココ龍騎の世界だった。

夏美は司から無理やり龍騎の鑑賞会に付き合わされたのを思い出す。

そうだ、そうだ！

「お話し！聞かせてください！」

「えっ…？」

「じゅーちゃん！」

「・・・」

男、北岡秀一は戸惑っていた。
友人であり秘書であり、ボディガードである由良吾郎。

そんな彼が珍しく客を連れてきたのだ。

まあ彼にも友人くらいいるだろう、だがおかしいのは明らかに接点がないと言う事。

目の前の客人は3人、いずれも自分達よりかなり年下だろう。
高校生と…中学生か？

しかし、高校生の女の子は必死にシャリシャリ音を立ててりんごを
貪り食っているのが何ともまあ…

「なっ、夏美先輩！」

「ふえ？（シャリシャリシャリ）」

「北岡さんが見えましたよッ…」

「（シヤリシヤリシヤリシヤリ）・・・！」

ブッ…！

「あーっ、ごめんなさい！ちょっと頂いてました！」

「ああいや、いいんだけど…」

北岡は吾郎に軽く合図を送ると椅子に腰掛けた。
吾郎から少し話は聞いていたため、スーパー弁護士ではなく…

「で？俺に何か用？と、言ってももうライダーじゃないんだけどね」

ゾルダとして夏美達に話しかけたのだった。

「…と、言う訳なんです!」

ふうん、世界ねえ…ま、信じられなくもないけどこんな世の中じゃねえ

「ま、信じてもいいけどさ。俺に何を聞きたい訳?」

「あ、あのですねっ! コアミラーって知ってますか?」

「コアミラー…?」

なーんかどっかで…

「あ」

思い出した

「何か知ってるんですか！？よければ教えてください！」

「そう言えばね...」

「北岡アアアアアアアアッ！」

「ハア… やれやれ、いい加減お前ともサヨナラしたいね。俺は…」

荒れた廃工場で二人の男が対峙していた。

北岡と、仮面ライダー王蛇・浅倉だ

「どいつもコイツも… ハハアッ！
イライラさせやがってええええ！」

「何に切れてるんだよお前は…」

適当に置いてあったドラム缶を浅倉は乱暴に蹴り飛ばす。
もちろん、そんな事で彼のイライラが晴れる訳ではない。

そう、もっと大きなものを壊せば、彼の心は晴れるだろうか？

「三人だあ…」

「？」

「三人、このゲームに乗ったヤツを殺した。ハハッ、ハハハハ！」

だけど…笑う浅倉の顔が急に真面目なものになる。

「弱いッ、どいつもこいつも…ふざけているのかぁ？」

「アアアアアアアア！」

怒りの咆哮をあげる浅倉。
そしてその時、そんな彼の頬を掠める弾丸。

「・・・」

「お前はやっぱり危険だよ。悪いけど…ここでサヨナラだな」

ゾルダに変身した北岡は、銃で浅倉に威嚇射撃を放つ。
しかし浅倉は、逆に何故か楽しそうだった。

ニヤリと笑って、自らもカードデッキを構える。

「クク…！ 変身！」

王蛇に変身を完了させ、二人はミラーワールドへと戦いの舞台を移す。

誰が告げるとも言わぬゴングと共に、二人の戦い…

いや、殺し合いは始まったのだった。

『ソードベント』

『ストライクベント』

剣を構えた王蛇の攻撃を、契約モンスター、マグナギガの頭部で弾き返す。

しかし王蛇は笑い続け、ゾルダに攻撃をしかけていく！

「本当ッ…お前はイかれてるよ」

「クハハハッ！ハハハアアハハハ！」

それは誉め言葉、王蛇は狂ったように

…ではなく、正常にゾルダに連撃を浴びせていく。

「あーあ、やっぱりお前は普通じゃないわ」

「普通とは何だ？ハハッ、戦う事か？」

そんな訳ないでしょ…ゾルダは接近戦をあきらめ、銃で王蛇を牽制し距離をとる。
やはりアイツに近距離は無理。なるべく遠く、近距離での戦闘を心がけなければ。

「フン…」

『アブソレント』

「!?!」

後ろから衝撃が走り、王蛇の所まで吹き飛ばされる。

ふと後ろを見れば、サイの様なモンスターが立っているではないか。

コイツが契約したのはどう考えても蛇、つまり…

「はいはい、奪ったってわけねッ」

振り下ろされる剣をかわし、銃で殴るように撃つ。

ゼロ距離での発砲は流石に堪えたのか、王蛇は笑いではなく苦痛の声をあげる。

「フツ、ハハハ！」

しかしすぐに王蛇は笑い出した。

「コレだ…この感覚、この感覚をオレは待ってたんだよ。

北岡アア！」

戦いは最高だ。この命のやり取りが最高の興奮を与えてくれる。

王蛇は楽しそうにゾルダに向っていく。

銃を放つが最小限の防御しかしない、銃弾がその体に当たろうとも構わず走り続けた。

「アイツ、人間じゃないんじゃない？」

『シユートベント』

巨大なキャノン砲を両肩に背負って発射する。

たとえどんなに人間離れしているヤツだろうが、コレは受けきれない。

流石にソレを理解したのか、王蛇はその弾丸を交わしていく。

だが、少しずつ、確実に距離を詰められていつているのは事実だ。

ゾルダに焦りが生じる、解除すべきか？

いや、もしかしたら隙が生まれるかもしれない…

その迷いは一瞬、だが、その一瞬が王蛇にとっては絶大な隙となるのだ。

『ファイナルイベント』

急に王蛇は加速を始める。その後ろには契約モンスターのベノスネーカー！

「あれ？」

俺、やばいんじゃない？

「クッ！」

『ガードイベント』

ギガキャノンを解除して、シールドを構える。
そのまま走るが、逃げられるか!?

すでに王蛇は空中に舞い上がっている。

「クソッ！」

せめてもの抵抗に銃で勢いを殺せないかと撃ってみるが、無駄のよう
うだ。

酸を纏った連続蹴りが、放たれる！

「ハアアアアアッッ！！」

「ッッ！！」

回避するために物陰に飛び込むが、直ぐに蹴りの嵐が襲い掛かって

きた。

数発は重機によって防がれたが、すぐに自らのシールドに蹴りが命中する。

もの凄い衝撃、そして破壊されるシールド。

最後の一発はカードできずにまともにくらってしまった。

「ウツ！ガアツ！」

ゾルダはきりもみ状に吹き飛び、地面に叩きつけられる。

「ハハッ……」

王蛇は笑っていた。何故？

そう、それは自分の体を感じる痛みが原因だった。

「ハハハハハハハ！北岡、やはりお前はただの雑魚じゃないようだな……」

あの瞬間、蹴りがシールドに触れたとき、ゾルダは銃で王蛇の足を撃っていたのだ。
それが原因で少し蹴りの威力が弱まったと言う事なのだ。

「くお……」

ゾルダはふらふらと立ち上がる。そして一枚のカードを発動させた。

『アドベント』

契約モンスターマグナギガが現れ、立ちふさがる。

ゾルダは周りを確認すると、すこしまグナギガから少しずれた位置に立つ。

「何の真似だ？」

「さあね」『シュートベント』

巨大なバズーカ砲を出現させ、ゾルダはソレを王蛇へと向けた。

「ハハハハ、もっと楽しみたかったが……」

『ユナイトベント』

「!？」

「…消えろ」

エビルダイバー、ベノスネーカー、メタルゲラス。

三体のモンスターがゾルダの背後に現れる。

そしてそのまま合体すると、獣帝・ジェノサイダーへと姿を変えた。

「おーお、合体か。昔は憧れたもんだよ」

「アアアアア…終わりだ、北岡」

『ファイナルベント』

王蛇はゾルダの息の根を止めるべく走り出す。
巨大なギガランチャーを構えているゾルダはまともに動く事が出来
ない。

しかし、ゾルダは冷静だった。

少しだけ笑うと、そのままギガランチャーを…

横に向ける。

「!？」

「悪かったな、こんな主人で。ま、あの世では幸せにやってよ」

ゾルダが照準に合わせたのは王蛇でもジェノサイダーでもない、マグナギガだった。

そしてそのままゾルダは、引き金を引くッ！

物凄い衝撃と反動で、ゾルダの体が後方へと移動する。そしてその後方にあつたもの…それはガラスだった。

そう、ミラーワールドと現実世界をいどうする媒体。

「知ってるか浅倉・・・」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

王蛇はその意味を理解し攻撃を中断する。
しかしもう遅い、発射された弾丸はマグナギガに着弾する。

同時にガラスから現実世界へと戻るゾルダ。

「そいつ、体中にヤバイ物積んでるんだ」

超爆発。まさにその言葉が似合うだろう。

マグナギガの体中にあるミサイルや燃料に着弾からの爆発が引火し、
廃工場を大爆発が包み込む。

ゾルダはそれを現実世界から確認すると、すこしため息をついた。

「本当、お前は人間じゃないよ」

ブランク体となったゾルダは再び廃工場……だった所に訪れていた。もう何も無い、工場の周りすらさら地になっていた。しかし、その中にたった一人、人間がいた

「ハハハ……アーツハハハ！」

全身に大やけどを負った浅倉は、死が近づいているというのに笑っていた。

「これが……戦いか……心地いい……」

「……」

もう目すら見えていないだろうに、浅倉は笑う。
ゾルダは、銃をそんな彼に向けた

「・・・」

何も言わず、ゾルダは浅倉の眉間を撃ち抜いたのだった…

そしてその後、戦いを終えた彼の前に一人の男が現れた。
男は、北岡がライダーだと知ると、目の色を変える

「何？おたくもライダー？」

「ああ、できれば協力してもらいたい…」

そして男は話し始める。

だが、その男の言葉がゾルダの耳にはあまり入る事はなかった。

当然だ、今終わった戦いが北岡という人間の心になにか虚しさのよ
うな物を生んだのだ。

「悪いけど、俺は協力できないわ」

なーんか、虚しくなっちゃったんだよね。

「命とか、人生とかさ…だらだらやってても意味あんのかなって…」

「そつか…なら俺の連絡先を覚えておく。気が向いたら連絡してくれ」

「はいはい。いただきますよ」

「多分、もう一生会わないだろうけどね」

「そう言って二人は別れる。」

「ちとと・・・」

今日は玲子さんとディナーか…遅れないようにしなければ

「・・・」

永遠の命…か。もうどうでもよくなっちゃったな

「・・・」

「で、その時の男が「アミラーがどうの」って言ったような気がするんだよねえ」

「連絡先はまだ？」

アキラの言葉に北岡はハッとする。

「あー…ゴローちゃん、あれどこやったっけ？」

「あ、はい。今持ってきました」

そして戻ってきた吾郎の手には一枚の紙切れが…

「ふうん。俺も全然興味なかったけど・・・」

その紙を祈るように見ている夏美達に少し興味を示したのか、北岡もその紙を除いてみた。

「住所が書いてありますね…行ってみますか？」

「ちょっと！いいんでしょうか！？勝手に入って！」

我夢は冷や汗を浮かべて夏美達を追いかける。

確かに行ってみようと言ったのは自分だが、不法侵入をするなんて言っていない！

「大丈夫大丈夫、もし訴えられたら俺が白にしてあげるから」

「そういうもんだいじゃないでしょ！」

我夢の心配をよそに夏美達はそのアパートの部屋に来ていた。

住民の名は榊原耕一、だが部屋にその姿はなく。

部屋は不気味なほど静かだった。

「えと…」

北岡達は適当にデスクをあさる。

もう我夢も止める事は無駄だと判断し、それを見ていた。

暫く適当に探していたが、一枚の地図を見つけ表情が変わる。

「赤い点が打ってありますね」

アキラはさらにメモ書きをみつけた

『鏡の心臓』

「あー…」

これは、ペンゴじゃないか？皆は顔を見合わせる

「これで…司君の役に立てたんですね・・・」

嬉しそうに微笑む夏美を見て、北岡は何故がおかしくなる。

「そう言えば…北岡さんのデッキはどうしたんですか？」

我夢の問いに北岡は笑って答える

「なんかさ、ライダー同士の戦いといめようとしてる馬鹿がやって来てね。」

ソイツ見てたら、なんかもう本当どこでもよくなってた」

壊してもらったよ。デッキはね…

「…そうですね」

きつとその人は…城戸真司なのだろう。

「さあ、誰かに見つかる前に…行こうか」

そう言つて北岡は立ち上がった。
ぼやける視界、だが北岡は笑う。

たまには人助けも悪くない。

何故か、とてもおかしかった

夏美達と別れた北岡は事務所に帰るために歩いてきた。
さつきよりはだいぶマシになった。

ふと、鏡を見てみる…

そこには、赤い髪と青い髪の二人

「？」
「？」

北岡が振り返ると、そこには二人の少年と少女が立っていた。くすくすと笑う二人は北岡に小ビンを投げつける

「うおと…」

「ゾルダ。参加賞だよ、受け取ってほしい」

「ソレを飲めば貴方を苛む呪縛は消え去るわ。ウッフ…」

「は？」

北岡が間抜けな声をだすと、また二人はくすくすと笑う。そしてそのまま砂のオーロラの様なモノが現れたかと思うと、あっという間にいなくなってしまうた。

「なんなのよ…」

最近どうも調子が狂うね…

「でもまあ」

うけとっておきましょうか。

どうせ死ぬんだ、成るようになれ…

北岡はソレを飲み干すと、あまりの不味さに笑ってしまつたのだ。

『余計な事はするなと…言った筈だが？』

クワガタの様な携帯電話から女の声が聞こえる。
ゼノンはそれを聞くと、苦い顔を浮かべて笑った。

「あら？

今さら一人の命を救ったところでどうにかなる訳じゃないでしょ
う？」

フルーラはしかめっ面でその声にこたえる。

『確かに…あの程度の事では世界に影響はきたさない。
だが、私は死に逝く人間を見るのも好きなのだ。

それを忘れないでもらいたい』

「でも、こう言う展開だつて好きでしょう？
人を殺めながらも幸せに向かい続ける人間の姿」

『フツ…確かに嫌いではない』

イエスと言う事か？

二人は笑い合う。

しかし電話の向こうの相手はあくまでも不機嫌そうだ。ゼノン達はお仕置きを言い渡される

「ええ！金のエンジェル五枚当てるまで帰ってくるな！？」

「冗談で

」

切られた…

「えっと…ゼノン？」

「フルーラ。長い戦いになりそうだよ……これは

「お小遣い…足りるかしら……」

可愛いクマの財布を覗き込みながら、フルーラはため息をついたのだった。

第72話 番外編 編外番 話27第(後書き)

牛か……じゃなくてマグナギガは

多分爆発したらヤバイと思うんですけどよね…

じゃあ次は…多分土曜かな？

もしかしたら一回くらいは更新できるかも

では次もよろしく！

第73話 話37第(前書き)

はい、どうも！

ちょっと日曜の更新が怪しいので今日代わりにやっとこさかなと

今回ちょっと長いっすねw

ではどうも！

第73話 話37第

「うっ…うっ…うっ…うっ…」

女子トイレではすすり泣く声が響いていた、美歩だ。
真司に助けられた後、彼女はずっとここで泣いていた。

相変わらず鏡の中の自分は親しげに話しかけてくる。下卑た笑みを
浮かべながら

『おいおい！泣いてんじゃねーよ、コレってマジでチャンスじゃん！
テメエもデツキ持ってたんだろ？
うまくいけばあいつ等出し抜いて勝ち残れるんじゃない？キャハ！』

1322

「うっ…うっ…うっ…」

自分はおかしくなってしまったんだろう、こんな事思っでない。
だがこれを言っているのは自分だ。
心の中でこんな事をおもっていたのだろうか？美歩は自分が分から
なくなる。

同時に怖くもなった、ああ…こんな人間だったのか…

きつと真志に嫌われる。ずっと好きだったのに…

『ああ！そつだよ！真志はお前の事なんて何とも思ってたねえ！
むしろ縁切りたいんじゃないかな？ぎゃははは！』

そつかもしれない。

もともと真志は真面目な男なんだ、頭も悪くないし運動だってできる。

でも自分は駄目だ、

勉強は全然だし運動が得意という訳でもない。
自分といれば真志の評価まで落ちてしまう…

『でも、大丈夫！大丈夫だよ私』

急に優しく話しかけてくる自分に、少しだけ心が揺らいでしまう。

『願いを叶えれば真志とずっと一緒にいられるから…』

美歩の心が揺らぐ。

そうか？

そうなのか？

いたい。離れたくない…

『私は私の味方だから。さ、手を出して』

「あ…」

しかし、そんな彼女を抱きしめたのは鏡の中の自分ではなかった。

「え？」

いきなりの衝撃に美歩はバランスを崩す。
だが、それでも彼女が倒れる事はなかった、彼女はしっかりと支えられているから

「・・・何しに来たの」

「・・・」

美歩は支えている手を掴む。
引き剥がしたかったができなかった、思わず泣きそつになる

「美歩・・・」

「真志...」
「女子トイレなんだけど」

「ああ」

悪い、そういつて謝るものの真志は美歩から手を離すことは無かった。

むしろ強く抱きしめる。

後ろから抱きしめられ顔もうつむいている為、

美歩から真志の表情は読み取れなかったが、震える手と足をみて普通ではない事を悟る。

「どっしたの…?」

真志は弱々しい声で小さく呟く。

「あのな…オレ、決めたことがあるんだ…」

「うん…」

「だけど、怖いんだよ。」

一度決めたら迷わないって生き方してきたけど…

怖いんだ…」

でも

「生きてるうちにそんな事何回もあった。」

どうしていいか分からなくて、迷う事すらできなかったり、

逃げたり…」

怯えているのだ。そう、誰だって…

「真志…は…」

美歩は少し迷ったが、口を開いた。

鏡の中の自分が鬼の様な形相でなにか言っている様な気がしたが無視することにした。

だって、いつもそうしてきたから…

「真志は…大丈夫っしょ？いつもいつも乗り切ってきたじゃん…か」

「…」

真志は美歩から手を離す。

そして振り返る美歩に向かって笑いかける

「あ…」

「おう！そうだな、助かったぜ」

真志は美歩の肩をポンポンと叩くといつももの様に笑って走り出した。とてもさっきまで落ち込んでいた人間には見えない。

その変わりように美歩は思わず吹きだしてしまった

「なんだよ…それ…」

「あー…美歩！」

「……ん？」

「やっぱり、お前に励ましてもらったのが一番しっくりくるわ」

「え…！」

真志は顔をこちらには向けずにハッキリと彼女に言った。
しかしすぐに走って行ってしまっただが…

「・・・」

だが、美歩の心のなかで何かが楽になった様な気がした。
それはとても暖かいもの、ずっと忘れてたような思い

『おい！ざけんなツ！思い出せ！』

テメエがアイツにどれだけ迷惑かけたとおもってんだよ！

アイツはてめえの事なんてどうでもいい！
迷惑だと思ってる！

おい！聞いてんのか！おいッッ！』

「……ッ！」

思い出す？今までの事を……？

雨、曇天。ああ、どうでもいい。どうでもよかった。

靴を履いてなかった事を後悔する。
それより傘をもってこなかった事を悔やむべきだろうか？

「・・・・・・・・」

もういい、そう彼女は思う…

彼女の家族は皆頭が良かった。よく言えば博識、悪く言えば厳しいという所か。

学者の父や、会社でリーダーを任されている母。

そしてなによりその二人から絶大な信頼、期待、そして愛情を注がれている姉。

その三人の家族だった。

そう、三人だけなのだ。

では私は？彼女は思う。

極論で言ってしまうえば…そう、自分が悪いだけなのだろう。

彼女の成績はあまり…いや、とてもいいとは言える物ではなかった。

ピアノもバイオリンも英語も習わされた。
だが、どれも結局やめさせられた。

何故？

彼女は続けたいと言った。

たしかに自分が集中していなかったり、遊びに呆けていたというの
もあるが…

『恥ずかしいでしょ、そんなんじや』

それが親からかけられた言葉だった。

ああ、そう。

いつもそうだった、授業参観にきてくれた事なんてなかった。
来てくれたのは最初だけ…

しかも教師から当てられた時、緊張して答えられなかったのを見て途中で帰られた。

その後家に帰れば怒られ、二度と行かないとまで言われた。でも、姉の授業参観にだけは欠かさず行っていたみたい…

体育祭だつてそう、応援はいつもお姉ちゃん。

お弁当だつてお姉ちゃんの方がよっぽど豪華だった…

お姉ちゃんと喧嘩をすれば絶対私が怒られる。

どんなに言っても、何を言っても信じてもらえないッ！

でも、だけど・・・信じてた。

私の事も絶対愛してくれてるからって信じてた。

でも、私が熱をだしても迎えにすら来てくれなかった。

お姉ちゃんが熱を出した時は仕事中だつてのに抜けてきやがって…

怒られればそう、あの言葉をいつも言われてた。

『お前なんか生まなければよかった』

「・・・・・・・・」

もういい、私は親になんの期待もしない。

お姉ちゃんには嫌いじゃないけど好きにはなれない…

家族ってこんなモン？

別に頭が特別悪いってモンでも運動神経が極端に悪い訳じゃない。
なのになんでこんなに

責められて

怒られて

悲しい思いしなくちゃいけないんだよ!!

そんな反抗で髪を染めた。自分でもよく分からない反抗だった。
なんでそんな事したんだろう？

頬に走る痛みを感じて私は強く思う。

叩かれた。そして言われた。

『お前はもうこの家の人間じゃない！今すぐ出て行け！』

『あなたは恥しか晒さないの？

あなたのせいでお姉ちゃんの評価まで下がるのよ！

ああ、生まなければよかった！アンタなんて！』

気づくと裸足で家を飛び出していた。

もう嫌だ。

苦しい、

辛い、

悲しい、

悔しい、

怖い

まだそんなに暖かくない季節、雨に打たれ続けて体が震えてくる。

どこか…雨宿りしないと…

いつそのまま雨に打たれ続けてたら倒れて、病院に運ばれたら両親が駆けつけてくれるのかな？
そんな淡い期待を抱く。

いや、そんな訳ないか。
結局私は本当に要らない子なんだ、いつそのまま本当にいなくなつたほうが両親達も姉も喜ぶのかもしれない。

「それも…いいかも…」

適当に見つけたアパート、そこで雨宿りをすることにした。
これからどうしようか？

ああ、もう分からないし…泣きたくなる

「……ツツ、グググググググ、グググググググ！」

もっと、普通の家庭に生まれたかった。毎日が楽しいと思いたかった…

適当に座る。顔をうずめて、体育座り。

なさけない、でもそれ以上に悲しい…寂しい

あれからどれだけ泣いただろうか？

寒い、本当に寒い。

体もだるいし、頭もクラクラして気分が悪い。

もしかしたら熱がでたのかもしれない。
雨も激しさを増して横から体に当たってくる。

外も暗くなってきたし、ますます不安になる。

だが、もう彼女に帰れる場所はない。

帰ってもまた結局同じ事なのだ、自分のやった事を後悔しても何にもならない。

それは分かっているのだ。

ただ後悔が悲しさに変わってまた涙が込み上げる。

誰か・・・助けてよお

彼女は切にそう思う。

その時だった、彼女に降りかかる雨がピタリと止んだのは…

「え？」

不思議に思って顔を上げる。

「・・・！」

そこには自分と同じくらいの男の子が立っていた。

男の子は複雑な表情でこちらを見つめている。

「あの……」

「え？」

「すみません…そこ、オレの部屋なんですけど」

「あー！」

そこで初めて自分が背もたれにしていた壁が、扉だったことに気づく。

「ああ…えと、すみません。オレ何かしましたか？」

「あ…いや、ごめんなさい。なんでもないです…」

恥ずかしい、早くどこかへ行こう。

そう思つて手に力を込める。

だが、うまくいかない、フラフラして尻もちを着いてしまった。

「ハア・・・ハアっ！ご、ごめんなさい…ッ」

呼吸が荒くなる。体の節々に痛みを覚える。

ああ、ちくちよう、熱かよ…

「……………」

意識がもつろつとしてくる。

彼女は遂に耐え切れずその場に倒れた。

その様子を見て少年はイライラしたような目のため息をつく。

「くそっ、何なんだよ……」

なるべく他人とは関わりたいくなかったのに

「
……あ
」

彼女が目を覚ましたとき、見知らぬ天井がまず目に飛び込んできた。

「ここはどこだろう？」

病院…ではなさそうだ。

体はまだだるく、重い体を起こして周りを見てみる。暗い、何も見えないってのが正直な感想だった。

「？」

救急車の音が近づいてくる。

そのまま暫くして、救急隊員が目の前にやってきた。

理解した。

自分はこの少年の家で寝ていたのだ。

きつと少年が救急車を呼んだのだろう。彼女は少し抵抗するも、そのまま病院に連れて行かれるのだった。

「あ……」

ドアの前には少年が立っていた。
顔は…まあ普通。

髪は黒くていじっていないところを見るに、自分と違って真面目な
んだろう。

一人暮らしだろうか？

そんな事を思う内に少年が喋りだす。

「本当に……ごめんなさい。オレの事殴ってもらってもいいです。
とにかく病院から帰ったらオレ何でも言う事ききますんで……」

少年は目を反らしてそう言う。
最初は意味が分からなかったが、今自分が着ている服を見て理解す
る。

「あ！」

「……っ」

自分は制服を着て飛び出してきた。
でもその制服は今干されている。

そして自分が着ているのは見た事ない服、男物のソレはきつとこの
少年の物だろう。

と、言う事は

「ごめんなさい。濡れたままじゃ……と、思っ
ても、最低ですね。本当に殴ってくれてもいいです、

お金……も、あるだけなら……」

恥ずかしい。顔が赤くなる、でもしょうがないと言えはしょうがない

「いや…その、悪いの私だから…」

そう言って彼女は病院に向かうのだった。

「・・・めんどくせえ」

少年は小さく呟いた。

今、自分のやってる事は正しいのか？それとも…

「・・・あの、本当にすいませんでした」

「あ…えと…」

特に普通の熱だったので、薬を貰って彼女はまたこのアパートに戻ってきていた。

少年はもういいと言っているにも関わらずに謝り続けている

「もうホントにいいから！全然気にしてねえし！だはは！」

「…ごめんなさい。あの…だけど、どうしてあそこに？」

少年の問いに彼女は黙り込む。

言いたくない、それを瞬時に見抜いたのか少年は追及を止めて彼女に温かいミルクティーを差し出した。

「……あの」

「え？」

少年は立ち上がると、出かける用意をする。

「もしよかったら、この家つかってもらってもいいです。
オレ漫画喫茶に泊まるんで」

「えー！」

少年の言葉に彼女は目を丸くする。
たしかに……泊まる所はないが……

その時、少女の心になにかが芽生える。
もしかしたら……少しは気が紛れるのではないだろうか？とかそう言
う考えが大きく膨らんできて、もう制御できなかつた

「あの！さっき言った事・・・マジ？」

「え・・・」

彼女は少年の目を見つめる。

そこに何か迫力の様なモノを感じ、少年はすこし表情を引きつらせた

「あの・・・何でも言う事聞いてくれんの？」

「ッ・・・あの、できる範囲であれば」

「じゃあ・・・」

もうどうにでもなれ！ヤケになった彼女は迷わずそれを口にす

「ここに置いてくれない？」

「・・・は？」

まあ、それが当然のリアクションだろう。
しかし彼女は迷わずに全てを話した。

もうこの少年がどんな人でもいい、ありのままを受け止めようと彼女は決める

「駄目？」

「いや…駄目って言うか…」

この女、何言ってるんだ？意味分かってるのかよ…

「じゃ！はい！決まり！安心してよ、私もバイトでちゃんと家賃はらうからさ！」

「でも、普通に考えてまずいつつか…オレ達全然知り合いでもな
んでも」

「私の裸見たんでしょ？もうそんな仲じゃない」

「裸じゃない！変な言い方するな！」

「だははは！おっけおっけ！」

これで、確信した。この人は安全、彼女はその手を差し出す。

「私、白鳥美歩ってんだ」

「……」

ここで、断れば…オレの印象が悪くなる。

制服からしてこの女はオレと同じ学校、変な噂を流されるのは……

少年は複雑そうな顔をしながらも、その手を掴もうと手をのばす

「あ！あと、敬語はぜってーやめてよ？美歩って呼ぶこと」

「……」

少年はため息をついて苦笑する。

仕方ない、コレも乗りかかった船だと思うか

「分かったよ、美歩。オレは条戸真志、よろしく」

二人は曖昧な笑顔を浮かべて、その手を強く握りしめた。

それから本当に大変だった。
まず彼女の姉と祖母に連絡をとってなんとか説得した。
そして両親には祖母の家で暮らすと言う事にして、なんとか真志の
家に転がりこんだのだった。

もちろん普段あまりやらない選択や料理もしなければならなかった
し、
最初の方は二人の関係もあまり良いとはいえず、沈黙の時間が続い
たりもした。

だけど、しばらくすれば二人の間からぎこちなさが消えていた。
たしかに毎日は大変だったが…

「うう・・・疲れた」

「おう、また居残りかよ。ははっ！」

「あーあ、アンタとは頭のデキが違うんでね！

・・・あの、さ

「ん？」

「ただいま・・・」

誰も、返事なんてしてくれなかった。

「おう、おかえり」

だけど、今は違う。今は彼が答えてくれる！

ある日、髪が茶色いと怒られた。

一応髪の色についての指定は無い為だいたい教師は見ても見ぬふりをするが、

たまにそついうのにとても厳しいヤツがいる。

名前もしらない教師、しかし悪いのは自分だろう。

美歩は悔しくなる。

いや別に染めてもいい。だが何故かできなかつた。

親への反抗心で染めてみたが、もし戻ってしまったら本当に親から見離される様な気がしていた。

もはや彼女にとっては怒られる事すら会話として成り立つ分、若干の嬉しさがあったくらいである。

だから、美歩は戻せずにいた

「・・・はあ」

「・・・」

そんな彼女をちゃんと真志は見ていた。

翌日、彼女は目を疑った。

あのクソ真面目だった真志の髪の色が変わっていたのだ。

それは自分と同じ茶色

「アンタっ、何で・・・」

「あー…ほら、新聞部ってなめられたら終わりだからな。

外見で威嚇できる様にしとかねえとな」

嘘、そう彼なりの優しさの様なものなのだろう。

すごく偏屈な優しさだったが、美歩はとても嬉しかった。

真志と関わられた事で、友達もたくさん出来た。

友里達に司達とも最近話す。

毎日が楽しかった。暖かかった。幸せだった…

だが、同時に申し訳なくなる。

真志はきつと迷惑してるんじゃないか？

やっぱり出て行った方がいいんだろうか？

ずっと、助けてもらってばかりで自分はなにもしていない。

それじゃ真志に嫌われないだろうかと、さまざまな事を思っつよつになつた。

だがそんな事を布団の中で考えていた夜の事

「なあ…美歩、起きてるか？」

「・・・」

すこし眠くて返事が遅れてしまった。
しかしそれを寝ているととったのが、真志は一人話し出す。

「寝てるんだな…じゃあ、言っぞ」

「・・・？」

寝ているのに？
美歩は疑問に思いながらも、何を話すのかが気になって寝たふりを
つづけた

「オレの親、お前には海外に行ってるって言ったけど…アレ嘘な。逮捕されたんだよ、二人とも…」

「!」

「ハッキングソフト作ってそれ使ってハック失敗。ははっ、笑えるだろ？」

マジ、そんなモン作るくらいなら真面目に働けってな…」

「・・・」

「それからオレが何か悪い事でもすれば決まって周りのやつ等は同じ事いいやがる。」

犯罪者の息子なんてそんなモンかとか…

ああ、クソッ思い出すだけでイラつくわ」

だから、真面目に生きてきた。善意で生きてきた。

「でもよ、疲れるし 結構ストレスもたまったり？
ああ、別に全うに生きるのがいやって訳じゃないぜ？

でも、なんか重かったんだよな……」

真志はそこで少し口を止める。

「でも、お前といるとそれがなくなる。楽しくなるんだよ世界が…
正直最初はめんどくさいとか思っちゃまったけど…ごめん！」

「……!？」

「何か…だから…その、変な負い目感じてるみたいだけど…気にするなよ。」

オレだってお前に助けられてるんだ。

互いに助けあってる、それでいいだろ？」

「……」

「……って、面と向かって言えないのがオレの悪いところなんだよな」

あーあ、寝てる相手に何やってんだか…

そう言って真志は美歩の部屋を後にする。

「……ツツツ!」

真志は美歩がいたからその重圧に耐えられた。
美歩は真志がいたからその重圧に耐えられた…

偽善で救った者と偽善に救われた者。

結果、本当に救われた者と本当に救ったもの。

二人の不思議で確かな関係：絆。

『ガッ！・・・ゴフッ！アアアッ・・・！』

目の前の鏡がクモの巣のように網目を張っている、
その中にいる自分はとても苦しそうで、何より信じられないと言っ
目をしていた

『オマエツ！何で…！？』

滴るのは赤い血液。

握った拳から流れるそれを見えますます驚愕する私…

いや、私の姿を借りた…

「消えろ、化け物」

『なっ…！…！』

美歩は目の前の鏡を思い切り殴っていた。
思い出したのだ、真志は自分の事を荷物とは思っていない！

『グググッ！ガガッ！アアアッ！』

目の前の自分が、自分でなくなる。

やはりコイツは自分じゃなかった、今まで散々振り回されたが…もう迷わない！

『ちくしょうッッ！もう少してお前の体をのっとなる事ができたのに！』

私はッ！！鏡の中の幻じゃなくなるのにいいいいッ！

化け物は美歩を殺そうと手を伸ばす。

しかし化け物は弾かれる！舞い散るのは白き羽。

『ギヤアアアアアアア！』

化け物は目の前に現れた白鳥に成すすべなく敗北する。

「！」

「頑張ったな…美歩ちゃん」

「霧島さん！」

そこに立っていたのは霧島美穂だった。
ブランウィングは既に化け物を絶命させており、優雅に飛び去っていった。

「噂には聞いたことがあったよ、
心の隙間につけこんで体に乗っ取るうとするミラーモンスターが
いるって・・・」

そうだったのか、美歩は誰にも相談しなかった事を強く後悔する。
結局信頼して欲しいと思っていたながら、自分はこのざまか…

「それで・・・美歩ちゃん、真志君がね・・・」

「え・・・？」

そして美穂は・・・話す。真志の決意を　　ッ！

第73話 話37第(後書き)

あのまま美歩が鏡の中の自分に取り込まれてたら
リュウガ的なモノになってた…と言う事ですね

あと美歩の両親は本気で美歩を嫌っている訳ではないです
親の気持ちと言うのは中々子供には伝わらないモンですよ

と、青いガキが言ってみましたww

では次もよろしく!

第74話 話47第(前書き)

日曜は普通に更新できそうかな
ではどつど！

第74話 話47第

「ちょ！そんな！」

「ごめん…止められなかった」

美歩はその事を告げられる。

絶対に勝機など無い戦い、正直殺されにいったただけと言ってもいいだろう。

しかしそれでも真志は戦いに行った。

真司の為、

この世界の為

皆の為

・・・それともう一つ。自分の為に

「・・・」

「私はこれから真志くんを助け」

「美穂さん！」

美穂は思わず言葉を止めてしまう。

当然だ、いきなり土下座なんてされたら誰でもそつなるものだろう。

美歩のいきなりの行動に美穂は戸惑う。

「一生の・・・お願いがありますッ!！」

誰の為に戦うのか、生きるために戦うのか

…そんなの分からない

だけど、たったひとつだけ理由を作るとするなら

あなたの為に戦いたい

もっと、一緒にいたいから　　っ

その少し前に時はさかのぼる。

「行くのか・・・霧島」

美穂は頷き、デッキを取り出す。

正直、勝てる可能性はゼロに近い。

いや、ゼロと言ってもいいかもしれない。

だが、行かなければならない。

たとえ自分が死ぬことになったとしてもオーディンに会わなければいけないのだ。

「行ってくるよ・・・真司・・・」

恐怖の感情を隠して美穂は真司の頬に触れる。
もしかしたら…これが最期かもしれないのだから。

「あッ…」

美穂が真司の体に触れた事で、真司のポケットに入っていたデッキが滑り落ちてしまう。

美穂はソレを拾おうと手をのばす。

「えー！」

しかし それよりも早く、デッキを拾い上げた人物がいた。

「・・・オレ、真司さんに憧れてました」

そう言って、真志は龍騎のデッキを見詰める。

「もし、オレがライダーバトルに参加してたら絶対真司さんと同じ事考えてたと思う」

・・・でも、オレは絶対それを途中であきらめてた」

ぐっと、デッキを握りしめる。

そう、正しく・・・正義に生きたいとずっと思っていた、両親が捕まったあの日から。

ずっと善に生きる事を目標にしていた。

だって、そうする事で自分と自分の周りを守れるのだから

偽善でもいい、とにかく世界の好感度を上げる。
ずっとそう考えてきた。

そう、逆に言えばそれしか考えてなかった。

そうなのだ。真志の正義、行動は全て計算されたモノだった。
善を都合よく操り、それから得られるメリットの事しか考えていなかった。

もちろん正義感が全くないと言っ訳ではない。

だが、得られるメリットを考えて優先する善意があるのは確かだった

友里は自分に似ている、そう思った時期があった。

彼女もまた自分を正義で保持していたのだろう、

だが…彼女とは違う点が一つだけあった。

彼女は本当に正義の事を思っている。

それがうまくできない事にジレンマを感じていただけだ。

しかし自分はそうじゃない、正義をかざしているが他人の為になど
考えた事がなかった。

正義、善意は自分をよく見せるだけの道具だとずっと思ってきた。
そうすれば後ろ指をさされる事はないと……

それは拓真も同じだっただろう。

だが、自分は逃げていた、拓真の様に自分が傷つくのは嫌だった。

拓真は強い、自分が傷ついても他人の為に心から動ける事ができる男だ。

自分はどうか？

無理だ、上っ面だけ。

もう自分ですら正義と善意、その裏に秘めた黒い感情を理解できない。

『お前は結局自分の事しか考えてねえんだよ』

鏡のようにもう一人の自分が語りかける。

そうなのか？

そうなのかもしれない

ああ言えばこう返ってくる。
これを言ったら駄目だ。

そんな事ばかり考えてた。

断言できる、オレの正義は偽りだ。
打算的な利己主義を振りかざしてた。

でも、だからこそ・・・真司という存在が大きく見えた！

他人の為に命をはり、願いが叶うと言う条件を突きつけられてもその思いを曲げなかった！

本当の正義は真司の様な人間！

だから…真司は、彼の意味は死んではいけない！

「……ッ！」

真志は見る。鏡の奥、窓の向こうにドラグレッダーがその眼を光らせたのを！

それは合図。決意の証明！

「オレ、ずっと逃げてました。

正義気取りたいのに、大事な事になれば逃げてばっかで……」

美穂達は真志が何を言いたいのかまだ分からない。

それに構わず真志は続ける。

「オレは真司さんみたいになりたかった。

雑念にまみれた正義とかじゃなくて…本当の正義ってヤツを」

真志はゆっくりと備えてある鏡の前に向かう。

「お前、まさか・・・」

「オレ、自己犠牲なんてゴメンだと思ってました。

「だけど真司さんがオレを守ってくれて…少し考え変えてみたんです」

「ごめんなさい。真志は真司に向かってそう告げる。

あなたに助けられたこの命、賭けに使わせてもらいます

「美穂さん。あなたは生きなくちゃいけない、真司さんには貴女が必要なんだ。」

もし、真司さんが目覚めた時に、貴女がいなくちゃ……」

真志が何をやるうとしていいのか蓮は理解する。

それがどういふ事を意味するのか、蓮はおもわず声を荒げる。

俺が変わる！

と。しかし真志は首を振る。

「すみません。やっぱりオレはこういうやり方しかできないみたい
なんで」

「・・・真司くんにとって大事な人くらいいるだろう？」

佐野も意味が分かったのか、問いかけるようにつぶやく。

「オレのわがままです、皆には申し訳ないと思うけど…コレは譲れ
ない」

一度、もう何も考えないでありのままに　　っ我武者羅な正義を！

でも・・・

「負ける気もないけど・・・ッ！」

突き出す拳！

握られているのは深紅の竜が宿る魂！

「！」

それが合図だと、世界は認識する！

真志の腰に現れたのはVバックル。

それを見てようやく美穂達も真志が何をしようとしたのか理解する

「本気なの！？」

真志は何も答ええない、突き上げた手は真司のポーズとは逆のもの。
そして、その間から見える彼の眼に宿る赤き決意！

「・・・変身！」

オーデインは朝焼けに照らされた街をゆっくりと歩いていた。
もう、彼には時間がない。

本当は残り一人になったライダーを殺し、今まで蓄積された命を彼
女・・・

優衣に与えるつもりだったが、予想以上に城戸真司達が邪魔をして

くれた。

また、繰り返す事になるのか？

いや、そうはさせない。

もう今回で決着をつける。優衣を救う為なら他のなにを犠牲にしてもかまわない。

それこそ…世界であつたとしても…

『…』

オーデインはふいに右手を横に向けた。

その刹那、そこに紅蓮の火球が着弾する！

オーデインはそれをなんなく握り潰すと、その火球が飛んできた方向に目を向けた。

『・・・来たか』

「・・・・・・」

オーデインの先には龍騎が立っていた。

それが開戦の合図、龍騎は素早くカードを発動させる

『ソードスレント』

「うおおおおおツッ！」

龍騎はドラグセイバーを構えて一直線に走り出す！

『・・・ッ！』

「くっ！」

振り下ろしたソレを、オーデインは真正面で受け止める。
掴まれたセイバーに力を込めるがピクリとも動かない！

「くっ！おおお！」

『・・・？ お前は…誰だ？』

一瞬動きを止める龍騎、しかしすぐにその眼に光を宿し思い斬り叫ぶ！

「オレはッ！仮面ライダー龍騎だ！」

『！』

思いきり力を込めてオーデインの手からドラグセイバーを引き抜いた。

散る火花と共に龍騎はもう一度オーデインにドラグセイバーで斬り掛かる。

しかし、オーデインは瞬間移動でソレをかわすと、背後から龍騎に殴りかかる。

一発、二発。オーデインは龍騎を殴りつけていく！

このままではマズイと振り返りながら斬る龍騎。それをまた受け止めると、次は蹴りで龍騎の腕を弾く！

龍騎はドラグセイバーを衝撃で振り落さないよう力を込めるが、逆にそれがボディのガードを緩めてしまう。

オーディンはそのから空きになった体に黄金の羽をぶつけ、爆発させた！

「グッツ！！！」

よろける龍騎に瞬間移動で背後に回ると、ドラグセイバーを掴み上げそのまま龍騎ごと地面に叩きつける！

その際にドラグセイバーは叩き折り、自分は代わりにゴルトバイザーで龍騎を殴り付けた。

『無駄だ、お前では私には勝てない』

「あーあ…やっぱりそうなのかねえ…」

苦しそうに呻く龍騎を、どうでもいいと言った様にオーディンは見

下す。

『もういい、死ぬがいい』

「くっそ……」

オーデインはゴルトバイザーを龍騎に突き立てる。
そのまま力を込めれば終わりだろう。

オーデインは手に力を入れ

『シユートトズント』

ビュン！と白い弓矢がオーディンの手をかすめる。

『・・・』

「・・・！」

ボウガンを構えているのは、ファム！

『霧島美穂か・・・』

ファムは何も答えない。

そしてブランバイザーを構えると、オーディンに向かって走り出したのだった。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ！」

アホみたいなお願ひ。ただの我がままだろうそれは…

でも、美穂は自分にこのデッキを託してくれた。

私たちが負ければこの世界の運命は破滅に一気に近づくといつの…

「ウラアアアッ！」

『チッ、霧島美穂ではないな』

「ああッ！？美歩ちゃん、美歩ちゃんだよ！」

「美歩！？お、お前ッ！」

受け流すオーディンの足元を狙って蹴りを繰り出す。
しかしオーディンは一気に後ろへ飛ぶと、黄金の羽をファムに向けて発射した。

「うあああああ！」

羽の爆発に巻き込まれてファムは龍騎の元へふき飛んでいく。
龍騎はファムに駆け寄ると、その手を強く握り締めた！

「お前!どうして!?!」

「は…ハハッ!決まってるだろ?

私たちがいつも助け合ってきたじゃんか…だからさ

」

一人じゃ…ないから

」
」

龍騎は頷くと、ファムと一緒にオーディンと対峙する。

勝つ、いや…勝たなければならない。

世界の為とか、誰かの為とか…

全ての為に、オーディンに勝たなければならない。

「・・・」

だが、勝てない。

力の差がありすぎる。

無理、無理だろう。

無理なのだ。

勝てない、勝てるわけが無い・・・

『愚かなライダー達よ、協力？団結？戦いを止める？馬鹿が、そんな綺麗ごとを振りかざすな。』

人間は自らの欲望の為に戦う！それが本質！あるべき姿なのだ』

無能なライダーをオーデインは愚かと斬り捨てた。

『人は一人で戦うのが定め、貴様らのような無能が私に勝つ事など不可能！』

『アタックライド』 『ブラスト！』

『！』

無数の弾丸が変則的な起動を描いて、オーデインに向かっていく。
素早く瞬間移動で後ろへ下がるが逃がさない！

一発が着弾し、間髪をいれず次々とオーデインに弾丸が直撃していく！

『クッ！目障りな』

だが、どれもたいしたダメージではない。
しかしその一撃が龍騎達を奮い立たせる！

「俺達は欲望や願いの為に人を傷つける。その時、人間は一人だろ
う」

だがな

一歩一歩近づいてくるそのライダーにオーディンは強い不快感を覚える。

「だが、俺達は大切なモノの為にも戦う。

その時は俺たちは……弱くても、

愚かでも……一人じゃない！」

『何だと……っ？お前…何者だ？』

歩いてきたライダーは龍騎とファムの前に立ち、オーディンのオーラと対峙する。

その何者も恐れぬごとき姿は、龍騎とファムに強い勇気を与える！

「俺か？そうだな

俺は・・・」

そこで彼は言葉を止める。

「真志、美歩。よく聞け」

「！！！！」

「この戦い、俺達に勝機はないだろう。勝率は限りなくゼロに近い」

いや、もしかするとゼロなのかもしれないな、ライダーは笑う

「俺達はアイツに絶対勝てない」

『分かっているのなら早く私に殺さ』

「だがッ！「絶対」は「絶対」にありえないッッ！何故なら、俺は破壊者デイケイド！

今からこの世界の「絶対」を　　ッッ！！」

デイケイド達三人は一気にオーディンに向かって走り出す

「破壊するッッ！…っおおおおおッッ！」

『来い、ライダー達よ。その命、貰い受けるぞ！』

こうして、この世界の運命を決める戦いの幕が…切って落とされたのだった

第74話 話47第(後書き)

真志と美歩はそれぞれ自分のデッキからカードを移しました

まあ、スペシャル版を見るに龍騎のライダーは
デッキさえ受け取れば契約者じゃなくても変身できるようなので
そちらの設定を採用しました。

では次もよろしく！

第75話 話57第(前書き)

次の更新は月曜かな？
では、どうぞ！

第75話 話57第

「変身！」 『カメンライド・ファイズ！』

ディケイド達はオーディンを囲むようにして立つ。

しかし瞬間移動を使うオーディンを囲んで攻撃する事は不可能である、おまけに強力な羽という飛び道具がある以上変に作戦を練っても無意味なのだ。

だからこそディケイド達は最低限の作戦でオーディンに立ち向かう！

「っっっ！」

『・・・』

避けられる。ああ、分かっている！ディケイドは手持っていたカードを素早くライドさせた！

『アタックライド・オートバジン！』

『っっ』

空中からオートバジンが飛行してくる。

バジンはガトリングでオーデインの周りを射撃していった。無数の弾丸の雨は、オーデインがどこへ移動移動しようとも降りかかる攻撃のシャワー

『目障りな！』『シュートベント』

バジンを照らす様に空から光が漏れる。

バジンはその光から逃れようとするが、光はバジンを追うように出現していき、捉えていく

「ハアッ！」

龍騎とデイケイドは、バジンに気をとられているオーデインに攻撃をしかけた。

しかし、瞬時に後ろへ回られ、逆に激しいラッシュを仕掛けられてしまう！

「ウオオオオッ！」

そこを突く様にファムの連撃がオーディンへと襲い掛かる。
瞬間移動が間に合わなかったのか、オーディンに数発ファムの攻撃
がヒットする。

だが初めての手ごたえに一瞬気を緩めてしまった

『ムンっ！』

「くっ！」

オーディンはその一瞬の隙にファムのブランバイザーを掴み、その
まま投げ飛ばす。

さらに空中に放り出されたファムに追撃の羽を発射した！

しかし、羽はバジンが発射したガトリングにかき消される。

と同時にオーディンが発動したシュートベントがバジンに命
中し、バジンはマシンディケイダーへと戻ってしまった。

『ソードブレント』

『ソードブレント』

龍騎とファムはそれぞれの剣を構えオーディンに向かう。息もつかせぬ連続攻撃を仕掛けなければオーディンに勝つ事など不可能だろう

『ソードブレント』

オーディンもまた2つの剣を出現させ、二人と対峙する。

「ッー」

『遅いなッ』

またも一瞬で後ろへ回られた為、二人の反応が遅れる。そこに振り下ろされるゴルトセイバー

「美歩！」

「きゃ！」

瞬間的に龍騎はファムを突き飛ばし、オーデインの攻撃を受け止める。度重なる瞬間移動、そのうちになんとなくながオーデインがどこに現れるかの予想をつけていたのだ。その読みが当たったという事だろつ。

「ぐうつづつツツ！あああああああ！！」

しかし読みが当たったからといって、力の差がありすぎでは意味のないもの。

二本のゴルトセイバーを受けきれぬわけも無く、龍騎はドラグセイバーごと切り裂かれた。

装甲も大きく削られ、あと一撃でも受ければ完全に削がれてしまうだろう。

「っせるかあああああ！」

『フォームライド』『アクセル！』

デイケイドは瞬時に『Start Up』を発動させ、猛スピードでオーディンの懐へ潜り込む！
流石のオーディンもコレには対処できない、ほぼ唯一とっついていい攻撃チャンス。

本当はとって置きたかった気もするが、迷っている暇はない！

『ファイナルアタックライド』『ファファファファイズ！』

「ウラアアアアアアアアアアアアアアア！」

超高速連撃、アクセルグランインパクトを叩き込む！

一発、また一発とオーデインの厚い装甲に拳を叩き込んでいくデイケイド！

龍騎と同じ場所に想いと力を込めて殴りつけていく！

『グオオオオオオオオオオッ！』

「ハアアアアア！」

ファムもまたラッシュに参加する。

二人の連撃はオーデインに初めてまともなダメージを与えただろう。

「くっ！」

しかしデイケイドにタイムリミットが訪れる。

「まだだああああああ！」 『ファイナルアタックライド』

デイケイドは変身を解除して、元の姿に戻る。
そして発動させるのは自らの必殺技！

五枚のホログラムカードが、オーディンを押し出していく

「ヤアアアアアアアアアアアっっ！」 『デイディディディケイド』

ライドブツカーを剣にしてカードを通過していく。
巨大化する剣と、カードに怯むオーディン。

決まる！ いけると確信する！

・・・が、

『スチールベント』

「なっ！」

デイケイドの手からライドブッカーが消滅する。

いや、違う！

消滅したのではなく奪われたのだ。オーディンに！

『フンッ！』

「ガアアアアアッ！」

奪われたライドブッカーで逆にカウンターを決められてしまう。
あまりの衝撃に吹き飛ばすデイケイド。

その際にオーディンは黄金の旋風でファムを吹き飛ばし、自らも一

枚のカードを投入した。

『アドベント』

上空からゴルトフェニックスが飛翔し、現れる。
そのままフェニックスはよろよろと立ち上がるつとした龍騎に体当たりを決め、さらに旋廻しもう一度体当たりを決めた

装甲がまだ直っていない龍騎は、その攻撃に耐えられる自信がなかった。

みしみしと嫌な音をたてて、鎧が剥がれ落ちる

「くっそー！」 『アクセルベント』

龍騎は自らのスピードを上げ、攻撃を回避する。
そしてそのままオーディンに向う。

アクセルの加速とほぼ同等のスピード、これならばまたオーディンにダメージを与えられるのではないか？

淡い期待が過ぎる。

それに乗じてファムもまた立ち上がりオーディンに切りかかる！

『同じ攻撃が私に通じるとでも？』

「何ッ！」

「くっ！」

オーディンは双方の手で龍騎とファムの攻撃を受け止めた。いくら加速していようと、手を捕まれてしまっただけでは身動きが取れない。そのまま何もできずに時間切れがやって来る。

「くそっ！」

「はっ！前がから空きだぜ！変身！」 『カメンライド』 『キバ』

ディケイドはキバにフォームチェンジすると、オーディンに蹴りを仕掛ける！

『無駄だ』

「何っ！ グアッツ！」

上空からゴルトフェニックスが飛翔し、ディケイドを弾き飛ばす。まだアドベントは終了していなかったのだ。

ゴルトフェニックスはそのままディケイドに二度三度と突進を仕掛け、また上空へ舞い上がっていった

「ちっ！」

ファムは剣から手を離し、とび蹴りを仕掛ける。
しかしオーディンは素早く龍騎を盾にし、それを防いだ。

「いっつー！」

「あーごめん、真志！」

オーディンはそのまま瞬間移動でファムの隣に移動する。
黄金の羽を撒き散らせ、二人を吹き飛ばすとファムにゴルトバイザ
ーで追撃を行った。

「くっ！アツッ！」

激しい攻撃にファムはなす術もない。
バイザーも弾かれ、暫く攻撃を受け続けてしまった。

もちろんそれを黙ってみているわけがない。龍騎はガードベントを構えファムの前に立つ。

『その粗末な盾で私の攻撃が防げるとでも？』

「へっ、やってみるよ!」

オーデインはその言葉には従わず、龍騎の足を払う。
足は盾では防げない、龍騎はそのまま地面に倒れてしまう。

オーデインは倒れる龍騎に何度も蹴りをいれ、サッカーボールの様に転がしていく!

「グッ!ガッ!」

「真志!」 『フォームライド・ガルル』

狼の雄たけびと共にディケイドの姿が変わる。
一気にオーディンの所まで跳躍すると、獣のように激しい斬撃でオ
ーディンと龍騎の距離を離れた。

『そこだッ!』

「グッ!」

その激しい攻撃から一瞬の間を見出しゴルトバイザーで突きを放つ。
ふらつくディケイドに蹴りと拳を同時に打ち込んでいく。

「ガッ…フッ!」

『ぶん…』

よるけるディケイドの後ろに瞬間移動し、さらに蹴りとバイザーで殴りつけるオーディン。
傍から見れば遊んでいる様にも見えるその一方的な攻撃。
途中龍騎の攻撃が入るが、それを受け流し弾き飛ばすと、またディケイドを殴り続けた。

「ウツ！ウオオオオオオオオ！」

『ファイナルアタックライド』 『キキキキバ！』

このままでは危険と判断したのか、ディケイドは必殺技を発動させる。

夜に変わる景色、そして上空に現れるのは巨大な月！

「ヤアアアアアアアアッ！」

ディケイドは上空に飛翔し、月と重なり合う！

そのままガルルセイバーを振り下ろしオーディンを切り裂く！

・・・筈だが

『ガードベント』

「なっ！」

ゴルトシールドにガルルセイバーは弾かれ、そのままディケイドは空に放り出されてしまう。

そこへ襲い掛かる黄金の羽、ディケイドは爆発に飲まれ地面へ叩き付けられた。

『その程度か？』

オーデインはディケイドの首を掴み強引に持ち上げる。
そしてそのままゼロ距離で黄金の羽を発射し、ディケイドを爆発の嵐に巻き込む！

「グウウアアアアッ……」

『アトズント』

「キュイイイイイ!!」

ブランウィングがオーディンを弾き、ディケイドを救出する。

「グオオオオオオオオツツ!」

『・・・』

さらに龍騎の発動させたアドベントでドラグレッダーもオーディンに攻撃を仕掛けた。

流石に大型モンスター二体が相手になればオーディンもそちらに気をとられる。

しかしオーディンの実力ならばドラグレッダーを殺す事などたやすいだろう。

龍騎は早めに発動を終了させ、オーディンとの距離をあける

『ブラストベント』

入れ替わりでゴルトフェニックスが現れ、その羽を羽ばたかせる。すると通常の倍ほどもある羽が龍騎達に襲い掛かった！

「くっそおおおおおー！」

『ファイナルアタックライド』 『キキキキバ!』

ドッガハンマーに変わっていたディケイドが龍騎達の前に出る。
闇の雷で錬成させた拳を振り回し、羽を散らしていく

『・・・』

オーデインはファムの隣に移動すると、ゴルトバイザーを突き出した。
それに突き刺さるファムだが、一瞬で白い羽に変わる

『何ッ!?!』

「やあああッ!」

ファムのガードベントの効果でオーデインの狙いがずれていたのだ。その際にファムはオーデインに渾身の突きを当てる。

だが、これも決定打にはならない。オーデインは直ぐにファムを蹴り飛ばすと、瞬間移動で距離をとった。

『ククク…しかし』

オーデインは辺りを見回す。苦しそうに立ち上がる三人。

『諦めた方がいいのではないか？』

「…せえ」『クリアーベント』

ファムの姿が消える。

しかし、オーデインには関係がない、羽を散らせば勝手にダメージを受けるだろうと黄金の旋風を巻き起こす。

『フォームライド』 『ストーム!』

しかしアギトに変わったデイケイドが起こす小規模の竜巻が、黄金の羽をまとめて収束させる。

これでファムを見つける事は出来ない!

『足音』

「……は?」

『足音は消せなかったようだな。ククク!』

オーデインはゴルトバイザーを構えその場所に振りかざす。
直後小さい悲鳴が聞こえ、ファムの体がさらけ出された。

「化けモンかよ!」

龍騎とディケイド、ファムの三人はオーデインに攻撃を仕掛けるが
誰一人まともに命中させる事すらできず、受け流され、受け止めら
れ、カウンターを決められてしまった。

まさに圧倒的な力の差。

フラフラになりながらも戦う彼らと、余裕の笑みすらもこぼれるオ
ーデイン。

まさに最強

第75話 話57第(後書き)

アクセルベントのスピードはアクセルよりちよい遅いとお考えください

しかし、何かライダージェネレーション欲しくなってきたわ
まあいいです

では、次もよろしく！

第76話 話67第(前書き)

次の更新は多分明日：だと思っんですが
もしかしたら不定期になるかも

すいません！

ではござい！

第76話 話67第

『リミッツベント』

「うおおおおおおおおおおおお！！！」

龍騎の体が赤く発光する、十秒だけ身体能力が跳ね上がるリミッツ！
龍騎はそのままオーディンに殴りかかる。

『・・・クッ』

拳を受け止めたオーディンから苦痛の音が漏れる。
もう一発殴ろうと、龍騎は拳を振り上げた！

『フンッ！』

オーディンは黄金の羽を発生させるが、龍騎は怯まない！
龍騎の意地だ、ここで倒れる前に終わらせる！

『あまり…』

オーデインは龍騎の攻撃を防御しながら、そう呟く

『調子に乗るなよ』

「ツツ！！　がはぁあっ！」

瞬間移動は攻撃を受けていたら発動できない。
オーデインはその両手で、龍騎の拳を受け止めると渾身の蹴りで龍騎を空中へ押し上げた

「リミットでも…駄目なのかっ…」

強い…っ！

強すぎる！

今まで戦った誰よりも！

なによりも！

だが、勝機が無いわけではない。

一つだけ、それは賭けの様なモノだが…龍騎には考えがあった。

昔、バイトでクソ重たい荷物を持たされた事がある。

次の日には何とも無かったのだが、さらにその次の日、腰に猛烈な痛みを感じて歩く事すら厳しかった。

そう、遅れて痛みがやってきたのだ。

ダメージは蓄積されていた、自分じゃ気がつかなかった。

なんとも無いと思っていたのに！

「・・・」

『ハッ！！』

よろける龍騎をオーディンは殴りつけ、蹴り飛ばす

そして笑った

『ライダーは欲望に溺れ、そして死ぬ。それだけでいい』

「何……ッ！」

『ストライクベント』

龍騎はドラグクローを構えてフラフラと前に出る

『巨大な欲望のその先には大きな力がある。それに人は飲まれる』

オーデインは龍騎に止めをさそうと、一歩前に出る

『だが、お前らは無力だ。そのまま惨めに死を迎えるがいい』

「っ！違う！」

『ククク！』

オーデインが消える。

奇襲、もう龍騎達にオーデインの攻撃を受けきれぬ体力と精神力は残っていないも同然だった。

この奇襲を許せば……

負ける　　ッ！

「・・・」

龍騎は大きく深呼吸をする。

どこだ？どこから来る？

これは賭け、もう自分の勘を信じる他ない。

龍騎はドラグクローに全ての力を込める。

真司から受け継いだこの力、生きる願いを、彼の想い……

「　　ツツアアアアアアアアアアアア！」

それらの想いを乗せて、龍騎はその方向を思い切り殴った！

『……何いいッー！』

「どっせら、当たり…みたいだなッ…!!」

龍騎の一撃をオーデインの装甲が受け止めていた。

真正面と真ん中、龍騎の読みは的中していたのだ

『しかし…』

悲しいかな

『力が足りん』

ゴルトバイザーが龍騎の腹部にめり込む。

「真志！」「」

デイケイドとファムが苦しそうに龍騎のところへ向う。しかし間に合わない！

オーデインはもう龍騎の目の前に移動していた

「ぐううっッ！」

膝をつく、龍騎。

オーデインはまだ余裕の笑みを浮かべている。

『終わりだ……』

これで終了。オーデインはゴルトバイザーを天高く振り上げた。
これを振り下ろせば龍騎の装甲を破壊できるだろう。

オーデインはそれを思い切り

『・・・』

「・・・いせ」

振り

『・・・ッ！—！』

「…ッ！ 終わりじゃない…賭けは」

下ろす事が出来なかった。

ゴルトバイザーは力を失ったオーデインの手から滑り落ち、音をたてて地面に落ちた。

オーデインは自分の胸を苦しそうに押さえながら、訳が分からないと言わんばかりに龍騎と自分の胸を交互に見やる。

「賭けはオレの勝ちだ…ッ！」

『オツ…お前！何を…！何をした！』

龍騎は呼吸を荒げ、苦しそうに立ち上がった。そしてオーデインを指差し、大声をあげる！

「オレがッ…何かをしたんじゃない!!」

『何ッ!?!』

ビシッ！

　　つと何かにヒビが入る音が聞こえた。
　　そう、オーディンの装甲だ！

黄金の鎧に一筋のヒビが入っていた

『馬鹿な！お前の一撃にそんな威力が』

いや、違う！いくらなんでもそれはない！
サバイブ体である筈のオーディンが、こんな何も強化されていない
雑魚に装甲を碎かれる訳がない！

それこそ自らと同じであるサバイブ体の

サバイブ体…？

『お前を一発殴りたかった！』

『まさかッッ！！あの時の！！』

あの時の龍騎 ツ！！

城戸真司の一撃なのか！！

「
「
「！！
「
「

あの時の、龍騎の一撃なのかつ!?

いせ…違ひ。

「それだけじゃねえ!」

『何いいいつつ!』

「ナイト!蓮さんの一撃!」

『グッツ!』

ビシッ!つと、また一筋、黄金の鎧に亀裂が入る!

あの時、ナイトサバイブの必殺技をまともに受けていた事を思い出
す。
まさか…回復が追いつかないほどのダメージを受けていたの言うの
か!?

「インペラー！佐野さんの一撃！」

『ガアアツ!!』

また一筋！亀裂！あの弱々しい一撃ですらッ!?

「一つつつのダメージは小さいさ。けどなッ！
お前の体に確かに蓄積されてたんだよ!!」

『先程の一撃でッ！私の鎧が限界を迎えたとも言っつかッ!』

クモの巣のように亀裂が広がっていく！

「ファム！美穂さんの一撃ツッ！」

『馬鹿なツ！そんな事がっ！』

あの突き、避ける意味すらないと慢心していたのかツッ！？

そして ツッ

「オレ達の一撃だ…ツッ！！」

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアア！！』

ドラグクローから炎の弾丸が放たれる！

それをスイッチに、無数のヒビが入ったその鎧は遂にその限界を向かえ粉々に碎け散る！

あまりの衝撃に思わず倒れるオーデイン！

『グウウウウ！そんな事がああああ！』

直ぐに体制を立て直そうと、よろける体を直ぐに起こす。
だが、その眼に飛びこんできたものは　　！

『ファイナル　』

一方、病院では…

「……ッ」

真司の手を握りながら美穂はため息をついた。
後悔しているのか？蓮のその言葉に美穂は小さく頷く。

やはり、美歩を行かせた事は間違いなんだろうか？

自分がファムとして、いや願いを叶える為戦うライダーとしてオー
デインに挑まず、

あろう事が自分の後輩になるかもしれない少女に任せるなんて…

佐野が空気を読んでフォローの言葉を言ってくれるが、どうしても
それが引っ掛かってしまう。

正直、自分としても真司と離れたくなかった。死にたくなかった…

「お願い…ッ！」

だから彼女は普段絶対にしないであろう、神に祈りをささげると言
う行動をとる。

神様、お願いです。どうか、彼女達を死なせないで。生きて帰って
きて…と

「お願いだから死なないでよ…」

「・・・」

美穂の目から涙がこぼれる。
しかし、同時に感じたのは手を強く握られたと言っ事だった。

「え…？」

美穂は驚きに満ちた目で自分の手を見る。強く握られている手と手…

「…ッ！ 大…丈夫！」

「しんじ……?」

「真司!」

「センパイ!」

三人の驚く視線を受けながらも、城戸真司は目を覚ましその体を起こす

「大丈夫…ッ!真志君たちなら…きっと!」

できるからッ！！

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」 『ファイナルベント』

龍の咆哮に龍騎の咆哮が重なり合う。

『グオオオオオツ!!』

鎧が砕かれた事で少し力が落ちているのか、オーデインの手に力が入る。

全力を込めなければ押し負ける!!

「ウワアアアアアアアアアアアア!」

「変身!」

『カメンライド・クウガ!』 『フォームライド・タイタン!』

『ファイナルアタックライド・ククククウガ!』

ファムのバイザーとディケイドの剣がオーデインに迫る!

もはや回避は不可能!

だが、オーデインは考える。

いくら装甲が剥がれたとはいえ向こうとてボロボロの状態、まだコチラの方が有利ではないか?

耐えられる！

そして耐えた後全力で潰せばいい！

「「ヤアアアアアアアアアアア！」」

二人の突きがオーディンに…

『つつ！しまった！』

いや、違う！

二人はオーディンを狙っていない！

「へっ！今頃気づいても遅い！」

「例えどんなに装甲を厚くしても…」

「ここだけは私たちと同じ！」

『馬鹿な！馬鹿なあああ！』

二人が狙ったのはオーデインのカードデッキだった！
それに気づくが、今両手を離しては…！

「「「終わりだあああああッ！」「」」

『.』ツ』

第76話 話67第(後書き)

今度友達と映画行こうと思います。

案外高校生とかもいるんですね、レッツゴーの時とか…

ちょっと目があったら

なるほど、コイツもディープなファンなんだな

なんて事思ったりしてますww

では次もよろしく！

第77話 話77第(前書き)

明日はお休みするかもしれません。お許しを！

ではございど！

第77話 話77第

静寂が辺りを包む。

そこにいるのは地面に膝をついている龍騎達と直立しているオーデインだった。

オーデインの足元にはバラバラに碎け散ったカードデッキと、カードが散乱している。

既にオーデインの体は粒子化が始まっており、それは彼が敗北したという何よりの証拠だった

最強のライダーであるオーデインに彼らは勝利したのだ！

「勝った…のか」

「ああ…」

「や…やった！」

喜びにくれる三人。

…だが

『フ…フフフ』

「！」

『フハハハハハ！！』

オーデインは笑い、地面に散らばった一枚のカードを拾い上げた。それを見た瞬間、ディケイドの雰囲気が一変する。

いや！違つと、自分達はまだ勝利していない！！

そんなディケイドには目もくれず

オーデインは素早くその拾い上げたカードを発動した

『タイムイベント』

「ツツ！！まずい！美穂！

コンファインイベントを使え！」

「えーあ、うん！」

『コンファインイベント』

オーディンのセットしたカードが白い羽に変わる。

しかし

『リコールイベント』

『タイムベント』

「！」

オーデインが発動したカードの効果で再びそのカードが発動される

『なかなか焦ったぞ、ライダー達よ』

オーデインの粒子化がピタリと止んだ。

それだけではない、デッキが破壊されているにも関わらず変身さえ解かれ無いオーデイン。

そもそもデッキが破壊された時点で契約は破棄されるのではないのか！？

「なっ！何で！」

『私は神崎士郎によって生み出された特別な存在だ。契約の破棄はない』

オーデインはタイムベントで自分の粒子化を遅らせたのだ。時を戻す必要はない。なぜなら…そう

『貴様らを殺せば…全てが終わる』

オーデインは最後のカードをバイザーにセットした

『ファイナルベント』

「くっ！」

身構える三人の前にゴルトフェニックスが出現する
神々しい光を発しながら、ゆっくりとオーデインの頭上に下降していくゴルトフェニックス。

もしあれが重なれば…

負ける…だろうッ

『私の…勝ちだな』

「くっそお……!!」

「あき…らめてたまるかああ!!」

『アタックライド・イリユージョン』

『ファイナルアタックライド』 『ディディディディケイド!』

ディケイドの両隣に分身が現れ、三人のディケイドはそれぞれライドブツカーガンをオーディンに向ける!

光がはれる。倒れるファム、龍騎、ディケイド。

そして……

『……』

オーデインは立っていた。

しかも　　ほぼ無傷！

『……』

何かおかしい、オーデインは思う。
衝撃がなかったのだ。

あれだけ意気込んでいたファムたちの攻撃を全く感じなかった。

装甲が削られているのに全くダメージを受けなかったのはおかしい話だ…

「……う」

『？』

ファムが何かを呟いた。

オーディンは聞き取れなかったため、耳をすませる

「私らの勝ちだよ、クソ野郎」

『！』

その声、返すく。

そして、見る！

自分の体から黄金が消えいくのを！

『まさかつー！』

振り返るオーディンの目に飛び込んできたモノ、それは…
ファムのブランバイザーが頭部に突き刺さっている。契約モンスター、ゴルトフェニックスの姿だった！

『貴様ら！』

そう、ファムたちはオーディンを狙ってなどいなかった。
最初から契約モンスターであるゴルトフェニックスのみを狙ってい

ただ!

「賭けだったけど…うまくいったみたいだな」

ディケイドは立ち上がる。

全力をかけた一撃はゴルトフェニックスを粉碎したのだ!

そして訪れるのはオーディンのブランク化。

いくら絶大な力があるうともそれは契約モンスターありきでの事。
契約モンスターを失ったオーディンの姿は粗末なモノへと変わって
いく

『おのれええッ!』

「美歩!」

「はいよ」『フリーズベント』

ファムはゴルトフェニックスからバイザーを引き抜き、一枚のカードを発動させる。

それはモンスターの時を止めるフリーズベントのカード。

オーデインの契約モンスターは不死鳥。

つまり一度殺しても灰になり、直ぐに生まれ変わる。

そうすれば再び契約を結ばれてしまうだろう。だからこそここで時を止めて置く

『馬鹿な！そんな！私が…』

負ける！？

「真志い！決めるぞ！」『ファイナルフォームライド』

「ああ『リユリユリユウキ!』」

龍騎の姿がドラグレッダーに似た龍へ姿を変える。

「名前は……どうすっかな…」

「ドラゴンしんちゃんとかは?」

「龍騎レッダーでいいか」

「きけよ!」

ファムを軽くスルーして龍騎レッダーとディケイドは、ドラゴンライダーキックと同じ構えをとる。

『ファイナルアタックライト』

重なる音声、飛び上がる二人

『馬鹿な！馬鹿なあああ！』

blank体になったオーディンにもはや回避の術はない。

『リユリユリユウキ！』『ディディディケイド！』

『ヤアアアアアアアアアアッ！』

『グアアアアアアアア！』

炎を纏ったディメンションキックがオーディンに炸裂する！

『ぬ…い…』

「…っ」

彼が戦う理由の言葉を呟き、オーディンは爆発するのだった…

彼ら激闘を繰り広げている頃、アギトはある場所に来ていた。

「・・・」

夏美が駆け回って情報を集めた結果、興味深い情報を見つけたのだ。それは榊原耕一という男が残したとされるメモ書きだった。

そこには鏡の心臓と書かれた一文と、この街の地図に赤い丸が打つてあったモノ。

鏡の心臓：

「間違いないね…」

アギトはその赤い丸がうつてあつた場所にやって来る。
彼が仮面ライダーとして覚醒したからなのかは分からないが、明らかに異質な場所の様に感じたのだ。

オーラが違うといったらいいか？

うまく言葉には表せなかったが、たしかに何か不思議な感じがする場所だった

「・・・」

おそらくこの先に…あるのだろう、心臓であり破壊すべきコアミラーが

「よし！」

アギトはトワイライトフォームに変わる。

このフォームでしかミラーワールドに入る事はできないからだ。

アギトは深呼吸をしてミラーワールドに突入した。

皆が今頑張っている！自分も彼らの力になれるようにせねば…
できれば一緒に戦いたかったが、トワイライトのステータスは低い。
これでは足手まといになってしまう可能性が高かった。

だから翼はいざと言う時に強制的に戦いを終わらせる手段として「
アミラー」の破壊を引き受けたのだった。

「・・・」

「一見は普通の地下駐車場と言った場所だ。」

しかし、異質な空気はますます濃くなるばかり。

さすがのアギトも緊張感を隠しきれない、少し足が震える。
自分の足音だけが響くその空間。

しかし、アギトは見つける、それを！

「！」

巨大な鏡、まさにそれは心臓と言つに相応しいモノだろう。
圧倒的なオーラにアギトは思わず足を止める。

だが、それと同時に背中に強い痛みと衝撃を感じた！

「グウウッ！」

『ギギッ！ギギギ！』

『ギギギギギッ！ギギギ！』

アギトの背後に現れていたのは二体のクモ型モンスター、ソロスパ
イダーだった。

そしてもう一体アギトに攻撃を仕掛けてきたのはジヨロウグモ型モンスターのレスパイダー！

アギトはレスパイダーの鋭いカギ爪を紙一重で交わすと、転がるように三体との距離を空ける。

まずい、アギトのトワイライトフォームは戦闘向きではないのだ。司から聞いていた為、ガーディアンがいる事は知っていたが…

なんとか切り抜けなければッ…

「くそっ！」

コアミラーさえ破壊すれば良いのだが、なによりこの三体の強さは異常だった。

トワイライトアローは全て弾かれ、軽快な動きで辺りを跳躍し攻撃を仕掛けてくる。

一つの攻撃が終わればもう一体の攻撃が襲い掛かかり。

そんな激しい攻撃の渦にアギトは捕らえられていた。

なんとか回避しつつけるものの、いつまでも続く訳がない。

「ぐはっ！」

アギトの体から火花が散る！
よろけるアギトにもう二体の激しい攻撃が襲い掛かった！

「グッ！」

なんとかソレを回避するアギト。
しかしレスパイダーは自分の爪を地面に突き刺し、まるでコマの様に回転蹴りをアギトに浴びせる

「…ッ」

トリッキーな動きにアギトは翻弄され、同時に押されていく。
さすがに三体は無謀すぎるといつてもいい。

一体に攻撃をしかけても、もう一体がすぐに助けにはいつてくる。
いや、二体ならまだいけたかも知れない…

だが、三対のスパイダーはアギトに爪を突きたてて何度も引き裂こうと襲ってくるのだ

「くそ！」

『ギギギッ！』

『ギギギギ！ギギギギ！』

ソロスパイダーはアギトに掴みかかると、アギトの体をレスパイダーの方へ向ける。
レスパイダーはそれに感謝するかの様な仕草を見せると、なんどもその爪でアギトの鎧を切り裂いていった！

「ぐあああああああ！」

苦痛にうめくアギトに気をくれず、スパイダーは狂ったように切り続ける。
だが、少しだけ時間がたつと、あきたと言わんばかり、玩具のようにアギトを蹴飛ばす！

「ぐう！ガッ！」

直ぐに体勢を立て直すと、アギトは少しだけその場に立ち止まる

(考える！今のままじゃ勝てない…)

「いや…ッ！待てよ、これなら…！…！」

アギトは何かを思いつく、それが決まれば…ッ！…！

彼は走り出すのだった。

第77話 話77第(後書き)

とり合えずオーディン戦は終了です

どうなんでしょうが、本編でゴルトフェニックスについてはあまり触れられなかったけど

やっぱ不死鳥なんですよ。

でも一度死んでからすぐに蘇る方のパターンを採用しました

では次もよろしく！

第78話 話87第(前書き)

明日は更新できなさそうなんで
今日やっておきます

今日ちょっと、友人の家に泊まりに行くんで、もし感想とか書いて
くださる方がいても返事が遅れてしまいます。それはすいません！
ではどっぞぞ！

第78話 話87第

アギトは何かを決めたかのように頷くと、もう一度スパイダー達に向かつて走り出す。

だが、彼の右ストレートもレスパイダーに受け流され、カウンターとして体を切りつけられた。

だが、アギトは諦めない。

蹴りでレスパイダーとの距離を離すと、横から来たソロスパイダー達に応戦した。

数発殴りつけ、数度切られる。

その応戦が暫く続いた時、レスパイダーの強力な一撃がアギトに決まった！

「うわあああああ！」

アギトはそのまま吹き飛び、車のサイドミラーを経由して現実世界に弾き出される！

『ギギギッ！』

『ギギギギギ！』

『ギイイイ！！』

二体のソロスパイダーとレスパイダーはアギトに止めを刺すべく、自分達もミラーワールドから現実世界へと移動する。

だが、それが…間違だった

「ハアアアアアっっ！」

『！』

アギトの色が変わる！

グランドフォーム！

そう、ここはミラーワールドではない。
つまりトワイライトで戦わなくてもいいのだ！

『ギギギッ！』

『ギギッ！ギギギギ！』

その意味が分かっていないソロスパイダー達は、爪を構えて走り出す。

彼らはまだアギトの力がトワイライトの時と同じと思っているのだ。

だが違う！

「ハッ！」

『ギギツツ！？』

突進してきたソロスパイダーを受け流すと、裏拳と回し蹴りでカウンターを決める！

何かの間違いではないか？

そうスパイダー達は思い、もう一度同じように切りかかった。

だが、またもアギトは攻撃をかわす！

それだけでなくスパイダーの爪が振り下ろされる前にストレートで怯ませ、上段蹴りでスパイダーを大きく吹き飛ばした！

『ギイイイイイ！』

レスパイダーもその危険性を感知し、加勢する。
しかし、レスパイダーの爪はアギトに触れる事すらなかった。

『！！』

「フツ！たあああッ！」

『ギイイイ！』

アギトの片腕の装甲が青く変わり、その手にハルバードが握られていた。

アギトを中心に暴風が巻き起こりレスパイダーの攻撃を遮断する！

吹き飛ばレスパイダー。

アギトはさらに自らのベルトに手をかざした！

「はあああッ！」

そこから現れたのは紅き刀、フレイムセイバー！

セイバーは鞘に収まっていたが、鞘が光輝きその形状を変化させる。

鞘はクロスホーンのような形に変わると、セイバーに装填された。

本来のフレイムセイバーの形に変わったのだ。

それに反応してアギトのもう片方の腕の装甲が赤く染まった。

一方の手にはストームハルバード、もう一方の手にはフレイムセイバー！

クロスホーンが展開し、アギトの周りに光の衝撃波が発生する。

スパイダー達はそれに触れると、さらに大きく吹き飛ばす！

「悪いけど…負けられないんだ！」

アギト、トリニティフォーム！

そのオーラにスパイダー達は怯むが、それを振り切るかのように走り出した！

「はぁぁッッ！！」

『ギッ！』

『ギギッ！』

しかしアギトの圧倒的な連撃にねじ伏せられる！
うなる様にハルバードとセイバーがスパイダー達を切り裂いていく！

風と炎の演舞は、美しくも強大だった

「・・・！」

アギトの足元に紋章が現れ、アギトは構えをとる。
スパイダー達が何かくると思った時にはもう手遅れで
！

「タアアアアアアッ！」

アギトはハルバードとセイバーを…投げた！

二本の武器は、風を切り裂いてそれぞれソロスパイダーの眉間に突き刺さるッ！

『ギギギギイイイイイイイイ！』

『グギギイイイイギイギイ！』

二体のスパイダーの頭上に天使の輪を連想させるモノが浮かび上がり、そして二体は爆発した！

『！』

いや、それだけではない！

爆炎の中からアギトのドロップキックがレスパイダーに向けて放たれる！

ライダーシュート！

爆炎で隠れていたためにレスパイダーは防御が間に合わず、直撃を許してしまった！

『ギイイイイイイツ！』

爆発。アギトは勝利の余韻に浸る間もなく再びミラーワールドへと

向った

「あれを……っ！壊せば！」

マシントルネイダーを走らせ、コアミラーに向つ！

だが、頭上から大型モンスターディスプレイが現れ、糸を絡ませ
てきた！

その強靱なワイヤーの様な糸は、一度絡みついたら獲物を絶命させ
るまで離さないだろう。

「悪いけどー！」

しかし、それを橙の光が吹き飛ばす！

トワイライトの特殊能力、拘束解除。

アギトはマシントルネイダーのアクセルを最大にしてディスプレイを振り切った！

「これで決めさせてもらおうよー」

そして…そのまま「アミラー」へと……

「…おぉおぉおぉおぉおぉおぉ」

「じゃあ、真志。私は美穂さんとの約束があるから」

「ああ、じゃあ後でな」

美歩はそう言って、司達に背を向ける。
約束だったのだ、もし戦いに勝てば・・・

「えー！そんな！別にいいですって！」

デッキを受け取った美歩はその条件を受け入れまいと、必死に首を振る。

しかし美穂はその条件を変えようとはしなかった

「もし、オーディンに勝ったら…私のデッキを破壊してほしい」

「で、でもお！」

「それで…この学校で美穂ちゃんがブランウィングと契約してほしいの…」

この学校はこの世界の干渉を受けない。

つまりコアミラーによるモンスター消滅を防げるのだ

「この子は…助けてあげたいから…」

美穂はブランウィングのカードを寂しそうな眼で見つめる。

「私…さ」

「え？」

「私…お姉ちゃんを生き返らせる為にずっと戦ってきた。それが私の願いだし、ずっとそれでいいと思ってた…」

「ただ、美穂はうつむく」

「真司…あいつが刺された時、私…本当に怖かったんだ。それで、悲しかった…」

「もし、真司があのまま死んでたら…」

「私はお姉ちゃんと真司…どっちを生き返らせたいと願うの？」

「美穂の目から一筋、涙がこぼれた。」

もう、分からないのかも…かもしれない彼女は…自分の願いが

「だから…いいの、もし美歩ちゃん達が勝つたら…」

貴女の願いを叶えて

「だって…私は…もう、ライダーじゃないから…」

ライダーとして霧島美穂は…もう死んでしまったのだから

「真司さんが目覚めたってよー！」

「！ー！」

その言葉に三人の目が輝く。

「良かった…美穂さん…」

美歩は嬉しそうに、でもどこか悲しそうに走り出した。
それから数分もしない内に電話で再契約の知らせがきたのだった

『見事だ』

「「!」「」

驚く二人、それはそうだろう。
いきなり光が現れ、しかも言葉を発したのだから

「おっ、お前は!?!」

『ライダーバトルの勝利者に与えられる願いを叶える…
そのナビゲーターと想ってくれればいい』

「・・・は、はぁ」

何故だ?この声…どこかで…??

『仮面ライダー龍騎。貴様が最後のライダーにしてこのライダーバトルの勝利者。』

「さあ、願いを言え」

「あ、ああ・・・」

「まさか、本当に願いが叶うなんて…嘘じゃないのかよ…」

やはりそう言う世界もあったって事か？司は首を傾げる。

「願い…どうする？」

「俺が決めて良いのか？いや、違うよな。
お前が決める、勝利者はお前なんだ」

「・・・」

真志は少し考えた後、口を開いた

「願い事の限度を無限にしてくれ」

「ブツ!!」

盲点だった。

司は思う、まさかこんな願いをするヤツがいるなんて…

『ならん』

「えー…」

ま、そりゃそうだろ…

『だが、発想は評価しよう。よって、限度を5にしようではないか』

「おお！」

言ってみるもんだな。司と真志は互いにそう思う

「……よし！決めた！」

『……』

「オレ達の世界を救ってくれ！」

この願いが通れば！

もうこの旅は終わる、そしてまた日常に……

『残念だが、それもできない』

「なっ、なんで!?!?」

『できないからだ』

「なんだよそれ!」

それから何度言っても無駄だった。

二人は納得いかないようだが諦める事にした。

二人は気づいていなかったのだ。

世界を救う?世界はまだ滅んでいないのに…

司が見た光景は未来のモノなのだ。

決して今ではない、それを二人は気づけなかった。

だからおかしな言葉になり矛盾を生んでしまったのだった

「でもあと5つある。まずは何より」

真志は少しだけ戸惑ったが、最初の願いを言う。

『分かった。受理しよう…』

「よし。それから…」

また一つ、願いが受け入れられる。

「それから」と

計四つの願いが受け入れられる。

「あとは…」

絶大な力でも貰おうか？
いや、扱いきれる自信が無い。

じゃあお金とかっついでな…

「・・・」

そっけふと…思ったしまった……

「 シシシシ………」

「せ、いなねっ…」

「あ……えと……その…」

「？」

どうしようっ…もうそれしか思いつかない。

いや、これ以外を選択したらきつと…

「ツツ！ツ！」

呼吸が荒くなる。どうしよう、どうしたらいい？

いや、これは…

自分の心にふと浮かんだその願い。それは…

だめだ、いいのか、悪いのか分からない。
それをしてはいけない？

いや何故？

してもいい？

どうして？

込み上げてきたその願いは
一体正しいのか正しくないのか？

それすらでもないのか分からない！

分からなくなる！

「ッ！おい真志！」

「え？」

ミラーワールドの空間がゆがみ始める。どつ言つ事なのか？

『…どつやら、誰かがコアミラーを破壊してくれたようだな…』

「先生だ！やったんだ！」

『おい、早くしろ…もう時間がない。
ここが消えれば願いを叶えられなくなるぞ』

「！」

マジかよ…

「真志！早く！」

「ッッ！ッ！…！」

くそっ！駄目だ！もう限界だ！これを言っちゃいけないような気がする！だけど駄目だ！オレはもうっ！

「っおおおおおおッ！最後の願いは　　ッッッ！」

真志はその願いを口にする

「！」

司もその願いには眼を見開いた、だが真志はもう後悔などしていない。
その願いを切に叶えたいと願ったのだ

『分かった。その5つの願い、叶えよう…』

その言葉を最後に、ミラーワールドとモンスターは消滅したのだっ
た…

第78話 話87第(後書き)

あの光の輪はアンノウンだから出るのかと思っていましたが
確かデイケイドでファンガイアにも出てましたね。

ちなみにトワイライトでマシントルネイダーに乗ると、トルネイダ
ーもミラーワールドに入れちゃいます

では次もよろしく！

第79話 話97第(前書き)

この話で一応龍騎編のストーリーは終わりです。次の番外編で龍騎の試練は終了です

あ、あと後書きでオーズの映画、感想かいてます。ネタバレは無いんですけど、嫌な人は注意してください。

ではござい！

第79話 話97第

「優衣…優衣い…」

神崎士郎は泣いていた。

たった一人の妹だった、守りたかった。
ずっと一緒に居たかった、だけど…

叶わぬ願いだったのか…

「優衣…」

眠るように息を引き取った妹を見て、もう一度彼は大声で泣いた。
全てを賭けた勝負も結局負けてしまった。

もうタイムベントのカードはない。あの時なぜ時を巻き戻さなかったのだろうか？

果てしない後悔が彼を苛む。

「優衣いいいいッ…」

いつかきつと笑い合えると、信じていたのに…

運命は残酷だ。

「……どうしたの……お兄ちゃん」

「！」

そう、だが時に運命は思わぬ幸福をもたらしてくれる

彼は……いや、『彼ら』はきつと……

「このアホ！馬鹿！間抜け真司いいい！」

「わわわ！何すんだよ！」

「じんばいじだんだからなあああーっ！」

涙で顔をふやけさせている美穂を見てちよつと笑ってしまつ。

「城戸、お前の生命力はゴキブリ並だな。見直したぞ」

「いやぁーさすがセンパイ！おつよいですねえ！」

「…なんか、全然嬉しくないんだけど」

その言葉に二人は笑つ。

望みどおりの言葉が返ってきて満足そうだった。

「冗談だ、城戸。よく帰ってきたな」

「本当ですよ、本当どうなることかと…」

喜びにくれる真司達。そこに携帯の着信音が鳴り響く

「美穂、お前のだろ！」

「う…誰から…」

「ど、どうした？」

美穂は急いでその電話にでる。期待と疑問が混ざった表情だ。

「ハイ！はい！………え？」

美穂の目から涙があふれて来る。

でも美穂は何故か少し笑っていた、真司達は不思議に思う。

美穂は電話の向こうの相手には伝わる訳もない、お辞儀を繰り返している。

「…はい………はい！はいっ！」

電話を切った途端に、美穂は真司の胸に顔を埋める。

「ど、どうしたんだ？」

「あのね………」

美穂は真司を強く抱きしめて呟いた。
震える声、だけどそれは悲しみじゃなくて…

「お姉ちゃんがね…」

喜びだった。

「いててて…」

翼は体中の痛みを覚えながら廊下を歩いていた。

トリニティの負担は想像以上で、もう筋肉痛が酷いのなんの…

鍛えないと…翼は思う。

でも、今ははやく座りたい！

そう思いながらため息をつく。

「　　い　い　」

「ん？」

「し！し！死ぬ！イデデデデ！」

二人は翼の言い分を聞く事もなく彼を引きずっていく。
痛みで訳が分からなくなる翼だったが、気づく。

二人が泣いている事に

「・・・！ どうしたんだい！？」

「ぜんぜんいい！いい！いい！いい！いい！いい！いい！いい！」

「ええ？」

呂律が回っていない夏美達が気になったが、彼女達は答える事なく
どんどん翼を引きずって…

その場所にやってきた

「保健室？」

ここがどうかしたのかい？

そう翼は二人に尋ねたが、二人はもう泣き崩れていてとても会話できる様子ではなかった。

翼はそれを不思議に思いながらも、保健室のドアを開ける。

「うおー！」

そこには同じく泣きじゃくっている皆がいた。

その異様過ぎる光景に驚きながらも、翼は前に進む。

そこにいたのは…

「ははっ、ユウスケ。お前何やって……………」

そこにはユウスケがいた。

また何かやったんだらうと翼は苦笑する。

しかし、すぐに気づいた。

ユウスケは泣いている、そしてそこには薫ちゃんもいて…
これまた皆と同じ様に泣いていた。

でも薫ちゃんは誰かにしがみついて泣いていたのだ…

「…え？」

誰に…？

薫ちゃんは誰にしがみついて…

「嘘……だろ……」

また？またなのか！？

いや、でも…

ここは……もうあの世界じゃない

「あーあの…さ！」

その人が口を開く。

薫ちゃんを優しく撫でながら…

いつもみたいに…

「コレって…どう言う状況…
なのかなあ…って

あは…ははは
「あは…ははは

そう…だよ…

あは…ははは…

「あ…あれ！？泣いてるの！？」

え、嘘！ちよつと！え？待って！わたし何かした？」

っていつかココロどこのなのーっ！

彼女は困ったように叫ぶ……

「ねえ…」

「えー！」

「今度は…今度はっ……………本当に……………本当にっ！」

君…なのかい？」

「ええ！…っどついつ事…？あと、本当に「ココロどこの」なの…？」

驚く彼女…

「え…ええええええ！？ちよちよ！ていうか今日って…ええええええええ！
なんでこんな時間たって…って！

あれーっ！そのメガネわたしのじゃ…！」

彼女は言葉を止める。僕が抱きしめた事に驚いたみたいだ…

「え…っど、どつしたの？恥ずかしいよ…皆いるんだよ？」

赤くなる彼女…ああ。本当なのかい？

本当に…今度こそ…

「ね、ねえ！翼くんってば！」

「おかえり……」

「えっ？」

「おかえり……おかえり……っ」

「ええ！？ああ……ううん？

「ただいま？翼きゅん……」

また噛んだ。彼女は顔を真っ赤にしてうつむく。

「ほんとっ……大事なところで噛むんだから……葵さんはあ……」

そこには、もう二度と会えない筈だった。空野葵が立っていた。

「・・・」

真志は屋上でそのデッキを見つめていた。龍騎のデッキを…

ミラーワールドが破壊されモンスター達も消えたわけだが、ドラゲ
レッターのデッキは消えなかった。
ゼノンとフルーラが言うには副賞らしいが…

「これで…オレも龍騎か…」

ホッとしたような…
なんというか…真志はため息をつく。

「・・・」

耳を澄ませてば聞こえてくるのは泣き声や歓喜の声。
彼はもう一度ため息をつく

「……オレのした事って、正しかったのかな」

誰もいない屋上で彼は呟いた。

「今さら後悔ってタイプでもないだろうが」

「ああ、そつだよな」

誰もいないと思っていたが、入り口の上から上れる所に司がいた。
寝そべっているせいで真志からは見えないが…

「なんかさ…人の死って単純なモノじゃないだろう？
なんていうか、乗り越えたり区切りつけたりしてさ…
でも、そう言うのを台無しにしちまった気がして」

「まあ、だからこそ漫画とかやら何やらで言われてるのかもしれな

いな。

だいたいの場合失敗したりして…」

「ああ、それにもしかしたらもつと辛い事になるのかもしれない！」

でも、真志はグッと歯をかみ締める

「だけどさ、オレはこの選択をしなかったら一生後悔してた。
責任を取れる訳でもないのに！」

オレ、結局自分の為にこれを願ったのかも…な」

結局またオレは自分の事しか考えてない善意を……

「それでもいいじゃん……」

「！」

ジューズが飛んできてそれをギリギリで受け止める。
美歩だった。美歩は上にいる司にもジューズを投げると、自分の分をのみ始める。

「私らだって人間じゃん。それに命かけて、辛い思いして戦ってるんだからさ。」

「こつ言つ奇跡くらい許してくれるって!」

「……ありがとう」

真志は美歩にお礼を述べる

「やめてよ、私もさ……真志が死んじゃったら同じ事してたから……」

「え？」

「私…真志がいなきゃ…駄目っていつか…」

なんつうか
「」

美歩は赤くなってうつつむく。

「オレも…」

「え？」

「オレも…だ」

真志もすこし顔を赤らめる…

「あたっくらいど！オオオオレヲワスレルナ！」

「ッ！」

司が飛び降りて二人の前に移動する。

真志と美歩は焦りながらも、苦笑いを浮かべたのだった。

「人間なんて少なからず善意の裏に何か期待する生き物だろ、でもそれで救われた人や喜ぶ人がいるならそれは偽善じゃない」

「司……」

「そんなすぐに変われたら人生苦労しねえよ、お前の目指す正義はこれから徐々に実行していけばいい」

「ああ…ありがとう」

「うんうん！その為には生きないと！」

三人は静かに笑う

「…で？言うのか？」

「いや…一応黙っておこうかなって…」

「ああ、そうか。まあそれもアリかもな」

三人は空を見上げる。清清しい程青い空。

「死者を蘇らせる…か」

誰しもが求めて叶わぬ…そんな…願い。

でも、自分達はソレを成し得た。

たった一言、その願いを口にしただけで。

「そう言えば真司さん達にはお別れいつ言っつ？
あっちも今頃大変だろうからな」

「ああ。大丈夫だよ」

真志は自分の手を見つめる

「本当に…そのデッキが要るんだ…よな？」

「はい。だからお願いです。

このデッキを…貸してもらえませんか？」

真司は困ったように笑い、鏡を見る。

そこにいたのはドラグレッダー。

真司はドラグレッダーに向かって笑いかける

「頼むな」

「…」

ドラグレッダーは鏡から飛び出し、真司の周りを一周するとまた鏡の中に消えていった。

「ははっ…じゃあ…頑張ってる」

「はいっ！」

真司と真志は固い握手を交わす。

ただ、真司は少し申し訳なさそうだった。自分だけ戦いから開放されるのは…

「いいんすよ、オレはオレの戦いがありますから」

「…ああ」

真志はそう言うものの、真司はもう一度申し訳なさそうに笑う

「じゃあな、お前も…」

真司は鏡の中にいるドラグレッダーに挨拶と礼を言う。

ドラグレッダーは小さく吼えると空に舞い上がって行ってしまった

「ははは……」

「あはは」

「…君達なら絶対大丈夫だからさ、応援してる」

「ありがとうございます！」

そう言っ二人は笑い合った

榊原耕一から城戸真司へ、そして城戸真司から条戸真志へと龍は受け継がれる

「じゃあね、頑張って」

「ういっすー頑張っちゃいますよー！」

抱きしめあつ美穂と美歩。二人もまた別れの言葉を言い合う

「きつと、またいつか…その時は皆でお好み焼きでも食いにいこう
ぜ！」

美穂は親指をぐつと立てて笑う。

「はい！楽しみにしてます！」

そう言って、もう一度二人は強く抱きしめあつのだった

「うーん！感動しますねーっ！」

「…全然そうは見えないが、まあ…いい」

佐野も蓮も、清しい笑みを浮かべて二人を見送ったのだった

「ええええええ！おいおい！もう挨拶すませたのかよっ！
…サイン欲しかったのにつ！」

「ハハツ、悪い悪い。」

今ならまだ間に合う　っ！

司はそう言って走り出そうとするが、眩い光が辺りを包み込む！

「ちつくしょおおおお！世界移動かよおおおお！」

その場に崩れ落ちる司を見て二人は笑う。

「受け継いだこのデッキ…きっと皆の役に立ててみせるから」

「うん、きっと…」

「はあ…ま、頑張れよ」

三人はそう言って皆のところへと戻っていくのだった…

「く…くくっ…くくく！」

抱きしめあいながら泣いている翼たちを見て、彼女は笑っていた。

「なかなか、私の予想通りといったところか？」

女は手に持った紅茶を置いてゼノン達に問いかける

「まあそうなるのかな。

でも大変でしたよ、願いを叶える『存在』を他の世界から持って来るのは

もうこの世界にもあんなモノは無いんじゃないかな」

「ええ、本当に！」

そう言ってフルーラはマイクから手を離れた

「どうぞゼノン？ワタシの演技はなかなかじゃなかったかしら？」

「ああ、フルーラ。ナビ役、最高だったよ！」

さすがはボクのお愛するフルーラだ。低い声も素敵だよ本当に。

あのアホピンク達もフルーラの声には気づけなかったみたいだね」

「まあ！ゼノン……」

二人は熱い抱擁を交わす。

女はそれを特に同ずる事もなく、相変わらず口元をつり上げたまま二人を見つめていた。

そして暫くそちらの方に視線を移していたが、クスリと笑うと再び翼たちの方に視線を戻す

「ククク、神崎士郎、霧島美穂：そして」

空野薫！

「こいつ等の家族を蘇生させるとは！神をも恐れぬその行為！
条戸真志、なかなか気に入ったぞ。フフフ…」

「人間の分際で三人もの命を動かした、まさに神に等しき行為ですからね」

「ククツ、やはりいつの世も世界を動かすモノは愛と決まっているのかもしれないな」

「愛は人を狂わせる元素、ですが人は愛がなければ生きてはいけな
い」

「愛は、観測者しだいで悲劇にも喜劇にも変わる不思議な元素、少なくとも彼らは悲劇で終わることを拒んだみたいね」

「フツ、つくづく人間とは不思議な生き物だ」

「ボクとフルーラも人間なんですけどね、フッフ」

「おっと、これは失礼」

そう言って三人は笑い合っていた。

「あああああ！」

椿が驚きに目を見開く。

しかし真志は気にする事なく鏡像の世界を叩き割り、ゴミ箱に捨てた。

「もう、いらないんだ。コレは…」

「どうしてですか？」

我夢の言葉に真志は少し沈黙した後、笑う。

「いつまでもコレに縛られるのはゴメンだからな。
もう、いらない」

「はあ…」

少し名残惜しそうにしながらも椿達はそれ以上何も言わなかった。たとえ犯罪の道具だろうが両親の残したモノ。

だから捨てられなかった、だけど…

「オレには……もう、これは必要ないんだ」

そう決心する真志。これから彼は彼の人生を生きるのだろう。願いの為戦い続けるライダー。

それは真志の心に人生の重さを教えてくれた。

今まで、なんの為に生きていたのか分からなかった。

だから、彼は鏡像の世界を破壊した。

今までの彼の人生は親の印象を消すだけの作業的なモノでしかなかった。

でも、これからは自分の人生を生きてみようと思う

真実を惑わせようとする鏡なんて…割ってしまえばいい

「さあ、次の世界にいこうか！」

真志は今までの自分に別れを告げると、笑顔で立ち上がるのだった

第79話 話97第(後書き)

はい。えー……w 迷いましたね、ぶっちゃけ。
でも変更する気はないです。てな訳で学校に新しいメンバーが増え
ました！

映画見ました。いやあ良かった、何より上様がカツコよすぎて鳥肌
モンでしたわw
ストーリーも難しいものじゃなく、パラレルならではの展開だった
りね。

ただもうちょっといろんなコンボの戦いが見たかったかな
でも本当に面白かったです。サンバも良かったw

では次もよろしく！

第80話 番外編 休憩の世界（前書き）

はい、と言う訳で番外編です。

まあ一応龍騎編の番外編なんですけど世界移動してます。休憩の為に用意された世界とでも思ってください

あと今回長いです。力尽きたw

ではござい！

第80話 番外編 休憩の世界

「お姉ちゃん、どこに行くの!？」

「え?ああ、うん。ちょっと雑誌を取りに」

「お姉ちゃん!どこに行くの!？」

「え?ああ、うん。ちょっと水を飲みに」

「葵さん!どこに行くんだい!？」

「え...?ああ、うん。ちょっとトイレに...」

「葵さん！」

「お姉ちゃん！」

「いや…ちょっと…お風呂……」

「あああああ！んもっっ！翼くんも薫もそんなに心配しなくていいんだよ！？」

「「だつてええ！」」

教室の片隅で二人は正座をさせられていた。

葵は少しうんざりしたようにため息をつく。一歩動くだけで何をするか聞かれるのは流石に疲れるというものだ。

「確かにね、わたしを心配してくれるのは嬉しいよ？」

でも、お風呂とかトイレにまでついてくるのは流石にわたしも嫌なのッ!!」

「だってえええ!!」

相変わらず葵に付きまわっている二人を司は複雑そうな目で見ていた。

どっちの言い分も分かる。そりゃまあついて行きたくもなるだろ

「・・・」

しかし、改めて考えると本当に凄いな…

一度亡くなった人が今こうやって元気に過ごしてるんだから…

「あっ！葵さあああん！」

自らが一度死んで蘇生した事を知ると、葵さんは気を失って倒れてしまった。

まあ無理も無い、葵さんが目覚めてからも落ち着かせるのはそれなりに時間がかかった。

でも案外葵さんは今の自分の現状を割りとすんなり受け入れると、もう一度ゼノン達からの説明を聞いていた。

「むしろこんな現状で信じないとか言うほうがどうかしてるわね、私が死んだ？仮面ライダー？世界を巡る？」

ええ信じますとも、ええ信じますよ！

自分の妹が武器に変形して、彼氏とその弟、

友達が変身してるの間近で見てもまだ信じないわけないでしょーがっ！」

なんか軽くやけくそになっている様な気がしたがそんな事はないの
だろう。

葵さんは深呼吸をした後、冷静になったのか優しく微笑んで

「あの…、と言う訳で…よろしきゅね？」

「「「「「」」」」」」

真っ赤になって震える葵、一同は一斉に吹き出す。

「あははは！葵さん本当によく噛みますね！アハハハ！」

「葵さんかわいいーっ！」

「うう…酷いわ、皆！」

暫く皆は笑う合つと、そのまま葵に向かって微笑む。
代表で司が手を差し出した

「よろしくお願いします。葵さん！」

「うん！」

葵はその手を掴む。
確かな人間の暖かさを感じる、司はもう一度微笑むとその暖かさを
しっかりと確かめたのだった。

「たった一言。空野薫の姉、空野葵を蘇生させてくれ…
そう言っただけで人の命が動かせる。」

「ああ、簡単なモノだとは思わないかい？フッフ」

ゼノンには挑発的な笑みを浮かべて真志に話しかける。

校庭の隅で彼らは、ドラグレッダーとブランウィングに餌をやる美歩とフルーラを見ていた。

ゼノン達が用意した餌の効果は凄いもので、一度食べれば暫くは空腹を感じない物らしい。

これならミラーモンスターの二体が人を襲う事はなさそうだ。

「オレは…オレはその選択を後悔しない。もう後戻りはできないんだから…」

「ふうん、君にはその力があると？」

「どうするんだい、もしもう一度空野葵が死ぬ事になったら。」

「その時、皆はもう一度同じ…いやより深い悲しみを背負うんだよ」

「ああ…そうだな。オレは弱い、葵さんを守りきる自信は…無い」

「・・・」

「だから…オレ一人じゃなくて、みんなの力を借りる事にしたよ」

「まさか！？蘇生させた事を話したのかいッ！」

真志は頷く。これにはさすがのゼノンも少し表情を変える。

「驚いたな…それで皆は何て？」

「お礼…言ってくれたよ」

「・・・」

目を閉じれば涙を浮かべてありがとうと言ってくれた翼や薫の顔を思い出す。

「正しいことって…なんだと思う？」

「…さあね、でも君がした事を君が正しいと思うならそれでいいんじゃないかい？」

「オレは…必ず皆と笑顔で元の世界に帰る。今は…それだけさ」

ゼノンはまだ一度小さく笑うと立ち上がりフルーラに合図を送った。

「まあ、期待しているよ。君たちの物語をボクももう少し干渉してみたい」

そう言うとゼノンとフルーラは砂のオーロラへと消えていった。

「オレ達も行こうか、美歩」

「うーっす!」

真志はもう一度デッキを握り締めると、笑顔で学校へと戻るのだった。

こうして葵がクラスメンバーになった訳だが、葵の働きは凄まじいものだった。

掃除、選択、料理。家事系の事は全て彼女が引き受けてくれたおかげで、彼らの心にも余裕ができる！

「これでっ…もうあの料理を食わなくていいんだよねっ！」

「ありがてえ…ありがてえ！！」

泣きながら飯をかつ食らう司達に葵は苦笑する。

彼女は真由とハナの料理を知らないのだ。あれは料理ではない、グロンギなのだから

「ああ！ちゃんといいい匂いがする！

男共は部屋干ししか脳がない奴らばかりだから！」

「あはは、喜んでもらえてよかった！」

「葵姐さん…！」

ひしツ…と美歩は葵に抱きつく。
あまり家事をした事が無いメンバーにとって葵はとても頼りになる人物だった。

それだけでなく女性陣にとって優しい葵には無性に甘えたくなる。
言ってみれば葵は皆の姉の様になっていたのだった。

「うーん…」

「どうしたんすか椿さん」

「おお亘か、いやな…」

二十歳を過ぎれば皆等しくBBAに変わるのだと思っていたが別にそんな事はなかったぜ。

これはちよつと幼女からストライクゾーンを広げるべきなんだろうか？

お前はどつこ思つて？」

「ごめんなさい。ちょっと何言ってるか分かんないですね」

その夜、皆がもう寝ている時間に翼と葵は話していた。

「大分、皆と慣れてきたんじゃないかい？」

「うん、ありがとう」

翼が差し出したチューハイを開けると葵はそれをゆっくりと口に入れた。

「…ねえ、翼くん」

「うん？」

葵は翼が座っているソファまで移動すると、彼の隣に腰掛けた。その表情は少し寂しげで、翼も何も言わずに彼女から口を開くの待った。

「わたしって…本当に…その、死んだの？」

「……ああ。そうだね、間違いないよ」

「だったら…薫とか、ユウスケ君とか…皆にとんでもないこと
ッ」

翼は何も言わずに葵の手を握る。

思わず言葉を止める葵に、翼は優しく微笑んだ。

「今、僕の手には君の体温がハッキリと伝わっているよ。
それは生きてるなによりの証拠だとは…思わないかい？」

「・・・」

「君は、今生きてるんだ。
もし君が何かを感じてるならその分薫ちゃんに関わってあげてほ
しい。」

もう一度言っよ、君は生きてるんだ。

だから…薫ちゃんやユウスケ、皆ともっと一緒に居てほしい」

「うん…ありがとう」

葵もまた微笑んで翼の手を握り返す。

「うん、それでいいんだよ。葵さん」

「……………」

さん、は止めて

「あはははっ！」

ふくれっ面の葵と笑う翼。

翼は軽く謝ると、彼女の名前をちゃんと呼ぶ。

葵はソレを聞くと、満足そうに笑うのだった

「と、言う訳でね。一度皆の状況を確認しておこうかなと」

「うん、成る程ね」

翌日、葵はそんな事を言い出した。

次の世界に着くのは明日らしい、と言う訳で今日は休日なのだが…

皆めずらしくそれぞれの男女ペアで行動していたのだ。

保護者の一人としてそれぞれのペアがどの程度の仲なのかを見ておくのもアリだろう。

葵は、翼とイマジン四人組みを引き連れて視察に向かう。

「むふふ」

「・・・葵さん、楽しんでない？」

「そ、そんなことないわよ！さあ、まずはユウスケくん達ね」

「うん、ユウスケ君と薫ちゃんだね。」

「やっぱり二人は仲がいいよ、戦闘でも二人はだいたい一緒だからね」

1572

ユウスケと薫はどつやら空き教室にいるらしい、何かをして遊んでいるのか？

葵はゆっくりと扉を開けてみた。

あゝ...

「ホラ！あと一週！休んでんじゃないわよっ！鞭で叩かれないのっ？」

「ヒ…ヒーンッ…！」

「オーツホホホ…！」

「ピシヤッ…」

「……」

「……」

「わぁ！お馬さんごっこ？わーい！ぼくもやるっ！」

「シッ！駄目だよリュウタ！アレはああ言うプレイなんだから！」

「違うで、アレは足腰を鍛える訓練に違いない。

いやぁ、やるもんやなぁ！」

「お……おいおい」

何だったんだアレは…モモタロスは汗を浮かべながら翼達を見る。

「うーん、今日も天気がいいわねえ……」

「そうだね葵さん。今度皆でどこかへ行こうか？」

「あ、いいわね。じゃあ」

「オオオイッ！！」

「モモタロス君、私達は何も見えない。

それでいいじゃないか。他に何を求めるんだい？」

「モモタロス君。

この世にはね、決して触れてはいけない謎という物があるのよ？」

そうやって二人はそそくさと教室を去っていく。

キンタロス達は後へ続くが、モモタロスは気になってもう一度扉を開いた。

開いてしまった

「違っただって薫！」

お前のおやつを食べたのはおれじゃなくて双護

！」

「誰が口答えを許したのからしらあああ！？」

今のアンタは馬よ！鳴きなさいホラホラッ！」

「いででっ！ひっ！ヒヒーンッ！」

なんて恐ろしいお仕置きなんだ…

モモタロスの背中に冷たいモノを感じる。

「フフフ…さあ、続けましょうか…」

「その扉の向こうにいるお前も一緒にな」

「!？」

扉から手が伸びてきてモモタロスの角を掴む。

「ちょ！おい！嘘だろ！？おい！

お　　アアアアアアアアアアア

モモタロスは教室の中に引きずり込まれた。
その後、彼がどうなったのか、知るものはいない…

「今、何か…先輩の悲鳴が聞えたような…」

「気のせいだよウラタロスくん。
気のせいなんだ、気にする事はないよ。気のせいなんだから」

続いて葵達は図書室に来ていた。ここには真志と美歩がいるらしい。

「ああ、いたね」

「うん、どれどれ」

本棚に隠れて本人達を確認してみる。

「？」

真志と美歩はなにやらソファで言い合いをしていた。
ケンカだろうか？

しかし真志のテンションが異常に低い。
ケンカと言うよりは一方的なものを感じる。

割ってはいる事も考えたが、取り合えず物陰から様子を伺ってみることにした。

「ちょ！聞いてんのかよ真志！やばいんだって！」

「ああ…そつだな……」

「何でそんなに冷静なんだよ！
皆だつてそつだよ、もっと焦らなきゃヤバイって！」

「・・・」

「あああ、どこに逃げたらいいと思う？地下とか？空？
うっん、でも結局滅んじやつたら全部同じなのかな？」

あああ、もう！どうすればいいのさアタシはああ………」

「お前さ、それ本気で言ってるの？」

「何が！？当然じゃん！偉い人がそうだって言ってるんだよ？
地球が滅んじやつって予言してるんだぜ！

ああ、ヤバヤバっしょ！コレマジで！」

涙目になって美歩はその本を振り回す。真志はため息をついてそれを奪い取ると、パラパラと興味なさそうに目を通した。

「ノストラダムスの大予言……ねえ」

「そうだって！皆何でこんなに冷静なのさ！
地球が滅んじやつかもしれないんだって言ってるのいいー！」

美歩は頭を抱えてうずくまる。

「あああ、お母さんの言う通りだったんだ！

昔からピーマン残したら悪い事が起こるって言われてたのにいい！

ねえ、真志！今からちゃんと食べれば間に合うかな？

地球滅びねえかな！？

ああああ、死にたくねええよおおおお！」

「お前つ…予言ではいつ滅びる事になってるんだ？」

「ええ？1999年だってえ！どうすんだよ真志！どこに逃げればいいんだよお！」

「今、西暦何年だよ」

「え…今は………」

…あ。

なんかみるみる美歩の顔が赤く染まっっていく。
美歩は何も言わずに深呼吸をすると、手に持っていた本を元の棚に戻していった。

『美歩ちゃんはお馬鹿かわいい』

「…よじつと！」

「・・・」

手帳に書き込む葵を複雑な表情で翼は見詰めるのだった。

中庭では拓真と友里がなにやらしゃがみ込んで、何かを観察していた。

翼達は気になって覗き込んでみる。

「花みたいやな」

「きれいだねー！」

一つだけ咲いているタンポポ、二人は笑顔でそれを見詰めている。

「タンポポって踏まれちゃっても元気に咲くんだよね、凄いね」

「うん、凄いね。あたしは好きだよ」

「うん、僕も…」

「」「」「」

会話は少ないものの、二人は笑顔で花をみている。

「何か…あの二人から熟年夫婦のオーラが出てるんだけど…」

「そうだね、何か入り込めないオーラみたいなものが見えるよ……」
邪魔しちゃいけない。翼達は中庭を後にする。

二時間後…

「ねえ拓真、アッチのお花は何かな？」

「えーっと…どうなのかな。」

あんまり詳しくないから分からないけど…綺麗だね」

「…」

さらに二時間後…

「拓真、こっちのお花もかわいいね」

「うん、そうだね」

そらに（ry

「ねえ、拓真。今日はいい天気だね」

「うん。明日もいい天気だといいね」

…じじして、彼らの一日は過ぎ去っていった。

「わあ！」

「あ！すみません！」

廊下の曲がり角で葵と椿はぶつかってしまつ。
椿はなにやら息が荒く顔色も悪い、

「あはは、廊下は走っちゃ駄目だよ。

ところで、大丈夫かい？気分が悪そうだけど…」

「ははっ…だ、大丈夫っすよ！予定より早く目覚めちまって…

あ、いや！だははは！」

不自然に笑う椿、そしてその手にはマジックが握られていた。

「絵でも描いていたのかい？」

「やべっ…！ああ、あの俺もう行きますわ！」

そう言って椿は早歩きでどこかへ行ってしまった。

「どうしたのかな？」

「ううん…」

その時だ、また向こうから誰かがやって来た。

これまた全速力で廊下を爆走しているのは…咲夜だ。

廊下を走るなんて彼女らしくもない、どうしたのだろうか？

「げっ！」

リュウタロス以外はギョツとしてしまった。

そう、ただ一人リュウタロスだけが笑い転げたのだ…

「あははは！面白い顔ー！」

「……」

咲夜は翼達に気づき足を止める。

リュウタロスの言葉にプルプルと体を震わせるが何とか抑えている様子だ。

「先生… 葵さん……あの馬鹿を見なかったかな……ッッ！」

「えーあ……う、うーん……！ み、見てないかなあ……」

咲夜の顔を見て悟る。

彼女のその整った顔に黒いマジックで描かれるアート……

眉毛が繋がり髭みたいなモノが描かれており……

「ど、どうしたのその……顔……」

「あの……ッ、クソ馬鹿が……ワタシの寝ている間に……ッッ……！」

「お、落ち着いて咲夜ちゃん！椿くんだって…」

悪気があるから落書きしたのよね…

「そっだよ！咲夜ちゃん。つ、椿くんだってほんの出来心で…」

いや、絶対狙ってたね。

「……………」

二人は様々なフォローを考えるが…何も浮かびやしねえや！

「ぶちのめす」

咲夜はそう言い残して歩き去る。

「「!?!?」」

「な、なんや!?!?」

「椿の悲鳴だよー!?!」

「「.....」」

まあしょうがないか、翼と葵はため息をついて次に向かうのだった。

「我夢君、お疲れ様です」

「アキラさん……ありがとうございます。
アキラさんもお疲れ様でした」

我夢とアキラはプールのシャワー室の掃除当番だった。と言ってもこの学校のシャワー室は中々凄いもので、シャワー室と言っても浴槽が2つ設備されている。

しかもそれなりの大きさで、一つはジャグジーまでついてるときている。

「運が悪かったですね、今日の当番がここに振り分けられて」

「ふふっ、そうですね」

二人は笑い合いシャワー室を出て行くこととする。
しかし、その時だった

「きゃー！」

「！」

アキラがバランスを崩して我夢にもたれかかった！

「!?!?!」

「あ…」

我夢はその時こそ何も考えずにアキラを支えたが、よく考えてみれば肩を抱く形になっているのではないか！

「ああああアキラさん！だだだ大丈夫ですか!?!」

「あ…はい、ゴメンなさい」

「い、いえっ…」

真っ赤になってうつむく我夢、体が熱い。

こんな所を見せる訳には…

「でも我夢君って本当に女の子みたいですね。

体が華奢っていうか。ふふふ、男の人に支えられた気がしませんでしたよ。

「じゃあ、行きましようか」

「・・・」

女の子みたいですよね（笑）男の人（）に支えられた気がしません
でしたよ（失笑）

あくまでもイメージです。

アキラは呆れたように笑うとそそくさと出て行く。

・・・あれ？

「・・・」

外に出てみる、空が青いや。

そこには何故かキンタロスとリュウタロスがいる、でもどうでもいいや。ハハハ！

「今日は…いい天気やなあ。そう思わんか我夢！」

「太陽が…目に染みやがるですね…」

「ねえねえ！飴食べるう？」

リュウタロスが差し出した飴をお礼をいって受け取ると、我夢は悲しく微笑んで口に入れるのだった…

「しよっぱいなあ……………」

「？ 甘いよ、コレ」

「我夢君…！頑張つて！」

「・・・」

翼は無言で頷くと、物陰から我夢に応援の眼差しを向けた。

その後、学校を探索していると食堂で双護と真由を見つけた。双護は珍しく落ち込んでいるようで、真由がそれを必死になぐさめていた。

「お兄ちゃん…ボクね……」

きつとお空から見守ってくれてると…おもっの……」

「いいんだ真由、俺は罪深い男なんだ。
あの時、素直に俺がやったと言えば…

アイツは助かったかもしれない。

ツ！ だが、俺は怖くてそれをしなかった…
結果、アイツは…もう…」

「お兄ちゃん……ボクは……きっと許してくれると思う。
もしね……お兄ちゃんが反省してるなら……生きなげや。
生きて…彼の分まで生きて！」

「真由…」

すまないと双護はうつむく。
目頭が熱くなっているのか、双護は目を覆っていた。

真由は優しく微笑むと双護の頭をなでる。

「うううっ、すまない。すまない！」

「大丈夫だよお兄ちゃん。」

罪は…償えばいい…ユウスケ君の分まで…」

「うううう！ユウスケ、俺が悪かった。

薫のおやつを食べたのは…俺なんだ…うううう！」

「うん。いや別に死んでないからね。ユウスケは」

「！」

翼は耐え切れなくなって二人の間に割ってはいる。

「本当なのか先生っ！本当にアイツは死んでないのか！？」

「うん、大丈夫だよ。

ちよっと上級者向けのプレイを仕掛けられてい」

「良かった！本当に良かった！！」

「良かったね……お兄ちゃん……！」

「ああ……ああ！真由！」

許してくれるかな……ユウスケは俺を許してくれるかな！？」

「うん……きつと………」

「ううううううッッ！！」

悲しみの涙は喜びの涙へと変わる。
翼は優しく微笑んで双護の肩を叩いた。

「うううう！泣けるぞ！！」

「よがっだねえ！」

「いい話だわ…本当」

「…」

え？え、何？コレ泣くところなの！？

ウラタロスは何か疎外感の様なモノを感じつつも取り合えず感動しておくのだった。

「りよ、良太郎…元気出して？ね？」

「ぼくは…元気だよ」

べつに何故か置いてあったバナナの皮で滑って、
そのまま何故かこんなに晴れているのに存在している水溜りに頭か

ら突っ込んだからって…

悲しくなんか……

「ぼくは…元気だ　　ヨッ？」

「あ！」

さらに良太郎はバナナの皮を踏んで壮大にこけてしまう。

「いたいよお…おッ！」

「ひゃあ！」

何故かさらにバナナの皮を踏んでまたこけてしまう。

ハナを巻き込んで…

「いつつ…ッ！」

「ごめん…ハナさん…」

良太郎はハナをまるで押し倒すかのようにしてしまった。

「なななな！」

いきなりの事に思わず赤面していくハナ。
だが、良太郎はそんな事を気にする事なく…

「大丈夫？ハナさん？」

顔を思い切り近づけてしまった。

「ひゃあああああああ！」

「確か…先輩今日、バナナ食べまくってたよね…」

「そう言えば、良太郎とハナちゃんって………」

「うん、叔父と姪の関係らしいね」

「………」

葵はなにやら考察を始める

「葵さ」

「……燃えるわ」

翼は葵が昼ドラに夢中になってたのを思い出すと、ため息をついた

「チエックだドツガ」

「うっ……うっうっうっ」

「あはは、やばいんじゃない？」

「うっうっうっうっ……」

「むしやむしや」

『食っなっス！！』

美術室ではアームド達がチエスをやっていた。
その隅っここでは里奈が一生懸命何かをしている。

『へえ、うまいモンねえ』

「へへっ、そうかな？ありがとう」

里奈は絵を描いていたのだ。なかなか上手いモノでキバーラも思わず賞賛の声をあげる

「里奈ちゃんは美術部だからね。」

本当上手いよ、ボクも見習いたいもんだ」

「そんな…事…」

里奈は照れ笑いを浮かべて手をブンブンと振った。

「巨くんだって凄いよ！」

絵だつてちゃんと勉強すれば私をすぐ抜いちゃうと思うし！」

「そう？ははッ、ありがとう」

「うっ、うん！」

『はいはい…』

呆れ気味にキバーラはため息をついて飛び回る。

『でもねえ…』

ふと、キバーラは汗を浮かべてその絵を見詰めた。

『うまいんだけど…なんでかまぼこの絵なんて描いてるのよ…』

「薫さんに頼まれたんだよ。部屋に飾りたいって」

『……マジ？』

「椿さんが言うにはここでキャラを取りにきたとか言ってたけど…
私は描くの楽しいからいいかなって」

『あ！かまぼこっすか！おいしそう！
ガブーン！』

「ニガーツ！」

「何やってんだよキバツト！これは絵じゃないか！」

「大丈夫？」

亘と里奈はため息をつきながらも楽しそうに笑い合った。

「どづ？翼くん」

それを見た葵は手帳に絵を描いて翼に見せる。
もちろんドヤ顔で

「へー、上手いね。バナナかい？」

「え？翼くんを描いたんだけど……」

「え……？」

「あれ？」

「いや、コレ……バナナ……」

「いや、あのっ……これ翼くん……」

「え？」

「あれ？」

「なにそれこわい」

「ねえ！見てくださーいッ！司君！ホラ！これ！やばくないですか？」
ビュンビュン！

「おー…」

ピュピュ

「やっとー！これで！私も！」
ビュンビュン！

「うんー」

ピュピュ

「フンッ！セイッ！そいやあ！」
ビュンビュン！

「がんばれー…」

ピュピュ

「うはははー！やっとッ！これで！私も！二重飛び！

できちゃう組み！ですね！
「キュンキュン！」

「すごいぞーなつみー」
「プププ」

「っ、疲れてきましたー」
「キュンキュン…」

「おまえならできるわー」
「プププ」

「アデッッー」

バシッ

「げっ！ここでアストラルかよッ！
コレよけれねーんだけどー！」

バゴーン！

「司くん！私何回飛べました……」

か……」

「あーあ、蟲とか強すぎだろ……」

あ、でも友里はコイツ使ってたよな……」

あー、どうしたもんか……」

「……司くん」

「おお、すごいぞー、みてるぞー。
がんばれなつみー。」

えーと、取り合えずコンボを
「

ぶすり……」

夏美の指が司の首にめり込む。

「ぎゃあああああ!!」

アハハハハハアハハハハハアハ!!

「!」

「天誅」

「笑いのツボ…わたしも教えてもらおうかしら…」

「いや、なんていうか…やめてください」

深く、切に翼は頭をさげるのだった。

「ねえ、フルーラ。ボクは病気なのかもしれない」

「どうしたのゼノン!?」

「ボクの頭の中から君が離れないんだ…
今ではもう赤いモノを見るたび、
君を想う様になってしまった…の、さッ」

「まあ！ワタシもよゼノン、だってそれは…
愛ッ！なのだから！」

「フルーラ！」

「ゼノン！」

「ひっ…」

そう言って抱きしめあう二人。クルクルと回りだす二人。

「うふふふ！」

「あははは！」

「ねえゼーノンっ！」

「どうしたんだいフルーラ？」

「よんでみただけ！」

「もっっ！こいつっ！」

「あはっ！」

「ソイヤアアアアアッ！」

葵はそこからへんにあった小石を思い切り蹴り飛ばす。

何故かはわからない。だが、無性にそうしたくなっただから仕方がないね。

「ホラ！こう言つのが見たかったんだろっ！」

「しっかりと目に焼き付けておいてねッ！」

さっきからチラチラとコチラを見ていたゼノン達、

「そう言つ事じゃないのよー！あああもっつ！
なんか体中が痒いんだけど！」

「あはは…ところで、何で君たちはここにいるんだい？」

「ふふっ愛と言つモノはね、観測者がいればそれだけ燃え上がると言つモノなのさ」

「そつね！さあゼノン！もっと見せ付けてあげましょつ！」

「んっ……」

そつ言つて眼を閉じながら顔を近づけていく二人……

「いひゃあああああああ……」

「あつ！葵さあぁーん！」

思わず目を覆つて葵は走り去る。

それを追いかけていく為翼達は二人から去つていった。

「もつっ……」

「フフフ…」

満足そうにゼノンは笑うと、砂のオーロラを出現させて消えていった。
本当に何しにきたのやら…

「ふう、疲れたわ…」

「お疲れ様。どう？皆を見てみて」

「・・・」

「・・・」

「全然わかんない」

「だろうね・・・あ！」

翼は大事な事を忘れていたと葵に話しかける。
翼は掛けていたメガネを取ると、それを葵に差し出した。

「これ、葵さんの」

「ああ！そうだったね」

葵は外に出かけるときはコンタクトレンズを使ったりもしているが、家では大体メガネを掛けていた。それ程目が悪い訳ではないが、なくてはならない物だ。

「ありがとう！」

「いえいえ……」

「うーん……」

だが、葵はソレを受け取ると何かを考え始める。
暫くそうした後、葵は自室からもう一つのメガネを取ってきて、それを翼に渡した。

「コレは？」

「あげる。やっぱりもう翼くんも掛けてないよね、違和感が出ちゃうわ」

「そうかな。まあ、じゃあありがたく」

翼は複雑そうに笑いながらも、それを受け取るのだった。

「よし！じゃあ私も皆の為に頑張るから！」

「あはは、まあ期待しておくよ」

「うん！」

こうして彼らは次の世界に向けて、旅立っていくのだった

第80話 番外編 休憩の世界（後書き）

家事やらは葵さんが中心にやる事になりました。他のメンバーも手伝いますが、メインは葵さんが引き受けてくれました
…って事ですね。

あと、すいません。次の世界を整理したいんで更新は少しお休みします。

三日かそこらかな？

さて、残り試練は電王を除く三つ。

では、次もよろしく！

第81話 ？新世界（プロローグ）？（前書き）

今回の話ほど中身がないモンはないですわw

だが、私は謝ら…
ではござぞ！

第81話 ?新世界(プロローグ) ?

「 ちゃん！待ってよお…!」

少女は目に涙を浮かべて走っていた。目の前を走っていく少年に追いつくために…

「ははっ！早く来いよ！置いてくぜ!」

少年はそんな少女のことなど、おかまいなしのようだ。

少女は必死に追いつこうとしているが、少年はもうずっと先にいる。

いつもそうだ、彼は自分のずっと先を行っている。

ずるい、うらやましい

「きゃー!」

ふいにバランスを崩し、少女は倒れる。

ほんの少しの沈黙と、襲ってくる痛み少女は耐えられず泣き出し

てしまった。

「うえええんツ！」

「！」

少年ははるか後方で泣き出した少女に気づくと、少女の方に向かって走り出す

「まったくしょうがねえな！」

「！！」

少女は少年が自分の所に来てくれたのを見ると、先程までの事が嘘のように笑うのだった…

「オイてめえ今何だった？ああ？」

「…聞こえなかったのか？じゃあもう一回言ってる」

「うまいのは、たけのこの方だ　　ッ」

「ざけんじゃねえええええええ！表でろこらああああッ！
きのこの方に決まってるんだらああああがああああ！」

「ほおお！頭だけでなく味覚までおかしくなったのか？
可哀想だな椿！」

現実、現実を直視してみるホレホレｗｗｗ」

「は？おいおいおいタケノコ厨さんよ、なんか勘違いしてねえか？
売り上げだけでモノ語るなんざソレこそカス！カスにわか乙ｗｗ！
だいたいたけのこなんて小学生の食いモンなんだよ！

何なの？あの粉っばいの…ちょっと、勘弁してほしっすねｗｗ

あ、ごめんなさい。咲夜センパイ（）って胸に栄養行き過ぎて
脳に栄養いかなかったんですよね……」

「きｗｗのｗｗこｗｗつｗｗつこｗｗつｗｗのｗｗこｗｗきｗｗのｗｗ」
つｗｗ」！

どう考えてもたけのこの方がおいしいと言っつのお前ときたら……」

「上等だこらああああああ！」

「あ…の…2つ好きじゃ駄目…なのかな？なんて…」

「ああ！？消えるよ中立きどりの三流が！」

「そんな事ぬかしておいて

どうせア○フォートが一番うまいと思っているんだろっ？

浅い、浅すぎる！出直してこい！」

「いっ！いっ！めなさあああい！」

ユウスケは涙を浮かべて走り去る。

しかし二人はそんな彼に目もくれず言い合いを再開した。

「咲夜さんよお…そろそろ決めようや、

どっちが正しく、どっちがカスなのかを…」

「泣いて謝るなら許してやらんでもないぞ。

せいぜい未来の自分に怯えるんだな」

見えない火花を散らす二人。
やれやれと思いつながら、司が仲裁に入る。

「まあ落ち着けよお前ら。そんなきのこ、たけのこで争わなくてもいいだろ。」

皆違つて皆いいんだよ」

しかし司の言い分空しく、二人はまたギャーギャーと騒ぎ始める…

「ああああッッ！もううるせえよ！
お前らさつきから聞いてればアホみたいな意見ばっかだな！
どうかんがえてもマーチ様が最強だろうが！

いい加減理解しろよ！破壊しちゃうぞ！？」

「本性現しやがったなコアラ野郎が！

あ？何か？自分は高みの位置にいても思ってたのか？

あ？」

「『グウウウウツツ！！』」

司、椿、咲夜の三人は互いににらみ合う。

「どっちもおいしいですよー」

夏美はにやけながらソレらを口に運ぶのだった。

「おい、椿。今何かふざけた発言が聞こえたんだが大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない。コーヒー>>>紅茶ファイナルアンサーでFA」

「椿、屋上へ…行こうか？久しぶりに…キレてしまったよ…」

「デユフフwwそうですねwwそうですねwwサーセンww
本当の事言われたらそら困りますモンねww

「フォカヌパウwwww」

「貴様アアアアアアア！」

あの嗜好の芸術とも言える紅茶を冒流した罪は重いぞおおおお
ッ！！」

「はっ！来いよ弱小が！コオフユイの偉大な力でねじ伏せてやるからさあ！」

「あんなモノ×××で×××だろうが！」

「おいてめえ今なんつったゴラアアアアっ！」

「まあまあ落ち着けよお前ら、

コーヒーと紅茶どっちがうまいかなんて人それぞれだろ？」

しかし司の言い分空しく…

「ああああああ！うるせえなクソがっ！

そもそもさっきから紅茶とかコーヒーとか訳分からん事ばっか言いやがって！

緑茶が最強に決まってるだろうが！

いいのか？あ？破壊しちゃうぞ？ああ！？」

「「「ガLLLLLLLLっ！」「」」

三人は睨みつけ、互いに注意を払いながら、熱弁していく

「どっちもおいしいですねー」

そう言って夏美はゴクゴクとそれらを飲み干すのだった

「オイてめえええええ今のだけは許せねえわ、
ちよつと…ホント、マジで」

「奇遇だな、ワタシもだ。本気で貴様を潰したいと思ってきたよ…」

「なあ…オイ？もう一回だけ聞くぞ？本気で言ってるのか？
目玉焼きに醤油って…」

お前…本気で言っちゃってるんですかww？」

「ついに常識すら理解できなくなったのか…
醤油こそ目玉焼きに合う究極の調味料だと何故気づかん？

結局お前もただのxxxか」

「ざけんなテメエエエエエエエッ！」

あー、かつちーんっ！椿君かつちーんときちった！

目覚めるう！目覚めるよお俺のなかの墮天使があ！」

「はいはい、厨二乙、乙。なんだ？ソースかけてれば大人になったつもりか？

笑わせるなよ三流があああああ！」

「まあまあお前ら、目玉焼きつてのはな…」

「「うるせええええええええええ！」」

司の・・・

「上等だよお前らアアアアアアアアアアアア！」

塩が一番って事を嫌でも理解させてやるからなくそがああああああ
あ！

破壊してやるよオオオオ!

「ガールルルルッ!」

「全部かけてもおいしいですよねえー」

夏美は目玉焼きの黄身だけをくりぬいて食べるのだった

「はい、つぶあんが最高。はいつぶあん派の勝ち。はい椿はアホ」

「はいー、アホー、お前アホー！こしあんー！こしあん最強！お前アホー！」

「まあまあお前ら……なんて言うと思ったか馬鹿共がああああ！たい焼き、上級者はカスタード一択なんだよど素人共が！」

「「ガルルルルルルル！」」

「ZZZZZZZZZZ……」

夏美は夢の中

第81話 ?新世界(プロローグ)? (後書き)

いろんな人にごめんなさいw

えっと、まあ今回からブレイド編なんですけど…
主な変更点は

- ・ベルトの仕組変更
(ターンアップでもオープンアップ式のようにエレメントが向かってくる様にできる)
- ・一部のカード効果変更
- ・オリジナルコンボ
- ・APの廃止

かな?

では次もよろしく!

第82話 ? 相反のマインドゲーム? (前書き)

今思ったら全然キャラ紹介更新してねえや!

まあもつしばらく放置しましょうかねw
ではござい!

第82話 ? 相反のマインドゲーム?

「うーん…本当に凄いわねあの二人…」

「ずっとあんな感じなんです…昔はそうじゃなかったみたいなんですけど…」

葵とアキラはため息をついて椿と咲夜を見ていた。

ある時はお菓子の種類、

ある時は漫画のキャラどっちが強いか…と言うモノ。

ある時はどちらが先に寝るか…

とにかくそんな下らない争いをほぼ毎日繰り返していた。

もう皆そんな二人にあきれて放置状態と言う感じになっているのだが…

アキラはそうでもなかった。

やはり尊敬する先輩と、慕っている先輩と言う事で仲良くしてほしいのが本心である。

我夢もそれは同じのようだが…

「我夢君が言うにはアレで仲がいいらしいんですよ。私は信じられなくて…」

「うーん。そうね、でもまあ確かに険悪って訳じゃなさそうだけど…」

葵は紅茶をアキラに差し出す。

葵が入れる紅茶はとても香りがいい、アキラはお礼を言ってそれを受け取ると少しだけ口に入れる。

「おいしい…！」

「ふふっ、よかった」

笑顔になる二人。だが、そこにまた騒ぐ二人の声が聞こえてくる…

「また貴様は野菜を残して！
はっ！ そんな事でライダーになれるのかあ？」

「あああああウツセー！

つか野菜とか食わなくてもいいんですう！野菜ジュースで補うんですう！

つかお前仮にも幼馴染だろうが！いいか、よく聞けよ…
幼馴染つつたらず朝起こしにきて、そんで主人公の為に尽くしてくれちゃって、

なんかふとした拍子に赤面しちゃったりなんかしちゃって……

でもちよつと報われなかったりしちゃうのが幼馴染の条件……

っておい！聞けよ！」

「あーすまんすまん、ちよつと居眠りしてたわー！」

「嘘付つくならもつとマシなのにしるよ！あああ、くそっ！」

「夢を見すぎなのだお前は！いいからさっさと野菜を食え！」

「ぐあああああ！みつ、右手が疼く！？

クソッ！ヤツか！ヤツが目覚めるのか！？

ちくしょう！封印からまだ百年しか経ってねえのによ！

ああ、そうか。魔界三銃士が目覚めたか！くそっ！やるしかねえのかああああ

「あーはいはい、凄いですごーい。さあ早く食え食え！」

「……」

「……はあ」

「あーあーあー」

葵は苦笑いしながら二人を見る。もうどこかへ行ってしまったわけだが…

「どうすれば仲良くなってくれますかね…」

「うーん…まずそもそもどうして二人はあんな感じなのかな？」

「多分…椿先輩が咲夜先輩の道場にこないから…」

「じゃないのかも…アキラはふとそう思う。」

「それは葵も同じようで…」

「うん。多分きつと昔になにかあったんじゃないかなって…」

「そんなの分かる訳ない。聞いても教えてくれなさそうだし…」

「はあ…」

アキラはもう一度ため息をつくのだった。

「ホラホラ、ため息ばかりついていると運が逃げちゃうよ？おかわりいる？」

「ふふっ、そうですね。すみません、いただきます」

葵に聞いてもらえて、アキラも少しは心が安らいだようだ。

紅茶のいい香りに少し笑みを浮かべると、カップにゆっくりと口を付けるのだった

「仲直り…ですか？」

「はい、我夢君はどう考えます？」

翌日、アキラは我夢に協力を求めていた。

世界移動にはまだ時間がある。その際にもっと椿と咲夜の仲を良好にしておきたかったのだ。

いつまでもあんな調子でいいのか？

いや、きっと良くないはずだ！余計なお世話だろうがなんだろうがアキラはそう決めたのである

「まあ、そう…ですね。僕としても先輩たちには仲良くしてほしいですし…」

我夢はうんうんと首を振る。

でも正直あの二人ってあれで完成してる気もしくもな

「ありがと我夢くん。うれしい」

「ッ……」

服の裾を軽くつまんでアキラは照れたように微笑んだ。
いきなりの行動に我夢の思考が停止する。

(かわいい…)

「い、いやいや…」

「？」

「でも、どうしますか？何かいい手とかあるんでしょうか？」

「それは…」

アキラは黙ってしまふ。コレと言った案は無いようだ。
どうしようかと二人は考える。

すると、背後からいりなり声が聞こえてきた

「フツ、それぞれが互いをどう思っているのか聞いてみるのもいいかもな」

「！」

ソファアで小説を読んでいたのは双護だった。

双護はニヤリと笑って立ち上がると、二人のそばにやって来る

「双護先輩！い、いたんですか！すいません！」

「気にするな、ちょっと気配を消す練習を試みたんだ。

アキラはとっくに気づいていたようだがな」

なんていう練習してんですかこの人は…。

我夢の突っ込みに双護は笑い、受け流す。どうやら双護も協力してくれるらしい。

まあ協力者は多いほうがいいので喜んでそれを受けた

「正直おもしろい。大変そうだからな。俺でよければ力になろう」

「今、面白そうっていいませんでした？いや言いましたよね？
ちよ、あの寝ないでください！」

だが、まあそうと決まれば話しは早い。

椿が咲夜をどう思っているのか、また逆に咲夜が椿をどう思っているのか聞いてみるのもいいだろう。まあ本心を教えてくれるのかは微妙なところではあるが…

「トウッ！」

「ひいっ！」「ひいっ！」

突如開け放してあった窓から美歩が飛び込んでくる！

まるで特殊部隊のような動きで受身をとると、美歩はその目を輝かせて近づいてきた

「ちょ！美歩先輩ココ二階なんですけど！」

「気にしない気にしない！つか何々？え！聞いちゃうのソレ！
やだーっ！興味ある！美歩ちゃんも混ぜて混ぜて！」

もはや好奇心を隠す気すらない美歩。

「もう！遊びじゃありませんよ！」

「分かってる！分かってるって！」

アキラは何とか納得したようで、美歩を仲間に加えた。

「あ？あの女？そうですね、存在自体が誰得って所ですかねハイ。

フォカ又ポウww」

「ふっ、そんな事言っておいて実はそれほど嫌いじゃないのではな
いか？」

「oh……馬鹿野郎！冗談きついで……」

椿は真っ青になって走って行ってしまった

「うーん……やっぱりですか……」

「まあ本当に嫌いなわけではないだろうが……」

本音がどうかは置いておいても想像以上かもしれない。
我夢と双護は互いにため息をついたのだった

「ええ、こつちもです」

それは咲夜も同じようで…

「はっ？誰が？ワタシ？ワタシが椿の事を好き？冗談は止めてくれ。
アイツと豆腐が崖から落ちそうになっていたらワタシはまず豆腐
を助けに行く」

「とか言われちゃっておめ」

アキラと美歩は困ったように笑う。やはり無駄だったようだ

「はあ…」

本当にどうしたら仲良くしてくれるのか…アキラは何度目かもう分からないため息をついた

そして翌日…ついに次の世界へやってきた

「見たところちょっと普通の町並みじゃないね」

「ええ、少しファンタジックというか…外国？」

屋上では翼達が今回の世界を見回していた。現代の様な町並みではなく、ビルも存在していない。

変わりにコロッセウムの様なものや見慣れない建物から、神話…それこそファンタジーな世界を思わせる。だが、街の人の中には携帯電話や車に乗っている人も多いため、過去の世界と言う訳ではないようだ。

「…ッッ　しかし、世界移動の際の光と衝撃はいつになっても慣れないな…」

双護は頭を抱えて苦笑いを浮かべる。

「あはは…多分移動の際に時間とか空間を超えるからだと思うよ」

「良太郎は平気そうだな」

「うん。ぼくとハナさんは特異点だから平気なんだ。
時間移動の影響は受けないからね……」

「羨ましいよ…はは」

そう言って一同はこの世界をもう一度見回す。
この世界ではどんな事がまっているのだろうか…？

第82話 ?相反のマインドゲーム? (後書き)

今回でやっと世界移動ですね

次回から本格的にブレイド編の世界へ!

では次もよろしく!

第83話 ？紅下翠ノ飯面？（前書き）

サブタイトルは何かこう厨二っぽい感じを目指してるんですが…

ではどうぞ…

第83話 ? 紅ト翠ノ仮面?

「さて、まずブレイドになる為にはアンデッドの力が無いと駄目なんだ。

ブレイドのライダーは皆アンデッドの力があってこそその能力を發揮できる訳だからな」

空き教室で司は椿にブレイドの情報を与えていた。

本人が覚えている範囲、しかももしかしたら情報に誤認があるかもしれないというデメリットもあるが、それでも知らないよりはマシだ。

「はい！質問があります！」

「なんだ椿君、言っただけ見なさい」

「あ、あの…少女のアンデッドとかいる イデッッ！」

司の投げたチョコレートと後ろに座っていた咲夜の踵落としがヒットす

る。

「おい！つか、テメエ何でココにいらんだよっ！」

「お前と口論していたせいで話を聞きそびれてしまったのだ！」

「ああ、一応もう皆には伝えてあるから…」

戦える奴らにはアンデッドを探しにいつてもらった」

椿はそれを聞くと、すこし不満そうだが席に着いた。

司はその後も自分が知りえる情報を二人に伝えていく。

だが今までの世界を見るに、その情報はあまり役に立たないかもしれない。

きっとこの世界もなんらかの情報変更点があるのだろう、例えばアンデッドの力を借りずに変身できたり…とか

まあ考えすぎか、司はそう思いながら二人に情報を伝えきる。

もつと何かあったような気がしたが…

正直、今自分が思いだせるのはここまでだろう

「ってな訳で俺もアンデッドを探しに行ってくる。

お前らはここで待機しておいてくれ、なんなら校庭のほづがいか？」

椿と咲夜が頷くのを確認すると、司は外へ出かけに行くのだった

「意外だな……」

「あん？」

司が出て行って残された二人は暫く沈黙を続けていた。
だが、ふと咲夜が椿に話しかける。

「正直、もつとビビるかと思っていたが……」

咲夜はニヤリと笑って椿を見た。

しかしその笑みは馬鹿にしているとかじゃなく、

少し見直した、

と言った感じだろうか。

あまり見ない表情に椿は思わず笑ってしまう

「はっ、俺は既に暗黒帝王と契約を結んだ身だからな。今さらどう
って事ねえよ」

「またお前は……」

それも一瞬、また冷たい視線に変わる咲夜。

椿は困ったように笑みを浮かべると、立ち上がって歩き出した

「校庭に行くのか？」

「まあな、お前どうするん？」

「まあ一応、ワタシとお前はブレイドペアらしいからな」

「わーうれしーなーぼくもさくやさんといっしょでうれしーやー」

「露骨な棒読みありがとうございます…」

「とでも言ったほうがいいのかな？」

「サーセンwwあー…先行っててくれ、忘れモンしたわ」

咲夜は頷くと、校庭に向って歩き出す。

椿はそれをしばらくボーっと見つめ、視界から消えるのをまった。

そして完全に咲夜の気配がなくなるのを感じると、深くため息をつく。

「普通ビビるだろ……」

大きく震えだす足。正直、気を張るのは疲れる。

本心としては弱音を吐いて逃げ出したくて、泣きたい程怖い。

緊張してる。

でも、拓真に先をこされたから少なくともそんな事はできない。
二番煎じなんてそれこそヘタレもいいところだ。

「ハア…ま、まあアレだな。

仲間の知らない所で実は苦しんでましたってのはカッコいいからな。

うん、そつだな!」

とりあえずそう思っておこう。椿はもう一度深呼吸して、校庭に向うのだった。

「なんていうか…遊園地に来てるみたいだな」

司はそう言って辺りを見回す。

外国の街並は彼にそう言った印象を与えたのか、物珍しそうにしていた。

「結構人もいるみたいだけど…」

街には人の姿も多い。それほど物騒じゃないようで安心する。

「なんか…情報が欲しいところだな…」

司達は適当に人を捕まえて少しこの街の話を聞いてみる。

とりあえずココ最近おかしな事が起きたかどうかとか、変なモンス
ターが出たかどうかとか…

「ああ、そう言えば…」

そんな中、一人の貴婦人が気になる事を言う

「ココ最近変な怪物が出るらしいねえ…」

まあ街の外の方だからまだ皆注意していないんだけど…それに彼らもいるしねえ」

「彼ら？」

「代々この街を守ってくださる方達さ。まだ若いのにたいしたもんだよ」

「そうですか…」

司達は貴婦人にお礼をいう。
変な怪物、そして彼らと言われた存在、なかなか気になる情報は得られた。

「街の外の方には…たしか…」

「変身！」 『Standing by』 『Complete』

「変身！」

デルタとファムは目の前のソレに向かって武器を構える。

「ジイイイイイイイツッ!!」

ゴキブリに似たその外見はまさにローチの名に相応しいだろう。
ダークローチと言われる三体のソレは、ファムとデルタに今にも襲
い掛からんとしていた。

「うへー…ゴキブリとかマジ勘弁なんですけどお…」

「しかも大きいし…」

あ、でも…

「男の子とかって虫に怖がる女の子にキュンキュンしやがるみたい
つすよ友里さん？」

「あらそうでしたの美歩さん。きゃーむしこわーい!」

その言葉と共にデルタは拳を大きく振りかぶって、そのままローチ
の顔面目掛け殴りつけた。

拳がローチにめり込むと、ローチは大きく吹き飛ばす！

「んなめんどくさいアピールできないっての！」

「だよねー、ってか結構いくねー」

その行動を開戦といわんばかりにローチとデルタ達は動き出す。

ローチはその爪でファムを切り裂こうとするが、ファムは最小限の動きでソレを防ぐ。

振り下ろされた爪をブランバイザーで弾き、隙を見て強烈な突きを繰り出していく。

「ジイイイイイイッ！」

「フッ！ハア！」

白いマントを翻し攻撃をかわすその姿は美しく、時折白い羽が舞い散る。

ファムはまさに蝶の様に舞い、蜂のように刺す。そんな戦闘を見せた

「タアッ！」

「ジイイイイイツッ！」

ファムはローチの膝に突きを当てる。

その衝撃で体勢を崩すローチ、そこにできた隙を見逃さない。

ファムは一枚のカードをバイザーにセットさせる！

『アクセルベント』

瞬時、ファムの動きが高速に変わり、見えない突きの連打を繰り返す！

ローチは一瞬で蜂の巣にされ消滅した。

爆発ではなく消滅。黒い霧のようなモノになって消えていく。

「あたしもっ！決めるよ！」

左右から突進してくるローチに青い光弾を当てていくデルタ。一体が怯む隙にもう一体に弾を当てていき次第にその距離を離していく。

ある程度距離が離れたのを見計らってデルタはミッションメモリーを抜き出し、腰にあるデルタショットにメモリーを装填した。

『READY』

電子音が鳴ると共にデルタはソレを構え走り出す！

「チェック！」 『Exceed Charge』

光がショットに収束していき、デルタは思い切りローチを殴り飛ばす。

「ジャアアアアア！」

直後のマークが現れ、ローチは消滅する！
もう一体のローチもファムの突きによって息絶えるのだった。

「うー！終わりー！」

変身を解いて二人はハイタッチを決める。

「よしよし、あたしらも役に立ってる感じだよね！」

「もち！さ、帰る」

そこで美歩は言葉を止める。何事かと友里は振り向くが、瞬時にその意味を理解するのだった。

「はあ…一匹いれば十匹はいるって言ったモンだけど…」

「ほんと、うんざりするよね…」

二人の背後の方で、新たなローチ達が爪を構えてやってくる。二人はやれやれと思いつつも、再び変身アイテムを構える

ッ

「え？」

だが不思議な事にローチの体から火花が散り、直後ローチ達は何かを警戒するように後ろへ後退していった。

「！」

そして気づく、後ろから誰かがローチに攻撃を仕掛けたからだ！友里と美歩はそれが誰なのかを確かめる為に振り返った

「貴方達！そいつから早く離れて！」

「危険だよ！逃げて！」

「「！」」

美歩達の所へ二人の人間が駆け寄ってくる。

一人はカールのかかった金髪の少女で、もう一人は栗毛で背の高い少年だった。

二人は美歩達をかばうように立つと、ローチの群と対峙する。

「あ…あのっ、貴方達は…」

「私たちの事は気にしなくて良いから！早く逃げて！」

「で、でも…」

「言う通りにするのが一番しょ？逃げよ友里」

「あ！ちよつと！」

美歩は友里の手を引いて岩陰に隠れる。

自分達も戦えるのだから逃げる必要はないのではないかと問いかける友里を美歩は落着ける。

「別に、やばくなったら助けりゃいいって話。

どうして私たちを逃がしたのか…見てれば分かるっしょ？」

「…っしょ…っしょ…」

ローチと対峙している二人に聞こえないようにしながら美歩達は計画をたてる。

問題の二人は美歩達が隠れたのを見ると、何かを取り出した。

「あれ…」

「うーん、やっぱりしな。美歩ちゃん、さえまくりだわ」

二人がそれぞれ取り出したのはバックルと一枚のカード。
二人はカードをバックルに装填し、腰へとセットした。

「気をつけてね、ダイアナ」

「クロハ…ありが　　ふん！あ、アンタもね！」

そして二人はポーズをとり、バックルに付いているハンドルを勢いよく引く！

「変身！」

『ターン・アップ』

二人のベルトから光のカードが現れローチ達を吹き飛ばした！
二人はそのカードに向かって走り出し、そのままカードを通過する
すると二人の姿が変わり、アーマーに包まれたモノへと変化を遂げた。

「おお！」

現れたのは緑と、赤いライダーだった。

緑のライダーはその手に構えたロッドでローチ達に激しい攻撃をし
かけ、赤いライダーは銃で緑のライダーを援護していく

「赤と緑…ねえ、アレって…」

友里は司から聞いた話を思い出す。

ブレイドの仮面ライダーで赤色、そして銃を使うのは…ギャレン！

仮面ライダーギャレンだ。と、なると緑のライダーはレンゲルだろ
う。

「この世界の仮面ライダーってわけね…」

第83話 ？紅ト翠ノ仮面？（後書き）

この世界ではレンゲルもターンアップになっています。
つてか全部ターンアップで統一してると考えてください
では次もよろしく！

第84話 ？終焉を招く使徒・ローチ？（前書き）

何かもう迷走してきたなサブタイw

ではどじごど！

第84話

？終焉を招く使徒・ローチ？

二人が見守るなか、レンゲルとギャレンはローチ達をなれた手つきで攻撃していく。

おそらくコレが初めての戦闘ではないのだろう。

立ち振る舞いや、攻撃の無駄のなさからソレが思い知らされた。

『ブリザード』

レンゲルは一枚のカードを発動する。

直後、ロッドから冷気が発生しローチ達の動きを封じた。

凍てつく檻にて拘束される、ローチの群

『ファイア』 『アッパー』

【バーニング・スタンプ】

ギャレンの拳が紅く燃え上がり、そのままローチ達を殴りつけていった。

次々に消滅するローチ達。

しばらくして全てのローチは二人のライダーによって倒されたのだ。
った。

「…ふう。終わったね」

「ええ…そうね。貴女達！出てきていいわよ！」

その言葉を聞き、美歩と友里は岩陰から姿を出す。

「ココは危ないわ！早く街に帰りなさい！」

「あの…実は」

「」「」「」

「あ、どうも」

「…ありがとう」

咲夜と椿はそれぞれにジュースを差し出す。
しかし、ピタリと二人の動きが止まった。

「何をするんだお前は!？」

「お客様にだすのはペプシのゼロカロリーって決まってるでしょー
がっ!

だから飲んだ!はやく持って来い!」

「はああ、いるんですよね稀にこう言う馬鹿が……」

咲夜は構えをとる。それを確認すると椿もまた、構えをとる!

「やはりお前とは相容れないようだな……」

「そうみただな。まあ別にそれでいいけど……」

「コーラのほうが

「スプシのほうが

「うまいんだよおおおおおッッッ……！」

「…何？アレ」

「頼むから気にしないでくれ……頼むから……」

「驚いたわ…」

まさかアンデッドの力を借りずに変身できるライダーがいたなんて…」

金髪の少女ダイアナと、長身の少年クロハはディケイド達を不思議そうに見詰めていた。

街を守っている二人が敵である筈がない、司達は早速彼女達に協力を求めたのだった。

「他の世界か…」

にわかには信じがたい話ではあるけど…君たちを見れば頷ける話

だよ」

クロハは少しも迷うそぶりを見せず、その手を差し出した

「僕でよければ力になるよ、よろしく」

「あ、ああ！ありがとうございます！」

にこやかな笑顔を浮かべるクロハに安心する。
想像以上にいい人のようにだ、クロハは皆と握手をしてまた笑顔を浮かべた。

しかし、ダイアナは対照的のようだ。腕を組み、口をへの子にしている。

怪訝そうにクロハを見つめて、少し鼻をならす

「ちょっとクロハ！あなたまたまたそうやって…」

私達だって今、大変なのにッ」

「それは…本当に申し訳ないと思っている。ただし協力して欲しいんだ！」

「どうか、俺達に力を貸してくれないか？」

「え？ああ…えとっ…」

頭を下げる司にダイアナは一瞬どうしていいか分からないという表情になる。

しかし代わりにクロハが苦笑いを浮かべて口を開いた、

「気にしなくていいよ。」

「ダイアナは口が少しキツイだけで君たちにちゃんと協力してくれるから」

「そ、そうなのか…？」

「え…あ…そ、そうね！」

「あなた達がどうしてもっていうならいいわよ」

「ありがとう！」

照れながら笑うダイアナ。クロハはくすくすと笑いソレを見ていた。

「だから、言ったでしょ？」

ダイアナは優しいんだけど、少しテレやなだけだった」

「なっ！か、勘違いしないでくれる？私はあなた達の為にやるんじ
や
」

「テンプレキタアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「きゃあー！」

していった…

「・・・」

「な、なかなかアクティブなスキンシップをするんだね彼らは…」

冷や汗をかきながらクロハと司は、うはうはときこちなく笑う。

ダイアナは顔を真っ赤にしながらクロハを睨みつけるのだった

「ところで、あのモンスターは？」

司のその言葉に二人の表情が険しく変わる。
街を守っている彼らなら、あのモンスターを知っている筈だ。

この世界で何が起っているのかも…

「ダークローチ。ココ最近になって街の付近に現れだしたんだ。日を重ねる毎に数が増えていつている気がする」

「噂によれば数ヶ月前、この街にピエロの格好をした道化師ってヤツが現れてから出現する様になっただけだ。だから私達はその道化師ってヤツを探しているんだけど…」

「道化師…!？」

司達の脳裏にファイズの試練の記憶が蘇る。

たしかあのクラウンと爆弾を設置したのは…

「またその道化師ってヤツか…」

「知っているの!?!」

「ああ、こことは違う世界だけど…」

となると、道化師も世界を移動できる!?!

いや、もしかしたら道化師は複数いるのかもしれない。
駄目だ、情報が少なすぎる…

二人は道化師を探しているのだが、なにぶん街を守りながらの捜索の為なかなか見つからないらしい。警察や一般市民にも道化師の情報を伝えているが、それでも目撃したと言う情報すらこない始末。

このままでは街にローチが攻めてくるまでそう時間は掛からないだ

ろう

「それだけじゃないんだ」

「？」

クロハはこの街…いや、世界について話し始めた。

この世界ははるか昔、人間の他に様々な種族が生きていたらしい。しかし種族間抗争が起こった事で大規模な戦争が行われる事となった。

そんな中、戦争を嫌う人間と、各種族から戦争に否定派の者たちが集まり一丸となって行動した

戦争は凄まじいもので結局生き残ったのは否定派の者達だけとなった。

もちろん人間だけで戦争を乗り越えられた訳ではない。むしろ人間はほぼ無力といってもいいだろう。

人間が生き残れたのは人間以外の種族のおかげなのだ。
人間はその人ならざる者達を称え、人ならざる者達もまた人間と深い絆を持つ事になった

人間は歴史の中で絶大な知恵を手にいれ、人ならざる者達を不死者へと変えた。そして神として代々称え、祀る事となったのだ。

だが、絆が深くなったとは言えその時代の人間と…というだけの話人ならざる者はいつからか人間に絶望しはじめた。

欲深き人間達はいつしか神として崇めていた筈の彼らをアンデッドと称し、その力を道具の様に扱いだした

これに絶望したアンデッド達は、人間に見切りをつけて

『自分達が認めた人間』

以外には手を貸さないという事にしたのだった。

計52体のアンデッド達は、その数から自分達をトランプに見立てそれぞれのスーツとカテゴリーに別れた。

そしてそれぞれ自分達が定めた定義にしたがい人間に力を貸すことにしたのだった。

自らの力を鎧に変えるバツクルをつくり……

「その気になればアンデッドは僕たちを滅ぼす事もできたろうか
ら……」

「このルールはありがたいよ……」

「じゃあ、つまりクロハ達は……」

「うん。僕とダイアナはクローバーとダイヤに選ばれたんだ」

「す、スピードの契約者はいるのか!？」

「ううん、いないよ。今は僕たち二人だけさ」

「それで、大変な事って……?」

そうだった。と、クロハはまた表情を変える

「ハートのスーツが消えたんだ。アンデッドと一緒に」

アンデッドと誰かが契約を結べばその人間の情報をそれぞれのスートのキングに伝える事になっているのだが、ハートからの念波が途絶えたらしい。

誰かと契約したと言う事だろうが…全く情報が無く、今どこにいるのかさえ不明という事なのだ。

「ありえないとは思っけど誰かに悪用なんてされたら…」

「ハートの面々は気まぐれなヒトが多いから
多分普通に契約したんだと思うんだけど…」

「一応…って事もあるから」

成る程と一同は頷く。そして同時に込み上げる疑問

「クロハたちはどうやって選ばれたんだ？」

「ダイアナは代々家がダイヤのスイートと契約を結んでてね、
ダイアナも幼い頃からいろいろ努力して無事、ダイヤのキング。

「ギラファさん選ばれたって訳」

「ちょ！ちょっと！勝手に言わないでよ！」

ダイアナは赤くなってクロハの口を押さえる。

「へー！凄いですね！」

「そそそんなんじゃないんだからね！ただちょっと何て言うか……」

「はいまたテンプレはいりましたアアアッ!」

はしゃぎながら戻ってくる椿、さらに彼にめり込むチヨップ。
倒れる椿、引きずる咲夜……

「……………気にしないでくれ」

「え、ええ……」

「クロハ君は？」

「クロハは完全に運がよかつただけ!
道に迷っているおばあさんを助けたのを見ていたクローバーのキ
ングが

クロハを気に入ってそのまま契約!」

「あはは…クローバーの皆はヒトがいいから…」

そう言っつて二人は笑う。

「へー。じゃあスピードのキングに交渉して力を貸してもらっつてのもそんなに難しい事じゃないのか！」

椿が身を乗り出してくる。

よかった、そんなにキツそうでもない！これなら直ぐに仮面ライダーになれる！
俺が皆の足を引っ張る事はなくなる訳だ。

「いやっ…それが……」

クロハとダイアナは急に押し黙ってしまふ。

その様子に椿の余裕が消える。何か嫌な予感がする。

「っというか嫌な予感しかしない…」

「その…できれば、なんだけど…」

「どうしても、ブレイドにならなくちゃいけないの？」

「あ…ああ、もう今契約していないのはブレイドだけなんだろ!？」

クロハとダイアナは困ったように顔を見合わせる。

「何か…問題が？」

司の問いに二人は頷く。

確実に問題がある、止めておいたほうがいいと顔が語っているのだ

「ブレイド…つまりスピードのアンデッド組みは、
ある条件さえクリアできれば誰でも、どんなヤツにでも忠誠を誓
つて力を貸すんだ。」

だから…その、樁がもしブレイドになりたいなら…

そのテストをクリアすれば良いだけの話しなんだけど…」

「テスト…？」

どんどん膨れ上がる嫌な予感。

樁の顔から笑みが完全に消える。テスト…

「それは…どういっ…」

「…多分、今も誰かやってるから、行ってみる？」

「クロハっ！」

ダイアナは信じられないと言つ眼で彼をみる。

「あなた本気なの？あれを一般人に見せるって…

どうかしてる！」

「彼らは一般人じゃないだろ？」

それに…ブレイドになろうとする事がどついつい事かを見せないと…

彼らも、ぼくらも先に進めないんだよ！」

「っ…！」

ダイアナは渋々といった様子で椅子に座る。

だが今だに納得していない様子で、時折小声で信じられないと何度も呟いていた。

第84話 ? 終焉を招く使徒・ローチ? (後書き)

次の更新はちよつと未定とさせていただきます。

明日は多分ないです、明後日からは未定で

いやいや申し訳ありません、では次もよろしく!

第85話 ?王(コーカサスビートル) ?(前書き)

まあ、とり合えず今日は更新できました

ではどうぞー！

第85話

?王(コーカサスビートル)?

「……」

「…んんというか、静かになったな」

スピードのアンデッド達に会うべく、椿達はその場所まで歩いていった。

緊張して黙っていた椿の少し後ろを咲夜は歩く。

「普段はあれだけ偉そうに喋るクセにいざとなったらソレか？
それとも右腕に眠っている魔王が暴れだしているのかー？」

小馬鹿にしたように笑う咲夜

「うるせえな…つか、ちったあテメエ空気読めよ!」

「おーおー、マジレスか…」

咲夜は呆れたように笑い肩をすくめる。

椿は軽く舌打ちをすると、咲夜の隣に寄って歩く速度を合わせた

「つか、お前なんで一緒に来てんだ？関係ねえだろうが、帰ってるよ」

「…はっ、ビビるお前の姿でもみてやろうと思ったな」

「かぁー、さすが血の色が緑の咲夜さんはおっしやる事が違いますねー。」

昔はあんなに可愛かったのにー」

「はぁっ!?!」

表情を変える咲夜を見て椿はくすくすと笑う。

「冗談だよ。つか昔の事なんざカケラとて覚えてねえよ」

「っ……」

「あんなの黒歴史の塊だぜ。おい、なんかお前寂しそうな顔してねえか？

あれか？実は俺達将来結婚の約束でもしてました的なベタってる展開か？

それ何てエロゲ？」

「うるさいわ！ワタシもとんだ黒歴史だったよ！」

「ケツ！」

二人はまたいつもの様に罵り合いながら、足を進めるのだった

『・・・』

そして椿達はそこへ連れてこられた。

グラディエーターが出てきそうな中世をイメージしたコロシウム。

命を賭して戦士達が戦う場所、そこに…そのアンデッドは立っていた。

キング、コーカサスビートルアンデッド！

キングはその手に剣を構え、目の前に転がっているモノを見ていた。ソレは苦しそうに呻きながら地面を這いずりまわっている。

それを笑うのでもなく、追うのでもなくただじっと…キングはソレを見ていた

「あれが…キング」

「ッ！」

そのオーラに椿はいつそう気分が悪くなる。
そしてソレを見てしまいその恐怖は確信へ変わる

「おい…あれ…」

「！」

椿が指差したところをみて司達の表情も変わる。
キングが見つめていたモノ、それはまさに仮面ライダーブレイドそのものではないか！

「なっ！」

ブレイドはまだ契約してないんじゃないの？
司の問いにクロハはしっかりと答えたのだった

「スピードのアンデッド達に認めてもらう条件はたった一つ、
それはキングを倒す事なんだよ……」

「……」

「ブレイドに変身させて、キングと一騎打ち。

それで勝てば彼らはそれがどんな人間だろうと協力するのよ…

本当、信じられない」

苦々しくそれをダイアナは見る。

その性質上、安易に力を求める輩や私欲の為に力を手に入れようと
する者が後を絶たない。

だが、結果として誰もキングに勝つ事はできなかった。

今、下で転がっているブレイドもそうだった人間なんだろうか

「彼は…もう、負けたんだね」

クロハの言うとおりであった。

倒れているブレイドは息も切れ切れで、キングから逃げ様と這いず
っていく。そしてその口から漏れるのは命乞いの言葉

「たっ……たすけて……くれっ！」

『…………』

一歩、キングがブレイドに近づく。

ブレイドはさらに命乞いを続けてキングに助けを求めた

「…………おい、負けたら……どうなるんだ？」

震える声で椿がクロハに問う。

いや、分かっている。

命乞いなんかしてる時点でもう完全に！

でも、否定したかった。否定してほしかった！

「殺される。どうあっても……」

しかし、無情にもその言葉が放たれ、椿の心に突き刺さった

「ひっ！」

思わず腰を抜かして倒れこむ。

そんな、そんな条件ってアリかよ！

恐怖で頭がおかしくなりそうだ。

椿のそんな思いを知らず、キングはブレイドに剣を向けた

「うっうわああああ！助けて！
おれが悪かった！もう二度と現れないから！！」

「悪いが…それはできない。私は最初に言った筈だ、敗北は死を意味すると。
そして貴様は敗北した…」

潔く 』

死ね

「うわあああああああああ！」

「おいおい！悪いけど黙って見過ごす訳にはいかないぜ！」

司はディケイドドライバーをセットし、一枚のカードを装填する。

『カメンライド』

「変身！」

『ディケイド!』

司の周りに九つの紋章が出現し、収束する。
そしてそれらが弾け、ディケイドに変身を完了させる。

ディケイドはそのままコロシアムの中心に向かって飛び降りる

「・・・」

それをクロハは複雑そうな表情で見ていた。
何故なら…クロハとて同じ事をしたからだ。

過去にテストに敗れた人間を、ディケイドと同じように助けに入っ
た事がある。

だが……

『…ほづ。異質な気を感じると思えば』

「悪いけど、このまま殺させる訳にはいかない！」

ディケイドはブレイドを庇うように立っていた。

既にブレイドは恐怖で気絶しており、動ける状態ではない。

キングはディケイドとブレイドを交互に見ると、すこしだけため息をついた

『貴様は何かを勘違いしている。』

我々は互いに誓いを立て神聖なる約束の下にこの戦いをしているのだ。

私は決して私欲や娯楽の為に人間を殺すのではない』

「それは理解するつもりだ。ただ殺さなきゃ駄目なのかよ！」

『当然だ。命を賭けた戦いこそ偽りの無き結果が生まれる』

そう言ってキングは手を上げる。

「何……を　　ッッ!!」

ふと、ディケイドの目の前に何かが迫る。
そして気づいた!

それはキングの剣!

寸止めこそされているが、ディケイドの眼前にキングの剣先があった。

「!?!」

それだけではない。

いつのまにかディケイドの周りはアンデッド達が包囲しており、それぞれの武器をディケイドに突きつけているではないか!

「なんだと…っ!」

いつの間に囲まれたのか?

そもそもいつの間に剣を突きつけられたのか…全く分からなかった。

それこそ一瞬、そして直後後ろから何かが落ちる音…

「ツツ!!」

ブレイドの変身が解かれ、一人の人間が倒れていた。
そしてそのすぐそばにはカテゴリーエース。ビートルアンデッドが
剣を持ち立っている

その剣からは血が滴っている。
そう、そして男を見た。

無い、何が？

首が！

首が無いのだ男には！それがどういふ事なのか瞬時に理解する。
遅かった、間に合わなかった…

ビートルアンデッドはブレイドだった男の首を一撃で切り取り、即死させる。

おそらく男に苦しみは無かっただろう。

だが、ソレを見ていた椿は恐怖でもう声すら出せなくなっていた。

「くっ！」

『変身を解除しろ、我らは無益な殺生だけはしない。

苦しませる事もしない、誓おう』

『ご理解ください、これがルールなのです』

ディケイドを嗜めるようにジャック、イーグルアンデッドは優しい口調で囁く。

しかし彼もまたディケイドに武器を向けており、抵抗すれば…

「っっ！」

ディケイドは勝ち目が無いと悟り、変身を解除する。

それを合図に、ディケイドの周りで構えていたアンデッド達も散り散りになっていく。

「・・・」

クロハも同じだった。そして知る、タイムスカラベ。

スピードスート以外の時間を停止するその力がある限り、彼らを止める事はできないのだ。

時間停止中は攻撃する事はできないが、すぐに囲まれてしまっし、逃げようともすぐ追いつかれてしまう。

『・・・』

それをキングは何も言わずに見ているのだった…

「ハア…ハアツ…オエツ…」

緊張と恐怖、こみ上げる吐き気が椿を包んでいた。
もう自分が立っているのかどうかすら分からない…ブレイドになる
にはアイツと戦う？一騎打ち？

負けたら…死ぬ！？

ふざけてる！
無理ゲー、いくら補正がかかってるからって仮にも向こうは王を語るキング。

負ける、戦う前から分かってるだろそんなのっ！

もっと簡単な試練にしろよ！なんだよコレ！

「おい、椿。大丈夫か」

「……っ」

後ろから追って来た咲夜に気づくと、椿は静かに頷いた。

「本当に大丈夫か？」

辛そうな椿を見て、咲夜は背中をさすろうと手を伸ばす。
しかし椿はその手を振り払い咲夜に詰め寄った、普段見ない椿の眼に咲夜は思わず息を呑む。

「なあおい…お前、あいつに勝てる自信あるか？」

「っ？あいつ…？」

「キングだよ！あんなヤツに勝てるかって聞いてんだ！」

「ッッ！」

ついイライラして咲夜の肩に強く掴みかかってしまう。
表情を強張らせる咲夜、椿はそれに気づくと小さな声で謝った。

「ワタシは…どうだろう…」

「はつきり言えよ。無理だろ？そうだ、勝てるわけねえよ！」

「・・・」

咲夜は答えない。

答えられない。

安易な気持ちで勝てると、勝てないと答えても結果は同じだろう。
結局椿が欲しいのは同調の言葉といい訳の理由。

誰も自分を責められない。そうだ！あんなヤツに勝てる訳ないのだからと！

だが、いい訳の理由を作ろうが作らなかつが極論として彼はブレイドにならなければならない。

どんなに同情を買おうがそれで自分達の世界が滅びの道からそれる事はないのだ。

「戦わないのか…?」

悪気を込めたつもりは無い。

すくなくとも咲夜はそう思っていた。

だが、この一言が椿をより追い詰める事になる。

「ツツ！！」

椿は顔を真っ青にしてその場へたり込む。

「勝てねえよ！殺される！嫌だ…ッ！ふざけんなよ！」

「・・・」

正直、なめていた。椿は心からそう思う。
ユウスケの時も、巨の時も、翼、拓真、真志。ここまで全員がクリアできた。

だから、自分もできる。そう思っていた。
少しの苦勞、あとは変身して終わり。

そんなモノだと考えていた…

だが違う。

そうだ、ユウスケ達は皆一つ間違えれば死んでいたのだ。

いや、それだけではない。

拓真の時に至ってはもしかしたら自分まで死んでいたのかもしれないのである。

だが、そんな事は無いと思っていた

テレビを見ているような、自分は大丈夫だというような感覚。

そう考えていた…
だが、今…

「お！俺に死ねるか！？冗談じゃねえ！」

「だっ…誰もそんな事言ってないだろ！」

「同じようなモンじゃねえか！あんな化け物に勝てるかよ！
たとえブレイドになったとしても俺はアイツには勝てない！

分かるんだよ！」

「……………」

ガタガタと震える椿。咲夜は思わずどうしていいか分からなくなる。
いつも大口を叩いていたコイツが、今はこんなに怯えているのだ

「……………椿」

「へっ、笑いたきゃ笑えよ！分かってるさ俺だって情けないって事
くらい！」

でも怖いんだよ！しかたねえだろクソっ！」

「わ、笑わないさー！」

ただ…なんて声をかけていいか…

「椿、ワタシは…

ワタシはお前の事をこんな事で見損なったりはしない！」

「っ……あ、ああ」

「
「!
」」

ふと、笑い声が聞こえて二人はその方向を見る。

「
なっ
」

「
ツツ
」

二人を見ていたのはカミキリ虫の様な姿をした化け物だった。

第85話 ?王(コーカサスビートル) ? (後書き)

ちなみに、この世界のスピードクイーンは女性です

つか逆に何で原作は男だったんだらうかw w

まあいいですわw

では次もよろしく!

第86話 ? 狂気道化のファーストゲーム? (前書き)

そう言えばもうすぐオーズも最終回か…

この小説が終わる頃には何がやっているのやら

ではどうぞー!

第86話

? 狂気道化のファーストゲーム?

『キヒッ!ヒヒヒヒ!』

青が目立つその姿、化け物は不気味な笑い声をあげて二人に近づいてくる

何故笑っているのか二人にはまったく理解できない。そして同時に…怖い

「ッ!」

「ひいつ!」

『キヒヒヒヒ…』

化け物の手には鎌のようなブーメランが握られていた。

街の外に現れるというローチでは無いようだが危険なのは確かだ。

いや、もしかしたらもっとヤバイのかもしれない。

咲夜は腰を抜かしている椿をなんとか担いで逃げられないかと考える。

「ちっ！」

「！」

嫌な予感ほど当たるものだと思夜は切にそう思う、化け物の周りからローチが現れた。
ローチ達はすぐに咲夜を取り囲む！

「くそっ……」

自分一人なら前のヤツに蹴りを決め、その隙に逃げられるのに……

「おい……」

「あ？」

椿は震える声で小さく呟く

「おれ…おいて…にげる…」

「…はっ？…かっこつけるのは他の女相手にしろ。
そんなモンじゃワタシはときめかんぞ」

「ばかっ…言ってる場合じゃねえだろ！」

咲夜は冷や汗を浮かべながらもニヤリと笑う。
最初の世界でもこんな感じだったな
慣れたと思っけていても、やはり…怖い

「椿、何が何でも走れよ！」

「あ！おい！」

咲夜は一気に走り出し、一体のローチにとび蹴りを決める！
それに気をとられたローチや化け物は咲夜が厄介な敵と判断し、彼
女に攻撃をしかけた！

「うっ！」

ギリギリ、しかし咲夜はローチ達の攻撃を紙一重でかわしていく。
それだけでなく椿から狙いが外れるように徐々に彼から離れていっ
た。

「す！すまん！直ぐに助けをよんで……」

椿は這うように化け者達から離れていく。

くそっ、情けない！

だが、早く何とかしないと！椿は携帯を開いて助けを求める

「早く！早く！」

『キヒヒヒッ！！』

「ッ！あ？」

そんな彼の目の前で化け物が笑っていた。

「ッ！！ しまった！」

咲夜はまわし蹴りでローチ達を吹き飛ばすと、全速力で椿の所へ走って行く！

ローチに気を取られていたせいで化け物が椿の所へ向かったのに気がつかなかった

「あ……あ……ッ！」

『キヒヒヒヒヒ』

化け物はどこからか出したダーツを構え、狙いを定める。
樁の事をただの的としか思っていないその素振りに、絶大な恐怖が襲ってくる

「う…お…!」

『キヒヒッ!』

化け物はダーツを投げる！
目をつぶる樁、そして聞こえる苦痛の声…

「お前っ！」

「くう……ッッ！」

咲夜は椿を庇い、かわりにダーツを背中で受け止めていた。
化け物は咲夜が間に合った事が愉快なのか、腹を抱えて笑い出した
のだった

「お、おい！大丈夫か！」

「ぐっ……あ、ああ」

咲夜はよろよると立ち上がりもう一度構えた。

防御力は上昇している為、苦痛ではあるが命に別状はないようだ。

ダーツという事もあってかそこまで深い傷でもない。

咲夜はダーツを引き抜くよう椿に言う。

椿は少し戸惑いながらも、ソレを抜いた。

「グッ！」

「だっ、大丈夫か!？」

「ああ…こねくらい…」

『…』

『キヒイイツ!』

その時だった。空から銃弾の雨が降ってきてローチと化け物の動きを封じる。

上空から現れたのはオートバジンだった。

バジンは椿達を守る様に立つと、その拳とガトリングでローチ達を攻撃していく

「ジジジジイイイ!!」

断末魔をあげてローチ達は霧となって消滅していく

だがカミキリ虫の化け物は消滅しておらず、バジンに向って攻撃をしかける!

化け物は軽快な動きでバジンの攻撃をかわし、自らの武器で攻撃していく。

バジンもソレをしっかりとガードし、鉄拳で化け物を押していった。

しばらくはその攻防が続いていたが、
バジンはふいに化け物を投げ飛ばすと自分をバイクの姿、ビークル
モードに変える。

そして椿達の前に移動すると、二人を乗せて走り去るのだった。

『キヒヒヒ！』

もちろんそのまま黙って見逃すわけが無い。
化け物はブーメランを構え、咲夜の首を狙う。

『キヒヒヒ！』

しかしそこに割り込む様に一人の少年が物陰から現れた。
化け物は新たな標的の登場に笑いを上げた……が、立ちふさがっ
た少年はそれに怯む事なく、ソレを取り出した。

『キヒヒヒ？』

少年…拓真は、ファイズギアを装着するとファイズフォンに変身コ
ードを素早く入力する。

「僕の友達を傷つけた代償は…」

『5』 『5』 『5』

『キキキキキキキキ！』

化け物はもう待ちきれないのか、ブーメランを放つ！
風を切り裂く音と共にブーメランは拓真に向かう。だが拓真は怯ま
ない！

「払ってもらおう。変身！」 『Complete』

拓真はブーメランをかわし、フォンをバックルにはめ込む！
拓真の体を赤い光が包み、仮面ライダーファイズへと姿を変化させた

「ハアアツ！」

『ギヒッ!』

ファイズは素早く化け物に近づくと、その拳で化け物の顔を殴り飛ばす!

怯む化け物にもう一発、さらにもう一発と拳を打ち付けていく!

『ギヒッ!』

「フッ!」

大きく仰け反る化け物を逃がすまいと、ファイズは肩を掴んで引き寄せた。

そしてさらに、今度は胴体を殴りつけていく。

「たあアッ!」

ファイズは後ろから戻ってきたブーメランを蹴りで弾き飛ばす。
その反動で化け物は拘束から逃れたが、ファイズは気にする事なく
攻撃をしかけていく

『ヒヒヒヒイイ！』

「！」

化け物のタックル。ファイズはガードをしようと構えるが、それは
フェイント。

化け物はファイズの足を払い蹴り飛ばす。

「くっ！」

『キキキキキキッ！』

倒れたファイズに向って、化け物はブーメランを振り下ろす。
だが、ファイズは地面を転がりそれを回避した。

化け物はファイズに再び狙いを定めるが、ファイズは素早くフォンを抜き取りコードを入力する

『Single Mode』

フォンを銃に変え、迫ってきた化け物に発射する。
腹部に衝撃がはしり、化け物はたまらず後退していく。

ダメージを受けているにも関わらず笑い続ける化け物に、ファイズはクラウンを重ねた。

この世界に道化師がいるのかは分からないが、この不快な笑い声を沈黙させる事が先だろう

『 R E A D Y 』

ファイズはミッションメモリをファイズポインターに装填させると、
足へと装備する。

『 E x c e e d C h a r g e 』

そしてエンターのボタンを押すと共に狙いを定めに入った。
ポインターに赤い光が充満したのを確認すると、ファイズは飛び上
がって赤い光を発射する！

『 キビビビーン』

「！」

化け物から突如黒い霧が噴出され、その霧がローチ達になり具現化する。

ローチの群は化け物を隠すだけでなくポインターから発射された光を防ぐ盾にもなった

「くっ！」

今さらキックを中断する事はできない。

ファイズはそのままとび蹴り、クリムゾンスマッシュをローチに命中させる。

「ジイイイイイイツッ！」

の紋章と共に数体のローチは消滅する。だが、肝心の化け物の姿が無い！

「くそっ……」

逃がしたか。それよりあの化け物の噴射した霧がこのローチの正体

だったとは……
いろいろ考察してみるが、その間にもファイズの周りをローチの群
が取り囲んでいく。

そしてその爪を構え、今にもファイズに襲いかからんとしているで
はないか。

だが、ファイズに焦る様子はない。

冷静に、淡々とウォッチからメモリを抜き取ると、それを装填する。

『Complete』

ファイズの胸部が展開し、色が黒へと変わる。
そしてウォッチを起動させ、超高速の世界へと突き進む！

『Start Up』

ファイズはローチの攻撃から一瞬で抜け出すと、ファイズショット
にメモリを装填し再びエンターのボタンを押した。

『Exceed Charge』

そのまま無抵抗に近いローチ達に無数の連撃をくらわせる！

『Time Out』

十秒後、全てのローチに のマークが出現し、消滅した。

「……………っう」

拓真は変身を解いて息を吐いた。

すでもう、街にもローチの群が現れたと聞く。

そしてその発生源が分かったのだ。

いろいろな情報が多い、ここは一旦皆と合流すべきだろう。

拓真は頷くと、走り出すのだった

第86話 ? 狂気道化のファーストゲーム? (後書き)

次回は：もしかしたら来週忙しくて更新が少なくなりそうなんので
二回更新するかも…？

では次もよろしく！

第87話 ？笑ウ悪意ト道化？（前書き）

今日は二話更新です、理由は次の話で

ではどじろー！

第87話

？笑ウ悪意ト道化？

「ハアアツ！！」

街に徘徊するローチ達を龍騎は豪快に切り裂いていく！

ドラグセイバーで素早く動きまわるその様は、まさに舞を踊っているかのようだ。

「ジイイイツ！！」

「ハアツ！！」

振り下ろす剣をローチはガードする。

しかし腹部に蹴りを入れられ再び体勢を崩したところに斬撃がおそいかかった！

「フツ！タアアアアツ！！」

ドラグセイバーが赤く輝き、炎がまとわり付く。

そしてそのまま龍騎はローチ達をなぎ払う、龍舞斬！

黒い霧になっていくローチ達。龍騎と少し離れた所で戦っている電王も必殺技をローチに決めていく

「……ダイナミック・チョップ！」

力強い電王の一撃がローチを無へと返す。

龍騎と電王は混乱している街の人たちを安全な所へ避難させると、その場に座り込んだ。

「……？ どうしたんだ、キンタロス」

龍騎は完全に力を抜いていたが電王は何故かアックスを構えたままだった。

それに疑問をもった龍騎が問いかける。

「なんか、変な感じがするんや…」

「え？」

電王は辺りを見回す。

龍騎も同じようにするが特におかしいところはない、だが相変わらず電王は意識を集中させていた

「・・・」

そして電王は斧を構えて、誰もいない方向へと体を向けた。

龍騎は不思議そうにその方向に視線を送る。特に何も無いように見えるが…

「何モンや…でてこら」

「!？」

すこしだけ沈黙が起こり、すぐに拍手の音が聞こえてきた。
同時に響く、深いな笑い声。

「くくっ…ヒヤハハハ！なかなかやりますね」

「!」

誰もいないと思っていたが、物影からピエロの格好をした男が現れる。
瞬時に整理される情報、ここでピエロの格好をしているヤツと言え
ば…

「道化師ッ!!」

「そのとおり!!」

道化師は龍騎を指さすと楽しそうに踊りだす。
何なんだコイツ、気味が悪い。

龍騎は得体の知れない恐怖を感じる。

「あなた達、見ない顔ですね…一体何モノかなあ？気になるなー？」

道化師はオーバーな動きでアクションをとる。

電王と龍騎はそれぞれ武器を構えゆっくりと道化師との距離をつめていく。

完全に敵である事は間違いない、一気に決着を決めたいが…

「んー、ワタシも貴方たちと遊びたいんだけどなー…」

残念！そう言っただ道化師はポケットから何かを取り出す。

「ごめんね！ジョーカーを回収しないとイケナイカラ！

君たちの相手はこの子達がしてあげるよ！よかったね！」

道化師が取り出したのは小さなキノコだった。

道化師はソレを勢い良く空へと投げる！

すると、キノコは巨大化し、人の形へと変わった。

驚く龍騎と電王。キノコが化け物になったのもそうだが…なににより

『ヒヤハハハハハハ！』

『キャハハハハハーツ！』

「こいつ等！」

聞き覚えのある不快な笑い声とその姿。

間違いない、ファイズの際に戦ったクラウンオルフェノク！

道化師は、クラウン達が現れたのを確認すると甲高い笑い声をあげて走り去っていった。

「待て！」

追おうとする二人を邪魔する為、クラウン達はナイフを振り回す。

「ムンツッ!!」

電王はナイフを体で受け止める。

その堅い装甲は、ナイフをへし折るだけでなくクラウンの手に衝撃を走らせた!

痛がるクラウンを電王は吹き飛ばすと、同時に斧を投げる!

『ヒヤヤアハハアアアア!!』

斧はクラウンに命中し、そのまま爆発させるのだった。

「オッラアアアッ!」

『ギャハバババツ!!』

龍騎の蹴りがクラウンの腹部にめり込む。

苦しそうにしながらも笑うクラウン、まさにあの時と同じだった。

何故、違う世界にいた筈の道化師がここにいるのかは分からない。
だが、コイツから情報を聞き出すのは不可能のようだ。
龍騎は話しが通じないと悟ると、クラウンを殴り飛ばしカードを発
動させる。

『ファイナルベント』

「フツ！ハアアアアアアッ……………」

意識を集中させ、そのままドラグレッダーと共に空へ舞い上がる！
ドラグレッダーの炎を纏い、龍騎はそのままクラウン目掛けとび蹴
りを食らわせた！！

『ギヤアアアハハハハハッアアアアア！』

クラウンは爆死する。二人は急いで道化師の後を追うが、全く見当たらない。

それだけでなく街のあちらこちらにローチが見えた。

「今は追ってる場合じゃないみたいだな」

「ああ、そうやな。アイツが原因って事は分かつてるのに……」

少し悔しそうに、彼らはローチ達に向かって行くのだった。

「うわっ！」

「クロハ！危ない、気をつけて！」

レンゲルの背後にいるローチを、ギャレンが打ち抜く

「大丈夫！？」

「うん、助かったよダイアナ」

「べべべ別にアンタの為なんかじゃ……」

「ないんだからねッ！ってか！」

ディケイドは半ばうんざりしながらローチを切り裂いていく。動揺しながら弁解するギャレンを無視して、ディケイドは戦いを続ける。

「くそっ！いつの間にこんなッ！」

ディケイド、ギャレン、レンゲルの3人は、街中に徘徊するローチ達にてこずっていた。

このローチ達、気のせいか時間がたつに連れて増えていくような感じがする。

…そう思うが、根拠のない話だ。とにかくローチ達をはやく倒さなければッ！

「くっ！きりが無い。このまま増え続けられたら！」

「馬鹿！変な事考えてないで集中しなさい！」

3人はローチの群に囲まれ、少しずつ離れ離れになっていく。

「うわっ！」

戦いに集中していたため、
デイケイドは今自分が立っている所が崖の近くという事に気づかなかった。

ローチの攻撃を反射的にかわしてしまい、バランスを崩す！

「しまっ　ッ！」

もう遅い。デイケイドは崖から下に転落していく！

「司君！」

「大丈夫！あそこはそんなに高い崖じゃないからッ！」

しかも変身しているのだ、死ぬことはないだろう。
助けに…行くことは難しい。このロープ達をなんとかしなければ…

「ダイアナ！」

「くっ…」

ギャレンとレンゲルは少し早急かと思いつつも、状況を打破するカードを使うのだった。

『アブソープ・クイーン』 『アブソープ・クイーン』

二人は自分の腕に装備されているラウズアブソーパーを起動させる。
そしてさらに一枚のカードをラウズさせた

『フュージョン・ジャック!』 『』

象と孔雀を模った紋章が二人の体に現れ、金色が鎧に追加されていく。

それだけでなく、二人の武器に変化が訪れる。

ギャレンラウザーには刃が、レンゲルラウザーには鉄球がそれぞれ追加される。

「ウオオオオオオオオオオツツ！！！！」

レンゲルが周りのローチをまとめてぶっ飛ばす！

ジャックの力を借りる。

文字通りジャックフォームに変わった二人はローチ達を全滅させる為、その武器をふるうのだった。

第87話 ？笑ウ悪意ト道化？（後書き）

レンゲルのジャックって象なんですよね。

つまりあの伝説のシーンで仮にレンゲルがジャックになっていたとしても…

では次もよろしく！

第88話 ？世界の奪取者・デイエンド？（前書き）

二話更新の理由は、まあ普通に2〜3日くらい更新できないと思うので

今日やっと11月かなど。キリも良々そうなのでね

ではおひげー

第88話

?世界の奪取者・デイエンド?

「いつつ……うッ」

体中が痛い。デイケイドはよろつきながら立ち上がった。

いくら低いとはいえ、崖から落ちたとなれば無事ではすまない。

まあどこも折れてたりしていない様なので、それは安心する。

「とり合えず…戻るか…っ」

まだローチはあちこちにいるだろう。

全く、クラウン、シアゴースト達といい最近こんなのが多いな……

全ての人を守りきる事は難しいだろう。

その事に少しイラつきを感じ、デイケイドは歩き出した。

「みーつけた」

「は？」

思わず足を止める。

岩の上に人が座っていた、そいつに話しかけられたのだ。

「初めまして…じゃないんだっけ？フフッ」

歳は…まあ俺と同じか少し上くらいだろうか？

男は立ち上がると、司を見下す様に視線を送った。

「・・・？」

なんだか偉そうだな…まあいいか。

「今は危ないですよ！早く避難してください！」

「ああ、もちろん分かっているとも」

「は？」

あれ？そう言えばコイツどこかで…
それにさっき確か、初めましてじゃない…って

「・・・」

俺は記憶の糸をたどる。ええと、たしか…

「あ！…！！」

思い出した！あの時！あの時だ！

「あはは、思い出してくれたのかな？そうさ司…だったね」

そう言って男は何かを投げてきた。

俺はそれを受け取るとなんなのかを確かめる

「じれっ！」

それは赤い体操着入れ！間違いない！コイツ！

「ぼくは海東大輝、トレジャーハンターさ。
まあでも…そのお宝は返すよ、だから」

『カメンライド』

「！」

海東はどこからか銃を取り出し、そこへ一枚のカードを装填した。
そして耳に聞こえてくる電子音。

俺のディケイドドライバーと同じ…だと!?

「ぼくのお宝も…返してもらおうよ!変身!」

『ディエンブレッド』

海東が銃の引き金を引く。

すると、青いカードの様なモノが発射される。

同時に海東の周りにはホログラムのビジョンが現れ、不規則な動きをした後カードと共に収束し装着された。

ディエンド！？

「お前…いや！それより返すって…」

「決まってるだろう？ソレは元々ぼくの物だったんだ。

あの時、君にぶつかなければ…」

ディエンドは銃を俺に向ける！

「あんなベタな展開で…ああ、トレジャーハンター失格だよ」

まあでも…と、ディエンドは笑う。

「拾った物をどうしようかと勝手と言えばそうなる。
と言いついで…」

「!?!」

「試させてもらおうッ! ディケイド!?!」

「くっ!」

『アタックライド』 『アタックライド』

『『ブラスト!』!』』

二人の放つマゼンダとシアン色の銃弾が交差し、互いにぶつかり合う!

だがやはりその形状が物語るのか、ディエンドの銃弾の量がディケイドのモノよりも多くシアンの銃弾がディケイドにヒットする。

「!」

怯むディケイドにディエンドは蹴りを浴びせる。

避けようとするが、その先には銃が待っており弾かれてしまう。
案外接近戦もできるようだ。

だがデイケイドもやられてばかりではない！

攻撃の際を見計らい、デイエンドに向ってライドブッカーソードを振り下ろす。

「くっ！」

今度はこっちの方が有利らしい。

銃で受け止めるデイエンドだが、横ががら空きだ。

デイケイドは回し蹴りをデイエンドに食らわせると、カードをライドさせた。

「変身！」 『カメンライド』 『クウガ！』

デイケイドの姿がクウガに変わる。

銃を構えなおそうとするデイエンドの手を弾くと、拳と蹴りでデイエンドを押ししていく。

なんとか銃を奪いさえすれば、ペガサスで終わらせることができるのだが…ッ！

「フッ…どうやら少しはやるようだね…」
『カメンライド』

デイエンドもまたカードを装填し、引き金をひく！
『カイザ！』 『ガイ！』

「なっ！」

デイエンドの銃からビジョンが出現し、形を作る。
そこに現れたのは、仮面ライダーカイザと仮面ライダーガイ！
どちらもこの世界のライダーではないはずだが…

「そうか…そっちは召喚…って訳か！」

「正解！さあ、行け！」

カイザとガイはその命令に従い、ディケイドに攻撃をしかけていく。一人ならまだしも二人がかりは流石にキツイ。

ディケイドの装甲から火花が散る！

攻撃を受け、さらにディエンドの銃が火を噴き襲い掛かる！

「クソッ！」 『カメンライド・リュウキ！』

ディケイドの姿が龍騎に変わる。

そのままカイザ達の攻撃をかわし、素早くカードをライドさせた

『アタックライド』 『ストライクベント！』

ディケイドの手にドラグクローが装着される。襲ってきたガイを殴り飛ばすと、金色のカードをライドさせた！

『ファイナルアタックライド・リユリユリユウキ!』

「はあああッッ…」

ドラグクローの口元が赤く輝く!

「ヤアアアアアアアッ!」

ディエンドは舌打ちをすると、ガイにとび蹴りをくらわせた。大きく吹き飛ぶガイ。そのおかげで、ディケイドが放った炎の弾丸を回避できたのだった。

しかしその炎弾が着弾した際に巻き起こる煙が、ディケイド達を巻き込む!

「ちっ、コレが目的だったと言う事かな?」

煙でデイケイドの姿は完全に隠れていた。

これに乗じて奇襲をしかけるつもりなのだろう。

デイエンドは神経を集中させる、なるべく背後が空かない様に移動して銃を構えた。

「……」

実は、見えないのはデイケイドも同じだった。

だがデイケイドはソレを気にする事もなく。二枚のカードを取り出す。

「……………はっ」

それはイリユージョンとキバのカード。

デイケイドは小さく笑い、それを発動させたのだった。

「ウオオオオオオオオ！」

「……っ！」

煙の中、大声が聞こえる。同時に現れるドツガフォームのキバ！
煙は計算ではなかったのか？

ならば話しは早い。ディエンドはもちろんその方向に銃を構え同時に発砲した。

しかしドツガの鎧はソレを弾き、そのままコチラに向ってくる。

「成る程、作戦は無く真っ向からと言っ訳か……」

でも…

「残念。ぼくには効かない、あきらめたまえ」

『ファイナルアタックライド・クロスアタック!』

カイザのブレイガンから金色のポインターが発射される。

怯まない事に慢心していたのか、ディケイドはそれを受けてしまう！
網目の様に光は広がり、完全にディケイドの動きを拘束した。

そしてその背後にはガイが契約モンスター、メタルガラスと共に立っていた。

ガイはそのままメタルガラスに飛び乗ると突進攻撃へビープレッシュ
ヤーを発動する！

カイザもまた、ブレイガンを構えた突進ゼノクラッシュを発動し挟
み撃ちを仕掛けた！

ディケイドは逃げ様とするが、拘束が外せない！

「ッ!」

2つの突進がディケイドに命中し、ディケイドを吹き飛ばす！

ディケイドはそのまま動かなくなってしまった。

どうやらこの戦いは、ディエンドの勝利のようだ。

「やれやれ、正直ガツカリかな。

もっとぼくを楽しませてくれると思っていただけに残念だよ」

ディエンドは期待はずれのディケイドを見る。

転がるディケイド…

そしてデータの残骸となるディケイド！

「なっ！」

やられたッ！これは…イリユージョンか！

その時、頭部に何かを突きつけられる感覚を覚える。

振り向くと、ディケイドがライドブツカーガンを構えて立っていた。

防御力を込めていたとは言え、

もしも少しディエンドが銃で分身を撃っていたらアウトだったろう

「ッ！」

ディエンドもまた振り返り銃を構える。交差する二つの銃…

「どうだ？少しは期待にそえたかな？」

「ああ…前言を撤回するよ」

二人は同時にバックステップで距離をとる。

「まあ、合格点をあげてもいいかな。
もういいや、それは君に預けておくことにするよ。」

感謝したまえ」

「…どうも」

「だが勘違いしないでくれたまえよ！」

ぼくはトレジャーハンター、そのドライバーはいずれ…

このお宝パイレーツストロングツイスタースターズが頂こう」

「……………え？」

「いや、だからいずれそれは頂くよって…」

「あ、いや違う違う、そのもうちょっと前、何ていった？」

「いや…だから！いずれそのドライバーは
お宝パイレーツストロングツイスタースターズが頂くよって……………」

「……………ん？」

「え？」

「今…ちよ、何て言ったの？」

「いや、だーかーら！そのドライバーは
お宝パイレーツストロングツイスタースターズが…！」

「え……………あ、あの…お宝…何？」

「お宝パイレーツストロングツイスタースターズ…！」

「お…おっぱいって………引くわ」

「違つよ！やめてよ！お宝！」

「お宝…？」

「そう！お宝！次はパイレーツ！その次はストロング！」

「お宝…パイレーツ、ストロング…」

「そう！やればできるじゃないか！
その後はツイスター！最後はスターズ！」

「ツイスタースターズ！」

「よくできましたッ！さあ繋げてみたまえ！」

「え……あ、えーと、お宝ストロングパイレーツスター……あれ？スターツイン……？」

「違う！違う！違うよ！」

「お宝パイレーツストロングツイスタースターズ！！！」

「ああ、悪い！えつと、お宝パイレーツ……パイレーツ……えと……」

「ス！ス！ス！」

「スター！」

少年、デイスは嫌がるディエンドを掴んで引きずっていく。

「悪かったな、司………だったか。ウチのリーダーが迷惑をかけた」
デイスは少しやる気のなさそうな眼をしていたが、それに反して深く頭を下げる。

「ああ…まあ、別に…」

「お詫びと言ってはなんだが、少しだけ情報を」

「情報？」

「ああ、どうやら今街にいるローチは『ジョーカー』と言う化け物から
生まれた存在の様だ。

ローチを撃退するよりジョーカーを見つけ出して殺せ。

そうすればローチは全て死ぬ」

「成る程……」

この世界でのジョーカーの役割と言う事なのだろう

「まあ、これくらいしか言える事はない。
せいぜい頑張ってくれ、またいずれ会つかもしれないからな」

「？」

そう言って二人は司の前から姿を消した。

「ディエンド、アイツは一体……」

また疑問が増えてしまった。
一体何モノなんだ……

「まあ、覚えておくれ。」

お宝パイレーツツイスターストロングブラスター！」

司はジョーカーを探すため、走り出すのだった。
名前を間違っている事には気がつかないまま…

第88話 ?世界の奪取者・デイエンド? (後書き)

デイエンドの召喚したライダーはエネルギーの塊です。
イリユージョンみたいなものかな

クロスアタックはFAR扱いで、一世界一度しか使用できません。
使用すると召喚したライダーは消滅します

こんなところかな今は?
では次もよろしく!

第89話 ? 亀裂(ライアー) ? (前書き)

はい、と言う訳でね

また今日からちよいちよいで更新…かなw?

ではござい…

第89話 ? 亀裂(ライター) ?

一方学校では、傷を負った咲夜と椿が無事に帰還して玄関に着いたところだった。

我夢とアキラが椿達をいち早く見つけて駆け寄る。

咲夜の背中から血が出ているではないか、それを見て二人の表情が一気に変わった

「大丈夫ですか！先輩！」

「あ…ああ、大丈夫だ」

泣きそうになるアキラをなだめると、咲夜は優しく微笑む。

我夢の能力で傷は癒えていくが、それでもちゃんと手当てをした方がいいだろう。

「アキラさん。先輩を保健室に連れて行ってあげてください。

ここは場所が場所だから…手当てもお願いします」

「う、うん！」

咲夜はアキラに支えられて保健室へ向う。
我夢もまた心配そうに椿に手を差しだした。ガタガタと震える椿に
違和感と、緊張を覚えながら…

「わ、悪い……へ、へへっ、結構かつこ悪いな、俺」

「いえっ、そんな事…！」

「いいんだ……」

もっと、自分はうまくできると思った。
すぐにライダーになってハイ、終了。

その程度にしか考えてなかった。

椿は消えてしまいそうな程、小さな声でそう呟いた。

「……………」

我夢はなんて声をかけたらいいのか迷う。だから…

「何があっても…椿先輩は椿先輩です」

「……！」

自分の思いだけを口にして椿の手を引き、起こしたのだった。

「どつですか…?」

咲夜は少し不安そうに葵に問いかける。

だが葵はニツコリと笑って背中を撫でた、その笑顔に咲夜の緊張も緩む。

「うん、心配しないで。大丈夫、傷も浅いし痕にはならないから」

「そうですか…」

咲夜はホッと息をつく。

彼女とて女性なのだ、そういって心配もあつただらう

「良かったですね」

「あはは、ありがとう」

アキラと咲夜は安心したのか笑い出す。
しかしその時、二人の笑い声に重なるように二つの笑い声が聞こえた。

「！」

二人がその方向を見る。

そこにはゼノンとフルーラがいた。

相変わらずヘラヘラと笑っている二人に少し違和感を覚えながらも、今は気にしないでおう

二人は木の上に座っており、それに気づいた葵は窓をあけた。

「どじしたの？」

葵の問いに二人は笑って答えた。

「傷が浅い？ハハツ、君たちは勘違いしているよ」

「え……」

「実はね」

あまりにもあっさり告げられたソレ。3人は思わず固まってしまったのだった。

「おう…もう、大丈夫なのか…」

「…あ、ああ」

保健室から出てきた咲夜を椿と我夢は出迎えた。
怪我はもういいのだが、何故か手当てを行ったアキラと葵の表情は

暗い

「……………」

不思議に思う我夢をよそに、咲夜はもう大丈夫と笑う。

「椿…その……………」

咲夜はすこし悲しげな表情でうつむく。
流石の椿もふざける気にすらなれない、少しの沈黙が続いた後咲夜が口を開いた。

「すまない……………」

「な…なんでお前が謝るんだよ……………」

悪いのは…俺なんだから。

そう呟く椿を、咲夜は悲しげな表情で見詰める。

何かを言いたい様な、そんな表情。

だが何も言わない。いや、言えないのだろうか？

咲夜も、椿も泣きそうな顔。

我夢とアキラはなんとも言えぬ喪失感を覚える。

あれだけ普段馬鹿な事ではしゃいでいる二人が、今は会話すら交わそうとしないのだ…

洒落に、冗談にならない恐怖。初めて覚える絶対的力の差
今まで化け物や人間を殺す存在なんてテレビでしか見た事がなかった。

最初の世界でワームに出会ったとき、良太郎に助けられたことで錯覚してしまった。

やはり、自分は大丈夫なのだト　　ッ

キングと目を合わせた時、本能がキングを拒絶した。
完全に戦意を喪失してしまった………

相手は人間ではない、化け物だ

「……」

「……っ」

だが今この状況もかなりキツイものがある
椿は気まずそうに口を開いた。

「お、俺…キングと戦ってみようかな…」

「先輩!？」

冗談とかそうでないとか、真偽は置いておくとして椿はその言葉を口にする。

彼としては少しでもこの空気をどうにかしたいと思っただけの行動だった。

だが、以外にもソレを真っ向から否定する者が現れる。

「っ!？」

椿の胸ぐらがつかまれ、同時に投げ飛ばされる。

壁に叩きつけたれた椿は、苦しそうな声をあげて咳き込んだ。

「ゲホッ！ゲホッッ！！な、何すんだよ！」

「・・・」

椿を投げ飛ばしたのは、咲夜だった…

「咲夜先輩!？」

我夢の驚く目を無視して、咲夜はまだ倒れている椿を見下ろすように立つ。

髪で隠れている為に表情は読みとれないが、あまりいい雰囲気ではないという事が嫌でも伝わってきた。

そして、ポツリと咲夜の口から言葉が漏れる。

「
か?」

「ゲホッ!!は…はあ!？」

「また……逃げるのか？」

「ッッ！？」

咲夜は椿が立ち上がるのを待たずして、再びその言葉を口にした。また、逃げるのか？という意味なのか我夢たちにはイマイチ分からない言葉だったが、椿にとっては深く突き刺さる内容だったらしい。

咲夜は申し訳ないと、悲しげな表情だったのに……
一気に怒りの表情に変わる

「……どう言う、事なんだ？」

「決まっている。もう一回言ってやるのか？」

「あ……？」

「そんな事を言っておいて、また…どうせ、逃げるんだろ…？
お前はいつもそつだ。」

口ではでかい事を言っておいて、いつも逃げる。戦おうとしない」

お前は！！

咲夜は椿の目をみないまま声を張り上げた。

「ずっと逃げてばかりの臆病者だッ！！」

「！！！！」

椿はグツと歯を食いしばる。何か思っ節があるのだろうか？
しかしそんな彼を気にする事なく咲夜は言葉が続ける。

感情を爆発させる様に流れていく言葉…

「ああそうさ！戦いたくねえよツツ！怖いさ！

あんな化け物と戦って勝てる自信なんてねえんだよっつ！」

椿もまた声を荒げる。だが、咲夜は怯む素振りすら見せない。

「いい加減にしろツ！甘えるなよ椿！

皆、ちゃんと変身しているんだよ！

なのにお前はうじうじ、うじうじッ！情けない！」

「くっ！」

「咲夜先輩！」

我夢が止めに入ろうとするがそれをアキラと葵に止められる。

「っ!？」

驚く我夢、二人が泣きそうな表情をしているからだ。
特にアキラは小さく震えている。

それが気になったが…今はなにより椿と咲夜が……

「しょうがねえだろうが!! 負けたら死ぬんだぞ!
そんなのこえーに決まってるじゃねえか! お前なんなんだよ!」

「だから戦わないのか? 負ける? 死ぬのが怖い?
戦っても無いのによく言えるな!

結局お前は戦う前から負けると決め付けているだけだ！
臆病者のする事だな！」

お似合いだ！一生そうやって怯えている！
咲夜は椿を突き飛ばす。

「っっ！何だよ何なんだよ！？はっ、お前はいいよな別に…
アイツと戦わなくていいんだから！
何とでも言えるよな！」

「ああ、そうさ。ワタシはブレイドになる必要なんて無いからな！
だが、お前は違う！いつまでもいい訳並べてないでッ！
キングを倒す為に稽古でもなんでもしろ！」

今のお前は　ッ

咲夜は椿の目をまっすぐ見て言い放つ

「足手まといのお荷物なんだよ……！」

「ツツ……！テメエえええ……！！！」

「先輩っ！」

椿は咲夜の襟元を掴む。

にらみ合う二人、だが咲夜は尚も続ける。

それはもはや椿を煽るだけのようにも見える程だ

「殴るのか？臆病なだけでなく器まで小さいなお前は。最低の人間だ！」

「くっ……！！！」

椿は悔しそうに歯を食いしばりながらも、咲夜を離し背を向ける

「言いすぎです！咲夜先輩！椿先輩だって」

「もういいんだよ我夢！コイツには…っ」

椿は咲夜たちに背を向けたまま歩き出す。
我夢は困ったように椿と咲夜を見た後、椿の方へと走っていった。

「・・・」

それを咲夜は何も言わずに見ていた。

何も……言わずに

「あの……きつと咲夜先輩も悪気があつて言つたわけじゃ……」

コインを弾きながら我夢は笑う。

表が出ようが裏が出ようがいい方向になるように彼は願つた。

いつもケンカをしている二人を見てきた、だが今回のケンカは完全にいつものような…おふざけではない。仲良くして欲しいと願うのに、どうしてこうなってしまったのか…

「……あの女はもうどうでもいい」

「……」

椿は悔しそうに石を蹴る。

分かっている、でも怖いモノは怖いんだよ！

うずまく心の中、感情の奔流は椿を飲み込んでいく。理解はしている、でも怖い。

なのにアイツは……

「あああ！クソッ！」

悔しい、むしゃくしゃする！

正論だよアイツは！だから何だっつてんだ！？

人間の心は正論じゃ語れないんだよ！あああ！うぜえええ！

「・・・」

我夢はため息をつく。

何度もコインは裏と表を指し示すが、何も考えられない。

一体どうすればいいんだろうか？

何かできる事はないのか…？

「…はあ」

正直全く思いつかない。

我夢は自分の無力さにため息をつく。

何故か、無性に嫌な予感がしているのは気のせいだろうか？

第89話 ? 亀裂(ライアー) ? (後書き)

噂ではクラヒフォーゼには昭和ライダーがでるみたいですね
これはちょっとRXでぶっちぎらせて頂きましようかね

では次もよろしく!

第90話 ？自己満足のブラックゲーム？（前書き）

始めに補足を…

この世界ではカリスマもターンアップです

第90話

? 自己満足のブラックゲーム?

「・・・っ!」

「お前!」

ダイアナとクロハはバツクルを構える。

前から歩いてきたモノは、うるさい程の笑い声をあげていた。

何故かとても楽しそうなそいつは、二人を確認すると地面に倒れ笑い転げる。

不快、その一言に尽きる。

狂ったように笑い続けるピエロの様な男、ダイアナとクロハは得たいの知れぬ恐怖を感じる。

こいつは普通じゃない、体が、直感がそう告げる!

逃げたい衝動に駆られたが、そいつの後ろを子供のようについて来た化け物を見るかぎり敵なのだろう

「ダイアナ…危なくなったらすぐに逃げるよ」

「ええ、わかってるわよ」

『『ターン・アップ!』』

エレメントが現れ二人を通過する。
ギャレンとレンゲルに変身した二人はそれぞれのラウザーを構えて走り出した。

「ストオオオオオッ!」

「!」

笑い転げていた男が声をあげる。
思わず立ち止まる二人に、男は耳障りな拍手を贈った。
賞賛でもないその拍手。意味なき行動は二人の不快感を加速させる

「こんにちは、ワタシは道化師!あなた達はギャレンとレンゲルで

すね！アハハ！」

そうやって道化師は帽子からソレを取り出して二人に見せ付けた。まるで子供が友達に自慢の玩具を見せびらかす様な素振り、しかし二人はソレを見ると一気に雰囲気を変える！

「それはっ！」

「ッ！！！」

驚く二人が面白いのか、道化師はケラケラと笑う。道化師が取り出したのはバツクルだった。

それは二人と同じモノ。

つまり…

「！」

道化師はさらに一枚のカードを取り出す。

いわゆるカードスリーブに包まれたそのカード、道化師は笑い続けながらそのカードをバツクルにセットしたのだった。

この世界ではバツクルとカテゴリーエースのカードでライダーに変身する。

バツクルはキングと契約を交わした時にキングから貰う物なのだ。

つまり、そのバツクルを今道化師が持っていると言う事は……

「まさか……」

「んふ！そう、そのまさかってヤツでっすねえ！……」

道化師はバツクルを腰に装着する。

そして、そのハンドルを引いた！

「へんしんー!!」

『ターン・アップ!』

「!?!」

エレメントが出現し、道化師を通過する。
そしてそこに立っていたのは…

「カ……リス……?」

「なんで……?」

驚く二人に道化師は恍惚の表情を浮かべる、尤もその表情は彼らには読み取れないだろう。

仮面が隠しているのだから！

「ふふっ！ヒヤハハハハハハハ！」

素晴らしい！

理解できないモノを直視した人間の浮かべる顔とはなんと滑稽か。ああ愚かで、醜く、そして美しい！道化師は満足だった。

だが、まだまだ。もっと楽しませてもらわないと。

「契約：したのか？」

道化師はハートのライダー。カリスへと姿を変えていた。パロキサアンデッド達、ハートのスーツに認められし者のみが変身できるカリス！

確かにハートのアンデッドは気まぐれな者が多い。

だがいくらそうだと言ってもこんな怪しいヤツをマスターとして認めるだろうか？

報告まで忘れるのだろうか？

その答えはカリス本人が告げる

「はぁ？けいやく？ブプツ！する訳ないじゃないの！ホホホホ！」

じゃあ何故？

カリスはどうして存在しているのだろうか！？

そんな二人の様子を読み取り、カリスは適当にカードを取り出してソレを二人に見せ付ける。

「あああ、契約はしてないけどカードは貰ってますよ。ホレ！」

「……」

「なっ……」

カリスが取り出したカードは黒いカードスリーブに包まれていた。二人はすぐに理解する。あのカードスリーブが原因なのだ！

「それは!？」

「ヒヤハハ! どうです? ワタシが作ったんですよ?

お前らゴミみたいにチマチマ契約なんて馬鹿な事しないでさ!

コレさえ使えばアンデッド共を楽に支配できんですよ!

ヒヤハハハハハハハハハハッ!

そう言っただけカリスはカードを地面にばら撒く。

黒いカードスリーブにハートのアンデッド達は包まれていたのだ。

カリスは笑いながらカードを踏みつけると、耳障りな笑い声をあげる。

「ワタシは道化! 玩具はたくさん持っている!

素晴らしい玩具を作る天才なんですよ!」

『リモート』

「ハハハ…は？」

カリスはいきなり襲い掛かってきた
タランチュラアンデッドとギラファアンデッドの攻撃をヘラヘラ笑
いながらかわす。

「おおあああ！危ない！危ない！ヒヤハハハ！」

『貴様：我々をなめるなよ…』

『今すぐハート達を解放してもらおうか』

ギラファとタランチュラはカリスを睨みつける。
しかしカリスは相変わらずふざけた態度で二体を小馬鹿にしていた、
その余裕はどこからくるのか？

「はいはい！確かにあんた等はお強いお強い！
ただどね、ワタシが何の対策もしないとお思い？」

『何ッ？』

『キヒヒヒ！』

「遊んでやれ！ジョーカー！」

カリスの合図と共にカミキリ虫の化け物、ジョーカーが動きだす。キラファとタランチュラに狙いを定めると、ブーメランを構えて走り出した。

『ヒヒヒヒヒ！』

『フン！』

キラファはジョーカが投げたブーメランを弾くためにバリアを張った。だが、異変はその時起こった。

ジョーカーの武器がバリアに触れると、バリアはいとも簡単に割れ、ブーメランはそのままギラファに命中する。

だが、本当におかしいのはそこからだ。

単にブーメランを投げただけの攻撃、それなのにギラファのバックルが展開する！

これはアンデッドが過剰なダメージを受けた時に展開するもの。

あんな攻撃で展開するはずが無い！

『グウウウ！貴様アア！何をしたアアアッ！』

だが、現にギラファは立つことすらままならず、膝をついている。あの攻撃がそれ程の威力を持っていたと言う事なのだろうか？

「ヒヤハハハ！サイツコオオオオオ！！」

腹を抱えて笑うカリス。その様子にレンゲル達もわれに帰る。

「ジョーカーか！」

「ヒヤハハ！その通り、この人工アンデッド・ジョーカーはお前らアンデッドに対する切り札。」

「言えばアンデッドキラー！お前らの特殊能力はコイツには効かないですよお！
逆にジョーカーの攻撃はアンデッドに対しては絶大な効果をもたらす！」

つまり…

「不死者共がアア！テメエら詰んでんだよお！ギャハハハ！」

「くっ！」

ギャレンとレンゲルはすぐにキングをカードに戻す。
自分達ならジョーカーと戦えるはずだ。

二人はそれぞれ武器を構えてジョーカーとカリスを睨む。

「ハッ！君たちをぶっ殺して残りのアンデッドも頂きますよ。
せいぜいワタシを楽しませてくださいね？ヒヤハハ！」

カリスはキノコを取り出しあたりに投げる。
次々に出現するクラウンオルフェノク達、ギャレンとレンゲルの表情が曇る。
敵の数が多いのだ、リモートで応援を呼びたいが…

『キヒヒヒヒヒヒヒ…！』

ジョーカーに一撃で倒されてしまう…

「結構…厳しい戦いになるかもね…」

「ええ。そうね…」

二人は互いに顔を見合わせる。
ずっとこの街を守ってきた。だが、もしかすると今回ばかりは…

「ウオオオオオオオオ！」

無数のクラウン、ジョーカー、ジョーカーが生み出すローチ。そしてカリス。

圧倒的戦力差だが、彼らは負けられない。彼らは自分達の世界を愛しているから

「無駄なんですよ。この世界は滅びる。ワタシ達の玩具になるんですよ！ヒヤハハハ！」

第90話 ？自己満足のブラックゲーム？（後書き）

カリスの姿はライダーって訳じゃなくてマンティスアンドレッドなん
ですよ

まあでもこの世界ではライダーとしてお考えください

では次もよろしく！

第91話 ？芝居下勝利？（前書き）

ライダー関係ないんですが後書きでエヴァの感想書いてます
なんかそう言うのが苦手な方は注意してください

ではござい！

第91話 ? 芝居卜勝利?

レンゲルはラウザーを振り回しクラウンを弾き飛ばす。

さらに豪快な蹴りでローチ達を押し出していき、そのままジョーカに攻撃をしかけた。

まずやはり狙うのはジョーカーだろう、この街に徘徊しているローチを消滅させなければ希望はない。

『キヒヒヒ!』

しかし黙ってやられるわけもない。

ジョーカはバック転でレンゲルとの距離を離す。だが、ここまでは予測できた。

軌道を読み取り、ギャレンは銃でジョーカに狙いを定める!

『キャハハハ!』

『ジジジジジ!』

「くっ!」

ジョーカーを庇うようにクラウンとローチが立ちふさがる。
構わず打ち抜くが、ジョーカーには届かない！

「背中ががら空きですよ。お嬢さん？」

「なっ！グッ！」

背中に痛みを感じて振り返る、そこにはカリスがいた。
カリスアローで切られたと言う事だろう。
ギャレンは舌打ちをしてカリスとの距離を空ける為、後ろへ跳んだ。

「甘い！」

『バイオ』

「え！？」

カリスアローからバラの蔓が発射され、ギャレンに絡みつく。

そのまま引き戻されるとカリスの蹴りが待っていた。

「ぐっ！」

「ヒヤハハハハ！」

苦痛の聲がカリスにとっては最高のBGMらしい。

レンゲルは急いで助けようとカリスの元に向うが、こちらもクラウドやローチに阻まれてしまう。

さらに襲い掛かるジョーカの攻撃。

「クソ！」

『ブリザード』

レンゲルが放つ冷気にクラウドやローチは抵抗できず、氷の檻へと閉じ込められる。

それを次々に砕いていくが、ジョーカだけはそうもいかなかった。

素早いフットワークで冷気をかわし、レンゲルに攻撃をしかけていく。
レンゲルもそれを受け流すが、ジョーカが召喚するローチにいつの間にか囲まれ、反撃を許してしまう！

「ヒヤハハ！死ね！死ね死ね！」

『チヨップ』

カリスはその手を振り上げギャレンの脳天を狙う。
ギャレンはいまだに蔓が絡み付いており避ける事ができない！

「そう簡単にやられるもんですか！」

『バレット』『ラピッド』『ファイア』

【バーニングショット】

ギャレンの放つ無数の炎弾がカリスの体にヒットする。

コレにはまいったのか、カリスは小さく呻くとバイオを解除しギャレンから離れた。

煙が上がる腹部を押さえてカリスはギャレンを睨みつける。

激しい憎悪のオーラを感じ取れたが、ギャレンは冷めた目でソレを見返す。

「ああああ！クソツ！ガキがあつああ！」

「ふん、それが本性かしら？」

『アブソープ・クイーン』

ギャレンはラウズアブソーパーを起動させる。

そして、ジャックのカードを発動させた！

『フージョン・ジャック！』

ギャレンの体が金色に包まれ、ジャックフォームへと変身を遂げた。カリスはイライラを隠すようすもなく、地団太を踏んでクラウンオルフェノクを盾にする

「甘い！」

『アツパー』

ギャレンは飛翔し、カリスに狙いを定める

「くっ！」

カリスは素早く弓で何かを発射し、離れたところで交戦していたレングルに何かを当てる。

若干それが気になったが、ギャレンの攻撃を避ける手立てはない。

ギャレンはそれを確信し、勢いよく拳を突き出した！

「ヤバイ！……なーんてねっ！」

「え？」

『シャッフル』

突如カリスの体が消え、代わりにレンゲルがカリスのいた場所に現れる。

「あ……」

それに二人は気づくが、もう遅い。
ギヤレンの拳はレンゲルに命中し、レンゲルは大きく吹き飛ばす。

「ぐあああああッ！」

「そんなっ！」

「ヒヤハハハハハ！」

『トルネイド』『ドリル』【スピニングアタック！】

「きゃあああああ！」

竜巻を纏ったカリスのキックがギャレンにヒットする。
同じく大きく吹き飛ばすギャレン

「あ…ぐう…」

ヤバイ。このままでは負けてしまう！二人に焦りが生まれる。対照的に笑い続けるカリス達。

「まてっ！」

「あん？」

その中に飛び込んでいくモノが一人！

「変身！」

ベルトが赤い旋風を巻き起こし、同時に姿が変わる！

「ハアッ！」

「!？」

カリスに向って攻撃をしかけたのはライダー。
だがカリスには見覚えがない、アンデッドを使って戦うのはこいつ
等だけのはずだ。

と言う事は…

(前のヤツらと何か関係があるのか…？チッ、ややこしい！)

「オラッ！」

「グウ！」

ライダーの拳がカリスの顔面をかする。

「お前が道化師かつ!？」

「だったらどうなるのかなあああ?？」

「お前のせいで！どれだけの人が悲しんだのか！分かってんのかよッ！」

ライダーの拳がカリスを完全に捉えた！

頬に走る衝撃がカリスのイライラを加速させていく！

カリスはその不快な状況を打破するためにクラウンをライダーに向わせた。

数さえあればコイツを取り押さえ

「超変身！」

「は？」

ライダー。クウガは、ドラゴンフォームへと姿を変える。

向ってくるクラウン達をひとつ飛びでかわすと、レンゲルの所まで一気に駆け抜ける。

「大丈夫！？」

「う…うん！」

「ええ、何とかね」

「よかった。じゃあ悪いけどちょっとコレ借りるよ」

そう言っただけでクウガはレンゲルラウザーを蹴り上げて片手で持つ。するとラウザーはドラゴンロッドへ姿を変え、クウガの手に収まった。

「援護を頼む！」

「ええ！まかせて！」

「僕もまだ大丈夫！」

クウガはロッドを巧みに操り、ローチヤクラウンをいなししていく。そしてあっという間にジョーカーの前までやってきた！

ジョーカーは素早い動きでクウガを翻弄しようとするが、ドラゴンに変わったクウガにとって今のジョーカーの動きなど単調なものと同じ。すぐにロットでジョーカーを攻撃していく！

『ギツ！キヒヒヒヒヒ！』

避けようともクウガのロットはソレを許さない。
ジョーカーに確実に与えられていくダメージ！

ローチやクラウン達はギャレンの弾丸に阻まれ、ジョーカーを援護できない！

「クソがああああ！調子に乗ってんじゃねえぞオオオオオ！」

カリスのイライラは最大点に達する。

あのライダーが何者なのかは気になるが、自らの最高傑作であるジョーカーを傷つけられるのは我慢できなかった。

カリスアローを構えてクウガの所へ走り出す。

「ウオオオオオオ!!」

「何ッ!?ゴワアアアア!」

だが空中から飛んできた鉄球がカリスの体にヒットする。
巨大な衝撃がカリスの思考を停止させる。そこに再び襲い掛かる衝
撃!

「ぐうっ!!」

「ハアッ!」

ジャックフォームに変わったレンゲルの鉄球がカリスを追い詰める。
カリスアローを弾き、その拳は確実にカリスを捕らえる。

「ハアアアアアア!!」

『ギィイイイ！』

スプラッシュドラゴンがジョーカーに炸裂する。

瞬時に体を反らした事で直撃を免れ、ジョーカーは致命的なダメージを負う事は避けられたようだ。

だがクウガの紋章は確実にジョーカーの体にダメージを与えている証拠、

このままいけば　ッ！

「チッ！」

カリス、道化師は焦る。

このままではやられる可能性が出てきたからだ。

正直自分の戦闘力はそこまで高くない、ここでジョーカーを失うのは…

「ヒヤハハハ！ ショウガナイ！ ショウガナイ！ ジョーカー！ 逃げるよーん！」

『キヒヒヒ!』

屈辱ではあったがカリスは撤退の選択をする。

フロートを発動させ、空中に浮き上がると、そのまま飛んでいく

「まてっ!」

ギャレンはカリスの後を追おうとするが、ローチとクラウンに取り押さえられてしまう。

「クロハ!」

「ああ!分かってる!」

レンゲルはギャレンの周りにいるローチ達を吹き飛ばし、そこにクウガはロッドで的確にローチ達を消滅させていく!

「ジョーカーはッ!？」

「あ!あそこだよ!」

「っ!」

ジョーカーもまたカリスに捕まるためジャンプで跳ぶ。
このまま逃がすのか!？ギャレン達は歯を食いしばる。

せつかく黒幕に会えたのにつ…

しかし、その悪い予想は外れることになる。

ジョーカーとカリスの間に、何かが飛んで来たのだ。

「ウオオオオオオオッ!」

「「!!??」」

カリスとジョーカーの間に押し入ってきたのは薫だった。

トライチェイサーに乗り込み、崖からウィーリーと大ジャンプでジョーカー目掛け突撃する!!

『ギビビビウイビッ!』

「なっ!!!」

トライチェイサーのタイヤはジョーカーにめり込み地面へと叩きつける!

「ちいいいい!」

カリスは仕方なく自分だけ上空に飛翔し逃走する。

ジョーカーはトライチェイサーに弾かれ、引きづられながらカリスとの距離を離されてしまった。

「薫！」

「はいよっ！」

薫はトライチエイサーをまるで体の一部のように操り、
ジョーカーに数発連撃を加えた後、クウガの所へ向う！

「はっ、どう？結構練習したんだけど」

「ああ、やっぱり凄いよ薫は」

ユウスケと薫は互いの手をガッチリと掴む。すると、薫の体が光輝
き銃の姿に変わった！

クウガは瞬時にペガサスフォームへと変わると、ジョーカーの武器
を貫き飛ばす！

そしてその後、再びドラゴンフォームになると、次々に連撃を食
らわせていく！

『キヒヒヒイ！』

「フッ！」

ジヨーカの振り下ろされた拳をロッドで受け流し、
回転するように蹴りとロッドの多段攻撃をしかけていく。
反撃すら許さない猛攻にジヨーカーもお手上げのようだ

『ユウスケ！』

「ああ！」

クウガはジヨーカーを援護するため送り込まれたローチ達を受け流すと、空中へ跳ぶ。
当然ローチ達もクウガを追うため飛翔し、追ってくる。しかしそれが狙いなのだ！
クウガはさらにもう一度ジャンプで地面との距離を離す。さらについて来るローチ

「『超変身！』」

クウガは空中でタイタンフォームへと変わる。
タイタンはドラゴンフォームのジャンプを殺し、直ぐに猛スピードで地面へと帰還する。

その下にはジョーカー！

ローチ達はクウガを追うが追いつかない！

そのままクウガは地面へと直行し、ジョーカーを押しつぶした

『ギイイイイイイイイ！！』

流石にコレは聞いたのか、苦痛の声をあげ走り去るジョーカー。
もちろん逃がす訳もない、クウガはマイティフォームになると、
ジョーカーに狙いを定める！

「ハアアアアアアツ…！」

クウガの足に炎がまとわりつき、一歩足を踏み出す度に炎が足を包んでいく！

そのままクウガはジョーカーの脳天に蹴りをきめた。

マイティキック！

ジョーカーは笑い声とも断末魔ともとれぬ声をあげながらはるか後方へ吹き飛ばす！

「……………」

カリスは怒りから拳を強く握る。

爆発するジョーカー、そしてソレをきっかけに消滅するローチ達。

誰がどう見てもクウガ達の勝利だった。

そう、誰が見ても……

第91話 ?芝居下勝利? (後書き)

補足として、ドラゴンの二段ジャンプはタイタンでキャンセルできません。

こんなところかな？

エヴァは昨日ので初見だったんですが、面白かったです。

若干LAS派である私としてはどことなく複雑な気分だったんですが最後のシンジはイケメンでしたわww

てかそれよりも使徒が最高でした。僕、使徒大好きなんですよ

なんか不気味で喋らない敵ってけっこう惹かれます、今回の使徒って前回のリベンジ的な事してますよね。ゼルエルとか特に

まあまだまだ書けそうですが自重しときますw

では次もよろしく！

第92話 ? 悪夢・ジョーカーウイルス? (前書き)

ん、すいません。

ちよつと次の更新はいつになるか分かりません。

できれば早くしたいんですがね

ではごうざー!

第92話

？悪夢・ジョーカーウイルス？

「・・・」

ガコンツ！とジュースが自販機から落ちてくる音が聞こえる。椿はそれをとると、勢い良く飲み干した。

「ッー！！」

少し離れた所にあるゴミ箱に向って、椿は空になった缶を投げた。だが、缶はゴミ箱にかする事すらなく転がっていく。余計に虚しくなる……

（くそっ……）

悔しそうに頭をかくと、椿は缶を拾うために歩き出す。転がっていく缶、そしてそれは暫くして誰かの足に当たり、動きを止めた。

「・・・」

その缶を拾い上げたのは椿では無く咲夜だった。
咲夜は何も言わずにその缶をゴミ箱へ捨てると、椿を睨みつける。
鋭い瞳はさらに鋭利さを増し、椿の心に若干の恐怖を煽らせる。

「んだよ……」

「まともに特訓もせずに…お前、何をやっている。
さっさとキングを倒す準備でもしたらどうだ？」

「……ッ!」

椿は何か反論をしたそうな様子だったが、それを口にする事は無かった。

それを察知してかしないでは分からないが、咲夜は冷たく笑うとまた椿を睨みつける。

いや、睨むと言うよりは見下す…と言った方が近いだろう。

咲夜は言葉にこそ出さなかったが、完全に椿を見下していた。

まるでゴミを見るかのような眼で、椿をじっと見詰める。

それが椿にとっては大変不快であったろうに…

わざとやってるのか？椿の心にドス黒い感情が湧き上がってくる。
自分に非があるという事実がある為、強くはいえないが今目の前に

いる咲夜が鬱陶しくて堪らなかった。

「言いたいことがあるなら言えよッ！
クソッ！何なんだよお前は！！」

「……戦わないお前に価値なんて無い。
尤も、今さら価値がでる事もないだろうがな……」

つまり、椿は戦わない負け犬。

つまり、椿は戦いを放棄する臆病者。

つまり、椿は皆のお荷物！

「何なんだよッ！お前、さっきからアッッ……！」

椿はついに限界を迎える。

咲夜に掴みかかると、彼女を睨んだ。

しかし咲夜は怯む事はない。椿の手を振りほどくと、そのまま椿を投げ飛ばした

「グッ！」

「無様だなお前は、まさか私より弱いとは」

「クッソオオオオオオオ！」

悔しい、悔しい！悔しい！

そして目の前のコイツが…ッッ！

「・・・」

何故か少し汗をかいている咲夜。

それが椿の記憶を呼び起こす、道場で自分より弱いと思っていた咲夜に手も足もでず負けた

……あの時！

「どうだ？見下される気分は。」

お前がブレイドになればワタシに勝てるかもな」

相変わらず咲夜は挑発的な言葉で椿を攻め立てていく。
グツと歯を食いしばる椿と息が荒い咲夜。

窓から射す夕日の光だけが二人を照らしていた。

「椿…ワタシはなあ……」

どンドン咲夜の呼吸が荒くなっていく。

だが椿にそんな事を気にする余裕はない、咲夜が今言わんとしている事から逃げようと眼をそらすだけ。だがそんな事をしても結局耳には入ってくるのだが…

「お前……がつ……嫌い………なんだよ！」

「ッ！」

沈黙、初めて面と向かってハッキリと言われたその言葉。
椿の体から冷や汗がにじみ出てくる。

分かってたよそれくらい、俺もお前なんて嫌いだ。

そう言えばいい、けどどできなかった。
いつものおふざけでは決して無い、だからこそ無性に嫌な気分にな
る。

「……………」

「…っ」

「……………っ」

「？」

「クヒヒヒヒヒヒ！ヒャハハハハハハ！アーツハハハハハ！」

カリスは空中でいきなり笑い始めた。

尤もさつきから笑っているのだが、今のこれは特に異質なモノを感じる。

圧倒的不利な状況だけでなく、ジョーカーまで倒され計画だったろうローチの繁殖を阻止されたのにもかわらず…何故？

どうして笑う事ができるのか？普通じゃない。

「ヒャアアーツハハハハハハツツ！なーんちゃって！」

「は…!?」

「ヒャハハハハ！腹が…！腹が痛いですよワタシは！ヒャハハアハ

八八！

まんまと引っ掛かってんだもんなああああああああ！」

ま、ちょっと焦ったのは本当だけど…カリスはそう言ってクウガ達を見る。

「何っ！？どう言う事だ！」

「ヒヒヒヒヒ！！！」

カリスは空中をクルクルと旋廻しながら尚も笑い続ける。
そしてその笑い声に重なる黒い霧…

「なっ！？」

それは街中を再び包んでいた。そこから現れるのは…

『ジイイイイ！』

無数のローチ！

「そんな馬鹿な！？何で？」

「よく考えてみてくださいよおおお！
トランプつつうのは何枚で構成されてんだあ！？ああ？

ギャハハハハ！そうですよ！ジョーカーは二枚！」

ジョーカーは二枚。

その言葉が指し示す意味はたった一つ！

「ジョーカーはもう一体いるのか！」

クウガの言葉にカリスは笑い転げる。

正解！大正解！カリスは腹を抱えて空中を転がりまわった。

つまりジョーカーはまだ死んでない。

あの青いジョーカーは死んだが、もう一体いると言う事はローチ達も消滅してはいないのだ。

「ヒヤハハハハハハ！ ギヤハハハハハハハハハハ！」

「くっ！」

だが、ちょっと待て。

いくらジョーカーが二体いたとはいえ一度ローチは完全に消滅していった筈だ。

直ぐに新しいローチが生まれたわけだが、すくなくともクウガの眼には一度完璧に消え去ったように見えたのだ。

その疑問は直ぐにカリスにぶつけられる。

カリスはその問いに焦るわけでもなく、断るわけでもない。

あくまでも普通に、冷静に答えた

「フフツ！気がつきましたか。そうです！貴方の言う通りだ！」

「ッ！？」

「ジョーカーは最初一体しか存在していなかった！」

だが、だがしかしっ！」

ローチ達はクウガ達に攻撃をしかけていく。

それはジョーカーが生きているというなによりの証拠。

いや、少し違う

「ジョーカーには特殊能力が一つありましてね！ヒヤハハハ！」

それは！もったいぶったようにカリスは空中を何度も旋廻する。

「それは！ジョーカーウイルス！」

カリス、道化師は語る。

自らが作り上げた対アンデッド用怪人、ジョーカー。

アンデッドに対して絶大な力を発揮するだけでなく自らの化身であるダークローチを生み出し、時間がたつにつれ増殖していくローチと自らで世界すらも滅ぼす事ができる。

道化師の最高傑作である玩具。

「そして、ジョーカーには文字通り切り札を持っているんですよ！
ジョーカーウイルスと言うね！アハハハハハ！」

まるで玩具を自慢する子供の様に、饒舌に楽しそうにカリスは語り始める。

コチラが聞いてもいないのにペラペラとジョーカーの自慢をする辺り、相当な思い入れがあるのだろうか？

「ジョーカーウイルスって何なんだよッ！」

ローチはまだ少ないものの、クラウン達がその数を補っていく。クウガ達はまともにカリスの話を聞いている余裕はないのだ。

「ヒヤハハハ！すみませんねえ、つい興奮してしまいましたー！」

「くっ！」

「ジョーカーは仲間を作る事ができるんですよ。
まあワタシは最初に見つけた人間を狙えとインプットした訳なんですけどね！」

「ヒヤハハハハ！ジョーカーはその力をダーツに変えて具現化できるのです。」

そして、それを打ち込まれた人間は……」

どうなると思います？

カリスは仮面越しに最高の笑みを浮かべていた。
ジョーカーの最大の能力…それは一体…

「おい…おいつ…おいつてッ!!」

椿は目の前で倒れた咲夜を抱えるとその瞳を見る。

虚ろなそれはいつもの咲夜からは想像できないほど弱々しかった。

「おい！大丈夫かよ！」

咲夜は息も荒く、汗を大量にかいていた。

あきらかにおかしい、普通じゃない！

熱は……ないようだが危険な状況だと言う事は嫌でもわかった。

「と、とにかく…っ！保健室！」

治療器具を使おう！

椿は咲夜を抱えると、保健室に向うのだった。

途中キンタロスや我夢と合流し、咲夜を保健室まで連れて行くことができた。

中にいた葵やアキラも咲夜の姿を見て一気に青ざめる。

「やっぱり…咲夜ちゃん…ッ！」

葵は咲夜を直ぐにベッドに寝かせる。

やっぱり？その言葉が少し気になったが今はそれどころじゃない

「ありがとう椿君、皆。

でもごめんなさい…少し服を脱がせたいから外にいてくれない？」

「え？あ…ああ、ハイ。」

椿達が外に出て行くのを確認すると、葵は咲夜の背中が見えるように服を脱がせる。

「!」

「先輩! やっぱり……」

アキラはふらふらと腰を抜かしてしまった。
眼には涙が見える、どうしてあの時自分は咲夜の意味を尊重してしまっただろうと。

「咲夜ちゃん……」

「ハア…ハア……ッ! いい…んだアキラ。
ワタシの我がままなん…だからッ」

咲夜は少し落ち着いたのか意識が戻り、アキラに微笑みかける。
だが、葵から見える咲夜の背中は……

人間のモノとは思えなかった

第92話 ? 悪夢・ジョーカーウイルス? (後書き)

いろいろぶっ飛んでますが、道化師は科学者だったりします
では次もよろしく!

第93話 ? 選択 (サイレント) ? (前書き)

どうも、更新できました。

次はいつだろうw?んー・・・なるべく早くします

後書きでオースの感想書いてます

まだ見てない方は注意してください

ではございぞー!

第93話 ? 選択(サイレント) ?

「今、何ていったの!？」

ギャレンの驚く様子にカリスはますます上機嫌になる。彼にとってこの瞬間こそが至福の時であるかのように、彼はとにかく笑っていた

「だーから! ジョーカーのダーツを受けた人間が、次のジョーカーになっちゃうんですよお!

ジョーカーウイルスに感染してねえ! ヒヤハハハハ!」

さいっこうだとは思いませんかあ! ? ねえそうですよね? 考えてみてください?

例えば貴方の好きな人が感染したとするでしょお? そしたら段々その人は人間じゃなくなっていくんだよ?

ヒヤハハハ! その人も自分が化け物になるなんて嫌だよね! ? だから泣き叫ぶんだよ!

必死に懇願する! 化け物なんかになりたくないって!

だけど無理無理! 結局ソイツはジョーカーになる。

じゃあ貴方はどうする?

必死に直す方法探してる間にタイムリミット！クヒヤヒヤ！残念間に合わなかった。

もう理性すらなくして暴れまわるジョーカー！どうする？貴方はどうするの？

最後の希望とか、あきらめない！とか何とか言っちゃって説得とかしてみます？

ギャハハハハハ！無理無理駄目駄目！

そんな事しても完全にジョーカーになってしまえば説得なんて絶対無駄なんですよおおおお！

じゃあ大人しく殺される？

ハハハハ！分かってる！嫌だよなあ！

嫌ですよねそんなの！じゃあどうすればいいか？殺すんですよ！ジョーカーを！

愛する人だったヤツを！

ヒヤハツハハツハハハハアアハハハハツハ！

最高！もう完璧！楽しいねえ！
だってよお！ジョーカーがいればローチが生まれるんだぜ？
ほっとけば人類は滅亡よ！

いや、世界すら滅びちまうだろ？
だから殺すしかねえんだよツツ！

感染したヤツがジョーカーになる瞬間と、そいつを殺すヤツ。

その時の顔を見たくてしかたねえんだよ！コツチは！

お前がぶっ殺したのは誰でもねえ言わば0号。人間じゃねえただの
化け物よ！

そんなのが死んだって何にもおもしろくねえんだよ！
でももう誰か感染したんだよ！？

ヒヤハハハハ！記念すべき一号目だよ！
んでもってジョーカーが完全体になってダーツを誰かに当てれば次
はソイツが候補者！
永遠に続く最高のシヨー！

なのになのによおおおおお！

そいつを見つげる前にお前らがジョーカーを殺したせいで！

あああああ！クソクソクソツ！
おかげで感染のスイッチが入っちまった！

楽しいショーを完璧に楽しめねえじゃねえええかあああ！
早くそいつを探しにいかねえええと！

狂ったようにカリスはさらに空中へ舞い上がる。
そしてそのままクウガ達の前から消えてしまった。

追いかけてようとしたが、クラウンとローチに気をとられ結局逃がしてしまふ。

3人はすぐにローチ達を倒すものの、もうカリスの姿は完全に見失っていた。

「くっ！今はまだローチの数は少ないけど段々増えてくるんだろ？」

「でも、感染した人がいるのよね！？どうすればいいの！？」

それぞれは沈黙する。

道化師の口ぶりからは直す方法があるとは思えないが…

「殺そう」

「「！」」

クロハは決断する。まだ完璧にはジョーカーになってはいないはずだ。
だったら今の内に…

「感染した人は本当に可哀想だと思う。

だけど…このままじゃローチは増える一方だし、

なにより完全にジョーカーになってしまったら

次のジョーカーが生まれる可能性もでてくるんだ……ッ」

「…できるの？」

「……」

ダイアナはクロハという人間を良く知っている。
答えはノーだ、彼は優しすぎる。

口でなんと言おうが彼にできる筈はない。
もちろん…それは自分も同じだ。

「！」

その時、ユウスケと薫の携帯が鳴る。
二人はそれぞれ頷くと、電話を取った。

「はい…え？ああ…うん え！？」

「嘘…」

どうやらあまりいい話ではなさそうだ。
クロハとダイアナは二人の様子からそう感じ取る。

事実、電話を切った二人の表情はかなり沈んでいた。

薫はダイアナ達を見て、小さく呟く

「実は…見つかったの。ジョーカーウイルスの感染者が……」

「！」

薫の表情から察するに…答えは一つ。

感染したのは、知り合いと言う事だ

「そんな…事って……」

力なくへたり込む夏美や友里。

そして呼吸が荒く、見ているだけで苦しくなる程の咲夜。

そう、ジョーカーウイルスに感染したのは咲夜なのだ。

「ッッ……」

椿は皆から離れてずっと下を見ていた。
咲夜は自分を守って感染したのだ。もし、あそこで自分がドイツを
受けていたなら……

「咲夜ちゃん……苦しい……？大……丈夫？」

真由は水を咲夜に手渡す。

咲夜は苦しそうではあったが、最初よりずっと落ちついていていた。
笑顔でお礼を言うと、咲夜はすこし水を口に入れる。

「皆……ここで話し合うのは咲夜ちゃんに負担をかけるわ。
教室に行きましょう」

葵の言葉に皆は賛同すると、一同は教室へ向う。

「治療器具は使えないのか!？」

「はい…ゼノンくんが言っていました。ウイルスまでは無理だと。一応駄目もとで試してみたんですけど…やっぱり駄目でした」

「クッ…」

「どうにかならないんですか!？」

アキラは耐え切れず涙を流しながら、誰に問うわけでもなくその言葉を発する。

だが、誰一人分からなかった。

その事を聞きつけたクロハやダイアナも駆けつける。

アンデッドの力を使えばどうにかなるのではないかと思ったが、ジョーカーの力はアンデッドに有効に作られている。

結局どのアンデッドの力を持ってしても、ジョーカーウイルスを取り除く事はできなかった。

「やっぱり僕にはできないよ…口ではなんとも言えたけど…
いざ目の前にしたらコレだ」

「……大丈夫。私も同じだから」

目の前で苦しんでいる咲夜。
どれだけの時間が掛かるかは分からないが、このままではジョーカー
になってしまう。

人間ではなくなるのだ…

「そんなのっ…」

友里は唇を噛む。そんな目にあうのはあだし達だけで充分だと。
しかしそんな彼女の心情を世界が理解してくれる筈もない。

苦しむ咲夜は現実なのだ

「・・・」

そんな中、司は必死に打開策を考えていた。
もちろんこんな展開は原作にはない、だが、思い出せ！

何か、何かあるはずだ！

記憶の中からありとあらゆる情報を呼び起こす。
どんな些細なモノでもいい！

とにかく今は何か手がかりを…

「!?!?!」

待て…よ…確かジョーカーは映画で一度封印されたはずだ。

封印…

そう！封印だ。

それならジョーカーを殺さないですむ！

いや、でもそれじゃ根本的解決にはなっていない。

咲夜を封印してしまうのは、死とそれ程大差はないだろう。

なら…待て、落ち着くんだ聖司。

封印…

封印……ジョーカー、ア宁德ッド…

契約……ッ！！

「そうか！これなら…っ」

「何か分かったんですか！？司君」

「可能性は低いかもしれませんが…な！真志！」

司は真志を呼びカードデッキを見せてもらう

「お前は真司さんからカードを受け継いだんだよな！？」

「あ、ああ。そうだな」

司は頷くと、真志のデッキからカードを取り出し確認していく。
そしてその中から二枚のカードを抜き出し、凝視した

「もしかすると…これなら…ッ！」

正直可能性は低いしうまくいく保証も無い。
だがもう他に方法が思いつかない以上この方法に頼るしかないだろ
う。

司は皆にその事を伝える

「なるほど…だが、それには……」

「クロハ！ダイアナ！この世界に」

『はあるか！？』

司の言葉を二人は聞いていた。
しかし悔しそうに首を振る。

「ゴメン。持っていないよ…アレは契約時にキングから一枚だけもらえるんだ。

君の言うモノは僕達の世界ではあまり良く思われないモノだから…

強制封印の道具なんだよ…」

「でも！キングと契約すれば手に入るんだよな！？」

「ええ。つまり…」

「！！」

一同は一斉に樁のほうをみる。

「お、おいおい……まさか……」

青ざめていく椿、司はこくりと頷いた。

「そつだ。咲夜を救えるのかは……お前にかかっている」

第93話 ? 選択 (サイレント) ? (後書き)

はい、という訳でね。オーズ終わりましたねえ

個人的にはタジャドルでラストバトルに挑んだのが印象深いですね、初じゃないですか？中間フォームで決着をつけたの良かったですよ。電子音もちょっとした変化があったり、歌が流れたり、フルギガスキャンとまあやる事はやった感じで

アングの言葉もね……最後の落下シーンは感動しましたよ
後、会長の服ってタトバの色だったんですねww
言われるまで気がつかなかったw

不満点があるとするとするなら……そうですね、
本編でシャウタの歌は流してほしかったかな
あとタトバキックは確信犯だなww

いやー、でも面白かったです。いつも気になるんですけど子供達は
どう思ってるんでしょうね？アングの件はやっぱりショックだった
んじゃないかな？

さあ次はフォーゼですね、どうなるのかww

ではこれで、次もよろしく！

第94話 ？有限のセレクトゲーム？（前書き）

忙しいっす……次の更新も申し訳ありませんが未定で

ではござい！

第94話

? 有限のセレクトゲーム?

「なんだよ…それ……」

椿は震える手を押さえながら地面へ崩れ落ちた。

へたり込む椿に襲い掛かる現実、結局自分はどうあってもあのキングと殺し合いをしなくてはならない。

そして勝たなくてはいけないのだ。

もし司達が戦おうとしたならタイムスカラベを発動されてしまう。正式に、真正面から勝つしかない

ただ背負うモノが増えただけ、プレッシャーに弱い椿にとってまさに地獄と言つべきモノだった。

「椿、悪いが時間はないぞ……」

「嘘だろ…そんな事ってねえよ」

ふらふらと立ち上がり椿は教室を出て行く。
皆、分かっている。椿自身が決断するしかない。

そしてそれは決断したとしてキングに勝たなければならない。
こうしている間にもジョーカーの影響でローチは増えていく、討伐
に出ている美歩や亘達だけでは無理なのだ。そして世界はローチに
埋め尽くされ滅びをむかえる。

「先輩…ッ」

我夢はコインを弾く、出たのは表。

彼が何を思ったのかは分からないが我夢は椿を追いかける為に、自
らも教室をでていくのだった。

「我夢君！」

「？」

我夢が振り返ると、アキラの姿が見えた。
目が赤いのは泣いていたからだろう。

アキラはまだ少し目をこすりながらも、我夢の所へやってくると傳
げな笑みを浮かべた

「・・・」

だけど、我夢はそれがいやだった。

「無理…しなくていいですよ」

「え？」

我夢はアキラの事が好きだ。だが…：…なによりも椿や咲夜、そしてアキラの事を親友として慕っている。

だからこそアキラには自分の気持ちを偽って欲しくない。こんな状況で笑みを浮かべる事が彼女にとってどれだけキツイ事なのか、それは我夢にだってわかる。

「無理…しないでください…っ…：…僕も…」

だけど我夢はうつむいてしまう。

泣き顔を見られるのはやはり抵抗があるものだ…：

どうしようもない不安と、最悪の未来を想像してしまい悲しくなる

「…」

アキラもせき止めていた想いが涙となってあふれ出してしまつ。
二人は暫く互いに声を押し殺して泣いた。

だが、しばらくしてアキラが口を開く。そこから吐きだされるのは
弱音、そして後悔の言葉。

それを聞いてふいに我夢はコインを弾く。

それは彼にとって決断、そして覚悟を決めるある種の儀式。
自分の思いをコインという他の物に託して…

「アキラさん

」

コインの表裏はもはや彼にとっては些細なもの。

我夢は、普段なら恥ずかしくて直視できないアキラの目をまっすぐ
みて話しかける。

皮肉なモノなのかもしれない。

我夢の心から『今は』アキラに対する恋慕の念が消えていた。
もちろん彼のアキラに対する想いは相当なモノだ。

だが、彼はそれを心にしまいこむ。

そうでなければこの状況を変えることなどできないと理解したからだ

「どっしたんですか……？」

「僕達が変わるんです」

「え？」

我夢は齒を食いしばる、椿や咲夜にはもつと笑っていて欲しい。
それなのにこんな結末はあんまりだろッ！

ふざけるなよっ！

道化師に対する怒りが込み上げてくる。
だが、自分は弱い。

司達のように戦う力もなければ、夏美のように行動する力もない。

いや、なかった。

だが、もうそろそろ甘えるのは止めないか？
我夢は自分に言い聞かせる。

「僕達が、この状況を変えるんです」

「！」

「だからその為に…協力してくれませんか？」

「……っ！ もちろんです」

二人は頷く。同じ道場で仲良くなっただけの師弟関係、たかがその程度で何を馬鹿なと人は笑うだろう。

だが、他人にとってはそれだけの絆、しかし我々達にとっては大切な人達なのだ。

ここで終わらせたりはしない。

二人は決心する、椿と咲夜の関係を知っているからこそ彼らは負けれられない戦いに挑むのだ。

『お前は逃げてばかりだな』

「・・・」

椿は校庭に一人たたずんでいた。

頭の中に鳴り響くのは咲夜から言われた言葉、自分は逃げてばかり

……

そうなのか？ああ、そうかもしれない。

いや、そうだ……

いつも、逃げていた。

それでよかった。

今回も…逃げてしまえば…

「クソゲーすぎんだろ……」

逃げられない。俺が勝たなきゃあの女は死ぬ？
世界は滅びる？

ああ、くそっ！なんで主人公みたいな選択せまられてんだよ俺は！

脇役でよかった。なのになんでこんな大役回ってきてんだよ、おかしいだろ！
もっと人選ちゃんとしろよ！！

理不尽な世界に行き場のない怒りを投げかける。
キングに勝て？ふざけんな、無理。
無理なんだよ。あんな化け物に勝てるわけない、どうせ殺されて終わりだ。
ちよっとケンカが強くなっただくらいじゃ化け物には勝てないのと同じ
緒さ

クソ……

「椿先輩」

「ッ!？」

我夢の聲がして椿は振り返る。そこにはアキラと我夢の二人が立っていた。

「な…なんだよ、どうし」

「会ってください」

「え?」

「咲夜先輩に、会ってください」

「……………」

椿はうつむく。

正直、今さらどんな顔をして会えばいいのか…

「椿先輩。私は先輩がうらやましかったです」

「え？」

「咲夜先輩と、椿先輩。とっても仲がよかったから……」

「ハッ、アキラ。お前何か勘違いしてるぜ……
俺とアイツは」

「違いますよ」

「っ？」

「違っんです……」

アキラは今日、初めて咲夜との約束を破る。
ずっと守ってきたその約束、アキラは心の中で咲夜に何度も謝った
のだった

「え？」

「だから……おかしいと思わなかったんですか？
咲夜先輩が椿先輩の話に合わせられる事！」

いつもケンカしていたから頭が回らなかったが、そう言えばアイツ
もなんだかんだ言ってるネットスラングとかアニメの話について来ら
れたような……

「咲夜先輩っ、勉強してたんですよ!」

「え!？」

「椿先輩の話にあわせられるようになって……
ネットで色々調べたり、いろんなアニメ見たり!」

「……マジ!？」

全然知らなかった…

その後も、そんな話をたくさん聞かされる
そのだいたいが咲夜が椿の為になにかをする話だった。

「でも、なんでそんな事…っ」

「咲夜先輩、一度だけ言ってみました」

椿には悪い事をしたって

「!!!」

その言葉で椿の目に何かが灯る。

「僕達には椿先輩と咲夜先輩に何かがあったかなんて分かりません。けど、二人ともこのまま終わるのが最良だとは絶対に思えないんです。」

だから……」

咲夜先輩に会って、話しをしてください

「二人が仲良くしてくれる事だけが、私達のお願いです……」

「咲夜……ッ」

お前……

「……」

「やあ、どうしたんだい？」

「翼くん……」

葵は目の前でスヤスヤと寝ている咲夜を見守りながら、その声に答

える。

額に浮かぶ汗をこまめにふき取ってあげるその姿は、母性に満ち溢れていた。

彼女の夢だった職業が保育士というのも頷ける

「ちょっと…落ち込んでるじゃってね」

「へえ……」

翼は葵の隣に腰掛けると、同じように咲夜を見詰める。

「もし…ウイルスに感染するのが僕なら良かったのに…」

トワイライトならウイルスを殺す事が出来る。

しかし、どんなに…何を言おうが感染したのは咲夜なのだ。

「わたし、気づいてたの。咲夜ちゃんが感染してるって…
だけど……」

咲夜はそれを皆に相談する事を拒んだ。

咲夜は自分が助からないと思えば作戦を立てたのだ、もちろんそんな

作戦がうまくいく訳がない。

葵とアキラは猛反対したが、咲夜はどうしてもと言って聞かなかった。

葵は分からなくなってしまった。

咲夜を助ける為に相談するのが一番の筈なのに、涙を流しながら黙っていてくれと懇願する咲夜を見て咲夜の意味を尊重してしまった。それが正しいことだったのか？咲夜はこうして苦しんでいるというのに……

「成る程ね、うん…難しいね。」

咲夜ちゃんにとってはそれで良かったんだろうけど」

「分かるの？」

「まあね。咲夜ちゃん本人が止めたんだろ？」

葵はコクリと頷いて翼を見る。

驚いた、まだ話していないのにすっかり理解されてしまったようだ。

「あーあ。ちょっと見ない間に成長しちゃって……」

「まあ私は皆の保護者だからね」

「成る程……」

「「！」「」

二人は廊下に響く足音を聞いて静かに立ち上がる。

「保護者って言うっても、彼らはもう立派に歩いているけどね」

悩んだり、迷ったり、そしてそれを乗り越えてこそ人は成長できるんだから

「結構、大変よね……本当に」

「大丈夫だよ、葵さんだって十分皆を支えられてる、僕が保障するよ」

「……ありがとう。もっと皆を助けられるようになるから」

二人は困ったように笑うと、保健室を出て行く。

「さあ、任せたよ」

「がんばってね」

椿君

第94話 ?有限のセレクトゲーム? (後書き)

なんか5日にこのサイトのメンテナンスがあるみたいですね。

ではこれで、次もよろしく!

第95話 後悔ノ独白？（前書き）

今回から二話？くらい過去話になります。これは前編かな

ではどうぞー！

第95話 ?後悔ノ独白?

「お、おじやま…しますよっと……」

椿は気まずそうに保健室の扉を開ける。

なんとなく分かっていただけ、寝ている咲夜以外は誰もいなかった。

きつと気を使って出て行ったのだろう、

こっちとしてはなかなかどうして気まずいんですけど……

「さ、咲夜…さん？」

「……」

「ね、寝てるんですね？」

椿はそつと咲夜の顔を見してみる。

寝ている彼女をまじまじと見るのは何年ぶりだろうか？

前は落書きをするために良く見ていなかったから……

あれはスマンかった

「へ、へへ……」

こんな状況ではあるが懐かしさと、言いようのない切なさが込み上げてきて……

笑ってしまった。

「なんつーのかね……俺とお前って……」

変な関係だよな。

寝ている咲夜に聞こえるわけないのだが、椿は構わず続けた。

「こうして見ると……昔のお前を思い出しますよ。
お兄さんは悲しいね、あんな純粹だったお前がこんなにひねくれるなんて」

「だけど……」

「悪かったよ。咲夜、悪いのは……全部俺だ」

椿は思い出す、今までの日々を……

「長いぞ？」

「そりゃそうだ、お前とは長い付き合いだからな。」

物心ついた時から、俺とお前は一緒だった。

どうやって知り合ったのか？

いつから遊んでたのか？

そんなの覚えてないくらい、前の話なのかもしれない。

お前の家と俺の家にある写真で分かるよ、お前と俺。

いくら赤ん坊とはいえ全裸で並んでる姿はマジで恥ずかしかったわ

それからずっと一緒だった。

毎日遊んでたし旅行とか祭りとか家族ぐるみでアホみたいに一緒に
いったな……

お前の家に何回泊まったか全然記憶にないね。

保育園とか、小学校とか結構からかわれたりもしたな。
お前の事皆の前でブスって言った事は許せよ。

悪かった、申し訳ない。だって恥ずかしかったんだ……

いや、ほんと、すいません

その頃からお前は親の道場に通う事になったんだっけ？
女でも容赦なく投げ飛ばすお前の親達には恐れ入ったぜ。

まあ結局お前はいつも泣いて訳だが…

「つえええん！」

「なんだよお前、また泣いてんのかよ！
最近泣いてばっかだな」

「だってえ……」

「やっぱり厳しいのか？お前のお父さんとお母さん」

「……うん。この前もぬいぐるみ捨てられたの！

あれ、大切にしてたのに！」

「わわわ！泣くな！泣くな！コレやるから！」

「え……？」

「ほら！これ、お前欲しがってたろ？電気ネズミのキーホルダー。
俺進化系の方が好きなんだよ。だから……やる！」

「…いいの!？」

「あ…ああ!これから悲しくなったら俺に言えよ!
椿様が慰めてやろう!約束だ」

「本当に!?!ありがとう!椿ちゃん!」

「あつたりまえだろ!男なら約束は死んでも守る!」

とまあこんな感じだったな、捏造なんてしてないからな!本当だぞ!

っていうか、あれだね。あん時の俺は最高にイケメンだったな、う

ん。

そうやって俺はお前を励ます事が日課になりつつあったんだっけ？
お前本当に毎日泣いてたからな。

俺としても多分お前が泣くのは嫌だったんだろっね。

今は逆に泣いてもらいたいもんだが……

どうにもあの時の俺はお前に甘かった。
お前は本当に何をやっても駄目な少女だったな！

クッソ！

「椿ちゃん！待ってよお………」

「ははっ！早く来いよ！置いてくぜ！」

「きゃー！　うえええんツ！」

「……ったくしょうがねえな！」

「……」

運動もだめ。何も無いところで転びやがって…

「椿ちゃん！これわかんない！」

「あー…これはだな…」

「すごい！わかるんだ、椿ちゃんは頭いいね！」

「つたりめえよ！椿様は無敵なんだぜ！」

「すごい！」

頭だつて俺の方がずっとよかつた。

お前なんだっけか？ 一時期、卵を暖めてひよこにするとか言ってたな。

それでお前が暖めてたのが、ゆで玉子だもんな。

ひよこになる訳ねえだろ！

「椿ちゃんは凄いね…」

「え？どうしたんだよ」

「椿ちゃんは友達もいっぱいいるし、
おもしろいし、なんでもできるし！」

「お前だってそのうち凄くなれるさ。
今は柔道やってるんだっけ？」

その内俺を投げ飛ばせるくらいになってもらわないとな」

頑張れよ。俺はそう言ったんだっけか？
ああ、そうだな、あの時は互いに純粹だったよ

でも、ずっとそのままなんてありえないって、分かったのに……

「・・・」

本当に、悪かった。俺が馬鹿だったんだよ。

お前は本当に頑張ったよな、マジで熱心に勉強とか習い事とかいろいろやってさ。

小学校卒業するくらいかな。

お前本当に成長してたよ…

中学は……そう、最初クラスが違ったんだよな。

「ねえ椿ちゃん、一緒に帰ろう？」

「……えっ？」

校門でそんな事言われたから戸惑ったぜ。
なんか同じクラスの奴がヒソヒソ喋ってるし、俺は何かまたそう言
う噂になるのが嫌だったからお前を無視して歩き出しちまった。

「ねえ！ちょっとどうしたの椿ちゃん！」

「ッ！！」

ねえ聞いた？椿ちゃん。だつてえー……クスクス。

ちゃんってマジかよ、ダセー。

何アレー！カップル！？

「ッッ！」

分かったた。分かったたさこつなる事くらいッ！

だけど……分かったたけどいざ言われるとキツイ。
だからつい声荒げちゃたんだよ

「お前！ちゃんと止めるよ！子供じゃねえんだからよ！」

「えー？あ……ごめん。椿……くん」

「……呼び捨てでいい。」

「うっうん。ごめんね椿……」

その後暫くしてだよ。

俺がお前のファンクラブがあるって知ったのは。

まあ……たしかにお前は綺麗だったさ！

だげだよお

ッ！

いやいや酷いね厨二病患った馬鹿は

『咲夜さんと気安く喋ってんじゃねえよあの男』

『特別カッコよくもねえくせに。アイツ咲夜ちゃんの何なんだ？』

『ウゼエ。しめちまうか？』

『おい、俺の咲夜様と会話してんじゃねーぞ！』

『アイツ調子のりすぎじゃね？』

「・・・ッ！」

シラネーよクソ共が！

そんなにあいつが好きならさっさと告白でもなんでもすればいいじゃねーか。

わざわざ聞こえる声で喋ってんじゃねーぞッ！

あああクソ！ウゼエ！

どこの誰かも知らないヤツに殴られた時もあった。
お前は咲夜さんには似合わない？

何様だよクソ野郎が！

「ッ！」

そう、あの時から何かおかしくなってきたんだな。
もちろん俺だけだ、お前は悪くねえ。

お前は部活も勉強も学校生活もちゃんとやってた、だから人気がある。

ああ、当然だ。

「椿！聞いて？あのね、ワタシ」

「……なあ、お前さあ。そう言う女みたいな声やめろよ」

「え？だってワタシ女」

「……ッ！いや、だから。」

もっと俺には男みたいな感じで接しろって言うてるの。

なんかこう　　ッ
「

見ていたアニメのキャラクターを例にすると、お前は渋々頷いてくれたっけか？

ありがとう。

「わ、わかった。っ、椿がそう言うならワタシもそうしよう」

「おう…それで…いい……」

だけど、それで俺への嫉妬が減ることは無かった。
むしろ増えてきたっけ、本当ふざけてるよ。

そうやって徐々に俺達の関係はおかしくなってきた。

「椿、テストはどうだった？ワタシはなあ」

お前は十二番、おれは半分より下。

いや、下から数えた方が良かったかもな

「なあ椿、聞いてくれ。今度クラス対抗リレーがあるんだが、
それでワタシがアンカーなんだ！」

俺はクラスの足手まとい。

そう、お前のファンクラブの会員様に足手まといだって言われたよ。

まあ、否定できないんだけどな。

そつだ、お前はもう勉強もスポーツも、学校生活も全てにおいて俺を突き放していた。

正直虚しかったね俺は、自分で言っというてなんだけど。

お前が羨ましかった。

で、同時に妬みもあった

『なんだよアイツ、また今日も咲夜さんと一緒にいたらしいぜ』

『たいして成績もよくねえくせに、咲夜さんに馬鹿が移ったらどうするんだよ』

『一緒にいるのってきつとアレだろ？金とか払ってんじゃねえの？アハハハ！』

『アイツ、咲夜さんに近づかないで欲しい』

『ほんとよね、咲夜お姉さまにはもつとお似合いの人がいるわよ！』

『ルックスも並、成績と運動神経はカス。

咲夜さまと肩を並べる資格なんて無いわね』

『あーあ、ムカつく！ 消えろ、消えろ！嫌われる！学校くんなよ

』！

『あははは、お前酷すぎ！あはははは！』

「 ツツ！！」

うぜええんだよツツ！カス共がああツツ！成績も運動能力も！

ルックスもテメエらより百倍マシだわ。さつさと消えろよアホ共が！

何で俺なんだよ！何で俺ばかり言われなきゃならねえんだよ！！
くそツ！ちくしょうっ！！知らない！俺は関係ない！！

悪い、あの時からだ。お前に対する不快感つてのが浮かび上がってきたのは。

だから あんな事言っちゃったんだよ。

「あああ！ウゼエな！お前！もう二度と話しかけてくんなよ！
絶交だわ！縁を切るよお前とは！！！」

「……！！！」

お前はただ家庭科で作ったクッキーを持ってきてくれただけなの
な。

あの時のお前の顔は……

悪い。一生忘れないつもりだった……

でもお前の泣き顔を俺は心にしまいこんでたんだよ

とにかく、あの日俺はお前を一度拒絶した。

お前は泣いて走っていたな、でも俺は追いかけてなかった。

だって追いかけたら、また言われると思ったからさ……

そう、これでよかったんだ。

もう俺はお前と話す事はない、他の奴らもそれを望んでる。

そうだ、これでいいんだよ。それでいいんだ

第95話 ？後悔ノ独白？（後書き）

まあね（キリッ）

人生なんてね（ドヤア）

後悔の連続ですよ（ドヤネンナアア）…

では、次もよろしく！

第96話 ？後悔・彼女の懺悔？（前書き）

はい、というわけで今日は二話更新でございます
まあ何故か、それは次の前書きで

ではございませう！

第96話

?後悔・彼女の懺悔?

それから結構の間はお前とまともに口聞かなかったっけか?

ああ、でもまあ嫉妬してる馬鹿共も少しは落ち着いてくれたから…俺はそれでよかった。

そう、それで満足しちゃったんだよ。

でも、駄目だった。なんで笑わないんだよ、昔はお前もつと笑ってたろうが……

あの日から急に笑わなくなりやがって…

もう結構な時間が経ってた。いい加減割り切れよ!

おかげでファンクラブのクズ共に問い詰められたんだぞ

『咲夜さんになんかしたんだろ!?許さない!』

『やっちまえ!許すなコイツを!』

『お前みたいなのやつがッ!!咲夜さんに近づくなッ!』

マジでふざけてる。いきなり皆の前で殴られて、蹴られてよお……

正直お前に対する恨みみたいなモンまで巻き上がった、スマン。

あの時は俺もクズだったのかもしれない、いやお前の事なんて気にしてなかった屑野郎だ

でも、まあそいつ等が皆の前で殴るなんて行動してくれたおかげでアイツが気づいてくれた訳だが……

ありゃマジで助かった。あん時のアイツは輝いてたね俺が女なら絶対に惚れてた。

悪い、適当な事言った。きもちわりー……

「お前らッ！いい加減にしろよ！

こいつが何したんだよ！ふざけやがって！」

俺を殴ってきたヤツがぶっ飛ぶ、俺を蹴ったヤツの腹に蹴りがめり込む。

俺を助けてくれたソイツ、誰だと思う？

真ちゃんよお！ 条戸真志！

真志はファンクラブのアホ共を蹴散らしてくれたよ

まあ真志の話は今はいいや。

それから真志と友達になって司とかと友達になって……
正直お前の事は考えないようにしてた。

でも、中学の三年のときだな。

たまたまお前を見かけたとき、お前かばんに昔あげたキーホルダー
まだつけてたんだっけな？

あれ見たら無性に申し訳なくなつて…さ。

もう俺に何か言ってくる馬鹿もいなくなつたし……なんていうか、
こう余裕みたいなのがあつたんだよ。だからお前に思い切つて話し
かけたんだっけ？

「よ、よ、よ、よ、よ……！」

「……！」

「お、お、お、最近……その、ズブズブ……」

「え……あ、うん。いや、その……悪くない」

「へへへへー。そ、そっか。うん…」

正直ノープランでいった事を後悔したわ。
自分から話しかけといて意味不明な事ばっか…

「あ、あの…悪かった！」

「え？」

「そのっ…お前に酷いこと言って…許してほしい！
なんなら一発や二発ブツ飛ばしてくれてもいい！」

だから　　ッ

まあ、あれだ。確かに俺はそう言った。

でも本当にブツ飛ばすのはどうかな咲夜さん？
あんときは涙が出たね、痛すぎて…ははは。

でもまあ

「よし！許してやる！」

お前が笑った事は嬉しかったぜ。

アレは思えばフラグみたいなモンだったのか？よく分からん。
まあそれから俺達の関係は少しはマシなモンになったな。

ただ、あの時から俺とお前は傷つけ合う事でしかふれ合えなくなっ
た訳だが…な。

あと俺が冗談でお前の家の道場に入るっていったのを信じたのは計
算外だった

でもそれで我夢とアキラに会えた事はよしとしよう、

俺は道場を三日で諦めたがあいつ等に会うために毎日通ってたのは
内緒だぞ！

「……とまあ、俺は身勝手な理由で拒絶しちゃった訳だ。
悪かったよ、謝る。どうか許してくれ」

「……別に、今さら……どうでもいい」

「っえっ！」

起きてたのかよコイツ！うわっ！なんか恥ずかし！

「悪かったな……つか、あのさ、お前ってツンデレなのか？」

「はあ……い……み……わからん」

「あの……アキラからいろいろ聞いた。

お前さあ、心遣いはありがたいけど本気で傷ついたらんだからな！
俺はガラスのハートだっての！」

「……どの程度……聞いた？」

咲夜は呼吸が荒い、おそらく相当苦しいのだろう。
だが、あえて椿はいつもの様に接する。

咲夜とてそれで良かった。

いや、それが良かったのかもしれない

「あー……まあ、かなり……いろいろ。バレンタインとか……」

「ああ……アキラは……後でお仕置きだな……」

「うわー、可哀想なアキラ……」

俺は小学校後半からバレンタインのチョコなんざ貰った事はなかった。

いやあつたとしてもかけらみたいなサイズのくそ安い義理の中の義理みたいなヤツくらいだ。

もちろんコイツからも貰った事なんてない。昔は貰ったらしいが忘れた。

ただアキラが言うにはコイツは毎年俺にチョコを作ってくれてたらしい、

結局一度も渡すことは出来なかったらしいけど……

「渡してくれればよかったのに、お前まさか……」

俺が毎年トラックでチョコが運ばれてくるとか言う

アホみたいな冗談信じたとかじゃないよな？」

「当たり前前だ……ッ！」

「俺って結構愛されてるのね！感動しちゃう！」

「フン……言ってる……お前が毎年惨敗で……」

「哀れに思っていただ……け……だ」

「ハハ…ツンデレ乙」

「フフ……ウウツー！」

苦しそうに顔をしかめる咲夜。思わず椿の顔から笑みが消える

「っ！おい、大丈夫か!？」

「ウウウウウ……ッ!！」

咲夜は苦しそうにつめき声を上げる。

しばらくして落ち着きはしたが、体を蝕むジョーカーウィルスの確

かな効果を感じる。

「……お前、どうしてあんな事したんだよ」

「……………」

あの時、ゼノンが保健室にやってきた時だ。
咲夜はジョーカーウイルスの事を皆より先に知った。

だがあえて黙っていたのだ、アキラと葵に無理を言って…

「咲夜ちゃん！本気なの！？」

「そんな！どうして黙っているんですか？」

皆にジョーカーウィルスの事を黙っている様に頼んだのは咲夜だった。

その提案は危険すぎる。

ゼノンとフルーラ以外の二人は信じられないといった表情で咲夜をみる。

「咲夜、君は今自分がどれだけ危険な状況下にいるのか…
まだ理解していない様だね。」

ジョーカーウィルスはボク達にとっても予想外とっていい程の代物なんだよ？」

ゼノンの言葉が3人の不安を煽る。

だが……

「今のままでは椿は」

正直、皆に話したとして…ジョーカーウイルスが治る可能性はどれだけあるのだろうか？

そして咲夜は決断する。自らの命を賭けた勝負にでたのだ。

「今の椿には理不尽な怒りをぶつける相手が必要なんだ。

アイツはヘタレだから…」

だから、ワタシがその悪役になる。」

「え？」

「・・・」

そこから咲夜はもう何も言わなかった。

葵とアキラに無理をいって自分が感染している事を黙ってもらった。

どうして？

咲夜は瞬時に計画をたてていた。

もう絶対椿はキングと戦う意思を持ってないと悟る。

だけど椿がブレイドに変身しなければどうしようもない。

ならばせめて自分が犠牲になる事で椿に分かってもらいたかった。

今自分がどれほどのモノを背負っているのかを…

咲夜は自己犠牲をとったのだ。

まず自分が椿に嫌われる事で椿への想いと、自分がジョーカーになった時に椿に変な気を使わせないようにする。そして自分がジョーカーになる直前にキングに戦いを申し込む。これですこしキングにダメージを負わせ、その後椿に譲る…

ああ、今にして見ればなんと安易で考えなしの作戦だったのだろうか！

ジョーカーウィルスの影響はここまで体に負担をかけるとは考えて

なかった。

それにジョーカーになったとしてうまくいく確率なんて低いし…
なによりジョーカーになった自分をそう簡単に倒してくれる人がい
るなんて

どうしてあの時考えていたのだろうか？

ああ、もう情けない。咲夜の瞳から涙があふれて来る。

結局自分が生んだ結果なんてせいぜい目の前のコイツに嫌われた程
度じゃないか…

ああ、情けない、情けない！

第96話 ？後悔・彼女の懺悔？（後書き）

今日はフォーゼなのかな？

どうなんだろう、フォーゼが終わるまでにはこの作品も終わってるのかww？

では次もよろしく！

第97話 ?資格(ライダー) ? (前書き)

まあ更新理由はしばらくできないかもしれないと言っ事だね

ちょっと熱風ライダー意識した感じにしてみました

ではどうぞー！

第97話

? 資格(ライダー)?

嫌われただけ、その言葉に椿は反応した。

「別に、嫌ってなんかねーよ。」

つか、その話聞いてお前嫌うって俺そつとつ鬼畜だぞ…
流石の椿くんもそこまで落ちてねーよ

「……ははっ、それは…どうも…ウウッッ…」

「っ！ 苦しいのか？」

「ははは…正直、かなり苦しいよ椿…」

「っ！…！」

「冗談だよ…ははは。ウウッ！ お…いつ、椿……………」

冗談ではない。

椿もそれを理解する、きつともう直ぐ

「…何だ？」

「ワタシは……死……ぬの……かな？」

「……！」

「分かつ……てる……、ワタシが自分で決めた事だ……なあ椿　ッ」

そして、咲夜は椿に向って謝る。

過去、自分のせいで椿にいろいろ迷惑をかけてしまった事。

それがどういふ事なのかは分からない。

でも、椿に迷惑をかけてしまった事は本当に申し訳なく感じていた

「何でお前が謝るんだ……」

「いいじゃないか、普段の謝罪だ……
こんな時くらいしか素直になれないなんてな……」

「お前は何も悪くねえよ……悪いのは……俺だ」

ずっと……逃げてばっかです

「……なあ、一つだけ聞いていいか？」

「……?」

咲夜は飛びそうになる意識を気合で保つと、椿のほうをみた。
虚ろな瞳と目が合う、いつもの光はもうない。

「お前……俺の事好きか？」

「ッ!? あ……あはは……」

咲夜は苦しいのか…それとも悲しいのか、
どっちともつかない表情を浮かべて涙を流した。

「ああ…好きだったよ」

なんの迷いもないその言葉。だが待て、だったよ？
怪訝そうな表情に咲夜はまた笑う

「今は…もう…勘弁してほしいな…私の初恋が汚れる……」

「どう言う意味だよ!!」

咲夜は乾いた笑い声をあげると、再び苦しそうに呻く。

もう彼女が何を見ているかさえわからない

「ハア…ハアッ…む、昔の…お前は…本当にカッコよかったよ…
ワタシのヒーロー…だった…」

「あー今は、どうなのかなー？」

「…カスだ」

「…うおい…」

「違うのか…?」

「…うえええい…」

咲夜の声が段々小さくなっていく。
これは…もう

椿は目を背けたかった。けどできない、逃げてはいけないのだ！

「昔は…楽しかった……」

「とても高校生の発言とは思えねえな……」

「いつ……からだろうな？ワタシと……お前は」

「ああ、俺とお前は傷つけ合う事では分かり合えなくなった」

「また」

「・・・」

「昔みたいに…」

普通に喋るだけで疲れる。咲夜は言葉を言い切る前に口を閉じてしまった。

だが、椿はまるで咲夜が何を言おうとしていたのかわかったように、彼女にむかって頷いた。

「できるさ…時間は掛かるかもしれないけど…」

俺とお前は、きっと昔みたいにまた、遊んだり、笑ったり」

まあ、今の関係も悪いもんじゃないだろ？

椿は咲夜に微笑みかける、咲夜も弱々しくだったが

ちゃんと微笑み返した。

「すまん……もう……限界かもしれない……」

皆に迷惑をかける。咲夜の目からどんどん涙があふれて来た。自分がした事は一体なんだったんだ……結局は全部、無意味じゃないかッ！！

「本当に……申し訳な」

その時だった、咲夜の涙を椿が拭う。

似合わない事をするじゃないか、そう言うのはイケメンがやってこそ絵になるもんだろ。

咲夜は小さな声でささやくように言う。

「俺だって、イケメンよお！リア充椿くんだからな。と言うか」

言っただろ？お前が泣いてたら慰めてやるって

「ハハ……キモイなお前は。鳥肌が立ったよ」

「うるさいなお前は本当に！

男なら、約束は死んでも守るもんだからよお」

「ドヤ顔……か、失笑ものだよ」

だが、咲夜の目からはどんどん涙があふれて来る。

呼吸が落ち着いてきた、これは決してよくなった訳じゃない。

なぜなら、彼女の首から下の皮膚が明らかに人間のモノではなくなっていたからだ。

このまま…自分は咲夜を見捨てるのか？

ああ、そうだな。そうに違いない

いつも自分はそうだった。

解決できねえ問題が増えてきて山積みになっていったら抱えきれず押し負けて、ビビッて逃げてきた。
何もしない、できない。

それで適当にいい訳つくって自分を騙してハイ、終わり。

「・・・」

だけど、コイツは必死に毎日を生きてきた。
いつもそう。道場の練習も、勉強も必死に頑張って…

でも、コイツはあと少しでジョーカーになる。
俺より苦労して、俺より頑張って、俺より…凄くても…

化け物になる

俺はカウントダウンにビビッて…タイムアウト。
それって意味あるか？俺の人生って意味あんのか？

そんな逃げればかりだよお…ッ。

ねえよなあッ！！

「椿：最期に一つ、お願い…きいてくれないか…?」

最期、おそらく彼女は死を覚悟しているのだろう。
当然だ、化け物になれば殺してもらうほうがいい
死んだほうが世界のためになるのだ

「何だよ？」

「ファーストキス……」

「は!?!」

「まだ……なんだ……お前、あるか?」

「ね、ねえよ!」

「……だろうな」

「ちよ、おまつ、オイっ!!」

へー以外ですね、咲夜様ほどの美少女が!ケツ!」

「だって、好きな……人とっ、したかったからあ……な……」

咲夜の声が弱々しくなる。
どんなに強がっていても化け物になる恐怖が彼女を襲う、それは並みの恐怖ではない。

彼女は怯えていたのだ。

「…で、俺にどうしろってんだよ」

「つくづく…っ、女心が分からんな、貴様は……
ねえ？椿…ちゃん？」

昔と同じ呼び方、椿はやれやれと苦笑する。

「そんなに昔の俺はイケメンでしたか？」

「あはは……はは……冗談だよ、椿……」

椿は軽いため息をついて、自らの顔を咲夜の顔に近づけたのだった。

『ほう、よりにもよって貴様か』

その場所は、多くの人間が戦い……命を散らしたであろう場所。
円形闘技場コロッセウム。

今日もまた、ブレイドの力を求めた愚か者が一人やってきた

キング、コーカサスビートルアンデッドは向こうから歩いてきた少年を睨みつける。

「・・・」

『成る程……』

逆に睨み返してきた少年に、キングは賞賛の念を込め立ち上がる。

『何があったかは知らんが、あの時よりは少しだけマシになったと言っ訳か』

「テムエ何偉そうな口聞いてんだ？俺はお前らのマスターになる男だぜ？」

『まさかテストを受けに来たとは……』

キングが合図をすると、少年の隣にカテゴリーAビートルアンデッドが現れる。

エースである彼は少年に向かって一礼を行った。

『本当によろしいのですか？』

テストを受けるといふ事は、死を覚悟していただく事になります。

キングに敗北をすれば、あなたは死ぬのですよ?」

止めるなら今、とビートルアンデッドは少年に警告をする。

だが少年はそれを拒み、再びキングを睨みつけた。

両者が放つ…剣のごとし視線は、この闘技場を包み込み切り刻む!

『成る程、意思は固いか。いいだろう、エース。力を貸してやれ』

ビートルアンデッドは頷くと、少年に跪く。

そしてブレイバツクルを少年に渡した。

少年はブレイバツクルを見つめると、にやりと笑った。

震える足は…気のせいだろうか?

『貴方の勝利を心から願っております』

その言葉を発すると同時に、ビートルアンデッドはAのカードに変わる。

そしてそのままバツクルへと装填していった。

少年は何も言わずにそのバツクルを腰へと持つていく。

そしてゆっくりと変身のポーズをとった、それはもう逃げないとい

う何よりの証拠。

『人間、今まで私の元にはお前の様な人間が多くやってきた。絶大な力を望むもの、愛するモノを守るモノ、それは様々だ。』

貴様は…何の為に私に挑むのか？』

少年はキングの目を見てこう言った。

視線と視線の剣が激しくぶつかり合う！

「見返したい女がいる。あいつをぎゃふんと言わせるには、お前らの力が必要なんだよ。」

悪いけど、協力してもらおうぜ」

『フツ…成る程』

キングは剣を構えて少年の前に立つ。
理由はただのオマケでしかない、今日の前にたっている少年が自分
に勝てば忠誠を誓う。

ただそれだけの事なのだ

「……変身」

『ターン・アップ』

エレメントが少年の前に展開される。
少年はゆっくりと深呼吸をついてソレをみた。

『これが最後の警告だ。ソレを通り抜けた瞬間、貴様はもう逃げら
れない』

「上等だ。もともと逃げるつもりもねえ」

ああ、そうだ。もう逃げない。

今までずっと逃げてばかりの人生だった・・・

自分からも　　ッ

アイツからも目を背けて・・・

互いに傷つかない最良の選択だといいい訳をして

結果、互いに傷ついてよぉ・・・

だから、もう止める。

止めた、もう逃げるのは止めることにするわ。

『・・・』

一歩、エレメントに向かって歩き出す。

それは命を賭けた戦いに参加するという何よりの意思表示。

『命を散らす気か？それとも、私に…勝てると？』

「さあ？どうだろうな…」

「だけど、と…少年は足を速める。足の震えは消えていた。震えなんて邪魔なだけだ引っ込んでろッ！！」

「だけど、俺はお前に勝つ。ああそうさ。できる筈だぜ？
尤も、俺に…仮面ライダーとしての資格があるのなら

…「だけどな」

守輪椿は一気に走り出す。
そして……

エレメントを…潜り抜けた！

その姿が、ブレイドに変わる！

「キング！ 覚悟しろよおおおおおおおおおッ！…！」

『来いッ！その力で私を屈服させてみるオオオオオオオッ！…！』

二人の剣が、激しい音と光を発しながらぶつかり合ったのだった

第97話 ?資格(ライダー)? (後書き)

仮面、剣でムジユラを思い出しました。

なんか最後の方の台詞が頭ん中に残ってます

君の本当の顔はどんな顔？

だったかな？結構好きですねこの台詞

まあいいやw

では次もよろしく！

第98話 ? 決意のデュエルゲーム? (前書き)

フォーゼが始まりましたね

いやいや、中々いいんじゃないかな?

しかしキックが鬼畜すぎるww

ロケットの勢いでドリルぶち込むとか誰も勝てねーよww

ではどつど!

第98話

? 決意のデュエルゲーム?

「ウオオオオオオオオオオオオオツツ!!」

『・・・』

ブレイドの剣をキングは避ける事無く受け止める。

キングは公平を期すために、ブレイラウザーと自らの剣であるオー
ルオーバーの威力、リーチを同等にしてある。

そして防御力も同じ、つまり二人のステータスは完全に互角なのだ。
つまり、どちらかのセンスが勝敗を決つする。

暫くは互いの連撃がぶつかり合う、呼吸すら忘れるほどの猛連打
ッ!

「ウエエアツッ!」

『ハアアツツ!!』

ブレイドが振り下ろした剣をキングは弾き、同時に腹部に蹴りを入れる。

後ずさるブレイドにさらに拳を打ち込んでいき、袈裟切りを決めた。

激しく火花を散らすブレイドの鎧。

そして同時に襲い掛かる痛みが、ブレイドの心までを折ろうとしていた。

痛みが恐怖を呼び、ブレイドの足を鈍らせる。

キングはその震える足を払うとブレイドを地面へと叩き伏せる！

そこに剣で強烈な突きを浴びせると、さらに蹴りでブレイドを苦しめていく

ああ、イテエ…怖い！怖いッ！

ブレイドの心によりハッキリと死のビジョンが焼き付く。

だが、同時に思い出す。彼女の…咲夜の涙を

「ウワアアアアアッ！」

『クッ！』

ブレイラウザーを思い切りキングの足に突き刺すッ！
焼きつくような激痛で、キングはブレイドから少し距離を離れた。

「ウオラアアッ！」

『グッウウ！』

飛び上がるように切りかかるブレイド。
キングは何とか剣でそれを防ぐと、さらに突きでブレイドの僅かな隙を狙う。

また火花を散らすブレイド。だがブレイドはその剣を掴み、自らも反撃の突きを繰り出した。

お返しにと言わんばかりの突きだったが、キングは素早く頭を反らしその突きをかわす。

かわりに、自らの腕に力を込めてさらに突き上げる！

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア ツツ！！！」

人生の中で味わったことのない激痛。

ブレイドの口から自分ですら聞いたことのない叫びがあがる。

だが、ブレイドはあくまでも冷静さを忘れないようにしていた。焦りは即、死に繋がるのだと何かで読んだ事があったからだ。

「うああああああ ！」

折れそうになる心を叱咤激励しつつ、ブレイドはキングの手を狙った。
剣を持つ手を攻撃すれば、剣を離すと考えたのだ。

『甘いな…ッ!』

「あああ?」

キングはソレを読んでいた。
突き出された剣を瞬時に弾き返すと、さらに剣を深く深くブレイドに突き刺していく。

「
」

声にならない叫びを上げて、ブレイドの体から力が抜ける。
すぐに体に力を込めようとするが、キングの頭部が眼前に迫ってきた事を理解するまでには間に合わなかった。

激しい音と共に飛びそうになる意識、キングの頭突きでブレイドの脳が揺れる。
痛みすら忘れてしまいそんな程の衝撃!

しかしさらにまた直ぐ襲ってくる痛み、肩を剣で切られたのだ。

火花がまたブレイドの体から散る。

キングはふらつくブレイドの首を掴むと、そのまま締め上げた。

『所詮はその程度か…』

ギリギリと力が込められていく、ブレイドを睨みつけるキング。ブレイドはその王たる瞳に恐怖を感じながらも、挑発の言葉を投げつけた。

キングは少しため息をつく、ブレイドの体を何度も切りつけていく。

「ウアアアアッ！アアアア！アアアアアアアアアアッウー！！」

崩れ落ちるブレイド、立ち上がるうと力を込めるが駄目だった。ブレイドは諦めたように息を吐くと、仰向けになる。

「あー…綺麗な空だねえ……椿君かんどー……」

雲、太陽、そしてそれに重なるキング。

ブレイドを見下す様に立つと、剣を喉元へと突きつけた。

『どじやら…ここまでのようだな』

「ハア…ハア…！ 何？残念賞とか…ないんですかね？」

『楽に天国へと送ってやろう。それでどうだ？』

「そりゃ……ありがたい」

ブレイドはもう一度全身に力を込める。

しかし駄目のようだ、だらしなく四肢を広げてため息をつく。

『愛する女の為に戦い、死ぬ。酔狂な生き様だったな』

「おいおい、愛する女とか冗談だろ？」

CG手に入らなくてもいいからアイツの個別ルートだけはやりたくねえわ」

『何を言っているのか、理解できんなお前は』

「愛する？ 死ぬ？ おいおい、冗談キツイぜ。
俺はただ……」

約束を守るだけさ

「男なら……約束くらい死んでもまもらねえとなあ？」

『ますます理解できん男だ。できればもう少し観察していたかった
が……』

もういいだろう。キングは剣をブレイドに当て、一度離す。
狙いを定めたのだ、キングは一撃で絶命させる為に剣を高く引き上
げる。

「あーあー…もう止めた。どんな事してでも勝つわ」

『もう、遅い。死ね』

キングは剣を思い切り突き出した！

が、しかし！

『何ッ！？』

「ハッ！」

ブレイドは素早く転がり、その突きをかわす。

『貴様ッ！動けないというのは演技だったのか！』

「ウエアアアアアアア！！」

キングは渾身の力を込めたため、剣が深く地面に突き刺さってしまった！

引き抜こうと手を伸ばすが、ソレをブレイラウザーが遮断する！！

『グッ！』

手にほとばしる痛み。さらにそのままラウザーで切りつけられていく。

『グオオオオ!!』

「ヴエエエエエエエエエエイツッ!!」

振り下ろすブレイラウザー。
だが、キングはソレを両手でしっかりと受け止めた！

「..?」

『フンッ!』

真剣白刃取り。

キングはブレイラウザーをブレイドから奪い取ると、そのまま斬りつける!

「シユ　　ッッ!!!」

『グッ!?!』

だが、キングの目に衝撃と痛みが走る。
ブレイドの手にはいつの間にか石が握られていた。

それを目に投げつけられたという事が、
普通の投石でも目という場所をピンポイントに狙えば大きな効果になる。

やられた!　キングの狙いはそれ、逆にブレイドに蹴りを入れられ

てしまった。

『チツ！』

剣を振るうがそこにブレイドの姿はない。
鮮明になる視界と共に飛び込んできたのは、自らの剣を引き抜くブレイドの姿だった。

キングはブレイラウザー、ブレイドはオールオーバー。
両者は互いに相手の剣を構えて対峙する。

「『ウオオオオオオオツツ！！』」

走り出し、同時に斬りかかる！
火花を散らす互いの剣、キングは体をひねる様に斬りこんでいく！

が、ブレイドもまた上空へとジャンプしてその斬撃をかわす！
そしてそのままキングの肩に強烈な一撃を加えた。

苦痛の声をあげながらも、キングはそのまま突進でブレイドを弾く。
同時に剣でなぎ払う様に斬った。

倒れないように踏み込むブレイド、そこへさらに追い討ちをかけよ
うとキングはブレイドに詰め寄る。

しかしそれがブレイドの狙いだった。

ブレイドはそのタイミングであえて倒れキングの剣をよける。
同時に自らは剣を突き出し、自動的にカウンターを決めた！

『グッ！ガア……ッ！』

「へっ！」

両者はそのまま滅茶苦茶に斬りつけあう。
防御という単語を忘れたかのように互いの力をぶつけ合った！

「！」

『！』

両者の剣が弾かれ、上空へ舞う。

どちらが先に剣を掴むか？

二人は地面を蹴り上空へと舞う。

伸ばす手の先にはそれぞれの剣、信念がある！

第98話

? 決意のデュエルゲーム? (後書き)

オーズがセイヤー!

ブレイドはウエーイ!

個性は大切、だけど公式は最近ふざけすぎだと思いますw
ライジエネとかクラヒとかもつと気合いれるよw

あとクラヒオーズのギャレンとの掛け合いは絶対わざとですよね
中々攻めてくるな公式……さすがだぜ……

では、これで。次もよろしく!

第99話 ？運命ノ切り札？（前書き）

えっと、すみません！

ちよっと次の更新は未定で

いや……忙しいです

ではごじげん…

第99話 ? 運命ノ切り札?

「ウオオオオオッ！」

『ハアアアアッ!』

ブレイドはブレイラウザーを、キングはオールオーバーを手にすると同時に地面に着地した。
そして同時に斬りつける！

ぶつかる剣と剣。にらみ合う二人ッ！！

「おうおう、もういい加減…降参してもいいのよッキングちゃん！」

『馬鹿を言え、貴様が私のバツクルを展開させるか
それともお前の命が先に消えるか？』

『この2つ以外に決着はないッ!』

そして、その結末は…貴様の死で終わる！

キングの渾身の一撃をブレイドは防御しきれずに大きく吹き飛んでしまっ。

口中に広がる血の味、バウンドし叩きつけられた瞬間飛ぶ意識。

「うううう……」

何とかその体を起こし、剣を構える。

ぼやける視界の先、陽炎の中に佇むキングもまた剣を構えていた。

まだ、終わらない。両者が感じる戦いという証明！

『普通の人間ならばもう十は死んでいただろう、

…にも関わらずまだ貴様が立っていられるのは

ブレイドの鎧を纏っているだけではないな……』

「・・・」

ボロボロになりながらもまだブレイドの闘志は死んではない。
それがキングにとっては疑問だった。

愛する者の為に戦う人間が稀に見せるこの現象…

キングの心にその事についてもっと知りたいという感情が少し湧き
上がった。

2019

『もう一度聞く、その女の事を愛してはいないのか？』

「・・・ちあね」

『..?』

「何か俺でも分からんわ。でもあの女は…あんな馬鹿な事で死ぬべきじゃねえ。」

今まで散々俺を馬鹿にしといて勝ち逃げなんてさせるかよ。

殺すなら俺がぶつ殺してやるってんだ……

それに、約束があるんでね。アイツとは」

『ますます分からんな。そんな女の為に命を賭けると？』

小さな約束の為に苦痛を受けると？』

「……そうだな。自分でも馬鹿だと思うよ、本当に。」

現に今死ぬ程体がイテエ……」

『お前は死ぬかもしれんのだ。ソレを理解していたのか？』

「ああ、というかお前に勝つ確立なんて無いに等しかったらうよ。」

それこそ死亡フラグとかじゃなくて確定事項の中に突っ込もうとしてるくらいよ」

あーあ、とブレイドはヤケになったように大声で叫ぶ。

この戦いが終わったら…とか、

冗談じゃない！俺は死にたくないんだああ…とか、

急に過去振り返っちゃったりさあ…死亡フラグばっかじゃんかよ俺。

確実に死ぬね普通

『…』

キングは黙っている、それはブレイドが何を言っているのか分からないからではない。

彼の中から溢れんばかりの闘気を感じていたからだ。

どンドンそれは膨れ上がり、キングですら黙らせる程に…

「だけどな…どれだけ死への伏線とか恐怖とか膨れ上げても」

『…』

二人は剣を構えなおした。それは再び訪れる開戦の意味

「たった一つの思い出がソレを凌駕する。
たった一つの涙が…その死への恐怖を」

『…』

「破壊するんだよおおおッッ！…」

二人が同時に出した突きがぶつかりあう、二人の剣の先は見事に重なっていた。

しかし二人はその奇跡の様な光景になんのリアクションも起こさずすぐにまた斬りかかる！

両者の全力を込めた一撃と一撃、あまりの威力に二人の体は大きく後ずさる。

それでもまた二人は走り出す。

もうただ我武者羅に、ひたすらに勝利だけを考えて見栄えなど気にはしない。

二人の戦いは他人から見ればとても美しいとはいえないモノだろう。

だが二人にそんな事を気にする意味も理由もない、ただ相手を殺すだけ。

決闘という名の殺し合いなのだ。

相手が憎い訳ではない、思いを成就する為剣をふるつ。

救うため、試すため。ブレイドもキングもただそれだけを考えて剣を打ち付けた！

『っ!?!?』

何かがおかしい!

キングは焦りを覚える、何故かブレイドの動きが読めない。
剣の動きに統一性が全く無い!まるで数撃ごとに人が変わっている
ようだ。

「ウラアアアアアアッ!」

『ウツ!グオオオオ!!!』

キングの装甲が激しく削られる。
最初とはまるで動きが違う!?

剣が見切れない!

そう、椿は彼にしかできない戦い方にシフトチェンジしたのだ。

それはまさに彼がこの日まで見続けていた様々なアニメやゲーム。それらに出てくる剣を使った技。それを今、椿は真似している！

昔は真似をしようとしてもできないモノばかりだった。

だが今、ブレイドのステータスを得た彼はあの日できなかった事をやってのける。

キングが剣を見切れないのは当然だ。

なぜなら今、彼の戦い方は何人ものキャラクターのモノなのだから

「オラァァァァァァァァァァァァァァァァッッッ！」

『グワァァァァッ！！』

ついにブレイドはキングの膝を地面へとつかせた。それを合図とし、ブレイドは一旦後ろへ大きく跳ぶ

「ッ！！」

先に仕掛けたのはブレイドだった。
まさに賭け、ブレイドはブレイラウザーを蹴った！

武器を捨てかねない危険な賭け！
だが、想像もしていない攻撃にキングもまた対処が遅れる。

『グッ！』

瞬間的に剣を盾にしてブレイラウザーを弾いた。
が、しかし目の前にいたのは…

「終わりだあああああッ!!」

ブレイドはキングに蹴りを入れると同時に飛び上がる。

そして手を突き上げて弾かれたブレイラウザーを掴んだ!

そして振り下ろすっ! キングを一刀両断する為にッ!

『クッッ!!オオオオオオ!!』

怯むキング、勝利を確信するブレイド。

だがキングとて何度も戦いを重ねてきた経験者なのだ。

思考が追いつかなくても、体が反応していた!

振り下ろされた腕に重なるように剣を構えた。

ただ構えたその剣だが、ブレイドの勢いが重なり…ギロチンとなる。

ブレイドの…左腕。

『・・・』

吹き上がる鮮血、絶叫し地面に膝を着くブレイド。
腕を失った彼にもう勝利はない。

キングもまた勝利を確信した、随分不思議な人間だった。
せめてもう苦しまないように息の根を止めてやろう。

そうキングが思ったとき、ふと違和感を感じた。

確か…最初ブレイドが振り上げた手は右の筈だ……

だが、振り下ろした手は左腕……

『……』

そして、気づいた。
切断され地面に落ちたブレイドの左腕。

だがどこを見ても周りにブレイラウザーはない！

と言ふ事は　　ッ！

『フェイクかッッ！！』

「アアアアアアアアアアアッッ！！」

キングの目の前でブレイドは踏み込んでいた。

膝を着いていたのではない！
全てを決める一撃の力を込めていたのだ！

そして苦痛の絶叫だと思っていたモノも違う！

苦痛の中に勝利の雄たけびを込めていたのだッ！

『腕を犠牲にしたと言っのかッッ！！??』

元々まともに挑んで勝てるなんて思ってたねえぞ。
腕の一本くらいやるよ、でも……………

代わりにお前らの力を貰うぜ

「ウアアアアアアアアアアアアッ!」

右手に持ったブレイラウザーがキングの顔面に突き刺さる！
それだけでは終わらない!!

「俺の勝ちだアアアアアアアア！！」

キングウウウウウウウウウウウウウウウウウッッッ！！！！！！！！！！」

ブレイドは飛び蹴りで、突き刺さったラウザーをさらに深く突き立てた！

「ッッ」

俺の
ッ

勝ち
だ・
・
・

ブレイドの意識はそこで途絶えたのだった。

第99話 ？運命ノ切り札？（後書き）

はい、と言う訳でね……

ん、どうかなもう少し長くしても良かったかな？
ではまあ今回はこれで

次もよろしく！

第100話 番外編 新話×誕生！（前書き）

緊急更新ってなもんですw

理由としましては、まずよくよく考えたら100話目じゃないか！
やはり100にはちよっとした特別なモノをやるのかなとww

だから今回の話はブレイド編とは全く関係ありません。

なので、前回からの雰囲気^が壊れてしまうのは嫌だと言う人は
今回の話をまだ見ない事をおススメします

ではごっごぞー！

第100話 番外編 新話×誕生！

Episode ????

世界は広い、数ある世界は互いに干渉しうる事なく均衡を保ち続けていた。

しかし、その秩序が音をたてて崩れていく。

ある世界で一人の少年が決意を固め、少女を救う為に戦うと言うありがちな展開、そんな物語が紡がれる。

だが世界は決してその一つではない。

誰かが世界のどこかで命をかけて戦っているさなか、全く関係ない世界にいる人間もいるのだ。

観測された場面が全てではない。

そう、もしかしたら今この瞬間に世界の命運を賭けて戦っている人間やらがいる

……かもしれないのだ。

「だが、そんな事はどうでもいい」

明日世界が滅びようが、今この瞬間が何よりも大切ではないか？

「……ッ!」

博士！ 成功です！

「フッ……」

そう、世界なんてちっぽけな箱庭だ。所詮僕達は井の中の蛙。世界を知らなければ考え方が固定されるつまらん生き物、だが自分はそうじゃない。

「上出来だ馬鹿助手。ほめてやる」

「ああああ、やっと完成ですかあ……………」

長かった……………そう言って助手は涙を流す。
それだけの努力と苦勞がこのベルトには詰まっているのだ。

「やはり僕の考えは正しかった。間抜けでッ！
硬いッ！馬鹿共は、僕の考えを鼻で笑い罵倒したッ」

「あー、確かにあれは酷かったですね……………」

そう、常識なんてくだらないモノに縛られた馬鹿に世界は理解できない。

理論は理解できはしない！

「僕の理論は正しい、そうだろう助手くん？」

「そ、そうっすね」

助手はプルプルと震える手でベルトを博士に手渡す。
本当に長かった、本当に苦勞した！

助手は涙を浮かべてベルトを見ていた。

「はんっ、学会の老人共め……
子供である僕に負けるのはさぞ悔しかろうな。

ククク！ 驚く顔が目に浮かぶ」

「そう言うところが子供っぽくないんじゃないかな……」

「ん、なんか言ったか？」

「い、いえ何もお……」

まあいいと、博士と言われた少年は鼻を鳴らす。

助手の少女も愛想笑いのようなモノを浮かべてウハウハと笑った。
白衣の二人はまさに科学者の風貌だろう。

「さて、完璧に完成したのはどれだけかな助手くん？」

「あ、はい。えっと……」

助手は待ってましたと言わんばかりに手をたたくと、デスクに『ソ

レ』を並べていく。

「まず、ロケットでしょ。あとはランチャーに……リーダー。最後にドリルです」

「……は！？ まさか終わりか？」

「……」

「四……四」

「JG……」

「馬鹿助手があああああああッ!!！」

「ひひひひひひひひ!!！」

博士は助手より年下に見えるが、どうやら権力では断然上に立っているようだ。

での悪い部下にお叱りの言葉……

もとい罵倒じみた言葉を浴びせる。

「説明書通りにやれば八個はいけただろうがッ!!！」

馬鹿かお前は!？ むしろ天才か？

「こんだけ時間があったってたった四個しか作れないとはなあああ!!！」

「すすすいません! でも」

「でももクソもあるかぁッ!! この役立たずが!」

「うううう酷い……ッ」

フンツと鼻を鳴らして博士は助手をにらみつける。
涙目になる助手をもう一度罵倒すると、その行動とは反対にジュースの缶を投げつける。

「え……?」

「まあとんだ馬鹿っぷりを見せてくれた訳だが、貢献したのもまた事実だろう。」

「礼だ、くれてやるっ」

「は、博士え!」

笑顔になって駆け寄ってくる助手をさりとかわすと、博士はベルトにそれら　　ッ

『スイッチ』を装填させていく。

『Rocket!』 『Launcher!』

博士は淡々とスイッチをベルトに装填させていく。
しかしすぐに上機嫌になって笑い出した。やはり電子音はいい！
そう思わないか助手？

そう言って博士は助手へと笑いかける。

助手も投げやりに戻すとベルトをじっと見つめた。

「焦るな焦るな！」

博士と助手は興奮を抑えないようで、スイッチを全て装填すると仲良く笑い合う。

さあ、いよいよ起動だ！！

「わ、私やっていいですかね？」

「はあッ！？」

「い、いいじゃないっすか！ 私にやらせてくださいよー！」

「ふざけるなッ！ 僕がやるに決まってるだろ！」

二人はベルトを互いに強くつかんで放さない！

「おいっ……放せ馬鹿助手ッ！！」

「いいじゃないっすかああ！」

これから空間移動実験も控えてるんですよ？

だったら博士の体になんかあったら大変じゃないっすか！

助手の仕事は博士のサポート！

博士を守る事！

助手のマシガンのような言い分を博士は迷わず切り捨てる。

「「あ
「

ベルトが二人の手をすっぱ抜けて

そのまま水槽にポチャリと……

「「ああああああああああっ！！」「」

新しい玩具にクマノミ達ははしゃぎ回る。
ほほえましい光景だろうか？

他人が見ればそうかもしれない。

だが　　ッ

「まだ防水加工……してないのにいいい！」

「 あッ」

「 え？」

こんの馬鹿助手がああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああッッッッ!!!!

「 ひえーん!!」

研究所に大声が響き渡ったのだった……

さて、彼らが新たな物語として認められる日はくるのだろうか？
はじまりはじまりいー……ってなモノである

第100話 番外編 新話×誕生！（後書き）

と言う事でこの話は種みたいなモンですねw

まだこの種がどう言うモノになるのか、僕さえちょっと分からないです。

メインキャラになる可能性も、サブに終わる可能性も

秘めた種と言う事でww

いやしかし、このEpisode DECADEも無事に100話をむかえる事ができました

これも皆様のおかげでございます！

読んでくださる方、お気に入りしてくださる方

どうもありがとうございます！

ではこの辺で、次もよろしく！

第101話 ?笑う者・嘆く者? (前書き)

くそッ！ 俺はエクシリアを置くべきなのかッ!?

……はいw

と言っ訳でござ

第101話 ?笑う者・嘆く者?

『・・・』

キングは目の前で気を失っている椿を見ていた。

変身が解かれた彼の体はもう傷だらけ、腕も片方なくなっていて顔色も悪い。

このままだと確実に死ぬだろう。

だが

『・・・クイーン』

『はい』

カテゴリークイーン。

カプリコーンアンデッドは、気を失っている椿に近づいていく。

その手には彼の切断された腕が握られており、クイーンはそれを切

断面に合わせた。

すると、淡い光と共に切断された筈の腕が元通りにくっついたのだ。それだけではなく、傷だらけだった体も全快とまではいかないものの見事に癒えていた。

『皆の者。異論は無いな？』

キングの言葉に周りで戦いを見ていたアンデッド達が一斉に椿の周りにやってくる。

そして、その膝をつき忠誠の証を見せる。

今倒れている椿こそ、彼らの新たな主人なのだから。

『まさか、この様な子供に私が…負けるとはな』

キングのバックルは確かに展開していた。

それは、守輪椿という人間が勝利したという証拠。

キングは剣を掲げると新たなマスターに忠誠を誓う。

『我がアンデッド、ここに新たな契約者の誕生を示そう！
守輪椿に祝福を！』

アンデッドの歓声と共に彼らはその姿をカードに変える、その数は
十四枚。
エースからキングを含めた十三の力と椿が求めていた…一枚のカー
ド。
それらは椿の周りを囲むように回転し、ブレイラウザーへと収めら
れたのだった。

皆、聞えるかい？

落ち着いて聞いて欲しい、咲夜ちゃんがいなくなったんだ。
保健室からね……

窓が開いていたところを見るにそこから外に出て行ったんだと思う。
おそらく、彼女はジョーカーになったんだと思う。

ローチ達も活発になったし、なにより数が増えてきた。
くれぐれも気をつけて探して欲しい。

あと、椿くんもいないんだ。

きつと

……さあ、私達は私達にできる事をやろう。

とにかくまずは咲夜ちゃんを見つけて確保する。

ローチを減らしつつ人命救助を中心にね。

じゃあ皆、気をつけて！

翼からの電話を切ると、それぞれは行動にでる。

「くっ、想像以上にローチの数が多いな！」

「しかも、ク라운まで……」

咲夜を探したい、しかしローチが多いために街の人達が危険に晒されるのもまた現状である。
街の騎士団や学校からの総戦力を持ってしても勢いを抑えられるかどうか難しい。

そう、それにローチが尽きる事はない。

ローチはジョーカーを殺すまで無限に湧いてくるのだ。

咲夜を殺さない限り…

「「変身！」」

クウガと龍騎は互いにバイクを走らせ、ローチの群に突っ込んでいくのだった。

「どう…？アキラさん」

「ちょっと…待って…ください」

アキラは神経を集中して聴力を研ぎ澄ませる。

あの日一番最初の世界から得た特殊能力、『聴力の上昇』をフル活用して咲夜を探す事にしたのだ。

同じくディケイドクウガのペガサスで異質な音、

つまりジョーカーの発する笑い声を聞き取りその場所へ向う。

そう言う作戦だった。しかし、ジョーカーも移動している。ペガサスでいつまでもソレを探すのは精神が持たないのだ。

しかし、アキラの聴力ならペガサスには及ばずとも肉体への負担はずっと少ない。

我夢、アキラ、司の3人は街中を足で移動しながら咲夜を探していた。
本当はもっと人数が欲しかったし、バイクで移動したいところではあったが余計な音をたててしまうため、バイクは諦めた。

(お願いします…ッ！ どうか！)

アキラは咲夜と椿の無事を祈って、神経を研ぎ澄ませる。

そしてそれは暫く進んだところだった、アキラが何かの笑い声を聞き取ったのは。
笑い続けるそれは間違いなくジョーカーだろう、三人はその場所に向って走っていく。

「・・・？」

だがアキラが聞き取った所に来てみるものの、誰もいない。

勘違いか？

それとも移動したのか？ 肩を落とす三人。

「どっしたのガッガリしちゃってさ？ ヒヤハハハハハ！」

「「「!?」」」

エネルギーで構成された弓矢が、我夢に向けて発射された。
その音を瞬時に捉えたアキラが我夢を庇い突き飛ばす！

おかげで我夢に怪我はないのだが…

「くうッ」

「アキラさんッ！…！」

アキラの真っ白い靴下に赤い斑点が広がっていく。
苦痛の表情を浮かべるアキラ、我夢は能力を発動させアキラの治療に取り掛かる。

「ヤッタアアアア！ 命中！命中！ ヒヤハハハ！」

「大丈夫か！？クソっ、変身！」
『カメンライド』 『ディケイド！』

ディケイドは声が聞こえた方向に銃弾を放つ。
何かに弾かれる音、それと同時にカリスが現れる！

「ヒヤハハハ！ 順調に世界の壊滅は近づいてますよ！
このままならあと一週間で、この世界中にローチが繁殖するでし

ようねー！

クヒヒヒヒ！」

カリスは全てが順調と楽しそうに笑う。
自分の思い通りにいく世界がいかに滑稽で愚かで愉快で最高なものか。

もうこの世界はカリス、道化師の玩具箱でしかない。
ここに存在する生命全ては彼の玩具なのだ。

「お前ッ！何者だ！？」

「んー？クフフフ…それはコツチの台詞なんですけどねえ？
アンデッドの力無しで戦えるヤツがいたのは知らなかったなあ」

(・・・)

デイケイドは考える、ここで檻に囲まれた世界の事を持ち出すかどうかだ。

向こうはコチラの存在をまるで知らない。

そんな相手にわざわざ情報を与えるのはどうだろうか？

安易な問いかけはコチラの身を危険に晒すことになる。

デイケイドは考えた結果、あえてあの世界の事は黙っていた。

完全に拘束した時にでも問い詰めてやる！

一方のカリスは……

ま、でもいいか。どうせこの世界は滅びるんだしね。

そう言っつてまた笑う。

幸いにもそこまで興味を持たなかったようだ。

彼は自分の実験以外はさほど興味がない、そう言う性格だった。

「正直、どこのどいつかがジョーカーになる瞬間を見れなかったのは残念だけど

もういいですよ。ブラックカードスリーブももっと改良したいから……」

もう、この世界はいいや。滅びましょう！

カリスはそう決めたと手を叩く。

「ぶざけんなっ！させるかよ！」

ライドブツカーを構えてカリスに斬りかかるうとするディケイド。しかしカリスはあくまでも楽しそうに、それを呼んだ。

「・・・なっ!？」

カリスの合図と共に現れたのは二体のクラウンオルフェノク。
そしてそのクラウン達が引きずっていたのは……

「ッ……!!」

檻だった。その中には子供達が入られており、泣き叫んでいる。
ざつと五人くらいだろうか？

子供達はディケイドや何に決め付けるでもなく助けを求めている。
その泣き声を聞いてカリスはまた笑う。

笑い続ける、不快な笑い声。

体に衝撃が走り思わず苦痛の声を漏らす！

「ゲツ！」

また、さらにもう一回。

またさらに！

どンドン打ち込まれる弓矢。

抵抗はできない、カリスはそれを知っている。

だからこそディケイドを苦しめるような場所に打ち込んでいく。

直ぐに殺してベルトを調べたいという気持ちもあったが、
なによりそのシヨールを楽しみたいという彼の性格が優先された
のだ。

「ヒヤハハハ！避けられないんですかね？

あ！そうか、避けたら子供達が死ぬからか！

アハハハハハッ！」

今度はカリスアローで直接ディケイドを切り裂いていく。

このままでは負ける！

ファイズアクセルで子供達を……

駄目だ！カメンライドの時間がかすぎる！

どうすることもできない無力感と悔しさがディケイドを包む。

尚も楽しそうに斬りつけてくるカリス、どうする事もできないディケイド。

カリスはキノコを放り投げてさらに兵力を増加させていく
かなり危険な状況だ……

だが、そんな時だった。
クラウンの体に無数の銃弾が打ち込まれたのは

「！」

「ッ！」

振り返る二人、爆発するクラウンと粉々に粉碎される檻。
そこにいたのはギャレンとレンゲル！

「ダイアナ！ クロハ！」

「司！大丈夫！？」

「今助けるよ！」 『リモート』

レンゲルは、ギャレンのキングであるギラフアアンデッドを解放すると

我夢とアキラの護衛として設置する。

襲い掛かるクラウン達を次々に爆散させていくキング、ギラフア。

彼とて王を名乗る存在、クラウンが勝てる道理などない。

圧倒的な王の力の前に次々とクラウン達は無へと帰って行く

「・・・おい！」

「ああッッ！？」

「おかえしだ」

『ファイナルアタックライド』 『デイデイデイデイケイド！』

「ヒッ!？」

カリスの腹部に衝撃が走る。

見れば、ディケイドが銃を突きつけていた!

そのままゼロ距離でディケイドはディメンションブラストを発射する!!

「ゴワアアアアアアアアアアアッ!!!」

吹き飛ばすカリス!

ホログラムカードを経由していない為威力は弱い
それでもカリスに十分なダメージを与えられた

ギヤレンとレンゲルも加わり、三人でカリスと対峙する！！

第101話 ?笑う者・嘆く者? (後書き)

カードの説明はまた今度やろうかなと思ってます

まあ基本的には同じだけど、JQKが全然違っつて事で

ではこれで、次もよろしく!

第102話 ？回答（ラピリンス）？（前書き）

まあフォーゼの幹部クラスは十二星座なんでしょうね

どうしよう……

自分の星座がネタキャラならまだしも噛ませだったらW W

ではどうぞ！

第102話 ? 回答(ラビリンズ) ?

「今度は逃がさない！」

「覚悟する事ねッ！」

「ウガアアアアアアアア！またテメエらかああ！」

カリスは怒りに任せて叫びをあげる。

すると、その体が禍々しいものへと変化した！

例えるならキノコだろう、不気味なキノコが装飾となってカリスの体に付着する。

禍々しいその姿は一瞬三人の思考を停止させるだけの威力を発揮する

「ギャハハハ！ぶっ殺してやるよ！ライダー！」

異形の姿となったカリスアローを構え、カリスは走り出す。
三人もまたそれぞれの武器を構えて走り出した。

「我夢！アキラ！早く子供達を連れて学校に戻るんだ！
キングがついてるとはいえ、今のままじゃ咲夜を止められない！」

「は、はい！」

3人と、カリスは激しい火花を散らして我夢達から離れていく。
残された我夢とアキラは一旦学校に戻る事を決意するのだった。

「くっ……」

「い、ごめんなさい！ アキラさんっ！ 僕のせいで…」

「我夢君のせいじゃありませんよ。気にしないで」

手を貸してくれませんか？
そう言ってアキラは微笑む。

我夢は少し戸惑いながらもその手を握るのだった。

(本当なら…好きな人の手を握るって…とても嬉しいことなのかな)

今の我夢には罪悪感しかない、切にアキラへの謝罪の気持ちしかなかった。
二人はまだ泣きじゃくっている子供達をなだめるとギラファに合図をだす。

『よし、ならば学校まで行こうか。』

まだローチもそこまでの数ではない、このまま直ぐに

だが、ギラファはその言葉を止める。

「どっしたんですか？」

「.....」

そしてアキラの耳にも入ったその声

キキキキキキキキキキキキキキキキ

『ハア……どつちやら今日は運が悪いらしい』

「先輩!!」

「！」

草むらから探し人が現れる。

しかしもうその外見は完全に人ではなくなっていた。

アキラは思わず目を覆いたくなる、もう面影すらない。
どうして……

そこにいたのは…

『キキキキキキ』

化け物、ジョーカーだった。

『道化師にひかれ、やって来たか…』

『トトトトトト』

キラファの心に焦りが生まれる。

いくら自分がキングの称号を得ていようとジョーカーの前では無力に等しい。

こちらの攻撃は通用せず、対して向こうの攻撃で自分は一撃で敗北する。

護衛を任された以上、子供達は守りたいものだが…

特攻するにしても時間かせぎにすらならないだろう。

ギラファは詰んでいたのだ、ここでジョーカーに出会うのは完全に計算外だった。

「先輩ッ 僕です！ 我夢ですッ！」

「咲夜先輩ッ！！」

二人の必死の説得もはや無意味だった。
もうそこにいるのは咲夜ではない、ジョーカーなのだ。

いや…腕の部分に肌色が見える。

ジョーカーになりきれてない部分があるところをみると、完全にジョーカーにはまだなっていないのかもしれない。

しかしその部分も僅かなもの、あと少しで尊敬していた先輩は化物に変わる。

いや、もはや理性が無い時点で変わらないのかもしれないが…

「・・・」

尚も必死に説得しているアキラをぼんやりと我夢は見詰める。
アキラはなんとかして咲夜の自我を呼び起こせないかと足掻くが、

無駄のようだ。

ジョーカーは彼女の声がおかしいのか？
ケラケラと笑い。ブーメランを構えた

「…………ツ アキラさん、ギラフアさん。僕に考えがあります」

『…………』

「何ですか、我夢君！？」

何か作戦があるのか？ アキラは目を輝かせる。
しかし、我夢の口からでてきたのはそんな希望に満ちた言葉ではな
かった。

「僕を置いて、学校へ行ってください」

「……………え？」

『……………』

それはつまり……

何を…言ってるんですか？

アキラの言葉に我夢はハッキリと返す。

それはあまりにも真っ直ぐな目だった。

「先輩は僕がひきつけます、その間にアキラさん達は逃げてくださ
い。」

あと、できれば応援を頼みます…ッ」

「そ、そんな！？ 我夢君、駄目ですそんなのっ！ 危険ですよ！」

「分かっています！ でも、こうしないと…ッ！」

さあ、行ってください。もう時間がありません！　お願いします！
このままじゃ全滅もあるんです！

だからどうかッ！」

我夢の言葉どおりジョーカーは、我夢達を狙うターゲットだと認識する。

そして近づく足を速める！

もう迷っている時間は無い！

もちろんだからと言ってそう簡単に容認できる訳もないのだが……
アキラは我夢を引き止める為に食い下がる。

当たり前だ、ここで我夢を残すと言う事は結果として我夢を死の危険にさらす事になる

いくら咲夜だろうとも今はジョーカーの支配下にいるのだ。

まだ完璧にジョーカーじゃ無いためにウイルスを生成する事はできないだろうが

鋭い爪や殺傷能力の高いブーメランは存在しているのだから

「でも…！」

「お願いします！ もう時間がないんです！」

「そんなの勝手です！ じゃあ、私も残りま
」

「天美ッッ！！！！」

「っ！！！！」

普段の我夢からは想像できない声、女性の様に高い声だがナイフの様な鋭さがあった。

そして『天美』と言う呼び方。

アキラは思わず驚き、ほんの少しの恐怖を覚える。

こんな彼を始めて見るかもしれない……

「いい加減にしてください！ 今の天美じゃ的になるだけだろ！ 分からないのか！？」

僕を庇ってくれた事は本当に感謝してるし申し訳ないと思う！でも理解してくれよ！ それとこれとは話が違うんだぞ！？」

下手をすれば全員死ぬんだぞ！」

「でも……ッ！ それじゃあ我夢くんはどうなるんですかッ！？」

「……ッ ギラファさん！」

『・・・いいのか？』

ギラファの問いに我夢は迷う事無く頷く。

ギラファもまた頷くと、アキラと子供達を抱えて走り出した。

「そんなっ!？」

アキラはまだ納得していない様だったが、ギラファの力にはかなわない。

そのままギラファ達は走り去ってしまった。

ジョーカーはそれを見てこそはいたが、追う事はしない。

当然だ、目の前に玩具が置いてあるのにそれで遊ばないのはおかしな話。

ジョーカーはブーメランを構えると、我夢の周りを跳び回り始めた！

「あーあ…アキラさんに嫌われちゃったかなあ」

素直に君を傷つけない…って言えばよかったのだろうか？
駄目だ、キャラじゃない。やっぱり自虐的になってしまっ

「僕ら、似てると思いませんか？ つくづく損な性格ですよね」

ジョーカーはまだ完全にジョーカーにはなっていない、つまりジョーカーウイルスを注入される事もない。我夢はソレを確信する。

そして、自分に与えられた特殊能力である『回復』を発動させてみる

ああ、大丈夫……ちゃんと使えるな

「さて、咲夜先輩。頑張ってください、今から僕も」

死ぬ気で頑張りますから…ね？

我夢はため息をついて走り出すのだった。

「咲夜先輩！お願いですからやめてください！」

などと言って止めるのであれば誰も苦労はしない。

ジョーカーは笑いながら我夢に攻撃を仕掛けていく、紙一重で避ける我夢。

襲い掛かる恐怖を抑えながら冷静に回避ルートを予測していく

「……………」

攻撃の瞬間若干ジョーカーの動きが鈍るのを確かに感じた。
ソレは咲夜の精神がまだ死んではいないと言う事だろう。

やはり凄いと、我夢は咲夜に改めて尊敬の念を覚える。

「グッ！！アアアアアア！」

だが、攻撃が鈍るだけで攻撃をしない訳ではない。
我夢の足に激しい痛みが走る！

見ると、地面からローチが現れその爪で我夢の足を切り裂いていた。
毒を注入される前に離れ、体勢を立て直す我夢。

「咲夜先輩！ これは鬼ごっこです！ 貴女と僕、二人だけのツツ
！！！」

『キヒッ？』

その言葉に立ち止まるジヨーカー。
少し考えたような動きをとると我夢の周りに出現させたローチを消し去る。

「・・・」

やはり、あくまでもアッチは遊んでいるだけなのか……
我夢は歯を食いしばる。

ふざけた事を…

『…』

「くうっッッ」

ジョーカーの蹴りをかわす我夢、しかし足に赤い円がどんどん広がっていく。

すぐに能力で足の怪我を癒すが回復が追いつかない。

このままでは攻撃を避ける事が難しくなる、それと同時に迫るブーメラン！

「ッッ！！」

気づいた時にはもうブーメランが自分の足にめり込んでいた。激しい痛みと反転する景色。

地面に倒れたと理解する前に再び背中に衝撃が走る。

さらにぐちゃぐちゃになる景色、蹴飛ばされた？

全てを理解した時、自分は地面に這いつくばっているではないか。

はやく立ち上がらないとまた攻撃が…

『キヒヒヒ…』

「！？」

また一瞬ジョーカーの動きが止まる、その隙に全ての力を振り絞って後ろへ跳んだ。

回復と言つ言葉が馬鹿らしく感じる程、体からは血が流れている。

しかし、こんなに寒い物だったとは…

「クツ…つう…」

まだ、倒れないでくれよ…僕。

我夢は必死に咲夜の自我を呼び覚まそうと声をあげる。

だが、咲夜……ジョーカーは笑い続けるだけ。もう言葉すら通じないのか？

いや、違う。

例えそうだったとしても声をかけるのを止めてはならない。
我夢は自分の体が徐々に回復していくのを感じると、もう一度大声で咲夜の名前を呼んだ。

第102話 ? 回答(ラビリンス) ? (後書き)

まあ我夢はディケイド版のアスム、イメージですかね

まああくまでもイメージですんで深く考えないでくださいかね

ではこれで、次もよろしく!

第103話 ? 悲壮のツীগーム? (前書き)

実は……割とあと少しでブレイド編は終わりだったりします
なのに、もうストックがそこをつきてきたり…w w

うーん、ちょっと更新が不定期になりそうかな
申し訳ないです!
なるべく早くしますんで、ではどうぞ!

第103話 ? 悲壮のツゲーゲーム?

「咲夜先輩ツツ！ 起きてください！！ 咲 ツ…」

我夢は自分の愚かさを嘆く。

まだ回復しきれていなかったのに無茶をするから……目まいがして意識が飛びそうになる。

一瞬、だけど相手には充分だろう。

ジョーカーはスキップで我夢のところまで移動すると我夢の顔を掴んで地面に叩きつける！

「ア」

真っ黒になる視界、また再び体中に衝撃がはしる。

ジョーカーは我夢の体を軽々と持ち上げあたりに叩きつけた。

何度も、

何度も、

何度も

「
」

ジョーカーは我夢の足を持って乱暴に振り回す。

岩があれば激しく打ちつけ、木があれば我夢をバットの様にして叩きつける。

何も無ければ引きずりまわし、投げ飛ばす。

舞い散る血液はまるで華のように辺りを舞う。

地面には花びらがたくさん落ちていてはなにか、それは赤黒い絨じゅう毯たんのようだ

「ッ……ア……」

もう痛みを通り越して何も感じられなくなっていた。

こんなに寒いのに汗まみれなのは何でだろう？

この汗が赤黒いのは何で？

回復を発動させる？

意味なんてあるのだろうか？

既にもう我夢の思考までもが麻痺していた。

音が遠い、視界が悪い、体中が鈍い。

だがそれなのに不快な笑い声だけは鮮明に聞えてきた。

『キヒヒヒヒヒ！』

もう、咲夜の声ではなくなっている。

徐々にジョーカー化が進んでいるのだろう、早くなんとかしなければ…

我夢は立ち上がろうと足に力を込める。

「・・・」

だが、気づいた。

倒れていたと思っていた自分は今ジョーカーに持ち上げられているのだと。

足が宙に浮いている。

そうか…自分は今、寝転んですらいなかったのだ……

失われる平衡感覚、頭に響く耳鳴りが邪魔だ。

それより雪が降っているのか？ なんなんだこの寒さは？

なんだか気分が悪い、眠くなってきた。

『キヒヒヒッ、ガ…ヒヒヒヒヒ！ム…』

「……………ッ……………?」

何か、今……聞こえ……頭……痛……い

『キヒヒヒ！ガ……ム……！ヒヒヒヒヒ！』

「……」

『ガ……ム……ム……キ……キ……』

「……」

今、何て……ッ

『ゴゴゴッ！ ハヤク……ヒヒヒヒ！ ニゲ……ル……ンダヒヒヒヒ！』

「おせ……おせ……」

回復によって視界と聴力が元に戻っていく。
そして確認した、確かにジョーカーの口からその言葉が発せられて
いるのを！

『ニゲテ…クレツ……デ…ナイト…ワタ…シ…ハ………』

「!!!」

ジョーカーは確かにその言葉を言った。
声こそは本人から程遠いものの、笑い声を発する事なく確かに言っ
たのだ。

「先輩……」

振り下ろされる拳は鈍く弱々しい、我夢は足を引きずりながらも何とかかわす事ができた。

次の一撃も、その次の一撃もジョーカーの動きは鈍い。

鮮明になっていく意識と軽くなっていく体。

「咲夜先輩……！」

『ガ……ム……！ ハヤク……ニゲ……ル……ンダ……！』

ジョーカーはフラフラと頭を抱えてうめき声を上げる。それはまさに我夢にとっては希望の光！

「悪いけど、聞けませんよ！」

我夢はジョーカに駆け寄るとその肩を強く揺さぶる。
そして何度も何度も咲夜の名前を呼んだ。

「咲夜先輩！ 咲夜先輩ッ！！
お願いです、ジョーカーなんかには負けないでください！！！」

『ダメダ…ガムッ…
モウ…ワタシは…』

ワタシデ…ナ…クナル…ッ！』

「そんなんっ!?!」

『ダ…カラ…オネ…ガイド…
ソノマエニ…ワタシ…ヲ』

「咲夜…先輩…」

『コロシテ…クレ…』

「・・・」

『 ヒヒッ…！キヒヒヒヒヒヒ…！』

理性を失ったジョーカーが口を開けて我夢に迫った。
とっさに右腕を盾にして防ぐが、そんな事はお構い無しに思い切り
噛み付かれる。

噴き出る鮮血と、常人ならば狂いたくなる程の激痛。
だが、我夢の心は冷静なものだった。

「ズンズン…」

『 キヒヒヒヒヒヒ…！』

「どつしてなんだよ…！」

我夢はジョーカーの足を払いそのまま投げ飛ばす。

うまく口を離してくれたからよかったが、下手をすれば噛み千切られていただろう。

溢れてくる血、既に我夢の服は本来の色を忘れるくらい汚れていた。だが我夢にとってはもうどうでもいい、何を失おうとも目の前にいる先輩をただ切に救いたかった。

咲夜と特別な出会い方をした訳でも

椿の様に長い付き合いがある訳でも

アキラの様に同姓だからこそその絆がある訳でもない。

だが、今まで四人で過ごした日々は確かにこの胸に刻まれている。

『おいコラ！椿！！また貴様は』

『よお、我夢！遊びに来たぜ！え？練習はどうしたのかって？
あ、ああああ！疼く！疼きやがる！静まれ』

『我夢君、先輩達とアイス食べに行きませんか？』

「……ッ！！！」

何気ない日々だった、だけど楽しかった。

書道や空手、柔道に琴や弓道。お茶の点て方までやっていた道場だ、それなりに人は多い。ただどずっと通っている我夢とアキラは、特別椿と咲夜との交流が深かった。

そう、それだけの思い出があるのだ

咲夜には悩みを聞いてもらった事もある。大切に真剣な悩みだった。アキラと仲良く慣れたのも咲夜がいたからこそかもしれない

「咲夜先輩！　お願いです！　お願いですから！！」

足に再び衝撃が走り、地面に叩きつけられる。それでもまだ我夢は叫び続けた。

何度でも立ち上がってやる。だからどうか…

「諦めないでくださいよ!! 咲夜先輩!!」

いつも凜としてたじゃないですか…

だから、どうかこんなつまらない事で死ぬなんて言わないでくださいよ…

『ウツ……ア……ア……ア……』

ジョーカーの瞳から涙が溢れる。

だが、いずれその涙も止まるのだろう、いつの間にかジョーカーの腕から肌色が消えていた。

もう侵食は最終段階まで来ているのか？

もうすぐ完全に自我を失い、理性を失い、狂った道化に変わるのか！？

『ガム……ドウシテ……ニゲテ……クレナインダ……？』

「僕が居なくなったら……ッ、

咲夜先輩はすぐにジョーカーに飲み込まれてしまおうと感じました。

違っていたらすみません、無事に全部終わった後好きだけ叱ってください」

2123

『イヤダ……オマエ……ヲ……コロシタク……ナイ……』

「僕も先輩を置いて逃げるのは嫌ですね。

先輩には申し訳ないですけど……僕を殺したくないって気持ちがある理性を保つ理由になっているなら……利用させてもらいます」

『ガム……オネガ……イダ……オネガ……イダカ……ラ』

「・・・」

「ごめんなさい。本当に……」

我夢はもう一度ジョーカー……いや咲夜に謝るとその目を直視する。
振り下ろされる爪。我夢は齒を食いしばって覚悟を決めるが、彼女
から視線を外す事はなかった

第103話 ? 悲壮のツィゲーム? (後書き)

補足説明として

ジョーカーウイルスもアンデッド扱いとします。

あとちょっとタグを変更したところがあります

この作品はこれからも変身者がオリジナルのケースが多々でてきま
すんで、どうかそこは割り切ってお楽しみください！

ではこれで、次もよろしく！

第104話 ? ソノ選択ヲ? (前書き)

いよいよブレイド編も、残すところ後三話程度となりました
後書きでカードシステムの説明いれます

ではございませー!

第104話 ? ソノ選択ヲ?

「なかなかの外道さだな。相原、ああ…嫌いではない」

「！」

『ウウ…ア…ア…ア…ア…ア』

いきなり声がして二人が振り返ると、
気だるそうにクセツ毛をいじっている男が立っていた。
こんな殺伐とした状況の中でも光を放っているかの様なオーラは、
彼の本質そのものだろうか？

「ほお広瀬え、イメチェンか？ だが止めておいた方がいい。
似合わないぞ、なんか…言いにくいが…その…虫みたいだ」

『ウ……ム…シ……？ ツツ！ ヒヒイヒ…』

「ああ、そうだ。人の好みにけちをつける気はないが
昆虫系女子と言つのはどうだろう…?」

それでは椿も引いてしまつぞ?」

『ウウツ!! アアアアヒヒヒ!! キヒツヒヒヒヒ!!』

ジョーカーはブーメランを構えて、双護に狙いを……

「フッ」

だが、天王路双護は走り出す。

特殊能力の移動速度上昇で、辺りを駆け回りジョーカーを翻弄する。
単純なジョーカーは双護から狙いを外さず、キョロキョロと双護を
目で追っていた。

その際に我夢の体が支えられる。

「ッ？」

「大丈夫ですか？我夢君！」

我夢に向けられた優しい微笑み、思わず心が温かくなる。
夏美は我夢をゆっくりと起こすと、肩に手を回し移動する。

「我夢君は少し休んでいてくださいね！
次は私達が頑張っちゃいますからッ！」

「ッ……すいませ……ん」

「いいんですよ、それと…ありがとうございました。
我夢君が咲夜ちゃんを止めておいてくれたからすぐに見つける事ができました！」

我夢はその言葉に微笑みで返すと、回復を発動させた。
同時にまた肩に触れる手。

「後は、アイツが来るまで…繋いで置くから。
ゆっくり休んでくれよ…我夢！」

「ありが
」

緊張の糸が切れたのか、我夢の意識はそこで途切れてしまった。
回復の力があつたから何とかなつたものの、下手をすれば我夢は死んでいたのだ。

3人はジョーカーを囲むように立つと、声をそろえて言い放つ

「「「鬼さんコチヲ！ 手のなるほうへ！」」」

ジョーカーはそれを聞くと楽しそうに笑うのだった
遊び相手が増える、ジョーカーはまさに心躍る気分だったろう。

その後も傷つけない攻防は続いた。
双護が辺りを駆け回り、夏美が咲夜の名前を呼び続ける。
攻撃は龍騎が盾で防ぐと言う流れ。

「くっ、なかなか手ごわいな」

ジョーカーのブーメランが双護の頬を掠める。
全ての攻撃を龍騎で防ぐのは不可能だ、彼らにも命を落とすと言っ
緊張感が溢れてくる。

「ぜえてえええ！ 大丈夫です！ 諦めないで！！」

夏美の声が辺りに轟く。

彼女の気合いが回りを奮い立たせて、戦いの恐怖に吞まれない勇気
を与える！！

『ギヒイヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒッ！！』

「咲夜！！」

「咲夜ちゃん！！」

そして、クウガや、アギト達も加わりジョーカーは完全に包囲される。
しかし誰一人攻撃しない戦い、それが続くことに変わりはない。

だが、そこに変化が訪れる。

「ヒヤハハハ！ 追いついてみてくださいよライダー！」

「クッ！」

「ギャハハ…ハ…は？」

カリスの強烈な弓が地上にいるデイケイド達を拘束していく、
激しいラッシュのせいでデイケイド達は防御する事しかできない！

上空をフロートの力で浮遊していたカリス、クラウンの群れとカリ
スアローでデイケイド達と互角に戦っていたのだ。

だが、ついにそれを見つける。

「あ……あああ……！！！」

おいおいおい！ありゃジョーカーじゃないですか！

ヒヤッホーウツツ……！！！」

「なっ！！ 待て！」

カリスは猛スピードでジョーカーの所へ向う！
やっと見つけた！

ジョーカーウイルスを活性化させるキノコでも与えて早くウイルス
を広めなければ！！

「くそっ！ダイアナ！」

「ええ！わかつ
」

フージョンジャックを発動しようとしたギャレンの腕を誰かが掴む。

驚く三人にかける言葉

「俺がいく」

「「「!」」」

三人の驚く顔を見て、ソイツは鼻を鳴らしてドヤ顔を決めたのだっ
た。
仮面に隠れていても確かに伝わるその表情……

「お前ッ！」

「あれ？ 誰か分かる？」

「やっぱイケメンのオーラでちゃってるのかしら!?!?」

そいつはニヤリと笑う。

いや、だからディケイドからは分からないが絶対そんな気がした。

『アブソープ・クイーン』

『フュージョン・ジャック!?!』

「ジョオオオオカアアアアーちゃん！」

『キヒツ！？』

「なっ！？ 道化師！！」

上空からコチラへ向ってくるカリスにメンバー達は焦りを覚える。
この状況でカリスに加わられたら……

「！」

だが、その焦りは切り裂かれる！

突如、何かガカリスに向かって行き攻撃を与えたのだ！
悲鳴を上げながら地面に墜落するカリス。

その何かは、さらに空中に舞い上がり太陽と重なり合う。
それぞれはその何かを確認しようと目で追うが、それより先に耳が
その音声を捉えた！

『サンダー』 『スラッシュ』 【ライトニング・スラッシュ！】

「ウツツ！ アア？」

何が起こったのか理解できないカリスに、さらにその剣が振り下ろ

道化師は苦し紛れにクラウンを出現させ、自分は慌てて走りだす。逃げる道化師の先にはディケイド達が居るといふのに……

今の道化師にはそこまで頭が回らないようだった。

「お前ツ！！」

「いよお、待たせたな。でもよ、ヒーローって遅れてくるもんじゃない？」

「……なんつってな」

そう、そこに立っていたのは紛れもない。

仮面ライダーブレイドジャックフォーム！
守輪椿の姿だった。

『キヒヒヒヒヒ！』

ブレイドの目の前にはジョーカーが笑っていた。

「あれですかね、まあ私も……
そろそろ咲夜ちゃんを攻略しようかなと思ひまして」

そうやってブレイドは一枚のカードを取り出す。
それはキングが契約者に一枚だけ与えるラウズカード、『ブランク』
のカードだった。

2143

「一応、これジョーカーに使えるはずだぜ。
道化師産とはいえ人工アンデッドだからな」

「ああ、わかった」

アンデッドとて魂と心を持つもの、契約したとはいえ仮に反旗を翻す事もあるだろう。

それを良しとしないキング達はどんなアンデッドでも強制封印させるラウズカード

『ブランク』を契約者に一枚持たせるのだった。

だが、ブランクは互いの信頼関係を崩すなによりの因子、クロハもダイアナもすぐに捨てたのだが…

「咲夜……」

これで咲夜を封印する？

駄目だ、結局は同じ事。

そう、アンデッドを封印するブランク。

今咲夜の体には咲夜とジョーカーの二種類の魂が混合している。
このまま封印をすれば咲夜までブランクに飲み込まれてしまう。

「頼む、真志」

「ああ！」

だが、そう…それはこのカードだけならばの話。
龍騎はデッキから一枚のカードを取り出した、それは契約のカード。

『モンスター』を強制契約させるカードなのだ。

龍騎はブレイドからブランクを受け取るとその手に契約のカードとブランクを重ねて持った。

そして一枚のカードを発動させる。

『ユナイトベント』

合成のカード、ユナイト。

その力で龍騎の手にある二枚のカードは眩い光を放ち、一枚のカードへと姿を変えた

司の作戦は、この二枚のカードを合体させた時に生まれるカードを使う事だったのだ。

アンデッドを本体ごと強制封印させるカード、ブランク。これでアンデッドであるジョーカーウイルスを封印する。

だが、それでは融合している体まで封印させてしまい咲夜を巻き込んでしまう。

しかしここで龍騎の契約のカードが効果を発揮する。

そう、龍騎のカードでジョーカーと『契約』を強制的に結ぶのだ。龍騎のカードは契約したモンスターをカードの中に入れるわけではない。体を封印するのではなく心を支配するのだ。

『モンスター』ではなく『アンデッド』との契約。それを可能にしたのはユナイトから生まれたカードの出来る技だろう。

二枚のカードの効果は融合し、ジョーカー……いやジョーカーウイルスを支配下に置く事ができる物へと変わったのだ。

「じゃあ、契約にはカードを体に当てなきゃならない」

「おk！ 余裕余裕！」 『マッハ』

ブレイドはあつという間にジョーカーの前まで移動する。

そして、そのカードを…

「俺の選択肢が間違っ てないって事、教えてくれよ咲夜さんッ！」

見せてもらおうじゃないの、バッドエンドなんて勘弁してくれよ？
俺はグッドエンドしかやらないんでね

第104話 ? ソノ選択ヲ? (後書き)

カードシステムの説明をここで。結構長いですわww
まずAPではなく、消費制です

・カードを使えば、そのカードは無くなって
再構築されるまで使えなくなる

・再構築までの時間はカードによって異なり、変身を解除した場合は
早く回復する。

学校の治療器具を使っても回復する

・カードコンボを発動すると、一番最初に使ったカードは
再構築されない

・ジャックフォームになると、全てのカードが再構築される
単体でJをラウズすると、全てのカードが使用可能になる

・Qは単体でラウズすると、対象の体力を回復させる。

Kは単体でラウズすると、好きなコンボを一度使用できる

・椿はキングフォームになる資格をもっていない
使用してもエラーがおきる

こんなもんかなw?

一応各ナンバーのカードの効果も次らへんに書くかも…?

では次もよろしく！

第105話 ? 剣・ライダー? (前書き)

次でブレイド編本編は終わりだと…思います

番外編はいつもとは違う小話みたいな感じのを二話くらいかな

ではごっごぞー!

第105話 ? 剣・ライダー?

暗闇の中で、二人の子供が走っていた。

男の子と女の子は暗闇の先にある一点の小さな光を目指して必死に走っている。

「待つてよお！」

女の子は自分より前に走っている男の子に追いつきたくて必死に走る。

しかし、男の子は待つてくれない。

どんどん先に走っていく、このままでは…

置いていかれるのだろうか？

先に走っていってしまうのだろうか？

女の子は無性に悲しくなった。

「きゃー！」

こけてしまう、涙が出てきた。

痛いからじゃなくて置いていかれる寂しさの方が強いからだ。
女の子はつい声をあげて泣いてしまった。

「…ったく、しょうがねーな」

男の子は女の子に気づくと、ため息をつきながらも側へと駆け寄る。

女の子はそれが嬉しくてまた泣いてしまう。

それに気づいたのか、男の子はニッコリと微笑んだ

「大丈夫だよ、俺はお前を置いていかないから」

男の子は優しく微笑む。
本当に優しい目だった、女の子も嬉しくなって頷く

「でも、結局ワタシが裏切ったの？」

気がつけば、男の子は後ろにいた。

自分は前に……

逆……自分が前に来て、後ろを振り返りもせず……置いていったの？

「違う、悪いのは俺なんだ……」

二人ともいつの間にか成長していた。

「お前の前にいる事から俺は逃げたんだ」

椿はうつむいて呟く。咲夜もまた下を向いていた。

「ワタシは…お前の気持ちをしろつともせず…」

「いや、俺が悪い。なにかも、逃げ出してきた。
お前からも、自分からも」

「・・・」

「だから、もう逃げない」

椿は足を速める。しかし咲夜には追いつかない

「ああ…」

だから咲夜は椿が追いつくのを待った。
二人の肩が並ぶと、それぞれは微笑み…また歩き出した

「二人で…」

「一緒に…」

光が大きくなる。

それを咲夜は感じて、また微笑むのだった。

そうだ…二人で一緒に歩けばいい。

どちらが前だとかは関係ないんだから

「あ」

目を開けると刺さるような光が飛び込んできた。
思わず顔をしかめる、ええと…

自分はどくなったんだっただか？
それを思い出す前に走る衝撃。

「うお！」

誰かに抱きつかれた。
よく見れば…アキラだ、アキラが泣きながらワタシに抱きついてい
る。

何故……だ？

「！」

いや、違う！

そうか、ワタシは自分の体を見てみる。

それは紛れもなくワタシの体、人間の体だった。

「そうか…」

だとすればアキラが泣いているのも、皆が周りにいるのも納得だ。

そうか、そうなんだな。

かすかに思い出す、いそいで我夢を試してみるが元気そうだ…

本当に良かった　　ッ

「アキラ…」

「ハイ…！　何ですか？」

「ワタシは…戻れたんだな……？」

「ハイ…っ！ はい！」

アキラを抱きしめる。

そうか、皆には…本当に迷惑をかけたな

体はまだ少しだるいが動けない程ではない、
だんだん回復していくのも感じるし…良かった。

「ほんとうによがったでずっとうっとうっ！」

いろんな液体でぐちゃぐちゃになっている夏美が飛びついてきた。
アハハ…今日は良しとしようか。彼女にも世話になったからな

「・・・」

あの男を捜すがいない、その事を聞くと司と一緒にケリをつけにい
ったらしい。

全く、歩くのが速いんだよお前は……

そう、咲夜はジョーカーと完全に分離していた。
合成した契約のカードでジョーカーを支配して、ウイルス細胞ごと
自らの意思で消滅させたのだ。

司と椿、ダイアナとクロハは道化師との決着をつけに行ったらしい。
咲夜はそれを聞くとゆっくり体を起こす
皆は心配して咲夜に駆け寄るが、咲夜本人がそれを制した。

「大丈夫なんですか！？ 先輩ッ！」

「ああ、それより…我夢、みんな」

ありがとう。

咲夜が微笑むと皆も照れくさそうに笑う。

美しい彼女の瞳の中に皆が笑っている、凜とした彼女の瞳。

「さてと」

「？」

咲夜は大きく伸びをすると、地面に落ちている『ソレ』を拾い上げた。

「先輩!？」

咲夜はソレを暫く見詰めると、まるで何かと会話をしているように振舞う。

そしてしばらくして大きく頷き、走り出したのだった

「先輩 ツ!!!」

つい止めようとしたアキラの肩に、アギトの手が置かれる。
アキラは少し心配そうに咲夜の背中を見ていたが、仕方ないと笑って無事を祈るのだった。

「ハア！ ハア！ クソツ！」

道化師は大変不愉快だった。

世界は自分の玩具、思い通りにいくオモチャの筈なのに……何故？

何故今自分はこんなにもボロボロなのか？

惨めに草むら搔き分けて、無様によるよると逃げてッ！

こんな筈じゃない！ 自分はもつと有能だ！

あんな雑魚共にやられる訳がないっっ！！

自分は『道化師』だ！

確かに戦闘力はあまり高くはない、だが自分にはそれを補えるだけの装備と知力があつたはずだ！

違うのか!?

人間なんて俺の玩具なんだよおおおおおッ!!!

おい! どうなってんだ! この世界は滅びるんじゃないのか?

どうしてローチが消えている?

おい! ふざけんなッ!

次のジョーカーはどこだよ! おい! おいッ!

「いねえよそんなモン」

「!」

前からディケイドが歩いてくる。
ああ、クソッ！ すっかり忘れていた！！

「あああああ！ クソがああああ！ テメエは何なんだよ！？」

「俺？ 俺は」

ディケイドはその言葉を止める。
不思議に思った道化師が後ろを見てみると…

「ヒッ！」

クロハ、ダイアナ、椿の三人が立っていた。

それぞれはベルトを装着し道化師を睨みつける！！

危険だ！ 非常にまずい！

「ハハツ…いい、嫌だなあ皆！ 冗談ですよ、冗談！

ワタシは皆さんの世界を危険に晒すつもりなんてなかつ

」

ビュン！ と何かが飛んできて道化師の頬を掠める！
三人の誰かが撃ったのではない。

では誰が？ 椿達もソレが飛んできた方向をしてみる

「は！？」

椿は思わず間拔けな声をあげてしまった、だが理解した。
飛んできたのは矢だ、この中で矢を武器にしているヤツと言えば…

「今まで散々やってくれたな…」

「あ、貴女は!?!」

道化師は完全に怯えていた。
鋭い目で蛇に睨みつけられた、まさに蛙のように!!

「ワタシと彼女達が許すと本気で思っているのか?」

椿達の横に、もう一人の女が並ぶ。
既に彼女の腰にもベルトが巻かれており、残りの3人はソレを理解する。

「 凄いな、どうやって選ばれたの? 」

「 ワタシも彼女達も、アイツにいいように遊ばれた被害者だ。
それで意気投合してな 」

『 わらわパラドキサアンデッド率いるスートハートは
この女を主人にするぞ、よいな 』

相変わらず自由だな、キング達の声が聞こえる。
椿たちは最初こそ驚いたが、今はもう彼女に目を向ける事なく道化師を直視した。

四つの『人間』の視線が、『道化師』を刺すように襲い掛かる

それはまさに剣！

「なっ…そんな！

ヒャアアアアアアアアアアアアアアッ！」

驚く道化師をディケイドは投げ飛ばす。
そして、同時に一斉にポーズをとる四人の契約者達！

スートダイヤ・ダイアナ。

スートクローバー・クロハ。

ストリートスピード・守輪椿。

そしてストリートハート・広瀬咲夜！

彼女は決してやらねばなしで満足するような女では無い！

転んでもタダじゃ起きない彼女がとった行動は、同じ被害者であるハート達との契約を結ぶ事だったのだ

「道化師、覚えておけ。俺は破壊者さ」

ビシリと道化師を指差すデイケイド！！

「だから…この腐ったショーを破壊するッッ！」

「っくしょおおおおおオオオオオッッ！…！」

道化師は自らの正体、トードスツールオルフェノクへと姿を変える！

四人もまたベルトのハンドルを同時に引いた！

「「「「変身！」「」「」

『『『『ターン・アップ！』『』『』

四つのエレメントを同時に通過する椿達！

現れたのはギャレン、レンゲル、ブレイド、カリス！

「ウワアアアアアア！」

トードスツールは棍棒を構えて走り出す！

同時に『キング』のカードをライズするブレイド達！

Kの効果は、自らが望んだカードコンボを発動できると言うモノ

哀れな道化師をあざ笑う、王の一撃ッ！！

【ライトニング・ブラスト】 【スピニング・アタック】

【バーニング・スマッシュ】 【ブリザード・クラッシュ】

「「「「ヤアアアアアアアアアアアッ！！」「」「」

「ギユアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

四人の飛び蹴りがトードスツールに命中する！
大きく吹き飛ぶトードスツール！

『ファイナルフォームライド』 『ブブブブレイド!!』

ブレイドの体が光り輝き、巨大な剣に変化する。

ブレイドブレード!!

ディケイドはソレを掴み取ると、金色のカードを発動させた！

『ファイナルアタックライド』 『ブブブブレイド!』

ブレイドブレードが光り輝く!

そのままディケイドは飛び上がると、トードスツールに狙いを定めた!

「『終わりだアアアアアアアアアアアッ!』」

「ッ! アアアアアアアアアアアアアアアッ!」

一刀両断!

トードスツールオルフェノクは爆発し、その幕を下ろしたのだった。

「……なあ、おい咲夜よお」

「あん？」

「ハートって逆さからみるとおケツに見えないか？」

「……シユッ……」

「い……っつええ」

「空気を読め！ お前は本当に馬鹿だな！」

「うるせえよ、でもまあ」

やっぱ、お前はそうしてる方がお前らしいわ

ブレイドの言葉に、カリスは小さく笑う。

「一緒に帰るか、椿」

「ああ、そうだな」

一緒にな。

第105話 ? 剣・ライダー? (後書き)

はい、と言う訳でね…

どうなのかなあ……w?

最後の悪ふざけみたいなのは、あれが椿と咲夜って事で入れてみました

ハートさんすいません

まあ、今回で咲夜がカリスになった訳ですが
名前的には咲夜はギャレンですよ。でもまあそこは割り切っていた
ただければなと

二人のカード効果は次……か、まあ番外編で触れようかなと

ではこれで、次もよろしく!

第106話 ? 最後(スタート)? (前書き)

はい、と言う訳で今回でブレイド編は終わりですね
終わりにブレイドのカード説明を加えました。

龍騎のときはやらなかったんですけど

ブレイドはオリジナルのコンボも出るんで、知らない人がいたらと
思って書きました

ではどうぞー！

第106話 ? 最後(スタート) ?

だが……

「ハアッ！ ハア！！」

だがしかし、道化師はまだ死んでいなかった。

ブレイドブレイドが振り下ろされる瞬間に自らの意識をクラウン用のキノコに移し、生き延びていたのだ。

しかし自らは弱いクラウン。

必死に走って逃げ延びる今の姿はなんとも醜いものだ

「ハアっ……！ ハアッ！ クソッ！」

何故自分がこんな屈辱を受けているのか？

腹立たしい！

人間が絶望する顔を見るのが好きなのにッ！
なんでコッチが追い込まれてんだよおおおおッッ！！

気になるのはアンデッドの力を借りずに戦っていた連中だ。
あんなライダーがいるなんて知らなかった。

一体あいつ等は……………

「ハア…ハアッ！」

ジョーカーもカードスリーブも回収しそこねた。
まあカードスリーブはこの世界のアンデッド限定だったから諦めは
つく。

が、ジョーカーを失ったのは痛い！

最悪の気分だッ！！

今からまた研究所に帰って

「どいへん…いくんだい？」

「！？」

ふと、目の前をみる。

そこに居たのは二人の子供、しかし何やら只者ではない雰囲気を見せている…

道化師も思わず構えた

「初めまして道化師、君にはお世話になったよ。
おかげでファイズとブレイドのノルマはクリアできた」

「は？」

「ワタシ達は感謝してるのよ？ だから、お礼を受け取ってもらいたいの」

二人はそう言っただけで笑うとそれぞれのメモリを取り出す。
ヒートとトリガー、二人の髪と同じ色のメモリ。特別おかしなこと
もないが

その時だった

「お前ら！ まさか！！」

ヒッ ヒイイイイイイツツ！！」

「「？」「」

道化師は怯えたように走り出すと崖から転げ落ちていった。
二人は少し驚いて崖の下を見る、しかし暗い。
何も見えない……

「おや？ 殺そうとしたのがバレちゃったのかな？」

「……もしかして。ゼノン、道化師はメモリを見て…」

フルーラの顔を見て、ゼノンも何が言いたいのか瞬時に理解した。手に持ったメモリをブラブラと回して虚空を睨みつける。

「なるほどね…なら、なおさらアイツを追いたいけど」

「ええ。深追いは危険だわ、恐らくもう既にこの世界に来ているんじゃないかしら」

ゼノン達はため息をつく。
そして灰色のオーロラを出現させるとその中に消えていったのだっ
た。

「アグオ……」

崖から転げ落ちた道化師は、地面を虫の様に這いずり回っていた。
もう身なりを気にしている場合ではない！

何故あれがこの世界に！？

「まさか…ッ！ ワタシを始末する気なのか！？ 馬鹿なッ」

「その通りですよ。トードスツール」

「ッ！？」

既に辺りは夜に変わっていた。
もう月もでている、そんな月に重なる影が一つ

「お前はっ!?!」

「私の名はクルス」

クルス、その名を聞いた道化師は叫び声を上げてのた打ち回る。
逃げようとしているのだが体が言う事を聞かないのだ

「やはりッ! 何故だ!?! 何故ワタシが!」

クルスと言う可憐な少女は、うんざりするようにため息をつく
そして苦笑、彼女の瞳が道化師を映す。

「貴方はこの世界を滅ぼしにきた筈では？　なのに何ですか、この現状は」

「たっ！確かにワタシはこの世界を滅ぼす事はできなかった！
だが前回の功績があるじゃないか！」

「…ッ？　何をおっしゃっているのか…理解できませんが？」

「ハアツ！？」

驚く道化師にクルスはふと思いつく。

尤もそれが彼女にとって信じられない事なのだが

「まさか…知らないんですか？」

「な、何がだ!？」

クルスの道化師を見る目が完全にゴミを見るときのソレに変わる。
いよいよ道化師の心に恐怖が襲い掛かってきた。
逃げなければ ツ!

「貴方が前回訪れた世界は滅んでなんかいません、
クラウンゲームは人間側の勝利で終わったのです」

「ばっ!!馬鹿なアアアッッ!!」

「おやおや、コレは驚きですね。
まさか担当した世界の現状を把握していないとは」

「ありえんっ！ 人間がアレをクリアできるなど!!！」

尚も信じようとしない道化師にクルスは苛立ちを覚える。
クルスは舌打ちをすると、道化師にある映像を見せた。

それは道化師がクラウンゲームを仕掛けた世界の映像だった。

「まさか!!！」

街を囲んでいた檻は消え去り、人々は楽しそうに笑っている。
檻が消えていると言う事は爆弾が発動しなかったと言う事だ。

そして、そのカメラの前に一人の男が立っていた。
顔は帽子を深くかぶっている為分からないが、明らかにカメラに気づいている。

男は暫く黙っていたが、周りに人がいなくなるのを確認するとカメラの前に移動していった。

『やあ、爆弾をしかけたのは君たちかな？
悪いんだけど、あの爆弾は…』

ぼくが頂いたよ

「なっ！」

『やっぱりどうしてもトレジャーハンターとして
あんなお宝を見逃すことはできないからね。』

感謝したまえよ、君たちにはもったいないお宝だ！
アハハハ』

そう言って男は走り去る。

沈黙する道化師とソレを睨みつけるクルス

「二度にわたる世界崩壊の失敗、これだけならばまだ許されたでしょうに…」

問題はあの巨大爆弾と言う絶大な物を用意させておいてのあの結果です。

もうあの爆弾は手に入りません。

世界を崩壊させる確実なカードをもっておいてアレとは…」

クルスが天に手をかざすと、その容姿からは想像もつかない程の大鎌が現れた。

その可憐な姿には不釣り合いな程の武器、クルスはソレを迷う事無く道化師へと向ける！

「貴方のような無能は、偉大なる我が組織には不要です。」

『子供達』も貴方の様な玩具はいらないと判断したようですよ」

「そんな馬鹿なッ！ 頼む！ 待ってくれ！
いいのか！？ ワタシの知識は組織にとって必要なはずだ！」

「無能は必要ないんですよ。」

正直言いますが、ブラックカードスリーブを作る必要はあったの
でしょうかね？

カリスに変身したところでどうにかなる訳でもない。

貴方は楽しいかも知れませんが…

正直、貴方は中途半端なんですよ。全てにおいてね」

命乞いを始める道化師、しかしクルスはそれを聞くつもりはない
もう道化師に狙いを定めているのだ

「大方、このショーを上の方に見せてご機嫌をとろうとしていたん
でしょう？」

残念、失敗すれば全て無駄になるのですよ」

クルスは優しく微笑んで鎌を道化師の首にかける。
錯乱しながら助けを求める道化師に、もう一度優しく微笑むと

クルスは思い切り手を引いた。

「さよなら、道化師さん」

静寂が辺りを包む。
その中でクルスは立っていた、地面には二つになった道化師が転がっている。

「終わったのか？」

「ほう、綺麗に切り取れたものだなあ……」

「……」

クルスの後ろには三人の男がいた。

体格のいい軍服を着た男、ガル。

メガネと白衣という見るからに科学者の様な男、？6。

そして若い少年だ。クルスは足元に転がる道化師の顔を踏み潰すと、
笑顔を浮かべる

「まあ！ 皆さんどうも。どうしたんですか？
各隊の代表たる皆様が何故？」

「近いうちに例の議会が開かれるそうだ。お前も参加者に選ばれた」

「まあ！ 嬉しいです！」

クルスは嬉しそうに手を叩いて、微笑んだ。

その様子に男達も笑みを浮かべる

一人だけはうつむいたままだったが……

「クルスウ……お前の研究は大きな評価を受けたのだ、

それだけの資格があるというもの」

白衣を着た男はルービックキューブをそろえ様と必死なようだ。
時折いきなり面が変わるのは何故だろうか……

一瞬で色の配置が変わる。

不思議な光景だ、しかし誰もその事を問わないわけだが。

「では、皆様まいりませうか？この世界はもう諦めるしかありません。

一度失敗した世界は何故か異常な力が働いてしまいます。

まあ……このゴミンには誇り高き大鷲の紋章を刻む資格は無かった
と言っ事ですね」

そう言ってクルスは道化師の胴体を何度も切り裂く。
道化師の胸に飾られていた黄金のワッペンが引き裂かれる。

細切れになっていく体、その様を他の男達は楽しそうに見ているだ
けだった。

ただ一人を除いては

「・・・」

クルスは灰色のオーロラを出現させ男たちを先に行かせる。

謙虚な態度だ、そう……他人から見れば彼女はとても可愛い女の子

「さあ、貴方もどつぞ？」

「……一つ、聞いてもいいか？」

「……？」

若い少年はクルスにたった一言だけ投げかける

「殺す必要はあったのか？」

その言葉にクルスは満面の笑みで答えた。

何も知らない人間が見ればそれは天使の笑顔とまで称されたかもしれない

「もちろんです」

COBRAさん！

「・・・」

少年、COBRAは暗い表情でうつむくと自らもオーロラの中に消えていったのだった。

その場に取り残されたクルスは自らの功績が認められた事が嬉しいのか、ニツコリと微笑む。

そして携帯を取り出した。

「もしもし、私です」

『はあい、クルス』

世界を越える電話、その向こうからは若い女性の声が聞こえてくる。鼻にかかる甘く妖艶な声、姿は見えないがそうとうの美人なのだろう。声だけで男性を魅了してしまいそうだ

「どうですか？ そちらは」

『ええ、言われた通りにやったわよ。それにしても素敵な夜、とても美しい月、思わず体が熱くなるわ』

甘く切ない声がクルスの耳に入ってくる。彼女はクスリと笑うと、会話を続けた。

「ありがとうございます、優秀な部下を持つて私は幸せです。
しかし今回は控えてくださいよ、あくまでも財団の皆様を提供する大切な情報収集なのでから」

ですが、うまくいけば世界が滅ぶようにしておいてくださいとクルスは付け足す。
電話の向こうの相手も了解したようだ。

「一度そちらへ行くつもりです。貴女は戻ってもらっても結構ですので」

『はい、了解したわ』

「ええ、ではさようなら」

クルスはもう一度お礼を言って部下の名前を呼ぶ。

「チエーンソーリザード」

『じゅっ、じゅっ、あね』

電話が切られる。

クルスはもう一度黒い笑みを浮かべると、オーロラを出現させて消えていくのだった。

「……」

咲夜は学校の屋上から街を見回していた。

ローチはもう居ない、この街……いや世界の崩壊は免れたのだろう。

ホッと胸をなでおろす

「およ」

「……お前か」

椿は少し笑みを浮かべて咲夜の隣に立つ。

咲夜も少し笑うものの二人は何も喋らない。

そのまま二人は暫く何も言わずこの世界を見ていた

「ああ…えっと…コレ」

椿は下で買ってきたジュースを咲夜に渡す。
咲夜はお礼を言っと小さく呟く

「う」

「あ？」

「ありがとう」

「・・・」

椿はそれを聞くと苦笑する。
似合わない、顔がそう語っている。

咲夜は少しムツとしたが、今回は何も言わなかった。

「俺、最高にイケメンだったろ？
これはアレだね、流石にフラグ立つレベルだわ」

「ハッ！冗談キツイなイケメン（笑）さん」

二人はニヤニヤと笑い合う

「ちっ、待ってるよ。今に椿君の魅力でメロメロにしてやるぜ」

「はいはい、せいぜい楽しみにしてるよ」

あくまでも楽しそうに、二人はジュースのフタを開ける。

ブシュウウウウウウウッ!!

「.....」

「フオオオオオオ！どうだ！椿くん必殺スプラッシュ　ッ……おい
おいつて！お前なんで蹴りの構えとってんだ……？」

ちよ、おまつ……まさか！いや！嘘だろ！？

おい！聞いてんのか！？なあつて

アーツツ！！」

椿の悲鳴が空に消えていく。二人の関係は、

変わってない様で変わったのか？

変わった様で変わってないのか？

他者からは分からないかもしれない。
でもただ一つ分かることがあるればそれは

「あはははっ！」

「テメエ！笑ってんじゃねーぞ！イデッ！

え？…嘘、ちよつとやだ…割れてるッ！？
おけつが二つに割れてる！？

イヤアアアア！…割られたアアアア！」

「はははっ！元々だぞそれは！」

二人は仲がいいと言う事だ

第106話 ? 最後(スタート)? (後書き)

ここでブレイドのカードの説明を少し簡単に

A「チェンジ」

ブレイバツクルに装填する事で椿をブレイドに変身させる。

2「スラッシュ」

ブレイラウザーの攻撃力を上げる。再構築の時間が最速で済む。

3「ビート」

腕力が強化される

4「タツクル」

突進攻撃を発動する。ちゃんと当てましょう

5「キック」

脚力が強化される

6「サンダー」

電気を発生させる。また、発動しなくてもブレイドが電の攻撃を受けた時に

身代わりになってくれる

7「メタル」

身体を鋼の様に変えて、防御力を強化する。
発動すると解除するまで走れない

8「マグネット」

磁力を操る。

9「マツハ」

高速移動。速さはクロックアップより少し遅い程度、
アクセルベントとは同速

10「タイム」

時間を操る、今の椿では数秒停止させるのが限界。
時間停止中は何も傷つける事はできず、攻撃すると反射され自分に
返ってくる

しかしコンボの効果では反射されなくなる。
再構築の時間が最も遅い

J「ジャック」

単体で発動すると、コンボに使ったカードを含めて
全てのカードが再び使えるようになる。

Qを経由した場合、ジャックフォームへと変化する

この場合は全てのカードが再構築される
再構築の場合はコンボを発動した時、一番最初に使ったカードは戻
ってこない

Q「クイーン」

対象の体力を回復させる。
ラウズアブゾーバーに装填して使う事で
ブレイドをフォームチェンジさせる

K「キング」

好きなカードコンボを使用できる。
このカードのみ自動で発動させる事ができる

さらに、このカード自体に高い攻撃力があり
武器として使う事もできる

Q 経由でキングフォームに変化させる事ができるが
今の椿にその資格は無いらしい

さらに、カード状態のままでもJ、Q、Kとならば思念で会話がで
きる

こんなもんかな？
では次もよろしく！

第107話 けんか(前書き)

今回の番外編はちょっと番外と言う番外でもないような？

まあ補完って事で

ではごっせー！

第107話 けんか

「おはよう、葵さん！」

「おはよう友里ちゃん！」

「おはよう葵さん、うーん…いい匂い！」

「おはようハナちゃん。ご飯できてるからね！」

「おはようございます葵さん！」

「うん！おはよう里奈ちゃん！」

それぞれが起床してきて徐々に食堂へ集まってくる。
やはり女性陣の方が早く集まるものだと葵は苦笑した、しばらくして徐々に男性陣の姿も見えてくる。

「おはよう…葵さん」

ユウスケが

「おはようございます。葵さん」

巨が

「朝、それは穢れた世界の運命を変えようとあがらう戦士達へ
奇跡の開始をつげる無限にして生命の脈動、おはよう葵さん」

ブレイドが

「おはようございます葵さん。皆さまおはよう。」

真志が

「うーす、おはよう。」

女性陣の中で一番遅い美歩が

「グッドモーニング、葵さん」

双護が

そしてしばらくして全員がそろって

「・・・」

何か、おかしくなかったか？

葵は首を傾げる。

何か違和感を感じる、まあでも取りあえず今は食事の用意が先だろう。

葵は配膳を済ませ挨拶を行った、それぞれは談笑したりテレビを眺めながら食事を始めている。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

しかし、やはり何かおかしい。
なんかうんざりしている様な人達がいた、食事が口に合わなかった
のか？

少し不安になる葵だが、直ぐに違和感の正体に気づく。

「ああ、なるほど・・・」

「あれっ？っかしーな……」

違和感の正体はパンを口に持っていく。

しかしそのパンが口の中に入る事はない、それが不思議なのだろう。

先ほどから違和感は何度もパンを口へと運ぶ、だが食べられない

「何で食べれないんだ？これ……どゆことっ！？」

「ねえコレ……ッ、どゆことっ？」

「……」

その違和感の向かい側に座っている真志は本当にうんざりしているようだった。

その後も『違和感』は食事ができない事をしばらく不思議がっていた。

なんか……友里がしきりにデルタムーバーで

彼に照準を合わせてる様な気がするんだが……止めた方がいいんだよね！？

そして、ついに耐えれなくなって巨が口を開いた

「あの…変身してっからだと……思います」

「え…」

巨に言われてブレイドは鏡をしてみる。

「かぁー！マジだよコレ！マジンガーだよコレ！
やべー、ヤベツチ無意識だったわ俺！え！

え？何？俺変身してた？

かぁーっ！無意識だったわ！

かぁーっ！」

」
」

そう言ってブレイドは変身を解除して椿に戻る。

数分後

「あれっ？っかしーな……」

「……」

「かしーなコレマジで……っしーんだけどコレガチで……」

「あの……また変身してますよ……」

「え……？」

巨に言われてブレイドは鏡をしてみる。

「っべー！マジタロスだよコレ！っべーなコレ、ベツチだわあ！
え？何？俺変身してた？
っわっわあ、ぜっぜ！きっつあなかつたわあ！

ちいー！

きさー「んー」

「・・・」

「先生エエエエエ！ 調子乗ってますアイツー！」

「黙らせてくださいーッ！」

「あ、あはは...」

ブレイドになれたことが嬉しいのか、椿は昨日からもっ何回もわざとらしい誤変身を繰り返していた。

とにかく何かもうウザ過ぎるので、みんなはもう爆発寸前である。

「落ち着いて皆、椿君だって頑張ったんだから…ね？」

「甘過ぎです先生！真志なんて昨日から何回ファイナルベント発動しようかどうか迷ったと思ってるんですか!？」

「うっ、うーん……」

やはり椿を止めるのは彼女の役目なのかもしれない。
翼は笑って二人を優しい目で見守るのだった。

「ありがとう皆、すごく助かった。おかげでこの街も平和になった
よ」

「ええ、感謝するわ。本当にありがとう」

クロハとダイアナは司達に頭を下げる。

彼らだけではこの世界を救えなかったろう、しかし逆も同じだ。

司達もクロハとダイアナがいなければこの世界を無事に終える事はできなかった。

それぞれは互いにお礼を言い合う。

「今度は僕達が君達を助ける番だね、困った事があれば何でも言うてよ」

「ええ、必ず力になるわ」

そう言って微笑む二人、しかし世界が移動してしまえば会えなくなってしまう。

悲しい話だ、仕方がないとは言え…どうしても寂しさがあるもの。

せめて残された時間くらいは楽しく過ごそうと彼らは思う。
ゼノン達が言うにはあと二日で世界が移動するらしい、

だからそれまでは皆で楽しく過ごそうかと思った時、事件は起きるのだった。

「もうっ……もういいです……！　もう知らないッ！　我夢くんなんてッ……！」

大ッッ嫌いッですっっ!!!

「
」

涙をこぼしながら走り去るアキラと、真っ青になって立ち尽くしていた我夢。

そう、今度はコッチが喧嘩を始めたのだった。
あと二日で世界移動してしまうというタイミングでこれはキツイ。

と、言う訳で早速理由を聞いてみる

「悪いクロハ…ダイアナ」

「ううん、いいよ。皆仲良くなれるように協力するよ、僕とダイアナもよく喧嘩するからね」

「アレは全部クロハが悪いのよ！もうっ！」

クロハとダイアナも加わりこの問題を何とか解決できないかと考える。

まずは理由だろう、なんで二人は喧嘩をしたのか。

まずはコレに尽きる。

しかし……

「先生助けて！ 我夢くんが息してないの！」

「コイツこんなに軽かったっけ…？」

椿と司に抱えられていた我夢。

なんかもう真っ白になってる彼から理由を聞くのは難しいだろうか？

「我夢くん？何があったのか、聞かせてくれるかな？」

「……じじは……」

それは、少し前の事。ジョーカー絡みで彼らが奮闘している時の事だった

「我夢くんッ!？」

学校に連れられた我夢を見て、アキラの心臓は止まりそうになった。彼は白い服を着ていたはずだ、だが今彼の服は赤黒く染まっている。

自分の靴下と同じ…血で染まったと言う事だ。そして何より我夢の顔色はとても悪かった。

だから、一瞬彼が死んでしまったのではないかと思ってしまう。
悲しかった、涙が止まらなかった。

同時に悔しい、自分が何もできない事といろんな感情が混ざり合っ
てアキラは混乱する。

その後、アキラは我夢が目覚めるまで必死に祈り続けた。
葵が代わるといっても聞かず、我夢の傍で彼が目覚めるのを待った。

既にゼノンとフルーラが我夢の怪我は命に関わるモノではないと言
っていた為に少しの安心感があったが、それでも目を離せば彼がど
こかに行ってしまうような気がして怖かったのだ。

だから我夢が目覚めたとき、アキラは本当に嬉しかった。

その後、契約のカードで咲夜が戻ったりといろいろあった為
なかなか言えないでいたが、先ほどアキラは我夢にあの時の事を問
うた

「どろしてッ、どろしてあんな無茶を！」

「……それが、一番だと思っただんですよ。」

「すいません、アキラさんに酷い事を言ってしまったって」

「どつやら我夢はあの時、中々言う事を聞かないアキラに言った事で怒られているのだと勘違いをしたようだ」

「え……いや、それは我夢くんは悪くないですから……」

「ただどッ、もう無茶しないって約束してください！」

「無茶……ですか？」

「そうですね！ あんなにボロボロになって……ッ」

我夢は申し訳なさそうにうつむくと頭を下げる。

その行動にアキラは戸惑ってしまった、何か勘違いをしているのか？

「正直、もっとうまくできると思ってたんですけど…
結局僕は時間稼ぎくらいしかできませんでした。」

アキラさんの言う通り無駄な血しか流せなかったです、
もっと計算をするべきでしたね、回復の効率も悪かった。

次は
「

「何ですか…ッ それは…」

「え？」

「無駄な血ってッッ！ 効率とか次とか！ 我夢くんは分かってない！」

「…ッ？」

我夢は目を丸くする。アキラは少し涙目になって我夢の肩を揺すった。
「ただ心配したかとか、我夢がいなくなってしまうのではないかとかいろいろな感情を我夢へ必死に訴えかけたのだった。」

「心配したんですよ！ 私がどれだけ……」

「アキラさん……ありがとうございます」

その言葉を聞いてアキラは安心する。
我夢も嬉しかった、まさかこんなに心配してもらえるなんて……

「ただ、我夢は確信していた。」

今回の件で

「だけど、すいません。約束はできないかもしれないです」

「え……」

「僕の能力は回復です。今回の戦いで生身の僕が想像以上に時間を稼げたのは

この力があつたからです。確信しました、僕の役割は壁です。

「この先の世界でも僕が時間を稼」

「何で…ッ!! もっッ、いいです!!」

「もっ」

そこで、あの言葉に戻ると言つ訳だった。

「なるほどねえ…ま、それは怒るわな」

真っ白になっている我夢の肩に司は手を置く、
涙目で振り向く我夢にサムズアップを決めると司はしっかりと微笑
んだ。

「まかせとけよ我夢ッ！俺がバツチリ仲直りさせてやるからな！」

「ぶっ、ぶっがぜんばいいいいー！」

飛びつく我夢の肩を優しく叩くと、司は歩き出すのだった。
そっだ、こつ言つのは先輩が解決してやるものだろう

早速司は我夢に仲直りをする為の行動を教えてあげる

「……………なんですか、コレ」

「あのっ、これは…ですね」

刺さるような視線を受けながらも我夢は踏みとどまる。
アキラが何故怒っているのか司から理由を聞く事ができて助かった。

これをあげれば仲直りができる。我夢はそれをアキラに差し出す

「お、おにぎりです！」

「見れば分かりますよ、
どうしておにぎりなんて持ってるんですか……？」

「え……だって……アキラさん、
おなかすいてたから……怒ってたんじゃない……」

「……」

ピシヤリ、教室の扉がしまっ
てしまいましたとさツツ！

「……………え？」

「ハハハ……いいんですよ…ハハハ……」

さらに色素が薄くなっている様な気がする我夢に、今度は椿が手を添える。

あれ？ 何かさっきも同じ光景を見た様な…

いや気のせいだろう

「安心しろ我夢。俺はわかってる、俺は理解している。任せろ」

「づばきぜんばいいい」

飛びつく我夢の肩を優しく叩くと、椿は歩きだすのだった。

そうそう、こう言うのは先輩がチャチャチャイと解決してやるもんだ

椿は早速我夢に仲直りの言葉を教えてあげる

「・・・」

ドアがノックされたので、アキラは少しだけドアをスライドさせて誰が来たのかを見た。

相変わらずナイフの様にするどい眼光。
思わず怯みそうになる、だが引いてはいけないッ！

「よ、よお…お前の瞳に、俺のこ、心を合わせてみねえか？
ほら、生まれた世界に…」

ハッピーバースデー

「

「馬鹿！」

ピシヤリ！

ガチャリ！

「……え？」

「ウラツシヤア！」

「アンギョン！！」

真志の頭突きが椿をとらえた！
沈む司と椿を完全に見下すと、真志は我夢に微笑みかける。

「どうやら彼が先月やった恋愛ゲーム、『マチで恋するアサルトル
ンチ』では主人公が今の台詞でヒロインと結ばれた様だが……」

「辛かったな、我夢くん。馬鹿ばかりで苦しかったろ？
安心してくれ、オレは我夢の味方だぜ！」

「おれもだよ我夢くん。おふざけは一切なし！」

「安心しろ我夢、俺達三人の作戦は完璧だ」

「じんじざん！ユウズケざん！そつござん！」

ユウスケは言う、やはり真正面から自分の想いをぶつける事が大切だ。

双護は言う、やわらかい雰囲気をつくる為に動物の力を借りよう。

「ニャー」

「猫ですか！？」

「ああ、校庭にいたのを引っ張ってきた。名前は聖イノセント十字星だ」

「・・・」

とにかく猫をきっかけに会話のタイミングをつかむ、そう言う事だった。

そして真志は言う、少しのユーモアも大事なのだと…

完璧だ、三人は我夢に満面の笑みを投げかける。

え？ これもう仲直りどころかゴールインしちゃうんじゃない？

…並の自信があった。

「ちあ、いっていい！」

「はい！」

「アキラさん、僕……ごめんなさい、勘違いしてました。
やっぱりアキラさんや皆さんに心配をかける事こそが……」

「我夢くん、次にふざけられたら私もう一生口聞かないです」

アキラは猫を抱いて扉を閉めた。
立ちつくすのは、つぎはぎだらけの着ぐるみ、G A M U………

「……」

「おかしいな、着ぐるみ大作戦がまさか失敗するなんて…」

「ありえんツ、俺達の作戦は完璧だったはずだ。

計算に計算を重ね幾度とないシュミレーションを重ねた結果、

あの作戦にいきついたというのに…」

「やっぱり着ぐるみが俺の使いまわしなのがまずかったのかな？
巨くん、何が悪かったと思う？」

「頭です」

固まる三人を無視して亘は我夢の隣に座る。

「やっぱり普通に謝ったほうがいいんじゃないか？」

「う……ううん。そうですね」

しかし、いろいろと機嫌をそこねてしまった。
その後も女性陣たちやクロ八達も協力してくれたが、結局無駄だった。

一度出来てしまった溝はなかなか簡単には埋まらない。

話しかけようとしても、どうにも上手くいかなかった。

「ごめんね、力になれなくて」

「いや、いいんだ。こっちこそ悪かった。
せっかく手伝ってくれたのに」

いろいろとその後も努力してみたが、二人の溝は埋まらなかった。
そのまま時間がきてしまい、クロ八達と別れる事になってしまった
のだ。

「じゃあな、また会おうや。必ず」

「うん、もし困った事があったら…必ず助けに行くよ」

「期待しておいてね」

「ああ、助かるよ」

同じブレイド組みと言う事なのか椿とクロハ、咲夜とダイアナはす
ぐに仲が良くなった。

いつか世界が救われたのなら、また会えるのだろうか？

「じゃあね！ 絶対また会おうね！」

クロハ達に別れを告げると、学校は光に包まれたのだった。

一方その頃・・・

「ほう、喧嘩か。そなた達はどうか？
何か喧嘩した事はあるか？」

「ええそりゃありますよ。ねえフルーラ」

「……トシッー」「」

「……ここまで目障りな愛も珍しいものだな……」

抱きしめあう二人を冷めた目で女は見つめる。

聞かなければよかったと後悔するがもう遅い、仲直りの話まで計三時間みっちり女はゼノン達の話が聞かされる事になるのだ。

「しかし……ついに奴らが動き出したか。
あの男も焦っているのではないか？」

話題を変えるために女はその事について触れる。
ニヤリと笑う三人はとても不気味に見える。

先ほどのような明るい雰囲気は既に消滅していた、いつそう黒い笑みを浮かべてゼノンはソレを見る。

「まあ、ボクはアイツさえ殺せばそれでいいんですけどね。
ご主人様ならどこにいるか分かるんじゃないですか？

フッフ…」

「まさか！私はただ見るだけです、それでいいのだから。

クククッ！」

知ってるくせに…三人はより深く笑う。

「デイエンドもデイケイドに接触したようね、
いよいよ本格的に歯車が動き出すのかしら？」

「私達はどんなことが起ころうとも構わない。そうだろう？
私は視る、そなたらは自由に動く、それでいい」

「やれやれ、相変わらず無関心な人だ」

「まさか、私は暇なだけです。それに……」

ああ、そうだった。貴女は人じゃないんですでしたね。
そう言って彼らはまた笑い合っただった。

第107話 けんか（後書き）

次の番外編はダイアナとクロハのちょっとしたお話です

さて、ここでカリスのカードの説明をいれときます

A「チェンジ」

ブレイドと同じ、カリスもターンアップです

2「アロー」

カリスアローの攻撃力を上げる。一応オリジナル再構築の時間が最速

3「チョップ」

腕力が強化される。

4「フロート」

飛べるようになる

5「ドリル」

脚力が強化される。

ブレイドと同様文字通りの技が放てる

6「トルネード」

風を発生させる。また、風の力を無力化させる事もできる

7「バイオ」

任意の場所からバラの蔓を出現させる

8「リフレクト」

バリアを発生させ、相手の攻撃を反射する
自動で発動できる。しかしどんな攻撃も反射できる訳ではない

9「リカバー」

状態異常と体力を回復する

10「シャッフル」

ハートの印を出現させ、それを持った相手と自分の位置を入れ替える
印は打ち込んでもいい
相手との距離によって再構築の時間が変わる

J「ジャック」

ブレイドと同じ効果

Q「クイーン」

単体で使用すると、ミラーワールドや特殊な場所に入れるようになる

K「キング」

ブレイドと同じ効果

まあこんなもんですね

では次もよろしく！

第108話 番外編 ?私・カレ? (前書き)

今回はもう番外編ですね

話全然進んでないですし、司達も出てきません

ちょっとした小話みたいなものですかね

ではございませぬ!

第108話 番外編 ?私・カレ?

「あーあ、いつちゃったね……」

「しょうがないわ、彼らにはやる事があるんだから」

学校があつた場所はすでに存在しておらず、
もうクロハとダイアナはどこに学校があつたのかすら分からない。

実は心の中でもしかしたら、彼らが世界移動でこの世界を離れたら
記憶まで消えてしまうのではないかと思つたが、そう言う事はない
らしい。クロハは安堵の息をつく、自分達が覚えている限り必ずま
た会えそう気がするからだ。

「我夢さんとアキラちゃん…仲良くしてくれればいいんだけど」

「うん…そうね、でも本当に彼らは凄かつたわ。」

まさかこんな短時間でスピード、ハートと契約しちゃうなんて…

……」

そうは言ったがダイアナの表情はどこか暗かった。

クロハは何故ダイアナの表情が暗いのか、その理由を理解する。

ダイアナは代々家系でダイヤと契約を結んでいた。

その為に幼い頃から必死に努力して、何年もの日を重ねやっと契約できたのだ。

でも自分以外の三人はいくらアンデッドの性格は違えどたった一日で契約したのだ。

ダイアナはそれが少し羨ましかった、
同時に自分には才能がなかったのではないか？

ネガティブな感情が彼女つつむ

「ダイアナは…凄いや、僕なんかより…ずっとね」

「ふ、ふん！当然でしょ！

クロハはいいわよね、すごく簡単に契約できて！」

すこし後悔したがダイアナはクロハに背を向けて走り去っていく。
それをクロハはため息混じりに見つめるのだった

『話してしまえばいいだろうに、ヘタレだなお前も』

『めんどくさい話だぜ、カッコつけてないで言っちゃまえよ』

『コラコラお前達……！』

「あはは…うーん、難しいねえ」

ギヤーギヤーと騒ぐアンデッドにクロハは苦笑いを浮かべて頭をか
く、

難しい話である本当…

『あまり、褒められたものではないな』

「？」

ダイアナが少し走ったところでダイヤのジャック、ピーコックが話しかけてきた。

不思議そうに首を傾げるダイアナにジャックはため息をつく。

『ダイアナ、いくらクラブの連中がお人よしだからといって』

『ジャック、いいのか？』

ピーコックの言葉をさえぎる様にしてクイン、サーペントが会話に参加する。

どうやら何か隠し事をしているようだ、途中で止められるのは非情に気になるし腹がたつ。

ダイアナは少し声を強くしてジャックたちに問いかけた。

『話すのは気が引ける、だが彼が誤解されたままというのは納得がいかん。』

ダイアナよ、いくらクラブが甘いからと言って
単に人助けを見ただけでは契約はしない』

「え！？ そうなの！」

じゃあクロハはどうやって…

『懐かしい話だ…』

と、言っても我らにはついこの間のように思えるがな

『こんにちは』

山羊の様な者が彼女に優しい声で挨拶をしてくる。
女性……なのだろうか？

少女は少しばかり安心感を覚えるが、やはり容姿が…

「...」

震える手で父の手をしっかりと握っていたのは、幼い少女ダイアナ。彼女がいるのは今まで近づくなと言われ続けていたロシアム。

ダイアナは10歳の誕生日に父に連れられて始めて彼らと会った。

『ほう、今回は女か』

『なるほど、お母様によく似てらっしゃる』

金色のカブトムシと鳥だろうか、幼いダイアナにはそう見えた。彼らは自分の両親、祖父、その何世代前から生きている存在。

アンデッドなのだ

『どっか頑張ってください、辛くなったらいつでも相談にのりますよ』

そう言ってクイーンはダイアナの頭を撫でた。

噂に聞いていたよりはずっと優しい感じだった。スートスピード。

『ダイアナ、女であろうが、子供であろうが貴様にもなれるはずだ。ライダーの資格が在るのならな』

最後にキングが言った言葉、あるのだろうか？
私にも資格は……

そして、また次のスートに挨拶をしに行く。

『ほう、ダイアか……ギラファは頭が固いから苦勞するぞ？
わらわに乗り換えたくなったらいつでも待っておるぞ！』

『うふ、どんな風に成長していくのか、楽しみですね』

『ハッ！ 俺のブルース、聴いてくか？』

ブルース？ ブルースじゃないのだろうか？

だが、しかしそんな事おかまいなしに笑い合うスートハート達を見て、

ダイアナは複雑な気分になるのだった。

何かこっちがいいような、ダイヤで良かったような……

あ、何か踊り始めた……

父親もめんどくさくなったのが、次のスートに向かう。

『めんどくさい話だが、まあ頑張れよお嬢ちゃん』

『腹が減ってるのか？ オニギリ食うか？』

『大変だと思うが、ダイヤの連中は真面目で正しい連中ばかりだ。きつと君の力になってくれるよ』

クローバーの人は皆優しかった。

ちよっとこっちのほづが良かったなとも思ってしまった。

だが、ダイアナはそれを否定する。
変えられないのだから……

そして、本当にダイヤのアンデッドに認めてもらうのは難しいもの
だった。
アンデッドについての勉強、カードコンボに耐えられる体力をつく
るための特訓。

それらは押さないダイアナにとって辛いものだったが……

「お、おはよう……ダイアナさん」

「ダイアナさん……なにか、欲しいモノとかある……？」

明らかに周りの態度が変わっていった、何故？

そうだ怖いのだ皆。

ダイアナに逆らえばアンデッドの力を使って殺されるなどの噂がす
ぐに広まった。

2281

友人達もだんだんと口数が減っていき、
ついには他人のような振る舞いをされた。

それが一番辛かった、悲しかった。

今まで楽しく遊んでいたのに、もう友達として見てくれないのだから

「どうしたの？ ダイアナ」

「・・・ッ」

「ただ、一人だけ……以前と同じように接してくれた人がいた。それが、クロハだったのだ。」

「彼はダイアナと遊んでいた一人でそれ以上でも以下でもない友達だった。」
「ただど周りの人間がなんと云おうとも、クロハだけはダイアナの味方だった。」

「・・・」

クロハはダイアナが自分たちを守ってくれる為に努力をしている事を知っていたのだ。

だから彼は・・・その選択をする。
自分の意思をかけて

『君は、どうして私達の力を望むか……
一度、嘘偽りなく話してくれないか？』

タランチュラアンデッドは目の前で立っている少年、クロハに問いかけた。

突然話しかけられたかと思えば、いきなり契約してほしいと来た。
タランチュラはキングとしてクロハに問いかける。

「見ちゃったんです……彼女が泣いているのを」

『？』

クロハは、ある日たまたまダイアナの家を通りかかったとき、彼女が泣いているのが見えた。

友達が泣いているのは見たくない、
そして、何より彼女は自分達を守る為に泣いているのだ
クロハはすぐに慰め、励まそうと思ったのだが……

「
ッ!？」

なんて、声をかけていいのか……

どうやって励ませばいいのか全く分からなかった。
ダイアナが泣いているのは契約がらみの事だろうというのはすぐに
分かったし、

クロハはその事について考えてみる。

だけど何も分からなかったのだ。

自分は契約者じゃない、彼女の痛みを一パーセントでも理解していかないのだ。

そんな自分に彼女に声をかける資格があるのか？

「・・・ッ!!」

だから、彼は決意する。

できる筈だ、自分にも彼女と同じ痛みを共有できる手段が、そして
…この街を一緒に守る権利が

『なるほど、つまり君はダイアナと同じ立場に立つ為に……私達と契約を?』

「はい、僕は無力な人間です。

だからスピードの試練には挑めない、挑む勇氣も力ない。

ハートの皆さんを認めさせる自信もない、だけど……

クラブの皆さんなら、希望があると思いました」

クロハは自分の感情を包み隠さずキングへとぶつける。

聞けば契約者がダイアナ家だけの時代もあつたらしい。

そして時代の中にはスピードとの戦い、歴史が語る契約者の苦悩。それをダイアナだけに背負わせるのはおかしい話ではないのか？

その選択は正しいのか？

クロハはそうは思わない。

だから自分もダイアナ、世界の力になれるようにクラブの面々を訪ねたのだった。

『話は分かったよ、私が君と契約する条件はたった一つ』

「……っ」

『それは、ダイアナと同じ特訓、訓練をする事だ』

「!?!」

『彼女が契約に成功したとき、君も契約に成功する。
彼女と同じ思いを君には味わってもらおう事になるが、いいかね?』

もとからそのつもりだった。
今さら後悔も、未練もない。クロハは力強く頷き、キングに頭を下
げた。

『できるはずさ、君に…ライダーとしての資格があるのなら』

そしてその資格とは、自らの手で掴み取るものなのだ

「はっ…」

「そんな……それじゃあくろ八が言った
おばあさんを助けたところを見て、キングが気に入ったって言う
のは」

『嘘だな、あの男はお前、いやもしかしたらそれ以上の血を吐いた
だろっ』

キング、ギラファの言葉にダイアナは口が塞がらなくなる。
そう言えば、ある時から彼の言葉には妙に説得力があったような気が
する

『お前に心配をかけさせたくないと言って理由を隠していたが……
お前もそろそろ素直になっただらどうだ？』

『マスターの幸せを願うのが契約したアンデッドの勤めというもの
だ』

『もうこの世界は平和になった。』

これからもちよつとした事件こそあるうが、
我々の力無しでもこの世界は大丈夫だろう』

ダイヤの面々はダイアナを急ぎ立てる。

尤も、彼女とて気持ちはかたまっていたのだが

「私、謝らないと……」

そう言ってダイアナは走り出す。
どうしようか？ まずは謝ろう。

そして……できる事ならば一緒に食事にも行かない？

そう誘うのもいいかもしれない。

ダイアナは期待と緊張を胸に、クロハを探しに行くのだった。

第108話 番外編 ?私・カレ? (後書き)

やはりブレイドのライダーは四人並ぶと爽快感がありますね

もっとレンゲルが覚醒した後の話も見てみたかったけど

あれはあれでいいと思います

まあ、今回でブレイド編は完全終了となりました

次の試練までちょっと更新は遅れる……かも

では次もよろしく!

第109話 START SPEED LOVE(前書き)

はい、と言う事で

カブト編、スタートです

でもね、ちょっと次の更新は遅くなるかも

ごめんなさい。この話は予告的な感じですかねw?

ではどうぞ！

第109話 START SPEED LOVE

『ねえねえ！ おばちゃん！』

『おばっ…！ お姉ちゃん…！』

『はい！ じゃ、お姉ちゃん！』

『んー？ どうしたのかしら？』

『オレ！ 大きくなったら正義の味方になるんだっ！』

『へー、すーいー！すーいー！』

『あーッ！ 信じてないなあ！』

『いんやあ、信じる信じるよお姉ちゃんはあ。』

アンタの将来は多分そう言う関係なんだろうって心から思っわよ

お

『本当か！？オレ、頑張る！』

『おう、応援してるわよお！ヒーローさん！』

そう言って、二人は笑い合っていた。
遠い昔の話だ。

「まーゆーちゃん！」

「どうしたのお…美歩ちゃん…？」

「お菓子あげるね！ ほら、おいで」

「わあい！ありがとう！」

真由は嬉しそうに微笑みながら、美歩が差し出したポッキーにかじりつく。

何も喋らずにもぐもぐとポッキーを食べる真由。

全て無くなると物欲しそうに美歩を見上げる。

「……もう一本あげるね」

「ほんとぉー！？ ありがとう……！」

笑顔でまた美歩が差し出したポツキーを食べ始める真由。
美歩は何故か呼吸が荒くなってきたている気がするが…

何かヤバイ。

何がヤバイのかは、まだ説明できないが
赤面してハアハアと真由を見る美歩は相当怪しく見える。

「だああああ！ もう我慢できないっ！
できるかよチキショー！！」

「？」

美歩は真由を思い切り抱きしめると、頬ずりを始める！
だが、真由は特に気にする事もなく。

目を点にしながら尚もポツキーを食べ続ける

「きゃわいっす！真由にゃんきゃわいすぎるっす！！
アツシはポツキーじゃなくて真由ちゃんを食べた」

蹴り、それで真由と美歩は引き剥がされる。
顔面から床に倒れる美歩を尻目に真由の体は強く抱きしめられる。

「大丈夫だった真由ちゃん？
怖かったね、あのHENTAIは危ないからもう近づかないようにね？」

おおよしよし。可哀想に可哀想にね」

美歩を蹴り飛ばした友里が今度は真由を抱きしめる。
同じく頬ずりをしてる時点で同類と言えなくも無いが……

いや、止めておこう。友里は真由の手をとると、一緒にテレビを見ようと提案する。

が、しかし

「ちょっと待ちなさい！」

「ぐおおッ！」

友里のツインテールをわしづかみにするのは薰だった。

口を三日月のように吊り上げて、友里を睨みつける。

抵抗は許さない、ツインテールをハンドルの様に操って動きを封じた！！

「つーかーむーなあ！」

「ふん！ 友里、アンタは無害な羊を装っているようだけど…」

「見えるのよ！アンタのその内に秘めた狼のオーラが！」

「くっ…！…！」

「ほら図星ってところかしら？」

「ああそうね、アンタはきつと真由ちゃんとスリスリしたいだけ……」

「つまりそこにいるHENTAIと同じ…！」

「チッ！」

「ふふふ、そんな欲望にまみれた輩に真由ちゃんは渡せないわね。
さあ真由ちゃん、私と一緒にかまぼこでも作りましょ。」

薫はそこで言葉を止める。

顔には汗が一筋……薫はゆっくりと後ろを振り向く。

いや、だがうまくいかない。

何故？そう、それは…

「ここにきてかまぼこ好きを前面にだしてくるか？
キャラ付け乙としか言いようが無いな薫う？」

「咲夜…ッ！ やはりアンタかっ」

薫のポニテを掴みながら咲夜はにやりと笑う。

咲夜はこう……なんかうまい具合に……何か、何ていうかせいッ！ってやって薫と真由を引き離れた

せいッ！ってやったんだよ。本当だよ

「さあ、真由。もう悪は消滅したのだ、ワタシと一緒に買い物に行こうか？」

「……」

真由が笑顔でその手をつかもうとした時、甲高い声が聞こえてきた。
瞬間、走る戦慄。

咲夜の額に汗がたれる。何だ……この声はッ！？

『まゆちゃん！ ボクと遊ぼうよ』

『まゆちゃん！ ワタシと遊びましょ』

「!?!」

「わあ!」

少し離れた所に熊とウサギのぬいぐるみが居た。
その可愛らしい二体は真由に向かって手招きをしている。

「かわいい!」

「!?!」

あとちょっとで咲夜の手に触れられたらどうに、
真由はフラフラとそのぬいぐるみの方へと歩いていく。

「真由ッ!」

咲夜から離れていく真由。
やられた…まさかッ

『独占しようとしてるからだよねえ』

『いけないねえー』

熊とウサギはどす黒いオーラを出して咲夜にその言葉をぶつける。
負けた、完敗！ 真由はかわいいぬいぐるみに夢中のようだ！

咲夜は膝をつく。まさか…

「二人がかりとはッッ」

「三人ですよ」

「!?!」

ぶすりと咲夜の首元に夏美の指が食い込む。
直後笑い転げる咲夜、夏美はそれを見てニヤリと笑った。

しばらくケラケラと笑っていた咲夜も、しばらくすると糸の切れた人形の如く動きを止める。

「やりましたね先輩、ハナちゃん」

「うん！ これで真由ちゃんと遊ぶのはわたし達で決まりね！」

ハナと里奈は物陰から現れて、それぞれのぬいぐるみを真由に手渡す。

吹き替え作戦は上手くいったようだ。

喜ぶ真由と笑う三人、

だが……その時だった。

「ごめんなさい。」

やっぱり真由ちゃんと遊ぶのは私一人になりそうです……」

「！？」

トントントンッ！

夏美の指がハナと里奈をとらえる。
まさかの裏切りである。笑い落ちるハナと里奈。

「私ってなんて悪女なんでしょうか！　アーツハハハハ！
ダーツハハハハハ！　ウエアハハハ　オエツ！！」

「夏美ちゃん！」

「イエス！　さあ一緒に遊びましょうねえ！」

「ボクにもやって！ボクにもお！」

「え？」

夏美は沈黙する。

こんな天使に笑いのツボを押すって…

「できませんッ！グワァ！」

何故か吐血して倒れる夏美。

「・・・！」

しょうがないので、真由は最終的に残った一人に飛びつく。
そんな真由の頭をその人は優しく撫でる。
子猫の様に笑う真由を見て、その人も優しく微笑んだ。

「ふふっ、よしよし」

焦り、それは敗北への片道切符ですよ……先輩方？

「ふふっ」

ニヤリと笑ってアキラは真由の手を握るのだった。

「さあ行きましょうか、真由先輩」

「うん」

真由先輩、マジ天使。
そう確信した時だった

「あ……」

「あ……」

我夢とバッテリーはちあわせしてしまっ……

「「あのっ……」「」

二人同時に声をかけるが……どうも気まずい。
目を合わせないまま二人は立ち尽くす。

アキラは何を言おうとしたのか聞いてみるが、彼女の元々である美しくも低めの声が、何か怒っているのではないかと言う錯覚を起こさせてしまった。

結局我夢は軽く謝ってその場を立ち去ってしまふ。

どうも前の世界で、あの時以来うまく話せないでいた。

「・・・」

唇を噛むアキラ、しかしすぐに違和感に気づく。

真由の手を掴んでいたのに、ふと気がつけば今自分が握っているのは手じゃなくてぬいぐるみ！

「あー！」

「さあ真由ちゃん、邪魔しちゃ駄目だからねえ？
私と一緒に遊ぼうねえ」

真由を引き連れているのは葵だ。

「葵さん！ 真由ちゃんは私と遊ぶんですよ！」

「いや！この美歩ちゃんだね！」

「あたしを忘れんなよ！」

「いや、私が！」

「私！」

やんや、やんやと言い合いをしている女性陣を真由は暖かい目で見守る。

この抗争の原因が自分にあるとは夢にも思っていないだろう。
今日のおやつは何か……とか、皆が平和に過ごせますようになんて考えている。

「あー！」

そんな中、真由は何か気づくと満面の笑みでそこへ駆けていった。
何事かと女性陣が見てみると、そこには双護がいるではないか。

「お兄ちゃん！ どこ行くのお……？」

「真由か、俺は今から自分と言う意識体が何故この世に生を受けた

のか？

今一度世界に問うと言う暗黙の了解を得るため、

そして自我の存在をこの世に受け継ぐため

生命の育みと言う恩恵を得る儀式を行う聖地、つまり自販機に行くところだ」

「よくわからないけど…ボクも行くう……」

「ハハッ、いいぞ。何かジュースを買ってやろう」

「うん…！」

そう言って二人は楽しそうにみんなの前から歩き去ってしまった。

「…」

「・・・」

「・・・」

「やっぱり、お兄ちゃんが一番なのかしらね」

葵は沈黙する女性陣達を見て、苦笑したのだった。

第109話 START SPEED LOVE (後書き)

先に言っておきますが、この編は少し特殊かもしれませんが、何か、勝手に終わってた……って感じになるかも

ではこれで、次もよろしく！

第110話 CONTACT SPEED LOVE(前書き)

はい、と言つ訳での更新でございます

ちよつとね、また更新が遅くなつてしまつたかもしれません
土曜くらいかな、ひよつとしたら。理由は後書きで

ではございませー

第110話 CONTACT SPEED LOVE

「ハア！ ハアッ！ ……クソ！」

激しくネオンが交差する夜の世界を女性は息も荒く駆けていく。肺と体が悲鳴を上げるのを感じるが、それでも足を止める訳にはいかない。

足を止めれば恐らく…

（死ぬ…のよねっ！

ああ、三十超えると体力なくなるってホントだわ…）

どこに逃げればいいのか？女性思考をめぐらせる。
人込み…は駄目。目立ち過ぎる、すぐに見つかって殺されるだろう。
見つけた時点で詰む一歩手前なのだ。

だったらもつと物陰とか…

「!」

そんな事を考えている暇があったら足を速めるべきだった。
女性は激しく後悔する。

目の前にいる『兵器』は自分を視界に捉えただろう。

見つけた!

危険だと、

最悪だと脳が告げる。

女性はせめてもの抵抗に、ある機械のスイッチを入れた。

「行って! お願い…ッ!」

虫を模したソレは次々に飛行し、目の前にいる『兵器』を攻撃していく。

マイザーボム、だが彼女は知っている。

この程度で『兵器』が止まる訳がない、あくまで足止めでしかないのだ。

女性はマイザーボムに怯んでいる『兵器』を確認すると、また走り出した。

「…キャストオフ」 『Cast Off』

最も聞きたくない単語が不条理にも後ろから聞えてくる。
直後、頬を掠める『兵器』の外装。

リアルに近づく死が、彼女の恐怖を極限まで高めた。
腰を抜かす女性、そしてゆっくりと迫ってくる『兵器』

「お願い！ 神也君っ！ 正気に戻って!!！」

「・・・」

女性は迫る『兵器』に向って必死に声をかけるが、『兵器』の足は止まらない。

女性の声が耳に入っていないと言わんばかりに。

いや、当然だ…『兵器』は意思を持たない。

持つてはいけない。

それは分かっている、だが女性はそんな理不尽な都合を認めたくはなかった。

たった一つの可能性を信じて……

「……」

だが『兵器』が足を止める事はなかった。

その代わりに剣を振り上げる、それが振り下ろされれば女性は死ぬだろう。

当然の事だ、それを『兵器』は実行するまで

「クッ!」

女性は瞳を閉じる。

悔しい、それだけだった。

なんでこんな事になったのだろう…

目の前にいる自分よりずっと幼い、まだまだ子供の彼が…今自分を殺そうとしている。

人間としてではなく、『兵器』として与えられた使命を実行する為
にだ

ごめんなさい。貴方達を救う事はできなかつた……

女性は目を閉じる、体を切り裂かれるのは怖い。
だが、それ以上に心が痛かった。

「・・・ッ!？」

剣が振り下ろされた音、そして同時に響く…それが何かにぶつかる

音。

女性は自分の体が未だに無事なのを不思議に思い、目をあけた。

「!!!」

まず、青。

それが最初に目に飛び込んできた色だった。

よく見れば、青い壁の様なモノが自分と彼の間が存在しているではないか。

その壁の様なモノの中心にはトランプのスペードを連想させる柄が描かれていた。

不思議に思う女性、そして同時に自分の頭上を飛び越える誰かを見る。

その誰かは雄たけびを上げながら青い壁に突っ込んで行った。

そして見る、その人間が壁を通り抜けた瞬間、姿が変わるのを！

「あれはっ!？」

女性は記憶を呼び起こし、今『兵器』と戦っている戦士の情報を探る。

しかし駄目だ、自分が知る限り目の前の戦士に関する情報は持ち合わせていない。

一体自分を助けてくれたあの戦士は何なのか？

『兵器』と似てなくも無いが……

「ライダー……インセクトなの？」

「ウラァアアツー!!」

「・・・」

現れた戦士は自らの剣で『兵器』の剣を弾く!

ライダー
兵器と似ているデザイン。

自分が知らない間にさらに新しいインセクトが完成していたのだからか?

装備も…大きく違っていているようだが…?

「大丈夫ですかっ!？」

「え？」

ふと気がつくくと少年が自分の肩を揺すっていた。
どうも考え事をするとな意力が落ちてしまつ。

女性は少年に大丈夫だと言つ事を告げるとお礼を述べる

「逃げましょう! 安全な所まで案内します!」

「ありがとう…でも、貴方達は？」

「僕は犬養拓真と言います。うまくは言えないけど敵じゃありません！」

「信じてください！」

どうせこのままなら確実に死んでいるのだ。

女性は拓真の言葉を信じると、手に捕まり立ち上がる。

「…ドレイク！」

今まで沈黙を保っていたライダー、サソードが声をあげる。
その合図に拓真と女性の前に一人の人間が現れた。

独創的なファッション、だが決しておかしい訳ではない。
むしろおしゃれと言われれば頷いてしまおう、そんな男だった。

だが、その表情は無機物、まるでロボットのように平坦なもの。
目にも光はなく、機械的に手を前へかざす。

「……」

男の手にはグリップの様な物。
そしてそこへ止まるトンボの様な機械、拓真はその光景を見て素早くフェイスギアを装着する。

『Start Up』

出鼻をくじく！

「キャストオフ」 『Cast Off』

ドレイクの装甲が吹き飛び開放される…

筈だったッ

「！」

装甲は確かに剥がれた。

しかしその装甲が吹き飛ぶ前に、一つ一つその全てに赤いポイントがセットされ、まるで檻の様にドレイクを閉じ込める！

空中に留まる自らの装甲が邪魔になってドレイクは身動きがとれない。

これではクロックアップを発動した所でなんの意味もない物だった。

「・・・」

だがそれをみすみす許す訳にはいかない。
サソードがいるのだ、

「よそ見たあ余裕ですな！ 椿君かっちんッ！」

「クロックアップ」『Clock Up』

ブレイドの剣を一瞬でかわすサソード。
驚くブレイドに素早く連撃を加えると、ドレイクの元へと移動する。

「！」

しかし、ドレイクの所へはたどり着けなかった。
目の前に真紅の騎士、龍騎が現れ行く手を防いだのだ。

「へッ！」

「・・・」

アクセルベントを発動した龍騎は、サソードと同速とまではいかな
いものの攻撃に追いつくことができる。

足止めには充分だった、しかもブレイドもまたマツハのカードをラ
イズして龍騎に加勢する。

一人では不利だったとしても二人ならサソードと互角の勝負を繰り
広げる事ができた。

「ヤアアアアアアアアアッ！」

アクセルクリムゾンスマッシュが放たれ、
装甲を弾き飛ばしドレイクの体にヒットさせていく！

『キング』【ライティングソニック】

『ストライクベント』

「ウオラアアアアアアッッ！！」

龍騎の火炎攻撃とブレイドの高速から放たれる電撃を纏ったとび蹴りがサソードに命中する！

ドレイクとサソードは苦痛の声をあげるでもなく後退すると、これ以上の戦闘は不可能と悟ったのか撤退していった。

既に高速移動が解除された三人に追う術も、勝てる見込みもない。三人は変身を解除すると、女性を保護する為に、学校へと連れて行くのだった。

第110話 CONTACT SPEED LOVE(後書き)

はい、実はですね。

僕も少しキャラクターの絵でも描いてみようかなと

絶対に駄目ですよ期待なんてしたら。

ちびキャラでごまかすつもりですからね

詳しくは活動報告に書いてみました

まだ書いてみようかななんて……もしかしたら無かった事になんて事も…

いや、多分大丈夫でしょう

ではこれで、次もよろしく！

第111話？ 超番外編・イメージイラストの罫（前書き）

注意！！

まあね、ちよつと前から言ってた挿絵というかイメージイラストを私もやってみました

だけど……ちよつと防衛線というかい訳を

- ・まさかのペイント
- ・SD風のミニキャラ。等身バイバイ
- ・安心の白黒。着色？何それおいしいの？
- ・まあ総じて微妙
- ・手と足がまる。ドラちゃん憑依
- ・作者自身イメージが迷走している

などなどの問題がありますんで

どんな絵がきても大丈夫って方だけご覧ください

ではごつぞー！

第111話？ 超番外編・イメージイラストの罫

「やあ、みんな。ゼノンだよ」

「フルーラよ！」

「突然だけど、この作品には多くの登場人物がいるね」

「誰かは言ってたわ、イメージを大切にしてもらいたいと
答えなんか無い。自分が想像したものが正解なのだ」と

ドヤ顔で」

「そうだね、だけど……皆が皆そうとは限らない。

キャラの区別がつきませんって人もいる……かもしれない」

「イメージが知りたいって人もいるかもしれないわね」

「…と、まあ面倒な前フリはここまでにしてどうかフルーラ」

「ええ、そうね。早い話が」

キャラクターのイメージイラストがこの先にはあるわ」

「と、言ってもいわゆるチビキャラと言うかミニキャラと言うかSDキャラと言うか……」

服も目も適当な感じなんだけどね」

「ワタシ達二人の会話は言わばクッション、最初に言っておくと……あんまり……割と上手いものとはいえないわ」

「そうだね、それに答えじゃないとは言えイメージが壊れてしまう可能性も高い」

「どんなものでも、え……こんな姿だったの？」

「なんてガツカリしない自信がある方だけ、この先の観測をお願いしたいの」

「君のイメージが正しいのさ、これは一つのパラレル」

「さあ、ではその約束ができる方だけ下へとお進みくださいな」

「一応今はノープランだったから、ユウスケと薫だけを開放させ
たよ」

「」
「さあ！ 覚悟はいいかい！」

『クウガ』

> i32050 | 4074 <

『アギト』

> i32257 | 4074 <

『龍騎』

> i34423 | 4070 <

『ファイズ』

> i34830 | 4070 <

『ブレイド』

> i35387 | 4070 <

『響鬼』

> i35646 | 4070 <

『カブト』

> i36159 | 4070 <

「電王は原作キャラだから、イメージが知りたいなら

「ピ○○ブとかで検索してね！」

『キバ』

> i36161 | 4070 <

「いろいろごまかしてるね」

「いろいろごまかしてるわね」

「線がガタガタだね」

「なんか、影もどきが……不気味っていうか……」

「でもまあ、もしかしたら増えるかもしれないよ」

「一応司と夏美を除いたメンバーをやりたいとは言っていたわ」

「まあこんなんだけど、すこしでもイメージの足しにしてもらえたらいいんじゃないかい？」

「ええ、じゃあさようならー」

「「はいはいー」」

第111話？ 超番外編・イメージイラストの畧（後書き）

はい、という訳でね

まあ……増えていくと思います。
でもあんまり期待はしないでねw

まああくまで予定って事で

では次もよろしく！

第112話 PAST SPEED LOVE(前書き)

はい、更新ですね。土日…まあ月…くらいはできるかな？

ではどうぞー！

第112話 PAST SPEED LOVE

「ぶっぞ」

「あ、どうも！」

葵は女性に紅茶を差し出す。
女性はそれに口を付けると緊張から開放されたのか、笑顔を浮かべた。

「おいしい！」

「あははは、ありがとうございます」

葵は嬉しそうに笑うとキッチンに戻っていく。
それに入れ替わるようにして彼女は口を開いた。

「さて…と。色々互いに聞きたい事があるみたいだけど…」

女性は既に司達が普通の存在ではない事を見抜いていた。

この不思議な学校、見た事もないライダー。

一時期は『天才』とまで言われた、科学者である彼女の知識的欲求が刺激される。

だが向こうとてコチラの情報が欲しいのだろう。

女性は落ち着きを取り戻すと、ゆっくりと話しはじめるのだった。

「あのお、いやしかしその前に巨君……ちょっといいかな」

「……な、なんすかね椿さん」

小声で椿は巨に呟く。

いや、この時点で嫌な予感しかしないんだが

「ぼくはね巨君、女性は皆二十歳を超えると
B B Aになるのだと思っていたんだ」

「は、はぁ………」

「だけどね、まずはコレ
葵さんを見てその定理が愚かな間違いだと気づいちゃった訳なの
よ」

「……」

「これ、もうどうしようか巨君。あの女の人見てみんしゃいよ！
これっ　ねえ？　もう椿くん分かんなくなっちゃって」

「いや」

「見て御覧なさい巨君、あの知的美人の姿を……コレツ、え？全然椿君ホイホイされるレベルよ？」

「あ…いや、だから」

「そもそもね、まず包容力と言うかね、そこがああのだんなとは違っていて見えるね。」

「ただどその中にある美しさや、かわいらしさのギャップが」

「はい……はい、いやでも」

「あはははっ、どうしようか巨君！
椿くんあの人カツコよく助けちゃったよね、
コレツ、フラグ立っちゃうんじゃない！？」

あはははっ 参ったなコレえ！ ねえ！

「椿さん……あの人が結婚してますよ」

「……え？」

「左手の薬指、指輪してますから」

「……」

「……」

「後で幼女でも探しにいこーっと！」

(すげえなこの人……)

「私の名前は新意有美子。あらい ゆみこどうぞよろしく」

有美子は学校に居るメンバーに一通りの挨拶をすませる。

「しかし、驚いたわ…まさかココとは全く違う世界があるなんてね」

有美子はそう言ったが特に驚いている様子は無かった。
その事を翼が問うと、有美子は苦笑する。

長い間色々な研究をしているうちに何があってもあまり驚かなくなつてしまったのだと。

有美子にとって他世界が存在していると言う事は驚く事だが、心のどこかで、やっぱりと言う納得の念があつた。

彼女にとって起こりうる全ての事は等しき現実なのだから。いち早く受け入れてしまった方がいいのだろう

「だったら…この世界は驚いたんじゃないかな？」

有美子の言葉に一同は皆頷いた…

まず司達がこの世界に来たとき、今さらながら世界の壮大さに驚いたモノだ。

それだけこの世界は異質だった。

まるで映画の撮影に巻き込まれたような非現実感、
それはこの世界の進化しすぎたと言ってもいい科学力のおかげだろう

まず、なんと言っても歩いている人間がないのが本当に驚いた事
だった。

司達は調査の為、この世界を最初探索したのだ。

その時にそれを発見する…

人は、皆カプセルのような物に入っていた。

カプセルは車輪がついている訳でもないのに移動しており、少し宙
に浮いている。

人々はその中に入り移動していたのだった。

人々が普通に歩いている自分達に好奇、哀れみ、
見下したような視線を送っているのに不快感を覚える。

業を煮やした司が適当な人間に話しかけ、どう言う事なのかを聞いた。

すると、その男は司達を馬鹿にしたように笑うとカプセルについて説明をはじめた。

男はどうやら司達のことをカプセルも変えない貧乏人だと思っていたのだらう。

それ程カプセルはこの世界における常識のようなものだった。

このカプセルは様々な機能がついており、自分で移動しなくてもいいし身の回りの事を大抵やってくれる。

いわば生活補助装置だった。

「・・・」

確かに楽しそうではある。

だが少しの違和感も感じてしまうのが正直な感想だった。

もうこの世界の人間は歩く事すらしないのだから

その後もこの世界の凄まじい科学力を確認できる物がいくつもあった。

例えば食事だ、誰も調理をしていなかったのだ。

聞けば家庭だとカプセルが全てやってくれるし、店も機械が全てをしてくれるらしい。

運ぶのも機械がやってくれるし、会計もまたしかりだ。

司達は暫くこの街を巡ったが、皆機械に任せている物ばかりだった。

そしてさらに気づく、車が見当たらない事に。

その答えは簡単だった。ゲートと呼ばれる場所が各地にあり、そこにカプセルで通るとクロックアップシステムが発動して目的の場所まで一気にいけるのだ。

もはや車などこの世界においては自転車とあまり変わらないもの、いやカプセルがある以上、完全に要らない物なのだ。

発達した科学、そしてそれを象徴する人の生活。皆がカプセルに乗り込み疲れを知らぬ生活。

それは…とても素晴らしい事なのだろう

だが、司達には違和感が強く残ったのだが…

「全く同意見だわ…」

しかし、そんな司達の考えを誰よりも理解していたのは有美子だった。

彼女は科学者であり、この街の発達しすぎたと言っても良い科学世界の貢献者でもあるだろう。

……がしかし、彼女はこれが正しい発達なのかどうか疑問に感じていたのだ。

「ところで、貴方を追っていたライダーは何なんですか？」

翼の言葉に有美子はうつむき、唇を噛んだ。

そして、有美子は語り始める、今この世界がどのような状況なのかを…

樂をしたい、それは人間が常に考えている事だろう。

疲労や負担はできるだけ少なくしたいと…人間は考えていた。

そう、そして様々な樂をする為の道具が開発されていく。

歩くのが疲れた、なら自転車を作ろう。

自転車をこぐのが疲れた、ならば車を作ろう。

車は大きいし維持費もかかるし室内じゃ使えない。
だったらいつそ乗り込むだけで全てやってくれる物を作ろう。

時間こそかかるが、時を重ねることに新しい機械が作られるようになっていた。
新しい燃料や物質がどんどん発見されていき、そのたびに人々の暮らしは豊かになっていく。

しかし、一方で人間は墮落しきっていったのだ。
自らの力で動く事もしない、何かをする事すらしなくなったのだ。

なぜなら自分達がやらなくとも全て機械がしてくれるから。

料理、洗濯、掃除、勉強まで…

有美子の様な否定派も最初こそは大勢いたらしいが、
時が経つにつれ否定派もみなくなっただらしい。

今もどこかで何か新しい機器が作られているに違いない。
それがこの世界の根本たる姿だった。

だが、その代償がやって来る。

人が研究や実験で発生させた有害な物質が、
虫に触れる事でその虫は異常進化を遂げ、凶暴化する。

それこそがこの世界が生んだ代償、ワーム。

ワームは自らをこんな姿にした人間に復讐するかの様に、人を襲う。だがもちろん、それをみすみす許す訳にはいかない。

人間はさらにその有害な物質を研究し、改良。

そしてそれをあえて虫に与える事で、『ゼクター』と言われる物を作り上げたのだった。

ゼクターは人間に勝るとも言われる知識を所持しており、それぞれ一人の人間を契約者として判断する。

見事契約者選ばれた人物は、ゼクターの力で『マスクライダー』となり力を手にするのだ。これこそがワームを駆除する為に生まれたライダー。

通称『インセクト』なのだった。

「インセクトのおかげでワームはほぼ全て駆除したわ…
それは、喜ぶべきだと思う…」

「だけど…貴方はそのライダー…インセクトに追われていた」

「ええ……ワームを生み出したのは人。それに気がつくべきだった
わ」

本当に恐ろしいのは、こんな物を生み出した人間自身だと…

そう、ワームが死滅した事で世界には平和が戻ってきた。
だがそれは間違いだったのだ。

ワームが居なくなったことで、新たな危機が訪れる。
インセクト及びカプセルを作った科学組織、

通称『ブレイン』の創始者、みねぎしぞうえい峰岸創英は、
有美子と同じく科学社会否定派の人間だったのだ。

創英は自らもインセクトとなりワームから世界の危機を救った英雄
だが、
彼はその戦いの過程で人間に絶望した。

自分達の街、世界が危機に陥っているのに完全に他人に頼っていた
人間たち。

警察も駆除機械の設計を依頼するだけで何もしなかった。他の街人たちも、ワームを倒す機械を作れと罵倒こそ浴びせたが応援などはしなかった。

他人任せ、創英の心に影が灯る。
しかし、彼はまだあきらめなかった。

今回のワーム事件は人間の生み出した有害な物質が原因、さすがに人間達も自重するかと思われた……

が、しかし

『ワームを生み出さない機械を作ってくれ』

『有害な物質を生んだブレインは謝罪をしろ』

『新しい機械はまだか？』

『ゼクターを販売してくれ』

これが人間か、これが人間なのか！？
創英は怒り狂った。

自分の命令を無視して開発を続ける人間達、そう。
人間達は理解したのだ。ワームはインセクトが退治してくれる。

もし新しいワームが生まれてもそれを上回る機械を作ればいいと。
いや、作ってもらえばいいと

創英は理解する、そして決める。

墮落しきつたこの人間共はもういらぬ。

せめて存在するなら自分の言う通りになるモノだけでいいと…

第112話 PAST SPEED LOVE(後書き)

はい、ちよつとオリジナルが強いかな
苦手な方はごめんなさい。

今回カブト編での大きな原作との変更点は

- ・クロツクアップ
- ・キャストオフ、プットオン
- ・ゼクター
- ・マスクドフォーム・ライダーフォーム

辺りかな？

やべえほとんどだ…w

まあちよいちよい説明いれますね
では次もよろしく！

第113話 WHY SPEED LOVE（前書き）

うーん、そうですね。すいません明日は多分更新できないかなあ
次は……水曜かな

ただ多分月曜にアギト組みのイメージイラストをユウスケと同じと
ころ、超番外編に投稿すると思います。苦手な方はスルーしてくだ
さい

ぶっちゃけ三十分くらいでかけるんですよ、アレw

ではございぞー！

第113話 WHY SPEED LOVE

「創英は街の人間全てにブレインコントロールをかけるつもりなのよ。」

おそらく…あのカプセルから電波を流してね」

有美子はそれにいち早く気づき、街の人間にカプセルから降りるように言いかける。

しかし誰も相手にはしてくれなかったようだ。

まあ考えてみれば女性一人が騒いだところで何も変えられないのは分かっているのだが

それでも、若干の不快感は覚えてしまう

「創英の言いたいことは分かるわ。だけどアイツは結局何も分かってない！」

あいつは自分を守る兵士として適当な人間を洗脳してインセクトにした！

私の甥も、その友達もツツ！

そんな事が許される筈がない！」

「甥…ですか？」

「ええ、私達の息子みたいなモノよ」

有美子は夫の新意陸矢あらいりくやと共に兄の一人息子、つまりは甥と一緒に暮らしていたのだ。

有美子の兄と、その妻は科学実験の失敗で発生した爆発に巻き込まれて亡くなった。

当時まだ幼かった甥を有美子は引き取ったのだ。

その時から有美子は行き過ぎた科学世界に否定的になったのだろう。甥はそんな有美子の意識を尊重しつつ、立派に成長していった。

正義感の強い夫から影響されたのか、鬱陶しい程正義については熱かった。

特に将来の夢がヒーローだとか正義の味方だとか、ずっと飽きもせず熱く語っていたのは記憶に新しい。

「だけどっ……ある日、友達の子と一緒に誘拐されて…感情を封じられたわ！」

私と旦那は必死に創英に二人を解放してくれるように頼んだ。

「だけど返事はノー！ 旦那は捕らえられて……ッッ！
今も監禁されてる！」

創英は狂ってしまったのだろう、そして世界中の人間を洗脳して世界を支配する。
そんなふざけた事の為に…

「だけど…ッ！ このままじゃ終わらせない！」

「え？」

有美子は創英がブレインコントロールを行う時間を知ることができたのだ。

どうやらまだ洗脳装置は完成しきっていないらしい。
十分野望を阻止できる！

しかし、いろいろと調査をした結果、あの様に追われる身になってしまったが…

そして有美子は協力してくれる研究者と共に
一つの機械をつくりあげることができた。

「それはどう言う機械なんですか？」

「ええ、これは」

創英のブレインコントロールはカプセルを経由して行われる。
つまりカプセルに乗っていない者には効果は無いのだ。

詳しい事は機械の前で説明すると、有美子は言う。

「どうか、力を貸していただけませんかしら！」

有美子は頭を深く下げる。

一同は、頷くと有美子についていったのだった。

「お兄ちゃん……」

「ん？ どうした真由」

「なれるといいね…カブトに……」

「ああ、そうだな。ありがとう真由」

双護は真由の頭を撫でる。
嬉しそうに微笑む真由を見て、双護も笑うのだった。

二人は手を繋いで他愛もない会話を始める。今日食べたご飯がおいしかったと嬉しそうに話す真由を見て、双護は手を握る力を無意識に強めた。不思議そうに首をかしげる真由に優しく微笑むと、小さく呟く。

「真由は俺が守ってやるからな」

「うん！」

二人は手を振りながら歩き出す。

年齢の割に真由の背は低い、二人は親子の様にも見えた。

しかし、そんな微笑ましい光景が街で見える中……

「み、監視ま〜く〜してゐるかなあ？ どの思つアキラちゃん」

「なあ……どつでしようか……」

「りよ、良太郎がついてるんだから大丈夫よ！
そう思わない？ 我夢くん」

「そうですね……」

「……………」

（（き、きまずい……！））

里奈とハナの汗がまるで滝のように流れ出ている。

さっきから一度も我夢とアキラは目を合わせようとはしない。

何とか会話のチャンスをつくってあげようと二人は奮闘するが、結

果は散々たるものだった。

むしろ、一言一言が我夢とアキラの距離を開けているかのような気がする。

仮面のような笑顔を里奈とハナは浮かべながら、意味も無い会話を二人に振り続けていた。

途中何度、我夢が退出しようとしたことか……

しかしそんな中、我夢は夏美と葵に呼ばれて紅茶を受け取る。

どという事なのかを聞くと、これをアキラに差し出せばお礼の一つは言われるだろう。

それをきっかけに会話を振れば、気まずさは払拭されて上手くいくのではないかと言う事だった。

我夢としてもアキラとは仲直りがしたい。喜んで紅茶を受け取るのだった。

これを差し出せばきっかけがつかれる。ああ、そうだろう

上手くいけばだが……

「……あ」

焦り、ああなんて愚かな事だろうか。我夢は焦りすぎるあまりこけてしまい

紅茶をアキラの胸にぶちまけてしまった。

飲みやすい温度にしてくれていたとはいえ、驚きと熱さで思わず短く悲鳴を上げて立ち上がるアキラ。

それが我夢の焦りをさらに加速させてしまい、暴走を引き起こしてしまっ……！

「あっ！ あのごめんなさい……！ 今すぐ拭きますからッ……！」

「えっ！？？」

もじゅ……り

「はっ」

「……………ッ……！」

赤くなっていくアキラと、青くなっていく我夢。

ゆっくりと、自分でもびっくりするくらい冷静に我夢は現実を直視する。

あれだな、いきなり男の人に胸を触られたら……

「きゃあああああああ！！」

走りさるアキラと、その場に崩れ落ちる我夢。

ああ、仲直りが遠くなる。今度は涙を滝のように流しながら里奈達は確信したのだった。

さて、話は司達へと戻る。

有美子は追われている身だ。

街中には監視カメラが設置されている為、うまく動く事ができない。結果として到着まで通常の倍以上の時間を使ってしまった。

「じいよ」

有美子は特に何の変哲も無いビルにやってくると、その中に入っていく。

そしてエレベーターに乗ると、なぜか今居る一階のボタンと、開閉のボタンをそれぞれ三回ずつ押した。

「おー！」

すると、エレベーターは上ではなく下へと動き出す。

「ドラマみたいですね……」

「まあね、これくらいしないと」

そしてついたのは彼女の研究所だった。
そうとう深いのか、見上げるほど天井が高くにある。

驚く司達を尻目に有美子はなにやら装置を操作し、その機械を出現させた。

「これが…リコンファームよ」

その機械は大きな電波塔の様な姿、そこに人間が乗る所がある不恰
好な物。

しかし、これこそが有美子と仲間の作った切り札だった。

「私に協力してくれた人達はもう避難してもらったわ。今は私だけ」

「避難？」

「ええ。カプセルに乗ってもらってるわ。あれなら怪しまれないし
…」

だが、カプセルに乗っていると云う事はブレインコントロールの対象と云う事だ。
それを防ぐためにも失敗は許されない。

「創英はカプセルに乗っていない人間は捕獲して軟禁するのよ、だから……」

「なるほど……ところで、私達は何をすればいいんでしょうか？」

「そうね、人探しをしてもらいたいの」

「人探し？」

有美子は頷くと、リコンファームにあるカプセルを指差す。
一人がギリギリ入れそうな狭さだ。その周りにはなにやらゴチャ
ゴチャと機械がついている。

「あそこにあるカプセルに探して欲しい人間を入れるのよ」

「そうした場合どうなるんですか？」

有美子はリコンファームについて説明をはじめ。

このリコンファームは人が生まれてから今まで過ごしてきた記憶を、
全て強制的に思い出させ、自我を取り戻させるといふ装置だった。

これがあればマインドコントロールをされたとしても力づくで上書
きしなおせる。

記憶の上書きで洗脳を強引に解除するのだ。

洗脳された記憶も思い出す為、事の重大さも皆に伝わる。

「ええ…それって私達も思いだすんですかあ？」

美歩がげんなりしながら手を上げる。
全てを思い出すと言う事は……嫌な思い出も思い出すと言う事、少
なからずの抵抗があると言うものだ

「いえ、基本的にはカプセルに乗っている人間よ」

その言葉を聞いて美歩はため息をつく、
いろいろと嫌な思い出がある……

「ところで、僕達はどんな人を探せばいいんですか？」

拓真の言葉にそうだったと有美子は笑う。

有美子によればこのリコンファームを起動させるには、
一人の間人を電波塔にあるカプセルに入れなければいけないのだ。

「その人間がコアとなって電波を発信するのよ」

「だれなんですか？ それは……」

「実は……まだ分からないのよ……」

「え!？」

有美子の研究、リコンファームもまた未完全だったのだ。

さすがに短期間での製作だった為に起動がうまくいかないと言う問題が残った。

だが人間に流れている微弱な電気と、ある特定の細胞が起動のスイ

ツチになるということが分かったらしい。

その起動の為の電気を持っている人間を探して欲しいということだった。

「三日前にその電気が流れてる人間がこの街にやってきてね。

本当助かったわ、私の体を改造してでも作るうと思ってたから。

電気はなんとかなっても細胞まで作ってる時間は無い。

創英がブレインコントロールを行うのは今から十日後の正午、

まだマインドコントロールの電波をカプセルに送る機械は完成していないの。

予定は十日後と言う訳。だけどコツチもそれまでには作れない」

しかし、運よくリコンフォームを起動させる条件に一致した人間がやってきた。

という事なのだ

「その人間を探す機械もつくつてあるから」

そういつて有美子はレーダーの様な機械を取り出す。
なんでもその人間の体内電気を感知して知らせてくれるらしい。

「非協力的な人間だったら無理やり乗せてやるわ！
私は何としてもあの子達を助けたいの！」

気合も充分なのだろう、有美子は力あまってレーダーのスイッチを
入れてしまう。

その時だった

.....

「!？」

突如鳴り響くレーダー、何故？
一同はあまりの急展開に沈黙する。

「.....？」

「ッ！ 貴方達がこの世界に来たのはいつなの！？」

「そ、そう言えば…三日前だったような……」

「……」

有美子は焦る気持ちを抑えながら、レーダーを司から順に体にかけていく。

そして暫くして、ランプが赤から青に変わる人間が現れた。

有美子は興奮と喜びを言い放つ、この人間こそが探していた。

鍵だと…！

「見つける手間が省けたわ！ 本当に良かった！ お願いね！
あなたも起動の為に全てを思い出してもらおう事になっちゃうけど
……」

有美子はその子の手を握って微笑む。

「……」

そう、天王路真由こそがリコンファームの『鍵』だった。

第113話 WHY SPEED LOVE (後書き)

はい、結構ねアニメとかもよく見るんですけど
ドラマとかも良く見ます

最近はドンキオーテが面白かったかなw?
まあいいやw ではこれで、次もよろしく!

第114話 WAR SPEED LOVE(前書き)

はい、更新ですね

んー、そうですね次は明日かな。

ではごっごー！

第114話 W A R S P E E D L O V E

「やったな！」

これでその創英とか言うヤツの野望を阻止できるんだろ!？」

「同は喜び合っ。どっやぶっまくいきそっだと

「……………」

だが、一人…一人だけは違った

「有美子さん…一つ、聞いても良いかな？」

「うん？」

「真由も…思い出すのか？ 全てを……」

「ええ、まあそう言う事になるわね」

「ボクは大丈夫だよ…？ お兄ちゃん」

「……………」

椿と真志、他数名は双護の体から溢れんばかりの異質なオーラに気づいた。
彼のこんな雰囲気は初めてだ。

表情こそいつもと変わらない様に思えるが、何か…言い様のない怖さの様なものがあつた。

無表情すぎるのかも知れない。

特別心配そうと言う様にも見えない、何かまるで別の事を考えているようだ。

「どうした双護、心配なのか？」

「……ああ。有美子さん、どうしても真由じゃなきゃ駄目なのか？」

「…そうね、ごめんなさい。でも大丈夫よ、決して有害なものじゃ

」

「他に何か方法はないんですか？どんな事でもいい、他に何か…」

何故か真由をリコンファームに乗せる事を彼は異様に嫌がった。
なんとかして断ろうと彼は食い下がる。
珍しい、確かに心配なのは分かるが今までとは明らかに違う

「お兄ちゃん…ッ！」

「！」

「ボク…皆の役に立てるんだよ…ね…！
じゃあ…絶対…やるから…」

双護は曖昧な表情を浮かべて後ろへ下がった。
しかしまだ彼をとりまく異様なオーラは消えてはいない。

それが少し気になった翼達が彼に理由を聞くが、双護は曖昧な言葉
で答えはしなかった。

まあしかし、このままと言いつ訳にもいかず結局真由を起動の為にス
イッチにする事は決定する。

「よし！じゃあ早速」

有美子は準備に取り掛かろうと歩き出した。
しかし、そこで拓真があるものを見つける。

慌てて大声を出す拓真、有美子の足の裏。
つまり靴の裏に何かが見えたらしい。

有美子は不思議に思っつて靴の裏を見つめる。

そして、見つけた。

「しまっ　　ッッ！！！！」

発信機、それを理解した瞬間走る衝撃。

大きくゆれる研究所！

「攻撃されてる！！！」

「つまり…泳がされたって事かよッ！？」

一同はそれぞれベルトを構えて地上へと向かう。

恐らく、というか確実にブレインの連中だろう、発信機にはご丁寧に盗聴機までついているようだ。

と言う事はリコンファームの情報も漏れてしまったと言う事になる。

「やられたっ…！」

「ごめんなさい！　ずっと気づかなかった」

「いえ…いいんです。」

「それよりカプトゼクターの入手方法を知っていますか？」

「え？」

あくまでも冷静に双護は問う。

すこし不気味に感じたが、有美子は答えた

「カプトゼクター？　ああ、アレね、あれは確か…」

「まだ誰も契約していないわ。カプトゼクターは特殊だから…」

「特殊？」

「ええ、インセクトの中でも異質なの。」

唯一創英に協力しなかったゼクター、創英も悔しがっていたわ……」

「ご丁寧に一番難しいと言う事が、双護は呆れた様に笑う。

この世界では今、大変な事が起こっているようだが自分も変身しないといけない課題がある。」

「どうすればソイツと契約できる？ 教えてくれませんか」

「愛とか恨みとかどんな感情でもいいから

それを強く念じてカプトゼクターを呼ぶのよ。」

それで気に入られば、おしまい」

「……分かりました。どうも」

そう言つて双護はもう何も聞かなかった。
まだ何かを考えているかの様な彼だったが、襲撃の事で誰も気には
とめなかった。

「全軍、包囲」

右目に眼帯をし黒いスーツに身を包むその男、峰岸創英とマインド
コントロールされた数人の契約者。インセクト

そして、科学が生んだ無数のサイボーグ兵士。

通称ゼクトルーパーは武器を構えビルを取り囲んでいた。

ビルの周りは他の建物もなく、おかげでこれと言った逃げ場もない。
数が多いという事はそれだけで大きな戦力差につながる。

「まさか、そんな機械を作っていたとはな…

さすがは天才科学者といったところか」

もつとも、天才が多すぎたせいでこの街は腐ったのだが…
創英は齒軋りをしてビルを睨みつける

「総員、突撃用意。中にいる真由と言う少女は生け捕りにせよ、
抵抗が激しいならば殺しても構わん」

感情なき兵士達はそれに答えると突撃の用意をはじめ。

「あがらうとは愚かだな。科学者よ、貴様らの罪は清算できるモノではない」

突撃の合図を出すために創英は手を上げる。
走り出すゼクトルーパー達、入り口に向かって一斉に駆けていく

……が

『ファイナルアタックライド』 『フアフアフアファイズ!』

「っ！何だ？」

入り口から赤い光が見えたかと思うと巨大なレーザーが発射され、入り口に向かっていたゼクトルーパー達を一掃した。

驚く創英、あんな兵器を開発していたのか!?

もし自分が少し高いところにいなければ…

「悪いな、速攻でゲームオーバーだ」

「何っ？」

創英が後ろを振り向くと、ファイズアクセルとなったディケイドが手を振り上げているのが見えた。

一撃で気絶させる！

ディケイドはその拳を振り下ろ

「……」

しかしその拳は創英には届かない。受け止められたのだ！

『Change Punch Hoppe』

茶色の体に白い目。

インセクト、パンチホッパーはディケイドの拳を受け止め、弾く。さらに自らのクロックアップを発動し、同速のフィールドへと立った。

「クッ！」

マズイな、既にコッチは発動してから時間が経っている。しかし向こうは今クロックアップを発動したのだ。

激しい拳の連撃がディケイドに襲い掛かる。何とか受け流すがすぐにその違和感に気づいた。

そう、彼らはマインドコントロールによって操られた人形なのだ。戦いに対する恐怖や、感情が全く感じられない。

「クソッ！」

ふざけやがって！ 人間を何だと思ってるんだ！

デイケイドはパンチホッパーの活動を止めるため気絶させることにする。

そしてそれを実行する為上段蹴りを決め、素早くカードを発動させた

『Time Out』

『ファイナルアタックライド』 『ファファファファイズ!』

アクセルが解除されると同時に足からポインターが発射され、パンチホッパーの動きを止める。

デイケイドはそれに飛び蹴りを決めるために飛び上がった。

「ぐッ!」

だが、衝撃と火花が走りデイケイドは地面に落下する。
何が起こったのか？ あたりを見回すと、ドレイクがコチラに銃を向けているのが見えた。

「ホントに厄介だよ…クロックアップは！」

『カメンライド』『ブレイド』

さらに背中、腹部、胸部と激しい痛みが走る。
パンチホッパーの連撃は止まることを知らない。

デイケイドはブレイドに変わるとカードを発動させる

『アタックライド』『マツハ！』

気づいたことがある。

真志はアクセルベントを使えるが、カメンライドで変身した自分はアクセルベントを使うことができなかった。それだけじゃなくアギトのトワイライトにもなれなかったのだ。

つまり、今デイケイドはマツハとアクセルしかクロックアップに対処する事ができない。

長期戦や乱戦は圧倒的に不利なのだ。

「おらっ！」

「・・・」

カウンターを決めるがパンチホッパーは何のリアクションも示さない。
い。
それどころか尚も攻撃を仕掛けてくる。

ドレイクの銃撃もかなり厄介だ

「マズいな・・・」

マツハの時間もいずれは切れる。その前に決着をつけ

「いッッ！！」

殴られた…本当にこいつ等早すぎなんだよ！

「司！アイツは任せる！」

そう言つて龍騎が走っていく。

アクセルベントを発動させた龍騎はドレイクと対峙し戦いを挑む。

「すまん！真志！」

「司君！」

さらに突風が巻き起こりデイケイドに追い風を与える。

対照的にパンチホッパーには向かい風となり動きを鈍らせた！

それこそ本当にわずかなものだが、速度の変化は戦いに大きな変化を与える！

ディケイドの剣が始めてまともにヒットする！

「先生！ ありがとう！」

『アタックライド』『タツクル』

マツハの効果が切れると同時にディケイドはパンチホッパーにタツクルを仕掛ける。
襲い掛かるゼクトルーパー達を弾き飛ばしながら突進するディケイド。

しかしマツハが切れた今、所詮それは通常より少し速い速度のものでしかない。

パンチホッパーはいとも簡単にタツクルをかわすと

ディケイドに止めを刺すため、上空高くへと飛翔する！

『R i d e r J u m p』

「ウオオオオオオツッ！」

後方で電子音が聞えたにも関わらずディケイドはタツクルを止めない！

それと同時各地で爆発が巻き起こる。

デルタがゼクトルーパーを殲滅するために放ったミサイルが原因だった。

爆煙がディケイドを隠し、パンチホッパーの狙いを錯乱させる。

「うらあああああああああッッッ！！！」

そんな中、爆煙から一人のライダーが現れる！

猛スピードでパンチホッパーに向かうのはディケイドではなくブレイドジャックフォームだ！

マツハのカードをライズしたおかげでパンチホッパーとほぼ同速に
なっている！

『Clock Over』

「ライダー…パンチ」 『Rider Punch』

「チッ！」

『ビート』 『メタル』 『サンダー』

【ライトニング・スタンビート】

それぞれの高速移動は解除され、同時に強化された拳がぶつかり合った！

第114話 WAR SPEED LOVE（後書き）

はい、まあ前も書いたんですけどクロックアップはディケイド基準で高速移動になってます

まあディケイド基準と言えるのかはちょっと怪しいんですけどね

あとブレイドのオリ技は、メタルで強化した雷パンチですw

では次もよろしく！

第115話 LINK SPEED LOVE (前書き)

はい、更新ですね

次は土曜…か、日曜ですねえ
ではどうぞ！

第115話 LINK SPEED LOVE

『Clock Over』

「！」

一方ドレイクと龍騎もまた互いの高速移動が解除されたところだった。
銃で牽制を始めるドレイク、的確な射撃で龍騎を近づけさせようとし
ない

『バイオ』

「！」

しかし、そんなドレイクの手にはバラの蔓が巻きつき、動きを封じる！

「悪いな、ワタシ達は一人で戦ってるんじゃないんだよ」

カリスはドレイクを引き寄せると思い切り蹴り飛ばす！

機械的な戦士に勝つためには感情から生まれるもの、つまりコンビネーションを最大限生かすのだ！

「トンボってのは…ドラゴンフライとか言っただろ？」

よろけるドレイクに見せつける様にして、龍騎は一枚のカードを発動させた。

バイザーの瞳が輝き、認識音声が鳴り響く！

「いい機会だ。本物の龍を教えてやるよ」『ファイナルベント』

咆哮と共にドラグレッダーが出現し、龍騎の周りを激しく旋廻する。龍騎は構えをとると、ドラグレッダーと共に上空へ飛翔した！

「ッ！」

「むッ！」

カリスの手に衝撃が走り、蔓の力が弱まる。その隙にドレイクは素早くカリスと距離を取ると、龍騎に狙いを定める！

「ライダーシューティング」 『R i d e r S h o o t i n g』

「ウオオオオオオオツッ!」

『ファイナルフォームライド』 『アアアアギト!』

しかし、龍騎の下からコチラに向かってくるのはディケイドとマジ
トルネイダー!

アギトルネイダーは素早くディケイドの前にはやってくるよ、
ディケイドを上空へと跳ね上げる!

「ダアアアアアアアアッ！！」

「！」

だが、まだ龍騎本人のとび蹴りは終わっていない。
炎を纏ってはいないものの、ドレイクを吹き飛ばすだけの威力はあった。

回転しながらドレイクは何度も地面に叩きつけられる。
流石にコレにはまいったのか、ドレイクはそのまま活動を停止する

「まだだ！ 咲夜！」 『ストライクベント』

「ああ！分かつている」 『チョップ』

龍騎はさらにドラグクローを装着しカリスのところへと走っていく。
二人は頷き合つと、それぞれの構えをとつた。

「行つて…こいつ！」

カリスはバレーの様に、チョップで龍騎を打ち上げるのだった。

「ウオオオオツ!!?」

「ッ…!!」

上空ではパンチホッパーとブレイドの拳がぶつかり合い、互いに弾かれたところだ。

二人はバランスを失い落下していく、そこへカリスに飛ばされた龍騎がやって来た！

『ファイナルフォームライド』 『ブブブブレイド!』

それを確認すると、ディケイドはフォームライドでブレイドをブレイドブレードへと変形させる。

そして、龍騎は両足でブレイドブレードを挟むと、そのまま手を反対に突き出してドラグクローから炎を発射する！

「フッ！」

「・・・」

一方、少し離れた所ではキバとキックホッパーが戦いを繰り広げていた。
未だにクロックアップを發動しないキックホッパーに恐怖を感じつつも、双方激しい蹴りで戦っている。

しかしゼクトルーパーの銃弾をかわしながらの為、キバは上手く立ち回る事ができない。

少し早急かとは思ったが、ウエイクアップを發動させる事にする

『ウエイクアアアプッ！』

「……………」

巨大な月が現れ、辺りを夜へと変化させる。

同時にキックホッパーはクロックアップを発動させた。

瞬間消えるキックホッパー、そして体に走る衝撃の雨。
キバの平衡感覚が失われていく。

「グッ！ ガアアア！ キッ……バット……！」

『は、はい！ バッシャーマグナム……！』

激しい蹴りの猛連打でキバットは空中に打ち上げられていく。

「グッウウウウ……！」

水流弾がキックホッパーを追尾し着弾するが、確実に防御され大きなダメージにはならない。

「超変身！」

そこにドラゴンフォームに変わったクウガが飛び込んでくる。もちろんドラゴンが素早さに特化してるとはいえ、クロックアップの前では無力といってもいいだろう。

「わわっ！」

クウガの背後には無数のゼクトルーパーが迫っており、容赦なく銃弾を発射する。しかしその銃弾がキックホッパーの動きを封じる壁となってくれた。銃弾をかわすように移動してくるため軌道がつかめる。

クウガはペガサスフォームになると、神経を集中させる！

「ハアアアアアッ！！」

その隙に攻撃から開放されたキバは、水流弾でゼクトルーパーを打ち抜いていく！

それほどゼクトルーパーに防御力はないようで、一発で動きを封じられる。

「・・・」

そしてクウガは、軌道を予想してペガサスボウガンを振り絞り…

放っツ！

「！」

しかしそれはキックホッパーには当たらなかった。
高速で移動する2つの影がそれを弾いてしまう。

一瞬で分からなかったが、ファイズアクセルとサソードだろう。
二人の戦いが弓矢を消してしまったのだ。

「うわっ！」

危険を感じて、素早くドラゴンフォームに変わると後ろへと跳ぶ。
自分がいた場所にはもう既に大きな衝撃からくる砂煙が巻き起こっ
ていた。

もしあのままあそこに立っていたなら……想像するだけで恐ろしい
話だ。

『R i d e r J u m p』

『バツシャーバイトオオ!』

巨大な水流弾がキックホッパー目掛けて発射される。
そのスピードは異常なまでに速く、クロックアップを発動している
キックホッパーに追いつくほどだ。

「・・・」 『R I D E R K I C K』

水流弾とエネルギーを纏ったとび蹴りが直撃する!
勢いを失ったキックホッパーは大きくよろけバランスを失った。

そこに大きな隙ができる!

「！」

迫るファイズアクセル！

ファイズはサソードと交戦しながらもコチラの様子を見ていた。そして止めをさせるコチラに狙いを変えたのだ。ファイズショットにメモリを装填してエンターのボタンを押す！

「ハアアアアアッ！！！」

「ッッ！」

アクセルグランインパクトがキックホッパーを弾き飛ばした！
のマークと共に砂煙をあげてキックホッパーは活動を停止する。

『 Rider Slash 』

「うっ
うっ！」

しかし後ろからサソードの一撃をまともに受けてしまい、
ファイズもまた地面に叩きつけられる。

「グッ
ッ……」 『 Reformation 』

『Clock Over』

さらにサソードは倒れるファイズに連撃を浴びせていく。
キバ達が助けに入るがダメージが大きすぎて、ファイズの変身は解除されてしまった。

「拓真！」

止めを刺そうとするサソードにデルタは銃弾を浴びせる。
その隙に拓真はファイズギアを抱えて転がり、デルタの後ろへと回避した。

「ありがとう友里ちゃん！」

「惚れ直してくれていいよ！ さあ、早く変身して！」

デルタは振り下ろされた剣を、左手を盾にして防ぐ。
一瞬がら空きになったサソードの腹部に銃を突きつけると、声を上げた

「チエック！」 『Exceed Charge』

「！！！！」

ゼロ距離からの射撃。

青白いポインターがサソードにセットされ、デルタはそれに飛び込んだ！

ルシファーズハンマーがサソードに命中する！

「！！！！」

の紋章が浮かび上がると、サソードの変身は解除されその場に倒れ込んだ。

だが勝利の余韻にはひたれない！

「やばっ……」

拓真は焦りながらベルトをセットする。

ゼクトルーパはそんな事をお構いなしに銃を乱射しているのだ。サソードの変身者はもちろん、自分も防御力が上がっていいようが生身でアレを受けるのは危険すぎる。

「拓真ッ！」

タイタンフォームになったクウガが拓真を庇い銃撃を浴びる。

激しい銃弾の雨も、タイタンの前ではシャワーにすらならないだろう。

「ありがとうユウスケ君！」
『5』 『5』 『5』 『5』
『S t a n d i n g
b y』

拓真は再び変身する為コードを入力する。

しかし…

「ッッ？ 拓真？」

クウガは後ろで変身音がしない事を不思議に思う。
そして振り向いたとき、拓真は気絶しているではないか！

「なんでっ!?!」

『ちよ! ヌウスケ!!!』

「え?」

ふと、気がつけばデルタも倒れている。
何が起こったんだ? 混乱するクウガ、そこに迫る光

『RIDER KICK』

「ッ！」

だがその答えはすぐに明らかになる。

と、言ってもクウガがそれに気づいたときは自らも宙に舞っている時だった。

激しい衝撃と飛びそうになる意識、タイタンフォームでなければ確実に気絶していただろう。

だが、それもつかの間。

さらに何度も激しい衝撃が襲ってくる。

ついにクウガの意識も

第115話 LINK SPEED LOVE (後書き)

んー、次でバトル編は終わるかな

後、龍騎のファイナルイベントについてですが

炎の力を味方に与えると言う選択肢がとれる……って事ですね

敵にはダメージになり、味方には攻撃力を上げる力になる

なんともゲームちつくですがw

では次もよろしく!

第116話 REUNION SPEED LOVE(前書き)

はい、更新ですね

まあ…どうだろう、連休は更新できそうかなあw？

ではどうもー！

第116話 REUNION SPEED LOVE

「!？」

突如気絶していく仲間達。

キバは目の前で起こった事を理解しようと冷静に考える。

恐らくはまだインセクトがいるのだろう。クロックアップによって不意打ちを食らった訳か…

キバは高速で動き回るインセクトに対抗するべく水流弾を発射する。通常弾のスピードなど子供だましの様なものでしかないが、それでもクロックアップに対処できるのはこの技だけだ。数があればそれだけ動きも鈍る、その隙になんとかしてチャンスを……

『Put On』

「え？」

電子音と共に、キャストオフによって吹き飛んだ鎧の破片が辺りから無数に飛んでくる。

破片は水流弾を打ち消しながら確実にコチラに向かって飛んでくるではないか！

キバは向かってくる破片を何とかかわし体勢を整える。

「ぐわぁぁぁぁぁッ！！」

だが背中に物凄い衝撃が走りキバの体は空中に吹き飛ばされる。さらに、もう一回と衝撃が走り、体はきりもみ状に回転する。

そして見た、肩にバルカンを装備したインセクトがいる事を！

「クツ…」

ドツガのホイッスルを手にしようとするが…

『Cast Off』

「ッ…！ アアアアア…！」

再び電子音が聞こえたかと思うと、装甲が吹き飛び自分にぶつかってくる。

成る程、目の前が真っ白になる。もう数発もらえば自分も……

『巨さん！ 任せてくださいっす！』

キバットがベルトから離れドツガのホイッスルをくわえる！

ドツガの装甲なら攻撃にも耐えられるし、トゥルーアイで動きもとらえられるかもしれない

『ギャッ！』

しかしその前にクロックアップを発動した、もう一体のインセクトに弾き飛ばされてしまった。

『きゅっ……っ』

気絶するキバット、それが原因でキバの変身がとかれてしまった、と亘は思うだろう。

だがそれを考える前に彼の意識は失われる。
倒れる亘を青い影はジッと見ていた、いや……彼にとってジツと言
う時間は一瞬程度なのだが。

青い影は頷くと、両肩に供えられている『武器』を構え……投じた！

「何だ！？何が起こって
」

ディケイド達もゼクトルーパーの攻撃をかわしながら
クロックアップに対抗しようとするが…もうカードがない。

「ぐああああッッ!」

「クッ!」

高速で移動する影と交戦する中、急に青いカッターのような物が飛んできて
デイケイド、カリスの体に命中する。

大きく仰け反る二人…そして気づいた

「峰岸がいないっ! アイツ…っ!」

「あいつもそう言えばインセク　　グアアアアアアアッ!」

次は龍騎の体が宙に舞っていく。
カードを使おうとしたブレイドもまた激しい攻撃によって妨害されてしまう！

助けようとディケイドは、ゼクトルーパーを振り払いカードを発動する

追尾弾なら…わずかな期待を込めて引き金を引く！

『アタックライド』 『プラスト！』

『Put On』

だが、バツシャーの時と同じだ。
装甲がそれを防ぎ、ディケイドに攻撃を加えながら一点に集まっていく。

「なかなか足掻くな、お前達も…」

「っ…」

峰岸もまたインセクトへと姿を変えていた。

手を見れば蜂の様なものが見える、いや姿がどう見ても蜂そのものだ

「ザビーか…ッ」

「っじゃあ、もう一体は…」

会話さえ許されないのだろう。
爆発、吹き飛ぶブレイドと龍騎。

カリスとデイケイドが後ろを振り向くと、バルカンを装備したインセクトが見えた。

「やはり…ガタツクか！」

「くっ！ 司！」

「ああ！」

二人は一瞬、アイコンタクトを取ると、左右それぞれに跳んだ。

それを見てガタツクはカリス、ザビーはディケイドのほうへと向かう。

「くくっ、いいのか？ ゼクトルーパー達は下のお仲間の方へと向かってるぞ？」

「ッッッ」

確かにそつだ。早く、こいつらを何とかしなければ…ッ！

「…」

遠くでアギトの悲鳴が聞える。

見てみれば、サソード、

ドレイク、

パンチホッパー、

キックホッパーがクロックアップで同時攻撃を仕掛けていた。四人は必殺技でアギトを吹き飛ばす！

防御するものの、絶大なダメージでアギトの変身は解除され翼は気絶してしまった

「なっ！？」

ドレイク達は気絶していたはずなのに……!?!?

「ふん、マインドコントロールとは便利なモノだな。
無理やりでも脳をたたき起こす事ができる」

そう言って笑うザビー。もはや他のインセクトの事を人間としては見ていない様だ、彼にとっては兵器と同等なものだろう。それがダイケイドにとっては不快だった。

「お前っ！ どうしてこんな事をッ!?!」

「……貴様が何者かは知らんが、見たのではないか？
この街の人間……いや、豚共を」

「ッ!?!」

「やつ等は過ぎた科学力によって墮落の限りを尽くす豚だ。
あの様な有害な連中がこの世界を壊す。」

そう、いずれあの様な人間が世界を滅ぼすのだよ」

いらないのだ、あの様な連中。

「その為に彼らには犠牲になってもらった。理想に犠牲はつき物だ」

『Cast Off』

「しまっ
「！」

『Clock Up』

ザビーの姿が消える。

ディケイドは素早くカードに手を伸ばすが…

「残念だったな、お前は…」 『Rider Stinging』

「!…」

「…お前」

渾身の一突きがディケイドに命中する。

絶大な衝撃が襲ってくる前にさらに数発の攻撃。

それはカリスの方も同じなようだ、ガタツクのクロックアップに対抗できず必殺技をモロにくらってしまった。

「がぁぁぁッッ」

「ぐうぐうッッ」

二人の変身は解除され、地面へとたたきつけられる。

「クククッ…アチラの方も決着がついたようだな」

「何…ッ?」

ザビーが指差すのはビル。

「まぢか…ッ」

「真由ッッ!!」

「お兄…ちゃん!!」

六人のゼクトルーパーはそれぞれ銃を構えて有美子達を包囲していた。
抵抗すればゼクトルーパー達は迷わず有美子達を射殺するだろう。

彼らは機械、心など無いのだから

「くっ…」

それだけではない。有美子の後ろにあるリコンフォームを壊されたら終わりだ。

創英の計画は完全なモノへと変わってしまう。

それだけは避けなければ…

『Clock Over』

「!？」

有美子の目の前にインセクト、ガタックが現れた。
目的を実行する為に、ガタックはダブルカリバーを構えて有美子達
に歩み寄る。

緊張感が漂う中、有美子は声を突如荒げた。

「鏡冶いッ!!」

「っ!!」

有美子は我を忘れたかの様にガタツクへと詰め寄る。
しかしガタツクはあくまでも機械的にカリバーを有美子に向けて、
これ以上の接近を拒んだ。

そう、彼こそが有美子の甥。
新意鏡冶あじい きょうじ

第116話 REUNION SPEED LOVE(後書き)

はい、プットオンは純粹にキャストオフの
逆バージョンだと考えてください

では次もよろしく！

第117話 BLUFF SPEED LOVE(前書き)

昨日始めてP4を見ました

いいすねああ言っつものw

好きですよ

ではごっげー！

第117話 BLUFF SPEED LOVE

「俺に…近づくな」

「鏡冶…」

「・・・」

ガタツクは有美子を一瞥すると、他のメンバーに視線を移していく。そして、一人の少女ところで視線を止めた。怯えるその人物を気にする事なくガタツクは言いはなつ。

「お前が…真由か。命によりお前を拘束する」

「え…」

「!?!」

ガタツクはカリバーをしまつと真由に近づいていく。

真由は震えながら一歩後ろに下がる、そして無意識に双護に助けを求めた

目が語る、助けて…怖いと

「オイッ！ 真由に近づくなッ！！」

双護は真由をかばう様に立つが、ガタツクは淡々とした様子で双護の首を締め上げると、何のためらいも無く投げ飛ばした。

吹き飛ばされる双護、そのすきにゼクトルーパーは双護を囲む様に立つと一斉に銃を向ける！

「グウっ…！」

「お兄ちゃん！」

真由は自分にも銃が向けられていると言っのにも関わらず双護の
ころへ向かう。

先ほどの恐怖は心配へと変わっていた

「・・・」

「真由ッッ！ 来るなアア！」

「!」

真由は涙を浮かべてオロオロと動き回る。

自分がどうすればいいのか分からない、いつも助けてくれる兄が危ない。

だったら助けに行くのが普通じゃないのか？

でもその兄は来るなど大声を上げる。

「ううううう！」

ついに耐え切れず、真由はポロポロと涙をこぼしてしまった。

だがガタツクは何のリアクションも示さない。

マインドコントロールで彼の感情は氷の様に冷たくなっていたのだ。

むしろ、邪魔だと言わんばかりに手を振り上げた。

間違いない、ガタツクは真由を殴るつもりなのだろう！

「鏡治イイイイイッッ!!」

「・・・」

それが原因なのか、ついに有美子が…キレた
知的な彼女からは想像できないほどの怒声に真由も思わず震え上がる

「んっ！ 馬鹿野郎がアアアッ！」

「……………」

「アンタ今自分が何してるか分かってんの！？
何もしてない人投げ飛ばして、女の子泣かせてッ！！」

自分が一番嫌ってた事、自分がやってんじゃねーよッ！」

しかし、ガタックは何も言わずに真由の手を掴む。

「オイッ！ 真由を放せ！！」

ぶっ殺すぞッッ！！」

感情を爆発させながら双護は立ち上がる。
ゼクトルーパーを突き飛ばしながら真由を助けようと走るが、
当然双護を撃ち殺そうとゼクトルーパー達は銃を構える。

いくら防御力が上がっていようと、連射を食らえば命は無いだらう

しかしその時、以外にもゼクトルーパー達をガタツクが静止させた。

「止める、俺達は人を殺しにきたのではない…
この少女の拘束、そして機械の破壊だ。」

ゼクトルーパーよ、俺の叔母の後ろにある機械を破壊しろ」

「クッ！！」

やはり…：そうなるのか！ 有美子達は覚悟を決める。

「来いッ！ カブトゼクター！」

「ッ」

「い」

双護は手を掲げてカプトゼクターを呼ぶ、
強い思いに反応すると言われるカプトゼクター！。

ならば今このタイミングならッッ！！

「・・・ッ！」

だが、何も起こらない。
カプトゼクターが双護の手に収まることも、姿を現す事もない。

「クッ…！」

ゼクトルーパーはそんな双護を気にする事もなくリコンファームへ銃を向けた！

「んま、させねーけどね」 『アブッスンン』

「!」

しかし、突如誰もいないところから声がしたかと思うと、地面から白鳥が現れゼクトルーパー達を吹き飛ばしていく。

「まゆちゃんは渡さねーっての!」

誰もいないと思っていた所からファムが現れる。
クリアーベント、姿を透明にするその力でファムは創英達から逃げ
てきたのだ。

ガタツクは舌打ちをするとカリバーを一つファムに向けて投げた！
ファムはマントでソレを受け止めると、そのままマントを翻す。

すると、ファムの姿が消える！

「・・・」

次にガタツクは上へとカリバーを投げる。

瞬間、それを受け止める音が響いた！

ファムはマントの影から上へと跳んでいたのだ。

バイザーでカリバーを弾くが、ガタツクはそのまま弾かれたカリバ
ーのところまでクロックアップで移動すると、カリバーを再び蹴り
飛ばし、ファムへぶつける。

「クッ…！」

ファムもまた負けじとバイザーを投げ、ガタツクへと命中させた。仰け反る両者、だがファムはバイザーにカードを装填していた。それが今、発動される！

『アクセルベント』

「ウラァッ！」

加速からのドロップキック。
ガタツクはそれを受け止めようと構えるが…

「きゃアッ!！」

そのキックがガタツクに届く事は無かった。

「いつ!？」

ファムは撃ち落とされたのだ。
起き上がるファムに突きつけられる銃、

ドレイクだった。

「なっ…くそっ！」

銃を振り切ろうとするが、ファムはそれを諦めた。横にはサソードが剣をファムに向けていたからだ。

さらにパンチホッパー、キックホッパーが集合しファムは完全に包囲される。

既にクロックアップの限界を超えているが、マインドコントロールが彼らの限界を無理やり突破させる。

一瞬で逆転する立場、詰めが甘かった……

「はい。分かりました……」

ガタツクは通信で誰かと連絡をとると、真由を抱き抱える。双護が鬼の様な形相でガタツクに向かって走り出すが、パンチホッパーによって気絶させられてしまった。

「命令があつた。全員今すぐ撤退だ」

『Clock Up』

一瞬、アレだけいたインセクト達は皆、研究所から姿を消す。真由は…連れ去られてしまった。空しい沈黙だけが、研究所を包んでいる。ファムは悔しそうにバイザーを床へ叩きつけると先ほどまで真由が座っていた場所にへたり込んだのだった。

「クツ、化け物が……ッ！
今は一旦引いてやる。
しかし、次は必ず……」

そう言ってザビーはクロックアップを発動して姿を消した。

「うう…ッッ」

変身を解除したのは良太郎、電王だ。

ザビーは電王の圧倒的な力を見て、全滅すらありえると判断した。マインドコントロールをされたインセクト達は撤退命令を出せばそれに忠実に従い、機械を壊してから撤退すると言う機転を利かせる事はないだろう。

それは惜しい事ではあったが、このままでは大切な兵を全て失いかねない。

何より、自身の敗北すらありえる。大勢の兵がいたとして、ほぼ全てが操作している『兵器』である以上、自分が負ければその時点でゲームオーバーだ。意外だった、まさかこんな化け物が潜んでいたとは……

このまま戦えば負ける。ザビーは苦肉の策として、最初の命令である真由をさらう事でリコンファームの発動を阻止するだけに止めておいた。

「皆…ッ」

良太郎は辺りを見回す。
気絶している司達、全滅と言ってもいいだろう。

「危なかったわね、貴方が居なければ皆死んでたわ！
クスクス！」

「ッ……」

膝をつく良太郎の前にゼノンとフルーラが現れる。
同時に、それが何を意味するのか、良太郎は悟る。

「もう、危ないのかな…?」

「フツ、分かっているようだね。」

ゼノンが何を言いたいのか、良太郎は分かっていた。
それがどういう事なのか、理解もしている。

しかし、良太郎はその事から目を背けていたのかもしれない

「しかし、考えたね。成る程、確かにザビーが全滅を危機するのも無理はない。」

絶大な力をちらつかせればそれは抑止力と言う武器になる。

結果としてザビーは恐れをなして逃げた…という訳かい」

「ハツタリは成功したのかしら。

まあ普通に戦っても貴方が勝っていたでしょうけど」

ゼノンとフルーラは賞賛の拍手を良太郎に浴びせる。

そして、同時に砂のオーロラを発動させた。

彼らが移動する為のものではない、このオーロラは…良太郎に用意されたモノなのだ

「さあ、残る試練はコレを含めてあと2つ。

分かるかい？ コレが最後のチャンスだ、野上良太郎。

次の試練で君が変身すれば…世界は君を『』の登場人物として記すことになる。

そうなれば…分かるかい？ 君もまだお姉さんや、

電車の中のお仲間さんに君の世界の『野上良太郎』として会いた
いんじゃないかな？」

「今なら貴方と八子を元の世界に帰してあげられるわ。
でも、次の試練が始まればそれはとても難しい。

どうするの？」

「・・・」

良太郎はうつむくだけで何も答えなかった。

それは迷い、彼の心の中で揺れる葛藤、天秤に掛けられたのは絆と
絆。

それは良太郎の心を蝕む毒の様に彼を苦しめる

「…ぼくは、皆と友達になれて…本当に嬉しかった」

「…」

「お姉ちゃん…も、言ってたよ。友達は大切にしなさいって」

「つまり…君は、このままディケイド達につくと？」

ゼノンは何故か嬉しそうに笑う。
だが、すぐに真面目な表情へと戻る

「本当の事を言うと、まだちょっと迷っちゃってる。
だけど、ぼくは皆の為に戦う。それは揺るがない」

ゼノンとフルーラは珍しく、本当に真面目な顔に変わっていた。常に人を小ばかにした様にヘラヘラと笑っていた二人。

その二人でさえ良太郎の判断が正しいのか、間違っているのか分からない。

そのジレンマのようなモノに囚われていた。

「君はその選択からは逃げられない、君は様々な世界で観測された有名人だ。

君の世界は君なしでは成り立たない。

主役が存在する舞台なのに主役が存在しないなど矛盾しているからね」

それがどう言う意味なのか、良太郎もまだ明確には分からない。しかし、今ココで司達から離れ自分の世界に帰らなければ自分達に

とって大変な事になる。

そう言う事なのだろう。

「もう一度、ハナと話し合って決めればいい。

最初の世界で君に渡した鍵さえあれば、いつでも君たちは自分達の世界へ帰れる」

良太郎はポケットから小さいビー玉のようなモノを取り出す。

それは、一番最初の世界で司達に会う前に彼らに貰った物だった。

それを使えば自分達は帰られるらしい、しかし一度それを使えばもう戻ってくることはできない。

「いずれにせよ、さようなら。『仮面ライダー電王の主人公』」
上良太郎

「そして、ここには居ない事を残念に思うわ。ヒロイン、ハナ」

ゼノン達は自分達のオーロラを出現させて消えていく。

「・・・」

良太郎は、暫くそのままうつむいたままだった。
だが、しばらくして頷くと、キンタロスを憑依させて司達を抱える
のだった。

第117話 BLUFF SPEED LOVE (後書き)

ここで細かな説明を一つ

単に高速移動と言っても

はやり時間操作してなので、つかまれた人間が空気摩擦で燃えることは無いです

では次もよろしく！

第118話 INCREIBLE SPEED LOVE(前書き)

今週は、そうですね…

まあ火に一回更新して

次、金か…土、いけたら日かな？

ではごっごぞ！

第118話 INCREIBLE SPEED LOVE

目を、開けた。

見たのは天井、よく知っている。
学校だ、そう。

学校……

「……ッ」

双護はゆっくりと目を開ける。
意識と景色が鮮明になり、彼は今までの事を考える。

死んではない、つまり誰かが助けしてくれたと言う事か。

双護は体を起こし教室へと向かう。

真由は…おそらく

「ごめんッ！ アタシがもっとしっかりしてれば…」

教室に皆が集まり、これからどうするかを決める事になった。
美歩は自分のせいで真由がさらわれたと後悔している様だったが、
別に誰も咎める事はない。

あの状況では仕方ないと、それは双護も同じだった。

別に美歩に対して恨みの感情など欠片もない。

いや、少し違う。双護の心は今、無に近い状態だった。
愛する妹を連れて行かれた事…からだろうか？

それとも

「取り合えず、真由を助けよう。まずはそれからだ！」

「そうね、おそらく創英は殺す事はしない。

創英はこの街の中心にあるブレインタワーにいるわ。

そこに乗り込めたら……」

皆必死に真由を助けるための作戦をたてている。
しかし、双護は全く別のことを考えていた。

それは、真由が助かった後の事である。

創英がマインドコントロールを行うのは十日後らしい、
問題はそれを行われたら、真由を起動スイッチにしてリコンファームを発動しなければならぬと言う事だった。

真由が……生まれてから今日までの事、全てを思い出す。

『全て』だ。

「双護！」

「！」

ふと、気がつけば皆が自分を見ていた。
どうやら話しかけられていたようだ。

「ああ…すまん、少し考え事をしていた。何だ？」

「ああ、カプトゼクターは呼べないのか？」

「・・・」

喜び、悲しみ、怒り、愛。

なんでもいいから何かを強く想うとソレに応じてやってくると言われているカブトゼクター！。

あの創英ですら手に入れることができなかったモノか…

創英は…何を願ったのか

「真由ちゃんへの想いとかは？」

「……実は、もう」

「え…？」

双護は申し訳なさそうに口を開く。

あの時、真由がガタツクに捕まったときに双護は真由への思いを胸にカプトゼクターを呼んでいた。

しかし…結果はこうだ。

カプトゼクターは双護の呼びかけには答えず、結果真由を…

「大丈夫だよ、きっと双護君はカプトゼクターに選ばれるから」

「そうね、その時は多分カプトゼクターは寝てたのよ」

翼と葵は双護を気遣って声をかけてくれるが、双護の耳にはあまり届かなかった。

それよりも、自分の心の中である事を確かめたいという思いが膨れ

てきていた。

カプトゼクターは『どんな』思いにも呼応するらしいな。

強い思い、つまりそれは『一番強い感情』と言う事だろう。

人は無意識のうちに感情の優劣をつけている物だ。

自分の中で、今最も強く願っているのが……真由を守りたいと言う事でなかったとしたら？

「先生、皆。今なら呼べる気がする。少し外に出てきていいかな？」

「え？ ああ、うん分かったよ。誰かについて」

「いや、いいんです。すぐ戻りますから……」

双護は軽く笑みを浮かべて皆の前から消える。

「・・・」

咲夜はその姿をじっと見ていた。
何か、異質なモノを感じる。

「おう咲夜さん、お前も気づいたのか」

「ああ、何かおかしいな。双護のヤツ…」

椿と咲夜は皆に聞えないように小声でやりとりを交わす。

一番最初に違和感を感じたのはリコンファームで真由が起動スイッチになると気づいたときだった。

その時は妹が心配なだけだとスルーしたが…今回もまたその異質な雰囲気を感じる。

「どっしする？ つけてみつか？」

「いや…もう見失った。今から追いかけても無駄だろう」

「最初はイケメンが放つ独特のオーラなんだろうと思ってたが…
どうにも違うみたいなんだよな」

「リコンファームと何か関係があるのか…？」

暫くは考察を続ける二人。

だが、そんなにしらない内に双護が戻ってきた。
結果を聞くメンバーに双護は謝る。

そう、駄目だったのだ

「真由を守りたいという想いが…俺には足りないのか…」

そう呟く双護からは、異質なオーラを感じる事はなかった。
椿と咲夜は勘違いだったのかと考える。

それならいいのだが…

「・・・」

その翌日だった。双護が皆の前から姿を消したのは…

「駄目だッ…携帯も繋がらない」

「どこに行っただよ!」

「きつと真由ちゃんを助けに行っただんじゃ…」

「それにしても一人で行くっておかしくない?」

皆いろいろと言い合いを始めるがどうしようもない。
双護は学校からいなくなり、どこに行くか、誰にも伝えていなかったのだ。

変身できない彼がこの世界を一人でうろつくなんて自殺行為だ。
仮に真由を助けに行ったとして、何ができるのだろうか?

司達は今すぐ双護を連れ戻そうと学校を飛び出していく。
そんな中、残るモノも…

「嫌な予感ほど当たるものだな……」

「くそっ、ほんとイケメンの考える事はわからんぜ俺は」

椿と咲夜は屋上で街を見回していた。

二人はある仮説を立てる、まずそもそもの話

双護は真由を助けにいったのかと言う事だ。

「まず、そこがおかしいっすわな。

正直戦えないアイツが行っても無駄だし、正直一人で行く意味がない。

俺達に迷惑を掛けたくないってのはそれこそ馬鹿な話だろ」

「そうだな。一人で行くのは逆効果だ、それは双護も分かっているはずだろ」

「何より、リコンファームの事もありますしね」

「「！」「」

屋上の入り口から我夢が現れた。
彼も双護の異様な雰囲気を感じた一人というわけだ。

そう、リコンファーム。これが何かしらの鍵を握っている事は明白なもの。
そして双護が少しおかしくなったのは真由が起動スイッチだと分かった時。

「これはあくまでも僕の意見なんですけど、
双護さんは真由さんに何かを思い出して欲しくないんじゃないで
しょうか？」

「え？」

「覚えてますか？
僕らが出会ったとき、双護さんから言われたじゃないですか」

「...」

そう、彼らが始めて顔を合わせた日、双護は皆にある相談を持ちかけていたのだ。
皆すぐに理解して、今まで当たり前前に過ごしてきたから盲点となっていた。

「成る程。これはひょっとしてひょっとするな」

「だが、それで何故双護がワタシ達の前から姿を消す？」

そう、分からない。

彼らは頭をかかえ、これからどうするのかを考える事にした

「きゃっ…！」

ガタツクは乱暴に真由を地面へと降ろす。
思わず倒れる真由に目もくれずガタツクは創英の元へと戻った。

「『苦勞インセクトの諸君』」

創英達は一斉に変身を解く。

マインドコントロールによって苦痛等が制限されているとはいえ、長時間に亘るクロックアップの使用は彼らの肉体を確実に蝕んでいた。次々に倒れるインセクト達。

しかしただ一人、鏡冶だけは立っていた。

彼のインセクトとしてのレベルの高さが伺える。そして、同時に…

「ううううう…」

真由は立ち上がろうとするが、足がすくんで上手くいかない。

だが、ふいに体が軽くなり、すんなり立つことができた。

真由は不思議に思っ て目を凝らす。

すると、自分を乱暴に降ろした鏡冶本人が自分を支えてくれていたのだ。

不思議に思う真由と舌打ちを放つ創英。

やはり、おかしい。

創英と真由は同時に思う。

鏡治はマインドコントロールが働いているにも関わらず、創英の命令を無視、反発する事がよくある。

おもにそれは善意系の事だ。

正義感が強いとは聞いていた、しかしマインドコントロールですら封じれない程とは…

さすがの創英もコレには参っていた。

マインドコントロールを強めてもそれは変わらない。

鏡治は今も真由を支えている、これは少し危険かもしれない。

「ガタツク、命令だ」

「……はい」

有美子は創英と言う人物をあまり知らない。
研究所で一緒に仕事をしたくらいだ。

だから、彼女は一つ彼について計算を誤っていた。

「その女を殺せ」

創英は、もう普通ではないのだと言う事を

「……」

「どうした、聞えなかったか？ その女を殺せと言った」

「……何故」

「なにっ！」

今コイツは何と言った!？

創英は思わずもう一度鏡治に問いかける。

マインドコントロールをしているのだ、こいつ等は命令を忠実に実行する兵器に過ぎない。

しかし 今、鏡治は……

「何故です……」

これが既にありえない事だ。

インセクトは全て洗脳し、自分の言う事だけを聞く人形！

なのにガタツク、新意鏡治は今命令を聞こうとしない。

なんてヤツだ……創英は軽い恐怖すら感じる。

ここまで洗脳が効かない男は初めてだ。

危険な存在に変わるかもしれない、その前に忠誠を誓わせなければ……

「この女は危険だ。」

それに……以前から計画していたワーム復元実験は知っているな？」

「……はい」

ワーム復元実験。それは創英が現在進行形で行っている実験だった。ワームはもうこの世界にはいない、インセクト達が全て根絶やしにしたおかげで。

だが創英は独自の研究でワームを作り上げたのだ。まだ試作品の為、不安定要素の塊だが時間があれば安定したワームを作り上げる事ができるだろう。

愚かな人間、自らの墮落と言う欲望が生んだワーム。
そのワームによって世界を滅茶苦茶にするのも悪くは無い

ワーム討伐インセクトとして参加していた創英、その時に受けた人間達からの心無い扱い。
それが創英の心を壊していた。

もう彼は自分の目的さえ迷走しはじめていたのだ。

「ワームには餌が必要だ。良質な餌がな…分かるか？

ガタツクよ」

「いえ、申し訳ありません…」

「分からないか…その少女を餌にしると言った」

「……」

鏡治は真由を見る。

怯えている彼女、目には涙が浮かんでいる

「かわいいそうです」

「!!!」

創英は自分の耳を疑った。

今、コイツは何と言ったのか？

可哀想？

何が？

誰が？

「命令は…絶対だッ！」

「・・・」

「分かったかッ！」

「はい」

鏡治は虚ろな瞳で真由を見詰める。
怯える彼女を無表情でしばらく観察すると、その体に手を回した

「嫌あ…ッ!」

じたばたと真由は抵抗するが、鏡冶の力には敵わないようだった。子供の様に抱えられると、真由は鏡冶に連れて行かれる

ワーム栽培室へと

「将来の夢は正義の味方だったか？」

喜べガタツク、お前は正義の為に悪者を殺すのだ…クククッ」

そう言って創英は笑う。やはりコイツは人形だと

「・・・」

しかし創英は気づかなかつた。『正義の味方』その言葉を聞いた時、

鏡冶の眼に僅かな光が灯つたのを

第118話 INCREIBLE SPEED LOVE(後書き)

権カツ財カツ暴カツ

これが王者の教えだったのか……

ごめんなさい

なんでもないですw

次もよろしく!

第119話 PROMISE SPEED LOVE(前書き)

もうきついつすわww

ってな訳で次は金曜か土曜だな

ではどうござー!

第119話 PROMISE SPEED LOVE

廊下にいたのは鏡治と、抱えられている真由の二人だけ。

鏡治は最初こそ乱暴に真由を扱っていたが、真由を運ぶときは丁寧に扱っていた。

それが真由の心に余裕と、もしかしたら鏡治は悪い人ではないんじゃないかと思う思いを抱かせる。

「お名前は…？」

しかし沈黙

「…？ お名前はあ…？」

されど沈黙

「うううう、あ！ そうかあ……
ボクは天王路真由う……！ お名前は？」

「……新意……鏡冶」

「うん！ よろしくね……！」

またまた沈黙

「よろしくねえ！」

「暴れるな。……よろしく」

真由は抱えられている間、ずっと鏡冶に話しかけていた。なかなか答えてくれないものの、鏡冶は黙れとも言わない。

しっかりと答えてくれる、それが嬉しかった。

新意鏡治、歳は…司達と同じだろうか？

女性の様な綺麗な顔立ちだが、我夢の様に女性らしすぎず男性の凛々しさも感じられる。

成る程、有美子の子供ではないとはいえ、

そこらへんは良い所を受け継いでいるのかもしれない。

「ボクね…ハンバーグが好きなんだ…」

「俺も…好きだ………」

「わあ…一緒だねえ…！」

「……」

真由の独特な雰囲気、そして無邪気さが鏡治の閉ざされたドアをノックする。

強固で頑丈なそのドアは簡単に開くことはない。

しかし真由はそれを必死にノックしていた。

彼女は無意識だ、ただ普通におしゃべりをしているだけ。

しかし鏡治にとっては…違うものなのかもしれない。

「将来の夢とかあるの…？」

「ボクはケーキ屋さんかお花屋さんになりたいな…！」

「……」

「鏡治くんは、将来何になりたいのお……？」

「俺は……」

何になりたいんだ？

何に憧れていたんだ？

「むう」

真由は鏡治を強く揺さぶる。

ゆるる視界、脳。

そして、一瞬だがその単語が鏡冶の脳を貫いた

「ヒー…ロー」

「え…?」

「正義の…味方…?」

「うわぁ…! かつこいいねえ…」

「…」

鏡冶の心に不思議な感情が宿る。

それが何かは分からない、ただとても大切な…

自分にとって大事な感情だと言う事は分かる。

「カツコ…いい？」

「うん…！すごいね！ 人を守る正義の味方…！」

「ッ……そうか…」

「ボクも守ってくれる…？」

一瞬。その言葉で鏡冶の動きが止まった。

「……」

「正義の味方は皆を守るんだよお……！」

ノイズが鏡治の頭を駆け巡る。
これは一体なんなのか……？

「あ……ああ……」

じゃあ、約束と真由は小指を差し出す。
鏡治は暫くそれを無視していたが、ついに根気負けして真由の小指
に自分の小指を絡めた。

「ゆびきりげーんまーん……」

指きった。

簡単に堅い約束、もし嘘をつけば針を千本飲まされる事になるだろう。

ノイズも酷くなっていく。少し気分が悪い

「・・・？」

「クツツ！ 命令は…絶対だ」

だが、すぐに鏡治はまた無機物の様に歩き出すのだった。

暫くして薄暗く、檻がある部屋にやってきた。

鏡治は真由を放り投げると檻の鍵を閉める。

「あ……う！？」

真由はそこで初めてまともに鏡冶の目を見た。
光が無い、これがマインドコントロール。

元の彼は一体どんな人間なのだろう？

「ッッ……さよならだ。すまない……」

「え？」

そう言って鏡冶は部屋を出て行く。

同時にふと、違和感を感じて…真由は後ろを振り向いた。

「　　ッッ！」

振り向いたことへの後悔、見てしまった。

まじまじと…

「！！！」

そこにはワームのサナギ体が居た。
既にコチラに気づいているらしく、ワームはゆっくりと近づいて来
ている。

グロテスクなその容姿、小さな手が顔を覆っているかの様な表情は
絶望している様にも見える。

だが、本当に絶望するのはワームではない、襲われる側なのだ。ワームは合計三体、それらが真由を捕食するためにじりじりと詰め寄っていく。

荒い呼吸音、それを発している口で真由は肉塊にされるのだろう。

彼女の心に明確な恐怖が生まれる。

今まで彼女は学校と言う絶対安全の要塞の中にいた。

それが少し申し訳ないと思っていたが、同時に安心していた。だが今まさに彼女は死と言うモノに直面している。

怖い！

今まで感じた恐怖全てをあわせても今の恐怖に勝てるかどうか。

「あう…あぁあぁあぁ…」

立てない、腰を抜かしてしまった。

怖い。

怖すぎて呂律が回らない。

下半身の感覚がない、恐怖で動けなくなるなんて初めてだ。
涙が溢れてくる。

助けて…助けて！必死に助けを求める真由。

皆に、大好きな兄に…

「・・・」

だが、だれもこない。
尚も近づいてくるワーム。

「うううああああんっ！」

きっとこれは罰、神様が今までの自分に罰を与えたんだろう。
真由は必死に謝る、誰にとも言わずに。

怖い。助けて！

必死に叫ぶ、でも何も起こらない。
近づいてくるワーム。

泣き叫ぶ、泣けばだれかが助けに来てくれるとでも？

「怖いよお…怖いよおおお！」

神様ごめんなさい。

一生いい子でいますから…助けてください。

もつと皆といたいです。お兄ちゃんと一緒にいたいです。

真由は必死に許しを請う、もちろんそんな言葉がワームに届くわけが無い。

無駄なのに…

いや、無駄なのか？

「
」

ワームに届くことの無い命乞い。
そう、『ワームには届かない』命乞いなのだ。

「……ッ」

扉の向こう、鏡冶の脳裏にフラッシュバックする『何か』

誰かと自分が語っている、鏡冶はそれが何か分からずにいた。さっさと立ち去ってしまいたい、なのに扉の奥で聞えてくる悲痛な叫びが彼の足を止めさせていた。

『女の子を泣かせるなんて最低だぞ!』

『いいかい鏡冶君。』

助けを求めている人がいたら、全力で助けてあげなさい』

『鏡冶! アンタまた妥協してんの! ?』

アンタはアンタ! やりたい事やりなさい!』

『鏡冶君。優しく生きてこそ、人は価値があるものになるんだよ』

『鏡治！約束は守りなさい！』

『鏡治！』 『鏡治くん』

『『優しく、正しく。強く生きて』』

「・・・ッッ！」

鏡治は頭を抱えてうずくまる。

頭が痛い、ノイズが酷い。

頭の中で映像と音声が何度も再生される。

叔母と叔父が自分に何かを言っている、それに笑顔で答える自分。

わからない。何だコレは!?

何でこんなに苦しいんだ!?

「だすげてえおにいちゃん!こわいよおっシ!」

「!」

自分って誰だ？

俺か？ 新意…鏡冶！？

「俺は…俺はああアアアアアアアアアア！！」

俺は…新意ッ！新意鏡冶いいい！？

『ボクも守ってくれる?』 『カッコいいね』

『鏡治! アンタは正しい馬鹿になりな!』

『鏡治君の夢はヒーローなんだって?』

『君ならなれる! 叔父さんが約束するよ』

『目の前で困っている人がいたら』

『どんな人でも手を差し伸べるのよ?』

『分かった?』

『正義の為なら努力を惜しむな』 『アンタは正しく生きて』

『約束してね?』 『アンタ今自分が何してるか分かってんの!?!?』

『オレ！大きくなったら正義の味方になるんだっ！』

「ッ……！！」

そうか……そうだ！

あれ？ 思い出した？

俺は、俺の夢は…俺は…！

『命令は絶対だ！』

「ぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐッ！」

いや、俺は…命令は、絶…対！

なの…か？

『無視すればいいじゃないか。そんなの』

「！」

ふと、頭を駆け巡るノイズではない。
鮮明な声が聞こえた。叔父でも創英でもない男性の声

「あ……」

「こわいよお！ たすけてえよおッ！！」

女の子が泣いている。
助けを求めている…

『お前、あの子と約束してたよな。守るって』

「！！！」

約束は…守る。

そうだ…俺は……

俺だッッ！！

『あの子は言ってくれたよな…お前に』

かっこいいって…

「！！！！！」

何かが割れる音が聞えた。

頭の中で創英が語りかけてくる、命令は絶対だと。

お前は人形だと！

『お前は……誰なんだよ？』

ああ、そうだ。

すいません創英さん…俺は、人形じゃねえよ

約束しちゃったな。

あの子と。ああ、そいつ

じゃ、守らないとな。正義の味方ならさ

第119話 PROMISE SPEED LOVE(後書き)

クラヒフォーゼのPVを見ました。

んー、まあライジエネはスルーしちゃったんですけどクラヒは買おうかな

だいたい友達も買っんでポチポチやってますw

前のオーズではアギト、ブレイド、電王を主に使っていました
昭和ライダー数人であるように、RXに期待しますw
では次もよろしく！

第120話 APOLOGY SPEED LOVE(前書き)

はい、どうも！ 更新ですね。

まあ次は……どうかな。

やはり、とりあえず土曜。できたら日曜でいきます

ではごっごぞー！

第120話 APOLOGY SPEED LOVE

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ！！！」

鏡治は頭を思い切り壁にぶつける。

痛みが自分と言う存在を再確認させてくれる。

ああ、そうだ。これは俺の痛みだと！

新意鏡治の痛みだとツ！

「ああそうだ…ツ！俺は新意鏡治！

俺は俺だああアツ！」

他の誰でない。ああ、そうさ！
唯一の存在なんだ！

『やっと目覚めたか、遅かったな。ヒーロー』

鏡治に話しかけていたのは幻聴でもなんでもない、現実だった。
ずっと側にいた……

現実だ。

「お前だったのか……てか、喋れたのかよッ！」

『まあな』

鏡治の目の前でガタツクゼクターが浮遊していた。

なんか、よく見たら目もついてるじゃないか…

今までずっと無言だったパートナーは、当たり前のように鏡治に話しかけている。

人間と同等、むしろそれ以上の知能を持っていると言われていたゼクター。

しかし、まさか喋れるとは思っていなかった。

『感謝しろよ。』

マインドコントロールの効果を弱めたのはオレだからな』

「お、おう！ サンキュー！

でも取り合えず今はッ！」

鏡治はそう言うと、ガタツクゼクターを掴んで走り出した。
約束がある。

破るわけにはいかない！

「ふうふうふう！！」

扉の向こう、薄暗い部屋では少女の助けを求める声が響いている。

腰を抜かしてしまった少女はもう動けない。

徐々に近づいてくる死を受け入れるしかないのか……

もう目の前にワームが迫ってきている。

でも動けない、怖い！

このまま食べられてしまうのだろうか？

助けて！ 誰か助けて！！！！

「たすけてえええ！」

でも、だれも助けてくれ

「まかせろおおおおおおおッッ!」

「!」

目の前のワームが爆発して吹き飛ばす!
驚きで目を見開く真由とワーム。

そして間髪いれず檻の入り口が吹き飛ばされ、真由は誰かに抱きか
かえられる。

「!?!」

その誰かは、真由をいわゆる『お姫様抱っこ』で安全な所まで運ぶ
と、優しく頭を撫でた。

真由の瞳の中に、装甲を纏った戦士がいる。
彼は真由に深く頭を下げると、申し訳なさそうにトーンを落として
呟いた。

「ごめん、真由ちゃん。

俺が悪かった…俺が馬鹿だったんだよ」

「……………?!」

真由は一瞬その人が誰か分からなかったが、
キャストオフをしたそのインセクトを見て表情が変わる。

そう、鏡治……ガタツクはクロックアップを発動させ、一瞬でワー
ムを消滅させた。

そして、真由を再び抱きかかえると猛スピードでブレインタワーを
後にするのだった。

重々な警備システムも、クロックアップの前では無力に等しい。
引っかかる事はあっても、対処の手が来る前にガタックは駆け抜ける！

「……………」

一瞬で変わる景色は、まるで魔法。
真由はガタックを掴む力を強めた。強くしがみついてないと、魔法がとけてしまう気がしたからだ。

夢中で刹那の世界は、まさに真由とガタックの二人だけしかない
のである。

「逃げただとツッ！
馬鹿な！？ ありえん！！」

「ワームは全て死んでおり、真由もガタツクの姿もありません。
発信機も外されており、完全に連絡がとれない状態です」

「……！！！」

創英は怒りと驚きの表情を浮かべる。
マインドコントロールが解除されたのか…有り得ん。
何故、どうしてっ！？

「捜せっツッ！ 必ず見つけ出すのだ！

場合によっては殺しても構わん！！」

創英は急いで科学班に連絡を取る。

いよいよ鏡治の存在が無視できなくなっていた。

失敗した。こんなことならヤツを殺しておくべきだったかッ！？

「まだ洗脳電波を送る機械は完成しないのかッ！」

結果はイエス、やはりあと九日後予定は変わらない。

創英の心に焦りが生まれる。

この街で絶大な力を持っていたインセクトを支配したと思えば

新たなライダーが現れ

リコンファームの起動スイッチである少女が現れ

インセクトの中でも最強と言ってもいいガタックが裏切った。

非常にマズイ展開だ。最悪のシナリオが紡がれようとしている。

「…ッ」

タワーから見える街、そこにはやはりカプセルに乗っている人間共が見えた。

墮落しきっている。

こんな連中に生きる価値などあるのか？

毎日が無駄に生きているコイツ等に俺を攻める資格があるのか！？

否、無い。

必ず洗脳してよりよき世界に変更するしかないのだ。
こんな腐った世界を自分が変えるしかないのだ！！

「・・・」

かつては自分もインセクトとしてこの街を守った事がある。

しかし傷つき、多くの仲間を失い帰還した我らに待っていたのは賞賛でもない、批判と誹謗中傷の嵐。ワームを生み出したのは我々科学者だ。しかしその原因を尚使い続けている貴様らを…許さない。

創英は拳を握り締め壁を殴りつけた。

必ず……変える。

この世界を　ッ！

「ここまでくれば大丈夫だな」

「う……」

ガタツクはブレインタワーから大分離れた所で変身を解除した。少し大きめの公園だ。ここならば隠れやすいし安全だろう。

もう時間が時間で人もいない。

しかし、この公園も昔はもつと色々な人が遊んでいたらしい。カプセルが普及し、筋力やバーチャルスポーツと言われる技術が開

発されたせいで段々と公園で遊ぶ人もいなくなったと言う。

「じゅめんっ！ 許してくれッッ！！」

「…ふい？」

鏡冶は真由を座らせると、いきなり土下座を決める。
驚く真由、鏡冶はしばらく何も言わずに土下座を決め続けた。

「……だ、駄目かつ！ そうだな！じゃあ」

土下座では駄目だと悟ったのか、鏡冶は土下寝にシフトチェンジを
決める！

だが真由は相変わらず口を開けたまま鏡冶を見ていた。

無言の時間が過ぎる。

てかよく考えたら土下寝って何なんだよ。
ふざけてるみたいじゃないか！ 鏡治は慌ててもう一度土下座に切り替えた。

しかしジャンプしながらだったので、ジャンピング土下座になってしまう

沈黙の時間が流れる。

なんか凄く失礼なことしてる、鏡治は冷や汗を浮べて頭を上げるのだった。

「本当にごめんッ！

ああ、そうだ、それだけの事を俺はやってしまったんだからッ！

「……う」

「え？」

「うづうづわぁぁん！」

「！」

真由は堰を切った様に泣き出した。

鏡治の表情が強張る、やはり自分のした事が原因でトラウマになってしまったのだろう。

こんないたいけな少女の心に深い傷をつくってしまった。
激しい後悔と罪悪感が鏡治を押しつぶしそうになる……

「わわっ！ ごっご、ごめ！」

本当にすいませんでしたっ！

どんな罰でも受けるから！ どうか泣き止んでっ！

「こわかったよおおお！」

「おお！？？」

真由は恐怖から解放された事で、安心して泣いてしまったのだ。自分がそんな事をする資格があるのかどうか迷ったが、鏡冶は真由を落ち着かせようと肩を揺する。

「真由ちゃんもう大丈夫だ！ 絶対大丈夫！ 俺が約束する！」

「うう……本当に……？」

「ああ！ えっ…と、ティッシュ持つてる？」

「うん…ハンカチとティッシュは…」

「いつも持ってなさいって…お兄ちゃんが…」

真由はポケットティッシュを取り出して鏡治に渡す。

鏡治はお礼を言っただけ微笑むと、それで真由の涙と鼻水を拭いてあげた。

ぐくぐくと少し乱暴だった為、鏡治はまたまた土下座を決める。

女の子の扱いなんて分からない。つい親友と同じような扱いをしてしまった。

「あの…本当にごめん、真由ちゃん。

俺、君に酷い事を
」

自己嫌悪が襲ってくる、もう少しで真由を殺してしまうところだったのだ。

恨まれても、蔑まれても、それこそ刺されようが文句は言えないだろう。

だがしかし、真由はニッコリと微笑んで鏡治の頭をなでた。

それは『許す』と言う何よりの証拠だろう。
一瞬何が起こったのか分からない鏡治だったが、思わず涙が出そうになる。

静かな夜だったが、彼女がとても眩しくみえた。

「ううん、いいの…気にしないで……」

鏡治君は約束を守ってくれた。いい人」

「真由ちゃん……」

鏡治はもう一度真由にお礼を言う。

それから真由の話聞いた、世界の事とかリコンファームの詳細。
そして何よりも兄のこと。

とり合えず鏡治は真由を学校に送る事を決意する。
携帯電話は使えなかった、恐らく創英が妨害しているのだろう。

電話が使えないのなら直接送るか、途中で真由の知り合いをみつけるしかない。

その二つならば、学校の方がいいだろう。

一瞬有美子の研究所に戻る事も考えたが、あそこまでにはゼクトルーパー達が倍以上控えているだろう。あまり戦闘はしたくない。学校が安定している訳だ。

いきなり他の世界から来た。

なんて言われたから驚いたけど、そう言えば見た事無いライダーがいた事から納得できた。

それに目の前の彼女が嘘をついているとは思えない。

本当に絶対安全の学校が存在しているのだろうか。

しかし、問題もある。

「街中をクロックアップで動き回ると

センサーが反応して見つかったらまずいよなあ…

真由ちゃん、学校の場所は覚えてる？」

「えと……」

「うん」

「んっ……」

「おお」

「おお……」

「ほい」

何か、真由ちゃんの頭から煙が出ている様な気がする。

「覚えてないんだ…な？」

「ごめんね……」

シユンと彼女の眉が八の字になる。

真由の眉……なんちって！

すいませんでした。

鏡治は真由の表情を見てドキリとしてしまつ。
また傷つける訳にはいかない！

「ああ！ いや！ 大丈夫大丈夫！
タハハハ！ ああ、そうさ。安心しろよ真由ちゃん！」

「うん…！」

<~~~~~>
~~~~~



「ん？ なんの音だ？」

「おなか…」

「え？」

「おなか…すいた…」

そう言えばそうだ！

鏡治は手を叩いて、それから彼女に微笑みかける。

「ああ、そうだ。成る程！

よし！ ちょっと待ってるよ真由ちゃん！」

そう言っつて鏡治は近くにあつた自販機に向かう。

この自販機、ジュースだけでなく食べ物も売っているのだ。

さて、鏡治は胸を張る。

このタイミングこそ、落ちきつた信頼や高感度の回復。

そして何より真由を助けてあげられる場面だろう。

いっちょ、ビシッと決めて真由ちゃんを喜ばせてあげよう！

ああ、そうさ！ 鏡治は何故か自販機に向かって一礼をする。

「ういっーと！ 真由ちゃん、何が食いたい？

何でも言っつてみるよお！ へへへッ！」

いいの！？ 真由の表情がパツと明るくなる。

もちろんとドヤ顔の鏡治。

「ありがとう……！」  
「何でもいいよお……！」

「おっけ、何でもね！ さーって……」

と……」

あ、そう言えば財布、持ってなかった。

第120話 APOLOGY SPEED LOVE(後書き)

フォーゼがカッコよく見えてきましたww  
慣れは怖いですねw

あとEDが流れたのはテンション上がりましたね。  
毎回ライダーのEDには必ず一曲、  
無性に気に入るヤツが出てくるんで今回も楽しみです。

どうなんだろうな。ダブルはヒートメタル、オーズはプトティラの  
テーマソングが特に好きですね。  
まあいいかw では次もよろしく！

第121話 DIET SPEED LOVE(前書き)

明日はできたら更新でいきます

ではどござー！

第121話 DIET SPEED LOVE

いやな汗がしたたり落ちてくる。

金が………無い

「鏡？」

「あー、こんなところにーこいしがー！  
つまづいちゃったー……なッッ！ー！」

鏡治は体をひねる様に回転させて倒れる。  
自販機の下、ここに……なんか、

「じつじまい具合に五百円とか何か落ちてたら…嬉しいな！」

「・・・」

何もないや！

「真由ちゃん。あのッ…ホントごめん。  
俺、金持ってた…」

いや少し待て、ガタツクに変身してバルカンで吹き飛ばせばいいんじゃない……

いやいやッ！

何を考えているんだ新意鏡治！ そんなのは犯罪だ！  
そんな非合法なやり方で手に入れた食べ物我真由ちゃんに渡すなんて言語道断！

反省しろ鏡治！ 己を恥じろ！



「くそおおおおおおおおおおおッ!」

バチンと両手で頬を叩く!

罰だ、自分に罰を与えなければいけない!

「腕立て百回! うおおおおおおおッ!」

激しく上下運動を繰り返す鏡治を、ガタツクゼクターは冷めた目で見ていた。

(何やってんだコイツ……)(

五分後

「あ！うん、大丈夫だよ。  
ボクちよつとだけなら持つてるから！」

「え…？」

結局百回もできなかつたし、食事も真由の金で買う事となった。

何が食いたい？

何でも言ってみるよお（ドヤァァァ）とか何とか言ってた自分が情けなくなってくる。

しかし真由もそれほど持ち合わせておらず、結局オニギリ一つしか買えなかった。

本当なら二個は買ったが、真由は鏡治にもお金を分けており自分の分はオニギリ一つのお金しかない事になった。

鏡治は申し訳なさそうにしていたが、お金を返すと言っても真由が聞かなかったので、お茶を買う事にする。

真由はオニギリ一つ、鏡治はお茶。  
なんとも地味な夕食が始まる。

「はむっ……」

「おいしいか？」

「うん！」

その言葉を聞いて鏡治は、まだ口をつけていないお茶を彼女に渡す。

「じゃあ、お茶もやるよ。飲み物がないとキツイだろ？」

「え！？ でも…それじゃ鏡治君……」

「大丈夫だってッ！」

俺…あの、今日昼飯いっぱい食ったからさ！

ハハハッ！」



いやしかし待てよ…鳴き声にするのはどうだ？  
今のは俺の鳴き声なんだよと笑顔で言えば信じてくれるんじゃない  
だろうか？

いや…嘘をつくのか!？

こんな純粹な真由ちゃんに嘘をつくのか俺は！

できない！ できる訳が       ッ

「…」

バチンと（以下略

「鏡冶君……」

「え？ モガッ！！」

突然鏡冶の口につつままれる何か、  
租借してみるとオニギリだと言う事が理解できた。

しかし、待てよ。

オニギリは一つだけのはずだ。

なら………

「まゆひゃん!?!」

「いいの…鏡治くんが食べて。」

ボク、もう…おなかいっぱいだから……」

分かりやすい嘘。

それでもその好意を受け入れるためには、騙されなければならない。鏡治はこの日ほど金を持ち合わせていなかった事を恨んだ事はないだろう。

「まゆひゃん…ほめん……」

真由は首を振って微笑む。

しかしすぐにまた泣きそうな顔になってしまった。

「あ…ッ! ごめん!」

ボクッ食べかけ…あげちゃった…!



嫌……だよね……」

「え？ んんっ、いや大丈夫！ 大丈夫！  
俺、そう言うの気にしねえんだ！ ハハッ！」

「本当！？」

真由はまたニッコリ微笑むと、今度はお茶を差し出した。

『コレもあげる』

鏡治は申し訳なさそうに笑うが、真由の気持ちを汲むため素直に受け取ったのだった。

「うッ…クッ…!!」

「大丈夫…?」

食事を終えて少しした後、鏡冶の体に大きな疲労感が襲ってきた。やはり今日、幾度となく行ったクロツクアップは鏡冶の体に大きな負担を与えていた訳だ。

とてもじゃないが、もう一度クロツクアップはできないと悟る。

真由も理解してくれて、とりあえず今日は公園で野宿する事になった。

幸い公園にある小さな丘は隠れる所も多い。

そもそも鏡治ですら駄目なのに、他のインセクト達が動けるわけもない。

たとえマインドコントロールを受けていようが流石に今日はインセクトも追ってはこないだろう。ゼクトルーパーは知能は低い方なので、物陰に隠れていたら見つかる事はない。

二人は特にやることもないので、ベンチに座って夜の空を見ていた。

「昔は星とか月が見えたみたいだけど…  
今は工場からの煙でなにも見えないな…」

「ん……お星様…残念だね」

あまり綺麗とは言えない夜。

しかし辺りを包む静寂は、まるで世界に二人だけを残して滅んでしまった様だ。

それが悲しく、切なくも、ある種とても幻想的だった。

だが、このままだと本当にそうなってしまつのではないかと言う怖さも覚える。

鏡治はその沈黙を消すべく、簡単な質問を投げかけた。

静かな夜に鏡治の声だけが存在する、そんな幻想。

「ああ…。そう言えば…真由ちゃんって何歳？」

「？」

「あ！ 女性に歳聞くなって叔母さんにいつも言われてたのになあ  
！」

鏡治は申し訳なさそうに頭をかく。  
だが叫ぶ準備と頬を叩く準備をしたところで、意外な返事がかえってきた。

「いいよ。ボクはね……」

その時、少しだけ真由の表情が曇ったのを鏡治は気がつけなかった。真由は指で数を数えるような仕草をとった後、小さな声で呟く。

「じゅっ……るく歳……」

「え！？」

あ……ああ、えとゴメン！ 何でもないよ  
「

鏡治の反応が予想通りと言ったように真由はうつむく。

そう、幼すぎるのだ。

彼女の行動、口調はとも同年代……十六歳の少女のソレとは違う。かけ離れているのだ、尤もそれは真由自身が一番分かっていた事。

「いいの。ボク…事故で一回記憶が無くなっちゃったんだって」

「え…？」

そう、真由は一度……

第121話 DIET SPEED LOVE (後書き)

ガタツクゼクターのCVはウラタロスです

……ん？

まあいいやw

では次もよろしく！



第122話 QUESTION SPEED LOVE(前書き)

はい、まあ次は未定ですかね

友達の家でカブトのゲームをやりました。

あのゲーム、地元じゃ中古で9800円くらいするんですよ  
今はどうか分かりませんが、少し昔はすげーなとww

ではござい！

第122話 QUESTION SPEED LOVE

それは、司が初めてディケイドになった世界での事。  
双護は皆にある事を相談していた。

明らかに普通じゃない出来事に巻き込まれた、長くなりそうだと理解できる。  
隠し通せる訳もない。

「皆…少し、いいか？」

「え？」

双護の言葉に皆は耳を傾ける。  
今、真由はトイレに行っていない、ここしかないと言双護は悟ったのだった。  
そして意を決して皆にそれを切り出す。

「え？ 真由ちゃんが！？」

「ああ、真由は事故で一度記憶を失っているんだ。

幸いそこまで酷いモノじゃなかったから…

『時計』とか『学校』とか記憶していた単語までは消えなかった。

でも、その…今、真由の外見的年齢と精神的年齢には差があるんだ。

食事のマナーだとか対人におけるマナーとか……そういうたモノも忘れていた。

もちろん教育をしなおしたおかげでそこまでは酷くない。

だから……もし真由がそう言う『幼い行動』で皆に不快な思いをさせるかもしれない。

その時は…どうか許してほしいッ」

そう言って双護は深く頭を下げる。

皆も驚きこそはしたが、すぐに理解を示してくれて双護も安心していた。

「だけど、真由ちゃんはこの学校でいいのかい？

もっと真由ちゃんに向いてる学校があるんじゃないだろうか？」

翼の言葉に『苦い顔』をする双護。  
どうやら特別な事情があるらしい。

そしてその事情は彼らにとってあまり嬉しくない事だと言っことも理解できた。

「親父が無理を言っつてこの学校にさせたんだ。」

正直：あまり真由のことは世間に知られて欲しくないみたいだから…」

それがマイナスのイメージからか、プラス的なモノなのかまでは皆聞く事はできなかった。

しかし真由は大切なクラスメイト、それでいいと司達は思う。

「よし真由ちゃん！一緒にプリンでも食べようか！」

戻ってきた真由にユウスケが微笑みかける。

太陽の様な笑顔で頷く真由を見て、双護も安心したように笑うのだった。

どうやら上手くやっていけそうだ。

あまり話したくないことだったのかもしれない。  
真由も薄々は気づいているのだろう。  
自分の過去が分からない。思い出せない。

今の自分は知識が豊富な小学生といってもいいかもしれない。

方程式は解けても、電車の切符を買うのは自信がない。

難しい漢字が読めても、覚えるのは時間が掛かる

都道府県が全部言えても、夜トイレに行くのが怖かったりする

そう言った『高校生』らしくない毎日に、違和感を感じるのは当然だろう  
兄に余計な心配をかけたくないから、記憶のことについては何も言わないが……

きっと自分は少し皆とは違うのだと

「そうだったのか……ごめん。真由ちゃん」

「ううん。いいの、ボクも分かってるんだ。  
だから……きっと、お兄ちゃんはボクを…恨んでるんじゃない  
かって

……怖いの

恨んでいる？

何故？

鏡治は思わず真由の方を直視してしまう。

そして後悔する、目に涙を浮べた彼女と視線がぶつかってしまった  
からだ。

泣いている姿に、鏡治の心が揺れる。  
なんとかして泣き止んでもらいたい、  
ただどどうしていいかわから  
ない。

「お兄ちゃんは……ずっと一緒にいてくれた……」

だけどつ、真由の声が震える。



「ボクがいたせいでお兄ちゃんはやりたい事を  
できなかつたんじゃ……ないかって」

兄は、本当に自分によくしてくれた。

だから、嬉しくもあり申し訳なくもあつた。

兄はきつといろんな事を犠牲にしていたんだろう。

「お兄ちゃんは……ボクの事が」

「真由ちゃんッ！そんな事言つなよッ！！」

「！」

真由がその言葉を口にした時、真由は鏡治の腕の中にいた。鏡治はすぐに我に返って真由を解放するが、真由は暫く口を開けたまま鏡治を見詰めている。

結局鏡治がとつた行動は抱きしめると言うありがちな事。

しかし『ありがち』なのはドラマや漫画の中だけだと彼は悟った。

確かに泣き止みこそしたが、好きでもない男にいきなり抱きしめられたらどうなんだろう。

鏡治の顔が青くなっていく。

これ、もしかしてショックで泣き止んだって事!?

「あ！ いや、ホラ！

真由ちゃんの兄貴さ、俺が真由ちゃんを連れて行くとき本気で怒ってたぜ！

俺が言うのもなんだけど、それって真由ちゃんがスゲー大事だからじゃないのか？

ああ、そうさ！ 邪魔とか、恨んでたらあんなに怒らないぜ？」

「・・・」

「思い出してみよ真由ちゃん！

今まで君の兄貴と過ごしてきた日々を！

どうだ？ 楽しかったんじゃないか？ 楽しかったよな？

真由ちゃんはお兄ちゃんともっと一緒にいたいって思うだろ？  
それは兄貴も思ってることなんだよ！

ああ、そうだ！そうに違いないって！」

「本当…？」

「ああ！ 約束する！」

そう言って鏡冶は真由に小指を差し出した。

真由はにっこりと微笑むと、鏡冶の指に自分の指を絡ませる。

二人は笑い合っていると、約束の儀式を行う。

真由の安心した様な笑顔を見て、鏡冶も微笑むのだった。

そして夜も深くなっていく。

「すう…すう…」

規則的で可愛らしい寝息を立てている真由を見て、鏡治はもう一度微笑む。

何があってもこの少女だけは守らねばならない…

鏡治はもう一度気合を入れる。

「うオッしゃアアアアアアアアアアッ!」

『うるさい! あの娘も起きるぞ!』

「おっとと!」

慌てて口を閉ざす鏡治、そんな彼にため息をついたのはガタツクゼクターだった。

鏡治は自らの相棒とも言えるゼクターに詰め寄ると、彼女を起こさ

ない様に小さな声で話しかける。

「さっきはありがとうな、助かった」

『まあ気にするな。』

それより、俺にはいろいろ聞きたいんじゃないか？』

鏡冶は頷く。

気になったのはなにより、何故今まで喋れる事を黙っていたのか？

それとマインドコントロールを弱めてくれたというのはどういう事なのか？

この2つだ。

ガタックゼクターは小さくため息をつく、鏡冶の周りをふわふわと飛びながら呟く。

ゼクター達は全員言語を話す機能が備わっている。  
しかしゼクター達は喋る、つまりコミュニケーションを契約者とするのは止めていた。

余計な情を移しては互いに面倒だからな、そう言ってガタツクゼクターは笑う。

その言い方から過去に何かあったのだろうか？  
鏡冶には分かるわけもないが、何かそう言う哀愁の様なものを感じた。

ゼクターはインセクトがワームを殺す為に生まれた存在だという事を理解していた。

それは同時に常に命を失う危険があるというモノ。  
関わらなければ、痛みは最小限にできる…互いにとっても。



「心があるのか…ガタツクゼクターには！」

『ああ、そうだな。俺達はワームと機械の融合した存在だ。お前らの過ぎた科学が俺達に心、感情と言うモノを与えたのかもしれない。』

言語機能を持った事で俺達も関わりと言うモノを知った』

「そうなの…か。」

ん、でも俺に話しかけてくれたし、助けてくれたのは…？」

『マインドコントロールの件か、そうだな。』

創英のマインドコントロールは中々だが俺達が妨害電波を流せば被害を最小限に抑えることができる。』

現にお前はあの娘の言葉で自我を取り戻せたわけだからな。まあ元々お前は抵抗力が強かったみたいだが』

「え？」

ガタツクゼクターは鏡治の頭に軽く体当たりを決める。  
思わず小さく声をあげる鏡治。

『馬鹿はマインドコントロールに強いんだよ』

「な、なんだよソレは！」

『クククッ、まあ怒るな』

「ああそうだな…おう！  
助かったぜ！ ありがとう！」

そう言って鏡治は深く頭を下げる。

そして気づいた、妨害電波はゼクターの意思で流す…  
なら

「じゃあ他の皆も…！」

『…そうだな、ゼクターが妨害電波を流した上で  
きっかけを与える事ができれば元に戻るかもしれない』

「おお！」

だが…ガタツクゼクターは街を見回す。  
公園は薄暗く静かだが、街の方は深夜だというのにネオンで昼より  
明るく照らされ、  
機械音や生活音で夜と言う事を忘れさせる。

工場では今も何かが作られ、有害な煙が空を汚していた。

『俺達ゼクターは創英の言っている事に賛同の念があったのかもしれない。』

俺達は機械だ、感情こそ持っているがそれを押し出してはならない。

道具に心は不要だからな。

だが、俺達は創英の言っている事に賛同してしまったのさ。

だからこそお前ら心なき人間と契約してこの街の人間共を支配しようと考えた。

まあ唯一カプトゼクターの野郎だけはそれを拒んだ訳だがな。

アイツは自由なヤツさ……』

カプトゼクターだけは、創英の言い分を『興味がない』の一言で切り捨てたらしい。

結局彼の前に現れる事もなく、今もどこかを飛び回っているのだから。

第122話 QUESTION SPEED LOVE (後書き)

いろいろな電子音(?)がありますが

ガタツクゼクターが一番好きかもしれません。

特に『Change・Stag Beetle』の部分がねw

時点でデイケイドかファイズかな。

絞りきれてないですけどw

では次もよろしく!

第123話 HATRED SPEED LOVE(前書き)

はい、更新ってなもんで。

次も…未定で。すみません！

フォーゼの敵デザインは結構好きです。

しかし大文字さんパネえっすw！

ではござい！

第123話 HATRED SPEED LOVE

「・・・」

鏡治は空を見上げる。

昔は美しい月と星が見えた夜空、しかし今はよどんでいる。

日々破壊され行く環境と自然、それを保護する機械を作れというクレームが多いらしい。

全く、どこまで機械にたよるのやら……

『この街の人間共は腐りきっている。』

墮落が心を廃らせ、人間の質を落とす。

創英が人間に絶望したのも頷ける話だと…俺達は思った。

鏡治、お前創英の右目…どうなったか知ってるか？』

「いや……」

『昔、ヤツがインセクトとしてフォーム殲滅に参加していたとき、子供を守って……その時に……』

「ッッ……」

今、創英は人間の命をなんとも思っていない様に感じる。

だが昔はそうではなかったのだ。  
正義感の強い男だった、だが現実に耐え切れなかった弱い男でもある。

ガタツクゼクターは言う。

今の創英は狂っている、だがその原因を作ったのは……



人間だ。

「ああ、そうだな。

確かに自分で歩かない奴らはどうかと思っぜ、俺も……」

だけど

ッ、鏡治は立ち上がり天に拳を掲げる。

「だけどなッ、それで俺の友達や

こんな無関係な女の子が巻き込まれていいのかッ？

俺の叔父さんや全うに生きてるかもしれない  
カプセル使用者が巻き込まれていいのか？

ああ、ちげえ！ 違うよなッ！  
そうじゃねえ！

創英さんの気持ち理解できない訳じゃねえさ！  
だがなっ、それでこのまま創英さんの計画見逃して！

「真由ちゃん巻き込んで…」

鏡治は一緒に拉致された友人を想う。

彼はサソードになっていた。

そして剣を振るう、無関係な人間に

「神也の未来まで壊す事が許されるのか!？」

ああ、違う！ 違うぜそれはッ！

俺は認めない！

お前らゼクターがイエスと言おうが、俺はノーと言っッッ！」

『……………ああ』

ガタツクゼクターはその言葉に頷くと、その場に着地する。

鏡治が我を取り戻せたのは真由の力もあるが、

なによりガタツクゼクターがマインドコントロールを妨害した事だ。

それはつまりガタツクゼクターが創英の考えに疑問を持ったという事。

ガタツクゼクターは人間など皆、墮落しきった愚かな存在だと考えていた。

だが、有美子や鏡治、真由を見てその考えを少し変える。  
もしかしたら、人間はまだそこまで捨てたモノではないのかもしれないと

『俺は見てみたくなつたのかもしれない。』

この世界が変わるのを、今のこの現状を誰かが破壊してくれることを…』

2635

創英は正しきことには犠牲がつきものだと言っていた。  
だが、もし…犠牲を出さずに世界を変える事ができたなら…

『お前の叔母やその仲間が…』

その希望を叶えてくれるかもしれない…』

「ああ、叔母さんは凄い人さ。  
叔父さんだって警官として優秀な人だ。

俺は尊敬してる！」

『そうだな…』

ガタツクゼクターはもう創英の考え方に賛同できなくなったのだ。  
だから妨害電波を發した。

と言つ事だった。

創英を裏切る。

そんな人間じみた行為をする事になるとは……ガタツクゼクターは苦笑した。

『お前はこれからどうする？ 鏡冶』

「とりあえず真由ちゃんを、絶対安全地帯らしい学校へ送り届ける。次に神也を助けに行く」

御剣神也。

鏡冶の友人にして、同じく創英に拉致された者の一人だ。今はサソードに選ばれインセクトとして操られている。

「サソードゼクターは妨害電波を流しているのかな？」

『さあな、ヤツも創英の行動に疑問を持ったなら流すかもしれん。真由と言ったな、あの娘を躊躇い無くワームの餌にしようとした創英の行為は俺達の心にそう言った影を落とした。』

サソードゼクターがどうかは知らんがな』

「お前らはコンタクトを取り合えないのか？」

『できる。だが創英の手によって電波を拾われるのがオチだ。抵抗できるとしても妨害電波を流すだけだな』

「成る程、でもたとえ妨害電波がなくても絶対アイツは助けて見せる！」

その為に協力してくれ！ 頼むッ！！」

そう言っで頭を下げると鏡治。

『ハツ、馬鹿な男だなお前は』

だが、悪くない。

そう言っでガタツクゼクターは彼の周りを飛び回った。

『俺はお前に話しかけた、それはつまりお前に期待してるとして事だ。  
俺の最後の契約者がお前である事を切に願うよ』

「ああ！ まかせろっ！」

鏡治はニヤリと笑う。

ガタツクゼクターも表情こそ分からないが、笑っていた。



「んッ……!!」

「？」

今まで寝息を立てていた真由が、突如跳ね上がるようにして目を覚めます。

そんなに暑くないにも関わらず、汗が酷い。

鏡治は真由にどうしたのか問いかける。

どうやら真由は怖い夢を見てしまったらしい、顔が青ざめて小さく震えている。

鏡治は真由のハンカチを借りると、彼女の額や顔の汗を拭いた。

「安心してくれよ真由ちゃん。  
嫌な夢は忘れちまえばいい、楽しい事を考えながら寝るんだ！  
そうすれば一発さ！」

「うん……」

そうやって真由は目を閉じる。  
しかし、なかなか眠れないようだ…

「そうだな、真由ちゃんは好きなお菓子に囲まれて幸せだ！  
これでオツケー！ 大丈夫だぜえ。」

真由ちゃんが寝るまで俺が守っててあげるから！  
安心して寝な」

「ありがとう……とう！」

そう言っつて真由は目を閉じる。

鏡治の言っつた事を思っつてみる、すぐになやける真由。

そして数分もしない内に眠りに落ちるのだった。

『やるじゃないか』

「叔母さんに教えてもらっつたんだよ。俺も昔は……な」

両親が亡くなっつて、昔は本当に寂しかった。

兄弟もいない自分にとっつて、それはとても

だから、真由には絶対に双護と再会してほしい。

家族なんだから……

「ああ、そっつだ。お前はさっつき道具に心は不要っつて言っつたな」

『ああ、それがどっつした？』

「お前は道具じゃない、俺の友達だ。覚えとけよ」

『ハッ！ 言うなお前も』

軽く鏡治とガタツクゼクターは笑い合う。

「あーあ…俺も流石に眠いぜ……」

『休めるときに休んでおけ、俺が見ておいてやる。  
クロックアップの負担は大きいからな』

「おつ……すまん……ありが……とつ……」

そう言って、鏡治も真由と肩を並べて眠りに落ちたのだった。

一方、同じく深夜の街外れ。  
そこにゼクトルーパーに囲まれている少年がいた。

名は天王路双護。

『抵抗は…お勧めしない』

電子音がそのメッセージを告げる。  
しかし双護は全く動じる素振りを見せず、逆にゼクトルーパー達を  
鼻で笑った。

「消えるゴミ共。」

俺は忙しい、邪魔するならスクラップにしてやるが、どうする？」

それは降伏拒否、ゼクトルーパーは一斉に彼へ銃を向けた。

銃、それはなによりの抑止力。

凶器の中でも上位に入るだろう物に、双護は眉一つ動かさない。

そんなモノ、玩具でしかないからだ。

そう、彼は嘘をついていた。

彼は…

「来い」

その言葉と共に赤い何かが飛翔してきて彼の手に収まる。

カプトゼクター、彼は既にその力を得ていたのだ。

だが、彼はその事を皆に話す事は無かった。

何故か？ それは分からない。

双護は何故、嘘をついたのか？

「…変身」 『HENSHIN』

電子音と共に彼の姿が変わっていく。

いやしかし、彼は嘘をついていないと言えるだろうか。

彼は真由を助けたいという、愛情の想いを掲げカプトゼクターを呼んだ。

だが、それではカプトゼクターは彼の元には現れなかった。



だが、次に別の感情を掲げてカプトゼクターを呼んだ時、カプトゼクターは彼の所へやって来たのだ。

「・・・」

銃弾が発射され、命中するが何も感じない。  
マスクドフォームの防御力は凄まじいな、双護は思う。

「キャストオフ」 『Cast Off』

真由への愛情ではカブトゼクターを呼ぶことはできなかった。  
それは彼の中に愛情を上回る感情があったからに他ならない。

では、その感情は何か？

「クロックアップ」 『Clock Up』

破壊されていくゼクトルーパー達…

「・・・」

それは愛情ではなく…

「…チッ」

憎悪。

彼の体は本来のカブトのカラー、赤ではない。  
黒になっていたのだった。

瞳も黄色になっている。

それは、憎しみの力でカブトゼクターを得たものが変身する物。

この世界では、それをダークと呼称した。

「・・・」

ダークカブトは物言わぬ残骸となったゼクトルーパー達を蹴り飛ばす  
すと、ブレインタワーへと歩き出す

(真由…もし、お前がリコンフォームを使うと言っのなら…)

その時は……

双護は唇を噛む。

思わず血が出るくらい強く

(気絶させてでも阻止する)

それがもしできないと言っのなら…

悪い

「死んでくれ、真由香」

た。  
ダークカブトはクロックアップを発動させその場から消えるのだっ



「ひえーん！」

「カウントダウンだらおおおがああああああ！」

……はい、次もよろしく！



第124話 FRIEND SPEED LOVE(前書き)

はい、更新ですね。

まあ次は……土曜かな

鏡治の前に現れたのは……？

ではごっごぞー！

第124話 FRIEND SPEED LOVE

「ううーんっ！ いい朝だなあ！」

「おはよう…鏡治君……」

「おう！ おはよう真由ちゃん！」

ギョルルルルルルウウウウ……

「……」

流石におにぎりを半分ずつじゃ腹が減る。  
もう有り金もゼロ、朝食は諦めるしか……

「ん？」

あれ？ 何かあそこで光って

「あつ！ あれはツツ！！」

鏡治はスライディングでその光を放つ何かに向かっていった。そして、それが五百円玉だと言う事を理解する！

成る程、昨日は暗くて分からなかったが、美しい朝日に照らされたそれは、まさに

「ダイヤモンド……」

「？」

「これで飯が食えるぜ真由ちゃん！」

「ほんとに!?!」

二人は手を繋いでクルクルと回り始める。

二週目からはピョンピョン跳び始めた、相当朝食にありつけるのが

嬉しいのだろつ。

結局バンザイをした時にすっぱ抜けて、池に五百円を落とすまで二人のはしゃぎ合いは続くのだった。

しばらくはシヨックで防ぎこんでいた二人だが、いつまでも落ち込んで入られない。

二人は一緒に顔を洗って、身支度を済ませる。  
真由を学校に送る為にはクロックアップで一気に行った方がいいだろつ。

しかし街を通る事になる、街にはクロックアップを感知するセンサ

ーがついている訳だ。

無謀か？ 鏡治は頭を抱えた。

他に方法があればそれにしたいところだったが、思いつかないのも事実。

しかしカプセルに乗っていなければそれこそ浮きまくりだ。

「うーん……」

悩む鏡治、そして幸か不幸か？

展開を変える要因がむこうからやってくる。

「！」

「…新意鏡冶、命令を無視するとはどういう事だ？」

公園の広場。

そこを挟んだ向こうに…その男、御剣神也が見えた。

茶色い髪に白いスーツ。間違いない、神也本人だ。

目の色が変わる鏡冶、すぐに真由を物陰に隠すと親友と対峙する。

「神也！ お前ッ…」

「鏡治、僕達は創英様の命令を無視してはいけない

…そうだろうか？」

「ッ…？」

神也の様子がおかしい。

前のような無機物さが無く、今彼はニヤリと笑っているではないか。

2662

『成る程、創英め……』

ガタツクゼクターは直ぐに理解した。

創英はマインドコントロールの方法を変更したのだ。

感情を殺すのではなく、感情までも操るといふ事が。相手の知り合いならばより効果がでる方法だろう。

「鏡治、お前があの子をかくまっているのは知ってるんだ。今すぐ渡すって言うなら…創英様もお許しになられるだろう。」

「いい話じゃないか？」

「ッ！ 神也！目を覚ませ！ お前は操られてるんだよッ！..」

鏡治は神也に駆け寄るが、返事の代わりに返ってきたのは回し蹴りだった。

苦痛の声をあげて吹き飛ばす鏡治を、神也はあざ笑うと再び鏡治を睨みつける

にらみ合う両者。友達との喧嘩……では終わらせてくれないようだ。

「鏡治、お前は余計な事を言わずにさっさと命令を実行すればいいんだよ。」



「真由と言う少女を殺すだけだ。」

「なあ、いいだろ？」

「親友が頼んでいるんだ、さっさと殺して帰ろうぜ？」

「　　んな…。」

「あ？」

「ふざけんなツッ！ 何だよ殺すって！？」

「真由ちゃんが何したって言うんだよ！！」

「お前、冗談でもそんな事言わないヤツだったじゃねーかッ！！」

鏡冶の言葉に神也は舌打ちで返す。  
鏡冶はそれから神也に必死で呼びかけた。

元に戻ってくれる事だけを祈って、しかし変わりに何度も殴られ、蹴りとばされてしまう。

「ガッ！ ふうつ……ッツ！」

「ハッ、無様だな鏡治イ！！」

『STAND BY』

「……………じゅうッッ！！」

電子音が聞えて鏡冶は後ろへ跳ぶ。  
やはり、じつするしかないのか……

「命令に背いた裏切り者は……死ぬ。変身」 『HENSHEIN』

いつの間にか現れたサソードゼクターを、神也はサソードヤイバーへ装填する。

変わっていく肉体。

マスクドフォームに変わったサソードは、何の躊躇いもなく触手を伸ばして鏡治に狙いを定める！

「くッ　　ッ！！」

『鏡治！』

しかしその触手をガタツクゼクターは突進で吹き飛ばす。

一瞬バラバラになる触手、しかしすぐにまた鏡治に向きを変えるのだらう。

もう迷っている暇はない！

『アイツは操られる！ それを忘れんなッ！』

「あ…あ…ッッ！ 行くぞ！ ガタツクゼクター！」

鏡治はベルトを出現させガタツクゼクターを装填する。

「うおおおおお！！ 変身ッッ！！」 『HENSHIN』

鏡治の体がガタツク・マスクドフォームへと変化する。

サソードはまたも舌打ちをすると、ヤイバーを構えて走り出した。

「少し痛いけど…我慢してくれよッ！ 神也！」

ガタツクはバルカンの照準をサソードに合わせる。  
なんとか気絶させる事ができれば！

しかし、その時だった。

サソードが両手を広げて地面に膝を着いたのは！

いきなりの行動にガタツクは動きを止めてしまう。

今まで敵意をむき出しにしていたサソード。

しかし次に顔を上げた彼は、先ほどとはまるで別人の様に戦う事を拒否しはじめた。

「鏡治ッ！ 撃たないでくれ！」

今、僕にダメージが入れば脳が破壊されてしまうんだ！！」

「し、神也！？ 意識が戻ったのか！」

急に人が変わったサソードに、淡い希望を抱くガタツク。

「あ…ッ、ああ！ 一時的だが…何とかねえ…！」

ガタツクは急いでサソードの元へと駆け寄る。

大丈夫かと何度も呼びかけるがサソードは苦しそうに呻く。

なんとかして助けなければ、ガタツクは必死にサソードに話しかけるが……

「きよ、鏡冶イイツ！！ うわあああああああ！！」

苦しそうにつめき声をあげる親友に、思わずガタツクも取り乱してしまふ。

心配そうに見守る真由、オロオロと動き回っているところを見ると彼女もパニックに陥っているのかもしれない。

広い公園だ。病院も近くには無い。どうすればいいのか

「鏡治イイイ!!」

「ど、どうしたんだ!? 苦しいのか?」

ガタツクはサソードの肩に手を当てる……

「お前は本当に甘いよ、馬鹿が」

「え　　ッッ」

沈黙。

二人は何も言わず、動かず、その場に佇む。

しかし、サソードの笑い声が沈黙を切り裂いた。  
同時に地面へと倒れるガタツク



「ククッ！　ハハハハハハ！　甘いんだよお前は」

「あッ　　カアッ……」

サソードの頭部についている、サソリの尾を模した角から緑色の液体が滴り落ちる。

見るからに毒々しいその色は、その文字通り猛毒なのだ。

サソードの不意打ちによってガタツクの体に毒が注入される。

「こんな、簡単な演技に引っ掛かるなんて…」

それでもインセクト最強なのかい？　クハハハ！！」

「と…友達…は、信じる…モン…だろうが…」

「ハッ、下らない」 『Cast Off』

『Change・Scorpion』

サソードは装甲を開放してガタツクへぶつけていく。  
声にならない悲鳴を上げるガタツクをもう一度あざけ笑つと、思い  
切り蹴り飛ばす。

「グアアアアアアっっ！」

「安心しろよ、せめて苦しませずに殺してやるからな。」

『Rider SIlas』

「……！」

剣を構えサソードはガタツクに近づいていく。

しかし、その時だった

「やめてえッ……!!」

「!」

「あん？」

物陰から真由が飛び出してきて、ガタツクをかばうように立つ。  
少しの沈黙の後、またサソードは笑い出した。

こんな無力な少女に何ができるのか？

哀れで愚かな行為に嘲笑を、そしてこんな無力な少女に守られるガ  
タツクに失笑を投げかける。

「安心しなよお嬢ちゃん、二人まとめて真っ二つにしてあげるから  
な。」

せいぜいそれまで泣いて泣いて…

惨めに死ねよ」

そう言ってまた、サソードは笑う。  
だが、その言葉がまさにトリガーだった。

「ウオオオオオオオツッ！！」

「何ッ！？ 馬鹿な！！」

ガタツクは瞬時に立ち上がり、サソードに思い切り力を込めたタツクルを決める。

驚きながら吹き飛ばすサソード。

その視線には猛烈な覇気を纏っているガタツクが見えた。

第124話 FRIEND SPEED LOVE(後書き)

映画はあんまり……

って言うか全然サード出てきませんでしたねw

では次もよろしく!

第125話 SCORPION SPEED LOVE(前書き)

はい、更新ですね。なんか軽い予告みたいなモノを  
前書きにしていこうかなと

対峙するガタツクとサソード

ではございぞー！



第125話 SCORPION SPEED LOVE

「な、何故!? 毒が回って立つことすら難しいはずなのにっ!？」

「ハアツ…ハアツッ! 神也ア! お前…」

「くっ!」

完全に立ち上がり、ガタツクはサソードに向き合う。  
言われなければ、毒がまわっているなんて嘘の様に思えるだろう。

「お前は…ッ! 女の子には無駄に優しかったな…ッッ!」

絶対に女の子に向かって死ねなんて言わないヤツだった。

でも、今のお前は何だ?

ガタツクは一歩足を踏み出す。

全身に焼ける様な痛みが走り、思わず叫びそうになるが歯を食いしばって耐える！

「それがお前の限界か？ 違うよなッ！

ああそうだ！ 俺だってそうだった。

お前は俺より凄いヤツだ！ 絶対に自我を取り戻せる！！

そうだろうか！？」

「…ッ！！ 訳の…分からん…：…事をおおッッ！！」

サソードは剣を振り回しながら立ち上がる。

だが、ガタツクは剣を拳で受け止めると、素早くゼクターの角部分を弾いた！

「キャスト…オフツッ!」 『Cast Off』

「グッ!」

装甲が弾け、その衝撃でサソードの剣を弾き飛ばした。  
サソードはすぐにクロックアップを発動させて剣を拾いに走る!

『Change Stag・Beetle』

「クロツク…アップッ!」 『Clock Up』

ガタツクはぶらつきながらも、クロックアップでサソードと同じフ

イールドへと立った。  
剣を持ち直し構えるサソードにカリバーを一つ投げつける！

「チッ！」

サソードはそれを弾くと、眼前に迫っていた拳を片手で受け止める。  
毒で弱っている筈なのに、その拳はとても大きく感じた。

「神也あッ！ どうしたよ？ 俺の拳、弾いてみるよッ！」

「…ッッ！！！」

手に力を込めるがガタツクの拳はビクともしない。

何故だ！ サソードに怒りの感情が芽生える。  
こんな弱々しいガタツクに何故勝てない？

動かない拳、それは少し時間を掛けても同じだった。

「くうツツ                    ！」

「ウオオオオオオオオオッ！」

「死にぞこないがあッ！」

ついにサソードは真正面から受け止める事をあきらめ、足を払う事を決断する。

剣で足を突けばいいだけの話、サソードは狙いを定める！

「逃げてんじゃねえぞ！！    神也アアアアアッ！」

「何い！？？」

しかし、ガタツクはそれを許さない！  
声を出すだけで意識が飛びそうになるが、意地でも倒れるわけには  
いかない。  
歯を食いしばって、目の前にいる親友だけを視界にとらえる。

「神也ア！ お前は逃げない男だった！ まっすぐなヤツだった！  
思い出せよ！ それで俺をぶちのめせッ！

何、諦めてんだ！？  
何妥協してんだよ！ オイツツ！」

何なんだコイツは、サソードの心の中に得体の知れない恐怖感が生  
まれる。

だが、同時に何かが入り上げてくるのを感じた。

これは危険だ！

サソードはガタツクとの距離を空ける事を決意する。

「逃げんなッッ！！ 神也！」

「くッッ！ なんだこれはっ！」

逃げるな。

その言葉が異常に引つかかる、逃げてはいけない。

そんな想いが自分の中を駆け回る！

「何で俺の拳が弾けないか分かるか？

それはな、今のお前がお前じゃないからだよッ！

本当のお前ならこんなのすぐに弾けただろうが！

忘れちまったのかよッッ！！」

「うっ、うぜえんだよおおおおッ！！」

動けない！

どんだん何かが込み上げてくる！

マズイ！ このままでは ツ！

「お前は…誰だッ！」

「ツツ！！ 何いイ…？」



「お前は誰だって聞いてんだよおおおオオオオツツ!!」

ガタツクはサソードを投げ飛ばす!

だが、ここで限界がきたのだろう。

ガタツクは糸の切れた人形のように地面へと倒れ、そのまま変身が解除されてしまった。

「あぐうあ…があああ…ツツ!!」

「鏡冶君!!」

苦しそうに呻く鏡冶。

真由は必死に鏡冶に呼びかけるが、鏡冶の体に回る毒は強力。

このままでは死んでしまうだろう。

『クッ！ おそらくサソードゼクターの中に解毒剤があるはずなん  
だが…』

「！」

それを聞いた真由はサソードに向かって頭を下げた。  
止めようとするガタックゼクターを振り切ると、真由はより深く頭  
を下げる。

「お願いです…鏡治君を助けて……ください！」

「ッッ！！」

サソードはフラフラと頭を抱えてうずくまる。

僕は…誰だ？

「神也くんは鏡治くんのお友達なんですよ…？　お願いします…！  
どうかお友達を助けてください…！」

「うぐうあああ…」

真由の透き通った声が神也の頭に響き渡る。

鏡治は顔を真っ青にしながらも、もう一度呟いた。

お前は、誰だと。

「……僕……」

「……あなたは……だあれ？」

神也の目が見開かれる。

そしてフラッシュバックのように今までの記憶が蘇ってきた。

目の前で苦しんでいる男は……誰だ？

ああ、そつだ。友じゃないかッ！

「僕は…僕はッ！ 神也、御剣神也！」

「え…」

「ふつかあああああーっ！」

「わー!!」

サソードは勢いよく立ち上がると、そのまま変身を解除する。  
そして直ぐに鏡治のところへ駆け寄ると、その肩を揺すりだした。

「クッ、鏡治…真由さん。  
すまない、僕は何て事を…」

「サソードゼクター！」

『ミーの尻尾に解毒剤があるでございませう…！』

ピョンピョンと跳ねてくるのはサソードゼクター。  
彼もまた妨害電波を流していたゼクターであり、  
そのおかげで鏡冶と真由の説得が神也の自我を取り戻すきっかけに  
なったのだった。

「鏡冶くん…ッッ！」

今度は自分が助ける番だ。  
真由は祈るように鏡冶を見詰めるのだった。

「ゲホッ！がはっあ！」

「鏡治…君っ！」

『「鏡治！」』

『鏡治さん！』

「……」



鏡冶が目を覚ますと、自分を囲んでいる真由達の顔が見えた。彼が意識を取り戻したのを知ると、真由は安心したように微笑む。

「よかった」

安心したのか、真由の瞳から涙がこぼれる。

そしてその場にへなへたと座り込んでしまった。

鏡冶は自分の状況を悟ると、真由に向かって微笑み、涙を拭いてあげたのだった。

そして目の前にいる親友と目を合わせると、互いにニヤリと笑う。もう一度鏡冶は拳を突き出してみる。

すると、それを神也はしっかりと受け止めて弾くのだった。よく分からない友情表現に真由はクスリと笑い、また笑顔に戻る。

「お互い大変だったね。鏡冶」

「ああ、そうだな。神也」

二人は苦笑すると、真面目な顔になる。

これで終わりじゃない。ここからが本番なのだろうから

『お前、他に妨害電波を流しているゼクターを知ってるか？』

『ミーが知る限りではドレイクゼクターさんしかいませんですね。後の皆さんは運命に身をゆだねたそうです』

ガタツクゼクターはため息をつく。  
想像以上に少ないな、ドレイク以外は実力行使しかないのかもしれない。  
ない。

ホッパーブラザーズとザビーゼクターは創英派と言う訳か…

意見が割れる、これもまた人間らしい事だ。

そんな事を考えながらガタツクゼクターはこれからの事を考えてい

た。

『考える』と言う行為もまた、そうなんだろう。もう自分はただの虫ではない。不思議な気分だ

『友達同士が戦う世界なんていけないですね！

ミーは創英さんのお考えにはもうついていきませんです！』

「こつちもいい迷惑だよ。

鏡冶、とりあえずココを離れたほうがいい。

僕、結構お金持ってるから貸すよ」

「ああ、ありがとう！ 助かるぜ神也！」

神也は街にあるセンサーを破壊してくれると言った。

とり合えずは別行動だ、まだ創英は神也が裏切った事を知らない。盗聴機が壊れたのは戦闘で……とでもいい訳できるだろう。

尤も創英はそんなに馬鹿じゃない。

気づかれるのも時間の問題なのかもしれないが

そして、それはゼクトルーパー達も……という事。

だからとにかく一緒に行動するのはマズイ、

かくまってくれる場所とインセクトの情報を渡すと神也は鏡冶達から離れる事を決める。

「死ぬなよ、鏡冶」『お気をつけてー』

「当たり前だ!」「じゃあね……」

二人はもう一度拳を合わせると、笑顔で別れたのだった。

第125話 SCORPION SPEED LOVE (後書き)

はい、説明を

ゼクターは喋る事はできませんが  
ベルトに装填されると会話機能は失われます。  
変身すればサポートは受けられないって事ですな

まあ、今回はこんなもんかな  
では次もよろしく！

第126話 HOTEL SPEED LOVE (前書き)

はい更新です。

次は……いつかな、すいません未定で御願ひします

鏡治達は一旦ホテルへと逃げる事に……

ではごっごぞー！

第126話 HOTEL SPEED LOVE

『これからどうするんだ？』

「神也がセンサーを破壊してくれるまではホテルで隠れる。  
できれば他のインセクトの洗脳も解除したいな。」

「いや、してやるッ！」

鏡治は真由の手を引いて公園から離れる。

もうこの場所がばれている以上、長居は危険だ。

神也に教えてもらったホテルまで走る事にした。

しばらく街の中を隠れながら進んでいき、ホテルへ無事にたどり着



く事ができた。

途中何度も徘徊しているゼクトルーパーに見つかりそうになったが、なんとか回避してここまでやってくる。

ホテルはそれなりに大きく、神也の話をだすとそれなりに大きな部屋を貸してくれた。

「アイツ、金持ちだからなあ……」

「すごい！　すごい！」

聞いた話では、神也を泊める事がホテルにとって大きなステータスになるらしい。

その友達ともなれば、断るわけにはいかないと言うわけか……

しばらく神也も洗脳されて家に帰っていないようだから、きっと両親も心配しているだろう

「でも、神也くんはすぐに目覚めてくれてよかったね……」

『いや、そう言う訳でもないかもしれないぞ。真由』

「？」

ガタツクゼクターは真由の肩に着地する。

神也は簡単に洗脳が解けた様にも思えるが……

妨害電波があり、親友が相手と言っなにより的事もあつた。

『友達と争うのはとても辛い事……だよな？』

「うん……そうだね」

エレベーターが目的の階についた様だ。

鏡治達は案内の通りに進む。

「きゃはははー！」

部屋についた途端、真由は楽しそつにベッドをトランポリンにして遊んでいた。

「鏡治君もやってみなよ…ッ！」

「え？」

いくらまだ場所が割れてないとはいえ安心してきるのは危険だ。  
ガタツクゼクターは少し外を見回る。

とりあえず異常は無いようなので、部屋へと戻る事にした。

『このホテルの周りにはゼクトルーパー達はいなかった

ぞ…』

「楽—シ—… じぢぢぢぢぢぢ—…」

「あきぢぢぢぢぢぢ—…」

ぢぢぢぢ—ん—ん—… ぢぢぢぢ—ん—ん—…

『…ぢぢ』

「えっ？」

固まる鏡治、夢から覚めたように彼は冷静になるとゆっくりベッドから降りた。

尚も楽しそうに跳ねている真由を達観したように見詰めると、ソファに腰掛ける。

「……………」

ふと、鏡治は冷静に考えてみる。

いくら中身が少し幼いとは言え一応同年代の男と女が同じ部屋に泊まるのは…

これ、いかなモノだろうか？

真由の家族もそんな事許さないだろう。

鏡治は冷静に頷くと部屋を出て行くことと決める。

「…どうしたの？」

「真由ちゃん、俺…外にいるよ。  
なんかあつたら呼んでくれよ？」

「どうしてお外にいるの？」

言葉につまる鏡治、素直に言っってしまうのか？  
それがいいな、少し迷って鏡治は今思った事を真由に告げる。

尤も真由がその意味を理解するかどうかは別としても、

やはりあまりよろしくないと、しっかり教えるべきだろう。

真由は暫く首をかしげながら鏡冶の話聞いていたが、つまり鏡冶が部屋をでていくという結論だけ把握すると、とても寂しそうな顔をした。

涙を目に溜める真由、鏡冶の良心が揺らぐ！

いや、おかしいだろ、逆だ逆！

ここを出て行く方がいいんだ！  
鏡冶は首を振ってドアノブに手をかける。

しかし、それを真由が制した。



「!？」

「ねえ、ボク…気にしないよ？ だから…一緒に遊ぼう。」

「うつうつん、でもなあ…」

「やっぱりご両親とかお兄さんの事考えると」

「・・・」

真由は、うつむいて小さく呟いた。  
その顔はとても寂しそう……

「わかった……」

「あ、ありがとう真由ちゃん。  
俺、外にいるからさ。別にいなくなったりしないからな？」

だから何か用があるなら言ってくれよ」

「…うん」

そう言っつて鏡治は外に出て行く。

真由はそれをまた寂しそうに見送ると、枕に顔を埋めて沈黙するのだった。

「・・・」

とは言っつてみたものの、やはり気になるといふのが現実である。

外の廊下にはソファがあり、鏡治は暫くそこで座っていたが……

どうにも真由が心配になってきてしまう。

先ほどまでは楽しそうにはしゃいでいた真由の声が、今は全く聞こえなかった。

鏡治はつい扉に耳をあてて中の様子を確かめようとしてしまう。

「…なんか、静かだな」

『ストーリーカーは犯罪だぞ鏡治』

「うっ！」

そりゃそうだ。

鏡治は目を閉じてソファに座った……

だが落ちつかない！

真由ちゃんは大丈夫だろうか？

もしかしたら何か困っているのかもしれない！

ああ、でも困ったら言えって言ってあるからな…

いやだがまで、もしかしたら助けを呼べない状況に陥っているのか  
もしれないッ！

うおおおおおおおっ！！！！

それはいけない！ 真由ちゃんを絶対に学校に送り届けると誓った  
くせに

みすみす危険にさらすなんてッ！！！！

どうする新意鏡治、ここはさりげなさを装って様子を見てみるか？

うんそうだな。それがいい

「ああ、そうだな。よ、良しッ」

『・・・』

「そんな目で見るな！ こゝ、これは真由ちゃんが心配なだけだぞ！」

ガタツクゼクターの冷たい視線を振り払い  
鏡冶はドアをノックする。

「どうしたの!?!」

中から現れたのは笑顔の真由。  
鏡冶はホッと息を吐く。

大丈夫そうだな、やはり心配のしすぎか

「ああ、いやあ困ってなければいいんだ、じゃあまたな」

「・・・」

笑顔でドアを閉めようとする鏡治、

しかし真由の表情は一変して暗くしぼんでしまつ。

「う……」

「？」

真由は肩を落としてソファに戻っていった。

鏡治は少し……どうしても気になってドアを少しだけ開けて観察してみる。

目に入ってくる光景。

真由はソファに体育座りで座ると、寂しそうにテレビを見ていた。

「……」

『お前、本格的に危険だな』

鏡治はガタツクゼクターを軽く叩くと、意を決してドアを開く。そしてそのまま一気に真由の所まで走っていき、勢いよく飛びついた！

驚く真由に鏡治はニヤリと黒い笑みを浮かべ、手を伸ばす！

「元気がない子はこうだ！ こちよこちよ！」

「！！！！」

鏡治は真由の体をくすぐっていく。  
直ぐに笑い始める真由。

「ふにゃふにゃ！」

「ホレ！ こちよこちよこちよ！」

「キャハハハハハ…もうツ…やめてえ…！！」

笑顔になった真由を見て、鏡治は手を離す。



そして笑顔で真由に話しかけた。

広い部屋だ、一人じゃ確かに味気が無い。

「やっぱ、俺もこの部屋にいていいかな？」

「・・・！」

「何かして、遊ぼっか？」

「う…うん！」

真由は満面の笑みを浮かべると、首を大きく振るのだった。

『・・・』

「いっせ、あめ……」コシを見るような目はやめてください」

しばらく真由と遊んでいたら、神也からゼクターを通して連絡がきた。

内容は大きく分けて三つ。

一つ目は、創英のマインドコントロールを行う機械が予定より早く完成しそうという事。

もう一つはこの近くにドレイクがやってくるという事だった。

最後にセンサーはまだ残っていると鏡冶に伝える。

「……ドレイクか、  
妨害電波を流してくれているらしいから、助けられるかもしれない」

「……」

確か、神也の話ではドレイクに選ばれた風島和希かざしま かずきと言う人物はフ  
アッションデザイナーだと聞く。自分はこう言う話には疎いが、神  
也の話によればそこそこな成功者らしい。

しかし、その夢を追っている途中に創英によってインセクトにされ  
たと言う訳か…

他人の夢を邪魔してまで、創英は自らの野望を達成しようと言うの  
か。  
しかし、どうだろうか…神也は知り合いだったからこそ自分の言葉  
に耳を傾けてくれたが、自分は風島和希とは何の面識もない。果た  
して上手くいくのか…

「！」

部屋においてあった雑誌を適当にめくってみると、  
彼がデザインしたという服が載っていた。

彼は洗脳されなければ今ももっといろんな服を生み出していただろ  
うに

「…ッ」

「鏡冶くん…あのね」

「え？」

真由は少し不安そうに鏡冶の服をつまむ。

「ボクは…どうしてればいいの…?」

「え？ 真由ちゃん…は、ここで待っていてくれると…」

真由は小さく頷くが、表情は暗い。  
その意味が、なんとなくだが鏡治には理解できた。

「ボク」

「真由ちゃん、外は危険だから…」

「どうか分かってくれ」

「うん。うん。ごめんね…」

きつとついていきたいのだろう。  
なんとなくそう思って声を掛ける。

真由も分かってくれた様なので良しとしよう。  
さすがにクロックアップを発動されてしまえば真由を守りきれぬ自信はない。

真由だけは守りたい、鏡治は心を鬼にして真由を部屋に残すのだっ  
た。

「あいつ、鏡治くん…」

「ん？」

「その人はね…お洋服が好きなんだよね」

「え？」

鏡治は手に持っていた雑誌を見て、  
真由が風島の事を言っているのだと理解する。

確かにそうなのだろう。

きっと風島は服が、この仕事に誇りを持っているのだと悟る。

「じゃあ…あのね…ちょっとイジワルんだけど…」

そう言っつて真由は思いついた作戦を言っつてみる。  
自分がされたらとても嫌なことだろう。

「そ、そうか！」

成る程、確かにこの作戦なら…！

「いけるかも！　うおおおっ、真由ちゃん、ナイスだぜ！」

ああ、そつだ。最高だッ！！」

鏡冶が笑顔に変わるのを見ると、真由も満足そうに微笑んだ。役に立って嬉しい。

真由も自分が守られるだけなんて嫌だったのだろう。

少しでも何か力になりたいと思っていたのかもしれない

鏡冶はその作戦を遂行するため、ガタツクゼクターに通信を頼む。

「もしもし？ 神也か？」

「ちょっと悪いんだが用意してほしいモンが」



第126話 HOTEL SPEED LOVE（後書き）

とりあえず今期のアニメを一通り見ました。

どうかな、気に入ったのはZERO、P4、WORKING、！！

…辺りかなw

結構コンビで戦う感じの作品が好きですかね

ガッシュは最高でした。

まあいいや、ではこれで。

次もよろしく！

第127話 COOPERATION SPEED LOVE(前書き)

はい、更新です

次は…まあ水曜か木くらいかな

ドレイクとの対峙

ではございませぬ！

第127話 COOPERATION SPEED LOVE

「・・・」

「ガタツク、見つけたぞ…変身」 『HENSHEIN』

ホテルの近くにある広場で、ガタツクとドレイク。  
マスクドフォームの二人は対峙し合う。

互いに飛び道具を所持している為、どちらかがいつ発砲するのか。  
そしてその隙をつけるんかどうかが大切だろう。

だがしかし、それは唐突だった。

ガタツクが変身を解除したのだ。  
なんのつもりなのか、ドレイクは銃を構える。

「！」

マインドコントロールを受けているにも関わらず、ドレイクの手が止まった。

そう、変身を解除して現れたのは鏡治。

何もおかしい事はない。ドレイクは簡単に鏡治を射殺できただろう。

しかし問題はその鏡治の服装だった。  
見覚えがあるなんてものではない。

それは自分がデザインした…！

「風島さん！ この洋服、見覚えありますよねッ！」

「・・・」

そう、風島和希デザインの洋服。  
自分が情熱を、想いを注いだ作品が目の前にある。

ドレイクの心が激しく揺れた、銃を構える手が震える。  
そうだ、今無防備な鏡冶を撃てば任務を完了できるだろう。

だが、それは自分の洋服を撃つ、血に染めるといふ事でもある。

誇りなのだ、自分の証明でもあった。

努力、希望、夢、挫折、喜び、悲しみ、誇り。

なにより…魂がある。

アレを、撃つ？

それは今までの自分を否定する事ではないのか？

気がつけばドレイクは銃を地面へと落としていた。

いつからだろう？ 何か、大切な事を忘れていたのは…

「風島さん、いや…貴方は、誰ですか？」

「あ…」

ドレイクは変身を解き、その場に倒れ込む。

俺は誰だ？

「貴方はッ、人を傷つける銃を構える男ではなくッ！

人に喜びを着せる男だ！

そうでしょうッ！ 風島和希さん！！」

「！」

風島の眼に光が灯った。

そして、彼はまっすぐに…

凜とした瞳で立ち上がる。

「そう……だな。俺は銃を向ける仕事じゃなく、服を作る仕事してるんだよな」

『……目覚めましたか、風島さん』

彼の横を飛ぶのはドレイクゼクター。

彼もまた妨害電波を流していたゼクターだ。  
つまりはもう戦う事もない、鏡冶は安心したようにその場に座り込んだ。

真由が立ててくれた作戦は成功だったようだ

「はあ……」

「っしゃあああああ！ やったぜ真由ちゃんッ！」



鏡治はその場に倒れると、拳を空へと突き上げたのだった。

『ミーはいつその事、皆でブレインタワーに乗り込んだほうがいいと思つのです』

『いや、少し前に僕達とは違うインセクト達がやってきましたが、

電磁バリアの前に撤退した模様です。

やはりブレインタワーは防御が堅い、僕達だけでは無理でしょう』

違うインセクト？

ガタクゼクターはそのことをドレイクゼクターに問いかける。

どうやらやってきたのはデイケイド達の様だ、真由が捕まっている  
と知っているのだろう。

一刻も早く真由を学校に届けなければ……

それと、もう一人インセクトが来たらしいが、その情報は全くと言  
っていい程無かった。

どうやらそのインセクト……

つまりライダーもブレインタワーの前に屈したのだが……

『どちらかと言うと鏡冶の叔母に協力するべきだな。

創英は確かマインドコントロールの機械をもうすぐ完成させるん  
だろう？』

ガタツクゼクターの言葉にドレイクゼクターは頷く。  
部屋に緊張が走る。

『大規模洗脳装置、通称『赤い靴』』

童話の通り足首を切られない限り自分の意思とは裏腹に動いてしまっ  
よう。

つまり創英さんの言いなりになるように洗脳されてしまうのです  
よ』

ホテルでは洗脳を解除された契約者とそのゼクター、真由が話し合  
っていた。  
神也も収集命令を何度も無視している。

そろそろ、いやもう裏切った事がばれただろう。

神也は発信機を完全に破壊するとホテルに身を潜めた

「俺ももう壊してしまったからな、創英は気づいただろう」

「でも、もう三人も裏切ったと知れば創英さんも焦るんじゃないかな？」

鏡冶の言葉にドレイクゼクター同意する。

赤い靴が発動しようが、まだ創英にはリコンファームや自分達。

そして何より真由達の仲間がいる。

今、創英は非常に焦っているだろう。

まして、赤い靴を破壊するという直接的な手段もある。

『ですが、それは反対に手段を選ばなくなる…』と言う事でもありません。

もう創英さんは全力で邪魔な僕達を消そうとするでしょうね。』

『それで、ホッパーブラザーズも動いてくれればいいんだが…』

三人と三体はため息をつく。

街の人間にカプセルから降りると言っても聞かないだろうな、そればかりか何とかする機械を作れといわれるに決まっている。

「実は、もう僕は言ってみたよ。

鏡冶の言う通りだったけどね結果は……

ちよっと僕も創英の気持ちがあったモンさ」

「でも、それで創英さんのやるうとしてる事を認めちゃならねえ！  
うおおおおおお！ 絶対認めねえからなッ！！」

三人は頷く、なんとかして創英のやるうとしている事を止めなければ……

やはり赤い靴の破壊が一番か、  
リコンファームを使わなくとも元を断てばいい話だ。

「それに、まずはとにかく真由ちゃんを学校に帰してやりたい。  
きつと皆だつて心配してるだろうしな……特に、お兄ちゃんとか」

鏡治は真由に微笑みかける、真由もそれを見てニッコリと笑った。

「よし、じゃあまずは真由ちゃんを学校へ送ろう。  
センサーはまだ残ってるかもしれないけど、一気にクロックアップで駆け抜ければ……」

だが、ここで一つ問題が浮かぶ。  
真由は学校の場所を覚えていないのだ、それではどこに連れて行けばいいのかすら

『このホテルからは見えないのですか？』

「ん……どだろ……」

その提案に乗ってみる。

最上階に行き、窓から学校が見えないかどうかやってみる。

「あ！」

しばらくは悪戦苦闘していたが、ついに見つけることができた。

尤も、真由以外はその学校を確認する事ができなかった。  
感じられない、存在さえしない様に鏡治達には見えただろう。

だが、そこに存在しているのだ。  
不思議な話である。

ともあれ、目的は決まった。それぞれは領き立ち上がる。

しかし、外を見てみればもう大分暗くなってきた。

闇に隠れて動けるのは利点ではあるが、逆にゼクトルーパーはかなりの擬態力を持ってしまう。

視界が制限されてしまうのは厳しい。

一旦今日は休んで明日、決行しようと言う事になった。

「俺はBARにでも行ってくるかな、お子様はさっさと寝るよ」

『では、おやすみなさい』





『もうミーンは食べられないでじんすう…ZZZZZ』

「・・・」

『なんでもう寝てんだよッ！ 数秒前まで起きてたじゃねえか！  
なんで機械のアイツまで寝てんだよッ！  
なんで床で寝てんだよおッッ！！』

『おかしいだろおおがああッ！』

鏡治は苦笑して神也をベッドまで運ぶのだった。

バルコニーでは真由が空を見上げていた。  
相変わらず月も星も見えない空、真由はその空をじっと、ひたすら  
に見つめていた…

2746

「どうしたんだ真由ちゃん。さあ、中に入ろっぜっ」

「……ん」

しかし、真由はその言葉には従わずバルコニーに備えられたベンチ  
に腰掛けた。

鏡治は少し戸惑ったものの、頷き真由の隣に腰掛ける。

「ねえ…鏡治君。ボク…心配されてるのかな」

「え？」

「ボクね、ママがいないの…小さい時に死んじゃったんだって」

「え…」

「それでね…パパにも…愛してもらえなかったんだ…」

真由は寂しそうに、小さく呟いた。

彼女の胸にあった悲しみ、それを鏡治に打ち明けると言うことは何よりも信頼の証。

鏡治はそれを感じて嬉しくもあつたが、同時に胸が苦しくなる。もう少いで、目の前の彼女を殺めてしまふところだったのだ。

その重さが改めて鏡治の心を打つ、重大さを認識させる。

「パパに言われたの…お前は……………」

真由はそこから先の言葉をいえなかった。

代わりに眼からは大粒の涙が溢れ、地面に落ちる。

唇をわなわなと振るわせる彼女はとても弱々しく、儂く、寂しげだった。

ほんの一瞬眼を離したら…消えてしまいそう。

弱い炎のような少女、鏡治はその炎を消したくないと、切に思う。

彼女は父に何を言われたのだろうか？

きっとそれは悲しい事、辛い思い出なんだろう。

「真由ちゃん！ 君が何を思っているのか、俺には分からない。俺と君は出会ってまだ二日くらいの関係だからね。」

でもね、真由ちゃん……君のお兄さんや、お友達は違うよな」

「え……」

「お兄さんや友達は真由ちゃんと、たくさん時間を過ごしてきた。俺は分かる、いや誓ってもいい。」

君のお父さんがどうなのかは分からない。  
もしかしたら君に酷い事を言ってしまったのかもしれない。

でもね、君のお兄さんやお友達は本当に君の事を大切に思っている。絶対に！」

でなければ、あんな顔はしない。

自分が彼らと戦った時の記憶がよみがえる。

震える足、ああ……自分は本当になんて事をしてしまったんだ。  
何をすれば償えるのか、どうすればいいのか

洗脳されていたんだから仕方ないと思う心もある。  
だけど、もし……もし仮に誰かの命を奪っていたら

自分は、どうしていたんだろう。

「…本当？」

「ああ！ 約束するぜえ！

だって、お兄ちゃんは家族じゃないか！」

そう言って鏡冶は真由の頭を撫でる。

真由は静かに微笑むと、目を閉じて鏡冶にもたれかかった。

目が半開きになって時々力が抜けてる所を見るに、もう眠いんだろ  
う。

「ああ、そう言えば神世の時、ありがとうな」

「え…？」

「真由ちゃんが協力してくれたからアイツの自我を取り戻すことができたんだ。」

ああ、そうさ真由ちゃんのおかげだ！」

「うん……ありがとう、鏡治……くん……」

「……」

「……」



「あれ、寝ちやったか…」

鏡治は頷くと、真由をベッドに運ぶのだった。

第127話 COOPERATION SPEED LOVE(後書き)

いや、しかしね大文字さんマジぱねえっすわww  
曲のタイミングといい、カッコよかったです

いやーアレはズるいなww

P4とかもそうですけど

音楽の力はやはり魅力を増やしますね

この作品も皆さんのたくましい妄想力で

BGMと挿入歌をバシバシかけちゃってくださいw

ではこれで、次もよろしく！

第128話 BOXING SPEED LOVE(前書き)

はい、更新ですね  
まあ次は土曜かな

「真由を学校に運ぶ……が」

ではごっごぞー！

第128話 BOXING SPEED LOVE

翌日、空は深く濁っていた。

曇天、雨は時間を重ねる毎に勢いを増していく気がする。

こういう日はあまり外に出たくない気分になる。

だが我がままは言っていない、早く真由を学校へ届けないと……

それだけが心の中で燻っていた。

「じゃあ、行くぞ」

「はいー」

風島の言葉に鏡治達はうなづく。

真由は鏡治に抱えられており、不安と期待を混じらせた表情を浮かべ

る。

学校に帰れる。兄に、皆に会える

かもしれない！

「「「変身！」「」」

三人は変身してキャストオフ、クロックアップを発動させる。  
そして一気に走り出した！

雨粒は球体のように見え、真由は今まで見た事のない世界を体感する。

永遠に見える美しい世界。

しかし一瞬で儚い世界だ。

「！」

少し走って、本格的に街に入ろうとした時だった。  
前に一人のインセクトがたたずんでいる。

パンチホッパー！

「クツ、ゼクトルーパーもいる可能性が高いな！」

「どっつするんだあい？ 鏡治！」

三人はすこし減速して作戦を立てる。

向こうは「こちらに気がついている？ いない？」

一瞬の判断ミスが命取りになる。

それを判断してか、鏡治はすぐに決断をする

「…ッ、風島さん！ 真由ちゃんをお願いします！」

「！」

ドレイクは一瞬、考えた後に頷く。  
そして真由をガタツクからあずかった。

鏡治を囮として置いていく。  
抵抗はあったが、迷っていられるほどの時間は無い。  
その作戦を受け入れ、ソードとドレイクは決断する。

真由はガタツクに向かって手を伸ばすが、  
すぐにガタツクの姿は小さくなって見えなくなってしまった。

「……」

「……」

対峙し合うガタツクとパンチホッパー。

神也と風島からの情報によると、パンチホッパーに選ばれたのは山やま内俊英、  
うちしゅんえい

ボクサーになるのが夢だった高校生らしい。

自分とは違ってリアルに夢を追いかけていた俊英、その姿勢に尊敬を抱かざるをえない。

だからこそ鏡冶は、その夢を諦めてほしくはなかった。そして何より、思い出してほしかった。

ガタツクはカリバーをその場で投げ捨てると、拳を構える！



パンチホッパーもまたそれを理解したのか、構えをとった。  
開戦だと言う事、ホッパーは妨害電波を流してはいたらしい。  
多少乱暴だが、実力行使しかあるまい。

「行くぜ俊英いいいいいいいい！」

俺の拳を超えてみやがれええええええッ！！」

雨粒を切り裂き、ガタックはその拳をパンチホッパーに叩き込む！

「ッ！」

だがパンチホッパーは、それを簡単に受け止めると

反撃の一発をガタツクへと叩き込んだ！

「ッ！！」

重い、自分と体格の変わらないパンチホッパー。  
なのに何て重い拳なんだ

まるで巨木にぶつかつた様だとガタツクは呻く。  
ゆるる視界、ふらつく世界にさらに数発叩き込まれる。  
倒れそうになる体を叱咤し、ガタツクは踏み込んだ。

突き出された拳を体をひねるようにして回避すると、  
お返しにそのままストレートをパンチホッパーにぶち当てた。

「・・・」

こちらもまた倒れそうにこそなるが、踏みとどまりすぐに反撃をしかけてくる。

両者の拳は互いにぶつかり合い。

激しい衝撃を生み出す！

「へッ！　　すげえパンチだ！

効いたぜえええええッ！！！」

「・・・！！」

「グッ！！！」

アッパーがガタツクの顎を揺らす。

続いて右フック、左のジャブで連打していくパンチホッパー！

ガタツクの上半身は激しいダンスを踊るかの様に舞っていた。

「うおおおおおおおおおおおお！！」

ガタツクが苦し紛れにだしたパンチを体を思い切り反らし回避すると、そのまま渾身の一撃を叩き込んだ！

「うっ…ガフッ！！」

『Clock Over』

ついに倒れるガタツク。

パンチホッパーは止めを刺そうと必殺技を発動する

『R i d e r P u n c h』

「…ああ、すげーパンチだ。やっぱり努力してる人の拳はでかいな…」

ガタツクは素早く立ち上がると、また大きく振りかぶり殴りかかろうとする。

だが、ライダーパンチの前では無力と言ってもいい。

ガタツクは押し合いすらできずに吹き飛ばすと、そのまま鏡冶へと変身が解除された。

『おい！ 大丈夫か！？』

「ああ…ッ！ 問題ねえよ！」

鏡冶はガタツクゼクターに合図を送ると

そのまま尚、拳を構えた。

驚くゼクター。当然だ、生身で勝てるわけがない。  
死ぬようなものなんだから。

だが鏡冶はあくまでも笑っていたのだ、それが余計不思議で仕方がない。

「ボクサーの拳つてのは凶器なんだろう？」

『？』

挑発的な笑みを浮かべる鏡冶。  
もちろんパンチホッパーはそんな事を気にする素振りすら見せずに  
コチラに向かってくる。

だが、数歩歩いたときだった

「・・・」

パンチホッパーの動きが止まる。  
鏡治はそれを見計らったかのようにもう一度笑うと、大声を上げて  
言い放つ。

「ああそうさ！ ボクサーには誇りがある！  
振るうのは凶器じゃない、魂だッ！

それが許されるのは…試合だろうッ！！

そうだろ？ 俊英いいいいッ！！」

「・・・」

パンチホッパーはなんの前触れも無く、唐突に変身を解く。

まさにノーリアクション。動揺の素振りも、何も見せずもう一度拳を構える。

『なッ!?!』

『これは……』

弾かれたホッパーゼクターは体勢を立て直すと、俊英を見る。別に妨害電波をながしていた訳ではない。

現に今も洗脳は続いており、命令である鏡冶を殺すと言う事を純粹に遂行しようとしている。

にもかかわらず俊英は変身を解除した。

何故だ？



『試合は対等に行うものだからな』

『なに……？』

ガタツクゼクターは素早くそれを理解した。

俊英は生身である鏡冶に合わせる為に、自らも変身を解いたという事か……

これは戦い、ケンカじゃない。

ケンカじゃ拳は使えないからだ。

彼にとってはこれは試合、向こうが生身ならフェアプレイには変身を解除する必要がある

『完全に洗脳されているというのに……』

『これが人間の底力なのかもしれんぞ』

ホッパーゼクターはガタツクゼクターの言葉に沈黙する。  
過去に人間に協力した時は確かにこのような人間が多かった。  
限界と言う物を知らぬ不思議な存在。

そんな人間に期待を覚えてしまっていた。

だがそれは過去の話。

今は皆、救いようのない馬鹿ばかりと思っていたが…

『俺達は……焦ってしまったのかもしれないな』

『……』

目の前では生身のまま二人が殴りあっている。

それを見て、ホッパーゼクターは何を思うのだろうか…？



俊英も負けていない。

ステップと激しい連打で鏡冶を押ししていく。

舞い散る血が雨に溶けて消えていった。

雨が二人の体を冷やしていく、だが反対に彼らの心は一撃を受ける度、一撃を与えるたびに熱く燃えていく。

「お前の力はそんなもんかよおおおッッ!!」

「ウラアアアアアッッ!!」

「……ッ」

鏡冶の右フックがクリーンヒットする。

打ち込むごとに俊英の瞳の奥が光るのは気のせいだろうか？

いや、そんな余計な事を考えるのは無粋だろう！

ただ、切に打ち込む！

拳を      ツ

魂を      ツツ

叩きつける！！

その様子を二体のゼクターはただひたすらに見つめていた

『焦った…？』

『ああ、今この世界には墮落した人間しかいないと決め付けていた…』

『愚かなのは、俺達も同じじゃなかったのか？』

『ゼクターは人間の道具、それを忘れ感情的になってしまった…  
僕達が愚かか…』

『いや、そうじゃない。』

創英も、俺達も…見失っていたのさ。

人間という存在を』

『…人間か、不思議な生き物だ』

「うおおオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

「・・・」

鏡治の拳がしっかりと俊英をとらえた。

決める！

鏡治は大きく踏み込んで持てる力の全てを拳へ込める！！

「お………」

『…』

自分から声なんて出さない筈なのに

「……おおおおおおおおおおおッ！」

「じらああああああああああッ！」

クロスカウンター！

鏡冶と俊英は魂の十字架を掲げてぶつかり合った！



第128話 BOXING SPEED LOVE(後書き)

はい、まあ次から展開が変わってきますかね

なんかウルトラマン、ライダー、ガンダムがコラボする  
ゲームが発表されましたね

どうなのかな、欲しいですけどねw

ではこれで、次もよろしく!

第129話 OBSTINACY SPEED LOVE(前書き)

はい、更新です。

あのー、まあ基本的には0時投稿なんですけど

ちょっと変わる場合もあつたりします。

今回はそんな感じですかね

「鏡治の前に現れた人物」

ではござい！

第129話 OBSTINACY SPEED LOVE

「・・・」

互いの拳を頬に受け、沈黙する二人。

そしてシンクロするように同時に地面へ倒れる！

「おい！ 鏡治、大丈夫か！？」

「・・・」

ガタツクゼクターは鏡治の周りを飛び回る。

頬を突いたり揺すったりして起こそうと奮闘するガタツクゼクター。  
それを見てホッパーゼクターも俊英の元へ移動する。  
何故か無性にそうしたくなっただった…

「  
ッ」

しばらくして、鏡冶が眼を開けて起き上がる。  
まだ顔が痛むのか、表情は硬いが意外にもその口は笑っていた。  
簡単に言っていると、満足そうだったのだ。

「…ッ、効いたぜ…！」

ああ、そうだ。あのパンチは心が籠ってた…」

「……それは、どうも」

『！』

寝転んだまま俊英は眩く。

洗脳が解除されていた事にホッパーゼクターは動揺していた。妨害電波を流していたら領けるが、ただ殴りあっただけで洗脳が解除されるなどおかしな話ではないのか！？

「俺の夢と誇りはこんなちやちな洗脳じゃくずれねえ」

『夢と…誇り？』

俊英はホッパーゼクターを掴むと、そのままパンチホッパーに変身する。

そして鏡治を見ると、一言だけ礼を言う。

頷く鏡治、言葉は少ないが互いにそれぞれ決着がついた様だ。

「…洗脳装置、赤い靴の完成は近い。気をつけろ！」

『R i d e r J u m p』

そう言い残してパンチホッパーは跳んでいく。

鏡治はため息をつくと自らも立ち上がった。

足がふらつく、だが早く神也達に追いつかなくては…

鏡治は気合を入れるとよろよろと歩き出そうとし

「見つけたぞ」

「え？」

衝撃、鏡冶の体が宙に舞う。

景色が二転、三転し鏡冶は地面へと叩きつけられた！

思わず苦痛の声を漏らす彼を、一人の男が見下す。

「新意、鏡冶だな？　今、アイツが言ったことは本当か？」

「ぐっ　　っう…あッ!？」

雨が激しさを増していく。

鏡冶は水でばやける視界を凝らせ、なんとかその男の顔を確認した。

鈍る思考、冷えていく体。

「あなたは!」

しかし鏡冶の表情が明るいものになる。

そう、彼を見ていたのは

天王路真由の兄、双護だった。



「あの…前は本当にすいませんでしたッ！  
俺…貴方や真由ちゃんに酷い事しちゃって…!!」

鏡治はすぐに体勢を立て直し双護に頭を下げる。  
無言でそれを見ている双護、何か不気味な雰囲気を感じた。

どうでもいい、そんな瞳。

「…真由は、今どこに？」

「あっ！ はい！

学校に送り届けてあげる途中だったんすよ！

お兄さんの話は真由ちゃんから聞いています!!」

双護は尚、何も言わない。

代わりに先ほどの質問を投げかけた、

赤い靴がもうすぐ完成すると言うのは本当なのかと…

鏡治は首を縦に振る。

大規模洗脳がもうすぐ行われてしまう、真由を送ったらそちらを止めようと決意していたのだ。

2785

「リコンファームもある事だし、希望はありますね！」

「・・・」

「創英は洗脳した人を兵士にする事すら考えてるでしょう！  
ああさせね……………え？」

そこで鏡冶は気づく、よく見れば双護が傷だらけじゃないか！  
鏡冶は慌てて双護に駆け寄る。

「どどどどうしたんです？ 大丈夫ですか！？」

「……………」

双護はその言葉には答えない。  
淡々と自分の思いだけを繋いでいくだけだ。

間に合わなかった…とか、

もう少し時間があれば…とか、

俺はどうすればいい？ とか、

鏡治には分からない質問を淡々と口にしていく。

もしかしたら鏡治にすら言っていない、自問なのかもしれない。

鏡治はその異質な雰囲気戸惑ってしまう。

その後もしばらく双護はその自問を繰り返した後、鏡治に向けて咳いた

「リコンファームは使わせない」

「え…？」

雨音がその言葉をかき消した。

だからうまく聞えなかったが、リコンファームを使わせない？

あっけにとられる鏡治。双護は構わず続ける。

「俺達がこの世界をクリアする為には創英の野望を邪魔する必要がある」

あの案内役らしい二人がわざわざ自分の前に現れてくれたのは助かった。

双護は思う。

怪しい二人だが疑う意味もない、ゼノンとフルーラは双護に密かにコンタクトをとっていたのだった。クリア条件を満たさない限り世界を移動する事はないと…

「あ…えとっ、世界がどうのこうのってヤツ？」

「な、成る程！ 俺も協力しますッ！」

「創英のところへ乗り込んでみたが……赤い靴を破壊する事はできなかった。」

街の人間にもカプセルを降りるように言ったが…

誰も聞く耳を持たない」

「乗り込んだって！？ だからそんな傷だらけ…で。」

そ、創英はもう赤い靴を完成させてるんでしょうか？」

「ああ、だから真由を起動スイッチにしてリコンファームを発動するしかないのかもしれない」

「まあそれが一番いい方法ですから…ね」

双護は首を振る。

「リコンファームは使わせない。絶対にだ！」

「ど、どうしてっ!?!?」

「リコンファームを使えば真由の失われた記憶が復元されてしまう…」

それだけは……さげなければ」

「記憶…?」

双護は唇を噛む、凄く強い力なのか血がにじみ出て地面へと落ちた。水たまりにとける鮮血。

鏡治は軽い恐怖すら覚える、それほどまでに双護のオーラは凄いものだった。

このオーラは一体……

「お前が今まで真由の面倒を見てくれたのか……？」

「え！？ あ……まあ」

「すまなかった。妹が迷惑を掛けて……」

「いやあ全然そんな事は……」

「だが」



そこで双護は言葉を止める。

驚きで眼を見開く彼に鏡冶は気づくと、その視線を追う。

そしてその先にいたのは

「おにい…ちゃん？」

「なっ！！ ま、真由ちゃん！？」

真由だった。何故、彼女がここに…

「あ…つと、えと…」

後ろにはサソードがいるではないか、彼は気まずそうに口を開いた。どうやら真由は自分の事が心配で戻ってきてくれたのだ。

だが、結果としてそれが兄妹の再開となった訳だが…どうにも空気が悪い。

普通感動の再開なら抱き合って喜ぶもんだが、今真由と双護の間には何か違和感のようなモノがあった。

真由はそれを消すために兄に話しかける。

「お、お兄ちゃん…？」

「…真由、どうした？」

「どうして……ボクはリンゴファームを使えないの？」

「ま、真由ちゃん！リコンファームだぜ！」

普段なら笑顔になる双護も今は無表情だった。  
いや、むしろ真由を睨んでいたのかもしれない。

「真由、お前は何も心配しなくていい。この世界はきっと大丈夫だから」

「で、でも…」

「でもじゃない、大丈夫。大丈夫だから…お前はもう学校から出るな。」

リコンファームには近づくんじゃないぞ」

「ど…どうして…？ ボクだって…皆の役に…立ち、たい…よお」

真由は引き下がらなかった。

ずっと心の中では役に立ちたいと思っていたのかもしれない。

双護の言う事ならなんでも聞いていた真由、  
しかし今日初めて彼女は双護に抵抗した。

それは喜ぶべき事なんだろうか？

「ツツツ！…！」

そしてそれが双護にとって、どんな感情を与えたのだろうか？  
はつきりと、彼は真由を……愛する妹を睨みつけた

「ま、まあまあ！ お兄さん！  
ここは抑えよう！抑えましょ！ああ、そつだ。抑えるのが一番だ  
ぜ！ははは……」

鏡治は二人の間に割ってはいる。なんか険悪な雰囲気になってない  
か？

雨は相変わらず彼らを濡らしていく。  
それでも真由と双護はじっと見詰め合って……いや睨み合っていた。

「ボク…嫌だ！」

「何？」

「ボク…ッ！ リコンファーム…使っ！」

「思い出…すから…」

「…！」

双護の表情からついに笑みが消えた。  
うわべだけでも浮かべていたであろうソレを殺して、双護は真由を  
睨む。

「真由ッッ!! お前…!!」

「使うもん…ッ!!」

「駄目だッ!絶対に許さないぞ!!」

「知らないもんッ!!」

にらみ合う両者、ついに双護は舌打ちをして歩き出した。

止めにはいる鏡冶を無視して真由に近づいていく。

「どうしても…俺の言う事を聞いてくれないんだな？」

「聞かないもん！ 絶対…ッ、絶対に聞かないもん！」

双護は眼を閉じる。

そしてもう一度開けたとき、その瞳は驚くほどに冷たいモノだった。鏡冶は猛烈に嫌な予感を感じる、何か危険な感じがする。

それを危惧してもう一度双護を止めに入る。

「悪いな…」



「え？」

何故あやまるんだ？

そう感じた時にはすでに宙へ吹き飛ばされているところだった。  
さっきもそうだ、自分は何に吹き飛ばされたのか？

目を凝らす、すると見えた。

赤い何かが。

第129話 OBSTINACY SPEED LOVE (後書き)

多分これ四時くらいに投稿されていると思います

結構まだカブト編はつづくかも……？

ではこれで、次もよろしく！

第130話 ANGER SPEED LOVE (前書き)

更新ですね。はい

ムービー大戦見たいですわ本当

ブラカワニが再登場するって聞いたんですけど本当なんですかね？

あと2号のカラーリングが少し変更されましたね

そっだな、僕も二号はあっちのほうがじっくりくる…かな？

「現れた双護。だけど……」

ではどうぞ！

あと、後書きで少しフォーゼのネタバレ？書いてます  
注意してください

第130話 ANGER SPEED LOVE

「鏡治君ッ!!」

「真由……」

地面へ叩きつけられる鏡治。真由が叫も叫ぶしかし、相変わらず双護の目は曇っていた。

真由を直視する事無く、双護はうつむくだけ。

「何て事……するの!? お兄ちゃん!」

「ッ!! 神也! 真由ちゃんを連れて逃げる!!」

「ええ!?!」

鏡治は見た、赤いソレ…カブトゼクターを！

何かおかしい、このままでは危険だ。

サソードは少し戸惑ったが、自らもそれを悟り真由を抱えて走り出した。

今の双護は『普通』じゃない　　ッ

「おい、邪魔をするな」

双護は飛翔してきたカブトゼクターを掴み取ると、いつの間にか腰に装備させていたベルトへとゼクターを装填する。

ゼクターを手に入れていた？

そんな事を考える余裕すらない。

変身する理由がないのに、なぜ彼は今変身した？

それは　　ッ

理由があるから？

インセクトは兵器だ。兵器は誰かを傷つける、ならば……  
双護は誰かを傷つける為に変身したのか!?

「変身…!」 『H E N S H I N』

「ゲホッ、ゲホッ!!変身ッ!」 『H E N S H I N』

ダークカブトは素早くキャストオフで装甲を吹き飛ばすと、クロックアップを発動させる。

だが、それはガタツクも同じ。  
ガタツクはダークカブトを落ち着かせようと前に出た。  
しかし彼はそんなガタツクを躊躇なく殴り飛ばすと、彼の武器であるクナイガン。

つまり銃を真由達へと向けたのだった。

「…ッ！！　おい！　ちょっと待ってくれよ！

何やってんだよッ！」

「あのサソリの足を撃つ、邪魔をすれば貴様も同じ目にあつぞ」

「なっ！！！」

ガタツクもついに限界を迎える。

自分もあんな事をしておいてどうかとは思ったが、我慢ならなかった。

親友が撃たれる？　それに

ガタツクはダークカブトの足を掴んで邪魔をする！

「オイッ！ 分かってんのか!？」

真由ちゃんに当たるかもしれないんだぞ!!

それに神也が何をしたって言うんだよッ!!

ああ、そうさ。アイツは撃たれるような事はしてないッ!

誤解があるなら言ってください!」

ガタツクはダークカブトが銃を降ろしてくれると思っていた。

いや半ば確信していたのかもしれない。

確かにサソードになら威嚇を込めた意味で一発くらいは……

だけど、真由は生身なのだ。

防御力が上がっているとはきいた、しかし生身でクナイガンを受ければ痛いではすまないかもしれない

妹に銃弾が当たるかもしれないのだ、そんな危険な事をやる訳がない。

そう、確信していたのに……



「真由に…当たるかもしれない？」

確信していたのに…

「それならそれで構わない……………ッ」

「ッ！！！！！！」

何で…そんな事言うんだよ……

「ギンギン…ッッ……」

真由の悲しそうな顔が脳裏に現れる。

『ううん。いいの、ボクも分かってるんだ。  
だ…から……きつと、お兄ちゃんはボクを…』

恨んでるんじゃないかって……怖いのに…』

ぞうっッッ…ッッ…

「何でだよッッ…！ 真由ちゃんは大切な家族だろうがあああッ！」

ガタツクはダークカブトの銃を弾こうと掴みかかる。  
だが見事なカウンターを決められてしまい、射撃されてしまう。

火花が装甲から散り、ダークカブトはそのまま蹴りをガタツクへ浴びせる。

よろける彼をもう一度射撃すると、ダークカブトはソードを追うために走り出した。

「…ッ、お前」

「グッ!!」

だが、鏡冶は離さない。

足を掴んでダークカブトを妨害する！

目障りと言わんばかりに蹴りを浴びせられるが、それでも離さない！  
どうしても納得できなかつたのだ。

鏡冶は真由からいるんな双護の話しを聞いた。

それを話している時の彼女はとても楽しそうだったのを覚えている。

だが、今双護の言葉を真由が聞けば…彼女はどう思っただろう？  
考えたくもない、だから無性に腹がたつた。

別に兄妹喧嘩くらい何とも思わない。だけど、これは喧嘩じゃない！

どうしてこんな事を？

家族じゃないのかよ！！

「当たったらそれはそれで構わないッ！？」

ふざけんなよッ！　なんだよそれ、ああそうだ、おかしいだろッ  
！！

真由ちゃんのことがか大切なんだろ！？

だったら  
「

「ああ、大切さ」

ぐっと、拳をつかまれた。  
ガタツクはそれを弾こうとするが…できない。

できなかった…

「ッ…！」

「大切だよ、真由は…俺にとってな。俺の命より大切な…家族だ」

「だったら…なんでッ…」

ダークカブトは仮面越しにガタツクを睨みつける。

それはまさに剣、仮面越しだということのになんて鋭いんだ…

ガタツクは思わずひるんでしまう。

その仮面の裏にある意志を感じて…怯えてしまう　　ッ

「俺は、真由を愛している。家族としてな、だが…」

「！」

それは小声、おそらくガタツクに聞かせる為ではなく、  
自分に思い知らせる為だろう。

「真由香を愛した事は…一度もないッ!！」

ダークカブトはガタツクを地面へと叩きつける。  
そして思い切り踏みつけて動きを封じた。

苦痛の声を放つガタツクを無視してダークカブトは銃をガタツクに  
向けて放つ。

一発

二発ッ

三発ッ!

激しく火花を散らすガタツクと、それを見つめるダークカブト。

「俺は、真由を守る。どんな手を使ってでもな…」

それができないなら、悪いが真由には死んでもらう」

「何ッ…だとおおおおおおおおおおッ！」

ガタツクはダークカブトの足を弾くと素早く転がって距離を取る。  
今の発言でガタツクの怒りは頂点に達したのだった。

絶対に、絶対にその言葉だけは言っていけないと。

「訳わかんねえよッ！！ 真由ちゃんに死んでもらう？  
何言ってるんだお前ッ！ ああ、そうだ！

真由香って何だよ、守るってなんだよ！  
矛盾してるじゃねえか！」



「お前が知る必要はない」

「ああそうかよッ！だったら全力で邪魔させてもらうぜえ！

「うおおおおッ！」

ガタツクはカリバーを構えて走り出す。

両者クロツクアップは既に解除され、現実世界での戦いへ応じる。

ガタツクは素早いステップでダークカブトの攻撃をかわすと、蹴りを叩き込んだ。

よろけ倒れこむダークカブトに追撃のカリバーを振り下すッ！

「プットオン」『Put On』

「！」

だが辺りから装甲の破片が飛んできてダークカブトの手に集まっていく！  
振り下ろしたカリバーは堅い装甲に弾かれ、大きな隙をつくる。  
それを狙われ、逆にダークカブトの蹴りを受けてしまった！

「グッ！！」

ダークカブトはマスクドフォームへ戻ると、そのままガタツクの首を掴んで持ち上げた。

ガタツクもまた抵抗を試みるが、マスクドとライダーではパワー負けしてしまう。

結局、抵抗むなしくガタツクは地面へ叩きつけられるのだった。

「キャストオフ」『Cast Off』

ダークカブトの、装甲の破片がガタツクに命中していく。



ダークカブトの攻撃が鈍く変わる。

ガタツクは何かダークカブトの猛攻を避けると、そのまま彼を投げ飛ばした。

そこへドロップキックを決め、さらに大きく吹き飛ばす！

「キャストオフ」『Cast Off』

追い討ちをかけようとしたがキャストオフを発動されてしまい、うかつに近づけなくなってしまった。

すぐにダークカブトもクロックアップを発動させ、二度目の高速戦闘へと突入する。

「ハアツ…ハアツ……ッ!!」

「もういいか？ 俺は早く真由に会いたいんだが…」

「ハアッ…ハアッ！　　グッ！  
会って…どうするッ…？」

「気絶させてどこかへ閉じ込めておく。  
その後は芝居でもうって皆の所へ戻るさ。  
それで創英の野望を潰したあと、真由を迎えにいけばいい」

「グッ…！もし、リコンファームを使わざるを　　」

「なにがあってもッッ！  
リコンファームだけは使わせない。

どう足掻いても使わなければならないと言っつのなら…

「真由を、殺す」

「何でなんだよおおおおおおおおおお！！」

ガタツクは激しい連打を浴びせるが、その全てをダークカブトはガードしていた。

そして拳を弾くと、回し蹴りを決める。

どんなに思いを乗せて、魂を込めて攻撃しても弾かれカウンターを決められる。

何が足りないんだッ！ ガタツクに焦りと悔しさがつのっていく。

「アグアッ！ ぐうううッ！ あああああああ！！」

転がるガタツクに浴びせられる銃弾の雨。

すぐにダークカブトはガタツクの元まで移動すると、もう一度激しい蹴りの連撃を浴びせた。

「があアア……!!」

「……」 『ONE』

さらに一発、蹴りがガタツクのわき腹をとらえる  
呼吸が止まり、景色がぼやける。

『TWO』

今度は腹部に蹴りを入れる。  
苦痛の声をあげるガタツク。そこへさらに蹴りがとんでくる。

『THREE』

「あああ　　ッ……………」

力なく倒れるガタツクに光を纏ったダークカブトの蹴りが炸裂した

「ライダーキック」 『RIDER KICK』

変身が解除され、血を纏いながら鏡治は落下する。  
気絶しているようで、ガタツクゼクターは鏡治を守る為にダークカブトの前に立つ。



しかし、彼はダークカブトに突進をしかけるが  
簡単に弾かれてしまった。

地面へ叩きつけられるガタツクゼクター、勝ち目がないと悟ったか  
上空へ飛翔して飛び去ってしまった。

「・・・」

ダークカブトは気絶している鏡冶を見る。  
その手にクナイガンを構えて…

「悪いな、本当に……」

彼は、銃口を鏡冶に向けたのだった。

第130話 ANGER SPEED LOVE (後書き)

クラヒは毎回進化してますねw

今回もサブライダーに超必殺技追加とか！

OP曲もかつこよかったです

何でもあれがフォーゼの挿入歌になるみたいですね

ただまあ響鬼とキバの扱いがイマイチ悪いですよねw

響鬼は追加ライダーを、キバはガール達をどうか！

ではこれで、次もよろしく！

第131話 L I E S P E E D L O V E (前書き)

はい、更新ですね

まあ次は……そうだなあ、多分木曜かな？

フォーゼの軽い感想を後書きに書いてます

まだ見てない方はスルーしてください

ではどうぞ！

第131話 LIE SPEED LOVE

あれから少し時間が経ったが、未だに鏡冶は気絶していた。雨も止む気配はない、ダークカブトは今もじっと鏡冶をみているだけだ。

迷っているのだろう、彼は。

鏡冶を…殺すか、どうかを

「・・・」

震える手をダークカブトは押さえつける。

ここで迷ってしまったては真由を殺す事など不可能。

そう、もうリコンファームを使わせないなんてできるのだろうか？破壊する事も考えた。

一度リコンファームのところへ行って、

破壊しようとも思ったが警備ロボットに邪魔されてしまった。

クロックアップ対策は万全らしく、警報がなる中必死に逃げたものだ。

赤い靴もそう、一人では破壊する事は不可能なのかもしれない。

誰かに協力してもらおう？

そうだな、始めから素直に理由を話して協力してもらえばなんとかなったのかも知れない。

「ああ、そうか……」

そう言うことだったのか。

今さらになってやっと気づいた。

俺は、いい訳の理由を作っていただけだ。

その気になれば真由にリコンファームを使わずに創英の野望を打ち砕くことができただろう。

司達と協力し赤い靴を破壊すれば……

だが、自分はその選択を取らなかった。

真由を殺す事は仕方のない事、間に合わなければ真由を殺す。

そう決めていたが、違う。

俺は…最初から真由を殺したかったんだ！

この世界に来て『真由香』を殺すチャンスができた！

俺はそれが嬉しかったに違いない…！！

「ッ」

鏡治の意識が戻っていく、別に鏡治まで殺す必要はない？  
自分はどうしたい？

迷う、イラつく。

「くっ、鏡治……悪いな。」

最期に教えてやる、真由と俺は……本当の兄妹じゃ

「

ダークカブトはクナイガンを鏡治に向けた。  
しかしその時、笑い声が聞えてくる！

「おいおい、苦悩を経てダークサイド墜ちかよ。

お前やっぱドストライク過ぎるわ、少し俺に属性譲ってくれよ。

右手に魔神とかちよっともう限界きてる気がする」

「……椿」

守輪椿はヘラヘラと笑いながらコチラに近づいてくる。

その隣にはガタツクゼクター、どうやら助けを呼びに行ったと言っ  
訳か。

ダークカブトはクナイガンを鏡冶ではなく椿へと向ける。



「へっ、撃てよ。俺は今、幼馴染から受け取ったお守りを内ポケットに入れてんだ。

これあれだ…このお守りがこっ…

なんか上手い具合に

」

「銃弾を防ぐ盾になってくれるんだろっ…?」

「そう！ それよ！ それね！」

ダークカブトは銃を構えたまま一歩後ろへ下がる。その時、さらに電子音がなり響いた。

『シャッフル』

「！」

鏡冶の体が消え、代わりにカリスが現れる。  
驚くダークカブト、カリスは瞬時にバックステップで距離をとると、  
彼に向かってアローを構えた。

「悪いな、まあ少しは冷静になっただらどうだ？ 天王路双護」

「やられたよ……広瀬」

「悪く思うなよ、イケメン。」

ちょっと身長分けてくれよ、変身！」『ターン・アップ』

クロックアップとマツハのカードが同時に発動される。

クナイとブレイラウザーは激しい火花を散らして互いを弾いた。

「・・・」

ダークカブトはそのまま走り去る。

長期戦は不利と思ったのだろうか？

むしろ不利なのはブレイドの方なのだが……

しかし、好都合だ。

ブレイドはため息をつくとき、変身を解除する。

「どうしちゃまったのかねアイツは」

「わからない。だがやはり、リコンファームに関係あるのは確定みたいだな」

椿と咲夜は、もう一度ため息をつくと鏡冶を抱えて学校へと戻るのがあった。

おきつっ！

「ッ……！」

お  
て

「……」

お

「！」

まぶたをゆっくり開けると、明るい光が差し込んできた。ぼやける景色から鮮明になっていく世界。

そこにいたのは……真由だった。

真由は自分が目覚めたことに気づくと笑顔で微笑む。

癒される、この娘の笑顔は本当に天使のようだ。鏡冶は真由に微笑み返すと、ゆっくりと体を起こした。

学校？ 保健室だろうか？

辺りを見回すとそれらしきモノが多く見える。

しかし生活用品やテレビ等、まるで誰かの部屋みたいだ。

「気がついたのね。良かった」

「え…？」

声がして振り向くと、若い女性がいた。  
担当の先生だろうか？

鏡冶は頭を下げる。

「丁寧にも。わたしは空野葵、真由ちゃんの仲間よ」

「えっと……新意鏡冶ですッ！」

葵は鏡冶が無事に目覚めたことを確認すると、軽く状況を説明した。  
そして、皆との顔合わせをするように提案する。

「わ、わかりましたッ！」

教室では司達が待っているらしい、鏡治はそこへ移動する事にする。  
心配そうに見つめる真由に微笑み返すと、鏡治は歩き出した。

「聖司だ。よろしく」

「ああ！ よろしくッ！」

「鏡治！！」



教室に有美子が血相を変えてやってくる。  
有美子は、鏡治と神也の姿を確認すると涙を浮かべて二人を抱きしめた。

「良かった！ 本当に…良かったわッ……」

鏡治も神也も、すこし照れたようにしていたが  
しっかりと抱きしめ返すのだった。

「……」

家族、そこには愛がある。しかし、双護は言った。彼女を  
ッ

(なんでなんだよ……)

その後、とり合えず全員と一通り挨拶を済ませた後、作戦をたてることになった。  
皆で創英のいるブレインタワーに突撃するというシンプルで一番有効な方法。

一度この作戦を実行したらしいが、その時は失敗したらしい

『電磁バリアの解除はミーにまかせるですよ！』

「ああ、よろしく頼む！」

そして、しばらく話し合いが続くなか、ふと鏡冶は疑問を覚える。  
一体双護についてはどうなったのだろうか？

そう考えていたら、双護の話題があがる

「双護は確か貴方のところで保護してもらってるんですよね」

「ああ、心配しないでくれ」

「？」

風島は言う、保護？

そうなのか？ 鏡治はその事を聞こうとした。  
その時、隣にいた少年が小声でささやく

「今はそう言う事にしておいてあるんだ。後で図書室に来てくれ…」

「えっ？」

少年、椿が小声でそう言う。

成る程、鏡冶はそれを理解して、もう何も言わなかった。

その後、解散となり各々は自室やら食堂やらに散らばっていく。  
鏡冶は言われたとおりに図書室へと向かうのだった。

第131話 L I E S P E E D L O V E (後書き)

相変わらず挿入歌のタイミングが秀逸ですねw

新ステイツが披露されましたか

スイッチが40までなら30が中間って事かな？

しかし大文字先輩もはや別人じゃないですかw

まあ来週は駅伝お預けみたいですな

では次もよろしく！

第132話 THINKING SPEED LOVE(前書き)

はい、えっとですね

木曜に更新しようと思ってたんですけど

ちょっと都合が悪くなってしまいました

今日更新でございます

「図書室に行く鏡治」

ではございませー!

第132話 THINKING SPEED LOVE

「来たな、ここだぜ新意」

図書室の一角で守輪椿、広瀬咲夜、相原我夢、条戸真志の四人がソファに座っていた。

どうやら双護の暴走を知っているのはこの四人だけらしく、風島や神也に協力してもらい話を合わせてもらっているとの事だった。

「鏡治、どうしちゃったんだろうな？」

「リコンファームを使わせたくないとか言ってたからよお、ソッチ関係である事は間違いないんだが…」

鏡治も加わり、五人は双護が何故このような行動に出たのかを考える。

我夢が言うには真由に何かを思い出して欲しくないから…との事だが、  
これが恐らく理由なのだろう。

問題はそれを思い出して欲しくないからと言って真由の命までを奪う、その狂気さだった。

双護はあくまでも真由を守ると言っていた。  
だが、真由の命すら奪っても構わないという矛盾。

そして、鏡治はふと思い出す。

「そつえば双護は真由ちゃんの事をたまたま、  
真由香って…呼んでたな。」



ああ、そうだ。それに真由と自分は本当の…  
とかなんとか言ってたよつな」

その言葉に五人の表情が一変する。

まだ意味が分かっていない鏡治は目を丸くするだけだったのだが

「おいおい、それってもしかしくなくとも…」

「あ、ああ……ッ」

「？」

未だに意味の分かってない鏡治、  
我夢は焦る気持ちを抑えて説明する。

簡単な話だ。双護先輩と真由は本当の

「!!!!」

それを聞いた鏡冶はいても立ってもいらねず、図書室を飛び出していった。

止める樁の声を振り切って、鏡冶は全速力で走っていく。

「……やれやれ」

真志は困ったように笑みを浮かべると、鏡冶を追いかけて図書室を後にした。

残された我夢達は少し沈黙するものの、また話し合いを再開する。

「いろいろありました、双護先輩の言葉。

真由先輩の事情、真由と言う名前ではなくて真由香、そしてリコンファーム。

なかなか情報が集まりましたね」

我夢は冷静に思考をめぐらせる。

引っかかるのは真由と真由香、一体どついつ事なのか…

「ニャー」

「「「!?!?!」」」

突如猫の鳴き声がして一同は振り返る。  
すると、窓をがりがり引ひかく猫の姿が見えた。

集中していたせいなのか、皆全く気配に気づかなかった。

「可哀想に……雨の中じゃ寒いだろう」

咲夜は少し顔を赤らめて猫を図書室へと招き入れた。  
タオルで体を少し拭いてあげると、猫はお礼を言うようにもつ一度  
鳴く。

「さ、咲夜……お前　ッ  
いくら腹がへってるからって……」

「くわんがな。あんまりふざけた事はかり言っていると  
貴様の尻を日本列島にしてやるつか」

「…………え？」

どどどどど言う事なの？

全く意味が分からない脅し文句に、椿の体は震え上がる。

結局、彼は沈黙して後ろへと下がっていくのだった。

「ん？」

我夢はふと、妙に強い既視感を覚える。

この猫、どこかで見たような…………

さらに一冊の新聞が落ちている事に気づいた。

猫が入ってきた窓の近くは、今までの新聞が保管されている歴史の

棚。

誰かが落としたのだろうか？

それとも、ふとした拍子に落ちてしまったのだろうか？

我夢はとにかくその新聞に手を伸ばす。

「？」

ふと、その新聞に書かれている事が目に止まった。

かなり前の新聞の様で、もう廃刊になっている。

そんな新聞が何故？

だがとにかく書いてある事が気になってそれどころではなかった。

「倒壊…設計ミスが原因か……」

「ブラック企業の噂も…天……」

「ん？どうした我夢？」

新聞を持つ手が震えている。

椿は疑問に思い自分もその記事を見てみる事にした

記事には、数年前に起こった小さな建物の倒壊事件。その事故のことが記されていた。

「倒壊事故？ ああ、そう言えばあったな。

割と人が亡くなったりして大変だったとか。

んーでも、そんなニュースにはならなかったけ？

設計ミス？ へー、そんな事も言われたのか……

つか、これよく根も葉もない噂を書くって問題になった新聞じゃねーか。

もう発行されてないんじゃないか？

んで、何々い？ ブラック企業の噂も、天王路グルー……プ……」

椿もまた口を閉ざしてしまった。

そして代わりにもう一度まじまじと記事を見してみる。

だが何度読み返しても、その文字が変わる事はなかった。

「くっ！ クラス名簿…ッ！」

「？」

我夢と椿は急いで翼のところへ向かう。

そして、翼にクラスの名簿がどこにあるかを問い詰めた。

翼は、二人の様子に少し驚きながらも

クラス名簿がしまつてあるだろう場所を示す。

しかし、そこに名簿はなかった。

「あれ？ おかしいな」



そう言えばいつの間になくなっていた名簿。  
クラス全員も少ないし、皆もう親しい間なので別に名簿の事など全く気にしてはいなかったのだが……

翼は周りを調べるが結局、名簿はなかった。  
無くしてしまったのかと焦る翼だったが、ふと思い出す。

最後に名簿を見たのは……

「あ、そう言えば双護くんが貸してほしって」

「……」

「まだ、皆の名前を見てなかったんだけど、  
自己紹介してもらったし……いいかなって」

双護が最後に名簿を持っていた？  
どうして？ 名簿なんて何に使うと言うのか

そう、それは逆に言えば……双護には名簿を手に入れなければなら  
ない理由があったと言う事ではないか？

「ま、真由ちゃんの名前は…どうでしたか？」

「い、誤字とか……は？」

「え？ いや、別に誤字とかはなかったけど。」

あ、でも何故か『真由』の『由』の隣が修正テープで消されてたかな

……なんでなんだろう？」

「……ッ！」

最初、このクラスにやってきたのは椿と司達だ。  
その時には名簿は机の上に置いてあった。

あの時は、突然の事で知り合いの名前を探すだけだったが……

ふと、考えてみる。

あの時双護達はいつのまにか教室に入っていた。

普通、特別クラスなのかを確認したりはしないのだろうか？

いや、双護の性格が特殊なのは今まで一緒にいて分かった事だ。だから、確証はない。

だけど、もし……

もし、クラスに一番最初にやってきたのが双護だったら      ツ

そして彼はある事をしてから一度教室を出た？  
今までの情報が鮮明にヴィジョンを映していく。

彼は真由を連れずに一度教室にやってきた。そして名簿に簡単な細工をした。

その後、名簿を完全に始末したのだ。

「双護……お前      ツ」

『鏡治い！　いつまでやればいいんだよー！』

「すまん！もうちょっと頑張ってくれ！！」

学校の外、少し離れた公園に鏡治とガタツクゼクターはいた。  
ガタツクゼクターは先ほどから空高く飛翔し、大きく旋廻を続ける。

カプトゼクターに通信を行っているのだ。

「頼むッ！ 来てくれ…ッッ…！」

『おい鏡冶！ 創英に見つかっちまうぞ…！』

「クッ…ああ、そうだな！」

限界か、やはり来てはくれないのか……

鏡冶は諦めガタツクゼクターを呼び戻した。

明日、赤い靴を発動するらしいという情報が俊英から送られてきた。もう時間はない、話を聞けば真由はもうリコンファームのリハーサルに向かっていているらしい…

「！」

気配を感じて振り返る。するとそこには……

「双護さんッ！」

天王路双護が座っていた。

双護は冷たい目で鏡治を確認すると、小さくため息をつく。

「……さんはつけなくていい」

「……分かった。双護、話があるんだ」

「だろうな、あれだけカプトゼクターに連絡を送っていれば嫌でも分かる」

鏡治はもう包み隠さず、真正面から双護に向き合った。  
にらみ合う両者。どちらも引くつもりはないらしい

「双護、お前は真由ちゃんと…血は繋がっているのか？」

その質問がくるのは分かっていた。

双護は眉一つ動かさずにその問いに答える。

「いや、繋がってない。俺と真由は本当の兄妹じゃないからな」

「…そうかよ。」

でも、お前は真由ちゃんを愛しているんだろッ!？」

「ああ、当然だ。神に誓ってもいい、俺は真由を愛している。  
兄妹として、家族としてな。」

その思いが変わる事は絶対はない、絶対にだ」

だったら！ 鏡冶は声をつい荒げてしまう。  
いや、荒げずにはいられなかった。

「どっしてッ！ どうして殺すなんて言うんだ！？」

「・・・」

「なあ、双護！ 俺達と協力して創英さんと戦おうぜ！  
皆で強力して赤い靴を破壊すれば真由ちゃんを



リコンファームに乗せなくていいじゃないか！」

双護は何も言わず地面をみつめていた。

しばらくそのまま二人は沈黙を続ける、そしてふいに双護が口を開いた。

「俺は、迷っていたんだ。真由を生かすか、真由香を殺すか」

「…その、真由香って誰なんだよッ！」

「・・・」

双護はうつむいたまま、小さな声で話し始めた。

まるで鏡冶に聞かせるのではなく自分に聞かせるように…

それは決断、思い出すのだ。

彼女の思い出。

そして憎しみを  
ッ

水原<sup>みずはら</sup>。それが昔の苗字だった。

「おにいちゃん…！」

「おいおい！ 気をつけるよ樹里<sup>じゅり</sup>！」

妹の樹里が笑いかけてくる。

それは嬉しいがなにやら危なっかしい、いつもそつだ。

樹里ははしゃぐと周りが見えなくなる。

誰かがしっかり見ててやらねば…

「ほし」

「！」

手を差し出す。樹里はニッコリと笑つとその手を握り返してくれた。

「こっちだよお兄ちゃん！」

「あはは、ちょっと待ってくれよ」

樹里も中学一年か。

お互い中学生にもなって妹と一緒に買い物なんてどうかとも思うが

…まあいいだろう。

「お前達は本当に仲がいいな、父さんは少し心配だよ」

「いいじゃないですか、反抗的になるよりはよっぽどいいわ。」

「ねえ？」

後ろでは父と母が俺達を見て笑っている。  
寛大な父と、優しい母、そして可愛い妹。

俺は幸せなんだろうな。

だが、少し気になる事もある。

「！」

父はその人物を見かけるとすぐに挨拶に向かう。  
当然だ、父はその人に仕えているのだから。

「これは社長！ どうも、すみません。お休みを頂いてしまって」

「構わん、お前のほかにも優秀な秘書はおる。

一日くらい好きにするがいい」

父は、天王路グループ社長。天王路剛てんのうじ じゅうの秘書をしていた。

と言っても秘書は何人もいるらしく、

父もあまり自分の仕事については話さなかったのだが。

正直俺は、あまりこの天王路グループが好きではなかった。  
なにやら黒い噂があったのだ、週刊誌で読んだときは警察もマーク  
をしているらしいとかなんとか…

まあ噂は噂。俺が気にするものでもないのかもしれぬ

問題は別にある。

「ほら、お前達も挨拶をしなさい」

「あ、ああ……はい。」

「すいません。どうも、こんにちは……」

「こんにちは！」

この男の威圧感は苦手だ。

まあ社長と言うのだから当然なのだろうか

「…ああ」

まあ剛はまだいい。問題はコイツだ　　ッ　　ッ

「こんにちは……」

「こんにちは！」

「……」

無視か、人がせつかくしたくもない挨拶をしてやったのに。  
腹の立つ女だ。だから嫌なんだよ、お前なんか挨拶するのはッ

「では行く」

「はい、パパ」

そう言っただけとソイツは歩いていく。  
その時だった。ソイツと樹里の肩がぶつかってしまった。

すぐに謝る樹里だったがソイツは舌打ちをして樹里を睨みつけた。

「行くぞ、真由香」

「ええ、わかりました」

天王路真由香、俺はコイツが大嫌いだった。



天王路剛の一人娘、一応昔からの知り合い。

つまり幼馴染と言うヤツなのだろうか？  
とにかく、俺は真由香が大嫌いだった。

金持ちの娘は皆こうなのだろうか？

高飛車で我がままでプライドが高く、  
金があれば何でも手に入ると思っているクソ女だ。

なによりこいつは樹里をいじめていた、小さい時に知り合って遊んだ事もあったが、樹里も大切にしていた玩具を壊したり、気に入らない事があればすぐに権力を振りかざして……

「チツ、樹里。行こうか」

「う…うん」

胸糞が悪い。あんなヤツ、死ねばいいんだよ。

第132話 THINKING SPEED LOVE (後書き)

はい、実はですね。

最初目標にしていたアクセス数(?)にたどり着けました

いやこれも皆さんのおかげですね。ありがとうございます！

これからも頑張っていきますので

次もどうぞよろしく！

第133話 RESENTMENT SPEED LOVE(前書き)

はいちょっとすいません。日曜の都合が悪いもんで、今日二話更新です

あとまあ続けたほうがグダリ感も少ないかなとww

と言う訳で過去編、前編でございます。

「双護と真由香」

ちょっとハードかな？

ではございませー！

第133話 RESENTMENT SPEED LOVE

もう真由香を視界にいれるだけで気分が悪くなる。

だが、最悪な事に俺とアイツは同じクラスだという事。  
アイツは気に入らない、暇だからと言う理由で誰かをいじめる。

しかもそのやり方が陰湿で、どこぞの不良に金を渡して代わりにいじめを行わせる。  
それを見るのが趣味という腐った女。

正直かかわりたくない。  
まあよほどの事がないかぎりは大丈夫だろう、俺とアイツは中学を卒業すればサヨナラ。

それまで耐えればいいだけなのだから…

だが、樹里は違った。

俺が何度止めると言っても、真由香と仲良くできる筈と聞かなかった

「きつと真由香さんは寂しいだけなんだよ。

だから……ね？」

樹里はそう言って聞かなかった。

俺が何度、どれだけ止めると言っても樹里は真由香に話かけ続ける。

その度に無視されようが、にらまれようが。

真由香は樹里に手を上げた事もある。

いくら昔の話だろうが、俺はそれを謝らないアイツを許さない

「真由香さん！」

その日も、また樹里は同じように真由香に話しかけていた。樹里は家庭科の時間に作ったお菓子を真由香へと差し出す。

覗き見は趣味ではないが、たまたま見かけたので観察してみる事にした。

「・・・」

「えへへ、頑張って作ったんだ。良かったら食べてね」

そう言っつて樹里は真由香に背を向けて走り出す。

自分の作ったものを食べているところをみるのは恥ずかしいらしい、

樹里のクセみたいなものだった。

俺はそのクセがあったことを心から感謝した。

「……なっ！」

アイツは樹里から受け取ったお菓子を、迷う事無くゴミ箱へ捨てる。  
もう我慢の限界だった。

俺は声を荒げてアイツに詰め寄る。

「おい……ッ！」

「…あら、貴方は」

真由香の背はひくい。俺を見上げるようにしていた。  
それもまた不快でならない。

「どつして樹里のお菓子を捨てたんだッ！！」



「ああ、コレですか。不味そうだったんで」

「なっ!?!」

さも当然のようにコイツはッ…

「あと、言っておいてくれませんか？ 私に話しかけるなって。うざいんですよね、正直。」

あの娘、お金が欲しいんでしょうか？

しつこいっていうか、いやしいって言うか」

「ッッ!?!?!」

「それより、貴方けっこうカッコいいね。  
どうですか？ 私と付き合いませんか？

クラスの男子ってなんか全員キモイんですよね。  
お金もあげますよ？ やっぱ男は顔ですよ。 キャハハハ！」

何を……言っているんだこいつは ツ  
本気で言っているのか？

正気なのか！？

「それにしても、あんなみすばらしいオッサンと  
センス悪いババアから貴方みたいなのが生まれるなんて以外です  
ね。」

妹もマジでうざいし、もしかしたら本当の息子じゃなかったりし  
て！

あははは「…」

気がつけば、俺は真由香を突き飛ばしていた。

驚きで眼を見開く真由香に、俺は知っている限りの暴言をぶつける。

本音を言えばその整った顔をぐちゃぐちゃになるまで殴りたかったが、俺の中にあつた良心がそれを防ぐ。

今にして思えばなんて浅はかで考えなしの行動だったのか、だが俺は我慢できなかった。

その結果、今度は俺が真由香に睨まれる。

「覚えてろよ…ッ、必ず後悔させてやるからなッッ!」

そう言っつて真由香は俺の前から逃げるようにして走り去っていった。  
あの時、俺はどんな顔をして真由香を見ていたのか……

その時が初……だったかもしれない。

真由香に明確な殺意が湧いたのは。

翌日、いきなり誰とも知らぬヤツに殴られた。

ゲラゲラと不愉快な笑みを浮かべながら殴りかかってくる。

俺は抵抗しようと構えるが、そこにアイツの姿が見えた。

不愉快な笑みを浮かべて、俺を見下してくる。

あの女が

「双護さん、抵抗するのはいいんですけど。ちよっとその前にいいですかね？」

「ア？」

悟る、理解する。

この見知らぬ男はコイツが用意したという事か…

俺の心情を理解したのか、真由香はより下卑た笑みを浮べて続ける。

「妹さん、一年のA組みなんですってね」

「……ッ」

「いじめられないか、心配でしょお？」

抵抗すれば、分かってるよな？

「ッ！！」

「樹里だっけ？

二度と登校できないようにしてやるっか？ きゃははは！！」

「お前ッ！！」

「それだけじゃないよ、ねえいいの？

私がパパにお前のクソ親父クビにしてくださいってお願いしちゃおうかな？

きゃはは！ どうする？

どうするの、お父さんがお仕事クビになっちゃったら！

キャハハハ！」

ぐっと、歯を食いしばる。

コイツだけは許さない、絶対に許さないッ！

その後も俺はしばらく殴られ続け、真由香が飽きるまでそれは続いた。

最後にアイツは俺の頭を踏んで、そのまま耳元で囁いた。  
誰かに言ったら

「お前の家族、本気でぶっ壊すぞ？」

「おにいちゃん！ 大丈夫！？ どうしたの！」

「…ちょっと、変な奴らにからまれてな。  
心配しなくていい、もう大丈夫だ」

家族だけは守る。

その為ならどんな仕打ちでも受けてやる。



悔しいがもうそれしかないんだ。

ちくしょっ…ッ、ちくしょっ…ッ…!!

「おい双護、コッチへ来なさい！」

「…」

翌日、クラスであの女が俺を呼んだ。

真由香の周りではみるからに頭の悪そうな連中がたむろしてクスクスと笑っている。

強烈な不快感を覚えたが、俺は真由香の所へと向かった。

「土下座しなさい」

「……は？」

ギャハハハと不快な笑い声が大きくなる。

真由香は挑発的な笑みを浮かべながら顎で早くしろとジェスチャーを送る。

「……ッッ」

クラスメイトの視線が俺に集中する。

ふざけやがって……ッ！

そう考えていたら、真由香の口が動いた。  
言葉は発しないものの、たしかにそう言った

『イモウトガダイジダロ？』

「ツツツ……………」

死にたくなる、泣けてくる。

だけど妹がいじめられる

もしかしたらもっとやばい事をしかけてくるかもしれない……

俺が命令に応じると不愉快な笑い声が爆発する。

「本当にいいなりじゃねーか！ きゃははー！」

「だっせえ！！ ははははー！」

「真由香ちゃんすごい！」

「コイツの親父もパパに同じ事してたよ！  
本当親子そろって惨めだねえ！ キヤハハハ！」

殺す、コイツはぶっ殺してやる。  
でも、家族だけは……妹は守らなきゃいけない。

俺は誓った。

次の日も、その次の日も、俺はこの女のいいなりにされた。

だが……

「おにいちゃん！ 私テストで百点とったよ！ 凄くない!？」

「ああ……凄いな」

「えっへん！ あははは!」

「ははは……」

お前だけは、守らないと。

大切な家族なんだ。大切な……大切な

ッ

「……あのね、お兄ちゃん」

「ん？」

「最近、お父さんの元気がないの。なんか悩んでるみたいなんだ」

「え？」

「お父さん、大丈夫かな……？」

「ああ、大丈夫さ！」

「そっだ、今度一緒に元気付けてやるか！」

「う、うん！ そうだね！ やっぱお兄ちゃんに頼りになるっ！」

「ハハッ、調子のいい奴だ」

樹里がいれば耐えられる。  
家族なんだ。俺が守ってみせる！

きっとそのうちアイツも飽きて、それで俺は解放されるんだ。  
地獄から、アイツから……

だが、その日はやって来た。

それは天王路グループの経営している小さなビルの一つ。

俺の父はある日、社長である剛から家族を連れてそのビルの様子を見てきてくれと言われた。

どうやら家族を題材にしたプロジェクトを進行中らしく、その実験をかねて……と言ふ事らしい。現に、俺たちの他にも天王路グループの社員が家族で訪れていた。

はしやぎまわる妹を注意しつつ、俺たちはそのビルを視察する。

しかしその日、事件が起こった。



建物の倒壊。

後に設計ミスが原因だったと疑われたソレは、  
多くの死者を出したにも関わらず大規模な報道が行われる事はな  
かった。

だから、人の記憶に残る事はなく。事件が起こった事すら知らない  
可能性があるだろう。

しかし

「…………ツ！」

眼を覚ます。気絶していたのだろう。  
覚えているのは、何か大きな音がしたと思ったら視界が真っ暗にな  
った。

…………それだけだ。

何が起こっているのか？  
その時は全く分からなかったものだ、そして足を怪我しているのだと理解する。

「……………え？」

だけど、足なんてどうでも良かった。  
痛みが感じられないのは興奮状態だったからだろう。

俺は見てしまったのだ。

瓦礫に潰されている父を

「　　アアア……………」

叫び声すらあげられないほど、俺は衰弱していた。

後になって聞いた話だが、俺は丸二日程気絶していたらしい。

もう体力も気力もなくなっていた。

だが、目の前の状況を受け入れまいと必死に世界を否定する。

あの父が、優しくかった父がこうも簡単に亡くなったのだ。

もう会えない、そんな馬鹿な話があつてたまるか……

きっと、父の体から流れている赤黒い液体は嘘。

これは夢？

ピクリとも動かない父親。声をかければきっと答えてくれる。  
なのに声がでない。

なんで……

ぎんごん……しん……

錯乱する思考。

鳴り響くサイレンの音、救助が来たのだろうか？

「お……」

「……」

その時だった。

父に気をとられていて気づかなかったが、目の前に樹里がいるではないか！

瓦礫に足が挟まっているのか？

とにかく顔色が悪い…ッ！

「お　り…！」

樹里に向かって手を伸ばす。

見れば血が出てるじゃないか！

早く！

早く手当てをしないと！

「お…にいちやんツッ…」

待ってる！ すぐに助けてやるからなツッ…！

樹里いいいいツッ…！

「  
」

だが体が動かない！

どうして！ 何で何だよッ！！

早く樹里を病院につれていかなきゃならないんだ！

なのにどうして体がいう事を聞いてくれないんだよ！

体の力が抜けていく、意識がもうろうつとしていく！  
早く！早く樹里をツッ！！

「痛いよ…おに……ちゃ……」

おい冗談なんだろ！ ドツキリなんだろ！

嘘だよな！ 映画でもこんな展開三流だぞ！

だから出てこいよ！ どうせスタッフとかがあざ笑ってるんだろ！  
なんで、なんでこんな事するんだよッ！

妹が泣いているじゃないか！！

手の伸ばすのに届かない！

瓦礫がまた俺達の周りに落下してくる。

なんだよこれ、本物なのか　　ッ！！

「いたぞ！」

「！」

突如声が聞こえる！

救助だ！　助かったんだ！  
俺はその時、確かな希望を感じた。

だが、違ったんだ…それは希望なんかじゃない



「ッ!？」

現れたのは救助隊ではなく、ただの一般人かと思える男だった。  
一瞬何が起こったのか分からず思わず沈黙してしまう。

男は俺が気絶していると思いこみ、堂々と通信を始める。

「はい、いました。」

はい、父親も……母親も死んでいます。

妹は瀕死、兄は……気絶しているようですが外傷はないかと……

ええ、はい。わかりました」

母さんも……死んだ？

男は頷くと……

樹里の頭上にある瓦礫のバランスを崩しはじめた。

第134話 MADNESS SPEED LOVE

何を…やってるんだよ

「  
ッ！！！」

声がでない、叫ぼうとしても力が入らなかった。

おい！

おいッッ！

何やってるんだお前！！

ふざけんなッ！ 樹里は助けてやってくれ！

頼むッ！

どうして殺そうとするんだよおッ！

樹里がなにをした！ オイツ！？

やめてくれッ、たのむから止めてくれよお！

「人がいたぞおおおおおお！」

男は白々しい芝居をとると、救助隊の方へ走っていく。

何やってんだよッ！

瓦礫をどけてくれよ！ 樹里にぶつかるとるだろ！！

ああああ止めてくれっ！

お願いだ！

お願いだから樹里を助けて！

俺はどうなってもいいから！

樹里だけは助け



ああああああああああああああああああああああ  
ああああああああアアアアアアアアアアアアアアッッ

俺の意識はそこで完全に途切れた。

瓦礫に頭を潰される妹を見なくてすんだのは…幸いなのだろうか？

妹は、父は、母は……こんな、こんな嘘みたいな事で死んだのか？

俺たちの人生ってなんだったんだよ。

こんな結末を迎える為に、毎日苦労して生きてるのか？

どうしてこんな簡単に

死ぬんだよ？

「今日から…私がお前の父親だ。分かったな」

「……はい」



結局、俺の家族は全員瓦礫にのまれて死んだ。  
文字にしてみればたった一文。それで家族全員が俺の前から消えた。

数少ない親戚は俺を受け入れる事を拒否し、  
俺は施設へ預けられる……答だった。

しかし、それを天王路剛が拒む。  
剛は俺を何故か養子にし、跡取りにしようとしたのだ。

何故かは分からん。

だが……天王路の社員の中に……見つけた。

「ツツ！！」

あの男、樹里を殺した……

天王路グループ、表の顔と裏の顔。  
俺は焦る心を抑えその男をつけた。

そして、偶然ソイツが同僚と話している所を見つけ、聞いた。

「お前ツ、本当なのか！！ 妹の方は見捨てたのかよ！」

「ああ、正直嫌だったよ。まだ子供だった、助けを呼べば救えただろに

俺が殺しちまったようなもんだ……」

「でも、なんで社長はその長男以外を殺すように命じたんだ？」

「秘密を知ったらしいぜ。」

あのビルの視察会に呼ばれたのは秘密を知ってしまった人間らしいからな。

家族全員参加も……わかるな？」

「まっ、まさか！ 最初から全員殺すつもりで……」

「馬鹿野郎！ 声がでかい……！」

それで、もし誰か一人男の子が生き残ればソイツを連れて来いって言われただけだよ。

あの双護って子が特別なんじゃない、運が良かったただけだ」

「そ、それであの双護って子が唯一生き残ったのか。社長はその子をどうするつもりなんだ？」

「養子にするらしい。いや、もうしたのか」

「養子!?!」

「ああ、わざわざその子の親戚に金まで払って、孤独になるように仕組んだらしいからな」

「なんでまた…そんな事を」

「狂ってるのさ。」

何でも奇跡的狀況で生き残った強い運をもつ男が

跡取りにほしらしいからな。

マジで狂ってる」

「おいおい、あまり大声で話すなよ。

ここだけの話、今回の事件も意図的な設計ミスが原因らしいぞ。本当の設計書と違う構造にして、あまった金を横領したとか……」

「ろくな人間がいやしねえな。俺も含めてだが」

「叩けばいろんなホコリがでてきそうだな。まあ、叩ければの話だが」

天王路の…命令……剛の…訳のわからん理由で樹里は…

死んだ？

いや、殺された。

「双護くんだったか？

可哀想になあ、社長も酷い事しやがる」

「関係者である以上、運が良かったと考えるべきだろう。

妹さんは…運がなかったのさ。

社長は男尊女卑の念がまだあるからな、お前も知ってるだろ？

社長の娘さんはもう

「

「ああ、あれも運がない話だったな。

社長も発狂してたからな、理由が今なら分かるぜ。

自分の娘に手をかけたようなモノだからか……」

「双護くんが気絶していて良かったよ。もし意識があつたなら……」

「社長は今回の事件に関わった人間を全て殺すつもりだった。設計ミスも隠蔽するように爆弾をつかって倒壊させたらしいからな」

「社長にとって一石二鳥って訳か。

裏の顔をした人間とその家族を始末できて、かつ手抜き建築だったビルを破壊できた訳だからな」

「三鳥だよ、いわゆる『奇跡の子』を手に入れたんだからな。

悪魔だよ社長は……

本当にこの世にそんな事件を起こすやつがいたなんて」



天王路い  
イイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！

殺す！ 殺してやるッ！

ぶっ殺してやるッ！

覚悟しろよ、俺を見逃したのは大きいぞ。  
必ず後悔させてやるッ！

奇跡の子？

確立？

秘密を知った？

知るか：ッ、知るか知るか知るかッッ！

知るかああああああああッッ！！

全員皆殺しだ！

天王路に関わった奴全員ぶち殺してやる！

返せよ、返せよッッ！

返してくれよ父さんをッ！

母さんを！

樹里をおおおおッッ！

養子？

ああ、上等だぜ、だつたらまずお前の娘からぶつ殺してやる！

真由香アアアアアアアツツ！！

覚悟しろよ、剛！

お前の目の前で真由香を殺してやるっ！

苦しめて、苦しめて苦しめてッッ！！

泣き叫ぶあの女をズタズタにしてやるっ！

『天王路』 双護はありつたけの憎悪と呪詛の言葉を浮かべながら真由香の部屋へと移動する。

いくら男尊女卑の念を掲げていた剛だろうが、娘は愛していた。その娘を目の前で拷問して殺してやる。

双護はそう決めて、真由香の部屋へと足を進める。

「そ、双護さま!?!」

「真由香…妹に会いたい。通してくれるか?」

「で、ですがッ……」

真由香の部屋の前ではメイドが困ったように立っていた。

ああ面倒だ　　ッ

「俺が会いたいと言っているんだ。通してくれ」

「あのっ…剛さまからは通すなど……」

「親父には俺から謝っておく、安心しろ。  
俺が全てをかけて守ってやる」

「は…はぁ」

メイドは複雑そうに俺に道を開ける。

さあ、真由香……

まずは四肢を使えなくしてやるのか？  
それとも目を潰してやるのか？

いっそ、絞め殺してやるのか？

狂気の喜びに包まれて俺は扉を開く。

どうやって殺してやるの？

何でもいい、お前らが樹里を、父さんと母さんを殺したんだ。

お前らも殺してやる

「……………え？」

よく、考えるべきだった。

男達の会話で真由香の話がでていたな…

アレをもっと深く考えるべき…だった。

「  
」

なんだ、コレは……？

「そ、双護さまっ!?!?」

中にはメイドがいた。

その隣には…

「あーっー…あぁ。あーっーっー」

これは…誰だ?



「うあー、あああー……」

だらしなく涎をたらし、まるで赤ん坊のように指をくわえ立っわけでも座るわけでもない。

寝転んで、立ち方を忘れたように……

「きゃははは！ くま！ くまさん！」

ぬいぐるみを持って楽しそうに振り回して……

誰だ？

コレは……

「真由香は……どこにいる？」

「え…ッ？」

メイドは困ったように俺の顔を見た。

そっだ、俺は真由香を捜しに来たんだぞ？

こんな赤ん坊みたいなのを捜しに来たんじゃない…

「だぁー…！ だぁ！ きゃははー！」

「あのっ、えと……」

「・・・」

その時、後ろでまた扉が開く音が聞えた。

アイツ、剛…ッ…!!

剛は俺に気づくとため息をついてそのままコツチ入っやってくる。

「い、剛様！ 申し訳ありません！」

「構わん、いずれは話す事だ」

そう言っつて剛はその『子供』に近づく。

「思い出したかい？ 思い出したろっつ！」

「ッ！！」

「！」

剛は強く子供の肩を揺する。  
だが、子供は怖がるだけで剛の望む答えを言う事はなかった。

「怖いよお！ おじさんだね！？」

「なっ………！」

「!!!!」

何かが破裂するような音が聞えて双護は息をのむ。  
見れば剛が子供を思い切り叩いていたのだ。

子供は大きくよろけ、直後大声で泣き出した。  
止めに入るメイドを無視して剛は子供に暴言を浴びせる。

お前こそ誰だ!?

娘を返せ!

と、しばらく憎悪の暴言は続く。

そして剛は諦めたかの様に首を振ると、部屋を出て行くのだった。

「……あ」

大声で子供は泣いていた。

メイドに視線を送ると、彼女は恐る恐る口をひらく

「あの事故現場に…いたんですよ。真由香様は…

それで、瓦礫が頭にぶつかってしまっ…」

メイドは淡々と、俺と目を合わせずに喋りつつける。

目の前で泣いている女は、瓦礫を頭にぶつけて記憶が消えたらしい。

真由と同じ顔、同じ声…当然だな。

コイツは、真由香なんだから…

「は……ははは……」

笑えてくる。ざまあみる剛、真由香　　ツッ！！

天罰だ。お前らに罰が下ったんだよ！

どうせ真由香があ在现场にいたのだから、また俺を馬鹿にする為だろっ！？

最高だ！　最高の気分だよ真由香！

お前の負けだ！　そして俺の勝ちだツッ！！

見てるか！？　ほら、俺の勝ちなんだよツッ！！

「ま、真田香とまっ！」

ああ、べつか泣き止んでください！

「うええええん！！ くだいよおおおおお！！」

「・・・」

そつだ、これが俺の望んでいた事……

「・・・」

「うえええええええええん！！」



しかし、何か引っかかる。  
これは……誰だ？

真由香ではない。じゃあ誰なんだ？

コイツの家族は？

名前は？

歳は？

ん？ コイツが……何をしたのだろうか？

おかしい、何故だ……あれ程。

あれ程殺したいと思っていた。

あれ程憎んでいたのに

「大丈夫か？」

「！」

「ううう…！ひっく！」

何故俺は、手を差し伸べているんだ……？

どうして俺は…どうでも良くなっているんだ？

なんで俺は…この女に同情しているんだ？

「親父はちよつと機嫌が悪いだけさ、痛かったな。

大丈夫か？」

「うううううう？」

もう、どうでもよくなっていた。

虚しくなっていたのかもしれない、膨らんだ風船は割れずに萎んでしまった。

「おいおい、実の兄を忘れる奴があるか。真…」

「ただ、あの女の名前だけは呼びたくなかった。それは譲れない、だから…」

「真由、俺は双護。お前の兄ちゃんだぞ？」

「あはは…」

「おい…ちゃん？」

「そうだ、コイツはあの女じゃない。」

「真由香じゃない、真由だ。俺の…たった一人の家族なんだ！」

「おにいちゃん！」

「ああ！」

真由香は死んだ。  
剛も苦しめた。

最高じゃないか、俺は真由に微笑むと。  
涙を拭いてあげるのだった。

それから、俺は憎しみと悲しみを封印した。  
時間は少しかかったがカウンセリングの先生の協力もあってか大分  
心も楽になった。

それに資産家の息子という生活も悪くないものだ。  
好きなものは買えるし、いいものを着れる。

慣れれば有意義なものだった。

剛も俺に最低限の事を教えてくれただけで厳しい教育はしなかった。剛も愚かな男なのかもしれない。

どこかで天王路グループを変えようと必死だが、所詮は闇にそまつた男なのだろうか？

それとも……

天王路グループの勢力も最初よりはるかに落ちてしまい、今は安定こそしているが最初の頃の栄光はもう見る影もない。

裏の闇とも少しずつだが、疎遠になってきているようだったが、おそらく引いたのではない。見捨てられたのだろうか

剛は案外優しい男だった。

俺達に心配をかけまいとしていたのだろうか？

なにやら俺に責任が回らないように努力していた。

だが悪い、お前は流石に許せなかった。  
一生苦しみ続ける、それがお似合いだ。

尤も、相変わらず剛は真由には愛情を見せなかった。  
だろうな、お前の娘は死んだんだ。

コイツ…真由は俺の妹だ。  
俺達は二人だけの家族なんだよ

「おにいちゃん…！」

真由は記憶は駄目だが、知識を失っている訳でなかった。だから完全な子供ではない、知識面ならば普通の中学、高校一年と同じだ。

「おいおい！気をつけるよ真由！」

妹の真由が笑いかけてくる。

それは嬉しいがなにやら危なっかしい、いつもそつだ。

真由ははしゃぐと周りが見えなくなる。

誰かがしっかり見ててやらねば…

「ほい」



「！」

手を差し出す。真由はニッコリと笑うとその手を握り返してくれた。

そんな、お話。

「笑ってくれてもいい。滑稽だ、俺は愚かだ」

「ッッ！」

鏡治はあまりの迫力に完全に怯んでいた。  
自分の世界では考えられない事。

滑稽？

愚か？

何を言っているんだ双護は、鏡治はもう何がなんだか分からない。  
真由香と言う人間がいた。そしてその人間は真由になった？

絶望の中に光った、最後に残った希望。  
それに双護はすがったのだ。

それは、真由。彼の『妹』

「だけど、答えてくれないか？」

鏡治、俺は…彼女を真由として守りたいのか……」

真由香として殺したいのか？

第134話 MADNESS SPEED LOVE(後書き)

はい、とまあ過去編終了ですね。  
ちょっと長くなっちゃったかな？

次の更新はごめんなさい未定で  
多分、火曜か水曜かなと

では次もよろしく！

第135話 LOVE SPEED LOVE(前書き)

はい、更新ですね。

次は木曜かな？

でも明日111話を更新するかも……

「決断の二対」

ではござい！

第135話 LOVE SPEED LOVE

曇天の空、それは彼の迷いのようだった。

「ずっと封印していた感情が目覚めてしまったのかもしれない。真由香はもう戻ってこない、だから今まで耐えられた。純粹に真由を愛せた。」

「だが今リコンファームがあれば、真由を真由香にさせる事ができる」

俺は真由を、真由香に変えたかったのかもしれない。そして…真由香を、殺したかった。

双護はジツと空を見つめていた。

真由は真由。真由香は真由香、それは分かっていたのに

今、真由香に会えるかもしれない。ずっと彼女を恨んでいた。昔も、今もだ。

「俺は復讐を遂げたいと…願ったのかもしれない」

「……真由ちゃんは、お前を慕っている。お前の事が大好きなんだ  
！」

また、雨が少し降り始めた。  
だが二人は気にする事なく立ちつくす

少しでも雨粒が彼らの心を冷やしてくれるのだと信じて。

「頼むッ！　お願いだ！」

鏡治はぬかるむ地面の中、膝について頭を下げる。  
額に泥をこすりつけるような愚行、情けない姿だと人は嘲笑するの  
だろうか？

双護は、そんな彼を無表情で見つめる。

「お前はッ！　真由ちゃんの味方であり続けてくれ！」

真由ちゃんを愛し続けてくれよおッ!」

「・・・」

双護は目を閉じる。

思い出すのは今まで真由と過ごした楽しい日々、それは双護にとってとても大切な思い出だった。

『リコンファームを使えば、真由は真由香の記憶を取り戻す』

思い出すのは今まで樹里と、家族と過ごした楽しい日々。そして真由香に味あわされた苦痛と屈辱の日々。

それは双護にとって憎悪と憎しみの塊だった。

真由香が、天王路が憎い。

家族への想い……



「真由を愛した二年あまりと、真由香を恨み続けた十二年……」

双護は鏡冶と距離を取る。

雨は激しく、彼らを濡らしていた。

「明日、創英は赤い靴を発動するらしいな。俺は真由を愛している。もし真由がリコンファームによって真由香の記憶を取り戻したなら、  
真由は真由でなくなる。」

真由は真由でなくなる。

それは真由を殺す事と一緒にだ、

ならばせめて真由は真由のまま……死なせてあげたい」

そして、その時……俺の全ては終わりを告げる

「まさかつ……」

「鏡治、俺は……真由を殺す。真由を守る為に」

守る為に　　ッ？

「なんで……なんだよっ！！　殺す必要なんてねえじゃねえか！  
ああそうさ！　皆に事情を話して  
リコンファームを使わないでくれって言えばいいじゃねえか！！」

「……」

何も言わず、何も表情を変えず。

双護は素早く変身を済ませ、キャストオフで鏡冶を吹き飛ばす。

「今日と明日が変わる境界線の時、

俺はもう一度この場所を通って真由を殺しにくる。

その時、お前がどうするかは……」

ダークカブトはその言葉を言いきる事なく、クロックアップで姿を消す。

鏡冶はしばらく立ちつくしたまま、ふいに倒れた。

「なんで……なんだよッ……どうしてなんだよおおおおおッー！」

鏡冶の涙は、雨に溶けていったのだった。

「鏡冶君……」

「真由ちゃん……」

ずぶ濡れになった鏡治。

その帰りを真由は玄関ですっと待っていた。

真由はタオルを鏡治に差し出すと、静かに微笑む。

「風邪……ひいちゃん……から」

「……ありがとう」

二人の雰囲気は重い。

真由はどこかで悟っていたのだろう。

鏡治が今……兄に会ってきた事を。

そして何より何故、兄がコチラへこないのかを。

「ねえ……鏡治君……」

「・・・」

「おにいちゃんは……ボクの事が……嫌い……なんだよね」

ドキリとしてしまつ。

違つと……ただ違つ、そうじゃないと大声で言いたかつた。

だけど、できない。

できないのだ。

「知ってたんだ。」

うつん、詳しくは分からないけど……

前に寝言でお兄ちゃんがボクの事……許さないって……」

真由は言葉を搾り出そうと必死だつた。

だが一言一言発する度に目から大粒の涙が零れていく。

真由は双護が自分を愛してくれていると思っていた、だが不安もあった。

何故兄が自分を恨んでいるのか、分からない。

だから怖い。

きつと勘違いなのだろう、夢でなにかやってしまったのだろうと今までは思っていた。

特に気にしてもいなかった、だが明らかに今回の世界での兄の態度

……

「ボクおにいちゃんに何かしちゃったのかなあ……！」

「だったら許して欲しいよお！」

真由はついに泣き出してしまう。

小さな肩を震わせて、必死に堪え様と齒を食いしばって……

だけど、兄の事を思うと涙が止まらなかった。

母親はいなかった。母親と言うものがどういった存在なのかも実感が無い。

優しい存在？ 甘えたい存在？

そんなの知らない。メイドがいる……

だけど、街で仲良く歩いている親子が羨ましかった。

父親には叩かれて、しきりに同じ事を言われた。

お前は誰だ？

娘を返してくれ！ お願いだ！

お前なんか知らない！

その顔でこれ以上喋るな！

辛かった。悲しかった。確かに父親との思い出なんて思い出せないのも事実だ。



段々と彼は自分を無視するようになり、関わりも無くなっていったが。

酒に酔った父からは、いつまでも罵声を浴びせられた。

違う、そうじゃない。こんなんじゃない！

ドラマやアニメで見た『父親』はもっと優しくかった。

こんなの……あんまりだ。

メイドさんや会社の人、自分に優しくしてくれたけどどこか壁があった。

多分、自分が社長の娘だと言うから遠慮しているんだ。傷つけたらどうなるか分からないから……干渉は控える。

でも、だけど……

兄だけは違った。

一緒にいろんな事をして遊んでくれたし、

男の子なのにおままごとにも付き合ってくれた。

一緒にいろいろな物も食べたし、好きな物は必ず分けてくれた。

一緒にテレビも満たし、一緒にお風呂にも入った。

一緒に眠ったし、一緒に泣いたりもした。

大切な、大切な家族なんだ。

でも、不安になってきた。

兄は……自分のことが嫌いなんだろうか？

そんなの……いやだ

「おにいちゃんに会いたいよおおおおおッッー！ー！」

「……っっー！」

会いたい、それだけ。

だが　　ッ　　鏡治は理解する。

こんなにッ、真由ちゃんは双護の事を慕っている……

ああそうだ、真由ちゃんにとって本当の家族は双護だけなのだからッ

鏡治の眼にも涙が浮かぶ。

真由は、彼女は……

『俺は真由を助けたいのか、真由香を殺したいのか……』

殺したい程憎んでいた人間と、全てを許してまで愛した人間が同じ体の中にいる。

鏡治はそんな経験がない、だから…分からない。

でも、たった一つだけ

「真由ちゃん、おにいちゃんが好き？」

「うんっ！ 大好きだよおお！」

だから仲直りしたいよおおおお！」

「っただけ分かることがあるのなら……」

「じゃあ、仲直りできるよつに俺が言っつてあげるよ」

「本当…?」

この娘には笑っていて欲しいッ!

「ああ! 約束だ!」

「うん!」

誓いの指を絡める。

双護、お前をぶん殴ってでも真由ちゃんへの愛情を呼び出してやる！

覚悟しろよ

ッ

「真由ちゃん…その、えっ」と…」

「？」

「好きだ…よ」

「…うん！ ボクも鏡治くん好きだよ！」

鏡治は手を差し出す。

真由はニツコリと笑ってその手を握るのだった。

まだ外は暗い。

それはそうだろう、もうすぐ時計の針は零を示そうとしているのだから。

まだ皆眠っている時だ、しかし赤い靴はもうすぐ発動される。

司達は今日、ブレインタワーに突撃をしかける作戦だった。

前回は失敗したらしいが、今回は内部に詳しい神也達がいる。

創英の野望を絶対に打ち砕く為に戦うのだ。

そして、同時にリコンファームを発動するかもしれないと言う事がある。

リコンファームが発動すると言う事は、真由が実質死ぬと言う事だった。

「っしゃああああー！」



鏡治は気合を入れる。

外は大雨だが彼の心は迷いなく晴れ渡っていた。

悩んで答えが出るか？

ああ、そうだ。でねえよな鏡治！

だったらもう真正面からぶつかっていくしかねえだろ！

双護が迷ってんだっいたら強引に答えを決めさせるまでよ！！

「ガタツクゼクター！」

『ん？』

「頼む！ 俺に力を貸してくれッ！」

頭を下げる鏡冶を彼は笑う。

『今さらなんだよお前、本当不思議な奴だな』

「へっ、ほっとけよ」

笑い合う二人、だがそこにもう一つの声が混ざる

「鏡冶……」

「！」

暗い玄関。

それが誰か鏡冶は判断に遅れてしまう。

現に彼は姿を見せなかった、だが声だけはハッキリと聞こえる。

「今、鏡治の世界では……仮面ライダーは兵器なのかもしれない」

「…………ツ？」

そうだ。マスクドライバーはフォームを殲滅する為に作られた兵器。  
それ以外の物ではない。

「……」

男は言う。

俺達の世界じゃ……仮面ライダーは

「ヒーローなんだっ！」

「!!!」

「双護を…どうか、頼む」

「…ッ！ ああ！」

鏡冶は頷くと玄関を飛び出す。  
雨が彼を歓迎した、ああ上等だ。やってやるッッ!!

「そっちもよろしく頼むぜ！ 司！」

走り去る鏡冶を物陰から司は見る。

驚いたな、まだ少ししか話してないのに…

「……ハッ、俺達も勝たないとな」

司は微笑むと、教室に戻っていくのだった。

第135話 LOVE SPEED LOVE (後書き)

Wiiのカービイを買いました。

遂にここまで来たかと

感動で目頭が熱くなりましたね、はい

まあぶっちゃけ、最初はカービイの小説書ころころと思ってましたw

いやいや、まあいいや。

では次もよろしく！

第136話 LIKE SPEED LOVE(前書き)

はい、更新ですね。

ごめんなさい、次の更新は未定で。

一応土日には更新できると思いますが……

「二人の戦い」

ではどうぞー！

第136話 LIKE SPEED LOVE

「・・・」

雨は少し勢いが減り、小雨になっている。  
双護はその小雨のなかをゆっくりと歩いていた。

傘はささない、何故かそう言う気分だった。

雨が彼を冷やす、冷静にさせる。  
彼は何度も自分に問いかける。

真由を愛している？



イエス。

真由を守りたい？

イエス。

真由とずっと一緒にいたい？

イエスだ…

じゃあ、真由香を恨んでいる？

イエス。

真由香を殺したい？

イエス。

真由香と永遠に別れたい？

イエスだ…

彼が全力でリコンファーム使用を阻止しなかったのも、迷いがあったからに他ならない。  
ずっと抑えていた、それは苦痛じゃない。

だって、もう永遠にアイツは蘇らないのだから。

もちろん、これからもそうだと思っていたのに。

『おにいちゃん…!』

『おい双護お！ きゃははは…!』

双護は迷っていた。

自分が今、どこを歩いているのか？

真由香を殺す道？

真由を守る道？

分からない、そう分からない。

だけど、真由を殺せば……自分は後悔するのだろうか？

それとも答えを見つけれられるのだろうか？

そう、これ以上真由香の幻影に囚われて、真由を愛せなくなるくらいならば……

いっそ……

「……」

双護は、ふと足を止める。

向こうから誰かが歩いてくる。

双護はそれが誰なのかを確かめるため、その場に止まった。

「・・・」

鏡治は歩きながら何度も自分に問いかけた。  
一歩一歩たしかに踏みしめる彼は、自問を繰り返す

真由を救いたい？

イエス。

真由を守りたい？

イエス。

真由とずっと一緒にいたい？

それは…い、イエスなの…か？

ああそっだ、イエスだろうな。

じゃあ、双護を救いたい？

イエス。

双護と真由を再び元の関係に戻したい？

イエス。

双護にまた真由を愛してほしい？

イエス。

創英を止めたい？

イエス。

この街に、世界に平和を取り戻したい？

イエス。

そう、何度やっても、何を問うてもイエス。

正義の味方に憧れ続けた人生。

これからもそうだろう、ヒーローもんはハッピーエンドが似合う。

いや、そうだ。ハッピーエンドじゃなきゃいけねえ！

鏡治は切にそう思う。

誰かが泣いて、誰かが悲しんで終わるなんて認められないな。

「・・・」

前で誰かが立ちつくしている。

鏡治はそれが誰か確かめる事もせずにとんどん前に進んでいく。

止めれるか？



止めてみるよ。

ああ、そうだ。止めるぜ俺は

「……真由は？」

「まだ寝てるよ、でも今日にはリコンファームの所へいく。

いつでも発動できるようにな」

二人は一定の距離を保って立つ。

二人の間には短いようでもとても大きな距離がある。

友達と言う訳でもない。

双護にとって鏡治はただ少しの間、妹の面倒を見てくれた人…と言っただけ。

鏡治にとって双護は少しの間だけ一緒に過ごした少女の兄…と言っただけ。

そう、その程度の関係なのだ。

普通ならばもう関わる事のない関係なのかもしれない。

お別れを言えばもう二度と合う事のない関係なのかもしれない。

だが…しかし。

『おにいちゃん!』

『鏡治くん!』

この二人の間には…確固たる橋がある。

強靱な架け橋が存在しているのだ!

「・・・」

「・・・」

二人は分かっている。

それを渡らなければどちらに進めはしないのだとッ！

二人が進む先には双方が立っている。どかさなければならぬのだ。

「鏡冶、お前」

「・・・」

「真由が好きか？」

「……ああ、そうだな。多分、いや…好きだ」

「ラブか？」

「さあ、どうだろう？」

でも、真由ちゃんという時はスゲー楽しいんだ。

できればずっと一緒にいたい」

鏡治は笑ってみせる。

双護は少し、ほんの少しだけ微笑んだ。

「ああ…そうだな。

できれば、お前には真由を愛してほしい…

今だけでも　ッ

「？」

双護の瞳には真由が映っていた。

もっとも、それが真由なのか？ 真由香なのかは分からない。

もう一度言おう、いや何度でも言おう。

双護は真由を愛している、だが迷っていた。

真由は愛せても、真由香だけは愛せない。

だから……

「真由を愛してくれ、女として」

「……」

鏡治は何も言わずに頷いた。

どちらが真由を……より愛しているのか、確かめたいのだ。

そして同時にそれは決意。

もし自分が勝てば……真由を、真由香を殺す。

今回の事で、自分の歩く道が分からない程に混乱した。

真由香が蘇るかもしれないというだけで、彼女への憎悪でおかしくなりそうだった。

いやもう既におかしくなっているのかもしれない。

このままりコンフォームを発動せずに終わったとして、真由を愛せるのだろうか？

また似たような事が起こったら、真由を真由香としてみてしまうのではないだろうか？

真由に、真由香へのどす黒い思いをぶつけてしまっんじゃないだろうか？

それが怖かった。

恐れていた。

真由には常に幸せでいてほしい、悲しい思いをしてほしくない。  
だから、せめてその前に……

自分の手で……終わりを、真由を真由のまま終わらせて……

「俺は真由を愛している」



家族として。それはLIKE

「俺も、真由ちゃんを愛しているぞ」

一人の女として。それはLOVE

二つのゼクターが激しい火花を散らしながら飛翔してくる。  
いつからか赤い靴、創英、世界は二人の心から消えていた。

彼らの世界にいるのは、双方の愛と

たった一人の少女。

「俺は真由を守る。守るんだよッ……」

「守る？ ああ、違っぜ双護…救わなきゃならないんだよッ！」

もちろん、お前も！

真由への愛に縛られ、真由香への憎悪に縛られたお前を

「もうこっから先は絶対に誰も悲しませないッ！」

俺は…俺はッッ！

今だけでいいっ！

ならせてくれよ、ヒーローにッ！！

「俺はッ、正義の味方！悲しみを殺す　　ッ  
仮面ライダーなんだからよおおオオオオオオオオオオオオッ！」

『 H E N S H I N 』

「来い、お前に勝てば……」  
俺は彼女から解放されるんだからなッ！」

『H E N S H I N』

二人は同時に変身して走り出す。  
愛と愛がぶつかり合う時、立っていられるのは……

「キャストッッ！！オフッッッ！！」

「キャストオフ……ッ」

『Cast Off』

たった数日共に過ごした愚直な愛か？  
『Change・Stage  
eetle』

それとも数年間の、迷い始めた愛か？  
『Change・Beetle』

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！  
オオオオオオオオオオッ！！」

「…………ッ！」

カリバーとクナイがぶつかり合い、激しい火花を散らした！

二人の瞳には、愛する少女がいる。

その少女を守る為に、救うために…………彼らは戦うッッ！

第136話 LIKE SPEED LOVE（後書き）

変更点をここで一つ。

クナイガンの構造が少し違います。

クナイモード時は連射性に特化した銃に、アックス時は威力を重視した単発式になります。

銃口も位置が少し違うと言っ事で。

では次もよろしく！

第137話 DUEL SPEED LOVE(前書き)

はい、更新ですね。

ごめんなさい、次は未定で

多分明日は111話だけ更新しそうかな……

「愛VS愛」

ではどうござー!



第137話 DUEL SPEED LOVE

「ウラアアアアアッッ!!」

カリバーで舞うように斬りつけていくガタツク。  
ダークカブトは最小限の動きでそれを防いでいく。

火花が視界を一瞬隠すが、それでもガタツクの攻撃はダークカブトには届かない!

「がら空きだ」

「ッ!!」

ダークカブトの足払いが決まり、ガタツクはそのまま地面へと叩きつけられる。  
そこに打ち込まれるだろう銃弾をかわすためにガタツクは地面を転がる。

「フツ！」

だがダークカブトのクナイガンはしっかりとガタツクを捉えていた。ガタツクは衝撃に耐えながらもカリバーを一つダークカブトに向けて投げる！

放物線を描きながらカリバーはダークカブトに向かった。

「・・・」

だがそれも簡単に避けられてしまう。同時にガタツクの装甲から火花が散る。

しかし

「プットオン！」 『Put On』

「何ッ？」

弾かれたカリバーと周りにあった装甲の破片が、ガタツクに収束する。

その際に装甲の群がダークカブトにぶつかり、ダメージを与えた。

よろけるダークカブト、そこへガタツクバルカンが向けられる

「チッ！」 『Clock Up』

だがバルカンは着弾しない。

ダークカブトはクロックアップを発動させて回避したのだ。

そのままガタツクに連撃を仕掛けるダークカブト。

尤もマスクドフォームのガタツクは防御力が高く、

大きなダメージは与えられないのだが……

「お前は俺が真由ちゃんを連れて行こうとした時ッ！  
全力で挑んできたなっ、殺されるかもしれないのに…！」

真由ちゃんのためにッ！」

ガタツクはダークカブトの攻撃が当たる感覚から、タイミングを予想して反撃に出る。

しかし虚しくもそれは空振りに終わっていくのだが……

何かがつかめそうで、ガタツクの闘志は尚、膨れ上がる。

「あの時はまだ真由香への憎しみを抑えていたからなッ！」

足を中心にダメージを与えていくダークカブト。

ガタツクがよろける瞬間を見て、自らもプットオンを発動させる。

「俺にはお前の気持ちはわからないッ！  
殺したい程に憎い相手と　ッ！」

マスクドフォームの強力な蹴りを受けてガタツクは倒れそうになる。  
しかし気合で踏みとどまると、そのままバルカンを発射した！

物凄い衝撃でダークカブトの意識が一瞬とんだが、  
彼女の姿を思い浮かべ、歯を食いしばる。

「グッ！」

「殺したい程憎い相手と、愛した人が一緒の体！  
そんなの俺には一生わかんねえよ！」

カブトはクナイガンをアックスモードに変えて振り下ろした。  
両者倒れそうに、気を失いそうになる状況の中、にらみ合う。

仮面越しに見る互いの眼。うつる少女　　ッ！

「真由は純粹だ。その純粹な心に俺は救われてきたっ！」

「俺もだよッ！！　だったらそのままでもいいじゃねえか！」

『お兄　　』

『おい、双護お!! お前』

「チラつくんだよッ、真由香がなあッ!!」

『Cast Off』

「ぐあああッ!」

吹き飛ぶ両者、着地を決めたのはダークカブト。  
ガタツクはそのまま倒れてしまう。

そのガタツクに、ダークカブトはクロックアップで一瞬にして距離を詰めた。

地に伏したガタツク、隙だらけの体      ツ!!

だがしかしッ!

それこそガタツクの狙い!



「ラァアアッ!」

自らもクロックアップで同速になっていたガタツクは  
カリバーを重ね合わせ、ハサミのようにカブトを拘束する!

「クッ!」

「お前はッ! 真由香さんを殺して満足するのかよッ!」

『R i d e r C u t t i n g  
』

「…ッッ!」 『P u t O n n  
』

ダークカブトの装甲がガタツクを背後から襲う!

その衝撃でガタツクはカリバーから手を離してしまった。

ダークカブトは素早くカリバーを蹴り飛ばすと、アックスモードで斬りつける！

「ぐあああああああッ！！」

「……後悔か、するだろうな。」

真由への罪悪感、感じない訳がない」

「だったら……グウ……ッ！」

もういいだろ！ 真由ちゃんだけを愛して」

「俺が、俺と樹里が受けた屈辱！ あの女への憎悪も確かなんだ！」

重い拳がガタツクに打ち込まれる。

プットオンを発動する為にガタツクは手をゼクターへ向けるが  
ダークカブトはそれを許さない。

クナイガンでガタツクの手を弾くと、全力を込めて蹴りを仕掛ける

「グッ！！」 『Clock Up』

ダークカブトの拳が遅くなる。

ガタツクはバックステップで距離を空けると、膝をついた。

「ゲホッ！ ゲホッ…！」

腹部を押さえて、ガタツクはダークカブトを見る。

愛と憎しみの狭間で彼は葛藤しているのか？

それとも憎しみの先にある後悔さえも受け入れる気にいるのか？

「何かお前をそこまでさせるんだよッ…！」

ガタツクのドロップキックはダークカブトを大きく吹き飛ばす。  
さらに追撃、地面へ着かせる事のない猛連撃。

「真由香さんへの想いがあっても、お前は真由ちゃんを愛してやっ  
てくれよッ！」

お願いだ双護！

真由ちゃんはお前しかいないんだよ！」

ダークカブトは瞬間的に手を伸ばす。

無意識の一撃が、一瞬だけガタツクの動きを止めた。

その隙にキャストオフを発動させてガタツクとの距離を空けた。

「真由香が邪魔するんだよッ！」

真由への愛も、思い出も！」

全部アイツが邪魔をするんだよ！」

クロックアップによって激しい高速戦が繰り広げられる。  
閃光の様に二人はぶつかり合い。

互いの装甲を削りあう。

クナイガンとカリバーでは、ガタツクの方が接近戦においては有利  
だろう。

だがダークカブトはクナイガンを的確に操り、同等の戦いを見せた。

いや同等なのだろうか？

「お前に、俺の気持ち分かるか？」

「ッ！」

ダークカブトの蹴りがわき腹に叩き込まれる。

呼吸が止まる、ガタツクの動きが鈍りその隙にクナイで連撃を決められた。

なんとかカリバーで弾くが、それでも大きいダメージを受けてしま  
う。

「真由ちゃんへの想い？」

ガタツクの心が揺れる。

俺は……真由ちゃんを守りたい。

だから戦っている、双護ともまた仲良くしてほしい……

「……………」

確かに真由の事を少し女性として意識した時もあった。  
だがそう言う事を抜きにしても守りたい。

その想いに嘘はない。

だけど真由香を自分は知らない、真由香も天秤にかけて戦っている  
双護に……

想いの強さで勝てるのか？



「グッ!!」

腹部に衝撃が走る。

撃たれたのか？

鏡冶は辺りを駆け回りながらダークカブトに近づいていくが、ダークカブトに軌道を読まれ蹴り飛ばされる。

「鏡冶、お前は…真由を救いたいと言っただな」

「くッ……」

「なら…お前は、その事だけを考える」

ふと気がつけばダークカブトが目の前にいた。  
踵落として肩を抉られる、苦痛の声を上げてガタツクは踏み込んだ。

そこへさらに襲い掛かるクナイガン、気が飛びそうになるが鏡冶は  
こらえる。

その眼をダークカブトは見ていた。

「俺も救いたいと言ったな？」

「ガッ……ぐあ」

ガタツクはタツクルでダークカブトを押し出すと、カリバーで思い切り突く。  
ダークカブトは衝撃でよろけ、その隙に後ろへと跳ぶ。

「……ッ

鏡治、お前の瞳に…俺を映すな」

「何ッ!？」

「お前は真由の事だけを考えろ、真由だけを守れ。  
でなければ、俺には勝てない」

「ッッ!」

『Clock Over』

ダークカブトはゆっくりとクナイガンをガタツクに向ける。

「俺は真由を殺す、お前からしてみれば…悪だ」

「！」

「俺は真由を守る、守る為に殺す。」

それはお前にとって…悪になる」

ダークカブトはクナイガンを発砲する事はなかった。  
代わりにその瞳で、彼を……

いや真由を見ていた。

ただ、ひたすらに

「お前は俺を倒すんだよ。じゃないと真由を守れない」

「……」

鏡治は双護の事も救いたい、傷つけどくなくないと思っていた。  
その甘さを捨てるといっているのだ。

戦う中でダークカブトは気づいた。

ガタツクは自分に攻撃をするものの、圧倒的に足りていないモノがある。

「俺は真由を殺す、その思いをこの戦いで変える気はないだろう。  
だったら、お前が俺を止めるには……」

「ッ！」

鏡治はその言葉を理解した。

ガタツクはダークカブトを見る、しかし彼の瞳に自分が映っていない事を悟った。

駄目なのか？

やるしかないのか？

ガタツクは迷う。

救いたいと願う事は罪か？

分かり合えないというのか？

彼女を守りたい、救いたいという共通の願いは届かないのか？  
ガタツクは拳を握り締める

「鏡冶、お前には……」

ダークカブトは引き金をひいた。  
弾丸がガタツクの体に直撃する、痛みと衝撃。

なにより伝わるのは……



「お前には、殺意が、覚悟が足りない」

第137話 DUEL SPEED LOVE（後書き）

ブットオンもキャストオフも強さを調整できます。  
その場に落とす事も可能。

クロックアップは体力を消耗するので、無制限ではない

一度のクロックアップ限界時間は、各々の実力で左右されます

まあこんなところかな  
では次もよろしく！

第138話 SECOND SPEED LOVE（前書き）

はい更新ですね

すいません。ちょっと今回長めかも

結構どこで話を切るか悩みますね。

あとちょっとリアルが忙しくて今週は更新少ないかもしれません

多分111話どこかで更新すると思います

あと後書きでフォーゼの軽い感想？

書いてるんで、見てない方はスルーお願いします

「鏡治に覚悟が足りないと言う双護」

ではごっごぞー！

第138話 SECOND SPEED LOVE

「覚悟が……殺意が足りないだとッ？」

ダークカブトはガタツクを殺すつもりでいる。  
だがガタツクにはそれが無い、足りないのだ。

それを彼は覚悟と言う。

「鏡治、本気で俺を殺しにこい。でなければ……真由は守れない」

「真由ちゃんを……守れないッ!？」

「ああ、そつだ。俺を殺す気がないのなら……」

お前は、誰も護れない　　ッ

「!?!?!」

「本気でこいッ！　新意鏡冷いイイイッ！」

真由を守る事だけを考える…

「お前を殺す？」

一瞬、まさに気配すら感じさせずにガタツクはダークカブトの後ろへ回りこんでいた。

反応する前にカリバーで無数の閃光を刻みつける。

光の嵐はダークカブトを宙へと舞い上げた。

まだ辺りは暗い、そこへ咲く大きな華。

激しく火花を散らすダークカブトはまさに『華』と言つにふさわしいだろう。  
ダークカブトが衝撃を感じたとき、もう彼は自分がどこにいるのかすら分からなかった。

ただ、見えるのは青き閃光

『R i d e r C u t t i n g  
』og

意識が戻った時、ダークカブトは高く持ち上げられていた。  
持ち上げると言つよりは挟まれ、担ぎ上げられたといったほうがい  
いだろう。

もの凄い力と、電子音がしらせたとおり彼の必殺技が拘束力を強める。

抜け出せない。それを理解すると同時にだった。

激しい衝撃に苦痛の声をあげるとそのまま地面に叩き付けられる。

衝撃で足がふらつき、そこへ今度は拳が襲い掛かる。

一撃を受けたと思えば、もう四発は叩き込まれていた。

「  
ッ  
」

耐えられずにダークカブトは倒れる。

いや……違う。彼はダークカブトが地面へ背中をつける事を許さなかった。

後ろへ回られたのだ。

倒れそうになるダークカブトを彼は蹴り上げると…

『Put On』

打ち上げられたダークカブトに次はバルカンの嵐がやってくる。  
爆発が終わり、新たな爆発がダークカブトを包んだ。

爆炎のゆりかごはダークカブトを決して逃がさない。

『Clock Up』

苦し紛れに発動させたクロックアップ。



バルカンの雨は回避できたが  
ダメージがでかすぎてしばらくまともに立てなかった。

その後、ダークカブトはガタツクにクナイガンで攻撃を与えようと  
接近する。

「ッー！」

だが、クロックアップをしているというのにも関わらず、  
ガタツクはその手でダークカブトの手を掴んだ。

混乱するダークカブトに浴びせられるバルカンの嵐。  
近接で連射される高威力の弾丸。

どんなにもがこうとも、衝撃がこようとも  
ガタツクがしっかりと手を掴んでいるため吹き飛ばすことが出来ない。

耐えられない、耐えられる訳が無い！  
防御力に特化しているマスクドフォームにならなければ

『Put On』

装甲がガタツクにぶつかり動きを鈍らせる。  
ダークカブトはその隙を狙って拳を振り上げるが

「……」

「クッ！」

ガタツクはその拳を弾くと、さらにバルカンを発射する。  
怯むダークカブトに蹴りや拳の猛連撃を加え、さらにバルカンで吹き飛ばす！

「ツツ！」

『Cast Off』

受身を取れずに叩きつけられるダークカブト。  
ガタツクは装甲を彼にぶつけながら一気に接近する！

そしてカリバーで何度も斬りつけた。  
さらにハサミの様にしてダークカブトを拘束するとそのまま大きく振り回す。

ジャイアントスイングをしばらく続け、投げ飛ばすとそのまま自分もドロップキックで跳んで行く！

「ぐあああああッッ！」

地面に手をつくダークカブト。

それをガタツクは何も言わずに見ていた。

先ほどとは動きがまるで違う。

これが新意鏡治、本来の実力なのか？

「フッ……まさか、ここまでとはな」

「ッ……」

ガタツクは殺意を開放してダークカブトに襲い掛かった。  
『戦いの神』と称される程の力は圧倒的。

だがダークカブトはそれでいいと笑う。

劣勢なのは……どちらか？

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

「ハアアアアアアアアアアアアッ！！」

真由と自分達の命を掛けて二人はぶつかり合う。  
ガタツクカリバーの激しさは先ほどの比ではなく、ダークカブトも  
防御が遅れてしまった。

「ウラアアアッ！！」

「グウウアアアア！！」

巨大な十字架がダークカブトに刻まれる。

絶大な衝撃でダークカブトは地面に倒れてしまった。

そこへ振り下ろされるカリバー！

ダークカブトは蹴りでそれを弾くと、起き上がりながらの回し蹴りでガタツクの顔を叩く。

平衡感覚を失ったガタツクにここぞと言わんばかりの連続蹴りをくらわせた！

「やっと殺す気になったかッ！

鏡冶！ そうだ、それでいいんだよッ！」



「決めたんだよッ！ 殺すとか殺さないとか甘えてんじゃねえぞ！」

「何っ！ ゲツッ！！」

ダークカブトの頬に思い切り食い込むガタツクの拳！

ゆるる脳と視界。

しかし不思議にもダークカブトは鮮明にガタツクを見ている。

「殺す気でこい？ 真由だけを見る？」

ふらつくダークカブトにさらに拳が炸裂する。

「俺は誰も護れない？」



「ッ！！」

頭突きがダークカブトの脳を揺らす。

ダークカブトはガタツクの瞳を見た、見てしまった。

仮面越しのそれはハッキリとダークカブトに向けられているのだ！

「何 俺に忠告してんだよッ、何俺に与えようとしてんだよッ！！  
違うよな、違うだろうがー！！」

「何だと…ッ」

一歩、ガタツクは足を踏み出す。

ダークカブトはその迫力に一歩後ろへと下がってしまった。

与える？

忠告？

「お前は俺に勝つんじゃないかねえのかよ！

殺す気なんじゃないかねえのかよッ！」

「当然だ！俺はお前を殺して真由香を殺すッ！」

「真由ちゃんはどつなんだよっ！殺すのか！」

「俺は真由を守るんだよっ！」

何だよそれはあああああ！

ガタツクの両腕がダークカブトに打ち込まれるッ！

「殺意が足りない？ 覚悟が足りない？

ああ、そつだ。

足りないだろうよ、俺もッお前もオ！」

「…ッ！！」

アームハンマーをガードしきれず、ダークカブトはそのまま地面へ倒れる。

地面を見るダークカブト。

殺意が足りないと彼に言った。

覚悟がないと彼に言った。

それは果たして……

彼に言った言葉なのだろうか？

「守るために殺す？ ふざけんなッ！ そっやって逃げるつもりか  
よー！

真由ちゃんを殺す事からいい訳をつくって逃げるのか!?

結局お前は真由香さんへの復讐の為に真由ちゃんを殺すんだろっ  
がッ!

その事実から逃げてんじゃないやねえよ!!

「くっ」  
「…」

「お前は心の中で俺に殺されるシナリオすら  
正当化してるんじゃないやねーのかッ?

真由ちゃんを殺す事をチラつかせて、俺を煽って!  
殺意を呼び出させて殺される!

その結果すらどこかで望んでるんじゃないやねえのかッ!?

「違う…ッ！ 俺は真由を…」

「俺の目を見て言えッ！

天王路双護オオオオオオオッッ！！」

「くっ！！」

クナイガンを正面から受けるガタツク。  
だが先ほどまでの威力がない、弱々しい一撃ではガタツクは怯まな  
い！

彼らは覚悟を決めているのか……

それとも

まだ迷っているとしても言いつのか？

「お前はまだ迷ってるんじゃないのかっ！

口では何とでも言おうが結局は真由ちゃんと真由香さんの狭間でくすぶってる！

それを無理やり終わらせてたくて必死なだけだろっ！！

お前は真由ちゃんを守るとかいいながらっ

真由ちゃんと目すらあわせてないんだよっ！」

「俺が真由から逃げてるだどっ！？」

「違うのかよっ！？」

真由ちゃんの目すら見ず、真由ちゃんと関わろうとせず！

何が守るだよっ！ 笑わせんなあああッ！」

クナイガンを弾く！

思わずそれを目で追うダークカブトに、拳が打ち込まれる

「真由ちゃんがお前をどれだけ愛してるか分かってんのかよッ！」

「お前に…ッ！」

ダークカブトは全てを振り払うように首を振ると、自らも拳をガタツクへぶつける。

だがガタツクは怯まない。

動じないッ！



「何が……分かるッ！」

「分かるかよッ！ 知るかよッ！」

ああ、そうだ。俺にはお前の気持ちは分からない。理解できない！

でも人間なんてそう言う生き物だろうがッ！

誰も他人の気持ちなんてわかんねーんだよッ！

誰も理解してくれない、誰もわかってくれない。

それが世界だろうがああああッ！」

「グッ！ ガアア！！」

「お前の気持ちなんて俺に分かるかよッ！！」

殺したい人間と愛した人間、同じ人なんて辛いよな

……とか言っただけなの？

それこそ甘え以外の何物でもないだろうがッ！

いるわけねーんだよ他人の気持ち完璧に分かる人間なんてッ！

同じ境遇だろうが、同じ体験してよおうが！

共感できても完璧に理解できるとはかぎらねえだろうが！！

第一それでお前は満足なのか？

分かってもらえたとして、今俺が理解したとして！

この状況が何か変わるのか！？

「ツツツウ！！」

「真由香さんが憎い？ 真由ちゃんを愛してる？ だから殺す？

ああ、そつだ！

結局それはお前が真由ちゃんを捨てて

真由香さんへの復讐をとったにしかすぎねえ！ 簡単な話だよな

ああッ！



「お前はッ！ 真由と出会って間もない！  
そんな分かったような口をきくなあああああ！」

「理解したくもねえよッ！ いい加減理解しろよ！！  
お前は天王路真由って人間が憎くて殺したいってよおおッ！

それ以外の答えはねえんだよ！」

「違っッ！！ 真由を愛しているのは偽りない真実だ！！！」

「じゃあ愛しぬけよッッ！ お前から差し出した手だろうが！！  
繋いだ手を！ 求めた絆を…

お前から放棄してんなよおおおおッ！」

水しぶきを上げてダークカブトは倒れる。

「真由ちゃんはお前に嫌われいなか怯えてた。お前に許して欲しいと泣いた！」

「ッ！ 真由……」

「希望なんだよ、絆なんだよ真由ちゃんにとってお前はなによりのッ！」

真由ちゃんの気持ちをわかってやれなんて言わないさ。

「ただ、これを知って尚、真由ちゃんを殺すかどうかだけは聞かせろッ！」

「・・・」

「命を奪うって事がどう言う事か、お前は分かってんのかよ…ッ！  
その絆を、家族を殺すんだぞ！！」

もう会えないんだッ！ 奇跡でも起こらないかぎりッ！！」

お前は真由ちゃんを本当に愛しているのか？

「当たり前だああああああッッ！！」

ダークカブトの蹴りがガタツクの頭部に向けて放たれる。  
いきなりの攻撃にガタツクは防御がおくれ、その角で受け止める事  
となった。

「ぐう！」

「もう御託はいい！うんざりだッ！ お前と俺、勝つか負けるだ！」

その言葉にガタツクは首をふる。

「そうやってまた目を背けるのかッ！ ああ、ちがつぜ！  
お前は今俺に反論の蹴りをぶつけた。

それは真由ちゃんを愛してる証拠じゃないのか……ッ」

「何……ッ！」

「思い出してみろ、もっと根本的な……ああ、そうだ。お前が思い出すんだ。」

「一から、真由ちゃんへの……想いってヤツをッ！」

「……ッ！」

ダークカブトはガタツクの攻撃をその身に受ける。だが、倒れなかった。



そして思い出す、真由との日々を…

「憎いか？ 真由香さんがッ!？」

愛しいか？ 真由ちゃんが!

怖いか？ 真由ちゃんとこれから生きていくなかで  
今回みたいな事がいつ起きるか？

真由香さんの影に、存在に怯えて真由ちゃんを愛せなくなるのが  
怖いかッ!？」

拳と拳がぶつかり合い、激しいエネルギーを放出する。

「愛する事が怖いなら、愛さなければいいッ!  
そんな都合のいい、いい訳がきくかよッ!!!

思い出してみろっ、お前が愛した真由ちゃんは…

お前が守ると決めた真由ちゃんとの思い出はッ、  
本当に恨みに飲み込まれるのかよ!!」

「ッ……!!」

真由……との……思い出？

第138話 SECOND SPEED LOVE(後書き)

パワーデザイナーけっこう活躍しますねww

でもどうなんですかね、予算の壁が心配ですけど……

本当なのは知らないけど

ガタキリバも予算がアレで出番少なかったとかなんとか。

まあいらぬ心配かなw

では次もよろしく！

第139話 THIRD SPEED LOVE (前書き)

はい、更新です

んー、まあ結構普通に更新できました。  
ちょっと忙しくなる時がまだあやふやで

「ガタツクVSダークカブト、決着の行方は？」

ではどござー！

第139話 THIRD SPEED LOVE

『お兄ちゃんのお名前はなんて言っの？』

『ああ、双護って言うんだよ』

『そっ…っ！』

『ああ、護りたいものが2つあった時、一つに迷う事無く2つ護れるようにっ！』

『すごいね…！ カッコいいね…！ すてきだね…！』

『フッ、なかなか分かってるな真由は。さすがは俺の……』

『?』

『俺の……』

なんで、何でコイツが死ななくて……俺の家族が死ぬんだよ。

代わりにお前が死ねば良かった。

お前がいなくなれば良かったのに

ツツ!!

そんな感情がふと脳裏をよぎる。

真由香を真由として接する様になっただばかりの頃……

『おにい……ちゃん? どうして……泣いて……るの?』

『……何でもない』

「……ミミオオオオオオオオオ」

『待つておにい……ちゃん』

『?』

「ゲッツ！！！」

「ツア……………」

ガタツクの拳が競り負け、ダークカブトの拳がガタツクを吹き飛ばす。

どうしてだろう、一撃を打ち込む度になにか……………」

『おにいちゃん……………かなしい事が…あつたらボクが守ってあげるね……………』

『え？』

バチンと、恨みの風船が弾けた気がした。



屈託のない笑顔。

アイツとは違う……アイツには絶対にだせない笑顔

『おにいちゃんが…2つ守るなら……』

真由はおにいちゃんを守るの！』

『真由……』

『だから真由と一緒に遊んでくれる？』

『あ、ああ……ああッ！』

遊んでやるわ、いつだって……

だって、お前は  
『

俺の妹なんだから。

アイツはもう死んだ。もういない。

だったら、コイツは真由香じゃない。

行き場をなくした……俺と同じ存在だ。

寂しい思いなんてさせないさ。

俺たちは……家族になれる。強い絆できつと結ばれる筈だ！

俺は、真由を愛する！

愛しぬく！

俺は

真由の兄貴になるんだー!!

「クッ！ おおおおおおー!!」

「ガッ!」

無茶苦茶に我武者羅にガタツクに拳を向ける。  
思い出す彼女の笑顔。

愛しぬか……

過去の自分を思い出して、少し笑ってしまった。

「ズアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

ガタツクの蹴りとダークカブトの蹴りが同時に炸裂するッ！

また、思い出がフラッシュバックしていく。

『樹里！ 泣いてるのか！』

『お兄ちゃん…！』

『お前…泥だらけじゃないか！ どうした!?!?』

『うつん！ なんでもないので！ 気にしないで………』

『ブスは泥でパツクしないと駄目でしょ！ キヤハハハ!』

『えー、真由香ちゃん酷過ぎい！ あははは!』

『いいの、いいの。』

どうせあいつ等の親はパパの犬なんだから！



今度はガタツクの蹴りが、ダークカブトの蹴りを打ち破り炸裂する。

よろけるダークカブトに発射されるバルカン砲！

ダークカブトは自らの眼前に迫ったバルカンに気づくが、反応が鈍りまともに受けてしまう。

その着弾の瞬間に……

彼女が見えた。



『おにいちゃん……』

『ッ！ どうした真由！ 泥だらけじゃないか！』

『あのね……学校のおともだちが…お前は…ち  
』

子供は残酷だ。差別と言うことを面白がるらしい。  
真由は確かに、『普通』ではない。

だからって……

『真由ッ！ もういい！ もう喋るな！』

『……』

『そんな事を言つマツは俺がぶちのめしてやる！  
だからお前は心配するな。』

『気にするな……』

『…っん』

涙を浮べて胸に顔を埋める彼女が、堪らなく愛しかった。  
心が、冷たい心に光をくれる。

彼女がいれば、俺は生きていける。

だから……真由は、笑っていてくれ。

『お前は笑っていてくれ……』

お願いだ……お願いだから……』

『おにい……ちゃん？』

『お前は……俺の希望なんだ……全てを失って、得た……  
希望なんだよ』

「ツツツ！」

彼女を想い、撃ったクナイガンの弾丸。

それはガタツクバルカンの銃口に侵入し、そのまま爆発させる。

肩を押さえつづくまるガタツクに、そのまま渾身の回し蹴りを決めた。

「……」

じりじり……

『真由香！ お願いだ！』

もう樹里をいじめないでくれっ！

樹里を傷つけないでくれ！』

『きゃはははー！』

じゃあもう一回土下座でもしてもらおうかなー！』

『土下座をすれば樹里には手を出さないって誓ってくれるのか!?!?』

『うーん、まあいいかな……』

って本当にやるんだ!

きゃははは! だっさー!』

『これでいいだろッ!』

もう樹里には……手を出さないでくれッ!』

『んー…そんな約束したっけ?』

『きゃはははー!』



射撃する。

両者は大きく吹き飛び、地面へと背をつけた。

ガタツクもダークカブトも度重なる

キャストオフ、プットオン、クロックアップの使用で体力、精神力共に限界のはずだ。

……だが彼らは戦う。その瞳の先にいる人間を直視するために。

「ううああああッッ！」

本当にどうして……



『真由、誕生日おめでとう』

『ありがとう…おにいちゃん！』

わあ！ くまさんだあ…！』

『おめでとういいます真由ちゃん…』

あのっ！ 失礼しました！ 真由さま！…！』

『 『お母さん、お父さん、ありがとう。』 』

『 ありがとう。』

『 生まれてきてくれて…… 』

ありがとう

『おにいちゃん…いちご…あげるね』

『フッ、どうした？』

真由はいちごが好きなんじゃないのか？』

『おにいちゃんは…もっと好きだから……』

『…そうか、ありがとう。』

じゃあメロンと俺はどっちが好きだ？』

『……考える』

『アハハハっ…勝てるといいんだが』

本当に、何で……どうして……

「キャストオフッ!!」 『Cast Off』

両者、おそらくコレが最後のキャストオフになるだろう。  
ダークカブトとガタツク、二人のライダーは限界を超えて走り出す。

ゴールの向こうで微笑む彼女。

双護も、鏡治も。彼女にまた会う為に  
ッ

『双護、お前は私の人形なのよ。妹が大事なら私に服従しなさい！』

なあ、なんで……なんだよ。

「アアアアアアアアアッ！！」

「クッ！」

ガタツクカリバーが蒼き閃光を描きながらダークカブトの装甲に直撃する。

『おにいちゃん！ ボク…おにいちゃんの事大好き！』

誰か教えてくれよ、なんで……

「ッ！ はああッッ！」

「ウオオオオオオオオオオオオ！」

しかしダークカブトはその攻撃を耐えていた。

そして反撃の回し蹴りでカリバーをガタツクの手から吹き飛ばす！

そしてさらにクナイガンでカウンターを決めた！

紅き閃光がガタツクの装甲を抉る！

『妹がゴミなら兄貴もゴミって事かな？きゃははは！』

なんで、なんで、なんで……

「ぬるいんだよおおおおお！！」

「グッ…うう！」

ガタツクは踏み込み、頭突きをダークカブトに決める。  
ふらついたところを狙い、ガタツクはクナイガンを弾いた。



両者の武器はおおきく離れ、地に落ちる。

もう拾いにいく事はしない、必要もないッッ！！

『ボクね…ボク…おにいちゃんの妹で良かった…！』

なんで

ッッ

「こんなに辛いんだよおおおおおッ！」

「！」

カブトの連撃がガタツクを吹き飛ばす。  
どうしようもなく。ただどうしようもなく

悲しくて。

虚しくて。

辛かった。

とめどなく流れる涙はダークカブトの視界を奪う、しかし彼女の姿だけはハッキリと視えた。

笑っている彼女、怒っている彼女、泣いている彼女…

今までいろんな彼女の表情を見てきた。

「双護お……………」

「ッ  
」

少しでも気を抜けば両者はすぐに気を失うだろう。  
だから、終わりにする。

終わりにするのだ。

「俺は次の一撃を……真由ちゃんへの想いと共に放つ！」

「何……？」

「全てを……込めてッッ！！」

ガタツクとダークカブトは互いに距離を空けて立ち止まる。  
真由への想いを込める。

つまり決着をつけると言う事だろう。

「……いいだろう、俺も真由への想いを全て込める」

そして、勝つ。

もう一度、二人は彼女を『み』た

「俺は真由ちゃんを」  
『ONE』

「俺は真由を」  
『ONE』

「救う」  
『TWO』

「守る」  
『TWO』







『 RIDER KICK 』

二人も、彼女が好きだから。

『 鏡治くん! 』

『 おにいちゃん! 』



第139話 THIRD SPEED LOVE（後書き）

次回、決着でございます。

はい、と言つかクラヒフォーゼまでもう一ヶ月きりましたか……

うん、どうなんでしょうね。

まあクラヒはW以外は買ったんですけど、そろそろ響鬼さんぼつちなのとコンプリートフォームに召喚機能をつけてほしいもんですけどねww

せめて伊吹鬼だけでも……ッ

あと、ウルトラマン、仮面ライダー、ガンダムのコラボシリーズ。コンパチヒーローズですか。

あのグレイトバトルで、見事ディケイドが平成枠に入りました！

いや、やっぱりディケイド小説書いてる身としては嬉しいですね。

ロストヒーローズ？ には既にオーズとダブルがいますから、多分でないんじゃないかと思っていたら……

まあ、コンプリートが出てくれたらもつといいんですけどね

まあ今回はこの辺で。では次もよろしく！

第140話 SISTER SPEED LOVE(前書き)

はい更新です

明日はどうか、お話じゃない方を更新……するかも

「双護対鏡治……ついに」

ではごっごぞー！

第140話   SISTER   SPEED   LOVE

真由、彼女の為に……

全てを乗せた、全てを賭した一撃がぶつかり合う！！  
そのエネルギーは、眩い光の奔流を放ちながら尚も拡大していった。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ！！」

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！！」

二人は更にエネルギーを込める。  
この肉体が壊れようが構わないと言わんばかりにツツ！！

二人は全てを乗せていく！

二人は彼女の為に、全てをエネルギーに変えた。  
勝利を、愛を望む彼らは互いに一歩も引かず、ぶつかり合うだけだ。

「  
ッ」

ダークカブト、いや双護は泣いていた。  
何故なのかは彼にもわからない。

悲しいのか？

嬉しいのか？

自分ですら理解できない涙が溢れていた。  
彼女のへの想いは尚も力に変わり光となる。



「!」

「!」

そして、その時だった。



何か、大きな音が同時に聴こえて、二人は見る！  
互いの角、そこに光の線が何本も現れたのを！

そう、ガタツクが投げたカリバーが。

ダークカブトのキックがそれぞれの角にヒビを入れていたのだ。

ライダーキックのエネルギーは角を経由して足へと送られる。  
つまりこのまま力を込めれば……

「ウオオオオオオオオツッ！」

「ハアアアアアアアツッ！」

だが、二人はそんな事がなかったかのようにエネルギーの供給を続けた。

ただひたすらに、一心に真由への想いを込め続ける。

ぶつかり合う脚と脚はまだ均衡を保っていた

だが

終わりが訪れる。

「ツツ!!」

「・・・」

砕け散る音が聴こえた。

それが意味する事はたった一つ。  
戦いが、終わると言う事。

「俺の……勝ちだ」

「……」

ごめん。勝てなかったよ

「俺の……負けだな」

先ほどの激闘が嘘の様に辺りは静まり返っていた。  
今はもう辺りも明るく、雨の音だけが二人の耳に刺さっている。

「……」

倒れていたのは……

ダークカブトだった。  
角が砕け散っており、その横ではガタツクが立っている。

「……どう言う事だ」

ダークカブトの変身が解かれ、双護は口を開く。  
ガタツクも変身を解除し、鏡冶へと姿を変えた。

そして、双護は納得がいかないと鏡冶を見る。  
自分が負けたからでない。

鏡冶のキックが当たる瞬間、鏡冶は確かに呟いた。

『俺の…負けだな』

「ふざけるな、お前の勝ちだ。俺は負けたんだよ………」

「いや、違うぜそれは………」

「ッ？」

鏡治は力なく座り込む。

まるで、何かに負けたように悔しそうにしながら　　ッ

「角が壊れたのはお前が真由ちゃんを想う力。

エネルギーが強過ぎたからさ……

だからダメージを受けていた角が耐えられなくなって壊れたんだよ。

俺も全力込めてたんだけどなあ……」

悔しいぜ……そう言って鏡治はうつむいた。  
それを聞いて双護も腕で目を覆う。

「お前は…勝ったんだよ」

「・・・」

しばらく二人は無言でうつむいていた。

雨で良かった、おかげで涙が見えない。二人は切にそう思った。ただろう。  
だが、鏡治は意を決して立ち上がる。

「うしっ、じゃあ勝ったのは俺って事で…」

そして…



「何ッ!？」

「勝ったのは俺だ、大人しく言う事聞けよ」

鏡冶は双護を担ぎ上げ、おんぶをするとそのまま歩き出した。  
驚く双護だが、鏡冶は気にしない。

「どっいっ…っもりだ?」

「真由ちゃんに会ってもらっ。お前の答えは、それから決める」

「っ…!」

双護はもう動けない。覚悟を決めるしかないのだった。

『ファイナルアタックライド』 『デイデイデイデイケイド!』

『Rider Jumper』 『RIDER KICK』

キックホッパーとデイケイドの必殺技がぶつかり、弾き合う。今、デイケイド達はブレインタワーに突撃をしかけていた。

前回は電磁バリアによって失敗に終わったが、今回は神也たちの強さもあつてか。

バリアを突破し創英と赤い靴がいる最上階へと向かっていた。

無数のゼクトルーパー。

実験によって生み出されたワームのサナギ体群と激しい戦闘を繰り広げながらデイケイド達は最上階へと向かう。

途中ゼクトルーパー達を足止めし、デイケイドに道を譲る為に仲間達は次々にデイケイドと別れていった。

そしてまた

「兄さん！」

「どっしたっ!?!」

「ここはボクが引き受ける」

ディケイドの前にキバが立つ。  
もうキックホッパーの後ろにある階段から最上階に行けるのだ。

一刻一秒を争う状況、この提案は素直にのんでおくべきなのだろう  
が……

「ボクは大丈夫だから、さあ早く！」

「でも……!」

「ボクが兄さんに嘘ついた事あった？」

「それは…ッ」

「でも兄さんはボクに嘘をついたよな、ウニは栗が進化した生き物だつて。」

ボクがあれをドヤ顔でクラスメイトに披露した件でゆっくり話し合っつ？」「

「あばよう！ 気をつけてなッ！」

『カメンライド・クウガ』『フォームライド・クウガ・ドラゴン！』

「・・・」

ドラゴンの跳躍力で一気にキックホッパーを飛び越え階段を駆け上がっていくデイケイド。

それを見てキバはやれやれと苦笑する。

「・・・」

反面、そんな彼を見向きもせずキックホッパーはデイケイドを追う為、階段に向かう。

しかしそれを水流弾が邪魔する。

無数のソレはキックホッパーを追尾し、衝撃を与えていった！

「お前はボクとダンスを踊るんだよ、キバット！」

『がってんツス！ ウェイクアアップウ！』

空間にヒビが入り、音をたてて割れる！

ウェイクアップ、キックホッパーの瞳に巨大な月が映った。  
バツシャーフォームへと変わったキバは、そのままマグナムをキックホッパーに向けて発射する！

「・・・」  
『Clock Up』





キバが思い切り地面を叩く！

すると、地面がまるで水面のように揺らめき、  
一気に大量の水が現れて辺りを湖に変えたではないか！

「！」

キバは水面に立っているが、キックホッパーはそうではない。  
腰まで水に浸かってしまうのだ。

クロツクアップも水の抵抗力で少し速度が落ち、水流弾を上手く防  
げない！

そして、月の色が美しい緑に染まる！！

『ウェイクアップバツシャーっス!』

「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐッ!」

想像以上に力を消費するな…ッ!

キバは長時間の使用が無理と悟ると、決着をつける為バツシャーマ  
グナムをキバットに噛ませる!

『バツシャーバイトっス!』

キバを中心に水の竜巻が巻き起こる!  
そしてその上部では巨大な水流弾が形成されていった。

キバはそれをキックホッパーに向けて

発射するッッ!!

水に拘束されているキックホッパーは、ライダージャンプを発動し回避を試みるが……

「！」

水流弾はその軌道を変えてキックホッパーに向かっていった。皮肉にも空中では身動きがとれない。

キックホッパーはそのまま水流弾を真正面から受けるのだった。

「よっっ！」

キバはウエイクアップを解除し膝をつく。

同時に、ステンドグラスの様に変質したキックホッパーが落ちてきた。

キバはそれにデコピンと言っやる気のない一撃を加える。  
すると、キックホッパーの外装は粉々に砕けて

ホッパーゼクターと洗脳されていたであろう人が地面へと倒れるの  
だった。

第140話 SISTER SPEED LOVE(後書き)

はい、と言う事で

近いうちに活動報告も更新するかもしれません

ってか、この小説ぶっちゃけR15って程でもないのかな？

では次もよろしく！

第141話 FAMILY SPEED LOVE(前書き)

はい、更新ですね。

もう後、大体三話くらいでカブト編は終わりですかね。

「キバ達の前に現れたのは……」

ではごっごぞー！

第141話 FAMILY SPEED LOVE

『やりましたね巨さんーッ!』

「ああ、そうだねサンキュー! キバット。  
バツシャーくんもありがとう、助かったよ」

『またいつでも呼んで下さいね!』

そう言ってバツシャーマグナムはホイッスルに戻ると、キバのベルトへ装填される。  
キバは洗脳されていた人を安全な場所へ移動させ、ディケイドを追う為に階段に向かう。

『ん』

「……ん？」

『どうしたんスカ？』

キバはそこで足を止めると、辺りを見回す。  
別におかしいところはない。

どうしたのだろうか？ キバットは不思議そうに問いかけた。

「何か今、聞えなかった？」

『ほえ？』

「  
ツツツ……！！！」



その時だった。

突風、いや暴風と言ってもいいだろうか？

物凄い風がキバの体を吹き飛ばす！

一瞬の出来事にキバは何も対処できずに吹き飛ばされてしまった。  
そのまま風に吞まれて、キバは一階下のホールまで移動してしまう！

「いっつッ！！」

「巨くん!？」

ゼクトルーパー達を倒し、合流しようとしたメンバー達がキバに気づく。

どうしたのか一同が不思議に思うと、階段の上からその音声が聞えてきた

『ト・ト・トリガー！』

「「「「！」「」」」

電子音と共に階段を下りてきたのはダブル、ゼノンとフルーラだ。ダブルはトリガーマグナムをクルクルと回しながら笑っている。

相変わらず何を考えているのか分からないが、変身して現れる時点で何か嫌な予感がする。

と言いか、嫌な予感しかない。

ダブルはそのまま一同を見回すと、もう一度。

今度は鼻で笑った。

「やあ、久しぶりだね。皆ボクに会いたかったんじゃないかい？」

「ん？ いや、別にそんな事は」

『もう！ 照れ屋さん！ そんな貴方には銃弾をプレゼント！』

「…は？」

そう言ってダブルはブレイドに向けてトリガーマグナムを発射する。

「うっおおおッ!？」

あぶッ! あぶねーっ!!!」

ブレイドの後ろで炎の弾丸が破裂する。避けなければ…

『テへっ 手が滑っちゃった!』

「嘘つけええッ! 弾丸プレゼントとかほざいてたろっがッ!」

『嘘じゃないもん！　ねえゼノン？』

「ああ、そうともこの天使が嘘つくわけないだろう？  
ちょっと手が引き金に行ったただけだもんねえ？」

「いや、それを撃つたって言うんだよッ！！」

何か………何か凄いうざいポーズをとりながらダブルはブレイドを  
嘲笑していた。

当然怒るブレイドなのだが、ふとカリスが声をあげる！

「お！　おい椿！」

「あん？　何だよ咲夜！」

「お前…ッ！」

「あ？ 用がねえな…ら…」

ブレイドはふと、違和感に気づく。

何か…熱い。

下の方が凄く熱い。

落ち着け椿、そう言うときは冷静に原因を調査するもんだろ？  
じゃあ、簡単だよ。

何が起こっているのか、その目で確かめればいいんじゃないかな？

と、言う事だ。

ブレイドはその方向を目で追ってみることにした。

何か……………」

「……………」

「つ、椿……………」

「……」

「……」





笑うダブル!!

尚も燃えさかるブレイドのお尻ッ!!

Let's、キャンプファイアー!!

「アーハハハハ！ 見てごらんフルーラ、あれが尻火系男子だよ！」

『うーん、やっぱりファッションは奥が深いものね！』

そう言ってケラケラとダブルは笑う。

しかし、彼らが攻撃を仕掛けてきたと言っ事は……

「そ、そこを……通してくれないか？」

「それは……できないねえ？」

この人数を前にしてもダブルは余裕を崩さない。

正直、いくらダブルだろうとこの人数を相手にして全員を抑えられるとは思えない。

……と、言う事は何か策があると言う事なんだろう。

ダブル、ゼノンとフルーラは自分達よりかなり上位にいる存在だろう。

電王を気にかけていたところを見るにライダーとしては一般的だと  
して、どんな手を使ってくるか分からない。

クウガたちは結局動けない状況に陥ってしまった。

「聡明な判断ですね」

「!!!」

クウガ達がダブルを突破する事を諦めた時、  
ゼノンとフルーラではない、別の声が聞こえた。

それでクウガ達は確信する。

ダブルには、まだ仲間がいるという事なんだと。

「どうしても、通してくれないのかッ？」

もちろん、黙っているだけなんてできるわけも無い。  
ディケイドが危ないのだから。

しかし、相変わらずダブルは笑っていた。  
銃をクウガ達に向け、芝居がかった声のトーンで喋りだす。

「主役の登場を待たずして始めるクライマックスはないだろうっ！？」

フフッ………」

『安心してくれないかしら？』

危なくなったら通してあげるから………ね？』

悔しいが、従うしかないのかもしれない。

クウガ達は構えを保ったまま、その場に立ち尽くすのだった。

「真由ちゃん……大丈夫？」

「う……！」

こくりと真由は頷く。

彼女は今、リコンファームのカプセルの中にいた。

もし創英が赤い靴を発動させれば

すぐにリコンファームを起動できるよつにと……

「……」

真由の表情は暗い、結局兄もいないし鏡治もどこかに行ってしまった。

やはり不安な気持ちが強いと言う事だろう。

不安そうに有美子や他のメンバーを見やる。

「大丈夫よ真由ちゃん、そんなに固くならないで」

「うん！ 安心してよ！ 真由ちゃんはしっかり守っちゃいますから！」

有美子の言葉に真由は笑みを浮かべる。

護衛に来ていた友里も静かに微笑んで真由に微笑みかけた。

頷く真由。

最後にもう一度だけ、不安を殺す為に家族の姿を思い浮かべる

「おにい」

そして真由が口を開いたとき、その姿が見えた。

「……………え？」

「お、遅くなってゴメンっ…!!」

「……っ!!」

真由の表情が変わる。  
そこには鏡冶と……

兄がいるではないか！

「鏡冶！？ アンタ何やって  
！」

「ほれっ！ 双護！」



「……ッ」

鏡治は双護を降ろすと、地面へ倒れ込む。

激闘の後に双護を担いでしばらく歩いたのだ、もう立つことすらできないうら。

有美子の問いかけにも、適当に相槌をうつただけの様だ。

「おにいちゃん……」

「……ッ」

「おにいちゃんっ！」

真由はカプセルから飛び出ると、そのまま双護に飛びついて……

泣いた。

彼女のぬくもりが双護の体に伝わる。

小さい体だ。より儂げに見える。

あの時、守ると誓った彼女の姿だ……

「あいだがっだよおお！」

「真由……ッ」

真由は双護を強く抱きしめるが、双護は複雑そうな表情でそれを見

ていた。

正直、今の自分に彼女を抱きしめる資格があるのだろうか？

彼女はずっと自分を信じてくれた。

だが、自分は……どうなんだ？

恨みの感情をあらわにして彼女を捨てようとした自分に……  
彼女を愛しぬけるかどうか迷ってしまった自分に……

「双護才！」

「!!!」

鏡治はもう一度、ハッキリと双護に問いかけた。

「お前の答えは…どっちなんだよッ!!」

「!!」

「ああそつさ、簡単な話だろうがッ!!」

俺の…答え…?」

「真由ちゃんを抱きしめるか、そつじゃないか。それだけだろッ!!」

「!!」

『双護ツッ!』

鬼のような形相で真由香が俺を睨みつけている。  
俺もアイツには最高の憎悪をぶつけてやる。

最悪の気分だ……

『!』

天使のような形相で真由が俺に微笑みかけてくる。  
俺も真由には最高の笑顔で微笑んで笑う。

真由は……

『双護ッ！』

真由といた時間は…とても、楽しかった。

『ちゃん！』

家族を失った俺と、全てを無くした真由。  
手を差し伸べたとき、俺は後悔はしてなかった筈だ。

『双！』

最初こそ真由香を重ねてしまう時はあったが、すぐに理解する。  
真由香と真由は違うと…

たとえ外見は同じでも違っていると分かるんだ！

『 にいちゃん！ 』

真由がいれば、俺の世界は幸せだった！

『 ！ 』

どんなに誰かを恨んでも、どんなに誰かを憎んでも  
樹里は……父さんも母さんも帰って来ない。

でも俺はここにいる。真由はここに……ッ！

真由は……真由も俺も生きているんだ！！

『 おにいちゃん！ 』

俺は多くの物を失った。だが、得たものもある。

ただ一緒にいるだけで良かった。

ただ一緒に笑ってくれる人がいるだけで幸せだった。

彼女は、俺の恨みを殺してくれた。

出会った瞬間に、奇跡は始まっていたのかもしれない。

「真由……ごめん」

「ううう……!!」

どれだけ自分は迷ったんだろう。

だけど、たったこれだけ……



この間だけ彼女に会っただけで

心に光が灯った。

「しめん……しめんなあ真由っ！」

「おにぢやああああああんっ！」

二人は強く抱きしめあって泣いた。  
後悔、懺悔、愛情、全てを抱いて……彼は泣いた。

「俺が…ッ、俺が悪かったんだ！」

俺が…つまらない事で迷ったから！」

お前を見てやれなかったから…ッ!!！」

はじめから彼女の手だけを握っていれば良かった。  
それだけだった。

「ボクおにいちゃんに嫌われちゃったのかと思ったたよおおおお！」

「そんな事ないっ……そんな事…あるもんか！」

真由香のノイズが消えていく。  
目の前にいるのは、家族だ。

大切な…大事な、たった一人の家族…ッ

「俺がつ、悪かった…」

許してくれっ！

許してくれえ…！！！」

「…」

どんなに謝っても許すしてもらえないとは思えない。  
自分のエゴで真由を殺そうとまで考えた自分が、今さらなにを

「真由ちゃん……」

「！」

だが、鏡治は真由と双護の肩を持って強く言う。  
彼の瞳には、一片の迷いすらない。  
強く、澄み渡っていた。

「双護は、真由ちゃんを大切に思うあまり……  
ちよつと真由ちゃんにとって酷い事をしようとしたんだ。

だけど、お願いだ……どうか、許してやってほしい」

「……？ うん、わかったあ！ もう酷い事しちゃ駄目だよあ！

おにいちゃん……！」

「じゅめんっ、じゅめんな真由っ……」

二人は泣いた。全ての感情を込めて。

真由は、誰にも代われない唯一で特別な存在なのだから

第141話 FAMILY SPEED LOVE（後書き）

フォーゼまだ見れてないんですよ。

結構三年コンビが好きかもww

そう言えば、久しぶりに友達の家でカブトのゲームやらせてもらいました

今にして見れば、割とマイナーキャラって言うかコアなキャラも多かったですねw

ではこれで、次もよろしく！

第142話 TRUTH SPEED LOVE (前書き)

はい、更新ですね。

ちよつとR15を外しました。

まあ別にあつてもいいんですけど。

R15な内容を期待されると……ねw

タグ詐欺はやばいですから、とりあえず外します

ただ、かなりえぐい描写がある話は、出てくるのでその時はワック  
ション置いて、別に説明話をつくる時があるかも

それでは本編

「答えを見つけた双護」

ではどつど！

第142話 TRUTH SPEED LOVE

「叔母さん、リコンファーム使うの…少しだけ待ってくれない？」

おば……さん……だと？

有美子はゆっくりと口を動かす、言葉を出したわけではない。  
しかし、鏡治はしっかりと頷いた。

「おおおおおねえさん、リリリコロン」

顔を蒼白させた鏡治を見るに、いつもこんな感じなんだろう。  
鏡治はふらふらと出口へ向かっていく。

「でも赤い靴が発動してしまえば、使わざるをえないわよ」



「それでも、待ってほしい。」

ああそうさ、赤い靴は俺が破壊する！」

そう言って、しっかりと笑う鏡治。

有美子もまたそれを聞くと、ニヤリと笑って甥の背中を叩いた。

痛がる鏡治を見てさらに笑うと、今度は背中を優しく押す。

「行っておいで。んで、世界を守ってちょうだいね

正義の味方さん？」

「ははっ、俺なんかまだまだだよ」

そう言って、鏡治は走り出した。

有美子は微笑むと、リコンファームのスイッチを切ったのだった。

「ガタツクゼクターッ！」

『お前、動けるのかよ』

アレほどの激闘があったにも関わらず、まだ鏡治は戦おうと言いつの  
か。  
思わずガタツクゼクターも聞き返す。

彼の瞳に映る鏡治は、しっかりと笑っていた。  
面白い、ガタツクゼクターは思う。

瞳を見るだけで、鏡治の答えが分かるようだ。

「キャストオフは最小で抑えて、残りを全部クロックアップにまわす。」

ああ、そうさ。この新意鏡治、ここで止まる訳にはいかねえんだよー！

そう言って鏡治はタワーを見る、頂上では…司達が戦っているに違いない。

早く加勢しなければ。鏡治が決意した時

「鏡治！」

「！」

声がして振り向くと、そこには双護が立っていた。彼もまた曇りのない目で、鏡治をジッと見る。

ああ、そうだ。答えはもう分かっている。

彼が何を言おうとしているのか……鏡治は理解した。

「俺も行く。いや、いかなきゃならないんだ」

「……ッ、動けるのかよ？」

少し意地悪に笑ってみせる鏡治。

反面、双護はいつもの様に笑う。いつもの彼だ。

『天王路』双護、彼は笑っているのだ。

「フツ、キャストオフを最小で抑えて残りをクロックアップにまわす。」

俺は、ここで止まる訳にはいかない」

その言葉に鏡冶は笑う。

成る程、確かに止まれないな。

そこで気づいた、双護の頬がはれている。

どうしたのか聞く鏡冶に、双護は笑みを浮かべて答えた。

「フツ、真由に思い切り殴ってもらった」

「えっ!？」

目を丸くする鏡治に、双護は言った。

もう二度と見失わないように、もう二度と迷わない様に。

もう二度と………道を間違えないように。

「なかなか強烈な一撃だったよ、流石は俺の妹だ。

そう思わないか？」

「ははは！いいねえ！俺も欲しいよ妹が！」

二人は頷いて天に手をかざす。

そこへ二体のゼクターが契約者の下へと飛翔する！

青き閃光を描くのはガタツクゼクター！

そして、まるで太陽と重なる様に飛翔するカプトゼクター！！

『お前、今恨みじゃなくて愛情でオレを呼んだな？』

「・・・」

カプトゼクターが初めて双護に向かって口を開いた。

それは……つまり

「合格か？ カプトゼクター？」

『何があつたか知らねえけど、合格も合格よ。  
オレが家族愛に弱いのが知ってた？』

「ふっ、それはよかった」

しかし、カプトゼクターは不思議だと言つ。  
分からないと双護の周りを飛び回る。



『今まで色んな人間をオレは見てきた。でも、その全てが何かを決めて、俺の力を欲した連中ばかりだった。』

黒か白、はっきりと分かれてる連中だ。

だけれど、正直お前はグレーに見えた。

どれが正しくてどれが間違ってるのか分からない。

ただ、何となく…お前を始めてみたとき、

人間ってヤツがどういった経緯で黒か白に染まるのか……

見てみたくなつたのよ』

カプトゼクターは双護の周りをちよろちよろと飛び回る。彼を確かめる様に。

『お前は二転、三転と迷って白と黒の狭間を行った

……今、お前の色は何色なんだ？』

真由を愛するか、恨みを封印して割り切ったのか？  
愛するとは言え、またこんな事がおこってもおかしくない。

そのとき、本当に彼は今の色を保ち続けるのか？？

それをカプトゼクターは知りたかった。

今の彼は、白色なのか？  
それとも黒色で割り切っているのか？

そして、双護は迷わず答えた。

「ゴールデンだ」

『……本当、お前は不思議な人間だよ』

『天王路双護だけじゃないさそれは』

『んー？』

ガタツクゼクターは人間と言うモノを考えていた。  
愚かで哀れな生き物かと思えば

そうでないと思ったり、やはりそうだと思ったり。

『人間は言葉じゃ表せない何かを持つてる。それが俺は興味深いと思った。』

もっと人間ってヤツを観察したいと思ったね』

『その何かってヤツ、なんとなーくだけどオレも分かる気がするよ』

ガタツクゼクターは頷く様に体を動かすと、鏡冶の手に収まった。

『コイツは馬鹿だ、だけど愚かじゃない。創英は人間を見限った。』

それは俺達もだ。

だが辛抱強くなってみたら…なかなか面白いぞ』

「どづいつ事だよッ！ もついいや！いくぜ、相棒！」

『はいはい、しっかりやれよ』

「つたりめえだ！ 変身んんんッ！」 『H E N S H I N 』

ガタツクに変わる鏡冶。

カブトゼクターはもう一度笑って、双護の方へと体を向けた。

『ふうん、まあオレも創英の考えは分からなくはなかったけど。  
めんどくさいのよね、何かそう言っつ』

「人間は愚かな生き物だと言う事は分かっているさ、俺もそうだが愚かでも俺達は生きている。」

「家族の為……だとかな」

『その家族をお前は殺そうと考えた。  
だけど今、お前はその家族を守る為に戦おうとしている。』

「ああ、不思議だねえ」

「力を貸してくれカプトゼクター。  
俺にはお前の力が必要なんだ、真由を…皆を助けるためにッ！」

『別人みたい変わるな人間ってのは。  
まあ、成る程……確かに退屈しなさそうだが』

そう言ってカプトゼクターは双護の手に収まる。

「助かる……」

『いやいや、今度は間違えんなよ相棒！』

もっと気楽にいこうぜ？』

調子のいいヤツだ。双護は笑ってカブトゼクターを装填した。

「変身！」「HENSHIN」

双護は愛情の力を込めてカプトに変わる。  
そう、恨みの力ではない。愛の為に……!

カプトの目が黄色から青に変わっていた。

雨は不思議と止んでいた。  
相変わらず空はよどんでいる、しかし……

太陽は赤く輝いていた。まるで、彼の姿の様に

「さあ、いくぜ……」

「フッ！ ああ……！」

『Cast Off』



一方……

「ぐわあああああああああッッ!!」

ディケイドの体にザビーの必殺技が炸裂する。  
既にアクセルとマツハは消費していた為に、この戦いはディケイド  
が完全に不利なものだった。

ザビーの後ろには赤い靴が設置おり、既にチャージを始めている。

名前の割にはシンプルなデザインの機械。

そこから、あと数分もしない内に洗脳電波が放たれるのだろう。

その前になんとしても破壊しなければならないが…

「クッ！」

カードに手を伸ばそうとするが、ザビーはそれを許さなかった。クロックアップから何とか隙を見出そうとするも、猛攻がそれを阻止する。

「ッ！！ アアアアアアアアアアアア！」

またもザビーの必殺技。

ここまでの力を出せるのは…創英とて負けられないと思っているからに他ならない。

だがそれを許す訳には      ッ！

「いかないんだよおおッ！」

ライドブツカーソードを振り回す。

だがソレは虚しく空を斬るだけで、すぐにザビーの攻撃がディケイドを吹き飛ばした。

「終わりだ、ライダーズティング！」 『R i d e r S t i n g』

ザビーはディケイドに止めを刺すため、走り出すッッ！！

（そろそろヤバイかな…？ いや、最悪もう死んでるかも…）

限界、タイムアップだ。ダブルはため息をついて銃を下ろす。  
それに気づいたクウガ達が階段に向かって足を動かした時……

それよりも先に2つの影が階段を駆け上がっていった。  
まさに、一瞬。

「！」

赤と青のソレを見て、ダブルは変身を解いて笑うのだった。

「ッ……！」

「……！」

『Clock Over』

ザビーの攻撃はディケイドに届く事は無かった。  
クナイとカリバーがそれを弾いたからだ！！

そう、つまり……

「貴様らあッ！」

「鏡治！！ それに……！！」

ガタツクと……そこにいたのは、紛れもないカブト。  
愛の力で変身した彼のカラーリングは、本来の青い目に赤い体。

紛れも無い、仮面ライダーカブト！

「もう、決めたのかよ？ 進む道は」

「司っ！？ 気づいていたのか！」

「いや、何となく」

「そう…か。ああ、そうだな。

安心してくれ、俺はもう道を間違えないッ！

絶対にだ」

ディケイドは頷く、そしてカブトが差し出した手をしっかりと握る。





『RIDER KICK』

ガタツクの光を纏った蹴りがカリバーに直撃し、そのままシールドをぶち破る！

カリバーは深く赤い靴に突き刺さり、そのまま赤い靴を破壊させた！！

「ば、馬鹿なッ！」

こんなに簡単に破壊されるのかッ！？

あれだけ時間をかけ、あれだけ想いを込めたのに！！

こんな簡単にツツ!!

それはまるで感情の様。

どれだけ恨んでいたかと思っても……

たった一瞬笑顔を見るだけで、それは間違いだったと理解できる様に。

「許さんぞおおおおツツ!!」

ザビーはクロックアップを発動してデイケイド達を狙う!

ガタツクもクロックアップを発動して対抗しようとするが、

流石に連続しては無理がある。

すぐに解除され、ザビーの連撃を受ける事となる！

「双護！ 人間は生きている内で必ず道に迷う生き物さ！」

ガタツクを助けるために動き出すカブト。  
そんな彼にデイケイドは声をかけた。

「司………」

デイケイドはそのカードを手にする。

そう、開放されたカブトのカード！

「だがな、必ず人間は自分が進むべき道を見つける！  
でもそれは一人じゃ無理かもしれない。」

誰かに助けられたり、誰かに教えられたりしながら  
でも、必ず見つけるのさ」

『ファイナルフォームライド』

「それが、天の道ってやつだろッ！」

『カカカカブト!』

「天の道か、悪くないッ!」

デイケイドとカブトは笑い合い、拳を重ねあつた。

瞬時、カブトの体が光り輝き、巨大なカブトゼクターに変わる。

カブト  
Kデュアルゼクター!

第142話 TRUTH SPEED LOVE (後書き)

はい、と言う訳で

次でカブト編、本編は終わりですね。

カブトはライダーのデザインがシンプルなのに、すごくカッコイイのが凄いですね。

何気にザビーが好きですね。

蜂ってのが中々どうして気に入ってます。

では、この辺で。

次もよろしく！

第143話 NEXT SPEED LOVE(前書き)

はい、更新ですね。

ちよっともう早めに更新して、キリを良くしておこうかなと！

……と言つ訳で、カブト編ラストでございます。

「カブト・デュアルゼクター」

ではどしどしー！



第143話 NEXT SPEED LOVE

ディケイドはデュアルゼクターに備えられている  
三つのボタンの中から、一番目を押した。

すると角が光り輝き、電子音が響く!!

『ONE』 『ALL・Clock Up』

オールクロックアップ。

クロックアップを発動できない筈のディケイド。

そして既に使い果たしてしまったガタック。

二人の速度がクロックアップ中のザビーと、同速に変わる!

それがデュアルゼクター一番目の能力。

仲間と認識した者に、クロックアップを発動させる力!

「なんだとっ!」

「ウラァッ!!」

向かってきたザビーをディケイドは殴り飛ばす！  
そして、素早く金色のカードを発動させた！

「全てを、終わりにしようッ!!」

『ファイナルアタックライド』 『カカカカブト!!』

猛スピードでデュアルゼクターは、上空へと飛んで行き見えなくなっ  
てしまった。

そして同時に、ディケイドの真下。  
地面にカブトの紋章が浮かび上がる。

「ハァアアア……ッ!!」

ディケイドはその中で、構えをとってゆっくりと息を吐く。

徐々に溢れていく光。

相当の力を込めているのだろう、見ればすぐに分かる。

「ふざけるなあああッッ！」

ザビーは必殺技を発動させて、ディケイドに突っ込んでいく！  
何か大技が発動する前に殺すため、ザビーは走り出した。

ガタツクはそれを止めようと自らも走り出すが…ッ、間に合わない！

ザビーはディケイドに触れ

「『ヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ!』」

「がああああああああああ!」

「!」

だが、ザビーが地面に浮かび上がったカブトの紋章に触れた瞬間、上空からデュアルゼクターが突進してきてザビーを弾き飛ばした！

大技なんて無い。

向こうから仕掛けさせるのがこの技の特徴である。

「カウン……ターだった……の……ッか！」

ザビーの変身が解かれ、創英は気を失う。

赤い靴も完全に破壊されており、創英の野望は完全に終わりを迎えたのだった。

その後、創英自らの手によって監禁されていた有美子の夫や研究員達も無事に救出された。そして創英は法によつて公平に裁かれる事となつたらしい。刑務所へ送られる際、彼は記者達に告げたと云つ。

『私は人間であるがゆえに人間を見誤つた。  
絶望と憎悪。後ろへ下がりに続けていた私が、愛と希望を背負つた人間。』

それが例え少年であつたとしても  
前へ進み続けた人間に勝てる訳などなかつたのだ』

彼はこの戦いで何を思い、考えたのだろうか。  
それは彼以外誰にも分からない。

その後、彼は何かを悟つたようになり落ち着きを取り戻したと言つ。  
暴れることもなく、礼儀正しい態度を守っていたらしい。

未来の話だが、彼は出所の瞬間まで、真面目に過ごしていた。  
彼は……その中で

進むべき道を見つけられたのだろうか？

あっけない最後だろう、だがこれは終わりではない。

始まりなのだ

「創英は裁判の後に、刑に処せられるらしいわよ」

「彼のやった事は間違っているが僕らに非がない訳ではない。今回の問題で、僕達自信が変わらなければならぬのだらう」

有美子と夫の陸矢は連日報道されている創英のニュースを見て、切にそう思う。

さすがに今回の事で過ちに気づいた人間は、すこしでも環境や自分達の愚かさを正そうとしているようだった。カプセルから降りる人達もちらほらと出てきている。

「案外皮肉なものね……」

有美子はため息をつく。

創英が犠牲となったことで創英の野望は叶おうとしているとは……



だがまあこれから少しづつこの世界はよくなっていくのだろうと、二人は安心したように笑った。

しかし、気になる事もある。

「ところで、鏡治…あんだ皆にお別れ言ったの？」

「え…ああ…うーん」

「言っていないのかい？」

ソファに座っていた鏡治は複雑そうに頷く。  
そう、もう司達がこの世界にいる理由もない。

そして今日は学校が世界移動を行う日、簡単に言えばお別れの日なのだ。

「べつにもそう言うのは苦手で……」

鏡治はそう言って自分の部屋に戻ろうとする。  
いつもの彼より明らかにテンションが低い。

どうやら、彼は今日。

初めての失恋を味わうようだ

「……」

「……」

有美子と陸矢は少し寂しげに頷きあい、鏡治を呼び止めた。不思議そうに目を丸くする鏡治に、二人は告げる。

「鏡治、あんたはもう立派に一人で立ってんのよね。  
今回の事で本当に分かったわ」

「だから…鏡治くん、君には後悔しない生き方をしてほしい」

今、鏡治が本当にしたい事は何か？  
二人は問いかける。

いつか、こんな日がくるとどこかで思っていた。

そして知っていた。

もう彼は、自分の手を離れ走り出している事も

「え………?」

扉が勢い良く開く音が聞えて、鏡冶はそちらに視線を移す。  
すると、そこにいたのは……

「きょつざういいい！ サノードタクシー営業スタート！」

「……は？」

仮面ライダーサソード、つまり神也が変身した状態で立っていたのだ。

「ッ！ 世界移動か…」

学校の周りが光に包まれて景色が崩れていく。  
世界が移動していくその様を、双護たちはクラスから見ていた。

「結局、鏡冶くんとはお別れをいえなかったね…」

翼の言葉に皆はうつむく、今回は鏡冶や有美子にいろいろと助けられた。

できればちゃんとお別れを言いたかったが、どうやら向こうもいると忙しいらしい。

国のお偉いさん達に質問やらなんだのと、とても抜け出せる状態ではないようだ。

「……」

「っ！ 真由？」

ふいに、真由が双護の手を握る。  
彼女にしてはそれなりに力強いものだった。

そして、それより驚いたのは……

「真由……」

真由は泣いていた。

寂しそうなその顔、彼女の淡く、自覚すらなかったろう初恋は終わりを告げたのだ。

尤もそれは恋と言うほどのものではないかもしれない。  
それでも彼女にとって、鏡治は少しだけ特別な存在だったのかも  
しれない

「・・・」

皆そんな真由につられて涙を浮かべる。  
世界が変われば……もう、鏡治とは

「？」



そんな中、葵は翼が少し驚いた様に笑みを浮かべている事に気づいた。

翼も葵に気づくと後ろを指差す。

（後ろ？）

葵は不思議に思いながらも後ろを振り向いた。

何があると言うのだろうか、この状況で驚くなんてよっぽどの事じゃないと……

「！」

そこにはイマジン達がいる訳だが、  
なにやらプラカードを持ちながら複雑そうに話し合っていた。

どうやら出るタイミングが分からないのだろう。

そこで葵もその事に気づいた。

『うそ！』

葵は小さく翼に向かって呟く。

翼は頷くと、わざとらしく咳払いをした。

翼の方を振り向く司達、そして見えた。

そいつが……

「えっ？」

「あ……えと……」

完全に出すタイミングを迷走したイマジン特性プラカード。  
そこには『どつきり』と書かれた一文が。

そしてイマジン達の後ろで気まずそうに立っていたのは……

「お前ッ！！」

双護ですらつい大声で叫んでしまう。  
それに気づいた真由は涙を拭いて、後ろを振り向く。

「あー…あのっ、そのなんて言うか…」

ああ、そうだ！ お手伝いしたくてさ！

た、大変ご迷惑をおかけするかもしれないのですが…

よ、よろしくー！」

「……………」

真由は気づいた時にはもう走り出していた。  
涙、笑顔、いろいろな物を混ぜて走る。

そして思い切り彼に抱きついた。  
いや、飛びついた。

まさにタツクルとも言えるだろう真由の突進に、  
彼はうめき声を上げ、苦しそくに笑う。

「だはは、よろしくな真由ちゃん！」

「うん！ うんっ！」

よろじくね！ びょっじょべん！

涙で顔をふやけさせながらも、真由は新メンバーを快く迎え入れた  
のだった。

こうして、新しい仲間がクラスに増えましたとき！

そして、物語は新たな文を刻み付ける。

どこともつかぬ書齋、いや図書館のような場所に男はやってきた。

それなりに歳はいつているだろうか？

眼鏡にフェルト帽という身なり。男は椅子に座っている女を見つけると、声をかける。

「新意鏡治が新たに加わったか…」

「正義に燃える男か…そなたも昔はそうだったのではないか？」

皮肉めいた女の言葉に、男は少しだけ眉を動かす。  
だがそれだけだった。男は女の言葉を受け流すと、また視線を『その本』に向ける。

「彼の影響力はどの程度だ？」

「あー、ガタツクはですねえ……」

女の代わりに、後ろのソファで座っていたゼノンが口をひらく。  
隣では相変わらずフルーラが、彼の腕に自分の腕を絡ませて笑っている。

よく飽きないな、男は切に思う。  
いや、これが愛なのか？ 男は余計な考えを捨てると、ゼノンの話に集中する。

「ガタツクは鮭弁当でいうなら……オマケおかずのから揚げってところかな。」

別に問題ないですよ、世界が彼の埋め合わせをする程の重要人物じゃない」

その言葉に男は頷き、同時に野上良太郎に視線を移す。  
鏡治を中心にじゃれ合っている司たち、その中で彼はとても楽しそうだった。

「だが、彼はそうではない。」



…だろっ?」

ゼノンはニヤリと笑って頷いた。

「野上良太郎は、鮭弁当で言う鮭しほくだからね。

どう思います?」

鮭弁当って書いてあるのに鮭が入ってなかったら

「最悪ですね、鮭は神が生んだ食べ物ですから」

ゼノンの言葉に答えたのは、男でも女でもフルーラでもない。  
大量の本に囲まれて姿は見えないが、それは会話に参加していた。

今、この書齋には5の生ある者がいるのだ。

男と女、ゼノンとフルーラ。

そして彼。

「次の世界で良太郎が変身すれば  
主軸である電王の世界は彼を切り捨てます。

関わりすぎたんですよ、電王は。

世界は彼の帰還をまっけてくれない、新たな『電王』を主役として  
追加するんです」

新しい鮭。まさにNEWって所かな。ゼノンはそう言って笑う。

「ああ、でも勘違いしないでね。

ボクらはちゃんと世界に戻る鍵を渡したんですけど」

「良太郎とハナはディケイド側につくのかしら？」

野上良太郎とハナ。

男は複雑な表情を浮かべ、二人を見る。

いくら数々の激闘を繰り広げたとは言え、まだ子供だ。若干の罪悪感を男は感じていた。

しかし、それは女達の嘲笑でかき消される。

「まあ尤も電王が消えれば

ディケイド達も相当困る事になるんだけれどね」

クスクスと笑うゼノン達、男は少しため息をついて椅子に腰掛けた。  
実に、正論だと。

「申し訳ないとは思うがコチラとしては電王の力を失うのは痛い。  
彼ら、そして司は稀に見る素材だからな」

「このディケイドとか言うヤツでしようか？」

フフフ、成る程。

確かに異様な力を持っている様だ」

女は手に持っていた紅茶を置いて、司をまじまじと見る。

ディケイド、それが彼らの切り札。

そう、『デイケイド』が切り札なのであって……

聖司。選ばれたのは幸か、それとも？

想像しただけで笑えてくる。

「そなたも、確かコレには関わっているのではなかったか？

ゼネ  
」

「その名は捨てた。今の私に名前はない」

「これは失礼しました、ククク……」

女は少し小馬鹿にしたように笑い、男に謝罪した。

いや、訂正しよう。

女は謝罪の言葉を述べただけであって、誤る気などさらさら無かつ

た。

むしろ、お礼を言ってほしいくらいだ。

不快と言う感情を呼び出してあげたのだからと。

「名前などに意味はない。そう思わないか？」

「成る程、成る程。確かにそうだ」

だが名前が無いと言うのはいろいろと不便なモノ。

女は男に新しい名前を求める。

尤も、女にとってはどんな名前をつけるのかが少し気になるだけで、男に名前がないと言う事はどうでもいいのだが

呼ぶだけなら、『おい』だの『その』だの

種類には困らない。

「そつだな……」

そんな女の心情を悟ってかどうかは知らないが、男は適当に周りを見回す。

無数の本が存在している中で、適当に一冊の本を手を取った。

男はその本を適当にめくり、一人の登場人物を見つける。

これと同じでいい。

男はそう言って女に新たな名前を告げた。

「適当な男だ。では、聞こうか？  
そちらはどうなのだ、ナルタキ」

「やつ等は協定議会を予定より早く行うつもりだ。

コチラとしても一秒でも多くの正義を生み出さなくては……」

「正義の定義とは個人によって異なるモノだが、まあいいだろう。

そなたが私を召喚した時点で

私はそなたに協力しなければならぬ」

ナルタキが頷こうとした時、本の影から声が聞こえてくる。

「ナルタキさん、気をつけたほうがいい。

彼女は協力はすると言ってますが

邪魔しないとは言っていない」

その言葉にゼノンとフルーラは声を出して笑う。

確かにそうだ、そう言う人だと二人は自らの主人をあざ笑った。

ナルタキはため息をつく。

女を見てみれば何食わぬ顔で紅茶を飲んでいるではないか。



「ふん、期待しているぞ魔女よ」

魔女と呼ばれた女はニヤリと笑って、クッキーに手を伸ばす。

「私は観劇の魔女、私は暇を潰すだけ。」

そなた達の存在が私にとって  
少しでも退屈を紛らわせるものとなる様に期待しています」

そう言って魔女はもう一度、司達へ視線を移した。  
そして『その本』の題名をもう一度確認する。

十の存在が紡ぐ物語、あと一つの試練を成功させればそれは具現化される。

「さあ、残る試練はあと一つ…どうなるのか？」

ナルタキ、ゼノンとフルーラ、本の影に隠れていた者はオーロラを出現させて書斎を離れる。

魔女はくすくすと笑うと、読んでいた本を閉じ目を瞑った。

次の試練まで、少し休ませてもらおうか。

魔女が本を閉じた事で、彼女達が『ずっと読んできた』本の題名が大きく晒される。

その本の名前、題名は………

『E.P.I.S.O.D.E  
D.E.C.A.D.E  
E』

第143話 NEXT SPEED LOVE（後書き）

カブト編、本編終了でございます。

以前から言っていた、ライダー以外の作品キャラ

分かった人は分かったんじゃないでしょうか。

どうしても知りたい人は

「観劇 魔女」で検索してくださいw

それで一番上にでてくるだろうピク○ブ百科事典を見てもらえれば  
作品と、名前、能力が分かると思います。

とは言え、結構オリジナル入ってるんですけどね。

ただ一つ注意が。

その作品はかなりクセが強く、大体の人はラストがモヤモヤすると思  
うので（勘違いしないでね、僕はファンですよ）

その作品をおススメする事はちょっと止めておきます。

では、これで

次もよろしく！

第144話 番外編 出会いは突然（前書き）

はい、カブト編完全終了ですね。

まあ次は近いうちに

響鬼編の注意書きとプロローグを足したものを更新すると思います。

そこからちよつと話の整理とかしたいんで、

一週間程度お休みしたいと思つてますね。

あとすいません、今回のラスト付近は自分でも何書いてるのかわからなくなりました（爆

ではどうぞ！

第144話 番外編 出会いは突然

「  
　　っておわぁ!?!」

「ぎゃああああ!」

ブルースペイダーとオートバジンがすれすれで通り過ぎる。  
校庭には、いたる所にカラーコーンが置かれていた。

青い空、白い雲、響く悲鳴。

校庭では砂煙が何度も巻き上がっている。

普段聴こえていた先生の声や、音楽の授業から聞こえてくる楽器の音は全く無い。

代わりに、バイクのエンジン音が耳に入ってくる。

そう、定期的に彼らはバイクの練習をしているのだ。  
仮にも彼らは仮面ライダー、ライダーなのである。

バイクを操ってこそその称号を名乗るに値するだろう。



ゼノン達が言うには、記憶がどうのこうのと……

ややこしい話の様だが……つまり、司達はバイクには乗れる様になっっている。

だが、技術面までは磨かなければ上達する事はない。

そして、それは戦闘にも同じ事が言える。

最低限戦えるようにはしてくれるが、そこからは自分達で特訓しないと駄目と言う訳だ。

だから、こうやって頻繁にバイク練習。

また、模擬戦闘で鍛えなければならぬ。

尤も、それなりに楽しんでいたりするのだが……

「はんッ、こんなもんかな」

「流石ですね……負けましたよ」

そうやってニヤリと笑うのは薫だ。  
彼女はクラスマンバーの中でもバイクの運転技術がトップクラスつてなものである。

最初はユウスケの後ろにしがみ付いていただけだったが、いつのまにかトライチエイサーは彼女の物と言ってもいい程に定着していたのだった。

ユウスケも、久しぶりに乗ったときはゴミ箱の中につっこむと言う失態を晒してしまい。以後は彼女にトライチエイサーの運転を任せていた（洗車は熱心に行っているが……何故か着ぐるみを着て……）

そんな彼女の後を追うのはいつも決まってアキラだ。

彼女もまたバイクの技術が高く、薫には勝てないものの、いつも二人がトップにきていた。

「またやる、アキラ。今日はもうこの辺にしとかない？」

「はい、そうですね」

そう言つて二人は楽しげに会話しながらバイクを駐車しに向かう。  
それを地面に伏したまま椿と拓真は見ていた。

「無様だな」

「お前もな」

「グッ……」

同じく、バイクから転げ落ちた咲夜は唇を噛むのだった。

「葵さん！ これどこ持っていけばいいですか！」

「ああ、うん。それは皆のお皿に二つずつお願いね」

「わかりましたアアア！」

そう言って鏡治は猛スピードで配膳を行っていく。  
これには葵も大助かりだ、帰ってきた鏡治にお礼を言つと紅茶を差し出す。

「ごめんね、手伝ってもらっちゃって」

「いんやあいんすよ、俺もこれくらいやらないと！」

「そんな気負いしなくていいのよ？」

わたしは戦えないから、せめてこれくらいはしないとだから……」

鏡治が加わってから一週間がたった。

鏡治は葵と違ってみんなとの接点がそれ程ない。

やはりなれるのに時間がかかるかもしれないとの配慮なのか、ゼノンとフルーラは十日間の時間を彼らに与えた。

転送された世界は自分達の世界と同じような現代風の街並。

ゼノンとフルーラが言うにはこの世界に化け物はいないらしい。

つまり、よほどの事がないかぎりには戦闘になる事はないと言う事。鏡治の事もあるが、我夢をリラックスされる事も大切だろう。

ライダーになれていないのは、彼だけなのだから。  
まあしかし、我夢はそれ程緊張していない様にも見える。少なくとも、与えられた休暇はそれなりに楽しんでるようだ。

「うーす鏡治、早いなお前」

「おお！ まあな！」

起きてきた真志に挨拶をかわす。  
流石に一週間が立てば、ぎこちなさは消えて、鏡治もクラスに溶け込む事ができたようだ。

真志は鏡治と葵に挨拶を交わすと、椅子に座ってパンをほお張りはじめた。

「おはよう鏡治くん」

「ああ！ おはよう！」

拓真とも挨拶をかわす鏡治。

「おはよお……！」

「おはよう！ 真由ちゃん」

真由が笑顔で鏡治に駆け寄ってきた。

満面の笑みの真由を見て、真志と拓真は小声で話し始める。

「ん、やっぱり鏡治と話す時の真由ちゃんはいつもと少し雰囲気が違うな」

「あはは、やっぱり初恋ってヤツなのかな？」

「真由ちゃん本人も気づいてない程度だろうが、いやいや」

ニヤリと笑いながら二人はコーヒーに手を伸ばす  
その時だった

「鏡治、おはよう」

「おう、おは  
」



「え……………っておわあああああああああ！！」

「ブウウウウウツ！！！」

コーヒーを吹き出す拓真と真志。

いや、無理も無いのかもしれない。

光を纏った回し蹴りが、鏡冶と真由を引き剥がすように襲い掛かかったのだ！

なんとか回避した鏡冶！

そしてそこにいたのは……

「鏡冶、言い忘れてた事があるんだ。」

「このクラスにはおはよしのライダーキックと言う習慣が」

「あるわけねえだろおおおおお！！」

「朝に必殺技ぶっぱなすってどついつ事だよ！！」

カブトはやれやれと手を上げて変身を解除する。

「安心しろ、あてるつもりはなかったぞ……多分」

「当たり前だ！」

双護はヤレヤレと笑って席につく。

何故か残念そうなのは……まあ、気のせいだろうね。多分

「ってか今多分って言わなかったか…？」

冷や汗を浮かべながら鏡治と真志は席に戻った。

拓真はニツコリと笑いながら言う、きつと双護は真由と鏡治にやきもちをやいているのだと。

なんだ、そう言うことだったのか。

鏡治は胸を撫で下ろし、双護に笑いかけた。

「安心してくれお義兄さん！ 真由ちゃんとはまだそんな仲じゃ

」

「お義兄さんと呼ぶなああああああ『HENSHIN』

「くっ！ しかたないのか！』『HENSHIN』

「せんせー、また鏡治達が校庭の真ん中で遊○王やってますー！  
あれ変身する意味あるんですかー？

校庭まで出て行く意味あるんですかー？」

「ないと思う」

シスコンに覚醒した双護とのバトルもあるが、鏡冶はもうすっかりクラスになれているようだ。翼は安心したように笑う。

とうの真由も少し雰囲気が変わるものの、鏡冶と皆との接し方はそれほど変わらない。双護も一安心だろう。

……多分

「それにしても、本当についてきて大丈夫なのか？」

「ん？」

帰って来た鏡治を司が出迎えた。

確かに鏡治が仲間になってくれた事はありがたい。  
強力なクロックアップを持っているわけだし、何より鏡治の性格には突貫力もある。

なにより皆も喜んでいるわけだし、司も嬉しいのだが……

まあやはり、そこは気になるわけで

「ああ、協力させてくれッ！」

司達の世界が危ないなんて知っちゃまったらほっとけないっての！」

確かに有美子達と別れるのは少し辛い。

だが永遠の別れではない、鏡治の前に一度ゼノン達が現れたのだが、その時に彼は言った。

全てが終われば、また鏡治は元の世界に帰れる。  
必ず

それに、ゼノン達にとっても鏡治加入は嬉しい誤算だったらしい。  
だから、鏡治は後悔していない。

との事だった。

「わかった。とまあ、改めてよろしく」

「ああ！」

司と鏡治は、固い握手をかわすのだった。

そんなこんなで時間が経ち、残る休みはあと一日となった。  
それぞれは最後の休暇を満喫するために遊びに

でかける者。

寝る者。

学校で過ごす者と別れていった。

しかし、そんな彼らの心の中にある違和感。

そう、まだあの問題が解決していなかったのだ。  
それで少し皆、もどかしい感じになっている。

「・・・」



「・・・」

目を合わせない、話さない。

そんな日が続く、我夢とアキラの喧嘩。

ブレイドの世界から二人の口数は減り、

カブトの世界では結局数回、しかも少ししか喋らなかった。

時間が経てば経つほど気まずさは増していき、遂に我夢とアキラは話さなくなってしまうのだ。

二人の表情は暗い、司達が話しかければ笑顔をつかべるが一人でいる時は必ず複雑な表情をしているのだ。

「何とかしてやりたいが……」

あれからどんな手をつくしても上手くいかない。

遠慮みたいなものがあつたのだろう。

なにせ一度は盛大に失敗してしまった身、今さら何ができようか？

「もう一度、着ぐるみ大作戦でいくのはどうだ？」

「絶対に止めてください」

こんな感じである（尤も、着ぐるみ作戦で二人の仲がよくなる事は絶対に無いのだが）

なんとなく壁が大きくなっていった

二人の距離は大分遠くなってしまった。

なんとかしてやりたいと思うが、もっと事態を深刻にしてしまうのではないかと怖いのも事実だ。咲夜が言うには我夢の話をアキラは聞いてくれないらしい

「ううう、どうしたらいいんでしょうか……」

我夢の周りの空気がどんどん黒くなっていく。

このままじゃ安心して休暇を過ごせない、もう一度なんとかしよう！

司達が心に決めた時、その男が真っ先に我夢の肩に手をおいた。

「どうしたんだ我夢くん？」

「ッ！ 鏡冶さん！」

「なんかあったのか？ 俺でいいなら相談にのるぜ！」

「……………じ、実は　　ッ」

一方、咲夜はアキラに直接話していたのだが……

「アキラ、なんとか我夢を許してはくれないか？」

「咲夜先輩…ッ、許すもなにも、私は」

「おじゃましまああああああああす…！」

「ひっ…！」

ぶち破る、まさにその言葉が妥当だろう。

女性陣がおもに使っている教室に鏡冶が入って来た。

目を丸くする二人をよそに鏡冶は歩いてくる。

我夢をつれて。

「きよ、鏡冶!?!」

「……ッ!」

アキラは我夢の姿を見ると、目を反らしてしまふ。  
それは我夢も同じで、また二人の間に見えないが大きな壁が現れる。

だが……

「アキラちゃん! 手え出してくれ!」

「え!？」

「おんじー!」

「ああうう…は、はい」

おずおずとアキラは自分の手を鏡冶に向かって差し出す。

何をどうするのか？

アキラは不思議そうに自分の手を見る。  
鏡冶は頷き、お礼を言つと…

「え!」

「なっ！！」

『やれやれ……』

強引なヤツだ。ガタツクゼクターは呆れた様子でそれを見る。

鏡冶は、物凄いスピードで我夢の手をとりアキラの手と重なり合わせた。

つまり強制的に握手をさせたのだった。

驚く二人、もちろんすぐに手を離そうとするが鏡冶がガツチリと掴んでいる為に手を離すのは無理だった。

「きよ！ 鏡冶さんっ！」

「……ッ！！」

慌てる二人を見て鏡冶は口を開く。

鏡冶はまず、アキラに視線を移した

「アキラちゃんはどうして怒ってるんだ？」

「べっ！ 別に怒ってなんか……」

鏡治は頷いて次は我夢を見る。

「じゃあ、我夢くんが怒ってるんだな」

「いや！ 僕は全然……ッ」

また頷いて鏡治は目を閉じる。

二人は二人とも怒ってないという

「じゃあもういいな」

「「え？」」

「最近二人は何かぎこちなかったからさ。」



でも、もういつも通り過ごせるんだよね？」

鏡治は、すこし笑みを浮べて二人に問いかけた。

いつも通り？

「「・・・」」

我夢とアキラは一瞬互いに目を合わせるが……  
どうもまだダメのようで、直ぐにまた目を反らしてしまった。

鏡治は言う、普通の二人ならそんな事はない筈だと。  
尤も、鏡治は普段の二人の様子を知らないわけだが……

しかし、その鏡治でさえ今の二人の様子がおかしいと言う事が分かるのだ。

「す」

「え？」

「私が悪いんです」

遂に、耐えられなくなったのかアキラが声を震わせながら我夢を見た。

戸惑う我夢、アキラは目に涙を溜めて言う

「私が変な意地を張ってしまったせいで……」

我夢くんは何度も謝ってくれたのに……ッ

「アキラさん……」

鏡治は真顔に戻ると、ゆっくりと頷く。

「大丈夫さ、アキラちゃんだって悪くねえ。」

「ああ、そうさ誰も悪くないんだ」

「でも、私……」

「どうしても我夢くんの考えてることが納得できなくて！」

「ッー！」

我夢が言った言葉。

自分の役割は盾、それが納得できなかったのだ。

自己犠牲が最良の選択だと、彼は言う。

ならば、その彼を想う人たちはどうなる？

まるで自分には何の価値もないみたいな言い方。  
そんなのはおかしい筈だ。

「だけど……私は      ツッ」

ただ素直に我夢くんが心配だから、

そんな事言っただけじゃなかったって言えばよかったのに……

私は……」

「そつ！ そんな事ッ！！」

正直に話したアキラ。

ならば自分も素直になるべきだろう、我夢はアキラの瞳を直視する。

普段の彼ならできない行動だが、今はただ素直に彼女を見ていた。

「すみません……本当に軽率で馬鹿な発言でした。

僕達は皆で一緒に帰るんです。

平和になった元の世界に……」

「は、はい……」

「ごめんなさいアキラさん。僕を許してくれますか？」

「も、もちろんです！  
私も……許してくれますか？」

「はい！」

笑顔になる二人を見て、鏡治も安心したように笑う。

「ああそつだ。じゃあ、仲直りの握手な！」

そして鏡治は自分の手を二人から離す。  
我夢とアキラは少し戸惑いこそしたが、しっかりと握手を交わして  
笑い合った。

「強引な男だなお前は」

そう言いながらも咲夜は鏡冶に向かって拍手を送っていた。  
自分じゃそんな行動思いもつかなかった。

なかば無理やりだろうとも、二人は仲直りして笑い合っている。

『今頃気づいたのか？ コイツは強引だぞ』

「へっ！ ああそうさ。

多少の強引さが壁をぶち破るってもんよ！」

「あー！」

教室から出てくる鏡冶を見て司達の表情が強張る。

どうなった!?

目で語りかける司達に、鏡治は爽やかに笑って返した。

「!?!」

そして次に出てくるのは笑顔の我夢とアキラ。  
楽しそうに談笑している二人を見て、司達は歓喜と尊敬の声をあげる

「うおおおおおおお!

鏡治さんかっけええええええええええ!!」

「マジ鏡治 鏡治 ! 惚れた! イケメンすぎる!!」

「くっ、流石だな鏡治……」

「いやあ、俺はなんにもしてないぜえ。ああそつち」

満足そうに笑う鏡治、さて何か食べに行こうか？

鏡治は爽やかに歩き出す。

「鏡治さん！何か奢ります！

いや奢らせてください！回るおすし行きましょう！」

「馬鹿野郎！鏡治さんがそんなモノで満たされる訳ないだろ！

回らない方行くぞ！」

「回らない！？回転しない！？

ノーローリング?!?!?」



がやがやと騒ぎながらも、我夢とアキラの仲が戻ってよかったと皆は喜び合う。

すこし後ろにいる当の本人達も、少し前までのが嘘の様に楽しそうだった。

「我夢くん……」

「はい？」

「これからも……ずっと『お友達』でいませうね！」

「……」

「」

「」

「え？」

我夢が真っ白になって倒れたのは言うまでもない。

ずっとお友達。

一生お友達？

永遠オトモダチ……

友達って……友達か。

それ以上にはなれないんですよね。

「いやいやね、あれは別に深く考える必要ないって！」

「そうだぜ我夢！　きっとアキラも純粋な気持ちでだな」

「だと…いいんですけど」

大きな公園、その脇道でげんなりした様に我夢はため息をついた。それを励ますようにユウスケと真志はにこやかな笑顔を浮かべている。

我夢は二人の言葉に笑みを浮かべると、お礼を言った。

とはいえ、テンションは心配する様に低い訳だが……

「よしよし、じゃあまあどっか遊びに……い」

「ん？　どうしたんだ？」

真志がいきなり立ち止まって、なにやら深刻な表情を浮かべていた。ユウスケと我夢は不思議に思っ、て真志の視線を追う。

「・・・？」

何か遠くの方で赤い何かが……

「って！ あれ人じゃないか！」

「え！？」

赤い髪の少女が倒れている。

血が出ていない事から、外傷はない様だが……

いや、倒れているなんて普通じゃない。

「た、助けにいくぞ！」

三人は急いで倒れている人のところへと向かったのだった。

「いやぁーワリーね！」

飯奢ってもらっちゃって！ たははは！」

「「「「「」

「おなか空いてやばかったんだよお！ アハハハ！」

目の前でもりもり食料を摂取している少女を  
三人はただただ口を開けて見ただけだった。

どうやら空腹で倒れていたらしく、ファミレスで少女にご馳走して  
あげる事になった訳だが………

「すんませーん！」

追加でハンバーガーランチ七つお願いしまーす！」

「なっ！ 七つ!？」

先ほどから少女は追加注文を取りまくっている。

いや、既にテーブルには何枚、何十枚もの空き皿が重なって……

奢ってやるとは言ったが……

「クソッ、こんなことなら食べ放題にしとくんだった……」

「おれ、もうお金ないんだけど……」

顔が青くなっていく真志達。

だが少女は気にする事なくパカパカと食料を口に運んでいく。

というか既に少女の体に入る限界を超えている様な気がしてならぬ  
いのだが。



「あ、つつか……あんた等名前は？」

少女はユウスケのエビフライを摘み取ると、口へ運んだ。

え？ それ…ッ え？ あれ？

それおれのエビフライだよね？ え？ え？

なんで？ なんで普通に食べちゃうの？ え？

なんて視線を送るユウスケのスープを少女は飲み干し、もう一度彼らの名前を聞いた。

「じよ、条戸真志……」

少女は真志のハンバーグを一口で頂くと、わかったと笑った。

「オデのエビフライ……」

「じゃなくて、小野寺ユウスケ」

「あ、相原我夢です」

「うっし！ 覚えたぜ。

いやあ、助かったよ本当に。

マジでやばかった、オレは朱雀。よろしくな！」

豪快に笑って少女は尚も食料を取り込んでいく。  
というか、いろいろ凄い。

なんかハンバーグなんて二口で消えてるし、から揚げなんて飲み物  
みたいに取り込んでいく。

の、割には太っていないときた。

露出が多めの服なので腰はさらけ出されている訳だが、くびれがし  
っかりと確認できる。

一体これだけの食料はどこへ行くのか……

「あのっ、朱雀さん……」

「朱雀でいいぜ、どうした？」

「そろそろ、僕らのお金が……」

「え？」

朱雀は我に返った様に手を止める。  
そしてその髪と同じ赤色に顔を染めた、ブンブンと手を振りながら  
謝り始める朱雀。

「や、やべーっ！

まーた加減しないで食っちゃった！

たはは、ワリーワリー！

「いっつも言われてるんだけど……」

そう言って朱雀は伝票を申し訳なさそうに真志達に差し出した。

「は？」

「あー…その、なんて言うか

オレ、金持っていないのよ」

「……ッ」

「今度、会ったらぞ。

ぜってーお礼すつから……あとおひらけッ……」

「え！？ ちよ！」

「じちそーさんッッ！！」

朱雀は軽やかな動きで椅子から飛び降りると、そのまま走り去っていく。

3276

残される三人と伝票……

「ゆ、ユウスケさん、真志さん！！！」

我夢の声が裏返り、完全な高音に変わる。  
嫌な予感しかない。

真志とユウスケの足がガタガタと振るえはじめる。

朱雀はドリンクバーの様に料理を食べていた。

もちろんハンバーグはドリンクじゃない。

「何…？ どうしたのッ？」

「これ、見てください」

我夢は顔を真っ青にして、ユウスケと真志に伝票を見せる

「」  
「」

三人の色素がもうどこかへ消えてしまったのではないかと思うくらい。彼らは真っ白になるのだった。



『七万円……』

ユウスケ達が七万もの大金を支払っている頃……

「バーゲンもう始まつてるみたいだよ！」

「ふうん、まあでも焦らない、優雅にいきましょう」

「そうですねよ友里さん。焦りは禁物なのです」





！  
「  
「

先ほどの優雅さ（）が嘘の様に三人は咆哮をあげて人の群に突っ込んでいく。

「どげやああああああああああ！！」

「うらあああああああああ！！」

「これはあたしがとつたんだよおおおおおおお！！」

鬼のような形相で服を奪い合う女達、尤も薫たちも同じな訳だが……

まるでそれは、ピラニアの群れに落とされた肉の様。

群がる女性達は、あつという間に服を買い占めていく。

「よっしやああああ！ とったああああ！」

「チツ、何もとれなかったわ……」

「結構かわいいじゃん、はやくお金払ってきなよ」

結局服を買えたのは美歩だけのようだ。

美歩は、はやく清算を済ませようと歩き出す。

だがその時だった。

その泣き声が聞えてきたのは……

「うううううえええええ！ もう何にも残ってないい！」

美歩達はその悲痛な声がした方向を振り向いた。

そこにいたのは、残念そうにしている……女性。  
自分達より少し上程度だろうか？ だけど雰囲気は大人の女性だ。  
思わず息をのむ三人。

どうやら服を見に着たらしいのだが、もう売り切れと言う訳だ。

しかし驚くべきは……

(け、けっこう……いやかなり綺麗ね……)

(胸でっ！ 腰ほそっ！ ちらやましいッ！)

(……………なんか、エロい)

三人はその女性のなめ回す様に見ていた。  
はたから見ればかなり怪しいヤツだったろうに……

だが、悲しそうにうつむいてる女性を見て、美歩達は申し訳ない気分になってしまふ。

「あ、あのお………」

「うん？」

「これ、よかったら……余り物なんですけど……あははは」

「え！」

美歩は自分の持っていた服を女性に渡す。

「でも！ 悪いわ」

「いやいやいいんすよ。」

アタシら別に買う気はなかったんですから」

「あら……そうなの？」

ブンブンと首を振る三人。

それを見て女性の表情が輝く！

「ありがとうおお！ けっこうかわいい服じゃない！」

女は美歩から服を受け取ると

三人にもう一度お礼とウインクをしてレジへと向かうのだった。

残された三人は、尚も女性をジッと見つめる。

「服は買えなかったけど」

「いいもの見たね」

ニタアアア……三人はいやらしく笑うと、学校へと帰って行くのだ  
った。

薫達が妖艶な少女に見とれていた頃……

人気のない地下道で女の子の様な少年が男たちに囲まれていた。

薄暗い地下道、通る人もいない。  
少年を助ける人もいないと言う事だ、まさに絶望的状况だろう。

「おい、お前どこみて歩いてんだ？」

「あの……ッ！　　い！」

「あ？　聞えないんだけど？」

そう言つて男は少年の胸ぐらを掴む。

少年は怯えているようで、足をガタガタと震わせて目に涙を浮かべる。

それを滑稽だと男たちは笑った。

「ハハ！　だせーなコイツ。

まあいいや、ねえ君？

俺達お金持ってないんだよね、ぶつかったのは仕方ないからさ

せめて慰謝料払つてよ」「



「えええ……」

そんな無茶苦茶な、当然嫌がる少年。  
しかし、そんな彼の頬を軽く男は叩く。痛みと恐怖が少年の心に襲い掛かる！

「それで許してやるっつつてんだ。  
さっさと金だせよ、ぶん殴るぞ」

「あう……」

少年はブルブルと震えて固まってしまふ。

怖い。

怖い！

そしてその時だった

「あ？」

一人の男に誰かがぶつかる。

一体誰が？ 男は舌打ちをしながら振り返った。

振り返ってしまった。

「じゅうあああああああああああああー！」

「！ー！」

男にぶつかつた少年は、突如腕を押さえて地面へと倒れこんだ。悲痛な叫びに男たちも思わず目を見開く。

「ウツ！ ああああああ！ 出てくるなあああ！

お前は血を求めるなアアアアア！」

「な、何だコイツ！？ きもちわりい！」

少年は腕を押さえて白目をむいている。  
体を大きく震わせている少年に、男たちは寒気を感じた。

「お前ら逃げろっおおお！」

早くうとう！

じゃないと俺ももう抑えられないいいいいいいいい！

「はぁっ?」

「ああああああああああああああああああああ!」

「何だこいつマジできもちわりいい!」

男はとっさに蹴りで少年の腹を抉った。

苦痛の声を漏らしながらも、少年はなおも叫び続ける。

「くそっ! くそッ!」

男たちは少年を囲んで蹴りの嵐を浴びせる。

「いでででっ！ ちょ！ おまつ！  
……じゃなかった。」

やめろおおおおおおお！  
アイツが目覚めるっうっうっうっ！！

何か、素が出た様な気がした。  
それを男達も感じ取ったようで、ニヤリと笑いながらも一度少年の腹部を抉る。

「うるせえよっ！」

「あ……あ……」

どうしてこんな事をするんだ！？  
少年、リラは理解できない。

人が人を傷つけるなんて……

でも、とにかくあの人を助けなければ……

「君達！ 何をやってるんだ！」

「ッ！！」

「やばいッ警察だ！ 逃げるぞ！！」

「！」

突如現れた警官に男たちは驚き、そのまま走り去る。  
何故こんな人気の無い場所に？  
リラは混乱するが、助かったことは幸いだった。

「君達大丈夫か!？」

「ええ、まあ」

「？」

リラは疑問に思う。

さっきからアレだけ苦しんでいた少年が  
冷静に警官と話し合っているのだ。

警官をつまぐ言いくるめて、少年はリラの手を取って走り去った。

「いてっ！ あのかさねDQN共……ッ！！」

ああイラつくッ！！

全員将来禿げるよクソ！」

「だ、大丈夫ですか！？ あのッ……腕は？」

「ああ、大丈夫さ。腕？ ああ、あれ演技ね」

「ええ！？」

少年は涼しい顔でメガネの位置を直す。

「お、いたいた！ おーい、良太郎！」

少年、椿は向こうの方で手を振っている良太郎と合流する。

警察を呼んでくれたのは良太郎だった。

椿は良太郎に、愚痴をこぼすと何事も無かったかのように歩き出す。



「あなた、大丈夫？」

「あ、はい……あの、本当にありがとうございました。  
ぶつかった人が怖くて……」

「気持ちはずごくわかるよお」

良太郎の隣を歩いてきたハナにリラはお礼を言う。  
良太郎も幾度となく体験した話だ、共感できるのだろう。

「ここでもいいのか？」

「あ、はい！ もう大丈夫です。ありがとうございました」

そこでリラは気づく。

道路を挟んで向かいの歩道に男の子が歩いていた。

問題はの上だ、マンションのベランダにあった植木鉢が強風によつてバランスを崩したのだ！

「危ない！！」

「！！」

リラの言葉に椿達もソレを理解する。  
植木鉢はもう落下する寸前！！

「エース！ 頼む！」 『ターン・アップ』

椿はすばやくエレメントを発射し、植木鉢を弾いた。  
一瞬で他の人には見えなかっただろうが、リラはしっかりと見てしまつた。

「そ、その力……ッ」

「ん？ あははは……内緒だお！」

そう言っつて椿達は走り去ろうとする。  
だが、リラはどうしても一言聞きたかった。

「待ってください！  
どうしてあの時、その力を使わなかったんですか！？」

「んー……この力は、  
そう言っつ事の為に使うもんじゃないからだな（キリッ）」

そう言っつて椿達は走り去る。

その背中をリラは目を見開きながら見ていた。

「力の……使い方……？」

リラは小さくなっていく椿たちを見て、グッと自分の胸を掴む。発作を抑えるようにしながら、彼は少し微笑んで踵を返した。

椿達が銀髪の少年と知り合っている頃……

「どっ…？ 里奈ちゃん、楽し…い？」

「はい！ ありがとうございます真由先輩！」

「よかった…」

真由は里奈の車椅子を押しながらいろいろな店をまわって行く。  
後ろから見守る双護の目も温かい。

普段はあまり外に出られない里奈、そんな彼女に少しでも楽しんで  
もらおうと真由は張り切っていた。

もちろん巨も、どうしてもついでいきたいと言っていたが  
たまには「つづつのも悪くないだろう。」

「…」

立ち止まる三人。

しばらく歩き回っていると豪邸を見つけたのだ。

周りの景色に不釣り合いな程の凄さの為、三人は思わず足を止めてしまつ。

まるで漫画やアニメにでもでてきそうな程の家だ。

「すごいね……」

「うわぁ、一度こんな家に住んでみたいなあ」

「……フッ」

そこで里奈は気づく。

そつえば双護達は……

「双護さんもこんなお家なんですか？」

「まあ、もう少し小さいさ」

「へー！　すごいですね！」

「今度遊びにきてね……」

三人は笑顔でその場所を去ろうとする。  
その時だった、風が吹いたのは。

「あ！」

「ッ！」

屋敷から帽子が飛んできた。  
風のせいで飛んできたのだろう、双護はカプトゼクターに合図を送





里奈はハイタッチ（？）を決める二人（？）の謎会話を理解するのを諦めると、帽子を屋敷の人に返すよう提案する。二人もそれに賛成し、恐る恐る屋敷の門を潜った。

「すいませーん、誰か……」

誰かを呼ぼうと思った時だった。  
庭の方で一人の少女が紅茶を飲んでいたので。

その儂げで優雅さが溢れる空気、  
そして美しい深い……まるで海のような色をした髪が風になびいている。

少女は双護達に気がついたのか、のんでいた紅茶を置いて立ち上がる。

「……あら、この場所が分かるという事は」

いえ、何でもありませんわ。  
そう少女は言って、視線を帽子へと移した

「その帽子……拾ってくださったのですね！」

「あ…うん！ どうぞ！」

真由はパタパタと走って行き、少女へ帽子を渡す。  
少女はお礼を言うと、そのまま三人を手招きする。

「私はマリン、さあどうぞお座りください。  
お礼に紅茶とケーキをご馳走しますわ」

ケーキと言つ言葉に三人は目を輝かせる。  
マリンも笑って、小さなティーパーティーは始まるのだった。

「本当にありがとうございます。お気に入りの帽子なんですの」

マリンは言う。

飛んでいってしまった時はどうしようかと思ったらしい。

とりあえず執事が帰ってきてから探しに行こうと思っていたようだ。

「し、執事ですかあ」

やっぱりお嬢様って本当にいるんだなあ。

里奈は目の前にあるケーキや紅茶を見てしみじみ思う。

どれこれも自分が今まで食べたことのない様な……

何かこうキラキラしている気がする。

今まで至高の一品だと信じて疑わなかったコンビニのスペシャルシ  
ョートケーキ。それを幸せそうに食べていた自分を考えて何か寂し  
くなってしまうた。

だが、同時にお姫様の様なマリンに出会えて  
こみあげる嬉しさと言つものもある。

まあ尤も、双護や真由はこのケーキと同レベルの物を頻繁に食べて  
いるため、特に何も思っていなかった様だったが……

「でも、かわいい帽子ですね」

「……………」

沈黙。

「……………え？」

どうして沈黙するのか、里奈は焦る。

まさか、実は自分だけ美的センスがおかしいのだろうか？

プルプルと震えるマリン。

里奈は体から嫌な汗が噴き出るのを感じた。

やばい、もしかしてNGワードだったのか？

素直にかわいいとは思っ、しかしもしかしたらマリンは気に入って  
いなかったとかさそう言うオチか！？

双護さん助けて…………ッ あ、駄目だわ。寝ちゃってるわ

「ごめんなさい！ 里奈がそう言おうとした時  
ッ

「わかりますのッッッ！?!?!?!」

「!?!?!」

マリンは里奈の手を掴んで顔を思い切り近づける。  
驚く里奈と、目を輝かせているマリッ。

「この帽子、かわいいですわよねッッ!?!?!?!?!」

「え……！？ えと……うん！」

コクコクと首を振る里奈に、マリンはとびっきりの笑顔を浮べた。

「そうですか、そうですか！」

なんてすばらしいセンスをお持ちなのかしら！」

満足そうに笑ってマリンはしばらく里奈を褒めまくっていた。  
まあ褒められて悪い気などしない。

里奈は照れくさそうに笑う。

「このイチゴおい……しいね」

真由は真由でケーキに夢中の様だ。  
だがしかしこれも

「すばらしいッッ ですわッッ!」

「ふい……?」

「そうですね……ッ そうなんですのよお。

そのケーキはイチゴに特別なこだわりがあるんですの」

確かに、里奈もイチゴが特別おいしいと感じていた。

「なのに……ッ なのにアイツらはああ……

何を食べても上手いしか……ああ」

どうやら、彼女の知り合いは彼女の趣向を理解できない連中らしい。



なかなか苦勞しているのだろう。

「・・・」

真由はそんなマリンを見て手をスツと差し出した。

「？」

「お友達……………なる？」

「え？」

今度は、ボクがケーキをご馳走するから。

そういつて真由は微笑む。

「い……いいんですの？」

「うん！ お友達！」

マリンは笑顔で頷く。

もちろん里奈も双護もだ。

しばらく四人はそうやって楽しく談笑するのだった。

そんな彼らが優雅に過ごしている頃。

「すみません、ご迷惑を……おかけして」

「いや、別にいいんです。　ねえ？巨くん」

「はい、気にしないでください」

拓真と巨は、偶然出会った少年、タイガの荷物を持っていた。どうやら食材や生活用品を揃えていたようだが、一人で運ぶにはいくらなんでも無理がある。

すぐに手伝おうという事になったのだった。

「でも凄いですね、この量……」

「はい、お嬢様や他の皆さんのお食事の為に……」

「へー、大変ですね」

『皆さん』そしてタイガの身なりから察するに  
どこかに仕えているのだろうか？

それともそう言うバイトなんだろうか？

拓真たちはいろいろと考えてみるが、直接聞くのもどうだろうか？  
そんなこんなで聞けないでいた。

「本当にありがとうございます。今度お礼をさせてください」

「え！ いやいいですよお礼なんて」

「でも……」

「いやいやー」

「だけど……ッ」

「いやいやいやー」

その後三十分この下りが続きました。

その内、巨と拓真が妥協してお礼の約束を取り付ける。  
少しタイガの話聞いていたが、どうやらお互い苦労しているらしい。

「頑張りましょうね」

「お互いにね」

「踏ん張ろつね」

そう言って三人は笑う。  
彼らは美しい夕日をバックに歩いていくのだった。

しかし、平和な事だけでは世界は回らないのかもしれない。  
悲しいが、戦いの輪廻は繰り返されるのだ。

彼らの……様に

「くっ」

「ふふっ……………」

頬を伝う汗を感じる。

人気のない広場で、二人の少年が対峙している。

分かっている、相容れぬ存在だと。

認め合えないのだとッ！

分かり合う事は…………無いのだとッッッ！！

「また会ったね、司」

「ああ、そうみたいだな。海東！」

司と海東、二人の男はにらみ合い。





「ジャンケンポン！」

司はグー、海東はチョキ　　ツツ

大いなる巨岩は、切り裂く洗礼をただ沈黙させるのみ。

「っしゃあああああああ！！！」

そう、彼は勝ったのだ。

運命、それは世界を揺るがす要因の一つでしかない。

彼は勝ったのだ。

何度でも言おう、司は勝ったのだ。

「ちょ！ なん……でッ」

崩れ落ちる敗北者。

愚かな負け犬に何を吼える資格があると言っのか、凡夫に哀れな祝福など似合わない。

無慈悲な末路しか許さぬ決意。

それすらも、破壊者はあざ笑うのか？

「じゃあな海東！

何でこの世界にいるのかはわかんないけど、どうせ教えてくれな  
いんだろ？

じゃあめんどくさそうだからいいや！  
ばいばい、お宝……アレ？

あ、まあいいや」

「ま、待ちたまえ司！ もう一度だ！」

「えー、何でだよ。俺、勝ったじゃん」

「だれが一回勝負って言ったの！ ほら、いくよ」

仕方ない。司は手を差し出す。

それはまさに神でさえも運にゆだねし悪戯がごとく勝敗を決する。

通称・じゃんけん。

彼らの戦いは、既に握りこぶしと言つて居る……

いや意思を構えた時点で始まっている。

示すのは答え。

全てを切り裂く刃。それはまさに閃光<sup>チヨキ</sup>

あるいは、大いなる宇宙でさえ包み込む有限にして無限の抱擁<sup>ハイ</sup>

はたまた、恐れを知らぬ唯一の真実、抗う事すら認めぬ彗星<sup>グイ</sup>

果たして、結果と言う舞台に立つのはどの役者か？  
それは時間の追従を許した神のみぞが知る。

しかし神よ、何故あなたはこんな戯曲を記したのだろうか。

何故、彼らは戦っているのだろうか？

誰も分からない。いや本人達ですら分からない。

運命とは残酷だ。

ただ司はコンビニへ漫画を買いに行っただけ。

ただ海東は裂けるチーズを買いに来ただけ。

できればおでんも買っちゃおうかな、ちよつと贅沢かな。

いやでも玉子が食べたいな。なんて事も彼は考えていただろう。

されど、出会ってしまった。

しかし、出会ってしまったのだ。

交わる事のなかっただろう二人、しかし出会った。  
ならば、戦わなければならない。

それが彼らの答え。それが彼らの真実。

てか私は何でこんなどうでもいい事をダラダラと長文で書き綴っているのか。

ううん、そんな事はどうでもいい。

私はただ、ただ彼らの戦いをここに記すまで。

ジャンケンポン！

放たれた言葉に意味はない。

それはただ理由と言ついい訳を世界に容認させるだけのつまらない  
ノイズ。

司はパー、海東はチヨキ…それだけが欲しい。  
それだけを迷える子羊に与えてやってくれ。

「まあこれが当然の結果なのかな」

海東は感じていた。我こそが勝者なのだ。  
我こそが舞台上で踊る事を許された英雄なのだ。

確信していたのかもしれない。

「……………一回目で止めとけばよかった」

後悔と言う檻に縛られし愚者。

彼もまた舞台に立つべき一人なのだろう。

ならば、彼は知っているはずだ。次に自分が紡ぐべき言葉を

「海東、もう一回だ」

「えー、今ぼくが勝ったのに……」

「ふーん、にげるんだー？」

「あ、そう言う事言うんだ。」

「あ、そう言う事言うっちゃうんだ」

再び構える二人。

それでいい。



それがいい。

こうして二人は意味のない戦いを、一時間繰り返したのだった。

「ふっ、次に会うときはぼくの仲間と共に  
総攻撃をしかけてあげるよ。」

覚悟したまえよ」

「んー。あ、十円たりないなあ。夏美に両替してもらおう」

「きいてよッ！」

「え？ ああ、うん。俺も負けないぜ！」

こうして二人は別れたのだった……  
本当に何で彼らは戦っていたのだろうか？

そうやって、彼らの休暇は終わっていくのだった。

帰って来た彼らは皆、口を揃えて言う。

『今日、凄い人に出会ったんだ』

第144話 番外編 出会いは突然（後書き）

説明をここで

カプト・デュアルゼクター

三種類の能力を任意で発動させることができます。  
クウガゴウラムとは違い、自らの攻撃力は低いので単体では敵を倒す事は難しいです。

鏡治は、ゼノン達からガタツクエクステンダーを支給されました。

はい、こんなところかな。  
では次もよろしく！

**第145話 大切な注意&プロローグ（前書き）**

はい、詳しくは本文で。

次回更新は結構先なんで、プロローグを今見ないというのもアリか  
もしれません

ではございぞ！

## 第145話 大切な注意&プロローグ

はい、どうも。

今回は前書きが長いので本編の中に入れました。

この話から見ると方も、今まで見てくれている方も  
ちょっと注意書きがありますので、それを見て欲しいなと！

今回から響鬼編です。

この後にある話はプロローグ的なもので、本編が本格的に始まるのは……

まあそうですね。ちょっとリアルが忙しかったり、話の整理をした  
いので  
すみません、次の更新は一週間か……まあちょっと長い期間が空く  
かもしれません

予定としては……そうですね。まあ七日か、そこら辺あたりかなと！

で、ですね。

すみません、長くなりまして。

今回の注意書き、それは本格的なゲストキャラクターの登場です。

簡単に言うと仮面ライダー以外の作品からキャラクターが登場すると言う事です。

魔女もそうなんですがね。

もう隠す意味もないので、明かしますが『鬼太郎』のキャラクターが出てきます。  
妖怪と言えば……やはり彼らをちよつとどうしても出したかったの  
で。

ただ、これが本当に申し訳ないんですけどパラレル色が強いです。

もちろん僕は二つの原作のファンなのですが  
オリ設定の多さ故、ちよつと原作ブレイク的な物が入ってしまうか  
もしれません。

だからクロスつて程じゃなく、響鬼編の世界に出てくる鬼太郎達と  
考えてもらえると助かります。

1〜5期のどれかではなく、オリジナル設定の彼らと言う事ですね。

あとすいません、キタネコ要素ありです。

人によってはクロスや改変に嫌悪感を覚える方もいると思います。  
一応タグに鬼太郎の名前は入れようと思うので……  
もしタグから来て、そう言うオリジナル設定やクロスが苦手な人は  
バックをお願いします。

今まで見てくれた方で、そう言う事に嫌悪感を覚える方は本当に申  
し訳ありません！  
どうか、広い心で見ただけだと助かります。

では、分かったと言う方は下へスクロールをお願いします。

最後の試練。

彼らはクリアできるのでしょいか……



E  
i  
s  
d  
  
E  
C  
D  
E  
?

「……………何だ？」

どこともつかぬ書齋。

その扉が開き、ナルタキがその姿を見せた。

相変わらずのフェルト帽とメガネは、ある意味歴史を感じる。まるで明治時代辺りからタイムスリップでもしてきたようだ。

魔女はそんなナルタキを確認するとニヤリと笑う。

「そなたにとって悪い知らせがある」

「何ッ？」

そなたにとって。ナルタキはまずその言葉に顔をしかめた。

自分にとってであってコイツにとっては面白みが増す何か……と言ったところか。

嫌な予感がする。

できれば聞きたくはない言葉だ。

ナルタキは苦い顔を浮べて詳細を求めた。

魔女はニヤついているが、コチラにとっては本当に重大な事なのだろう。

「クククツ……フフフ……」

彼女の性格を考えて、またナルタキはため息をつく。

魔女はコチラが苦労している姿をみるのが好きらしい。

大変結構な性格だ本当に。ナルタキはもう一度詳細を求めた。

魔女は頷くと、その本をナルタキに差し出す。

ナルタキはその本の題名を確認すると顔色を変えた。

それを見て、また魔女は笑う。

「司……ディケイド組みか」

「エピソードディケイドは既に完成を迎えようとしていた。

そこにきて  
」

魔女は言葉を止めてナルタキに問いかける。

続きが気になるか？ ……と

「早く教えてもらおうか。茶番に付き合う程、暇じゃないのでね」

「それは残念」

ナルタキはもったいぶる様に振舞う魔女に若干の苛立ちを覚える。

しかし魔女にとってはそれが目的なのだから、一々反応しては埒があかない。

だからナルタキは沈黙を続けた。

魔女は少し期待はずれな回答にふてくされると、もう引き伸ばしは無駄だと悟ったのか、素直に口にする。

「簡単に言おうか？ この試練で女が一人死ぬ」

「……ッ！」

今度はナルタキの反応が予想通りなのか、魔女はクスクスと笑った。残念と言う反応と、ディケイドでなくて良かったと言う非情な感情に自己嫌悪を浮かべたナルタキ。

それを女は滑稽だと笑う。

「惜しいな、ここまで誰一人欠ける事はなかったが……」

「前回……は壊滅的だったな。前々回は誰一人欠ける事はなかったか。」

流石に確立は低いものだ」

ナルタキは深いため息をつく。

若い命が散るのは彼とて心苦しいものだ。

なんとか助けてやりたいものだが…

「どうにもならないのか？ できる事ならゼノン達に……」

「そなたが仕掛けておいてよく言えたものだな、クククッ」

だがメリットがない訳ではない、女はナルタキにそう囁く。

『メリット』

その言葉にナルタキの動きが止まる。

ああ、なんと言う事か。

魔女の囁きにナルタキはつい耳を傾けてしまった。

「メリット？」

「女の死がトリガーになる可能性が非常に高い。

死を持って仲間は覚醒する。」

ありきたりな展開だが世界はそれを物語として認めると言う事で  
す

やめておきなさい、魔女の言う言葉を鵜呑みにしては駄目。

などと、幼い子供達は絵本の中でそれを知っただろう。

絵本の中の『世界』でそれを学んだだろう。

しかし、この魔女はそう簡単なものでもない。

ナルタキは迷う事無く、話しに乗ることにした。

「試練を簡略にでき短縮できると言うことが」

その通り、魔女は笑う。

死ぬらしい少女を見捨てる事で、試練を早急に打ち切れると言う訳だった。

そうすれば彼らの目的であるエピソードディケイドは完成を向かえる。

一人を犠牲にするだけでいい……？

「……」



ナルタキは迷う。  
少女を見捨てる事で結果、多くの人間を救える可能性がでてくるのだ。

それは彼の目的。

反面、少女を助ける選択を選べば最悪全滅さえありえる。  
それだけは避けたい、ディケイド組みはナルタキにとって切り札なのだから。

たった一人の命……

「……こちらからは干渉は控える様に、今まで通りでいく」

「クククッ！ 少女より『物語』をとりましたか」

ナルタキは眉をひそめ女を睨んだ。

鋭いオーラだったが、魔女は声をだして笑う事を止めただけで、口はつりあがったままだ。

「しかたあるまい。」

一人の命を犠牲にすれば試練を簡単に終わらせられるのだから。

しかし何故貴様は少女が死ぬ事を知った？」

「すこし暇だったから予言をやってみただけです、結果は言ったとおりだ。」

彼女は百パーセント死ぬ。

残念です、私も」

敬語混じりにクスクスと女は笑った。

こう言うヤツだ、本当に気まぐれだったのだろう。

しかし予言は本物。

少女は死ぬのだろうか、ナルタキは既に理解していたので特に何も言わずに背を向ける。

一人、減るくらいならば計算の内だ。

しかも少女。むしろこれは運が良かったと考えるべきか？

「・・・」

一瞬、そんな事を考えてしまった自分を戒めるナルタキ。心の中で誰かも分からぬ少女に謝罪すると、足を速めた。

「どいへん？」

「一度、やつらの動きを見てくる」

そう言ってナルタキは書斎から出て行く。

女は特に視線を移す事はなかった。

そのままティーポットに手をかけると、新たな紅茶を入れるだけだ。

綺麗な赤がカップに注がれていく。

魔女はそれをつまらなさそうに見ていたが、注ぎ終わると小さく笑って『友人』を呼んだ。

「死に慣れるという事は恐ろしいですね」

話を聞いていたのか、彼は少し含んだ言い方をした。  
どうやら少女が死ぬ事が納得できないようだ。

甘いとは分かっている。

自分が助ける事も……恐らくはないだろう。

魔女が予言した事は真実。それは理解していた。  
だが、それでも……何かしらの希望は欲しいものだ。

「決断を迫られたとき

冷静に考えられる様になる事は利点か欠点か？

ククク……」

本棚の影から現れた友人に、魔女は紅茶を差し出す。  
友人はお礼を言って紅茶に舌をつけた。

二人はしばらく無言で紅茶を飲んでいて、少し笑みを浮かべたまま。

「ゼノンとフルーラには言ったのですか？

彼らは担当者に情を移すクセがある」

「それは、そなたもだろう？」

確かにそうだが、でも割りきる時は割り切りますよ。  
友人は言う。

今回も……どうしようもないのなら

諦めるべきだろう。

「いや、また独断で命令を無視されては困るからな  
彼らには言っではいませんよ」

友人は笑みが増した魔女を見て、自分もまた静かに笑う。

嘘だな、彼女はゼノン達に命令はするが強制はしない。  
どのような結果になるうとも彼女にとっては関係ないのだから。

ただ暇が潰れるかそうでないかの差でしかない。  
それは世界でさえも、命でさえもそうだろう。

ナルタキに協力こそするが、あくまでも彼女は自由だ。

「私は世界がどうなるうが、それをありのまま受け止める。  
それが観測者としての義務だからです。」

私がいくら言葉を、行動を起こそうとも  
テレビの中にいる人間には何も影響がないのだから！

「……だが『眼』は違う、そうでしょう？」

「私はただ見るだけ、その眼がどこへ向かおうとも…私は構わない」

女はそう言って、またクスクスと笑いだすのだった。

楽しいですか？ 友人は問いかける。

「さあ？ しかし、暇はつぶれる」

だから、退屈させないでほしいものだな。

魔女はそう言って、また口を吊り上げるのだった。

「行くのですか？」

「ん？ ああ見送りにきてくれたのかい」

「ふふっ、嬉しいわ！」

そう言ってフルーラは友人を撫でる。

新たな世界に降り立とうとするゼノンとフルーラ。

彼らを見送りに友人が現れたのだ。

いや、もちろんそれだけではないのだが。

友人は、ナルタキに与えられた課題の話を二人に振った。

まるでそれは、宿題をやってきたかどうか友人間で確認しあう子供の様。

しかし、そんな簡単なものでもない。



「私は全て済ませましたよ。そちらはどうぞですっ。」

「ああ、カブトの時は仕事も少なかったからね。その間にやっておいたよ」

「龍騎勢は……どう言う判断を？」

「……」

友人の言葉にゼノン達は意味深な笑みを浮かべる。  
複雑な表情だ、じらそうとしていた事を当てられて

気まずく笑っているかの様に

「リサイクル……ですね？」

「流石だわ、その通りよ。北岡秀一、秋山蓮、佐野満、霧島美穂」

そして

「ほう、まさか城戸真司ですか」

「ははは、先に言わないでくれよ」

ゼノンは苦笑する。  
友人は頬を膨らませるフルーラに謝罪すると、再び話の続きを求めた。

咳払いを一つ。

フルーラは手を上げ、声を高らかにして芝居がかった口調をつくる！

「彼等は再び舞台上上がる選択をしたの！」

「ほう……」

「ボク達も彼らにはもう関わらないでいて欲しかったんだけど……ナルタキさんが一度声をかけてみるっていうからさ」

仕方なかったんだよ、そう言ってわざとらしく泣きまねをしてみせるゼノン。

しかし、急に真面目な顔に戻るとゼノンは一言だけ追加する。

「本当に、関わらないでいてほしかった。

関わらなければ、幸せなままだったのに」

成る程、友人は頷くと再び笑みを浮べた。

「それが、彼らの強さですよ。

だからこそ、彼らの物語は英雄として伝えられるのです」

「……かもしれないね」

「それにしても、城戸真司は不思議な存在ですね。

彼と野上良太郎は何故……？」

恐らく、パラレルワールドがより『神々』に観測されているからか。友人は心の中で考察を広げる。

それをゼノン達は笑みを浮べて観察していた。友人のクセだ、他人と話しているのに考え事を始めれば周りが見えなくなる。

「もういいかな、出発しても」

「おっと、これは失礼しました。お気をつけて」

友人に別れを告げ、笑顔で消えていく二人。彼はその姿をジッと見ていた。

(さて、彼らも……私も、知らない事が多い)

ナルタキと彼女は知っているのでしょうね。  
友人は少し自虐的な笑みを浮べて踵を返す。

知る必要は無い、しかし気になるのも事実。

まあ正直、自分はゼノン達よりは魔女側に近い。  
彼女に直接聞けば答えてはくれるかもしれないが……

(ふむ、それはそれで味気ない)

その時だった。

ゼノン、フルーラと入れ替わるようにして新たな来客が訪れる。

「おや、貴方ですか。お早いですね、まだ時間は掛かりますよ」

現れたのは、男と一匹。

成る程、確かにオーラが少し違う。

友人は来客を確認すると頭を下げた。

男もそれに気づいたのか、彼の言葉に答える。

「別にいいさ。女性を待たせるのは俺の趣味じゃない」

『ほう、面白い場所に出たな』

現れた男はキザに笑ってみせる。

友人は呆れた様に微笑むと、大切なゲストを部屋に案内する事にした。

「よろしければ、後で一曲お願いできますか？」

「コーヒーもご馳走しますよ」

「ふふん、いいだろう。」

野郎に捧げる曲はないが、まあお前は特別だからな」

そう言って、ゲストは友人を乱暴に撫でる。

その後に、これまたカッコをつけた様に笑う。

「ただし、コーヒーはやめてくれ」

「ああ、そう言えば苦手でしたっけ  
これは失礼」

友人は軽い謝罪を述べると、来客と共に消えていくのだった。

第145話 大切な注意&プロローグ（後書き）

確か鬼太郎の5期にはダブルやフォーゼの脚本家さんも参加して  
たんですよ

まあどの話かは分かりませんがね

では今回はこれで

次もよろしく！



## 第146話 始(前書き)

はい、更新です。思ったよりは早くできました

しかしすいません！

今週、まあ来週もかな？

とにかくちよっと忙しいので更新は遅れてしまいます。

なので次は日曜安定かなと。

今日は少し長めか……な？

あとすいません！

最初に言っておきますと響鬼編、途中いきなり無駄に長い過去編入ります。

あと、バトルはいつもよりは少なめ……かも？

ではどござー！

## 第146話 始

突然だが君は、妖怪と言うモノを信じるだろうか？

『完全否定』

『非現実的』

『存在証明』

『都市伝説』

ああ……なぜ、簡単にいないと決め付けるのだろうか？

常識的に考えていないから？

ではその常識が間違っているとしたらどうだろう。

君の知らない世界があったとしたら……どうだろう？

存在するかもしれない。

もしかしたら彼らにも社会と言うものがあるかもしれない。

もしかしたら今君の知っている人の中にもいるかもしれない。

無いと言い切れるかい？

君の常識なんて本当に信用できるのかい？

君は世界の何を知っているんだ？

見た事がない？

世界中を君は探したのか？

もしかしたら君の隣の部屋にいるかもしれない。

行ってみただけじゃない？

彼らも生きているんだ、動くにきまつてる。

だから今は下の部屋にいるかもしれない。

おやおや、このままじゃいつまでも終わらないね。

ではもう一度聞こう。君は……本当に妖怪はいないと言えるのだからか？

巨大な水晶がその部屋にはあった。  
部屋と言うには岩肌が荒々しい壁や、生活用具がない為に、  
見たところ普通の部屋ではないようだが……

そしてただのガラス球にも見えるソレ。  
異様なオーラを放っており、禍々しくも見える。

そしてその怪しげなガラス球を囲む様にして、大勢の人達が立って  
いた。

年齢はバラバラで、中には

人間とは思えない容姿の者もいた

「おお！」

ガラス球の中に、濁った影が浮かび上がってくる。

その影はしばらく時間を置いた後、徐々に人間の形を模していった。

そして、色がついて鮮明になっていくではないか。

水晶の周りに居た者達のざわつきが増す。

それほどまでにこの影が気になるのだろうか？

「……っ」

そして、影は完全な人間となり水晶の中に完成した。

静寂を保っていた室内はもはやどこにもなく、今は大声で誰かと誰かが叫びあっている様にも思える。

中に現れたのは制服を着た少女。

それだけが映っている。

この少女について人々は騒がしく言い合いをしているのである。

しかし、特に変わったところなど無い様にも見える。  
そんなにこの少女は何かを持っているのだろうか。

「静まれッッ!!」

「「「!!」」」

老人ともいえるだろう男の一声で、場は再び沈黙を取り戻す。  
それは紛れもない、圧倒的な力の差。

権力の差。

立場の差。

この一声で彼の力がどれだけ程の物かを伺える。  
男は水晶に映る少女を寂しげな目で見つめると、ため息をついた。  
だが、同時にハッキリと言ったのだった。

「」の少女が……花嫁だ」

「「「「！」「」「」

再び場がざわつき始める。  
男自身は目を閉じていたが、周りをよく見てみると。



信じられないと言つ目で男を見る者。

涙を目に浮かべているもの。

反面笑みを浮かべているもの。

そして、無表情の者と様々な表情がそこにあつた。  
誰しもがこの少女に対して同一の感情を持っていない。そんな様子  
だつた。

そして、皆が揃つて花嫁と言われた少女を見る。

「お待ちください総大将ツツ！」

まさか、この少女を花嫁として差し出すおつもりですかッ！！」

男の言葉が納得いかないと云つように、一人の男が前に出た。  
しかしこの男、明らかにおかしい。

この男が『人間』と言つて誰が信じるだろうか？

男は一言でいうのなら

黒い羽が特徴……我々がよく見かけるであろう鳥類、カラスだった。

カラスが服を着て立っている。

そして言葉を発している。

普通ならば大騒ぎになる事なのだが、

その場にいた者達は、カラスに対しては無反応だった。

代わりに、カラスが男に詰め寄ったのが驚いている様だった。

「その通りだ鴉天狗。

皆の者！ この少女を捕らえ、ここに連れてくるのだ！」

「なっ！！」

男の言葉に数名の者は頷き、姿を消す。

鴉天狗と呼ばれた男は信じられないと言った眼で総大将を睨んだ。

そう、睨んだのだ。

それがどれだけ危険で無知で無謀な事なのか、烏天狗は分かっているのだろうか？

「お止めください！　　どう言う事が分かっているのですか!？」

「お前こそ分かってんのか？　　ああ？」

「！」

そんな中、一人の女。  
ヒトツミが鴉天狗の肩に手を置いた。

鮮やかで美しい茶色の髪。

ショートヘアに映える美しい髪飾りと美しい着物。  
その下はアレンジが加わっているのかスカートの様なものになっている。

顔は可愛らしいが、半面着物は大きく胸元がはだけているせいで美しさと妖艶さが増している。

さらに美しい足と肩。

普通の男ならば彼女とすれ違った場合、必ず振り向くだろう。

そんな彼女とにらみ合う鴉天狗

「どう言う事だッ？」

「言ったとおりさ、鴉天狗ちゃんよお？」

そう言つてヒトツミは水晶に映っている少女を顎でしゃくつた。

鴉天狗は、ヒトツミから発せられる花の香りに混じつた血の臭いに顔をしかめる。

本人は正当防衛の為にと言っていたが果たして…

「花嫁を差し出さなかったらどうすんだってハアナアシッ！

あの惨劇を繰り返すのかあ？」

「ゲッ…それは……」

「お前さんの仲間も何人死んだと思ってるのさ？」

ありゃ化けモン、アタシらと同じ存在だけれども話すら通じな

い。

そんなヤツが救済の手を差し出してくれたのさ！  
これを受けない手はないだろうに！」

「そのとおりだ鴉天狗よ。

心苦しい話だがあの惨劇を二度と繰り返さぬよう

我々は努めなければならない」

総大将とヒトツミの言葉に、周りからは賛成の声が少しずつあがる。  
しかし尚も鴉天狗は反抗し続けた。

汗が酷い、彼も相当緊張しているのだろう。

「ですが総大将ッ！

私達は人間との信頼と友好を掲げてきました！

その人間を裏切る事になるのですよッ！」

「か、鴉天狗さん落ち着いてくださいッ！」

興奮する鴉天狗を長髪の少年が抑えた。

鴉天狗の言い分は分かる。

だが具体的な解決法がない限り、鴉天狗の言っている事は甘い理想論なのだ。

「離してくれ天邪鬼あまのじゃくッ！」

それでもッ！

それでも私は人間を裏切るような事はしたくないのだ！！」

甘い考えと言うのは分かっている。

だがそれでも人間との共存の為、彼は抗議を続ける。

そう、彼らは人間ではないのだ。

そして彼が無意識に言った言葉

『裏切り』

その言葉に気まずい雰囲気が出る。

分かっていた言葉、しかし誰もソレをあえて言わなかったのだ。

まさにそれは一番のNGワードと言つにふさわしいから。

「鴉天狗よ、お前の言いたい事は分かる。

だが、もし邪神が再び怒り狂った時、我々の力で邪神を止められるのか？」

「それは……………」

鴉天狗は齒を食いしぼる。

悔しいが、総大将の言っている事に反論できない……ッ

周りにいる者達も、反論の言葉がないから黙っているに違いない。

正論すぎる言葉には対抗できない。

言葉をぶつける事すらできないのだと。

「いや……鴉天狗の言う通りだ」

「え？」

しかしふと、弱々しい声が聞こえた。

それは鴉天狗の言葉に賛成する声、つまりは味方。

鴉天狗は急いでその声がした方向を探す。

どこか分からずにしばらく探した後、見つける。

茶色い髪で左目が隠れている少年を……



「なッ！！！」

探しても見つからないはずだ。

その声の主は少し離れた所にあった岩の中、正確には岩に埋め込まれていたのだから。

体は半分以上が岩に埋め込まれていて、両腕も埋まっていた。

まさに磔の様に少年は拘束されているのだった。

「鬼太郎殿！ ああ何て事だ……ッ」

急いで鴉天狗は鬼太郎と呼ばれた少年を助ける為に岩へと駆け寄る。だが、何をしてもそこから少年を助け出す事はできなかった。

そしてもう一人。長髪の少年、天邪鬼も驚きに目を見開く。

「鬼太郎…ッ！！ どういう事なんですか!？」

天邪鬼は顔を青くして総大将に問う。  
しかしその事に答えたのは、総大将ではなくヒトツミだった。

「その幽霊族のガキは鴉天狗、んでお前と一緒にのことを言っていたのさ。」

皆で力を合わせて邪神を倒そうなんて馬鹿な考えをね。

だから封印させてもらった。

絶大な力を持ったヤツは何をするか分からないからねえ？」

「なっ！」

その言葉に、岩に埋め込まれていた鬼太郎と言う少年が目を開いた。大分弱っているようだが、その気迫は凄まじく。思わず優勢にたっている筈の、ヒトツミの笑みを引きつらせる程だった。

「馬鹿な考え？」

お前は分かっているのかヒトツミ。

今はまだ人間の少女を一人捧げれば良いと思っ  
ているだろうか…  
それは違う。

必ず邪神は要求を引き上げる、必ずだ！

その時、ボク達は…妖怪も人間も本当の意味で滅びを迎える事になるぞ……」

弱々しい声だが、少年はしっかりと総大将とヒトツミを睨みながら言う。

まるでそれは警告の様。

そう、彼らは人間ではない。

『妖怪』と言う種族なのだ、人間と共存し…助け合う。

だが今その秩序が崩れつつあるのだ。

「そんな時はそんな時だろう、やばくなったら行動すればいい話ぞ。

それとも何かい？

アンタらは一人の人間差し出しゃいい話をややこしくするつもりなのかね？」

ヒトツミの言葉に鬼太郎は首を振る。

「ボク達は人間を支配しているんじゃない、共存しているんだ……ッ  
！」

その言葉に再び烏天狗の目が光る。

「鬼太郎殿の言う通りだ！  
神隠しと言つやり方で人を花嫁にするなど……間違っている！

花嫁の家族、友人、そしてなによりこの社会全体をッ！

……裏切る事になってしまうのですよ！」

今度は二人の言葉にちらほらと頷く者が出てきた。  
しかし、それを総大将は一括する。再び静まり返るその空間。

静寂があたりを包み、再び総大将が静かに話し出す。

「鬼太郎、鴉天狗、お前達の言いたい事は痛いほど…分かる。我らは人間を守り、人間も我らを守り、互いに共存を誓った関係だ。」

その人間を我ら妖怪社会の存続の為、裏切る事となったのは本当に残念に思う」

だが、しかし 総大将は水晶に視線を移す。

「しかし、私は総大将として…全ての妖怪と人間を守る義務がある。この少女一人を犠牲にすれば…邪神は静まるのだ。」

もし、花嫁を差し出さなければ邪神は怒り狂うだろう。その時多くの血が流れることになる。

たとえ我々が力を合わせたとして、邪神に勝てる可能性がどれ程あるうか？

恐らく、勝つ可能性と全滅の可能性。

圧倒的に勝つ可能性は少ない、ならば非情に心苦しいところだが

……

この少女には犠牲になってもらう他はないッ！」

その言葉に反応して各地で賛成の声があがる。

その声につられて、迷っていた妖怪達も徐々に意思を固めていく。

その事に苦い表情をうかべる鴉天狗と少年。

もはや彼らに賛成する者は十人いるかどうかかもしれない。

「鬼太郎、そなたをこの様な形で捕らえておく事を謝罪しよう。

だがそなたの考えは危険だ。

邪神に敵対すればただでは済まんだろう。

勝てばよいが負ければ取り返しがつかなくなる」

そう言って総大将はヒトツミに合図を送る。  
ヒトツミは頷くと指をならして二人の妖怪を呼んだ。

「瑠璃姫、鎗牙」

「はい」

「・・・」

ヒトツミに呼ばれ現れたのは、針金の様な髪に鋭い眼光を持った少年と

西洋の様な洋服に身を包んだスタイルのいい女性だった。

二人はヒトツミの前へ移動すると、膝をつく

「こいつ等にこの幽霊族の坊やの面倒をみてもらう。  
お前らは安心して少女を連れて来なッ！」

ヒトツミの命令じみた言動に皆困惑する。  
しかしその言葉に従う者が一人、二人と現れて、遂には殆どの者たちが目的を遂行するために走り去っていった。

「鴉天狗、天邪鬼これは集団……世界の意見だ。  
悪いがお前にも選択してもらおうか」

鴉天狗達は理解する。  
これは選択ではない、命令だ。

もし協力を拒めば自分も岩の中へ…

「天邪鬼、鴉天狗……ッ」

「「!!」」

少年の眼が語る。



それを読み取ると、鴉天狗と天邪鬼は無言で頷いた。そして総大将に向かって命令を遂行すると伝えると、黒き翼を広げて飛び去った。

天邪鬼もまた姿を消す。しかし残されたのは四人。

総大将とヒトツミ、鎚牙と瑠璃姫。

総大将は準備があると言って場を離れる。完全に彼がいなくなるのを確認すると、鬼太郎と言う少年は再び眼を開けてヒトツミを睨みつけた

「何が……目的だ？」

「あん？」

ヒトツミは何故か楽しそうに笑ってその瞳を見つめる。

鬼太郎はその表情を見て確信した。

コイツは味方ではない、妖怪の事も人間の事も考えていないのだと  
ッ！

「まさか…邪神を出現させたのは……ッ」

「いんやあ、あたしらじゃないよあ！」

あたしらは坊やと同じさね。

そう、同じさあ」

そう言ってヒトツミはケラケラと笑う。

そしてそのまま踵を返すと、歩き去ってしまった。

そう、彼女はもうこの『世界』に用はないのだから。

「ほんじゃあ後は頼むよ鎚牙、瑠璃姫え？  
しっかり坊やの面倒を見てやりな。」

完全に岩の中に封じられた親父さんの分までねえ！」

手を振るヒトツミ。

鬼太郎は無言でそれを見ていたが、彼女が扉に手をかけた時、最後の言葉を彼女に送る。

「面倒を…見る？ 監視の間違いだろ？」

「……………」

「うふふッ」

ヒトツミの代わりに瑠璃姫が笑う。

ヒトツミはもう一度無言で手を振ると、完全に姿を消してしまった。

のこされた鬼太郎は、瑠璃姫と鎚牙に視線を移す。

「お前達は、花嫁についてどう考える？」

「私は素敵だと思いますよ。儂く、それでいて美しい」

「余計な話だ。俺には必要ない」

瑠璃姫は瞳を潤ませ、鎚牙は淡々と呟く。  
双方は花嫁について特に何も言う事はないらしい。

鬼太郎は諦めたようにため息を吐くと、そのまま眼を閉じた。  
この封印石は想像以上に強力の様だ。

襲ってくる疲労に耐え切れず、彼の意識はそこで途切れたのだった。

第146話 始(後書き)

クラヒフォーゼ買いましたw

いやあ、やっぱりRXカッコイイですわ

さて、今回はこの編で

次もよろしく!

## 第147話 恋（前書き）

緊急更新ってなもんです。

理由としましては、ちよつとごめんなさい。日曜の更新が危つくなつてきたと言う事で、今日更新しました。

ちよつと予定がコロコロ変わるんですよ。

だから申し訳ないんですが、更新予告はあんまりあてにならないかもしれません

そこはご了承ください！

ではござい！

## 第147話 恋

「ご苦労さまです。

ヒトツミ様、おかげで舞台を整える事ができました！」

「お！ 出迎えたあ気が利くね」

ヒトツミに向かって膝をつき頭を下げるのは、可憐な少女クルス。クルスはヒトツミを尊敬の眼差しで見つめると、もう一度深く頭を下げる。

誰もいない部屋、そこへ漂うは黒い意思。

ヒトツミはつい口を吊り上げてしまう。

近い未来を思い、彼女はその光景に狂気混じりの笑みを浮べた。

「やはり貴女をスカウトした私の目に狂いはありませんでした！」

それはクルス、彼女もまた同じ。

様々な感情の本流、彼女は尊敬の眼差しでヒトツミを見る。



「だろっ？ はははっ！」

ああ、後これ…中々気に入ったよ」

そう言ってヒトツミは着物をめくって裏側の生地をクルスに見せた。そこにあっただのは、金色の大鷲を模した刺繍。

クルスはそれを見ると、ますます目を輝かせる。

「素晴らしい……………！」

「しっかしねえ、次はもつと暴れられる役回りを与えて欲しいもんなね。」

期待してるよ？ お・嬢・ちゃ・ん？」

「はい！ 頑張ります！」

それと……………」

クルスは影に溶けるかのごとく立っていた少年、COBRAに頭を下げる。

そして照れた様にはにかみ、お礼を言った。

その姿はまさに『可愛らしい少女』そのものだ。

誰しもが彼女の愛らしさに目を、心を奪われるのだろう。

それは、彼女が人間……ならの話のだが。

「COBRAさん、ご協力ありがとうございました！」

コブラ  
COBRA。それがその少年の名前だった。

それは毒を持ち、圧倒的な威圧で君臨する蛇の仲間。

そのコブラと同じ名である。

だが名前の割にはCOBRAと言う少年は普通の格好だった。

どこにでもいる少年、普通の服に身を包み、誰が見ても彼が『特別』とは思わないだろう。

少しハーフの様な顔立ちに、何か儂げな雰囲気がある少年だった。

「そうそう！」

いやあ、コイツがいなかったらもつと時間かかってたよあ」

ヒトツミもCOBRAに向かって乱暴な拍手をおくる。  
だが彼はは不愉快そうに顔をしかめ顔を反らした。

事実、不愉快だったのである。

だが二人には照れているようにしか映っていなかったようだ。

「僕は…やる事をやったただけだ」

「ご謙遜を！ ではヒトツミ様、COBRA様！  
後はデータを取るだけです、どうかお先にお帰りください！

財団の豪島様にはこちらから報告結果を入れておきます！」

クルスは太陽の様に微笑むと、パタパタと走り出した。  
それを見てヒトツミは笑う。

だがそれは子供を見守るような暖かいものじゃない。  
額に汗を浮かべて……だった。

「ありやりや、嘘ついちまったよ。ハハハ！」

「・・・」

「アンタがいなけりやあの幽霊族の坊やを倒す事はできなかったか  
もしれない。」

「とんだ化け物がいたもんさ、いやあ助かった助かった！」

豪快に笑うヒトツミを冷めた目でCOBRAは見つめる。  
だが、彼は少し戸惑った後に口を開いた。

「お前は……どう思う？」

「んん？ 何が？」

全てだ。

そう言ったCOBRA、ヒトツミはニヤリと笑って壁にもたれかかる。

大きくはだけの着物が露出を増して、彼は思わず目を反らした。

それを青臭いとヒトツミは大笑い。

ますます機嫌が悪くなるCOBRAをさらに馬鹿にすると、ヒトツミは答える。

「んまあ、率直に言えば微妙だわ。

「こんな、ちまちましたやり方は性に合わないね」

「そうか……」

「でも、この世界を選んだ事は評価してやってもいいさ。  
人間と妖怪の共存？ ハッ、反吐が出る。」

人間なんざあたしらの餌だろうに」

「……ッ」

一瞬表情が緩んだCOBRAだったが、また険しいモノに変わってしまった。

それに気づいたヒトツミは、またケラケラと笑い出す。

どうやら、彼は甘いガキと言う訳か。

ヒトツミは内心でCOBRAを馬鹿にしつつ、しかしどこか共感していたのかもしれない。

彼の問いかけに、しっかりと答える判断を下した。

「んな目で見ると見るな。だははは！」

全部の人間がそうって訳じゃないさ、あたしも心つてもんがある。

気に入った人間なら助けるし、喰らわねえよ」

「……なるほど、少しは安心できそうだな」

「気持ちは分かるさ。」

あの女、クルスつったか？　ありやヤバイね」

ヒトツミはわざとらしく鼻を鳴らして臭いを嗅ぐ動作を行う。  
そしてまたわざとらしく鼻を押さえて手を振った。

「あたしも他人様の事なんざ言えた義理じゃねえが、  
あの女……血の臭いが尋常じゃない。」

しかもこれは幼子だな。あの女、一体何人殺したのか？  
くひひひっ、あたしだって子供を喰らうのは躊躇うもんだがねえ  
！」

しかしヒトツミは、やはりどこか楽しそうだった。  
それを冷めた目でCOBRAは見つめると、自分達もオーロラを出  
現させて消えていくのだった。

世      シ  
    テ      ソ  
界



クククッ！！

「・・・」

ス

殺

ヲ

女

彼

ハ

「・・・」

我夢は美しい月に照らされた中庭にいた。

この世界の月明かりはとても明るく、とても切ない。

蒼い光が中庭を照らし、すこし怖い程の静寂を保っている。

我夢は自分以外の人間が全て消えてしまった様な感覚に陥った。  
世界中、広い世界に自分ただ一人が取り残された様な

寂しさ。空しさ。悲しさ。

涼しい風は、より深く心に響く。

息すらも忘れるほどに静かで綺麗な夜だった。

「眠れないんですか？」

「ッ！」

中庭の入り口から涼しい風と共にアキラが現れて、我夢に声を掛ける。

まだ仲直りしてから間もない為に、二人の距離にはどこか、ぎこちなさがある様に感じた。

それを証明するかの様にアキラは我夢の隣に座るものの、少し間隔があいている。

「そ、そうですね…あはは」

「……」

まだ少し気まずいものだ。

アキラも我夢も何も言わずにしばらくは時間が過ぎていった。

だが、ふいに我夢が口を開く。

別に沈黙に耐えられなかったからではない。

誰かに、自分がたった一人取り残されないよう

話を聞いて欲しかったのだ。

「僕は…響鬼になれると思いますか？」

「……」

今まで全ての試練が成功という結果に終わり、いよいよ自分を残すだけとなった。

絶対に失敗してはいけない。

深く考えてはいけないのだと我夢は思うが、それでも少し緊張してしまう。  
いや、もちろん皆がこのプレッシャーと同じ物を背負い、そして変身した。

それは本当に凄い事なのだ和我夢は思う。

そして、自分は……どうなんだろう。

分かっている。こんな事を考えていても……

だが、やはり最後と言うプレッシャーは大きかった。自分が間違えれば

どうなる……？

「え？」

うつむく我夢だったが、ふと何かに包まれる。  
気づけばアキラに抱きしめられていたのだ。

「!?!?!」

真っ赤になって驚く我夢に、アキラは顔を近づける。  
いや近づけるなんてものじゃない。

唇と唇の距離は一センチあるかどうかだろう。  
冷静さを失って慌てる我夢をよそに、アキラは静かに囁いた。

「やっと、気づいたんです。

我夢君…私は、あなたの事が……………」

「え！？ あのツ……………！！……………！！？」

アキラは目を閉じて、自分の顔を我夢に思い切り近づけ

「……………！！……………！！……………！！……………！！……………！！……………」

飛び上がるように起きるなんて、漫画だけかと思っていたがどうやら違うらしい。  
とにかく布団から跳ね上がるように起きると、今の事が何なのかを確かめる。

先ほど、自分は制服を着ていた。  
だが今はパジャマだ……

「……………」

唇にはなんとなく感触があるような、ないような……

と言うか、今自分がいる所が中庭でない事から察するに、今のアレは夢なのだろう。

「ゆ……………夢……………!?!」

落ち着け、落ち着くんだ。

必死に胸を押さえて冷静さを取り戻そうとするが、心臓の鼓動は増すばかりだ。



全く、なんて夢を見るんだろうか…

「ん〜……どうしたのおアキラちゃん…」

「え？ あ、あのつごめんなさい真由先輩」

「眠れないのお…？ 眠れないんだねえ…」

あ、そっかあ…おトイレに行きたいんだねえ？  
いいよお、ついて行ってあげるねえ」

「え？ あ！ う？」

そう、あの夢を見ていたのはアキラだった。  
隣で寝ていた真由は眠い目を擦って立ち上がる。

アキラは戸惑いながらも真由について行くのだった。

とにかく混乱が酷い。なんとかして落ち着かなければ　ッ！

「むじや……」

真由はふら付きながら扉の前に立っていた。

と、言ってももちろんアキラはトイレがしたい訳ではないので  
ただボーっと座っているだけ。

そんな事よりさっきのは何だったのか、それだけが気になっている。

「おてては……ちゃんとお……洗わないと……ダメな……んだよお」

消え入りそうな声を聞いてアキラは我に帰る。

すぐに眠そうな………というか既に眠っている真由を抱えると  
寝室として使っている教室へと戻っていく。

だが、アキラの頭の中はそれどころではない。  
先ほどの光景が一体なんなのか。何を意味するのかを必死に考えて  
いるのだ。

ああ、気のせいだろうか。唇が熱い気がする……

「す、すいません真由先輩。おやすみなさい」

「ううん、おやすみなさい……」

アキラは頷くと、自分も目を閉じる。

だが

「・・・」

アレはなんだったのか!?

「・・・」

唇にのこる感触は？

「・・・ッ!」

眠れないッ!!

全然眠れないッ！

無性に気になって全然落ち着かないッッ！！

「…っ」

時計を見る、時間は……一時だ。

そしてふと周りを見てみると、一つだけ布団が空になっているではないか。

女性陣はいつも集まって寝ているので誰かがいないという事になる。

誰がいないのだろうか、暗くてよく分からない。

「……」

完全に目がさえてしまった。

ちようどいい、誰かを探しにでもいこうかな。

アキラはそう決めると、立ち上がるのだった。

「あ、あれ？ アキラちゃん、どうしたの？」

「ええ、ちょっと眠れなくて……となりいいですか？ ハナさん」

「あはは、いいわよ。どうぞ」

適当に外に出てみたら、屋上でハナが座っているのが見えた。なにやら寂しげで深刻な表情をしていたが、アキラが隣に座ると彼女の表情は和らぐ。

「綺麗ですね……」

「うん、本当に……」

二人は屋上で月を見上げる。

この世界の月は驚くほど美しく明るい。

二人はしばらく月をぼんやりと眺めていたが、ふいに口を開く。

「どうしてハナさんはここに？」

「あ……うん。ちょっと考え事をね。アキラちゃんは？」

「じ、実は」

一瞬、話すかどうか迷ったが自分じゃどうしようもできない。  
アキラはハナに相談する事を決めた。

夢の内容が妙に引っかけたかかって気になるのだと。

「あはは、分かる分かる。」

夢でそうなっちゃうとどうしても現実で意識しちゃうよね」

「あれ？ という事はハナさんもあるんですか？」

「…………え！？」

ハナは顔を強張らせてアキラから目をそらす。



「な、ないわよ？」

「嘘です」

一秒もないんじゃないかと思うアキラの返し。

「う……ま、まあとにかく！」

まずそもそもアキラちゃん是我夢君をどう思っているのか。

そこからだと思う」

「弟とか……単なる友達ですよ」

「そんなまた一瞬で……」

もっと何か……こう、男と女的な意味だとハナから言われてアキラはもう一度我夢を思い浮かべる。

アキラは考える。

我夢のことをそんな風に考えたことなど無かったが

「ッ！」

つい思い出してしまってアキラは唇を押さえた。  
その様子を見てハナも苦笑しながらため息をつく。

「いろいろ、大変よね本当に。自分の思いに気づくのも」

「？」

さてと、そう言ってハナは立ち上がりアキラに手を差し出した。

「もう遅いわ。はやく寝ましょ？」

「は…はい……」

アキラは複雑そうにその手を掴むのだった。

「……」

ハナはそのつないだ手をジッと見る。  
そう、これでいい。これでいいんだ

(良太郎、わたしは決めたよ……)

この手は離さない。

第147話 恋（後書き）

クラヒフォーゼなかなか面白いです。

中々使えそうなネタも多いと言っかなんというか

しかしタッグの同じ行動をとる機能あるならコンプリにまず使っと  
けば……

いやいやこの辺にしときましようか  
では次もよろしく！

## 第148話 離(前書き)

どうも、ちょっと滑り込み更新ですかね。

映画を見に行ってきました。

感想は一週間後くらいに書こうかなと思ってます。

本当におもしろかったです。

迷っている人は是非見に行ってみてください！

ダブルファンの人にもおススメです

では本編どうぞ！

「動き出す物語」

あ、あとすいません。後書きは凄く微妙にこの作品のネタバレ含んでるんで一応見たくない人は後書きとばしてください

一番最初の下りのヒントだしてます。

すごく微妙なんですけどねw

## 第148話 離

「ナルタキ、見つけましたよ。」

この世界なら城戸真司達を再び龍騎に変身させる事ができるでしょう。

絶大な力を持つオリジナル原典にしてストーリー龍騎の再構築を行った世界。

こんな条件のいい世界はもう見つけられないと言ってもいいかもしれません」

魔女は書齋にてナルタキに一冊の本を渡す。

受け取ったナルタキも、思わず強張るくらい……その本はある種、神々しいオーラを放っていた。

あきらかにそこらへんにある本とは違う異質さ。

ナルタキは慎重にページをめくっていく。

震える手を隠しながらもナルタキは確かに頷き、しばらくした後、本を閉じた。

「成る程、確かに龍騎と全く違うが、全く同じと言ってもいいな」

「こんな条件がそろっているのは、やはり仮面ライダー龍騎くらい

かと  
」

ナルタキは本を魔女に返すと、近くの椅子に座りため息をつく。彼らが読んでいた本は普通じゃない。

いくらこの書齋に長く居るナルタキであろうと、その疲労を軽減する事はできないのだ。

「龍騎の問題はどうにかなりそうだ。後は……」

「この試練ですか」

そうだ。ナルタキは頷く。

しかし、その後に複雑な表情をして言葉を付け足した。

その口調は静かで、何も感情を込めようとしない、こめたくないと言っ様子だった。

「尤も、この試練は簡単に終わりそうだがな」

「……」



もう一度ため息をはいて立ち上がる。

少し休む、そう言って書斎を出て行くナルタキを魔女は何も言わずに見ていた。

そうやってナルタキが出て行った後に、魔女はニヤリと笑う。

「結局、そなたを苛むのはいつも甘さか」

いや、それとも……半端な優しさか？

「どちらにせよ、決断の強さは持たなければな」

魔女はもう一度笑うと、紅茶に手を伸ばすのだった。

「じゃあ、もうカイは……」

「ああ、死んだ。」

「イマジンもあいつ等以外は皆消滅したらしい」

「……」

夜の校庭、その隅で良太郎が誰かと話していた。  
人目もつきにくい場所。ましてこの時間におきている人はいないだ

ろう。

深刻な表情から、彼らにとってとても大事な事なのだと分かる。

「じゃあ……もうぼくの世界は平和……なんだね」

「……まあ、少なくともイマジンにおびえる事はないな」

良かった。

良太郎は微笑む、それを少年は複雑な表情で見ていた。

「野上、俺にも今お前らがどついう状況になっているのか全くわからねえ。

だけど戻らなくちゃヤバイってのだけは分かる。

お前はどつするんだ？」

「……」

「俺の前に現れたあの二人、普通じゃない。」

現に今俺はお前と会えた訳だからな、だがそれも少しの時間だ。

もう一度聞け、お前はとうするんだ？」

「侑斗……ぼくは」

良太郎は、目の前にいる桜井侑斗さくらい ゆうとの言葉に沈黙した。  
いや、以前の彼なら沈黙していただろう。

まだ迷いがあったから。

だけど、今は

「彼らと一緒に戦うよ」

「……………ッッ!」

侑斗は少し驚いたように目を見開くが、すぐに苦笑する。

そういつと思つてたよ、そんな言葉をかけられて良太郎は目を丸くした。

「そつだな、お前はもう関わっちまったんだ。  
途中で逃げ出すのは……らしくないか」

正直、姉が悲しむと言えれば……まだ、可能性はあつたのだろうか？  
いや、自分だつて知つてしまつた以上、無責任な事はいえない。

それに、自分も全く関係ないとはいえないらしい。

「できれば俺も協力してやりたいが」

「うづん、侑斗は姉さん達を守つてあげて。みんな、大切な人なんだ」

「野上……」

侑斗は複雑な表情で頷く、そして良太郎にソレを差し出した。驚く良太郎に説明する、赤い髪と青い髪の二人組みが言っていた。

世界にはちゃんと別のゼロノスがいて、ちゃんとソレも存在しているのだと。

侑斗はソレに力を込める、すると不思議な事に侑斗の体とソレが鈍く輝きだした。

しばらくすると光はやみ、侑斗は満足気に頷く。

「あの二人組みが言ったとおりだな、コレに力を込めると……」

侑斗の説明で良太郎はなんとなく理解する。

なぜ今まで普通の生活を送っていた司達が変身できた途端、戦いのセンスに目覚めたのか。

「これを、アイツに渡してくれ……それと、コイツを頼む」

「！」

侑斗の隣から現れた者を見て、良太郎は信じられないと言う表情を

浮かべる。

だが侑斗と、その者は『いいんだ』と、首を振った。

今までの話を聞いて、侑斗はその決断をした。

いや、もっと前からしていたのかもしれない。これから始まるようにしている事は『イメージとの戦い』と言う。彼らの戦いだけでは済まない程、強大なものかもしれない。

そんな考えが、いつしか侑斗と彼の中でなけば確定しつつあった。だから、その選択をする。その選択を決断したのだ。

「俺はもう俺一人で戦える。いや、俺は一人じゃない……」

受け入れてくれる者、そして教える者ができて。

「侑斗はぼくらの世界に必要なから……でもぼく達は　ッ」

良太郎は侑斗を説得しようとして口を開く。

しかし言葉を遮ったのは他ならぬ侑斗自身だった。

「必要さ。お前だって、アイツだって……な」

「！」

侑斗は良太郎の決断を受け入れる。

彼らが決めた事だ、もう自分が何を言う事もない。

だからせめて……せめてすこしでも自分たちが助けられることができた  
ら。

それは、侑斗と彼の決断。

「よろしく、野上！」

「だけどツ！」

尚も拒もうとする良太郎を、侑斗は少し小突いた。

呆気にとられる良太郎に、彼は強く強調して言い放つ！

「いいか、俺はお前らとさよならするつもりはない！

お前らもそのつもりだろうな！」

「うう……もちろん。でもッ！」

だったら何も言うな！



そう言つて侑斗は強引に良太郎とその者を押し出した。

それは彼らの絆。

たとえ離れ離れになろうとも、たとえ世界が彼らの絆を壊そうとも、屈っしはしない。

「じゃあ、またな野上それに…お前も」

またな。

文字通りまた会えるであろう人に使う言葉。

それを合図にしてなのか、侑斗の背後に砂のオーロラと三つの影が現れる。

「そろそろ時間だわゼロノス、お別れはすんだのかしら？」

「安心してくれていいよ、コレは永遠の別れなんかじゃない。  
多分……ね。フフフッ」

「またね……ですか。成る程。  
お話しした通り、あの件もありますのでね」

侑斗は現れた三つの声に答えると、少し疲れた様にため息をついた。

ゼノンとフルーラ……だろうか？

向こう側の映像が乱れすぎていて全く誰か分からないし、シルエットもめちゃくちゃだ。

かろうじて声で分かる程度だった。

それにあと一人？ だれかいるのだろうか？

聞き覚えのない声が聞こえる。

女性のような？ いや男性かもしれない。不思議な声だった。

「そろそろ時間か……」

「ハナさんには会ったの？」

「ああ、さっき居たからな……」

侑斗が渡した力は何よりも八ナの為と言ってもいいかもしれない。全然意識していないとは言え、一応は自分の子供……なのだから。

「なんだかな……」

侑斗はため息をついて背を向ける。  
そしてもう一度、また会えるさ……と、再会をすると言う事を前提とした挨拶を交わす。

「ゆっ……と」

良太郎の隣にいた者は、思わず彼を呼び止めてしまう。  
本当は離れたくない、別れたくはない。

だけど、これは別れなどではないのだと。  
もう一度侑斗は叫んだ。

「しっこい！　じゃあまたな！」

声が震えているのは……きっと

「ちゃんと……しいたけは食べるんだぞ！」

「あああつるさい！ 分かってるよ！」

乱暴に手を振って侑斗はオーロラの中に消えていった。  
それを二人は名残惜しそうに、でも清清しく見送る。

「本当に……良かったの？」

「ああ、いいんだ。その方が侑斗も喜ぶ  
野上もよろしくな！」

そう言っただけは良太郎を抱きかかえて、どこから取り出したのか。  
飴を一つ彼の口に入れた。甘い香りと、優しい風味が広がって思わ  
ず良太郎は微笑む。

「……ありがとう」

「あははは、よろしく！ 野上い！」

その時、拍手が聞こえてきて二人は振り返る。

そこにはゼノンとフルーラ。二人がオーロラの向こうからコチラに  
来ていた。

「「はじめまして野上良太郎！」」

「じじょくぜえ」

朝、鼻歌交じりで葵は朝の食事を用意していた。  
最後の試練と言う事ですこし豪華にしてみたのだが……みんなは喜んでくれるだろうか？

「うん」

でも少し用意に時間がかかるかもしれない。  
間に合うだろうか？　もう少しでみんなが起きてくるだろうに……

「手伝います！」

「え？」

急にそんな声が聞こえて葵は振り返る。  
そこにいたのは

「ど、どなた……？」

この日、新しいメンバーが加わることになるのだった。

第148話 離（後書き）

この作品、一応オールライダーは目指すつもりです。  
出番の多い少ないは別としてね。

って事で一番最初の龍騎の下りになってきます  
どう言うことなのか……それは後々に

ではこの辺で、次もよろしく！

今日のお相手はホシボシでした  
それじゃあ次回も、カメンライッ



## 第149話 変(前書き)

はい更新です。

次はごめんなさい未定で。

すいません、ちょっと遅くなるかもしれませんが！

しかし、ふと……フォーゼを見てたら

スコープオン「我々の進化をホシボシものぞんでいるのだ」

なん……だと……？

僕が無意識の内に三浦の進化を望んでいたと言っのが分かりました。

……はいw

ではびびりぞー！

## 第149話 変

「デネブッ！？ どうしてっ！！」

「ハナちゃん！ 久しぶりだなあ！ ははは！」

起床してきたハナの目に飛び込んできたのは桜井侑斗の契約イメージ、デネブだった。  
なぜ彼が！？ 戸惑うハナに構わず、デネブはにこやかに彼女へ話しかける。

まるでいつもの様に……だ。

「司君、デネブも一緒に居ていいかな？」

「ああ、別に全然いいんだけど……どう言う事なんだ！？」

「実は」

隠し事はしたくない。  
ただどいらぬ心配もさせたくない、だから最低限の事しか話さな  
った。

ゼノンとフルーラがデネブを連れてきたのだと。

「はい、デネブキャンディーをどうぞ！」

「わあ！　ありがとう……！」

「おでぶちゃん良い人だね！」

真由はデネブから貰った飴を口いっぱいにはお張りながら、デネブ  
に抱きついていた。

その様子を見て、良太郎は安心したように笑う。  
「どうやら、受け入れてくれる様だ。」

母親の様に真由をあやす彼を見て、良太郎はもう一度微笑む。

「それにしても助かったわ、ありがとう！」

デネブが朝食の用意を手伝ってくれたおかげで、無事に葵は全ての調理を終わらせる事ができた。

その事について葵は素直にお礼を言うが、それに対してデネブは首を振る。

「葵さんの料理は勉強になります！」

俺ももっと勉強して侑斗に喜んでもらえるようにならないと！」

一同は賑やかに笑いあう。

だが、朝食が終わるとハナは表情を曇らせて良太郎を屋上に呼んだ。

彼女はどうしても気になるのだ、ハナも昨日侑斗に会った。

ただ、たった一言。

好きなようにやれと言われただけ。

一体良太郎にはなんと言ったのか？

どうしてデネブがいるのか？

ハナとしてもいろいろと気になるのだ。  
知らないなんて嫌だ、どうしても納得がいかない。

だって、自分だって電王ペアなんだから      ツ

「デネブは………?」

「皆と遊んでるよ。」

「あはは、本当にお母さんみたいだね」

「そうじゃなくてっ！ どうしてデネブがここにいるの!?!」

良太郎はうなずくと、ハナにすべてを打ち明けた。

隠していても仕方ない。自分と彼女は……電王ペアなんだから。

「前にハナさんにも話したよね。  
エピソードディケイドにぼく達は関わり過ぎたんだって」

「うん、ゼノンさんとフルーラちゃんに言われたんだよね？  
よく分からないけど、そのエピソードディケイドが何かあるの！  
？」

「そうだね。ぼく達は司君達を助ける事を決めた。  
それがぼく達にとってどう言うことなのかも……

ハナさんには話したよね」

ハナはうなづく。  
そして二人の覚悟を知ったゼノンとフルーラは  
良太郎達を引き止めるのではなく、むしろ背中を押す手段に出たと  
言う事だった。

その結果が侑斗を呼び出しデネブ参戦させるといつもの。

侑斗とデネブ、彼らの絆は深く強い。

その彼らが永遠に離れ離れになる可能性があると言うのに協力して  
くれたと言う事は……

「この問題は、ぼく達が考えている以上に深刻なのかもしれない。侑斗も詳しくは話してくれなかったけど。」

あとそうだ、ハナさんにこれを」

良太郎はハナにそれを差し出す。  
少し迷ったが、隠し通せるわけが無い。

それに、さっきも言ったとおりだ。  
彼女は自分にとっての……大切なパートナー。

共に、一緒に

「これって……！」

「侑斗がハナさんに渡してくれって、  
くれぐれも注意するよう」……

あと  
「

「あと？」

「好き嫌いはするなって」

良太郎は笑うが、ハナは不機嫌そうに頬を膨らませる。

子供扱いして！　いくら仮にも父親だからって！！

「ハナさん、ごめん」

「え……？」

「ぼくについてきたからハナさんまで  
「



良太郎は謝罪の言葉を口にしようとして……できなかった。  
ハナに抱きつかれて、言葉がとまってしまったのだ。

ハナは良太郎の胸に深く顔を埋めてつぶやく。

「今度そんな事言ったら、良太郎でも許さないから」

「……うん、ごめんねハナさん。一緒に戦ってくれる？」

「うん、ずっと一緒だよ？」

良太郎は微笑んでハナを抱きしめる。  
たとえば、全てが終わっても

このぬくもりだけは……残り続けるのだろう。

「俺達もだよな、良太郎！」

「「!!」」

二人が振り向くと、モモタロス達が立っていた。

そうだ、絆がある。

仲間がいる。

どんな時間の中でも、どんな世界の中でも変わらない思いがある！

そうだよね、侑斗　ッ

「うん！　もちろん！」

二人は悲しげだが、確かに笑い合つとその手を握り締めた。  
永遠の、絆。

それは世界をも凌駕する答えなのだろう。

そう

そして……ぼくは、この運命を受け入れた

・目次 contents

1

仮面ライダークウガ Tips オリジナル・五代雄介

・主要登場人物紹介

小野寺ユウスケ

空野薫

9

仮面ライダーキバ Tips オリジナル・紅渡

・主要登場人物紹介

聖巨

野村里奈

記されるは短編。

そして物語に無くてはならない主役という存在。

ヒロインと言う存在。

そして新たに、彼らがこの物語の登場人物として記さる事となる。

8

仮面ライダー電王

・主要登場人物紹介

野上良太郎

八ナ

「・・・」

空欄だった箇所が埋められる。

魔女はそれが愉快なのか、口を吊り上げた。

予想通り？

意外？

女は不適に笑うと、紅茶を隣に座っていたナルタキに勧める。

「頂こう」

「ククツ、これでは試練をクリアするだけだな。

そなたは運がいい、これは相当な逸材です。」

幾重の時を重ねればこの様な展開にめぐり合えるだろうか？」

「彼らは切り札だ。そうでなければ困る」

それにこれは偶然ではない、必然だとナルタキは語る。  
魔女はそれをヘラヘラと笑いながら聞いていた。

もう彼らの頭には少女が一人死ぬと言う事はどうでもいい話になっているのだろう。

ナルタキや魔女は結果を尊重する。

それはそうだ、一体彼らが今まで何人の人間を見てきたのか？

そしてその中には司たちと同じようなケースも多かった。

「だが、結局最後までチームで試練をクリアできた者は一握りだったな」

「エピソードデイエンドは稀なケースだろう。」

私もそこまでの結果は望んでいない。

この試練を失敗しようがしまいが兵力としては十分に確保できる。

全滅しなければな」

「途中で引き抜くことは？」

「死が決定しているのならデイケイド以外は切り捨てる。

彼らは特別であって特別ではない」

「全てはディケイドを中心としている。  
彼らはその恩恵を受けただけにしか過ぎぬのか」

魔女は頷くと、視線を本へと移す。

そこに見えるのは司たちの行動、今までの記録。

魔女はもう何も言う事はない、黙って観測を続けるのだった。

「今、話したのがこの世界のクリア条件だよ」

「ずいぶん気前がいいな。」

「今までそんな事教えてくれなかったじゃないか」



司は目の前で紅茶をすするゼノンとフルーラに訝しげな視線を送る。  
だが、彼らにとってはなんともない事。

逆にくすくすと笑うネタを与えてしまっただけのようだった。

司はもうコイツらには勝てないと悟り、話を続けるのだった。

「つまり、なんだ？」

「この世界では変身アイテム手に入れたらクリアなのか？」

「ええそつよ、変身音叉・音角。

それを手に入れる事が最後の試練である条件。」

「まあ他の試練よりかは簡単じゃないかしら？」

「この世界にはモンスターもいないみたいだし」

「響鬼の変身は少し特殊だ、我夢は既に鬼の資格を持っているのか？」

「世界が違えば過程も変わる。」

「君の知っている響鬼はこの世界の響鬼じゃない。」

「いわばパラレルと言うべきかな？」

「つまり……この世界では純粹に音角を手に入ればいいんだな」

「ええ、そうなるわ！」

正直、意外だった。

最後なんだから一番難しかったり大変なものを想像していたが

どうやらそう言う事ではないらしい。

「音角は座敷童（まきわらひ）と言う少女が持っているよ。

じゃあまあ、頑張ってるね？ フフフ！」

「あ！ おいッ！」

二人は笑顔で手を振ると、そのままオーロラの中に消えていった。取り残された司達は呆然と立ち尽くす。

一応最も重要な事は聞けた訳だが

「……ん？ 座敷童ってどう言う意味なんですかね？」

本名？

それとも本物？

はたまた芸名か？

いろいろ考えたが、とりあえず探しに行こうと言う流れになる。

まあ……と言っても皆その音叉の形が分からないので、まず司は、うる覚えながらも音角の絵を描いて見せた。

「こんな感じ……だったよな？」

瞬間、固まる教室……

「え？ 何これ？ バナナ？

下手すぎワロングラッセwwww」

『ファイナルアタックライド』 『ディディディディケイド』

「アッー！」

はい、という訳でみんなはバナナっぽい音叉を見ていく。  
これを探せば良いわけだ、少し…いやかなり簡単だろう。

今までの試練と自分の試練を重ねてしまいつい我夢は申し訳なく感  
じてしまう。

尤も簡単ならばそれにこした事は無い。

我夢は少し安心していった。

どうやらこの試練はクリアできそうだ。

それは皆の足を引っ張らないですむ、と言う事でもある。

「よし、じゃあ探しに」

「あ！ ちょっと待ってくれないか！」

「？」

司達が外へ出ようとした瞬間、デネブが皆を呼び止めた。どうしたのかと司達が問いかけると、彼はポケットから何かを取り出す。

何やら話を聞いてみれば、今日の朝に彼は学校の周りを掃除していたらしい。箒で落ち葉やらを取っていると、何か道に落ちているのが見えたと言っ。

最初はゴミかと思ったデネブだが、不思議な形と装飾から捨てずに今まで持っていたのだ。

「……あれ？ これって」

「え？」

「一同はソレを囲んで見る。  
どう考えてもこれは……」

「ん？」

「横から見ても……」

「あれ？」

「縦から見ても……」

「んんんん！？」

「頭にのせても……」

「いや、それは意味無いがな……」

「……」

咲夜の冷たい視線をスルーすると、司はもう一度まじまじとソレを見た。

やはり間違いない。

これは……

「変身音叉……音角」

「『『『どええええええッッ！！？』『『『『

皆の表情が一気に変わる。

それはそつだ、何故ならデネブが見つけたというソレは

この世界のクリア条件そのものなのだから！

だが、少し落ち着きをとり戻した司は様々な可能性を考えてみる。

例えばそう、これは偽者である、だとか。

似た感じのアイテムだろうか？

いやいや、大穴について本物！？

「と、とりあえず変身してみればいいんじゃないかな？」

「あ！　そうですよね！　じゃあ早速………」

そう言って司は我夢を連れて物陰に隠れる。  
なぜ隠れたのかと言つと



「やった……やりました!!」

「わあああ! 待て待て待て! タオル! タオル!」

喜ぶ我夢の声が聞こえてきて一同はまさかと顔を見合わせる。  
いや、というよりこの状況で喜ぶ理由があるとすれば、もはやそれは一つしかないだろう。

「おおお!?!」

皆の前に現れたのは我夢……と、タオルを持って顔を青くしている司だった。

司は瞬時に我夢の腰にタオルを巻くが

「ん? 何やってんだ司」

「え?」

司が我夢を見てみると、とくに変わった様子もない我夢がいる。

「あれ？ 服……」

「服ですか？」

我夢は自分の服を司に見せてみる。  
別におかしい事はない。

ああそうか……そういう設定なんだな。  
司は頷いて後ろへ下がった、いやいや良かったんじゃないか？

変身解除で全裸はちょっときついからな。  
大丈夫な様で何よりだ、それに……なんと書いても  
ッ

「っていつか、我夢お前ッ！！ まさかッッ！！」

「はい！ 変身できました！！」



第149話 変(後書き)

まあぶっちゃけ響鬼の試練は終わりですよね。

これで全てが終わるのか。それとも

それは後々で！

ではこれで。次もよろしく！

## 第150話 休（前書き）

更新です。

つぎは一応日曜……かな？

響鬼は戦闘後の会話が好きでしたねえ。  
秀困気が良かったです。

それじゃあ本編いきましょうかね

「変身を完了させた我夢」

ではどござー！

## 第150話 休

まあ、あっさりと変身を完了させてしまった我夢。

あれだけ緊張していただけに何とも拍子抜けしてしまうものだ。

それにゼノン達の話では座敷童という少女が音角を持っているはずだったのだが……

まあ、いいだろう。

どんなに簡単だろうが自分たちは試練をすべてクリアできた筈だ。

さっそく我夢は、想い人であるアキラに報告を

「やりましたよ！ アキ  
」

「・・・ッ」

ゆっくりと意識が戻ってくる。  
今自分が何をしているのか、一瞬分からなかった。

ぼやける意識が鮮明になると、自分が寝ていたのだと理解する。

「!？」

寝ていた？

おかしい、自分は今日一睡もできなかった筈だ。  
時計を見る、針は四時を指していた。

四時？ 外は明るい、だがカーテンから射す光は綺麗なオレンジ色  
ではないか！

「・・・あ！」

やってしまった！

皆が必死に試練を乗り越えようとしているのに自分は寝てしまっ  
たのか！？

急いで起きようとして体に力を入れたとき、それに気づいた。

（手紙？）

置き書きされてあったメモを見つけて目を通してみる。

この字は……葵だろう。

彼女、天美アキラはそのメモ書きにある言葉をとりあえず見てみる  
ことにした。



『ハナちゃんから聞きました。  
昨日は寝れなかったんだって？』

疲れは取らないと、体を壊しちゃうよ。

だからゆっくり休んでね』

アキラは申し訳ないと思い、心の中で謝った。  
寝れなかったのは自分のせいなのに……

しかもまたあの夢を思い出してしまい複雑な気分になる。  
せつかく我夢と仲直りしたと思っただらコレだ。

また関係がぎこちなくなってしまうのは彼女としても悲しい話だ。  
気にしない様に気をつけなければ。  
それにまずは皆に謝らなければならぬ。

「ふふふっ……」

しかし、メモの至る所に何かの絵が描いてある。

葵の遊び心なのだろうが、  
熊みtainな動物がいっぱい書かれているのはシュールで面白く、  
つい吹き出してしまった。

「……え？」

そしてメモを全部読み終わるのだが、最後に書かれていた一文を見てアキラはベッドから飛び降りる。そこに書かれていたのは試練が終わったと言っ事、つまり我夢が変身できたという事だ。

アキラは居てもたってもいられずに走り出したのだった。

「我夢君!!」

「!!?!?」

皆に話を聞いて我夢が屋上にいると知ったアキラは、息も切れ切れに屋上へ到着した。

そこには亘と里奈、そして我夢が何やら楽しそうに話していた。

亘と里奈はアキラを見つけると気をつかってか、下に降りていく。

ちょっとニヤついていたのが気になったが、今はそんなところではない。

アキラは我夢に向かって小走りで駆け寄っていった。

「あ、アキラさん。もういいんですか？ 何か疲れてたみたいですね。」

「あのっ、それはもういいんです。ごめんなさい、私だけこんな…」

「あはは、大丈夫ですよ。ハナさんだって寝てますから」

アキラは苦笑してもう一度頭を下げる。  
そして柵にもたれている我夢の隣にやってきた。

この世界は全てが美しい様に感じる。

街も、空も、山も、鳥も、全てだ。

死にたくなるほど切なく美しい夕焼けの空が二人を照らす。

我夢の顔が心なしに赤く見えるのはきつと夕日のせいなのだろうか？

「座敷童さんを見つけたんですか？」

「あははは、いやそれが普通に落ちてたみたいなんです」

「ええ!？」

アキラの驚いた顔を見て我夢は予想通りと笑う。  
今までの経緯からはとても想像できない結果に、もはや笑うしかないのだろう。

「ゼノンくん達も驚いていましたよ」

そう、我夢が変身した後しばらくしてゼノン達がやってきた。  
ドヤ顔で音角を見せつける司に対して、彼らは初めて一同に驚きの表情を見せた。

偽者じゃないのか？ 等、司達と同じ事を言っていたが、  
我夢が変身して見せると驚きに目を見開いていた。

そして少し納得がいつていないといった表情ながらも  
試練を全てクリアできた事を褒めた後、休暇として明日からしばらくこの世界に留まる事を告げた。

それなりに長い休みの様だ。

ゼノン達曰く、数々の戦いを潜り抜けてきた司達へのささやかな長期休暇らしいが……

「だから、明日からお休みなんですよ」

「そうだったんですか……」

アキラは頷くと、我夢に笑顔で拍手を送った。  
何事かと戸惑う我夢、アキラは我夢を褒める。無事に響鬼になれたのだからと。

好きな人に褒められるのはとても嬉しい事だ。我夢は赤くなって……  
でも直ぐに首を振った。

「あはは、やめてください。僕は皆さんみたいに……立派じゃない」  
大切な人を守った司。

絶大な恐怖と戦ったユウスケ達。

種族の壁を乗り越えようと足掻いた巨達。

偽りの愛と言う強大な幻想を打ち破った翼。

絶望へのカウントダウンを止めた拓真達。

圧倒的な力の差を乗り越えた真志達。

己の弱さに勝利した椿達。

真実の絆を守った双護達。

それにくらべて自分は……

そんな我夢の心情を見抜いたのか、アキラは悲しげに微笑んで首をふる。

そしてもう一度彼に謝った。

「私の方が酷いです。

でも我夢君はこれから皆さんを支えられる。

私は……何もできないから」

悲しげなアキラの瞳、本当に情けないと彼女は涙を浮かべる。  
どうして寝てしまったんだろう、本当に馬鹿だ。

自分に対して悔しい気持ちがいつぱいだった。

そんなアキラを見て我夢は思わず大声を上げてしまっ。

「そ、そんな事ないです！」

「え!？」

「あ　ッ、す…すいません。大声だして……

だけどアキラさんは全然ッ!

その……何もしてない事、ないですっ！」

「ッ!」



だって、あなたを守りたいから僕は頑張れるんですから！

「・・・」

などと言える訳もなく、我夢は顔を赤くしてうつむいてしまつ。  
ああ……情けない、何も言えないじゃないか。

気まずい沈黙が続く。

だが今日は少し違うところがあつた。  
それを我夢が気づく訳ないのだが……

「あ……」

アキラは顔を赤くしてうつむいた我夢を見て、今日の夢を思い出してしまつ。

夢の自分は我夢の事を好きだと言つた……

本当のところどうなのだろう？  
今までは考えたことなどなかったが

「あう……」

しかも、夢では……キ

アキラもまた唇を押さえつつむいてしまふ。  
無性に恥ずかしくなってきた、このままではいけない。

「そつだ！ 我夢君、明日予定空いてますか？」

「え？」

あわてた様に笑顔を浮かべる二人。  
どちらもこの沈黙を突破したいようだ。  
ぎこちない笑みは互いに筒抜けだったが、今はとにかく気にしない  
でおく。

「あのッ、ほら！」

我夢くん、翼先生の試練の時に私を誘ってくれたじゃないですか」

「あ……ああ！　ああーあははは……！」

そうだ、あの時は先約があって断られた訳だが……

「あの時はごめんなさい！」

「いつ、いや！　いいんですよ。先にした約束を守るのは当たり前だし！」

アキラはお礼を言っつて頭を下げる。  
つられて我夢も頭を下げる。

互いにぺこぺここと頭をさげ合う。  
そんなよく分からないやりとりをしばらく続けた後に、アキラは提案するのだった。

実に簡単な提案だ。

「あの時の埋め合わせを明日にしませんか!？」

「ええっ!？」

我夢の様子を見て、アキラは苦笑いを浮かべて手をブンブンと大げさに振る。

確かにいきなりすぎるか!？

アキラは内心パニックを起こしつつも何とか言葉を探すのだった。

まあなんとも必死なものである。

「あのっ! 別に無理について訳じゃないんです!

もし我夢くんの予定が空いてて!

暇で暇でどうしようもないと言うケースがあったらで

ッ

!」

どんどんパニックになるアキラ、我夢もまた慌てながらアキラに話しかける。

双方まともな心理状態ではない。

手でよくわからないジェスチャーをしながら話す様はどうにもシユールさがあった。

「いつ！ いいんですか!?!」

「え!?!」

「えっ!?!」

「あ！ あああ！ あッ！ はい？ はっ！ はいっ!?!」

「あ、あのっ!?!じゃ、じゃあ!明日……一緒にどこかへ……」

「あ……は、はいっ！ どどこかへ！ 行きましよう!?!」

「あ、あははは……」

二人は不自然な笑みを浮かべたまま約束を交わす。  
ノープランでどこに行くかすら決めないまま、アキラはまるでロボ  
ットの様に屋上を出て行くのだった。

「・・・」

あれ？ ちょっと待てよ、我夢は考える。

え？ これってまさか……

「みほちゃん知ってるよ、それはデートだって事」

「どわあああああ！」

屋上の入り口の上部分。

よく真志やら司やらが寝ている場所から、美歩がニユツと顔を出した。

驚いて腰を抜かす我夢に、美歩はにんまりと笑みを浮かべる。

「iiiiiiiiいつからそこに!?!?」





我夢はようやく自分がどれだけ幸運な状況になっているのかを再確認した。

アキラと二人で出かける……なんと素晴らしい事なんだ!!

ずっと夢見たデート!!

「どっ、どこに行けばいいんでしょう!？」

「というかどうすればいいんでしょうか!？」

「ふふん、そういうと思ったしい! まっかせて!

美歩ちゃんはじめ多くの仲間が

バッチリとサポートさせていただけますからあ!!」

「おっ、お願いします!

……と我夢は美歩に深く頭をさげる。

美歩は満足そうに頷くと、さっそく作戦会議を始めるのだった。

と、言うわけで早速空き教室では椿、美歩、亘、里奈によって作戦が立てられる。

同じく関わりが一番である咲夜には、  
アキラの相手をしてもらっているので、万が一にもプランがバレる事はない。

「成る程ね、なんで響鬼への変身がうまくいったのか……  
ボクはちゃんと理解できたよ。我夢！」

「そ、それはどう言う……ッ」

「我夢！ お前の本当の試練は　ッ！  
いや、本当の戦いはアキラとの関係決着だったんだ！」

そうだったのかあああッ！！  
我夢達の体に電撃が走る。

成る程、確かにコレは最大の試練と言ってもいいかもしれない。

確かに皆、いつまでもこんな関係ではいけないと思っていたところ  
はあったのかもしれない。  
それがまさかこんな形でやってくるとは……

「よ、よし！　まかせとけよ我夢！  
椿くんおススメのデートプランを教えてくださいよう！」

以下、守輪椿が考えたデートプランである。

- 1・ゲーセンで待ち合わせ
- 2・まあまずはガンダムVSガンダムを強いられる
- 3・それに飽きたら鋼鉄拳でヒートアップ
- 4・昼はカップラーメンでおk 自販機に売ってるから
- 5・ゲーセンでたらアニメイポへ行くのが安定。新作はチェックし  
とけ
- 6・疲れたら漫画喫茶でネットでも

「目がアアアッ！ 目があああああああ！！」

のた打ち回る椿を冷めた目で亘と美歩は見つめる。

「これ完全にお前の休日の一日じゃねーか！

一人の構図じゃねーか！」

「椿さん、いや椿。真面目にやれ」

「ふざけんなあああ！」

マチで恋するアサルト パンチじゃこれでヒロイン攻略完了だっ  
てのー！」

「忘れるおおおッ！ そのゲーム内容全部置いていけ！

ってかどういいうギャルゲーなのか全くわかんねーよッッ！！」

ギャーギャーと喚く三人。それを里奈と我夢は汗を浮べて眺めてい  
た。

どうしていいのかわからない。分かるわけがない。

ただ一つ分かることがあるなら、椿のデートプランで行くと詰む。

「じゃあよお！ テメエらが一回たててみるやあああ！」

「え？」

「だかりやああ！ デートプランをよおおお！！」

「……」

生意気言ってすみませんでした！！

亘と美歩は椿に深く頭を下げると、

自分達も椿とほぼ同等のことしか考えられない事を打ち明ける。

「結局まだ付き合っではない訳だしよお。

あんまり張り切ると引かれる可能性があるし

まあ、つつても深く行かないと一回こっきりで終わるしなあ！」

「はい！ そうですね！」

完全に立場が逆転した椿と美歩達を苦笑しながら我夢は考える。

確かにそうだ。

付き合っていない二人が仲を深められる……

というか、アキラに楽しんでもらえる場所はどこなのだろう？

「やっぱりこの街でしか行けない所とか、できない事をしたほうがいいと思うよ。」

まあ映画とか……名物とかないのかな？」

里奈の言葉を真剣に我夢は聞く。

成る程、確かにこの街ならではの事をやったほうがいいのかもしいない。

美歩もうんうんと頷いていた。

しかし、ここで一つ問題が……

「おい、つづかよお」

「ん？」

椿は、美歩に怪しげな視線を送る。

「お前、サポートとか言ってるがよぉ……デートした事あんのかよ

」

真っ白になる美歩を見て椿はため息をつく。  
やはりそうか……

「しょ、しょうがないじゃん……ちなみにアンタは？」

「あっりませーん！ あ、でも画面の中でなら

」



巨と里奈も頷く。

ああ、なんて事だ。この中に実体験を持っているヤツはいない。

「ま、俺達じゃラチがあかねえわな。じゃあ経験者に頼むか」

「経験者？」

椿は頷く。そして、そのメンバーを集めるのだった。

第150話 休（後書き）

もう一度言っておきますと。

すいません！ 響鬼の試練は戦闘少なめです。

でもある意味我夢にとっては戦いってなもんですねw

ではこの辺で。

次もよろしく！

## 第151話 策（前書き）

更新ですね。

ラウズカードの完全版が出るみたいですね。

あれでポーカーしたらカッコいいもんでしょうね

でもロイストなんて中々でませんけどねww

「デートのことについて考える」同

では本編どうぞ！

## 第151話 策

新たに収集されたメンバー。  
それは

「そうだな、うわべの付き合いでならデートくらいした事はあるぞ」  
イケメンのオーラを放つ者が一人。

「やだなあ、そんなの少ししかないよお」

ある時は恋愛相談室まで開いた者が一人。  
磯の香り子さん……あなたは上手くいったんでしょうか？

「あはは、参考になるかどうかは怪しいんだけど」

「うん、わたし達はねえ」

そして、唯一この学校内でちゃんと恋人関係になっている二人。

「「いえいえ！ご教示お願いします！」「」

土下座する我夢と美歩。

そう、この中で経験豊富なのは間違いなく双護、ウラタロス、そして翼と葵だろう。

経験の浅い自分達じゃなにをしたらいいのかサッパリ分からない。と、いう訳でさっそく教えをことう事にしたのだ。

「じゃあ、まずは根本的なところ。服装かな？」

アキラの性格、そして我夢の雰囲気から考えて下手に着飾るのは不要。

いつもより少しおしゃれを意識した感じでいいだろう。

あまりいつもと違いすぎる格好は引かれる可能性が高い。だが、少し張り切っていけばデートが楽しみだからと言う印象を与えることもできる。

「よし！ じゃあ服はオレにまかせろ、買って来てやるよ」

そう言っただけでたのは条戸真志。たまたま着いて来たのだが、どうやら力になれそうな事をみつけられた様だ。

「え！？ そんな、悪いですよ！」

「気にすんなって！ たまには先輩らしい事させてくれよ」

そう言っつて真志は服を買いに行く。

まあ服はこれでいい、では次は……

「場所……か。先生達はどっだったんですか？」

「うーん、どうなんだろうね。」

最初の頃は水族館とか映画……かな」

「うん、まあ最初なんてそんなものじゃないかな？」

あんまり張り切りすぎても……って感じだったし」

「ああ、そうだな。」

まあこの街に水族館はなさそうだから……映画なんてどうだ？」

双護の言葉に我夢は苦い顔をした。

理由を聞くと、一度この街で今どんな映画がやっているか見に行つたのだが……

「ほとんどがホラーっぽかったんですよ。和製の、妖怪系ばかりで成る程、確かに初デートでホラーなんて見に行っても……  
まあ、もしかしたら今この街で何か特殊なイベントがやっているかもしれない。

良太郎はウラタロスと共に何かいい場所がないか探しに行くことにした。

「いいかい我夢くん」

教室を出て行こうとした時、ウラタロスは我夢にしつかりと言いつつ。

「大切なのは欲しいなら、すがりつけどよ！」





「おい、なんだよPって。まさかピンクの略じゃねーだろうな  
ピンクじゃねーだろうなッッ!!」

ピンクじゃねえだろおおうなあああ!!」

ちよつと待て、司は沈黙する。  
成る程、いつもなら追い返したいところではあるが……

確かにコイツらも貴重なカップルである。

我夢のために、ここは一つ話を聞いてみるのもあり……か？

「まあそうだな、じゃあ聞くがお前らはいつもどこに」

「おねがいしますは？」

「……………は？」

「教えてくださいゼノンさんフルーラさん……………は？」

「変身ッ！」 『カメンライ』

「お、落ち着け司ッ！！ 分かるけど、いや分かるけどッッ！！」

ユウスケに抑えられて司はゆっくりと口を開く。

拳を握り締めながらプルプル震えて、かつ青筋が浮かんでいるのは  
気のせいだろう。

気のせいなんだろう……………

「おっ……………おねがいしま…ッッ

おねがいしましゅッッ！！ ゼノン……………さんッッ

フルーラさんんッッッ！！」

「きこえなーい！」

「きこえなーい！」

「「きこえないーいー!」」

「フグツツ!! グツ……グヌツツ!

「コイツううらあッ!」

「つ、司!! スマイル! スマイルツツ!!」

「ツツツ!! 教えてください! ゼノンさん! フルーラさん!」

その言葉に満足したのか、ゼノンとフルーラはしょうがないなあ  
と笑って真面目な表情になる。  
おお、司達は思う。やはり貴重な恋人なだけあって意見は役に立ち  
そうだ。

ゼノンとフルーラは同時に腕を組んで目を閉じる。  
そして、遂に口を開いた。

「デートで一番大切な事を教えてあげるよ」

「教えてあげるわ!! しっかりメモしてね」

「は、はいッッー!!」

一番大切なこと。それには我夢だけでなく司達も気になってしまう。いつもウザイくらいラブラブな二人。

円満の秘訣でもあるのだろうか？

と、いうか一応コイツらも気をつけている事があるんだな……なんて考えてしまう。

「いいかい？ 一番大切なのは」

ゴクリ……

「フルーラがいる事！」  
「ゼノンがいる事!!」

・・・。

「フルーラがないデートなんて中身の無いバナナみたいなモンさ  
」！」

「そしてゼノンがないデートもね!!」

「おやおやフルーラ。あまりに的確すぎて皆言葉を失っているよう  
だ」

「じゃあ帰りましょかゼノン！ 人助けをした後は気分がいいわ！」

「ああ、最後にコレ。」

君の似顔絵を描いてみたんだけど、コレあげるよ」

そう言つて二人は満足げに笑い合つと、そのまま外に出て行きオーロラ経由で帰つていく。  
司は静かに微笑むと、近くの椅子にすわつてゼノンから受け取つた似顔絵をしてみる。

そこには、ただピンクで塗りつぶしただけの紙

……じゃない。コレは元々ピンク色だったモノだ。

しかもこの肌触りは間違いなくティッシュ。そして手についたガム。

「うあ……きたね……」

そつか、簡単な話だ。ゼノンは噛んだガムをティッシュに包んで自分に渡しただけ。  
ティッシュの色がピンクだったから似顔絵なんて上手い事を言つてみたんだろう！



「司が切れたああああッッッ!」

学校中に彼の叫びが響き渡ったのは、言うまでもない……

そして、その夜真志に買ってもらった服を着てみる。

「へえ、いいじゃないか」

「よく似合ってるよ我夢くん!」

「ありがとうございます!ユウスケさん、真志さん!」

先輩達にお礼を言って我夢はもう一度鏡をしてみる。  
成る程、さすがは真志だ。ちょうどいい感じの服を選んできてくれた。



「おいそんなんでいいのかよ！ もっとシルバー巻くとかさ！  
右手に包帯とかさ！ 眼帯が普通じゃねーの！？」

「いやもっとシルバー巻くとか」

「うるせえええええッッ！」

「ゲゲゲッ！」

時期が悪かった、もうそれしか言う事はない。  
吠える司、倒れる椿。残念だが彼の普通は普通ではなかったらしい。  
格好はもうこれでいいだろう。

問題は、やはり場所だ。

ウラタロスがいい場所を見つけてくれたと言っが…？

「ちなみに双護。

お前が行ったデートで一番楽しかった場所ってどこなんだ？」

「ああ、そつだな司。やはり世界のだし巻きボール展は良かったな  
巨匠、タ・マゴ(1885〜)が残した財産だった」

「へー（どこなんだろう……）」

「はいこれ」

「え？」

帰ってきたウラタロスが我夢に差し出したのは一枚のチケットだった。  
我夢はそれを受け取ると目をとおしてみる。

「これは……コンサートですか!？」

「うんそうだよ。」

この世界で大人気の二人組みアイドルユニットのコンサートが明日あるんだ。

そのチケットってわけ」

チャイルドキャッツ。

そう書かれた文字と座席番号、それがウラタロスが指定した場所だった。

「へー、コンサートか。意外だな」

「うーん、まあちよつと面白い話を聞いてね」

「面白い話……ですか?」

そう、このチャイルドキャッツにはある噂がある。

それはまさに我夢にとってはピッタリの話だった。

初デートの時にチャイルドキャッツの生歌を聞くと、そのカップルは別れる事なく幸せになれるらしい。

まあ所詮は噂だが、今の状況には完璧じゃないか？

デートスポットとしても中々人気らしいし、安定の場所だろう。

「しかし、結構大変だったんじゃないか？

チケツト手に入れるの？」

「ふふふ、まあそうだね」

ウラタロスの意味深な笑みを見て司はなんとなくだがこのチケツトがどう言う風に入れたのが分かった気がする。たぶん女性が絡んでるんだろうな……

っていつか今の良太郎は子供の姿なのにどうやって……

「ありがとうございます皆さん！ が、頑張ります！」

「おう、頑張れよ我夢くん！」

皆の応援を受けて、我夢は深く深呼吸をするのだった。

そして翌日、ついに決戦の時がやってきた。

双護から教えてもらった気遣いうんぬんを勉強し、はいばー我夢となった彼はコンサート会場の前へとやってくる。

3516

「……よし」

待ち合わせ十五分前、双護から教えられた事を思い出す。

それは待ち合わせをした場合、絶対に先にいる事だ。

別に同じ場所に住んでいるのだから一緒に行けばいいのかもしれないが、

ここはあえてデートと言う事で別々に行くことにしたのだった。

「あれ……?」

ちょっと待て、ベンチに座ってるのって……

「げッッ!」

ベンチに座っている少女は、せわしなく周りをキョロキョロと見ている。

しきりに時計を確認しており、ため息をついているではないか。

いや間違いない! 間違える訳が無い!!

(やばっ!)

我夢は小走りでその少女の元へ駆けていく。

少女は我夢に気づくと、満面の笑みを浮かべて手を振った。

(うっ！ かわいい！)

等と一瞬思ってしまったがそれどころじゃない！

早速ミスしてるじゃないか！ 先に来ていたのは我夢じゃなくてアキラだった。

アキラは走ってくる我夢にあわせて、自分もベンチから立ち上がり小走りで駆け寄ってくる。映画のクライマックスシーンならば走ってくる二人は強く抱きしめあうところなのだろうが、問題はそんな事ではない。

甘かった。十五分前じゃなくて三十分前にしておくべきだった！  
我夢は嫌な汗をかきながらアキラの前へやってくる。

「はあはあ……我夢くん、お待たせしました」

「いやッ！ 遅れたのは僕の方です！ すいません！」

「いやっ！ あの……いいんです！」

私が早く来ちゃっただけなんですから」

アキラは恥ずかしそうにしながら頭を下げる。

なにやら遅刻してはいけないと気を張りすぎて四十分前にはもう到着してしまったと言う。

つまり我夢が三十分前にこようが結局は遅れてしまっただった。だが相当待たせてしまった事に変わりはない。

我夢はアキラに謝罪すると一緒に歩き出したのだ。

「へえ、コンサートですか。

だからホールの近くが待ち合わせだったんですね」

「あ………はい！」

二人は肩を並べてゆっくりと歩いていく。

始まるまで時間はまだまだある、だから他愛もない会話をしながら



進むのだが

アキラの表情は少し悲しげだ。

「あの……我夢くん、気を悪くしたならごめんなさい」

「え？」

「どうして、こっちを向いてくれないんですか？」

「ッ！ あの、ごめんなさい！」

アキラはさっきから我夢がこちらを全然向いてくれない事が気に入っていった。

正直、話しかけても顔すら向けてくれないのは寂しい。

我夢は慌ててアキラの方を見るが、まるでゆでだこのように顔を赤く染めてしまう。

情けない話だが、我夢はアキラの格好が気になって直視できないでいた。

彼とて健全な男子中学生だ。

ショートパンツとニーソのコンボなんてされたら、  
いわゆる絶対領域とやらにどうしても目が行ってしまいそうになる。

しかし、そんな事をしたら嫌われてしまうかもしれない！

我夢はそう思う訳なのだが、どうやら逆にそれがアキラを傷つけてしまったらしい。

なんとか誤解をとかなければならない。

我夢は勇気を振り絞って、アキラの格好が素敵で照れてしまったと少し曖昧な感じで答えた。

だがまあ、アキラは納得してくれたみたいで、気にする事はないと我夢に微笑みかける。

「が、我夢くんも……あの、よく似合ってます」

「あ、ありがとございませすー！」

二人は笑い合うと少し軽快に歩き出した、どうやら緊張が少しずつほぐれてきたようだ。

だが、人が多くなってくるとアキラははぐれない様に、我夢の服の裾をつまんで歩く。

それが我夢の心臓の鼓動を早める事となるのだが……

デートが本格的に始まる前からコレだ。  
若干この先が思いやられるのだが、我夢にとってはそんな余裕はない。

アキラに楽しんでもらえる様に努力しないと……

そう、それはまさに我夢が心に決めた時だった。

「うえええええええええん!!」

「!」

ふと、女の子の泣き声が聞こえてきた。  
その方向を見ると、小さな女の子が一人で泣いているではないか。

人が多い場所、恐らくは迷子だろう。  
二人はすぐに顔を見合わせる。

「我夢くん」

「ええ、そうですね」

二人は微笑み合つと、女の子の所へと足を進めたのだった。

第151話 策（後書き）

いやしかしデイケイド主演に書いてるとデイケイドに愛着が湧いて  
きますねww

正直この作品書くまでは普通だったんですけど、今は確実に好きな  
ライダーベスト3には入ってますww  
もちろん土含めてね。

だから今度の映画に本人でるってのはテンション上がりましたわ  
PSPのフルブラストは確実に買いますねw

ではこの辺で。次もよろしく！

## 第152話 氷（前書き）

更新ですね。

すいません次は未定でお願いします

まあ予定は木曜か……金曜辺りかな？

「迷子を見つけた二人」

ではごっごー！

## 第152話 氷

「友里ちゃん、どう?」

「あはは、この前くしゃみした時に出ちゃった……」

廊下でそんな事を話し合う二人。

この二人は皆がしている訓練の他に、もう一つ大事な事を鍛えなければならぬ。

とは言え、重々しい雰囲気ではなく。あくまで明るく二人はそのことについて話していた。

「拓真はなんの動物だった?」

「多分……カラスかな」

「あはは! あたしも鳥っぽいんだよねえ!」

笑い合う二人。

しかし拓真は真面目な表情に戻ると、窓の外を見た。

この世界に化け物……敵となりえそうな者はいないらしいが、いつ

『この力』を使わざるをえない場合が起こるかわからない。いつでも使える様にしておかなければ。

そんな事を考えていると、向こうから鏡治がやってくる。

「おお、二人共！ どうしたんだそんな所で！」

「ああ、鏡治君。ちょっと話してたんだ」

「っていかさ、今ごろ我夢くとアキラちゃん！  
デートしてるんですよ！！」

三人は二人のデート風景を想像してみる……

（（絶対……何かに巻き込まれてそう））



まあ、当たり前である。

「いいの？」

「はい、とんぞ」

「おいひいー！」

女の子はアキラが差し出したデネブキャンデーを受け取ると、口に含んだ。  
いつもデネブが大量にくれるから食べきれずにポケットに入れていた。  
それが幸いだった。女の子も喜んでくれ、泣き止んでくれたので二人はホッと胸を撫で下ろす。

女の子の名前は『つらら』と言っらしい。  
彼女はどうか姉とはぐれてしまった様だ、我夢とアキラは姉を捜すためにつららと一緒に歩き出す。

「お姉さんのお名前は？」

「みぞれお姉ちゃん！」

「へえ、雪が関係する名前なんですね」

つららにみぞれ、そう言われれば彼女の肌は雪の様に白く美しい。  
我夢とアキラもつららに自己紹介をして、三人はみぞれを探す。

人の多いコンサートホール前、みぞれもつららを探し回っているだ  
ろうから……

こんな時放送でもしてくれる場所があればいいのだが、あいにくそ  
う言う場所はないらしい。

自力で探せと言う訳か。我夢とアキラはとりあえず姉らしい人を探  
す事にした。

そんな中、ふと……

「我夢ちゃんは何味なの？」

「え!？」

「ぶっ！」

「そっ！ そっちのガムじゃないです！」

笑うアキラと顔をしかめる我夢。

そんな事を言いながら歩いてしたが、何しろ本当に人が多い。

小さなつららでは、人の波に吞まれはぐれてしまつ可能性が高かった。

だからアキラはつららに手を繋ぐように言う。

つららも頷くと、アキラの手をしっかりと握った。

そして、そのままもう一つの手で我夢の手も握る。

「！」

まるで親子のように三人は会場の周りを歩き回った。  
途中、つららが空腹を訴えてきたので適当にハンバーガーやらを買  
ってつらららに食べさせる。

「ふふっ、ついてますよ」

「あっ!」

つららの口元についたケチャップをアキラは拭ってあげる。  
なんか本当に親子みたいだ、アキラの脳裏にふとそんな文字が浮か  
ぶ。

と、言う事は

自分と我夢は夫婦……

(な、何を考えているんだ私は……)

我夢を見ると同じ事を思っていたのだろうか？

しっかりと目が合ってしまった。

二人は慌てて目を反らすと、またつららの方に視線を戻す。

( あれ？ って言うかなんか忘れてるような…… )

まあいいが、つららの姉を探すのが先だ。

二人は頷くとまたつららの手を引いて歩き出すのだった。

「ねえ、アキラちゃん……疲れた」

「そう……ですね。我夢くん、どこかに座りましょうか」

あれからそれなりに時間は経ったが、なかなか見つからないものがある。

いろんな人に聞いて回ったがどうも空振りばかりだ。

段々辺りも暗くなってきている。このままではまずいのではないか？

「どうします？」

人は大分減ってきたみたいですけど……全然見当たりませんね」

「とりあえずもう少し探しましょうか、

みぞれさんもきつとつららちゃんを探しているだろうし」

そこでふと、我夢は気づく。

そう言えば・・・

「あ、ちょっと待ってください。面白い物があるんです」

そう言っつて我夢が手をかざすと、何も無い空間からソレが出現した。つららには手品と言っつてごまかす我夢、それは綺麗な赤色が目立つCDの様な物。

アキラとつららが不思議に思い我夢に問いかけると、我夢は答えの代わりにそのディスクを放り投げた。

すると

「わぁー！」

「す……す……」

『キユイイイイ！』

ディスクが変形して、鳥の様な物になった。

驚く二人を気にする事もなく、鳥は我夢の周りを飛びまわり、肩に止まる。

驚きはしゃぎ回るつららに聴こえないように、我夢は小さな声でアキラに囁いた。

「響鬼になった時にベルト部分に三枚ついていたんですよ。」

司さんが言うにはディスクアニマルって言うらしいんですけど……

少し原作と違うみたいで司さんも困惑してました」

3535

今、我夢の肩に止まっているのは茜鷹アカネタカと言う鳥型のディスクアニマルだ。

我夢は茜鷹に合図を送り、上空へと飛翔させる。

「じゃあ君もお願い」

次に発動させたのは、犬型の瑠璃狼ルリオオカミ。

この瑠璃狼は擬態能力を秘めており、瞬時に自分の体を周りの景色



と同化させる事ができる。

そのまま瑠璃狼と茜鷹は我夢の元を離れて行った、みぞれを探す為にだ。

「ディスクアニマルにはビデオカメラみたいな力があるんです。

だから彼らにも手伝ってもらいましょう」

「凄いですね……」

その時、少しだけアキラの表情が暗くなる。

本当に凄い、自分なんていなくても……もう我夢は立派に変わっているのだ。

もしかしたら何か力になれるかもしれないと淡い期待の様なものを抱いていた自分が情けない。

アキラは少し唇を噛む。

だが、すぐにつららに話しかけられて笑顔を浮べた。

あまり考えすぎるのは良くないか……

アキラは首をブンブンと振って、つららに微笑み返す。

その後、三人は歩き回った疲れからしばらくはその場で話し合っていた。

つららは三姉妹の末っ子らしく、今日は友達に会いに来たところを迷子になってしまった……と言う事だった。

我夢もアキラも兄妹はいない。

だからつららの話を楽しく聞いていたのだが……

子供と言うのは正直なものである。

思ったことを言うのは純粋な凶器に変わるのだが……つららに分かる訳も無い。

彼女はその事を二人に問いかけた！！

「我夢ちゃんとアキラちゃんは恋人同士なの？」

「「!!!!!!」」

真っ赤になってうつむく我夢と、

慌てたように我夢とつららを何度も見返すアキラ。

その様子が面白くてつららは楽しそうに笑う。

昔……というか数日前のアキラなら真顔で否定していただろうが、  
どうにもあの夢を見てから我夢の事を意識してしまう様になっ  
ていた。

…と言うかそもそも、はたから見れば男女二人でいるなんてデート  
と思うのが普通だろう。

アキラはそうだと割り切って、やんわりと否定した。

「ただの友達ですよ。それ以上でも以下でもありません」

……我夢が少し泣いているのは気のせいだろう。

「ふうん。あ！ もどってきた！」

その時、茜鷹と瑠璃狼が我夢の元へと帰ってくる。  
心があるのか、ディスクアニマル達は我夢になつており、彼の周りを楽しそうに飛び回る。

「よしよし、ありがとう。じゃあ早速」

我夢はアニマル達をディスクの形に戻すと、真ん中のボタンを押した。  
すると、ホログラム映像が展開されて今まで瑠璃狼や茜鷹が見ていた映像が映し出された。

「どっ？ お姉ちゃんはいる？」

「ふうん……」

しばらくつらはは、映像を食い入るように見つめていた。  
そして声を上げる、見つけたと！

良かった。どうやら見つかりそうだ……  
我夢たちは安心した様に微笑むと、その場所へと向かう事にしたの  
だった。

「……ふうん」

「おねーちゃん！」

司達と同じくらいの年齢だろう少女・みぞれは、つららの姿を見ると駆け出して抱きしめる。

つららと同じく、雪の様な白い肌。アキラと同じくボーイッシュな服装。

可愛いと言うよりは美しいと言う印象の少女だった。

「心配したよ！ 勝手にいなくなって！」

「ごめんなさいお姉ちゃん……」

みぞれは微笑んでつららを撫でると、我夢たちの姿を確認する。きつとこの二人がつららをここまで連れてきてくれたのだろう。

みぞれは二人に頭を下げた感謝の言葉を述べた。

「ごめんなさい妹が迷惑をかけて」

「いや、いいんですよ。ねえアキラさん」

「ええ、気にしないでください」

みぞれはお礼をしたいといってきたが、二人はそれを断った。御礼が欲しくてつららを助けたわけじゃない。

しかし、二人はここでやっと気づく。

「」「あ」

今は……何時だッッ!?

「せぼっ!…忘れてた!…」

「？」

「私達コンサートを見に来たんです！」

もう始まってしまっじゃないか！

二人はみぞれたちにお別れを言うと、急いで走り出す！

「あ！ ちょっと！」

走り去る二人を見てつららとみぞれは顔を合わせた。

「お姉ちゃん！」

「ああ、分かってるよ」

みぞれとつららはニヤリと笑い合い、二人の後を追う事にした。



「よかった……なんとか間に合いそうですね……ッ」

「あはは……焦りました」

息を整えて笑い合う二人、どうやら間に合ったようだ。

だが……二人が会場に入ろうとしたとき、  
大声で泣いている子供と母親だろうか？ その姿が見えた。

二人は少し気になって、つい耳を傾けてしまう。

子供が泣きながら母親を責めている。

なんでもチケットが入ったかばんを母親が無くしてしまったらしい。  
チケットが無いと会場には入れない、どうやら子供は今日のコンサ  
ートを楽しみにしていたようだ。母親も申し訳なさそうに何度も謝

っつゝる。

「あはは、我夢くん……」

「そうですね、アキラさん……」

二人は少し悲しげに微笑むと、入り口の列から外れたのだった。

「本当にごめんなさい我夢くん！  
せっかくチケットを用意してくれたのに……」

「あはは、いやいや。

いいんですよ、あのまま行っても気分悪かったと思いますし」

とぼとぼと二人は会場を後にする。

あの親子に自分達のチケットを渡してしまい、結局自分達は入れなくなってしまった。

と、なればもうやる事もない。

二人は熱気で包まれているであろう会場から離れていく。

「ごめんなさいアキラさん。せっかく僕に付き合ってもらったのに」

「いいんですよ、気にしないで。

つららちゃんやあの子の役にも立てたんですから」

そう言って満面の笑みをアキラは浮べた。

本人は無意識だったんだろうが、アキラの優しさと笑顔に我夢はド

キリとしてしまう。

この人を好きになって良かった、我夢は切にそう思う。

アキラもまた我夢の行動に感心していた。

我夢は他の同年代の男子とは違う落ち着きの様なものがある。

巨もそうだが、我夢はとくにそう感じた。

我夢と一緒にいると……落ち着く。

「ねえ！ 君達！」

「……」

声がして振り返ると、そこにはみぞれとつららが居た。  
どうしてココにいるのか？ コンサートはもう始まっている筈なの  
に？

つらら達はその疑問を我夢にぶつけてみる。

いっそ笑い話にしてしまえばいいのか、我夢はそう思って全てをみ  
ぞれ達に話す事を決める。

「あはは、実は」

「成る程ね、本当に人がいいな君達」

「あはは……そんな事」

「でもでも！ いい事したらご褒美があるんだよね！

お姉ちゃん？」

何故かつらは嬉しそうに飛び跳ねて我夢とアキラの手を握る。  
その様子に我夢とアキラも困惑気味だ。

対照的に尚も笑い続けるつらら。みぞれもニヤリと笑ってうなずいた。

「ああそうだね、よし、着いてきて！」

にんまりと笑ってつららとみぞれは我夢たちを手招きする。

二人は一瞬どうしようか迷ったが、ここは素直について行く事にしたのだった。

しばらく歩いて行くと、気づく。

この方向は間違いない。コンサート会場ではないか？

念の為にチケットを持っていない事をもう一度告げるが、二人も持っていないと笑ってみせるだけだった。

そのままみぞれ達はどんどん会場まで進んで行き、ついに目の前までやってくる。

「さ、こっちこっち」

「ええ!？」

みぞれは正面ゲートをはずれて歩いていく、初めて来たのではないのか？

そう思うくらいみぞれ達の足どりはかるい、まるでホールが見知っている家の様だった。

そして二人は関係者専用の入り口までやってきて扉を開けた。

驚く我夢とアキラ。止めようと声をかけるが、大丈夫と彼女達は笑ってみせる。

当然すぐ中にいるスタッフ達に見つかってしまうのだが、ここで不思議な事が起きた。

スタッフ達はみぞれとつららの姿を見ると、笑顔で挨拶をしてきたのだ！

驚きで言葉を失う我夢とアキラ。

「こっちは私の友達！ 別にいいよね？」

「はい、もちろんですよ。どろぞろどろぞろ」

目を丸くする二人に構わず、どんどんみぞれ達は進んでいく。

関係者だったのか！？ 驚く我夢たちだが、もっと驚くべき事に

「んじゃ、私達はここで待ってようか」

「え？ え！？」



ここは…控え室な訳だが……

「みぞれさんッ！ つららちゃん…ッ！  
お友達って……まさか ッッ！！」

「うん。寝子ねこちゃんと、幽子ゆこちゃん」

何か、軽く答えられた訳だが……

ある。その名前には見覚えがある。  
がくがくと震える我夢。間違いないッッ！！

「って事は……つまり」

みぞれは意味が分かった二人にニヤリと笑ってみせる

「そう、チャイルドキャッツって事」

「ええええええええッッ！！！！！！」

よりもよってアイドル本人の知り合いだったのか！！

「あ……えとッッ！！！！」

「あはは！！ そんなに緊張しなくていいって！！」

「そ、そうですかね」

我夢とアキラは緊張で正座をして固まってしまった。  
あれから時間もたって、コンサートは終了する。

そして同時に……ついとその時がやってくる!!

「あら、来ていたのね。みぞれ、つららちゃん」

「わーい！ 寝子ちゃんだ！」

美しいセミロングの黒髪と、整った顔立ち。

可憐な少女と言っ言葉が似合うチャイルドキヤッツの一人、寝子がやってきた。

見覚えはないものの、この世界における大人気のアイドル!!  
緊張するなと言う方が無理だろう。

「ああ、どうだったコンサート」

「ええ、皆楽しんでくれたみたいだから良かったわ。」

あら？ そちらは？」

「！！！」

寝子の視線が我夢とアキラに向けられる。

ガチガチに緊張しながらも、二人は自己紹介をして、みぞれがいきさつを説明した。

「そうだったのね。私からもお礼を言わなくちゃ」

そう言つて寝子は二人につららの面倒を見てくれたのと、チケットを親子に譲つた事に感謝する。

それをなぜか部屋の隅まで後退して答える我夢達。

つららは緊張している二人がおかしいのか、しきりに笑っていた。

「みぞれもチケット渡したのに、ホールの方にはいなかったわね」

「あはは、あそこは熱気が凄すぎ。私には無理だよ」

寝子は困った様に笑うと、我夢とアキラにお茶を差し出す。お礼を言う二人を見て、寝子はふと思いついた様に笑った。

「我夢さんとアキラさんは……その、お付き合いとかは……？」

「あッ！ いやっ……その、なんと言うかッッ！！」

慌てる二人を見て寝子は確信する。

そしてみぞれに視線を移すと、笑って親指を立てる彼女が見えた。

「もし良かったら、私の歌を聴いてくださらないかしら？」

「え！ い、いいんですか!？」

「ふふっ、もちろんです」

寝子は二人の為だけに歌ってくれと言っ。

いや、正確にはみぞれ達も居る訳だが……寝子は二人の為と言う事でマイクを持った。

もちろん演奏は無いし、マイクだって玩具だ。だがしかし、二人は寢子の行動が嬉しくてそんな事は気にならなかった。

アイドルが自分達の為に歌ってくれるなんて、それだけで十分すぎるものである。

寢子は二人の前に立つと、笑顔で構えをとった。

流石というか、なんとというか……その可憐さに二人は一瞬にして心奪われる！

「じゃあ聞いてください。君にメロメロ！」

こうして、小さなコンサートが幕をあけたのだった。

第152話 氷（後書き）

分かった人は分かったんじゃないですかねw w

墓場のEDは好きですね。

結構中の人も声優上手かった印象があります。

まあいいやw

ではこの辺で。次もよろしく！

第153話 思(前書き)

はい更新でございます。

次から無駄に長い？ 過去編へと移行します(爆  
では

「デートを終えて」

本編どうぞ！



## 第153話 思

「  
　　」

猫撫で声が心地いい。

成る程、人気になるのも分かる気がする。  
寝子の歌声には不思議な魅力があった。

本当に癒される、まるで癒しその物を具現させたようだ。

我夢とアキラは、寝子の歌を完全に聞き入っていた。

あられとみぞれも眼を閉じて微笑んでいる。

それから寝子は二人の為に三曲歌った後、小さなコンサートは終わりとなった。

二人は惜しめない拍手を寝子に浴びせる。

寝子は照れた様に微笑んでお辞儀をした。

案外、少人数に聞かせる事の方が緊張するらしい。

寝子は最後まで聞いてくれてありがとうとアキラにお礼を言い、そして我夢に向かって小さく囁いた。

「これで、二人は大丈夫」

「!!」

「？」

赤くなつてうつむく我夢と、不思議そうに首をかしげるアキラ。

寝子とみぞれは笑いながらも、二人の関係が進展してくれる様に願うのだった。

それからしばらく五人で遊んだり話したり、食事をご馳走になった。寝子はこの世界ではアイドルだが、我夢達はまだそこまでの実感は

ない。

逆にそれが寢子との距離を縮め、異性の我夢はともかくアキラはすぐに仲良くなることが出来た。

とはいえ、いつまでもここには迷惑になるだろう。

その結果、また明日と言うことで話は終わる。

寢子のスケジュールを心配したが、どうやらコンサートは今日だけらしくしばらくは休みが取れると言う。そもそもこの世界ではどんなに売れているスターであろうとも週に二日は休みがもらえるらしい。

本当に平和な世界なんだろう、二人はそう思い立ち上がる。

「じゃあ、またいつでもいらしてね」

「はい。ありがとうございました」

「また明日も遊ぼうね!」

「ええ、もちろん!」

「じゃあ、また」

もう美しい月が出ている。

それぞれは別れと約束を交わして、それぞれの帰路につくことにした。

笑顔で帰っていく我夢とアキラ、そんな二人を寝子達は笑顔で見送る。

だが見送りが終わると、寝子とみぞれは深刻な表情へと変わった。

みぞれはつららを楽屋へと先に行かせる。

何故か？

あまり、聞かれたくない話だからだ。

「幽子は……かえってこなかったな」

「ええ、あの娘が連絡も無しにいなくなるなんて絶対にありえないのに」

寝子は唇を噛んでうつむいた。

チャイルドキャッツ、そのもう一人。

つまり彼女のパートナーである幽子がいなくなったのである。今日のコンサートも彼女がいけないという事で大変だった。

なんとかファンには体調不良と言う事で納得してもらったが、長続きする訳がない。

「それに……………」

「鬼太郎も……………か」

「　　ッッ！」

彼女の…大切な人も

「大丈夫、見つかるさ。きっと……」

「ええ、そう。きっと…鬼太郎さん　ッ」

寝子は悲しげに、彼の名前を呼ぶ。

答えてくれる人はいない……

全ての嘆き、祈りは月が吸い込む様。

相変わらず美しい月を見上げて、寝子は瞳を閉じる。  
そして……どうか、無事でいてくれと彼女は強く願った。

そして、学校に帰って来た我夢に待っていたのは当然と云うか……先輩方の質問攻めである。

「ど、どうだった!？」

「はい……とっても、良かったです」

「「おおッ!」「」

我夢の様子を見て、デートが上手くいったのだと司達は安心する。

正直不安で仕方なかったと言えはそう。

今までまともにデートをした事がない二人の事だ、何かに巻き込まれたり。

アキラの何気ない一言で我夢の心が抉られたり。

アキラの何気ない一言で我夢の恋に終止符が打たれないか心配だったり。

アキラの (以下略)

それだけではない、話しているうちに薫が飛び込んできて……

「ちょよ！ 我夢凄いやよ！」

アキラってば我夢の事ばかり話してるんだから！」

「おおマジか！ やったな我夢くん！」

鏡治の言葉に我夢は照れた様に笑う。  
うまく言ってくれて本当に良かった。

我夢はそこで少し考えてしまう。

正直、かなり……いや、相当いい感じだったんじゃないか!?



今の今まで何も考えてなかったけど、今日のデート……と、いえるのかどうかは分からないが。相当に自分とアキラの距離は縮んだ……  
…答だ。もしかしたらアキラも

「気をつけるよ我夢、馬鹿（おバカ）はここで勘違いして先走るケースが多い。別にデートをしたからと言って好きだと言う訳でもないからな」

「そ、そうですね、司先輩。ありがとうございます」

危ない危ない。司の言う通りだ、焦りがいつも失敗を生む。  
我夢は深呼吸をして椅子に座る。

「うん、ってかどうでもいいじゃないんだけど。  
今、お前ルビに俺の名前入れてなかった？」

いや入れてたよね？ 馬鹿って読み方俺にしてたよね？  
これっ、あーやだなーコレっ……おこっちゃんおつかなああ……」

ギヤーギヤーと相変わらず叫び続ける司達を無視して、一同は会話を続ける。

「ってかいつか、友達ができたんだって？」

「あ、はい！ 友達ができたんです」

寝子とあられにみぞれ。全員女性な訳だが……

「へー、凄いな。明日も頑張っつてね我夢くん」

「はい！ ありがとうございます！ 拓真先輩！！」

「せいぜいミスしないようにな」

巨も我夢が上手くいって来て嬉しそうだった。

その日は男性陣で一通り話し合った後、明日の為に眠る事にした。

明日もうまくいってくれますように……我夢は期待と緊張を胸にコ  
インを弾く。

「はーい、はい！」

「あはは！　ありがとうございます！」

ちやぶ台におかれるご飯とおかず。  
かわいいエプロンをつけたフルーラは、  
にっこりと微笑んでゼノンの  
向かいに座った。

彼らはリボルギャリーの中で生活している。

……と、言っても本当に車中だけと言う訳じゃない。

リボルギャリーの中に扉がついていて、その扉の向こうに生活スペースが広がっているのだ。

空間を無視した設計だが、それは彼らの主人がプレゼントしたスペース。

キッチンやらお風呂など生活に必要な物は全て揃っており、テレビもちゃんとついている。

司達の携帯と同じ世界に干渉されない電波が流れ、どこでも見る事ができるのだ。

そして部屋にはフルーラの趣味なのか？

かわいいぬいぐるみが多く、ベッドは共有の様だった。少し大きめのベッドに枕が二つ並んでいる。

周りを見てみれば、さらにもう二つくらい部屋が見えた。

正直そこらへんのマンションより豪華な造りだ、彼らの愛の巣……と言った所だろう。

「ああ、君の手料理が食べられるなんてボクはなんて幸せものなんだ！」

「嬉しい！ ワタシは」

全く関係ない話が二時間くらい続くのでカットします

「でも、少し気になるわゼノン」

「君もかい？ やっぱり簡単すぎるよね」

二人は今回の試練があまりにも簡単に進んだ事を不思議に思っていた。

今までの試練はもちろん二人が仕組んだモノではない、あくまでも世界の意思だった。

特にファイズとブレイドは彼らも予測していなかった事態が多く。ナビゲータを称する彼らとしても、中々スリリングな展開が続いていたのだ。

だがそこに来てこの試練である。いくら簡単だと言われていても、あんなアツサリと最後の試練が終わるモノなのか……？

考えれば考える程思考の迷路にハマっていきそうだ。

ゼノンは水を手にすると、それを飲まずにしばらく見つめる。

考えすぎか？ この水のように澄んでいる真実を自らの手で濁していただくのかな？

「ご主人様には電話できないの？」

「うん。まあ、あの人と連絡がつかないのは珍しい話じゃないからね。」

多分寝てるんじゃないかな」

「ご主人様が寝るって事は試練が終わったから…？」

ゼノンは頷く、彼らの主人は試練が終わると必ず一定の時間眠るのだ。

今回もそうなのだろう、と言う事は試練が終わったと言うこと。

第一段階であるエピソードディケイドの完成。

E i s d E C D E ?

「でも、何か引つかかるんだよね」

「ええ、そうね……」

まあ、何かあったらあったで楽しもうかな。  
ゼノンは珍しく真面目な表情で、口だけを吊り上げるのだった。

「成る程ね、じゃあまた夢を見ちゃったんだ」

「……はい」

うつむくアキラに葵は微笑みかける。

アキラはまた我夢の夢を見たらしいのだ。それも前回の様な……

そう、前回程の事はなかったものの、夢の中では二人は恋人同士だったらしい。

アキラは複雑そうな表情で葵に相談を持ちかける。

もう少しでまた我夢と一緒に出かける、どうしても意識してしまうと言うものだ。

「アキラちゃんは我夢くんの事をどう思ってるの？」

素直な意見を聞かせてほしいな」

「私は……その、今までそんな事考えた事なくて」

葵は少し悩む。

確かにそんな感じだった……んだろう、今までは。



ただど夢と言う無意識の塊が、我夢との関係をぐちゃぐちゃにしてしまった。

我夢と今まで接してきた時間はあくまでも友人としてだ。

友達と恋人は全く違う。どんなにその人の事が好きでも、異性として……恋愛対象としてみれるか？ また逆に恋愛対象として見るかは全く別の話だ。

どれだけ長い時間一緒にいたとして、恋愛関係になるとは限らないのだ。

自分もそうやって悩んだ事もある。だけど……

(うーん……あの方法でいってみようかな)

葵は少し悩んだが、その方法でいく事にした。

正直、自分はコレで翼への思いに気づいた。気づいてしまった。

まさか、自分の中にあんな感情があるなんて思ってなかったからだ。

「ん、じゃあ質問変えるね？」

我夢くんが、他の女の子と仲良くしてるのを想像してみて」

「え……」

「ま、いいからいいから！」

「……」

アキラは言われた通りに想像を始める。  
別に他の人と仲良くしているくらい……どつって事は

「……」

アキラは気づいていないかもしれないが、  
想像を始めたくらいから彼女の表情が少し暗くなっていたのを葵は  
見逃さなかった。

「正直、胸がざわざわしない？」

「・・・少し」

葵は笑顔で頷くと、アキラの肩に手を置く。

「それを素直に我夢くんに言ってみてもいいと思う。

きつと我夢くんだって同じだから」

「え？」

葵はぐつと親指を立てるとアキラの背中を押して玄関に向かうのだった。

どつちら、中々うまくいきそうじゃないか。

夢が原因で自分の気持ちに向き合うのも悪くは無い。  
葵はニッコリとアキラに微笑み、その足を速める。

そして、我夢の方も翼に相談を持ちかけていた。

このままいい関係になってくれるは嬉しい事だけど、肝心の告白する勇気が全く湧かない。

もし断られでもしたら、この先気まずくて過ごせないのではないか？

そう言う恐怖がせり勝ってしまうのだ……

「成る程ね、分かるよ。僕も最初は怖かったからね」

「ですよね！ 断られるくらいならいっそのままで」

その言葉を翼は止める。

おどろく我夢に翼は微笑みかけた。

過去の自分も全く同じ事を考えていたのだ。 だけど……

「友達に言われたんだ、いつまでも同じ関係なんてありえないって」

「ッー」

「もちろん、今じゃなくてもいいよ。」

でもまあ確かに焦りはいけないけど、大事なときはしっかり決

めないよね」

「は、はい！」

「大丈夫、アキラちゃんだって我夢くんの一生懸命な気持ちを分かってくれるよ」

翼の笑顔は我夢の緊張を消し去ってくれた。

意識しすぎないで自然体でいこうと翼は笑う、我夢も頷いて玄関へと向かっていった。

頑張っつね我夢くん。

そう思いながら翼は昔を思い出す、いつも調味料を入れすぎていた友人、火川。

彼は今警官として頑張っている、自分達の世界を守ってくれているのだ。

だから、彼の為にも自分も必ず生きて……世界を救わなければ

「……………」

翼は椅子にもたれかかったまま天井を見る。

アギト……………か。

変身した時、脳の中…というか不思議な空間に自分とアギトがいた。その時、自分はアギトから戦い方を教わった　気がする。

一瞬だった為詳しくは覚えていないが、その部屋の後、自分はもう一つ部屋を通った気がする。

そこを出た後は、つまり意識が戻った後は戦闘力も上がり、必殺技の発動方法やフォームの情報などが詳しく頭に直接叩き込まれた。

だが、気になる事も多い。  
翼はゆっくりと独り言を呟く。

「フレイム…ストーム……」

トリニティ、トワイライト……

「後は……」

何だ？

「・・・」

いつもなら絶対しないであろう鏡で自分をチェックすると言っ行動。  
アキラはもう一度自分の格好がおかしくないかを確かめた。

どうしてこんなに緊張しているのだろうか？

どうにも変に意識してしまう、別にどうって事ない筈なのに。

「すみません！」

先に我夢が玄関にいたのが見えてアキラは小走りで彼の元に駆け寄る。

もちろん我夢はアキラを笑顔で迎える。

それにつられてアキラも笑顔になる。

二人は少しの間お互いの格好を褒めた後、学校を出て行くのだった。

「今日はちょっとしたお祭りみたいなものがあるみたいなんですよ」

「へー、そうなんですか！」

「だから、皆さんも後で来るみたいですよ？」

二人は他愛もない会話を繰り返しながら街を歩いていく。

本当になんでもない話、だけど我夢にとってはそれが嬉しかった。

ただ、一緒にいるだけで



「我夢くんは、その……」

「え？」

「好きな　　ッ、いやなんでもないです！」

「？」

アキラは笑うと、足を速めるのだった。  
そうだ、このままでも……

この笑顔が続いてくれるなら　　ッ

我夢はコインを取り出し、弾いた。  
裏も表も何も決めていない賭け。

出た目は表、我夢はそれを意味深な目でみると……アキラの後に続くのだった。

第153話 思（後書き）

最近アホリズムって漫画にはまりました。

いいですね、好きです。

ああ言うキャラクターやらフラグが多い作品はね。

ライダー関係ないなww

この辺でやめときます

では次もよろしく！

第154話 序曲・巻（前書き）

はい、過去編入ります。

正直響鬼編の半分は過去編……かな？

言いすぎ……かなww？

「デート二日目」

ではどうぞ！

あとすいません。次回更新はクリスマス明けのどこかになる……予定です。

どうですか皆さん。リア充できそうですかw？

まあ各々、いろいろなクリスマスを楽しみましょうか。

第154話 序曲・壱

「おお！ よく来たね！！」

「ど、どうも！」

豪快な笑顔を浮べて二人にかき氷を差し出してくれたのは、みぞれの姉である『あらね』だった。

彼女が作るかき氷はちょっとした名物らしく、それなりに人も並んでいた。

しかし理由はすぐにわかった。成る程、確かにおいしい！

上手くは説明できないが、氷が普段食べていたモノとは全然違う。アキラも我夢もこんなにおいしいかき氷を食べるのは初めてだった。

思わず顔がにやけてしまう。

そんな二人の笑顔を見て、みぞれ達も満足そうに笑みを浮かべた。

「姉さんのかき氷は世界一さ。私が保証する」

「うん！ おいしいんだよ！」

「そうですね、本当においしいです！」

祭りが本格的に始まるのは夕方からだ、それまではみぞれ達と過ごす事にする。

つららはすっかりディスクアニマルが気に入ったらしく、瑠璃狼やらと戯れていた。

みぞれはと言えば、どうやらアキラと気が合うらしくさつきからいろいろと話しこんでいる。

それを我夢は参加しない程度に聞いているのだった。

「アキラは髪が短い方だね、伸ばさないの？」

「どうなんでしょう、楽ですからね」

「成る程ね、案外男装とか似合うんじゃない？」

「ええ！？ か、考えた事もなかったです」

冗談だよ、そう言ってみぞれは笑う。

成る程、我夢は少し同意していた。

男装はともかくアキラは少しカッコイイオーラが出ている。  
一時期はうらやましく(?) 思ったほどに

「だけど、逆に我夢は女装が似合うんじゃない?」

なる……ほ……

なん……だと……?

「ぶっつー!!」

なんて事を言うんだみぞれは!

我夢はあまりにも唐突は発言にどうしていいか分からずアキラに助けを求める。

しかし、彼の目に飛び込んできたのはニヤリと悪戯に笑うアキラ……

「そうですね、我夢くん女の子みたいですから。

声だって高めですしね」

「じょ、冗談きついですよっ!」

「あはははは!」

意地悪く笑う二人から我夢は離れていく。

やれやれ、確かに声は高い方だし体も細い、もっと鍛えないと……

我夢はこの場にいればもっと心を抉られる気がしたので

離れたところから楽しそうに話す二人を観察することにする。

「……」

しかし遠めで見てふと思う。

つらら、みぞれ、遠くのほつでかき氷をつくっているあらね。

みんな少し薄着すぎるような気がする。特別暑くもない季節の筈だが？

「ま、いいか……ん？」

ふと、少し離れたところに座っている男………というか少年に目が行く。

サングラスと雑誌で顔を隠しているが、キョロキョロとしているせいで怪しさメガマツクスってなもんである。

ちよっと待て、我夢は確信した。

アレは間違いなく　　ッ

「……やれやれ」



「こちらコードネーム、レッドピーチ。目標は今も」

「何してるんですか？ モモタロスさん」

「え？　つておわあああああああ！！」

驚いた反動でモモタロスの憑依が解ける。

幸いアキラたちは気づいていないが、良太郎は申し訳なさそうに我夢に謝った。

どうやら心配で着いてきたらしい。

ばれた事で、同じく一緒について来た亘と里奈も我夢に謝った。

他人のデートを除き見るのはいけない事だ。三人は怒られる覚悟を決める！！

だが、我夢は怒る事はせずむしろ彼らを受け入れた。  
ちよつど同姓の話し相手が欲しいと思っていたところだ。

アキラとみぞれ達も亘達に気づき、それぞれ挨拶を済ませる。

「他の皆は？」

「ああ、お祭りが始まってからくるみたいだ」

それなりに食べるものやら催し物、ちょっとした名物花火なんかもあるらしい。

つららが言うには期待しない程度に期待しておいてくれとの事だった。

「それにしても、楽しそうだね」

「はい、アキラさんに楽しんでもらえて…本当に良かった」

アキラは里奈やみぞれと笑顔で話し合っている。

時折コチラの方を見ては我夢に向って微笑んでくる。

この笑みがもう、もの見事に我夢のハートをキャッチするわけだ。

「そう言えば、我夢くん達四人はどうやって仲良くなったの？」

「えっ？」

「ボク達？」

「聞かせてほしいな」

微笑む良太郎。我夢は少しうつむいて沈黙したが、すぐに頷いて口を開いた。

別に面白い話でもないし、特別な事があつた訳でもない。

その事を最初に言っておく、そう別に特別な事じゃないのだ。

「ねえアキラ、里奈！ 我夢と亘とはどうやって仲良くなったの？」

「え？」

「私たち？」

みぞれもアキラ達に同じ様な質問をしていた。  
アキラは少し迷ったが、素直に話すことにした。

あれは……そう。懐かしい話だ

特別な事なんてなかったけど……そう、誰にでもありえる話と言えば  
そうだった。

それは、少しだけ昔の話である。

普通な人間などいない。

誰しもが特別であり、普通である人間は一人としていない。

そう誰かが言っていた気がする。

確かに自分が『普通』なんて思っている人なんていないと思うし、

まして思いたいとも思わないだろう。

凡人と言う称号を受け、単調な毎日を過ごす事はある種の牢獄。そんな事も考えた。

そもそも普通の定義すらあやふやなのだから、おかしい話だ。

と、まあいろいろと考えてはみたものの、  
広い視野で見れば普通っぽい日常を過ごしている人間は、やはり普通なんだろうか？

毎日決まった時間に起きて、学校に行く。

友達と喋りながらダラダラと過ごし、学校の時間を潰していく。

部活は特にしていない。

成績はクラスの半分くらい、体力もまたしかりだ。

友達の数は多くもなく少なくもなく、彼女は……いない。

そんな人間はやはり平坦。つまり普通に見えるんだろう。

わからない、ややこしくなってきた。

どうでもいいことを考えて、結局答えを出せずに終わるのは自分でも気持ちが悪い。

嫌な癖だ、そういう時はコインでも弾いて表裏適当に答えを作ればいい。

でた目が真実として割り切れればいいと、勝手にルールをつくる。

「裏……か。じゃあアレでいいや」

とまあ、こんな感じに。

でも……そうした方が自分としては楽だった。

自分で決める行動のどこかに、運に任せたらなんて言い訳をつくれるから。

まあ……いろいろ脱線してしまった訳だが。

普通に父親と母親が働いていて、一人っ子で、勉強も真ん中くらい、



運動も真ん中くらい。

それはやはり他人からしてみれば普通と言われる部類なんじゃないだろうか？

でも、そう言った烙印を受けて、それで自分自身は満足できるんだらうか？

妥協しきれるんだらうか？

確かに充実してると言えば……まあそうだが、平坦な世界にある種の退屈さも感じている。

でも明確なイメージが何一つとして浮かばない。ああ、難しいものである。

「……って、事を考えているんだけど。」

「どう思うっ？」

「ああ、どうでもいい。」

そんな事より今日の給食がボクの嫌いなものしかない事の方が問題だな。

どうしてこの世には、キノコなんてモノが存在するんだ？」

そんな、せつかくいろいろ考えてたのに……どうでもいいで切り捨てられた。

友達も多い訳でもないし、少ない訳でもない。ただどまあ、ずっと一緒にいる友達がいる分恵まれているのかもしれない。

そんな事を考えながら相原我夢はため息をついた。目の前にいる小学校からの友人はブツブツとキノコに対する愚痴をしきりにこぼしていた。

「キノコって確か菌類とか言っただっけ？」

「おいおい、菌だぞ菌！ 食べ物じゃないっての！」

あれか？ 皆、胞子的なヤツで洗脳されてんだろ？  
くそっ！ こうなったらボクだけでもアイツ等と最後まで戦ってやるからな！！」

などと不毛な事を先ほどから言いまくっているわけだが……  
そんな事をして給食のメニューが変わるわけもない。

空しくなったのが、友人は急に大人しくなると深いため息をつく。

「これじゃあ兄さんに変な事言えないな……」

「どんな事してもメニューは変わらないよ。覚悟を決めるんだね」

分かってるよ、そう言って聖巨は再び深いため息をはいた。

今日も目立った行事もなく、大きな事と言えば今のこれ。  
友達が嫌いな給食について愚痴るだけだ。

というかココ最近はこんな感じばかりである。

正直、何かおもしろい事が起きて欲しいとか……少しは思っ

う。

ただ今だってそれなりに充実していると言えばそうだ。  
少しの不満に似たやりきれなさこそあったが、別に我夢はこれではなかった。

このまま高等部が上がって卒業して……

どうするかはまだ決めてないけど、きっとこの社会の歯車の一部になって一生を終える。

別にそれでいいじゃないか。我夢はそう思う。

「兄さんの友達が言ってたんだけど、  
急に世界とか自分とか、社会とか言い出すのは中学生特有の病気にらしいぞ。」

気をつけるよ

「あはは、確かにそうかも」

二人は苦笑いを浮かべて、次の授業に備えるのだった。  
次は、体育か。

着替えるのが面倒だな……

だけど、明らかに自分とは一線引いた存在……というか人生をもった者がいる。  
それは常々感じてきた事だ。

例えばそう、スポーツが優秀で少し大きなマラソン大会において優勝を決めた友達の松戸伸<sup>まつどのぶ</sup>。

やはり彼は普通じゃない、もちろんいい意味でだ。

「別に大した事じゃねえって」

「そーそ！ こいつは運動しか脳がない馬鹿だから！」

そう言っただけで伸くと、伸くんの彼女の阿佐美<sup>あさみ</sup>さんは笑う。

でもコッチからしてみればやはり自分とは少し違う、特別で大きな存在に見えた。

まあ、もちろん彼は努力をして結果を出した。

だから自分だって何かに努力すれば特別な存在になれるのかも……  
しれない。

なにかしら他の人とは違う。

そう、何か秀でた事に巡りあえるかもしれないのだ。

特に部活もやっていないコチラとしては何か、そういうのに軽い憧れを持ってしまう。

だけど、実際はそんな簡単に輝けないと言う事を痛いほど理解している自分がいた。

どんなに頑張っても駄目な事は駄目、できない事があるのだ。

「特に行動にでないのが僕の悪いクセなんだろうか？」

「と、いうか、これでいって妥協してるんだろ？  
別にいってこれで。」

「めんどくさいのは勘弁してほしいよッ！」

体育の時間、マラソンと言う疲れるだけに思える事。

ああ、こんな時に限って車で通り過ぎていく人がたまらなく羨ましい！！

だがこれも生きていく内に体験しなければならぬ事なのだろう。

誰かが言っていた気がする。

人生で二度と使わない事を勉強する事もある。

だけどそれを意味の無い事と割り切るのは愚か者だと。

受けたくない授業を受ける態度を養うのが大切なのだと……

我夢と亘は、息も切れ切れのクセにそんな終わりの無い話をしていった。

余計に体力を消費するだけなのだが、話でもしないと本当にやっつけられない。

しかし、秋と言う事もあってか風が涼しい。

これが夏だったらと思うと頭が痛くなる。

「だあああ！ もう駄目だッツ！

ボクのゴールはここに決めたぞ！！

と言う訳でボクはたった今ゴールした！！」



「あはは……」

二人は走るのを止めて歩きに変える。

順位もそれなりだろう、別に慌てる事じゃない。

先生に見つからないように適度にサボる、賢い生き方じゃないか？

ま、これがトップの方なら黄色い歓声が起こる訳だし。

下の方なら励ましの声がとんでくるのだろうが……

結局自分達は中間地点のどちらつかずで終わる。

「まあ、何もなくゴールな訳だ」

「まあ、別にこれでいいよ」

そっだ、それでいいんだよ。

二人はそう思いながら、フラフラと歩いていくのだ。

今も？ これからも？

放課後。

「相原くん……」

「え？」

帰り際、一人の女子に話しかけられた。  
昔、女の子に『相原くんって女の子みたい！』だとか、『男らしくないー！』なんて無意識の刃で傷つけられた経験がある。だから無意識に身構えてしまった。

ええと……

「あ、どうしたの？ 持田さん」  
もちだ

持田アキラ。

同じクラスで、通っている習字教室でも見かける女の子だ。

おまけにくじ引きとは言え図書委員でも同じになった人。  
だが決して仲が良いわけではない、むしろ話した事などほとんどない。

あつたとしても最低限な受け答え程度だ。

彼女は何か近寄りがたい雰囲気を出している。  
儂げと言うかなんと言うか、同姓に人気はあっても異性からは何故か敬遠されがちだった。

クールでかつこいいと言えは聞こえはいいが、冷たい印象もそれだけ受ける。

そんな彼女が自分に何を？

「ど、どうしたんですか？」

「あの……申し訳ないんですが、今日の図書当番……」

代わってくれませんか？」

「え？」

彼女は常にアンニュイな表情で、やっぱりどこか悲しげで儚げだった。

よく言えば神秘的と言うか、はかない宝石のよう。

悪く言えば暗いのだ。

我夢としてもできればあまり関わりたくない人だったが……

別に断る理由もない。

困っているなら代わってあげてもいいだろう。どうせ暇なんだ、亘でも誘えば暇じゃなくなるし……

「あ……えっと

う、うん。いいよ。あ…でも一応理由だけいいかな？

先生に言わないといけないから」

「そう……ですよね」

アキラは唇をきゅっと噛む。

我夢は普段暇な時、よく人を観察したりしている為すぐに分かった。

言いたくない、そう言う事なんだろう。

正直、気になったけど聞くのも悪い。

第一、無理矢理に聞こうなんて言う気にもなれない。

とは言え、やはり理由がなければ

我夢は頷くと、アキラに見えない様にそっとコインを弾いた。

出た目は裏。理由は聞かない……だ。

ここは大人しく受けておいたほうが懸命だろう。

我夢は頷いて口を開く。

「あ……えと、僕適当に説明しておくから……どござん」

「ッ ごめんなさい……」

アキラは我夢に頭を下げて、そのまま走り去っていった。  
まあ自分がどうこう言う資格もない。

どうせ暇なんだ、帰っても本を読むかテレビを見るだとか言う楽なモノ。

たまには仕事でもするか、我夢は頷くとそのまま図書室へと向かうのだった。

第154話 序曲・壱（後書き）

何か昔……確か中学だったかなあ？

ちよっと定かではないんですが、ネガティブチェーンソー……ちよっと長いんですが、そう言うタイトルの小説をよみました。

あれは『一部』の中学生か高校生……その辺りの年代にとって凄く共感できる内容だった気がします。一部のねw

家にあるんですが久しぶりに読み直してみましようかねww

ではこの辺で。次もよろしく！

しかしサンタさん、僕にも何かいいモノくださいッッ！！

なんてねww ではでは。

## 第155話 急いで・弐（前書き）

はい、どうも。更新です

ちよつとね、次は多分クリスマス番外編になりそうかな。

過去編終わってからにしようと思ったんですが、かなり後になりそうなのでね

過去編はプチ予告は無しで。

後、後書きにまどか マギカの事書いてます。苦手な方はスルーしてください

ではどうぞ！



第155話 急いで・弐

ウエーっす！

ブオオオオ！

オラア！ あと三週！

校庭では、運動部が張り切っている声。  
吹奏楽部の練習の音、どこぞの部の監督の怒鳴る声、いろいろな音が聞こえてくる。

巨はそれを気だるそうに聞きながら校庭で頑張る生徒達を見つめていた。

友人の伸は必死に練習を頑張っているようで、それを見ていると……

まあ、どうにもこうにも自分がこれでいいのかと考えてしまう。

「なんて事を考えている訳なんだけど、どうよ？」

「そんな事よりさ……」

「おい！ もっと食いついてもいいんじゃないか？」

（自分だってキノコの話しかしなかったくせに……）

図書室では我夢と亘、あとは知らない生徒が数名しかいなかった。図書室が閉まる五時半までは受付をしないといけない。

亘も暇なので付き合ってくれているのだが、我夢はずっとアキラの事を考えていた。

今日の彼女はいつもよりずっと顔色が悪かった様にも思える。

それをなんとなく亘に話すと、彼は急に周りを確認し始めた。

「？」

何をしているのか？

不思議がる我夢に亘は小声でつぶやく様に言う。

最初に『誰にも言うなよ』なんてつけるあたり、あまりいい話じゃないのだろう。

聞く事も一瞬躊躇われたが、正直気になってしまつのが本音である。

とくに中学生なんて噂が大好きな生き物だ。もちろん皆がとは言わないが……

「襟居えりいの奴から聞いたんだけど……」

持田、今なんか両親がヤバイんだって」

「え！？ それって……」

馬鹿！ 声がでかい！

そう言われてしまい、我夢は慌てて声の音量を抑えた。

両親の問題、それは恐らく不仲であり　　ってな事だろう。

いくら夫婦といえど、冷たい言い方をすれば他人と他人だ。意見の食い違いや、そこから生じる溝があるだろう。

とは言え、実際には少しリアリティの無い話だと思っていたのだが

「んー、だからまあ最近毎日家族会議みたいなモンやってるらしいぞ。

正直、離婚は確実とかなんとか」

亘があまりにもすんなりと言ったので、我夢は思わず固まってしま

う。すぐに運動部の雄たけびじみた声で正気に戻るが……確実にっ

しかし成る程、我夢は理解する。

アキラの元気がないのはその為だったのか。

情報通の襟居。

自分も何度か情報を貰った事があるが、そのどれもが近いかドンピシャ。こ

の情報も例外ない物なんだろう。

「襟居の名譽の為に言っとくけど、アイツは言いふらしたりはしないぜ。」

ただ、今回はちょっと例外なんだ」

「え？」

襟居健吾。  
えりいけんご

友人の一人であり、異常なまでに学校に関する情報を持っている。本人曰く、知る事の楽しさを知ってしまえばお前らもこうなる……とか何とか言っていたが。

東の人間のくせに関西弁を話したり、壊滅寸前のバンド部をやったり、とにかく今を生きている男だ。彼の自由に満ち溢れた生活もまた、何か特殊な輝きを持っていると我夢は思う。

しかし襟居と言う人間は噂を無闇に言いふらすことはなく。今回の様な噂こそ信頼できると言う人間にしか話さない。常識があるのか無いのか……

「でも今回はよお、

持田の両親が喧嘩してる所を見た奴らが何人もいるんだよ。

それだけでもう広まってるって事」

「あー……」

皆やはり、噂と言うものが大好きなのかもしれない。

特に

「他人の不幸は……か」

それも仕方ない話なのかもしれない。

我夢と亘はどこかやりきれないモノを感じながらも、仕方ないとあきらめる。

自分達だって噂は嫌いじゃない、むしろ興味がある。ただ他人の不幸で盛り上がる気にはなれなかった。

むしろ嫌悪感すらある。

綺麗事か？ だろうな、二人はそれを理解していた。  
中途半端な煮えきらぬ良心を抱え、動けなくなる。

弱い人間なのだから……

だがそれでも広い世界、世の中だ。  
離婚する家庭があっても何も不思議じゃないのだからほつといてやれよ、そう思ってしまう。

特に亘には両親がいない分、家族をネタにする悪質さに嫌気がさしていた。

関係ない自分がこんなにモヤモヤするんだから、アキラ本人は相当暗くなるってもものだろう。だけど、関係ないのだからどうもしないのが現実である。それが何となく気持ちわるいが、それが本質なのだから仕方ない。

変な話、我夢にとっても亘にとってもどうでもいい話と言えばそう  
なってしまう。それもまた二人は理解していた。下手に関わって痛い目を見るのはゴメンってなもんである。

「あ、もう時間だ……」

「じゃあ帰るか」

そんな事を話し合っていると、時間がやってくる。さすがに残ってまでする会話でもないだろう。

我夢と亘は頷いて帰宅の準備を始めるのだった。



「・・・」

どうして？

「！！」

「　　ツツ！！」

下の階からは両親達の激しい言い争いが繰り広げられている。  
どうして？ どうして分かってくれないの？

もう何度同じ言葉が飛び交っただろうか？

誤解だの信じられないだのと長い時間同じ会話が繰り広げられる。

それだけで終わってくれるように彼女は祈る。

だがそんな祈りも空しく、会話は娘の親権へと切り替わる。

どうしてわかってくれないの！？

彼女は涙を流して訴えた、だがそれも無意味。

無駄だったのだ

「どっしってッ！」

本当にこのままじゃ

涙が視界を覆った。

もしこの世にヒーローがいるなら……

どうか、助けてください。

そう、願うのだった。

「ポントッ！」

「じゃーんけーん……」

「よっしやあああ！ 夏美のま」

「うううあっ！」

ブスリ！

「ぎゃはははははは ああああ……………」

パタリと、糸の切れた人形のように倒れる兄。  
隠す気すらない不正行為だったが、絶大な力の前に無力な子羊はただ沈黙するだけ

ぶるぶると震える巨に、夏美は優しい笑顔を浮かべて話しかけた。

「今日、私疲れちゃったんですよえ……………」

「そそそそつつすか」

「巨君、ちゃんと作るは作るんで、本当に悪いんですけどお……………」

「ゆゆゆ夕飯の買い物、行って来ましゅッ!!」

買い物袋を震える手で掴むと、階段を転がり落ちていく巨。恐怖で呂律すら回っていない彼。

しかし対照的に従姉妹はガッツポーズである。

「まじっすか!?! うっしやらあっおえい!

ありがとうございませすあ!」

「いえいえ! 夏美さんはゆっくりとお体を休めてくださいませです!」

逃げるように巨は写真館を飛び出していく。

早く買いに行かないと自分もアレをぶち込まれるのだろうか!?

い、いかん…ッ!! それだけは避けなければ!

第一、指がめり込んで笑い転げて気絶ってなんだよソレツ！  
明らかにおかしいだろ！

そんな事絶対人間の体にしちゃ駄目だったのに！！

白目を剥いて泡を吹いていた兄を思い浮かべると、この季節だと言  
うのに汗がにじんでくる。

「と、とりあえずカレーでいいなッ！！」

亘は急いで近くのスーパーまで走る。

そしてまさに流れるような手つきで野菜や肉、カレールーを買って  
いくとすぐに自宅へと帰還する為走り出す。

まさにブーメラン。

ブーメラン亘ッ！

走れ、走らないとお前は笑い地獄に沈められるのだ！！

だが、公園を通りかかったとき、ある光景が飛び込んできた。

「ッ？」

公園のベンチで女の子が座っている。

そこはまあいい、いたって普通だろう。

問題はその女の子の目の前にパンクした車椅子があるということだ。

「・・・」

考える聖巨、ここはスルーが安定の気がする。  
早く帰らないとお腹をすかせた野獣に襲われるかもしれない。

だが、もしあの娘が本当に困っていたら……このまま見捨てて帰る事になるのか？

それは人間としてどうなんだ？

いやいや第一、こんなところに一人で

「あああ！ くそっ！」

めんどくさい！ さっさと声かけて帰るか……



「あのっ……………」

「え!？」

女の子は驚いた様に振り向く。

それはそうだろう、こんな夕方の公園でいきなり……

『皆さん、えー……………大変言いにくいのですが、

クラスの仲間である巨くんが昨日……………ストーリーカーの容疑で警察に

』

いかん！ いかんいかんいかんッッ！！

変な事を考えてしまった事を強く後悔する。

とりあえず亘は、自分が怪しいものじゃないと言う事だけを明確にはっきりと女の子に伝える。

そして、どうしたのか？ 率直な質問に女の子は口を開いた。

「あ のっ、実は……車椅子が壊れちゃって」

あ……あぶねー、見捨てなくて良かった！

亘は女の子から事情を聞いてみる。

なんでも宿題をする為に公園に来ていたのだが、運悪く車椅子がパ  
ンクしてしまい。

なんとかベンチまでは移動できたのだが、そこから動けなくなって  
しまったという事だった。

「すぐ終わると思ったからお母さん達にも言っていなくて……」

「そう……なんだ」

「あの……もし良かったらでいいんですけど、手伝ってくれませんか？」

女の子は頭を下げる。

一瞬、野獣なつみの姿が浮かんだが、それを吹き飛ばすと巨は大きく頷く。

「あ……ああ、もちろん！」

「ありがとうございます！ 私は野村里奈って言います」

「聖巨、よろしく」

二人は軽い自己紹介をして、軽く笑う。

これが、二人の出会いだったのだ。

第155話 急いで・弐（後書き）

まあ、まだまだ先の事ですし、多分……なんですけど。  
ちよつと龍騎熱が再発しまして。

それで新作……というか。平行で龍騎とまどかのクロスオーバー書  
こうかな……とか考えてます。

やっぱり龍騎と絡ませやすいってのもありますからね。

噂ではまどかの脚本家さんは少し龍騎も参考にしたらしいですから。

まあ僕はストックがないと嫌なんで、載せるとしてもまだまだ先の  
お話ですけどもww

もし始めたなら温かい目で見てやってください。  
ではこの辺で。次もよろしく！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9823s/>

---

仮面ライダー Episode DECADE

2011年12月26日00時53分発行